HUNTER

沙伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＵＮＴＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ２９５５Ｊ

【作者名】
沙伊

【あらすじ】
闇から生まれる異形の存在『妖魔』。それを狩る退魔師の少女、椿　悠と、彼女の元でバイトをする高校生、華鳳院　流星。悠が開く事務所に舞い込む依頼からで浮かび上がるのは人の闇。そしてその先に更なる闇と人の業が……。その闇に触れるか否か、全ては、貴方次第……

第一話　顔剥ぎさん<上>（前書き）

初めてファンフィクション以外を書きます。気に入っていただけたら幸いです。

第一話　顔剥ぎさん<上>

暗い廊下が、無限に続くように感じる。
「ハァ、ハァ……」
乱れた息を必死で抑え、少女は恐怖で染まった心をなんとか静めようとした。

どうしてこうなったの？
何で私がこんな目に会うの？
私は、ただ……

少女は手近なドアに手をかけた。ここはいつも鍵が開いている。
今夜も例外ではなかった。
教室は当然のことながら誰もいない。ドアをと閉め、ゆるゆると息を吐く。
ひとまずは安心だ。アレも、まさか自分が閉じられてるはずの教室にいるとは思うまい――

「見ぃ～つけたぁ」

全身の筋肉が硬直した。
背後から嫌な気配を感じ、じっとりとした汗が伝う。
少女は振り向き、その巨体を見上げた。張り付いた笑顔が、自分を見下ろす。
「いっ……」
熊の手ほどもある『彼女』の手が、迫ってくる。

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少女の悲鳴が、闇に飲まれた。

――――

平穏なんて、簡単にぶっ壊れちまうもんだ。

華凰院流星（カホウインリュウセイ）は心底そう思った。

名前の割に平凡な容姿の青年は、クラスメイト達と一緒に廊下の人だかりに参加している。

ざわめく周囲の中で、流星は比較的落ち着いていた。

しかし、あくまで周りと比べてである。この状況で冷静でいられる人間は少ないだろう。

校舎内の薄暗い廊下、灰色の床に、一人の女子生徒が横たわっていた。

乱れた制服、投げだされた手足、乱雑に散った髪。

これを聞けば、誰かに無理矢理行為に及ばされたのかと思うが、全然違う。

なぜなら……彼女は死んでいるのだから。

頭を中心に血だまりが広がり、茶色に染められた髪にべっとり付いている。血は黒ずんでいて、遠目でも乾いているのが解った。

そして、その血は彼女の皮を剥がされた顔から出ていたらしかった。皮ごと顔の肉も剥ぎ取られたらしく、ところどころ頭蓋骨が剥き出しになってる。

女子生徒の死体の周りは、ぽっかり空いていて、近寄る者は誰もいない。

死体、それもグロテスクなものにわざわざ近寄る奴はいないだろ

う。

いるとすれば、死体好きの狂った奴か、今来た警察ぐらいだ。

「ほら、道開けて！」

スーツや制服姿の警官達は、野次馬の生徒達をかきわけて死体に近付いた。その中に、流星は見知った顔を見つける。

「おじさん！」

「パパ！」

隣の女子生徒が、流星と同時に声を上げた。流星の幼馴染み、高野若菜（カノワカナ）だ。

先頭を行く中年の大柄な男性がこちらを向いた。白髪混じりの頭だが、その精悍な顔は実年齢より十歳若く見える。

若菜の父、高野次郎（ジロウ）である。

「若菜、流星……。悪いが下がっていてくれ。すぐ解決すると思うから。……多分」

めちゃくちゃ不安になる言葉を残し、次郎は現場に向かった。

流星は顔をしかめながら、聞こえてくる周囲の会話を聞いていた。

「ヒデーよな。顔、見れたもんじゃねーよ」

「あれじゃ、誰か解んないよねー」

「ホント、ホント。誰があんなことしたんだか」

誰一人として、少女に同情していない。死を悼む気持ちも、無い。

あるのは恐怖と……好奇の心だけ。

更に顔を苦くしていると、耳にある会話が飛び込んできた。

「ねぇ、これってさぁ……アレだよね」

「あの話、マジだったんだ」

「ああ、『顔剥ぎさん』ね」

流星はぐるりと首を巡らせた。いきなり回したからぐきっ、と音を立てて激痛が走ったりしたが。

「カオハギサンって、何？」

首の後ろをさすりながら尋ねると、後ろにいたクラスメイトは目を瞬かせた。
「おまえ、知らないのか？　今けっこー話題だぞ」
「そうなのか？」
流星は首を傾げて若菜を見た。
肯定するように見返す幼馴染みを見て頬をかく。
「それより、そのカオハギサンって？」
「おう。昔、交通事故にある女子高校生が巻き込まれたんだと。その娘、命は助かったんだけど、顔が手術でも治せないぐらいグチャグチャになっちまったんだ」
「……その後どうなったんだ？」
「失踪したんだってさ。で、それ以来、その娘は顔のいい女の子妬んで、その娘の顔を剥いじまうんだと」
「都市伝説よね。馬鹿馬鹿しいわ」
若菜は首を振った。
しかし、流星は別の考えが頭にあった。
顔をしかめ、クラスメイト達から視線をそらす。
もし、その話が本当なら、警察には解決できない。
「あいつに、相談するかな……」
流星は小さく呟き、何も無い空間を眺めた。

――――

街で一番服飾関係の店が多い大通りで、その店はエラく目立っていた。
まず、その店はそういうたぐいの店ではなく、アンティークを扱う店であること。
白い看板には蒼い字で『プリンセスロード』と書かれており、白の扉は開け放たれている。他の店は自動ドアなので、そこも違う点の一つだ。

流星は入り口をくぐって店に入った。
けっして広いとは言えない店内には、凝った装飾の置物やガラス細工が木の棚や丸机に置かれている。
ここに置かれている物は美術的価値の高い物ばかりらしいが、流星にはよく解らない。
一応ここでバイトをしてるのだから、そういうのは知るべきだろうかと時々思う。思うだけで、一切勉強はしてないが。
「いらっしゃいませ。……あら、流星様でしたか」
奥のレジにたたずんでいた少女は、顔を上げた。
肩上で切り揃えられた茶髪に薄赤の大きな瞳、顔立ちは愛らしいが、表情は無い。着ているのだって、飾り気の無い白のワンピースだ。素っ気無い、というか愛想の無い格好である。
「よう、朱華（シュカ）。悠（ユウ）いるか？」
「上の事務所です」
幼女のような容姿に似合わず、大人びた対応で朱華はレジの後ろの階段を示した。
流星は短く礼を言うと、階段を登っていった。
二階は、木の廊下に白い壁のシンプルな造りで、扉は二つしかない。
流星は手前の木製の扉を開くと、中の少女に声をかけた。
「悠、話があるんだけど」
ソファーに座っていた椿（ツバキ）悠は婉然と微笑んだ。
「何の用？　流星」
綺麗なソプラノの声が、流星を迎える。

いつものことながら……目の覚めるような美少女ぶりだ。

光沢を放つ長い黒髪は細い腰のあたりでわだかまり、陶磁器のような滑らかな白い肌を際立たせている。顔立ちは非の打ちどころが無く、彫刻のように完成度が高い。

特に目を惹かれるのは、大きな切れ長の瞳だ。
黒水晶の瞳は息を飲むほど澄んでいて、吸い込まれそうなほど美しい。
悠は笑みを紅い唇に浮かべたまま、足を組んだ。
ミニスカートだから白い太ももがあらわになって目のやり場に困る。
「その様子だと仕事の依頼みたいだけど、君のは後回しだよ」
「え？」
思わず首を傾げてると、悠は年下とは思えない、大人びた動作でくすりと笑った。
「客が来た」
事務所の扉がゆっくり、ぎこちなく開いた。
「ようこそ、椿事務所へ」
悠は扉の傍で立ちすくむ客に目を向けた。
流星と同じ学校の生徒のようだ。紺色のセーラー服を着ている。
女子生徒は一瞬戸惑ったような顔をした後、後ろのドアを閉めた。
「貴方が、退魔師……？」
「そうだよ。依頼人さん」
悠は頬杖をついた。

退魔師。闇から生まれる異形のモノを狩る者達だ。悠はその一人である。
人は、誰しも心に闇を持っている。怒りや哀しみ、憎しみに一生無縁でいられるはずない。
そして強い負の感情は、時に具現化して人々を襲うのだ。
それらは総称して、『妖魔』と呼ばれている。それらの起こす事件を解決、そして狩るのが、悠達退魔師の役目だ。
霊や妖怪なども妖魔の一種である。妖怪とは人々の闇に対する恐怖に実体を持たせた存在だが、あながち想像上の存在ではないのである。

そして性質上、妖魔の力は人の心に影響して強くも弱くもなるのだ。

もっとも、例外もいるにはいるのだが。

「ソファーに。で、貴女は私に何を依頼したいの？」

悠に促され、女子生徒はソファーに座り、口を開いた。

「……私の通ってる学校で」

彼女はちろっと、悠の後ろに立つ流星を見た。

「彼と同じ学校なんだけど……友達が殺されたの。木野（キノ）リサって娘」

そういえばそういう名前だと担任が言っていた、と流星は思う。

友達が可愛かったのなんだの騒いでいた。

「それで私、顔剥ぎさんっていう怪談話を別の友達から聞いて、もしかして関係あるんじゃないかと思って」

「ふぅん。ここに来た経緯は？」

「パソコンのサイトで、前からここのことは知ってたの。まさか来る機会があるとは思わなかったけど……」

「パソコン？」

「オカルトサイト。友達がやってて」

どーゆー友達だ、それは。

流星は反射的にそう思った。さすがに口にはしないが。

「なるほどね。で、私に真相を確かめてほしいと」

「ええ」

「……解った。朱葦！」

悠は少し声を張り上げた。

聞こえるはずないのに、朱葦がすぐさまドアを開けて入ってくる。

「契約書を」

「はい」

短いやりとりをして、朱葦は窓を背にして置かれた事務机に近寄

った。引き出しを引き、朱華が中から一枚の紙を取り出す。
細かい文字が並んだ紙面を一瞥し、悠はペンと一緒にそれを受け取った。
「ここに貴女の名前を書いて」
悠は一番下の、空白の部分を指差した。
女子生徒は不安そうに顔を歪めたものの、すぐ契約書とペンを受け取った。
「あ。そうそう、言っとくけど」
ペンが契約書に付く直前、悠は思い出したように言った。
「それに名前を書いたら、後戻りはできないよ」
「え？」
「どんな事実が待ってようと、どんな恐怖が襲ってこようと、こっちは責任取れないってこと」
悠は唇の端を持ち上げた。どこか楽しげに。
「別に止めたってかまわないよ。それでもいいならね」
楽しげな悠の顔を見て、流星は小さくため息をつく。
彼女は解ってるんだろうか。自分の言葉が、拒否という選択肢を奪っていることに。
自分の声が、人を惑わす魔力を持っていることに。

「契約するか否か。全ては、貴女次第だよ」

この言葉を言ってしまえば、依頼人が取る行動は一つだ。
女子生徒は一瞬固まったが、すぐに震える手で、己の名を書き込んだ。
「契約成立」
悠の笑みが深くなった。
「雪野紗菜（ユキノサナ）、ね。とりあえず今日は帰っていいよ。進展があったら、連絡する」
悠はメモ帳を朱華から受け取り、雪野紗菜に携帯番号を書かせた。

紗菜が帰った後、悠は流星を見上げた。
「で、流星の話は何？」
「え？」
一瞬何を言われたのか解らなかったが、すぐ思い至る。
「あぁ。さっきの奴と同じだよ。もう必要なさそうだけどな」
「確かにね」
悠は髪を後ろに払って、朱葦を見た。
「朱葦、木野リサの交友関係調べて」
「はい」
一礼すると、朱葦はまた出ていった。
「……何で殺された娘のこと調べるんだ？」
流星が尋ねると、悠は肩をすくめた。
「顔剥ぎさんを真似た殺人だって可能性もあるでしょ？　だったら私の担当外だよ」
「まぁ、な」
流星はぽりぽりと首筋をかいた。確かにそうだが、少し冷たいのではないだろうか。
しかし、悠が妖しげな笑みを浮かべたのを見て、手を止めた。
「ま、そうであることを祈ろうか」
悠は唇に妖艶な笑みを刻んだ。
「第二第三の犠牲者を出さないために、ね」

第一話　顔剥ぎさん<上>（後書き）

初めましての人もそうじゃない人も、こんにちは、沙伊です。
今までリボーンのファンフィクション（しかも連載）しか書いてなかった私がこの作品を書くことになったのは、一時の気の迷いです（泣）
しかし書いた以上、最後までがんばるので応援のほどよろしくお願いします！！

彼女はまだ満たされなかった。
もっと、と求めていた。

足りない……

何が？

まだ『顔』が、足りない……

闇をさ迷いたどり着いたのは。
「……まだ……」

更なる闇。

――――

悠の言う通りになった。第二の犠牲者が出てしまったのだ。
「今度は三―Bの教室で……」
「鍵、壊されてたらしいよ。顔も……」
「やっぱあの噂、マジじゃねぇの？」
「まっさかー……」
騒ぎまくるクラスメイトの声を聞きながら、流星は黙って席に座っていた。
やっぱり『顔剥ぎさん』が犯人だ。

……でも、何でうちの学生だけなんだ？
殺されたのはまた女子生徒らしいが、そもそもどうして学校で殺されるんだ？
妖魔の出現にはちゃんとした理由があるらしいが、今回は一体……
流星がそう考えながら首を傾げた時だった。

ピルルッ

「っ！！　……て、ケータイかよ」
深く考え込んでいたため、携帯の音に必要以上にびっくりしてしまった。
流星は顔をしかめてズボンのポケットから携帯を取り出し、通話ボタンを押した。
「もしもし？」
『もしもし、流星？』
携帯から悠の声が流れてきた。
「おう、悠じゃん。何？」
『第二の犠牲者出ちゃったんでしょ？』

どっから仕入れてくんだ、その情報。

そう思ったが黙っておく。返答が怖い。
『どうやら本物みたいだね。そっちは大丈夫？』
「混乱はあるけど、特には……」
『周りじゃなくて』
悠の声が低められた。
『君自身のことを言ってるの。霊感少年』
うっ、と言葉に詰まってしまった。

悠の言う通り、流星は異常なほど霊感が強かった。

物心ついた頃から当たり前のように霊が見えていて、昔から何度、そのことで苦労したことか。正直、霊感より勉強できる頭が欲しかった。

「……つうか、少年って何だよ。俺十七だぜ。どっちかっつーと青年じゃねぇか？」

抗議の声を上げると、向こう側から鼻で笑う声が。

『精神年齢低いくせに、何言ってんの』

「年下のおまえに言われたかねぇぇぇ！！」

携帯片手に絶叫する流星に、クラスメイトは驚きと好奇の目を向けた。

「何携帯相手にわめいてんのよ」

こちらに近付いてきた若菜が呆れ顔で教室の扉を指差した。

「沙菜が、あんたに話があるって言ってるんだけど。いつ知り合ったの？」

「あー……昨日」

「はぁ？」

不審顔の若菜を適当にあしらい、流星は席から立ち上がった。

教室の入口に立ち尽くす沙菜は、流星を見て少し頭を下げた。

「えっと、おはよう、華凰院君」

「おう。……若菜の友達だったんだな」

「うん。華凰院君のことは、若菜から聞いて知ってたの」

少し間を置いて、沙菜は口を開く。

「……信用、していいの？」

「え？」

「昨日の娘」

どうやら後になって不安になってきたらしい。

まぁ無理もない。

あんな子供（悠に言ったら殺されそうだ）に、何ができるのかと思うのが普通だ。

しかし、悠のあの圧倒的な実力を見たら、そんなことは言えなくなる。

「あのさ」

流星は頬をかいた。

「あいつはまだまだ子供だけど、退魔師としての実力は、信用できるぜ」

「でも、私まだ退魔師ってどういう職業かよく解ってないのよね」

「わ、解らず依頼したのか」

流星は脱力した。

「まぁいいや。普通そうだし。陰陽師とかエクソシストならわかるか？」

「うん」

「それと同じなんだよ」

退魔師は、時代によって姿を変えた。

日本に置いて一番有名な退魔師は、天才陰陽師と呼ばれた安倍晴明だろう。

彼を含め、陰陽師達は平安時代には重宝されていた。特に、不吉を忌み嫌っていた貴族達には。

退魔師は、現代版陰陽師と言っていい。

表では非科学的なものを否定してる政治家の大半にお抱え退魔師がいたり、代々退魔師を輩出している家と繋がりを持っていたりする。平安時代の貴族達のように。

ちなみに、政治家は利用してるつもりが利用されてることに気付いていない。

最後だけ口にせず説明すると、沙菜は解ったような解らないような顔をした。

どうしたら解るかな、と頬をかいて、流星ははたと気付く。

「やっべ！　悠と電話してたんだったっ」

俺のアホ！　と内心で自分をなじりながら、携帯を耳に当てる。
「悠！　悪ぃ、忘れ……いや、じゃなくて……」
『……言いわけはいい。聞こえてたから』

あ、拗ねてる。

直感的にそう感じ、携帯相手に平謝りする。他人から見れば、さぞ滑稽だろう。
『もういいよ。そのかわり、ミルフィーユとモンブラン』
「あー……はいはい。買ってくるよ」
なんとか許してもらえたようだ。
『それより、今度は誰が死んだの？』
悠の質問に、流星は「解んねぇ」と答える。
「何しろ、今回も顔があれだったらしいからな」
『ふぅん』
人が死んだというのに、悠はあまり興味無さそうだ。実際今回の依頼が無ければ、顔剥ぎさんなど見向きもしなかったろう。
そういう冷淡な人間なのだ、椿悠という奴は。
……ただ、自分はその冷酷人間に惹かれているのだが。
思考が変な方向に行きそうなので、話を戻す。
「悠、何で電話してきたんだ？」
『今日、流星の学校に行こうと思ってね。放課後いいよね』
「おぉ。ただ……授業、普通にあんのかな？　昨日だって、昼までだったし」
『私の予想では、多分……』
悠が何か言いかけた時、担任がせかした足で入ってきた。
「あ。担任来たから切るわ」
『そう。それじゃ、また後で』
悠はそう言うと、通話を切った。
「はぁ……。じゃあな、雪野」

「う、うん」
流星は沙菜に軽く手を振って自分の席に戻った。

――――

『今日、君の学校に行くから。君にも付き合ってもらうよ、雪野沙菜』
簡潔な説明だけして、悠は一方的に電話を切ってしまった。
沙菜は憮然としつつ、教室で待つ。授業も無しで帰宅と言われたので、誰もいない。
年下なのに君呼ばわりで敬語無し、おまけにフルネーム呼び。なのにむかつかなった。
きっと彼女は普段からこんなのだろう、と思ったからだ。
「苦労人ね、華凰院君も」
彼が悠のところでバイトをしているのは、若菜から聞いて知っている。
「何か、アンティークショップでバイトしてるらしいんだけど、店の場所教えてくれないんだよね。第一、あいつバイトする必要無いはずなのに」
そう、不思議そうに若菜は話してくれた。
沙菜が椿事務所のことを知ったのはそのすぐ後だ。
オカルト染みた問題を解決してくれる、霊媒師のような存在がいると。
都市伝説かと思いきや、調べるとそういうことを請け負う『事務所』が、実際あったのである。
今でも信じられないが。
「やっぱり、契約書に名前、書かなきゃよかったな」
沙菜がそう一人ごちしている時――
背筋が凍った。

鳥肌が全身に立つのを感じる。
首筋に刃を突き付けられたような、この感覚は何？

「……沙菜」

沙菜は肩を震わせた。
「っ！　……て、なぁんだ、和子（カズコ）か。びっくりさせないでよー」
「……？　何でびっくりするの？」
沙菜の親友、佐野（サノ）和子は首を傾げた。
「うぅん、何でもない」
沙菜はひらひらと手を振った。
（……あれ？）
ふと、沙菜は和子に違和感を感じた。
何か、違う。問われれば答えられないが、どこかがずれている気がした。
「ね、和子……」
沙菜が口を開きかけた時だ。
「あ、いたいた」
ハッと振り返る。
廊下の奥から、悠と流星、それから朱華とかいう白ワンピースの少女が、この教室を覗き込んでいた。
「沙菜」
「ん？」
「あたし、帰る。じゃあね」
「え。ちょっと和子？」
いきなり背中を向ける親友に、沙菜は戸惑った。しかし、和子の方は言葉通りさっさと教室を後にする。
「……あの娘は？」
悠が近付いてきた。

「私の親友、佐野和子よ」
「ふぅん……」
悠は昨日と格好が違っていた。
服装は勿論だが、アクセサリーを付けている。
長い黒髪は銀のリングで束ねられ、首には十字架をあしらったチョーカーを巻いていた。キリッとした美少女だけに、クールな格好が似合ってる。
……少々派手だが。
というか、女の自分ですらどきりとするほどの美貌のため、服より顔に目が行ってしまう。
「それじゃ、行こうか」
悠は髪と黒のミニスカートをひるがえした。

死体があった場所は、まだ血の跡が残っていた。
放課後ということもあり、周りには誰もない。日が高いのに学校に人気が無いのは、何とも不気味な気がした。
「……妙だな。妖気と一緒に、悪意も感じる」
悠がぼそりと呟いた。
「それが妙なの？」
「うん」
沙菜の問いに頷き、悠は血の跡を見下ろした。
「妖魔は知性があるものもいるけど、理性は無い。そして悪意は、理性が無いと生まれないんだ。つまり」
「……つまり？」
「人が関わってるかもしれないってことだよ」
悠はしゃがんで、染み込んでいる血痕に触れた。
「何をするんだ？」
流星が尋ねると、悠は唇の端を持ち上げた。
「呼び覚ますんだよ、死者の記憶をね」

悠の手が、血痕から離れた。

グニャン

血痕が空中に浮かび上がった。

「なっ！？」

「え！？」

流星と沙菜は目を見開いた。

「な、何だあれ！？」

「死者の『念』です」

朱華が呟くように流星に答えた。

「死ぬ前とは、強い念が残りやすいのです。記憶の断片が何かに取り憑いてしまうほど」

流星達の目の前で、空に浮く血痕は姿を変えていく。

やがて、一人の少女の姿になった。

「っ！　リサ！？」

沙菜が声を上げた。

「じゃ、あれは……犠牲者の、記憶？」

流星は少女を見つめた。

血の塊のはずなのに、それはちゃんと色を持っていた。

染めた茶髪、白い頬、紺色の制服。開かれた黒目は、恐怖に彩られていた。

『たす、け……て……』

どこか遠くから聞こえてくるような声を発して、少女は手を伸ばした。

揺れる瞳は、涙をたたえて空を見つめている。

『ど、して……私は、ただ……』

伸ばされた手が、一番近くの悠に届く。

喉元まで伸びた手を、しかし悠は冷たく見下ろした。

『ただ……綺麗に、なりたかっ』

メキィッ

少女の首が、嫌な音を立てて曲がった。
まだ生きているだろう、痙攣する少女の身体から、更なる音。

メキキッ……

流星は、次に起こることを感じ取った。
目を逸らしたい。しかし首はおろか、目すら動くことを拒否した。
「あっ……」
沙菜が、少女に駆け寄ろうとした。しかし、それより早く。

メリメリメリィッ

耳を塞ぎたくなるような音と共に、少女の顔の皮が剥ぎ取られた。
剥き出しの顔の肉、まぶたを失った眼球、僅かに見える骨。
「ひっ、あ……」
沙菜は口元を押さえた。
ボタボタと、表皮を失った顔は血を流す。何も映さない眼球を濡らし、唇の無い口に伝う。
まだ、死んではいないらしい。顔を失った少女はもう一度手を伸ばして……

「……いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

沙菜がやみくもに走り出した。
「雪野！？」
おいかけようとした流星の腕を、悠が掴んだ。
「離せよ！」

「君が行って何になるの？」
「だからってほっとけるわけねーだろ！？」
「君に彼女を慰められるの？」
流星は言い返そうとしたが、悠に見つめられ、結局目を逸らす。
掴まれた腕はそのままだ。
「……あんなの、見せる必要あったのかよ」
少女の姿はもう無い。血痕も地面に戻り、辺りは何事も無かったかのように静まり返っている。
「彼女は真相を知りたいと願った。なら、辛い真実も見てもらわなきゃ」
悠は朱華に目配せした。
朱華は一礼すると、姿を消した。
それを見届けた後、悠は呟く。
「これをきっかけに、諦めて日常に戻るか……君みたいに、闇に足を踏み入れるか」
悠は流星をちらっと見た後、手を離した。
「どちらを選ぶかもまた、彼女次第だ」
黒髪が揺れるのを、流星は黙って見つめる。
「さて……彼女はどっちを選ぶかな？」
悠は足音を立てず、沙菜の走った道を辿った。

女子トイレから嗚咽が聞こえる。
多分吐いてるんだろう、と思いながら悠はそこに入った。
「っ……」
口元を押さえ、洗面台の前で背中を丸くしていた沙菜は、鏡越しにこちらを見た。
「大丈夫？」
水音にかき消されないよう少し声を張り上げると、沙菜は顔を歪めて喉を鳴らした。

駄目そうだな、と思いながら悠は前髪をかき上げる。
「今なら契約を無効にできる。これ以上は無理なら……」
「……嫌」
「え？」
悠が首を傾げると、沙菜はぎゅっと唇を噛んだ。
「リサ……あんな殺され方して……もう一人の娘も。許せないよっ」
汗がにじむ顔に、怒りが垣間見える。僅かな、憎しみも。
（許す、許さないの話じゃないんだけどね）
悠は顔の横の髪をいじりながら忠告する。
「何があっても知らないよ。これ以上の悲劇が起きてもね」
「これ以上酷いことって無いわよ！」
「犯人は人なんだけど」
「そんなの知らない！　リサを殺したんだもん……死んだってかまわないわよ！！」
「……言ったね」
悠は沙菜を冷たく見つめた。
「要望通り、犯人と真相を明かしてあげる。たとえ死体を一つ作ってもね」
沙菜の顔が強ばった。
「じゃあね。犯人の目星はもう付いてるから」
「ちょっ、まっ……うっ」
またせり上がったらしい。沙菜はまた洗面台に顔を突っ込んだ。
それを尻目に、悠はトイレを後にした。

何度、この選択を選んだ人間を見てきたことか。
「世の中、知らない方がいいことの方が多いのに、どうして真実を求めるかな」
そう呟いた時、誰かが右手首を掴んだ。
そちらに顔を向けると、貼り付けたような笑みを浮かべた少女が

一人。

「君は……」

悠は少女の顔を凝視した。

整った顔のパーツを持っているが、一つ一つの釣り合いが取れてない。酷くアンバランスだ。

「ねぇ」

少女はちぐはぐな顔に暗い笑みを浮かべた。

彼女の顔の下から、黒い煙が吹き出している。それが、蛇のように悠に絡み付く。

「いいこと、教えようか？」

少女の口から、甘い言葉が発せられた。

夜の校門を乗り越える者が、一人。

校庭を横切り、校舎の入口まで行く。日のある内に鍵を開けておいたので、当然ガラスと金属でできた扉は簡単に開いた。

唇を歪め、人の気配を探す。

「ここだよ、『顔剥ぎさん』」

闇夜の中で彼女の身体が固まったのが、流星には解った。

「一人で来てって言われたけど事情があってね、四人で来たよ」

悠は不敵な笑みを彼女に向けた。

「……何で」

朱華や流星と一緒に悠の後ろにいた沙菜は、震える声で呟く。

「何であの娘が犯人なの？　そんなわけないじゃない……。ね、そうだよね……和子」

「……勿論だよ」

彼女――佐野和子はにっこり微笑んだ。

「だいたい犯人って何？　もしかして今朝の事件のこと？　あたしはただ、忘れ物を取りに……」

「人が死んだ学校に、よく夜に一人で来れるね」

悠は更に口角を上げた。

「君は、美しくなる方法があると言って、被害者を誘き出した。軽い催眠もかけてたろうね。美しくなる方法だけじゃ、普通来ない。殺す場所を学校にしたのは、その方が力が増すから」

「……」
「学校に怪談話が多いのは、多くの念が渦巻いているから。多感な学生達の思いは強すぎて、校舎に残ってしまう。そしてその念は、妖魔を産みだし、力を強める」
悠は右手に持った紫の布にくるまれた長い棒のような物をスッと持ち上げた。
「言い訳ならいくらでも言いなよ。でも私の目は……ごまかせないよ！」
悠の手が霞んだ。
「っ！」
和子が素早く後ろに下がった。
さっきまで彼女が立っていた床がえぐられる。
「ふぅん。よくよけたね」
悠の持つ、一振りの刀によって。
紅色の柄に白銀の刀身、洗練されたその姿は、見る者の目に妖しくも美しく映る。
「あれは……？」
「あれは悠の退魔武器『剣姫（ツルギヒメ）』だ」
沙菜の呟きに、流星は悠から目を離さず言った。
「退魔師は妖魔と戦うために武器を持ってるんだ。ただの武器じゃないらしいが……」
「ちょっと待って。和子は人間よ！」
「……今はな」
「えっ」
沙菜の不審げな声に答えず、流星は顔をしかめる。
流星には視えていた。
和子を覆う、黒い妖気を。
「君が犯人だって証拠もあるよ。朱華」

「はい」
朱華が自分の後ろから、赤茶色の布を取り出した。
いや、布ではない。服だ。
色も、服の元の色ではない。
「……血!?」
「返り血です」
朱華は嫌がりもせず、乾いた血の付いた服を握り締めた。
「その服は佐野和子、君のだよね」
悠は刀を構え直し、クスッと笑った。
「ゴミ捨て場にあったよ。これを捨ててるところを見た人もいる。まだしらを切るなら、そのまま君を狩るけど?」
「ま、待って! 和子は私の親友なのよっ」
沙菜は慌てて止めに入った。
「……だから?」
悠は首を巡らせて、顔だけを沙菜に向けた。
「犯人が死んでもかまわないと言ったのは、君でしょ」
「っ、でも!」
「……あは」
和子が突然笑い声を上げた。
「あはは、は、ふ、あはっ」

メキゴキゴキィッ

和子の身体の骨格が歪みだした。
筋肉が異常なほど膨れ上がり、彼女が着ていた服がみりみりと裂ける。肌は気味の悪い薄黒に変色していき、口から見える歯はカミソリのようになっていた。

そこにいたのは人ではない。異形の化け物、妖魔だった。

妖魔は唇の両端を吊り上げた。
顔だけが人の時と変わらない。それが逆に、おぞましさに拍車をかけていた。
「きゃはははは！　あんたが何かは知らないけど、抵抗せずにあたしの顔になりなよっ」
「顔？」
「そう！　あの二人も、あたしの顔になった。あたしが美しくなるための糧になったの！」
鋭い爪を持つ両手で自分の顔に触れ、うっとりする妖魔。そんな彼女を、悠は冷たい目で眺めた。
「なるほど？　あの違和感は別々の顔からパーツだけを取って貼り付けたからか」
「違和感？　何言ってるの？　この美しいあたしにぃ？」
「鏡見なよ、馬鹿」
悠は妖魔の言葉を鼻で笑って切り捨てた。
「おまえのどこが美しいって？　今のおまえは、ただの醜い妖魔だよ」
「……醜い？」
妖魔は顔を覆った。
「醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い！？」
黒目に憤怒の炎が宿った。
「あんたに何がわかる！　元々美しかったあんたに！！」
妖魔が右手を振り下ろした。それを、悠は刀を盾にして受け止める。
「あたしはずっと綺麗になりたかったんだ！　それをあの方は叶えてくれた。この力で、あたしはもっともっと綺麗になるんだ！」
（あの方……？）
流星は妖魔の言葉に眉をひそめたが、悠は気に留めていないのか、妖魔の懐に躍り込んだ。
「己の姿を知れ、弱者が」

刀が袈裟懸けに振り下ろされた。妖魔はそれに合わせて後ろに飛びのく。

ブシャッ

妖魔の右肩から左腰にかけて、斜めにどす黒い血が吹き出た。

「ぎゃあああああああああああ！！」

妖魔が叫び声を上げた。

完全によけられたかと思いきや、悠の刃は妖魔に届いていたらしい。

破れかけの服の前は斜めに裂け、その下にはパックリ傷が深く刻まれていた。

「ど、どうして！？　かすっただけなのにぃぃ！？」

「かすっただけで充分だよ」

悠は刀を両手で握り直し、笑みを深くした。

「この刀は特別製でね、普通の退魔武器より切れ味がいいんだ」

悠が一歩踏み出すと、妖魔は身体を震わせ、沙菜の方を見た。

「沙菜、助けてよ！　あたし達親友でしょ！？」

「ひっ……」

伸ばされた腕を見て沙菜は後ずさり、叫んだ。

「来ないで、化物ぉ！！」

妖魔の顔が強ばった。瞳から、血色の涙がこぼれる。

「あ、あう、あぁ……」

妖魔は自分の手を見下ろした。

人の手とはあまりにもかけ離れた、巨大な手。

化物の、手――

「あぁ……あああああああああああああああああ！！」

妖魔は叫び声を上げると、悠達に背を向けて校舎の中へと走り出した。
「お、おい！　逃げるぞっ」
「解ってる。朱嶌、おまえは雪野沙菜の傍にいて。流星は私と一緒に」
「はい」
「お、おう」
朱嶌と共に頷き、流星は二、三歩走りかけた。
「……い、だ」
「え？」
沙菜の呟きに流星が振り向くと、彼女は泣き出していた。
「私っ、和子にばっ化物って……最低、だよ……」
「雪野……」
流星が口を開きかけると、悠が腕を掴んできた。
「早く行くよ」
「で、でも」
「今は妖魔の方が先」
「……ちっ」
思わず舌打ちを漏らしながら、流星は悠と一緒に走り出した。

どこにいるのかわかるのか、悠は迷い無く階段を登る。
「このまま行くと屋上だ！　あそこ、フェンスが錆びてて危険だぜっ」
「口より足動かしてよ」
悠は一、二段すっ飛ばしながら駆け上がり、屋上へ続く扉を勢いに任せて蹴り開けた。
その細い足のどこからそんな力があるのかと思うほどの勢いに、流星の頬がひきつる。

「こ、この馬鹿！　壊す気かよっ」
「それより、いたよ」
悠の指差す先に、妖魔がうずくまっていた。
「もう逃げられないよ。大人しく狩られなよ」
悠はまとめられた黒髪を風にさらしながら、刀の切っ先を妖魔に向けた。
「い、嫌……」
こちらを見た妖魔は、立ち上がり、顔に恐怖の色を浮かべた。
「また醜くなるのは嫌ぁ！！」
悠は屋上の床を蹴った。
「充分、醜いよ」
体重を乗せた刀は、妖魔を脳天から斬り裂いた。
「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
妖魔の身体の中心にできた縦の傷から、血の代わりに黒い煙が吹き出した。
煙が傷口から出るのと同時に、身体がしぼんでいく。
数分もしない内に、元の佐野和子の姿に戻った。
「よかった！　人間に戻れたんだな」
「顔以外はね」
悠の言葉に、流星が眉をひそめるより早く、和子が悲鳴を上げた。
驚いてそちらに目をやった流星は、絶句する。
和子の顔が、どろどろに崩れていた。
腐った果実のように茶色に変色し、肉片が顔を押さえる指の間からぼとりと落ちる。足元に落ちている生皮のようなものは、被害者達の『顔』だろう。その近くに、目玉のようなものがごとんと落ちた。

「な、何っ……」
流星は思わず口元を抑えた。
「あの皮は妖気で貼り付けてあった。妖気は人間に毒なんだよ。そんなのであの顔を保っていたら、ああなるのは当然だ」
悠は冷たい目に僅かな哀れみを含んで和子を見つめた。
「あの顔は、もう元に戻らない」
「そんな……」
流星は再び絶句した。
和子は顔を抑えながらゆらっと立ち上がる。
「あたっあたしの、顔がぁ！　何、何も見えなっ」
よろめいた和子は、勢いよくフェンスにぶつかった。
「！　まずいっ」
流星はハッとして走り出した。が、間に合わない。
和子は、錆びたフェンスの一部と一緒に空中へ投げ出された。
視界から、少女の身体が消える。

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

耳を塞ぎたくなるような叫び声は遠ざかっていき、何かがひしゃげる音と共に止まった。
「あ、ゆ……」
「待って」
前に出ようとした流星を手で制し、悠は壊れたフェンスの間から下を覗き込んだ。
「これは……見ない方がいい」
形のよい眉をひそめ、悠は呟く。
「哀れだね。美しさを求めた者の末路が、これとは」
刀を鞘に収める音が、いやに大きく聞こえた。

その頃――

学校から少し離れた場所に位置するビルから、屋上の悠達を見つめる者が一人。

「失敗、か」

彼女は羽織った黒コートをひるがえし、その場を後にした。

――――

流星は事務所のソファーに寝転がった悠を見ないようにしていた。

剥き出しの白い太ももや細い首筋が目に毒だからである。

「……結局、誰も救われなかったな」

日にちが変わり、太陽が昇り始めた空を窓越しに眺めながら、流星は呟く。

悠はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「私達こっちの人間が表の人間にできるのは、ほんの僅かだ。気に病んでたら耐えられないよ」

「……あぁ」

流星は頷いたものの、心の中ではまだ昨夜のことを思い出していた。

「……報酬は五万。持ってきてるよね？」

悠が訊くと、沙菜は沈痛な面持ちで財布から万札を五枚、悠に渡した。

酷く傷付いている沙菜から報酬を要求する悠に何か言いたいが、流星にそんな気力は残っていない。

「あと……上乗せ代として、そのペンダントをもらうよ」

「え？」

沙菜は無意識にか、首から下げたペンダントを掴んだ。

「うちはお金の他に、物や約束事のやりとりもしてるの。言っとくけど、拒否権は無いから」
左手を差し出す悠に、沙菜はペンダントを強く握り締める。
しかし、やがて悲痛な顔でペンダントを外し、悠に押し付けた。
「これ……和子とおそろいで買ったの。思い出のだけど……もう付けられないっ……」
沙菜はわっと泣き出した。
「どうして……どうして和子を……どうして助けてくれなかったのよぉ！」
泣き喚く沙菜に、悠はひんやりした言葉を放った。
「君が言ったんでしょ、死んでもかまわないって」
ぎくりと沙菜の身体が強ばった。
「言霊って知ってる？　ふと言葉にしたことが現実になるって。だからこれは、君のせいでもある」
「わた、しの……？」
「君は犯人が死んでもかまわないと言った。それが本当になっただけ」
沙菜の顔が、みるみる青ざめていく。
「憶えておいて。引き際を間違えれば、とりかえしのつかないことになるって」
悠は沙菜に背を向けた。
沙菜はただ、呆然と立ち尽くしていた。

あの時の沙菜の胸中には、後悔と自責の念が渦巻いていただろう。
昔の、自分のように……
流星は唇を噛んで、それ以上思い出すのを止めた。
「……おじさんに、事情説明しなきゃな」
高野次郎も、悠のことを知っている。

なぜなら、流星に悠を紹介したのが次郎だからだ。
「そうだね。高野刑事には、いつも迷惑をかける」
悠は平常と変わらない声で言った。悪びれた様子は無い。
しばらく二人は無言になる。遠くで、車の走る音だけが鼓膜を揺らした。
「……あ、そうだ」
悠が思い出したように、声を上げた。
流星が顔を向けると、彼女は上身を起こしたところだった。
「流星、ミルフィーユとモンブラン」
「……今から買ってこいと」
「うん」
いい笑顔の悠。

「……ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

流星は絶叫した。
「このアホ！　まだ朝の二時だぜ、店開いてねーよ！！」
「待てばいいじゃない」
「何時間待つと思ってんだ！」
「……」
「無視かてめぇぇぇ！！」
両耳を塞いでそっぽを向く悠に、流星は喚くのだった。

（あの方、か……）
叫ぶ流星を無視しつつ、悠は和子の言葉を思い出す。
人を妖魔にする呪術を、一般人が知ってるわけがない。
誰か、教えた人間がいるはずだ。
誰か――

「……まさかね」

頭に浮かんだ不安を打ち消し、悠は再びソファーに身を沈めた。

第二話　憎愛の女（ひと）<上>

その女は愛していた。
この身が焦がれるほど、強く、深く。
（あぁ……なのになぜ）
こんなことになってしまったんだろう。
愛しい男はすぐ傍にいる。声だって届く。
なのに……なぜ何も言ってくれない？
いつものように名を呼んでほしいのに……
女は男に手を伸ばす。向こうは、そのことに気付かない。

恋しい、愛しい、憎い……

強い感情に染められた思考では、その男と求める男が別人だと気付けなかった。
女は男の腕を掴んだ。男の身体が硬直する。
一方女は、触れられることに強い喜びを感じた。
身体が疼く。腹の中のもう一つの命がうごめく。
女は、紅のさされてない唇を動かした。
「私のこと、忘れたの？」

――――

椿悠（ツバキユウ）が事務所を開いたのには理由がある。
退魔師は普通、自分の属する流派の本家、もしくは分家で待機している。

悠は退魔師の流派の中でも一、二を争う一族、椿家の末娘で、本来なら本家にいなければならない。

それがなぜ、事務所の主になっているか。それは、依頼人に問題がある。

椿家だけでなく、他の流派でもそうだが、依頼人のほとんどは政治家などの権力者だ。

悠は一部の例外を除き、権力者や金持ちはカスばかりだと確信している。

そしてそのカス共は、自分の胸や腰あたりをなめるように見てくるのだ。

思いっきり殴りたいところだが、椿家当主である父の立場上、それはできない。

家族仲は悪くない。むしろいい方である。

だからこそ、家族の困るようなことはしたくないと悠は思っている。だから家を出て、事務所を開いたのだ。

「利用されてるんじゃない。利用してるんだ。権力者には、心構えだけでもそう思っとけ」

自分が本家を出た時、そう言ったのは、八つ違いの兄、刀弥（トウヤ）だったか。

そして現在、悠は事務所のソファーに寝そべっていた。

そろそろ四月も終わる。しばらく実家に帰ってないな、と心の中で呟いた。

現在、悠は事務所の奥にある生活スペースで暮らしている。

本家の自室より広くないが、気を使ったりしなくていい分、気は楽だ。家事も朱雀（シュカ）がしてくれてる。

しかし、だからといって家に顔を出さないわけにもいかない。

「来週にでも帰るかな……ん？」

二つのソファーにはさまれるようにして置かれた長机。そこに投

げだされた携帯が、振動していた。
「……電話？」
眉をひそめて携帯を手に取る。折りたたみ式のそれを開けて通話ボタンをプッシュした。
「もしもし？」
『お久しぶりです、愛しのマイハニー！』

ブチッ

反射的に通話を切った。
うかつだった。まさか奴とは。
悠は眉間にシワを寄せた。
誰からかちゃんと確認しなかった自分がむかつく。
「あの変態……携帯番号変えたのに、一体どこで……」
顔を思いっきりしかめていると、手の中の携帯がまた鳴りだした。
「ひうっ！？」
いきなりだったので、喉から奇妙な声が出る。
相手は誰かはわかっている。問題は、出るか否か。全ては、自分次第。
――出るべきかもしれない。
今までの経験上、無視した時のあいつは酷くウザい。
ため息をついて再び通話ボタンを押す。
「もしもし？　変態ストーカーさん」
『ちょ、僕は変態でもストーカーでもありませんよ！　さっきのはただの冗談ですし』
「じゃ、何で私の携帯番号知ってたの？」
『企業秘密です』
あっさり黙秘する電話の相手に、悠は再びため息をついた。
「まったく……君には疲れるよ、燐（リン）」
悠の言葉に、電話の相手である鬼堂（キドウ）燐は苦笑したようだった。

『僕は、貴女を困らせるつもりは無いんですが』
「あ、そう」
悠は呆れた声しか出なかった。
常識が無いのか、この男は。
（……って、今更か）
悠はこめかみを押さえながら「用件は？」と訊いた。
『はい？』
「だから用件。理由も無しに電話してきたの、君は」
『あ、いえ。実は仕事のことで』
「誰かにここを紹介したの？」
『ええ。今日あたり来ると思うので、お知らせしておこうと』
「依頼内容は？」
『除霊です』
「ということは、どっちみち君のところに行かなきゃいけないんだね……」
何か、本格的に頭痛がしてきた……
悠は額を揉みながら固く目を閉じる。
『嬉しいですねぇ。悠とまた会えるなんて♪』
「私は嬉しくない……」
悠は携帯を叩き壊したい衝動に駆られた。
「だいたい、二ヶ月もたってないでしょ、最後に会ってから」
それに隣町に住んでるし、とは言わなかった。余計なことを言えばこいつの性格上、じゃあ行きますとでも言いそうだ。
『僕にとっては長い二ヶ月でした……』
燐が悲痛な声を上げた。多分、演技だろうが。
「君ね……」
悠は呆れて言葉を重ねようとした時、廊下に続く方の扉がノックされた。
「どうやら例の客が来たみたい。じゃ、また明日ね」
『はい。ちゃんと準備しておきますね』

そう燐が言った一秒後に、悠は通話を切った。
ソファーから身体を起こし、携帯をホットパンツのポケットにしまう。
「入って」
声をかければ、朱崋が一人の男を連れて事務所に入ってきた。
疲れた顔の男だ。目の下に隈があるし、少しやつれている。
しかも、色濃い霊気に覆い被さられていた。
（これ……一体や二体どころじゃない。何したの、この人）
おそらく三十代前半だろう。顔立ちは悪くない。
しかし、表情が表情だし顔色も悪いので、二十は老け込んでいる。
少し強烈過ぎる霊気に顔をしかめつつ、悠はいつもの調子で男を迎え入れた。
「ようこそ、椿事務所へ」

――

華鳳院流星（カホウインリュウセイ）は一人暮らしをしている。通っている高校から一キロも離れていない場所にある小さなマンションが、流星の家だ。
実家より学校が近くなったので、多少朝はゆっくりできる。
――なのだが。

「眠ぃ……」
流星は道のど真ん中で人目もはばからず大あくびをもらした。
昨夜は『顔剥ぎさん』の事件のせいであまり寝れてない。
学校がその事件のせいで授業もせず帰れと言ったからよかったものの、授業があったら机でつっぷして寝てた自信がある。
（自殺、か……）
教師達は、和子（カズコ）が飛び降り自殺したと思っている。
流星は事実を知ってるだけに、それが和子に対する侮辱に思えて

ならない。
しかし、真実を知らない人間は推測するしかないのだ。だからこれは、しょうがないのかもしれない。
「にしても、悠の言う通り、見なきゃよかった」
流星は顔を歪めて呟いた。
今朝、少し気になって早めに学校に行った流星は、見てしまったのだ。

壊れたフェンスに全身を貫かれ、原形をとどめていない少女の死体を。

四肢はかろうじてくっついている状態だったし、顔どころか頭蓋までめちゃくちゃだった。
ただ落ちただけならあはならなかったろうが、フェンスと一緒に落ちたために遺体の損傷は激しかった。
更に最悪なことに、それを烏が啄んでいた。
一羽だけではない。三、四羽はいたろう。血の臭いも酷かった。
それを見てすぐ、流星はトイレで朝食を戻してしまった。
むごすぎる。そして——哀れすぎる。
悠じゃないが、美しさを求めた者の最期があれとは——
「って、うわっ」
自分の考えに没頭していた流星は、肩への軽い衝撃で現実に引き戻された。
「あ、すみません」
流星は反射的に謝り、相手の顔を見た。
女性だ。二十代半ばほどで、黒いコートを着ている。
長い髪を革紐で束ねた、ハッとするほどの美人だった。
(あ、あれ……?)
流星は目を瞬いた。
(この人……悠に似てる……?)

他人の空似か。
流星は大して気にせず、事務所に足を向けた。

（あの青年、あれには気付かなかったのか）
女性は遠のく流星の背を見つめ、心の中で呟いた。
「……その方が都合がいいか」
女性はそう言って、人ごみの中に姿を消した。

――――

「昨日の今日で、また依頼か？」
「うん」
バイトしに来た流星に、ソファーにいつものように座った悠はこくんと頷いて見せた。
「しかも明日って……学校休みになったからゆっくり寝ようと思ってたのに」
「膝枕してあげようか？」
「いや、イイデス」
手招きする悠に、流星は首を横に振った。
「あ、そうそう。帰りにケーキ、買ってきてやったぜ」
手に持ったままだった白い紙の箱を長机に置くと、悠は嬉しそうにその箱を開けた。
そうしてたら普通の女の子なのに……
流星は複雑な少し気持ちで、モンブランを食べ始めた悠を見つめた。
「……で、依頼内容は？」
「除霊だよ。……んー、シアワセー」
「おまえ、ケーキ喰う時はキャラ変わるよな」
本当に幸せそうな悠を見ていると、こっちまで頬が緩む。

こうしていると、頭から昨夜のことが抜けそうだ。
無論、そんなことは無理なのだが。
「流星も食べる？」
「へっ？」
「だって、じいっとこっち見てるからケーキ食べたいのかと思って」
違うの？　と首を傾げて尋ねる悠。
あ、ヤベ。可愛い……じゃなくてっ。
「いや、違うくて。除霊ってどういうふうにやるのかなと」
間違ってはいない。実際思ったことだ。
悠はああそのこと、となぜか少し残念そうに呟いて説明してくれた。
「まず、結界を張って、その中に霊に憑かれた人を入れるの。その後……何て言えばいいかな」
悠は少し考え込んだ。しかし、ケーキを食べる手は止めない。
「ゲームで例えれば呪文かな？　そういうもので霊を引き出して、退魔武器で倒す」
「ふーん。解ったような、解らんよーな……あ、でもさ」
流星はふと、思い出したことがあった。
「普通、除霊する時は読経読んで、霊に語りかけるんじゃないのか？　テレビとかではそんな感じで除霊するけど」
「霊に話し合いが通じると思う？」
「……思わねぇ」
「でしょ」
悠は肩をすくめて今度はミルフィーユを食べ始めた。
「そういう方法で除霊する人もいるよ。でも、会話は成り立たない。『言葉』が退魔武器の代わりになってるから、成り立つ必要無いんだけどね。それにしても、そういうたぐいの番組見てるの？」
「え？」
「だって除霊の方法のこととか。心霊番組見てるの？」
「俺じゃねぇよ。昔……」

言いかけて、流星は一瞬口をつぐむ。しかしまた口を開いた。
「……昔、死んだ母さんが見ていた」
「……ふぅん」
悠はそれ以上何も言わなかった。
しばらくミルフィーユをパクついていたが、急にバッと立ち上がってケーキを机に置いた。
「な、何だよ。どうしたんだよ？」
「……」
悠は答えない。ただ、表情がみるみる厳しくなっていく。
「おい……」
「流星」
悠は流星の傍に立つと、じろっと睨んだ。
流星を、じゃない。別の何かを、だ。
「これ」
悠は流星の顔の右横に手を伸ばした。
「どこで憑けてきたの？」
悠が何かを掴んだ。
顔を右に動かし、その何かを見る。
「……蝶？」
「うぅん。蛾だよ」
悠の手の隙間から、黒い羽根が見える。
目玉のような模様は、確かに蛾のようだ。
「……て、おまっ。そんなもん握り潰して！」
「問題はそこじゃない。一体これ、どこで憑けてきたの？」
「憑けてきたって……知るかよ。それ見たの、今が初めてだし」
「そう……」
悠は手を開いた。
黒い蛾の羽根はばらばらに砕けていた。胴体も潰れている。
ボウッ

突然蛾が音をたてて燃え始めた。
いきなりのことで驚く流星を尻目に、悠は熱がりもせず手の中の炎を見つめる。
「……やっぱり」
「は？」
「流星、気を付けなよ」
悠は笑みを完全に消して、言った。
「闇に、目を付けられないようにね」

隣町には来たことが無い。
自分が住んでいる町での買い物で充分だし、遠出する必要も今まで無かった。
だから、この町がこれほど綺麗だとは知らなかった。

「俺らが住んでる町より、服とかの店が多いな……道も割と綺麗だし」
流星は素直に感想を述べた。
彼が住んでいる町は、どちらかと言えば住宅が多い。店が少ないわけじゃないが、ここと比べると無い方だろう。
「流星はこっち来たこと無いんだ」
悠は流星の方に振り向いた。
しゃれた服を着ている周りの人達の中に、見事に溶け込んでいる。
上は白いパーカーに黒地に銀の十字架がプリントされたシャツを着ていた。下はパーカーと同色のミニスカートとブーツを履いている。
首にはいつもの十字架付き黒チョーカー、長い髪はポニーテールにされていた。
普段とさほど変わらない、地味な格好の自分と朱華とはエラい違いだ。
「この辺りはブティックが多いから、みんなおしゃれに気を使ってる。だから今度来る時はもうちょっと服に気を使いなよ」
「……仕事でこっちに来たのに」
流星はやや不服感を込めて言った。

わざわざ隣町に来たのは、悠の仕事仲間に今回の依頼達成を手伝ってもらうためだ。
悠曰く、結界は専門家に頼むのが普通らしい。
結界やその他の呪術はそれを得意とする人々がいるらしく、除霊の際には彼らに結界を頼むそうだ。悠はたいがい、幼馴染みの呪術師に結界を頼むらしい。
……ただ、できれば行きたくないと言っていたが。

「なぁ、そういえば昨日言ってた呪術師の名前、何て言うんだ？」
「あれ？　言ってなかった？」
「おう」
「……鬼堂燐って言うの。この通りの先にある住宅街に住んでるんだよ」
「へぇ。どんな奴？」
「実力は確かなんだけど、性格がちょっとね……」
悠はため息をついた。
「結界を張るのは彼の役目だから、会わなきゃいけないんだけど……」
悠がこんな疲れた顔で話すのは本当に珍しい。
流星はだんだん不安になっていくのだった。

住宅街は人通りが少なかった。というか、人がいなかった。
平日だからかもしれない。皆、仕事か学校だろう。
本来なら流星も学校に行かなければならないのだが、この間の事件のせいで休校中だ。
「ここだよ。燐の家は」
黒い屋根に白い壁の、質素な家の前で悠は止まった。
「家族はいないのか？」

割と大きな家を見上げ、流星は尋ねる。門の横にあるガレージには、黒い自転車が一台あるだけだった。
「妹と一緒に住んでる。両親は海外だよ。仕事だって」
「……ふーん」
悠の言葉から察するに、鬼堂燐とはかなり親しいようだ。
幼馴染みだから当然だろうが、何だか……面白くない。
流星の思いなど知らない悠は、インターホンを押した。
しばらくの間を置き、玄関の扉が開く。
家から出てきたのは、人形のように整った顔立ちの美少年だった。
薄い唇には微笑を浮かべ、涼やかな目に収まっているのは青がかったグレーの瞳だ。白すぎる肌は女性のように滑らかで、色素の薄い茶色の髪は、太陽の光で金色に輝いていた。
少年は悠を視認したとたん、彼女に走り寄った。
「悠！　本当に、本当にお久しぶりですっ」

ガバッ

何の前触れもなく少年は悠に抱き付き、
「離せ！　この顔だけ変態男！！」
何の前触れもなく悠に蹴っ飛ばされた。
腹に直撃を喰らい、地面につっぷす美少年。
流星は唖然としつつも、悠が彼に会いたくない理由が解った。
「り～ん～。抱き付くなって、何度言えばわかるの！？」
「い、いいじゃないですか！　アメリカではこれぐらい挨拶の範囲内ですよ？」
「ここは日本だよ。君の生まれ故郷じゃない」
悠は額を押さえた。
「それより、準備できてる？」
「ええ。ところで……依頼人の姿が見えませんが、彼はどこに？」
立ち上がりながら、燐は悠に尋ねた。

普段は静かで落ち着いた声のようだ。とても年下とは思えない。
「仕事があるから後から来るって」
「そうですか。……えっと」
燐は首を巡らせ、流星を見た。
「……貴方が華凰院流星さんですか？」
なぜ俺の名前を知っている？
そう思いつつも頷く。
「そうですか……貴方が……」
燐の声に、殺気が含まれて響いた。

一体何なんだ！？

ぞくっとする流星に、悠は不思議そうな顔をした。今の殺気には気付かなかったようである。
「ねぇ、中に入れてよ」
少しいら立ちを込めた悠の言葉に、燐は頷く。
「じゃぁ、どうぞ」
悠を先頭に、三人は家の中に入った。
中は広く、少し薄暗かったが、それ以外はいたって普通の家だった。とても呪術師の家には見えない。
「あれ？　仁奈（ニナ）がいないね。地下？」
「はい。準備を手伝ってくれたんです」
きょろきょろと辺りを見渡す悠が訊くと、燐は頷きを返す。
外野から見れば、絵になる二人だ。
片や超絶レベルの美少女、片やビスクドール並の美形。絵にならないはずがない。
……ますます面白くない。
むすっとする流星の腕を、朱華がつついた。
「じっとなさっていたら、置いていかれますよ」
「あっ」

悠と燐は、すでに靴を脱いで奥に進んでいた。
「なっ、ちょっと待てよ！」
流星は慌てて赤いスニーカーを脱いだ。

前言撤回。この家は普通じゃない。
普通の民家に、こんな広い地下室があるわけない。
このコンクリートでできた地下室は、上に建つ家の総面積と同じ広さをほこっていそうだ。四角い部屋の四隅には赤いろうそくが立てられ、これから怪談話でもするのかと思わされた。
そして、部屋の中心を囲むようにして、注連縄が張られている。あれが結界だろうか？
「仁奈、悠達が来ましたよ」
燐が注連縄をチェックする少女に声をかけた。
「あ、お兄ちゃん」
振り向いた少女は、兄と同じ面影を持っていた。
セミロングの髪も丸い瞳も、燐と同じ色をしている。表情は幼いが、人形のような顔立ちは、燐と似通っていた。
年はまだ十かそこらだろう。見た目的な年齢は、朱嶌と変わらない。
「仁奈、久しぶり」
「悠さん、お久しぶりです！　……あの、そっちの人は？」
仁奈は大きな瞳を流星に向けた。
「うちでバイトしてる華凰院流星。いい奴だよ、馬鹿だけど」
「誰が馬鹿だ！」
流星が憤慨するのを、悠は笑って受け流した。
……その様子を見て、燐が睨んできた。
「あ、そぉだ。悠さん達、お昼食べました？」
仁奈がぽんと手を叩いて尋ねてきた。
「まだだけど……」

「じゃ、うちで食べていきません？　依頼人、まだ来ないんでしょ？」
「そう、だね。夕方ごろって言ってたかな」
「それじゃあ決まりですね！」
仁奈は淡いピンク色のワンピースをひるがえした。
「わたし、準備してきますね」
「手伝います」
「あ、俺も」
流星と朱華は、仁奈に続いた。
「悠はどうする？」
「私は燐に話があるの。だから後で行くよ」
悠はちろっと、燐を横目で見た。
何だろう、もやもやする。
自分の中の気持ちに、流星は顔をしかめた。
「……ちゃんと来いよ」
「解ってるよ。当たり前でしょ」
悠はクスッと笑った。それだけで、何だかつっかえがとれた気がする。
……単純だよな、俺って。
流星はため息をこらえて部屋を出た。

「話とは何ですか？」
燐は小首を傾げた。
「その前に、いつもその仕種したら？　オジサン達に人気出るよ」
「僕は男にモテたくありませんよ」
すねた声を出す燐に、悠は少し笑った。
燐は少々やっかいな性格だが、悠が気を許せる数少ない人間だった。幼いころからの付き合いで、気心も知れてる。
「それで、話というのは何ですか？　まさか、僕の想いを受け止め

てくれる気に！？」
「そんなわけないでしょ」
「……ですよねー」
燐はちょっと傷付いたようだった。目が笑ってない。
「そうじゃなくて。ちょっと気になることがあるの」
悠はパーカーのポケットから、一枚の紙を取り出した。
人型をしており、筆で文字が書かれている。
「式神、ですね。一体誰の？」
「解らない。何の気配も残っていないの。それに、姿は黒い蛾だった」
「黒い蛾って……まさか、彼らですか？」
燐は灰色の瞳に、驚愕の色を浮かべた。
「さすがにすぐ気付いたね」
「当たり前ですよ。黒い蛾は、『妖偽教団（ヨウギキョウダン）』のマークの一部なんですから」
燐は信じられないという顔をしていた。
まぁ、気持ちは解らないでもないが。
「黒い蛾と赤い月……それが彼らのマークだったね」
「ええ」
「実はね、この間も彼らの仕業らしき依頼があった。ある少女が半妖魔化していたよ」
悠は囁くように言った。
「勿論、奴ら以外にも妖魔化できる術を知っている奴はいるし、それを一般人に教える外道もいるけど……これがあるからね」
悠は紙をぐしゃりと握り潰した。
「どうも、狙われてるようだね、私は」
「……しかし、もし本当に妖偽教団なら、狙うのは貴女ではなく、貴女のお兄さん達なのでは？」
燐の意見はもっともだ。しかし、自分が狙われる理由が無いわけじゃない。

「確かに、お兄達と違って私自身が狙われる理由は無いよ。でも、奴らの狙いが私でなく、『剣姫（ツルギヒメ）』だとしたら？」
悠の言葉に、燐は一瞬いぶかしげな顔をした。しかし、すぐ思い到ったようだ。
「なるほど……それなら辻褄が合う。所有者もろとも消すという魂胆ですか」
「だろうね。だって」
悠の言葉を遮るようにして、地下室のドアが開いた。
「お兄ちゃん、悠さん。お昼の用意ができたよー」
「あぁ、今行きます」
燐はぱっと笑顔を作って仁奈に向けた。
仁奈は笑い返すと、ドアを開けたまま、また部屋から姿を消した。
「……ところで、『剣姫』は今どこに？」
「朱華に預かってもらってる。ずっと持っているわけにもいかないからね。服にも合わないし」
悠は自身の服を見下ろした。
「君はいつも、服装に気を使ってますね」
「当然でしょ、女の子だもん。行こ」
悠は燐の肩を軽く叩いて、ドアの方へ歩きだした。

燐は揺れる黒髪に手を伸ばしかけ、寸でで止めた。
彼女は触れられることが好きじゃない。むしろ嫌いだ。
それは人嫌い――というか人を憎悪の対象にしているから、当然だろうが。
（もどかしいですね。好きな人に触れられないのは）
できることなら、その髪に触れたい。
華奢なその身体を腕の中に閉じ込めたい。
その紅い唇に、口付けをしたい。
時折、狂気めいた感情に支配される時がある。

全てを壊して、悠を手に入れてしまいたい衝動に駆られそうになる。

――しかし、悠の目を見ると、それが嘘のように消えていくのだ。人の醜い部分を見続けているために、人という種族を憎む少女。なのに、その漆黒の瞳は限り無く澄んでいて、穢れることは無かった。

それは、今でも変わらない。たとえ、彼女の心に一人の人間が居座っていたとしても。

「……しかし、諦めませんよ僕は。必ず、貴女を手に入れてみせます」

含み笑いを浮かべ、燐は悠の後に続いた。

――――

悠は燐と何の話をしているのか。流星は後からそのことが気になってきた。

「なぁ朱華、悠と燐って奴の間には、何も無ぇよな」

「何も、とは？」

「だからその……特別な関係じゃねぇか？」

「ただの幼馴染みですわ。悠様にとっては」

「そ、そうか」

朱華の言い方が引っかかるが、少なくとも悠は何とも思っていないわけだ。

大丈夫、まだチャンスはある！

流星はリビングのソファーに座りながら、自分に言い聞かせた。

「……流星様」

「ん？」

なぜか立ったままの朱華に目を向けると、なぜか彼女は切実な顔

をしていた。
普段から無表情を貫く彼女がこんな顔をするのは、非常に珍しい。
「今のお気持ちを……悠様に対するお気持ちを、どうか忘れないでください」
「え……」
「あの方のためにも」
「それって、どういう……」

「お兄ちゃんと悠さん来たよー！」

突然仁奈が入ってきたので、流星は訊きそびれてしまった。
「？　流星、どうかしたの？　具合でも悪いの？」
「は？　何で」
「アホ面が、ますますアホ面になってる」
「だ、誰がアホ面だ！」
「アホ面はアホ面だよ」
ねぇ、と悠は燐と仁奈に同意を求める。鬼堂兄妹は微妙な笑みを浮かべて顔を見合わせた。
「否定してくれよー！！」
流星は絶叫した。

この時、流星の頭からは、朱華に対する疑問は抜け落ちていた。

憎愛の女（ひと）</t>下>

沢木義孝（サワキヨシタカ）という男は、目に見えて憔悴していた。
まだ若い（といっても流星と一回りは違う）はずなのに、完全に老け込んでいる。
「ほ、本当に除霊できるんだろうな？」
沢木は血走った目で尋ねた。
あまり寝れてないのだろう。隈も濃い。
何より、まとう霊気が半端じゃ無かった。

沢木はある日、散歩途中で目に止まった寺に立ち寄った。
寺の境内には、一人の着物姿の女性がいたという。生気の無い女で、不気味に思い、すぐ帰ろうとした時、いきなり腕を掴まれた。
掴んだのはその女で、だいぶ離れた場所にいたはずなのに一瞬ですぐ傍に立っていた。
女の顔はまるで骸骨のようで、人のそれではなかったという。
そして女は、こう言ったのだ。
「私のこと、忘れたの？」と。
無論、沢木にはそんな女は見覚えは無かった。
腕を掴む女の手を振り払い、その場を全速力で離れたという。
しかしそれ以来、悪夢や幻覚を見るようになったそうだ……

沢木は完全に怯えていた。
今も、落ち着き無さげに目を泳がせている。
悠の話では、死霊が一体、生き霊が数体憑いているらしい。
それ以上は何も言わなかったが、相当質の悪い霊が憑いているの

は確かだった。
なんせ、依頼人がこの状態だ。ただの霊なわけがない。
「とりあえず落ち着いて。部屋の中心へ」
悠はすでに抜き身の刀を持っていた。霊にすぐ対処するためだろう。
沢木は、おどおどしながら仁奈に手を引かれるようにして部屋の中心に向かった。
「凄ぇおびえようだな」
「かなり酷い目にあってるみたいなんですよ」
燐は少し同情的に言った。
「しかし……生き霊が数体ですか。どこで恨みを買ったんでしょう？」
「さぁ？　どこで買ったのかな？」
悠は不敵に笑った。
何か知ってるな、こいつ。
流星は悠を見下ろした。
「ふふ……でも、これだけは言えるよ」
悠は弧を描く唇をなぞった。
「女の恨みは、蛇となって男を殺す」

『……は？』

流星と燐の声が、綺麗に重なった。
「……」
「……」
男二人は顔を見合わせる。
「どういう意味だ？」
「さ、さぁ？」
悠に目で問いかけるが、彼女は妖しげな笑みを浮かべただけだった。

何だ、今の笑い！？

なぜか背筋が凍った二人だった。

一方、悠は沢木の傍まで歩み寄った。

沢木は悠から目を離さない。さっきのすがるような弱々しい光と一緒に、好色な影が見え隠れしている。

「じっとしててね」

悠の言葉に頷く沢木。目線は悠に固定されたままだが。

悠は沢木の視線に少し顔をしかめつつ、軽く目を閉じた。

聞いたことの無い旋律が、悠の口からこぼれる。

「……歌？」

「いえ。これは経ですよ。随分オリジナル化されてますけど」

「オリジナルとかできんの？」

「はい」

流星は色々解らなくなってきた。

ゆら……

「――！？」

突然揺れた風景に、流星は目を瞬いた。

一瞬目がおかしくなったのかと思ったが、違う。空間そのものが揺らいでいる。

「ぐ、ぅあっ……」

沢木はうずくまった。口からは苦悶の声が漏れる。

「姿を現しますよ」

「何が？」

「……悪霊です」

燐の言葉と同時に、沢木の身体から黒い煙が吹き出した。
「あれが、悪霊か……？」
「ええ。まだ形をとってませんが、そのうち有形になりますよ」
言ってる間に、煙は一つにまとまっていく。
「死にたくなかったら、結界から出た方がいいよ」
「っひぃ！」
沢木が悲鳴を上げた。
ちなみに悪霊に反応したのではなく、悠に刃を向けられたためである。
沢木は這いつくばるようにして流星達の傍に寄った。
それはいいのだが、なんと流星と燐を盾にした。
「ちょっ、あんた何してんだよ！」
「情けないですね……」
「うるさい、黙れっ」
年下二人に非難されても、沢木は前に出ようとはしなかった。
「……まぁ、結界の外とはいえ、一般人が前に出るのは賢明な判断とは言えませんが」
燐は何とも言えない顔をした。
煙は人の形になり、やがて消える。その跡にいたのは。
「あ、あの女！」
沢木が流星の耳元で叫んだ。
「あいつだ、俺が会ったのはっ」
「あの女（ひと）……？」
流星は耳鳴りする右耳を押さえながら、煙から現れた女を見つめた。
落ち着いた色合いの着物を着ており、結われていない髪が、うつむいた顔を隠している。
「特に……変わったとこはねぇけど」
「……妙ですね。気配は悪霊そのものなんですが」
燐は不思議そうな顔をした。

「悠！　大丈夫なのか？」
声をかけると、悠は顔だけをこちらに向けた。
「心配しなくても大丈夫だよ。思ったより……」
「……憎い」
「え？」
悠が首を戻した。

ガッ

「ぐっ！？」
女が手を伸ばして悠の首を掴んだ。
「憎い！！」
女の声は、地獄の底から響くような声だった。
上げた顔は般若のようで、口からは大きな牙が剥き出しになっている。

これは……妖魔か！？

流星は前に飛び出ようとした。
「！　華凰院さん何を……！？」
「悠が殺されかかってんだぞ！？　見てられねぇよっ」
流星は注連縄の中に片足を踏み入れた。
「わー！　ちょ、ストップストォップ！！」
燐が流星を羽交い締めして引き戻した。
「離せよ！」
「貴方が行ってどうなるんですかっ。悠の邪魔になるし、第一」
燐は、その細い身体から考えられないほど強い力で、流星を抑えた。
「非力な貴方が行ったところで、何か変わりますか！？」

「――！！」
一番痛いところを突かれた。
自分は確かに、何の力も持たない。
ただ、霊が見えるだけで、妖魔を倒す力は無い。
なのに……何で俺は、ここにいる？

ズバッ

何かが斬り裂かれる音がした。
見ると、悠が刀で女の胸元を横薙ぎにしたところだった。
「げほっ……まったく。誰を恨んでるかは知らないけど、八つ当たりしないでくれる？」
悠は喉をさすりながら女を睨んだ。
「……なぜ」
女は斬られた胸元を押さえながら、ゆらりと顔を上げた。
「なぜ！」

ズギュルゥッ……

女の脇腹から、手が幾つも飛び出した。
「お、お兄ちゃん……これ、もしかして」
「そのよう、ですね」
「？　い、一体何だよ」
鬼堂兄妹の声に、流星は顔を二人に向けた。
「合体してしまったんですよ。悪霊が、彼に憑いていた生き霊達と。あの手は生き霊達の手です」
「は！？」
流星は沢木を振り返った。
沢木は驚きと恐怖の入り交じった顔でひいひい言っていた。
「私は……て、い……」

女の声が聞き取れなくなってきた。
声が小さくなったのではなく、声帯が変質し始めたせいだ。
声だけでなく、姿も変わり始めた。
足はくっつき、長虫のようになる。虚ろだった目は金色に禍々しく輝き、肌に青黒い鱗が現れる。無数に生えた手もあいまって、まるで百足と蛇をかけ合わせたような化物になった。
体躯も二メートル近くになり、天井に届くほどにまでなった。とぐろを巻いた下半身も合わせると、もっと大きいかもしれない。
「グ……グギャアァァァァァァ！！」
「ひぃっ」
沢木が尻餅を着いた。
恐ろしさのあまり失禁してしまったようで、仁奈が慌てて彼から離れる。
「哀れな姿。憎愛のせいで、ここまで歪むなんて」
悠は地面を蹴り、刀を振り上げた。

バキィッ

「！　あぐっ」
悪霊の長い尾が、目にも止まらぬ速さで悠を打った。
「悠！？」
流星は思わず叫ぶが、悠は空中で体勢を立て直し、軽やかに地面に降り立った。
「……ったぁ。舌噛んじゃった」
口元を押さえる悠は、怪我らしい怪我は特に無かった。
ただ、衝撃の際にゴムが取れてしまったらしく、髪がほどけている。
「予想以上に速いね。ちょっとびっくりしたよ。でも」
悠は唇の端を持ち上げた。
「私に勝てるほどの力でもない」

悪霊の腕が何本も伸びてくる。
悠は避けない。ただ、かすむような速さで刀を振った。

ザザザザザザザンッ

黒い血が、白い壁をまだらに染めた。
「ギャアアアアアアアアアアア！！」
悪霊が絶叫する。
手を失った腕が、流星達に血を振りまいた。
「うわっ。血、血がッ」
「大丈夫ですよ。悪霊が消滅すれば、この血も消えますから」
「だ、だからって……」
人間のものよりきつい臭いの血に、流星は顔を歪めた。
悪霊は腕を失ってもなお、戦意を失わなかった。
長い尾を振り上げ、悠を押し潰そうとする。
悠はバックステップでそれを避けた。まだまだ余裕がありそうだ。

ピシッ……

『……！？』
全員、特に燐がそのひび割れたような音に目を見開いた。
「マズい！　悠、結界が壊れかけています！！」
「なっ」
悠は不敵な表情を崩した。
「どうして！？」
「解りません！　外部からの干渉が無い限り、こんなことが起こるはず無いんですかっ」
燐は注連縄に走り寄った。
縄が千切れかけてる。放っておけば、本当に千切れてしまうだろう。

燐はズボンのポケットから紙を一枚取り出した。いや、札か。
口の中で何やら呟き、その札を注連縄に貼り付ける。
突然札がスパークを放った。
「悠、結界は僕の術でも、五分ともちません！　遊んでないで、早く終わらせてくださいっ」
遊んでたのかよ！？
流星が唖然として悠を見ると、彼女はつまらなそうな顔をしていた。
「せっかく手応えある敵なのに……だからすぐに倒さなかったのに」
「こ……このアホーーーー！　すぐ倒せるんだったらさっさとやれよっ」
「うるさい、馬鹿」
「誰が馬鹿だっ」
悠は聞こえないフリを決め込んだようで、ぷいと顔を逸らした。
「はぁ……。一気に終わらせるよ」
悠の姿が消えた。
ザンッ
気付いた時には、悪霊の首と胴体は離れていた。
頭を失った部分から、盛大に血が吹き出て天井を汚す。頭の方は、黒い血をまき散らしながら地面に墜落した。ごろごろと転がり、流星達の足元まで来る。
「ひ、ひぃっ」
沢木は再び悲鳴を上げた。
流星は顔をひきつらせつつも、悪霊の顔を凝視した。
悪霊の顔は、すでに鬼の顔ではない。哀れなほど歪んだ、女の顔だった。

「ど、して……」
女の唇が動いた。
「わた、しは……あ、貴方だけを想って……」
女の瞳は、涙に濡れていた。その目を、沢木に向ける。
「み、見るな！　お、お俺はおまえなんて知らない！！」
「し、らな……？」
「見るな！　見るな見るな見るな見るな！！」
沢木はへたり込んだまま後ずさった。
「……ど、して？」
女の目から、涙が溢れ出た。
血色でもなく、ただの涙だ。哀しいほど透明で、美しい涙……
「私を、わ、すれ……た……」
女の頭は、時を早送りしたように風化していった。
肌はミイラのように干からび、髪も艶を失う。
とうとう骨だけになり、その骨も崩れ、後にはもう、何も残らなかった。
「……一体」
流星は何も無い床を見つめたまま、ぼそりと呟いた。
「三十ほど年前、一人の女性がある寺院で自殺しました」
朱華が独り言のように言った。
「遺書には、ある男性に裏切られたと書かれてあったそうです。お腹には、赤ん坊がいたそうですわ」
「え……それって」
「今でいう、結婚詐欺ってやつだよ」
悠が戻ってきた。結界の中には、もう何もない。今気付いたが、血は跡形もなく消え去っていた。
「何人もの女性を騙した男でね、でもその女性が自殺した一年後に、騙した女の一人に刺殺されてる」
自業自得だけど、と言って、燐の方を見た。
「お疲れ様」

「正直……ぶっ倒れるかと……ぜぇ、思いま、ましたよ……」
息を切らした燐に、仁奈が駆け寄る。それを見送った後、悠は沢木の前に立った。
「報酬は十万。今ある？」
「あ、あぁ……」
ほっと息をついて、沢木は懐から財布を取り出した。
「待った。まだ話の途中だよ」
「え……？」
「上乗せ代として……そうだな」
悠は朱華の方に目線を投げた。
朱華が頷くのを見て、悠はにんまり笑う。
「選んで。一千万払って私に保護されるか、詐欺師として警察に捕まるか」
「なっ」
「え！？」
流星は目を丸くした。
「は、こいつ詐欺師！？」
「うん。結婚詐欺師」
悠はくすくすと笑った。
「相当もうけてるらしいじゃない。一千万ぐらい、わけないよね」
「な、なん……」
「まぁ、払いたくないなら警察に行ってもかまわないよ。知り合いの刑事を紹介してあげる」
悠はしゃがんで沢木と目線を合わせた。
「ねぇ、どうするの？　全ては、貴方次第だよ」
「っ……」
沢木は脂汗をかいて目をキョトキョトさせた。
しかし、やがて立ち上がって、その場から逃げるように立ち去った。
「ほ、ほっといていいのか？」

「いいよ、別に。痛い目見るのは彼だから」
言葉の真意はわからないが、悠はもう沢木に興味を無くしたらしい。
朱華から受け取った鞘に刀を収め、背中を伸ばす。
「ん～。じゃ、帰ろうか。今何時？」
「六時五十一分です」
「思ってたより遅くなったね。じゃ、帰らせてもらうよ」
悠は燐に背中を向けた。
「あ、待ってください。渡したい物があるんです」
息を整えた燐は、ポケットから綺麗な紙で包まれた、小さな何かを取り出した。
プレゼントのように見える。でもなぜ？
「来週の五月四日が、君の誕生日でしたよね」
燐は悠の手を取って、彼女の手の平に包みを乗せた。
「本当は誕生日に渡したかったんですけど……いつ会えるかわからないので」
「ふぅん。開けていい？」
「勿論です」
悠は丁寧な手付きで包みを開けた。
「……ネックレスか。君にしては、センスいいじゃない」
中身は、片翼を象ったチャームの付いた、シルバーネックレスだった。
「ありがたくもらっておくよ。……ん？　流星、どうしたの？　固まっちゃって」
「……おまえ誕生日、来週なのか？」
「うん。実はまだ十三歳で、来週の金曜十四になるの」
そう言われたとたん、流星は顔色を悪くした。
「お、俺何も用意してねぇよ！　え、どうしようっ」
「……知らなかったんでしょ？　別に私はかまわないけど」
「俺の気が済まねぇの！　あー、じゃあ来週までにプレゼント用意

しとくっ。絶対!!」
流星の勢いに悠はきょとんとしていたが、やがて嬉しそうに微笑んだ。
「じゃ、楽しみにしてるね」
「え、あ、おう……」
笑顔を向けられ、流星はもごもごと口の中で意味の無い言葉を繰り返した。
その様子を、燐は複雑な顔で見ている。
「……面倒です、色々と」
朱華の呟きは、仁奈にしか届かなかった。

――――

女は目を開け、息をついた。
術は失敗した。本来の目的も……

「失敗か？」

鬼堂宅から少し離れた場所にある公園に立ち尽くしていた女性は、背後を睨んだ。
「気配を消して人の後ろに立つのは、あまりいい趣味とは言えないわよ、熾堕（シダ）」
闇夜にそう投げかけると、青年が一人、姿を現した。
暗闇に映える見事な白銀の髪を背中を覆うほどにまで伸ばし、痩身を黒衣で包んでいる。中性的かつ整いすぎた顔立ちは女はおろか、男をも魅了するだろう。銀灰色の双眸はどこか達観したように落ち着き払っていた。
熾堕と呼ばれた男は、薄く引き締まった唇を歪めた。
「驚かすつもりは無かったんだがな。それで、失敗か？」
「どちらとも言えないわ。そっちは？」

「順調。ここまでいくと、退魔師も地に堕ちたな。まったく気付かんとは」
熾堕は肩をすくめ、女性の服装を見つめた。
「……何？」
「いや。寒くないのか？　その格好」
女は黒いコートを羽織り、その下には巫女装束を着ている。
四月の終わり頃とはいえ、夜空の下では少し肌寒いだろう。
「別に。大したこと無いわ」
「ならいいがな。それより、面白いものを見つけたんた」
熾堕の言葉に、女は片眉を持ち上げて見せる。熾堕はふっと笑って、背を向けた。
「明日教えてやるよ。椿　悠にぶつけたら、きっと面白いことになる。じゃ、また明日な、月読（ツクヨミ）」
瞬きしている間に、熾堕の姿は消えていた。
女――月読は短くため息をつくと、夜空を仰ぎ見た。
「……悠」
囁くような声は闇の中に吸い込まれ、やがて消えた。

第三話　マリオネットメイデン<上>

私は見えない糸で繋がれていた。
決して操り手に逆らわないように。

『大丈夫よ。私が守るから』

それが、私を束縛していることに気付いたのはいつだったか。

父の棺を前にしながら、私は泣けなかった。
人形は泣かない。それが当たり前。
でも、私は人間。なのになぜ泣けない？
葬儀に来た人たちの声、こんなに近いのに、どうして聞こえない？
聞こえない、何も、何も……
「心配しなくても大丈夫よ」
どうして、あの女の声しか聞こえない？

「私が、守ってあげるから」

私は――

――――

『女の子って、どういうのが好きなんだ？』

「……はぁ？」
幼馴染みのいきなりの電話に、若菜は眉をひそめた。
「ちょっと流星。一体何なのよ？　説明して」

『わ、悪ぃ。実はさ……』
流星の話では、来週誕生日の女の子にプレゼントを送りたいのだが、どんな物がいいか、ということらしい。
その話を聞いたとたん、若菜は少し顔を曇らせた。
しかし声にはそれをおくびにも出さず、言葉を重ねる。
「それで私に訊くために電話したわけ？　少しは自分で考えなさいよ」
『昨日夜中にずっと考えて浮かばなかったんだよ。だからこうして訊いてんのに……』
流星はしょげかえった声を出した。
「まったく……。解ったわよ。一緒に考えたげる。今から出られる？」
『ん？　おう』
「じゃ、決まり。一緒にプレゼント探しに出かけたげるわ」
『マジ？　サンキュー若菜！』
流星の声の調子が上がった。
若菜は複雑な気持ちで「じゃ、私んちに来てね」と言って電話を切った。
「……あーあ。流星にも好きな娘ができたかー」
何だろう、モヤモヤする。
……嫉妬、かな。
「……サイアク」
今の気分を呟き、若菜はため息をついた。

――――

アクセサリーショップは、思った以上に空いていた。
平日な上に、セールも何も無いからかもしれない。
「女の子にプレゼントするなら、やっぱアクセでしょ」
若菜の言葉に、流星は納得する。

確かに、おしゃれなものが嫌いな女子はいない。
「その子、おしゃれ好き？」
「おう。ダサい服着てるとこは、見たことねーな」
流星は悠の服装を思い出した。……今気付いたが、全部足が剥き出しになる服だった。
「……美人なの？」
「ん？　あ、あぁ……」
あれが美人じゃないなら、この世界に美人はいない。そう思える。
「特徴とかある？　あ、これ可愛いー」
近くの棚を見ながら、若菜は尋ねた。
「そう、だな……あ」
流星は、鏡の前で飾り付きゴムを見つめる女性達を見て、一つ思い出した。
「あいつ、長い黒髪が自慢だっつってたっけ」
「あいつ？」
若菜は棚から顔を上げた。
「プレゼントあげる奴のことだよ。椿　悠っていうんだけどな」
「ふぅん……そう」
若菜の顔が、一瞬暗くなった。
流星は首を傾げるが、大して気にせずに髪飾りのコーナーに近付いた。
「髪飾りにするの？」
「おう。何がいいかな」
流星は手近の黒い花型の髪留めを手に取った。
「黒髪に黒じゃ映えないわよ」
「そ、そっか」
流星は髪留めを元に戻し、目線をスライドさせていく。
「何色がいいかな」
「その娘、何色が好きなの？」
「黒と青……あ、紫も好きって言ってた」

「じゃ、色は青か紫のどっちかね。あとは形だけど……」
二人がかりで探しても、ピンと来るものは見つからない。
流星は諦めかけ、別のにしようと移動しかけた時、肩をつつかれた。
振り返ると、セミロングの黒髪の女性が背後に立っていた。
少し頬に赤みのさした童顔の女性で、ふくよかな顔立ちだが瞳は空虚で何も映していない。
二十歳ぐらいだろうか。服装は地味で、派手な店内では場違いな印象を受けた。
「何ですか？」
「これ、君が探してるプレゼントにピッタリだと思うけど」
女性は右手を突き出した。
手の平に乗っているのは、銀細工の髪留めだった。蝶の形をしていて、青い石が一つ付いている。
シンプルだが、悠に似合いそうだった。
しかし、なぜ彼女は流星がプレゼントを探しているのを知っているんだろうか？
先程の会話が聞こえたんだろうかと思ったが、驚くことに違うらしかった。
「美少女な想い人を持って苦労するだろうけど、頑張って。そのために誕生日プレゼント買いに来たんだろ」
「……は？」
「あぁそれと、南の大通りには行かない方がいい」
それじゃ、と彼女は手を振って店の出入口に足を向けた。
「あ、ちょっと待っ……」
「どうしたの？」
「いや、えっと……あれ？」
一瞬若菜を見た後、再び女性に目を戻した時には、彼女の姿はもう無かった。
「ホントにどうしたの？　……あ、それ買うの？」

「え……」
流星は自身の手の平を見下ろした。
先程の女性が持っていた髪留めが、手の中で輝いている。
渡された記憶は無い。なのに手の中には、さっきの髪留め。
（幻……？）
白昼夢でも見たのだろうか。だとしたら、さっきのあのセリフは？
「な、なぁ若菜。南側の大通りで、何かあったか？」
訊くと、若菜は目を丸くした。
「あんた……もしかして知らないの？」
「何が？」
「今朝のニュース見てないの？　男の人が、お腹メッタ刺しにされて殺されたの。確か名前は沢木……」
「もしかして、沢木義孝って人か？」
「そう。なんだ、知ってるんじゃない。女の人に殺されたらしいけど、自業自得よ。犯人、だまされた人らしいし……」
流星は、途中から若菜の話を聞いてなかった。

『痛い目見るのは彼だから』

悠の言葉が、脳裏に甦る。
彼女は解っていたのだ。沢木が殺されることを。
だから助かる道を示した。
悠に金を払って庇護を求めるか、警察に行って自由を代価に安全を確保するか。
しかし、あの男はどちらも選ばなかった。
その結果が、死とは――
……いや、今はそんなことより、さっきの女性。
悠のことはおろか、沢木のことまで知っていた。
あの女性は、一体何者なんだ！？

どこにでもある、ただの小さな民家。

それが悠の、この家に対する感想である。

依頼人の家の中を見渡し、悠は眉をひそめた。

依頼内容はポルターガイストの調査。

家具や食器の位置が動いたり、酷い時には急に何かが粉々に砕けたりしたりするという。

いつも目の前で起こるので、依頼人は恐怖に取り憑かれているようだった。

で、依頼人の西野澄加（ニシノ スミカ）は、不安そうな顔付きで悠の前に紅茶のカップを置いた。

「ポルターガイストが起こり始めたのは、いつから？」

紅茶に手をつけずに尋ねると、澄加は少し考える素振りをした後、声をひそめた。

「その……夫が亡くなってすぐですから、二週間前からです」

「ふぅん。他に家族は？」

「娘が一人。今年で二十歳になります」

「大学生？」

「はい」

澄加が頷くのを見て、悠はふむ、と腕を組んだ。

端から見れば、妙な光景だろう。

澄加は今年で五十歳になる。

悠とは三回り近く違うわけで、そんな彼女が年下の少女にへこへこしてるのだから。

ただ、悠はそんな場面に一ミリも違和感を感じなかったが。

「でも澄加、さん。私が見る限り、霊等の気配はしないけど」
「そんなことありませんっ。確かに変なことが起きてるんです！」
「別に否定はしてないでしょう」
ヒステリックな声音に、悠は困った顔を浮かべた。
しかし実際霊気も無ければ、妖気も感じられない。
もしかして、これは……
悠が口を開きかけた時、「ただいまー」という声が、玄関から聞こえた。
娘が帰ってきたらしい。
リビングのドアが開いた。
「おかえり。早いのね」
「一つ休講になった」
ほんわかした見た目とは裏腹に、口調は冷たい女性だった。
雰囲気のせいか、聞いた年齢より大人っぽく見える。
「娘の紗矢（サヤ）です。紗矢、こっちは……」
「退魔師」
ぼそりと紗矢の口から紡がれた言葉に、悠は目を見開いた。
紗矢を凝視していると、彼女は少しだけぽってりした唇を綻ばせた。
「……邪魔みたいだから、部屋に行く」
紗矢は悠と澄加に背を向けた。
「え、ちょっと！」
母親の制止も聞かず、紗矢はリビングから出ていった。
「……ハァ。すみません、礼儀のなってない娘で」
「いえ……」
悠は無意識の返事を返した。

あの人……もしかして。

「彼女と、話をさせてくれる？」

「え？　は、はぁ……」
澄加は不審がりながらも了承してくれた。

二階の紗矢の部屋をノックすると、簡単に入室が許可された。
「紗矢、貴女と話がしたいって、この人が」
澄加が言い終わる前に、紗矢の目が悠を捉えた。
少々不釣り合いな女の子らしい部屋の勉強机に座った紗矢は、悠に無言の問いかけをした。
悠が頷くと、紗矢は座ったまま母親に向き直った。
「お母さん。悪いけど、出てくれる？　この娘と二人きりで話がしたい」
「え、ええ」
澄加は頷いて出ていく。
気配が遠ざかると、紗矢は悠の瞳を覗き込んだ。
「……君はあたしと『似て』いるな」
その言葉に、悠は唇を噛んだ。

マリオネットメイデン<中>

悠がいないと聞いて、流星はがっくり肩を落とした。
せっかくプレゼント買ってきたのに……
「すぐ帰られますよ」
気の毒に思ったのが、朱葦が慰めてくれた。
「にしても、連日で依頼か……ちょっと変だよな」
「ええ。今までこんな連続で依頼など、無かったんですが」
朱葦も不思議そうだ。

光と闇は、表裏一体。
どんなに平和でも、めくってみれば底無しの闇がある。
よって、妖魔が関係する事件は多いのだが、人間が気付くことはあまり無い。
だからこの事務所の客も、それほど多くない。
……なのに、こんな毎日のように依頼があるのはおかしい。

「俺が初めてここに来た時も、三週間振りだって言ってたし」
一ヶ月ほど前のことを思い出し、流星は眉をひそめる。
「ここのお客様は、多くて一ヶ月に四人ほどです。それにしても、次のお客様が来るのに数日の間があります」
朱葦も流星に同意した。
「もしかしてさ……誰かがここに来るよう仕向けた、とか？」
流星はふと思ったことを冗談めいて口にした。
朱葦は笑わなかった。くすりともしなかった。
いや、もともと笑うことが少ない（てか無い）少女なのだが、こんな風に驚くことも無かった。

「……どうして、そうだと？」
「え？」
朱華の表情は、すでに消えていた。
しかし、薄赤の瞳には、まだ動揺が見え隠れしていた。
「……もしかして、マジでそうなのか？」
「……」
朱華は何も言わなかった。沈黙が、肯定になっていた。
「え……一体誰が……」

「ただいまっ」

誰かが背中にぶつかってきた。手もまわしてきてる。
……って。
「うえぇ！？　ゆ、ゆゆゆ悠！？」
「何？　ひっついちゃいけなかった？」
流星のうなじ下辺りに顔をくっつけた悠は、上目遣いでじぃっと見上げてきた。

……俺、今死んでもいいです。

ちょっとむくれた顔可愛いし、背中に柔らかいものが当たってるしで、本当に昇天しそうだった。
「流星、プレゼント買ってきてくれたんでしょ？　ちょうだい」
「へ……？」
意識を手離しかけた流星は、悠の言葉で現実世界に戻った。
「あ、あぁうん。これ」
ずっと持っていた青いリボン付きの白い箱を渡してやると、悠は笑み崩れた。
「流星からのプレゼント……フフフ♪」
なぜか、もの凄く喜ばれてる。

プレゼントあげただけだよな、俺。
「ね、中身何？」
「ん、えーと……」
「あー！　やっぱ言っちゃ駄目っ。上で開けてくる。行こ、朱華」
「はい」
「流星、店番頼むね」
早口にそう言って、悠は階段を駆け上がった。
朱華も、流星に一礼すると悠に続いた。
「……何で俺が店番？」
流星はぽつりと呟いた。

「危なかったね」
悠は二階の壁にもたれて声をひそめた。
「申しわけありません」
朱華は深々と頭を下げた。
「いいよ、別に。おまえのせいじゃないのは解ってるから」
リボンを解きながら悠は肩をすくめた。
中には、銀の髪留めが入っていた。蝶の形を模した細工が美しい。
「流星を巻き込むわけにはいかない。……て、やっぱ無理かな」
「ここにいる限り、彼らに関わらせないようにするのは不可能でしょう」
朱華の言葉に、悠は「だよね」と返した。
流星をやめさせるか。いや、それは駄目だ。
（離れたくない。それに、何より……）

『……何でだよ』

流星の声が、脳内で響く。

『どうして……どうして俺が――』

悠は唇を噛んで、記憶が流れ出るのをせき止めた。
今、このことを思い出したって、意味が無い。
どうも今日は調子が悪い。
それもこれも、あの女性と会ったせいだ。
かつての自分と似ている、あの人に。
「悠様、顔色がすぐれませんが」
「ん……」
悠は口元を押さえた。
身体的ではなく、精神的な悪寒でだ。
「余計なことを思い出した。寝てくる。……そうだ。調べてほしいことがあるの」
悠は朱華に一つ頼みごとをすると、フラッと自室に足を向けた。

『悠……おまえは私が……』

封印したはずの声が、蘇ってくる。

『おまえは、私の……』

「……違う」
頭を振り、浮かび上がる記憶を打ち消した。
「私はもう……弱く、ない」
悠は瞳を閉じた。
己の闇を、内にとどめるように。

――――

「……ひ～まだぁ～」

流星はレジにぐてー、と倒れ込んだ。
まだ昼前だ。夕方なら客が居るのだが、この時間は客の出入りがほぼゼロだ。
暇潰しに掃除でも、と思ったが、朱華のせい（おかげ？）で必要無い。
棚の本は文字が読めないので無理。流星には記号にしか見えない。
（悠……何か様子がおかしかったな。くっついてくるし、プレゼントに大げさに喜ぶし、変な笑い方するし）
……後半は自分のせいだと気付かない流星である。
考えてもしかたがないので、頬杖をついてまどろんでいると、頭上から声をかけられた。
「起きて」
「はえ？　……て、あんた確か！」
顔を上げると、ほんの一時間前に会った不思議な女性が、目の前に立っていた。
「な、何でここに！？」
「勘に頼ったら来れた」
「か、勘……！？」
流星は立ち上がって唖然とした。
「さっき、君の想い人がうちに来た」
あまりに自然に言われたので、流星はあ、そうですかと普通に頷きかけた。
しかし、内容を理解して、口をあんぐり開ける。
「は！？　悠が？」
「うん。……いい店だな」
くるっと店内を見渡し、女性は胸の前で腕を組んだ。
「ちょ、何であんたんとこに悠が……」
「紗矢」
「は？」
「あたしの名前は西野　紗矢。あんたじゃない」

女性は堂々とした態度で名乗った。
顔だけを見ればおとなしそうな女性なのに、ふてぶてしいというか。
「悪いか、ふてぶてしくて」
「いや、別に悪くは……て、今俺の心読んだ!?」
「気にするな」
「いや、気にするし」
顔に出てんのかなー、と思わず自分の顔に触れる。
そんな流星を見て、紗矢は口を開いた。
「……明るいな」
「え？　悪いですか？」
「いや。ただ」
紗矢の褐色の瞳に、探るような光が灯った。
「一ヶ月前にあんなことがあったのに、よく笑ってられるなと思って」
流星は、全身が凍り付く感覚を覚えた。
「な、何言って……」
「解らない？　君にとって、一ヶ月前は地獄のような日々だったろうに」
流星は呆然と、紗矢を見返すことしかできなかった。
彼女は何を知っている？　何を言っている？
何を、何を、何……
せき止めてたはずの記憶が、脳内を引っ掻き回す。

壁を濡らす血。
床に横たわる死体。
鼻腔を突く臭い。
醜い、化物。

（やめろやめろやめろ……！）

気付いた時には、床にしゃがみ込んでいた。
「大丈夫？」
紗矢が支えてくれている。どうやら、倒れかかったらしい。
「……ごめん」
「……え……？」
「君を苦しませるようなこと、言ったから」
紗矢はうつむいた。表情に変化は無いが、瞳には後悔の色が浮かんでいた。
「あたし、駄目なんだ」
「……何がですか？」
「……あたしは、人の心が読める」
紗矢はぽつり、と呟いた。
「それだけじゃない。その人の生きてきた道も『視え』るんだ」
「そ、それってどういう？」
紗矢は首を横に振って答えた。
「解らない。なぜ、あたしはこんな力があるのか。なぜ、他の人には無い力があるのか、まったく。……もしかしたら、前世は占い師だったのかな」
ふざけた口調で言う紗矢だが、流星は彼女から一つの感情を感じ取っていた。

『普通』でない者の孤独。

流星も知っている。あの辛い感覚を。
どんなに周りに友達が居ようと、恵まれた環境に身を置こうと、自分が普通と違うということに変わりは無い。
周りと自分は違う。自分は普通じゃ無い。そう感じる人間は、世界で自分は独りきりにさえ感じられるのだ。
流星自身もそうだった。

霊感以外にも色々と『違う』から、ずっと独りに感じていた。
この人も、きっとそうなんだろう。
「あたしは人の心が読めるけど、人の心にどう応えればいいのか、解らないんだ」
紗矢は自身の手の平を見下ろした。
「あたしは……心さえも人と違う。何で他人が傷付くのかさえ、解らない」
「紗矢、さん……」
「解らないんだ。なぜあたしは生きている？　なぜ存在している？　なぜ普通じゃない？　なぜ傷付けてしまう？」

なぜ、なぜ、なぜ……

何度も繰り返した言葉なんだろう。とても、とても哀しく響いてる。
流星は一度唇を湿らせた後、意を決して口を開いた。
「俺は、理由なんて無いと思ってます」
紗矢はいぶかしげな顔をした。かまわず、続ける。
「人間って、全部に理由を付けたがるけど、でもほとんどが、理由なんて必要無いと思います」
流星は無理矢理笑った。絶対ひきつった笑いになったと思うけど。
「生きてる。生きてるから存在している。それでいいじゃないですか」
「……変」
ぼそっと呟かれた紗矢の言葉に、流星はショックを受けた。
「え、俺けっこういいことっぽいこと言ったのに！？」
「嘘。冗談だから落ち着け」
ぽす、と頭を軽く叩かれ、流星はぽかぁんとした。
「アホ面」
「えぇ！？」

流星は思わず顔を押さえた。
「冗談。……ありがとう」
紗矢は立ち上がって店を出た。

「あたしも君みたいに考えられたら、こんな風にはならなかったろうな」

そんな言葉を残して。

――――

家に帰ってきたとたん、怒鳴り声が紗矢を迎えた。
「遅かったじゃない！　どこ行ってたの！？」
「遅かったって……まだ五時じゃないか」
リングの窓上にかけられた丸い時計を見て、紗矢は目を瞬く。
「口応えしないで！　お昼は？」
「外で済ました」
「だったら電話してよ！」
「メールしたはずだ。気付かなかった？」
「メールじゃなくて、電話して！！」
ヒステリックにまくし立てる母に、紗矢は眉をひそめた。
父が死んでから、母親はますます厳しくなった。
口応えすればこんな風に叫ぶ。少しでも遅ければ怒声を飛ばす。
自分を大切に思っていてくれてるのは解るが、少々度が過ぎる。
昔からそうだ。まるで人形のようにいとおしまれる。
しかし自分は生きた人間だ。マリオネットでもなければ、着せ替え人形でもない。
しかし、この女（ひと）にとってあたしは人形なんだ……
自由が無かった。縛られていたのだ。

この家に。この女に。

（……まだ、駄目）

紗矢は無意識に固めた拳を掴んだ。

今、心にたまった鬱憤を母親にぶつけるのは簡単だ。

しかし、それをすれば壊れてしまう。

目に見えるものも、目に見えないものも、全て。

今まで、そう考えて抑えてきた。

しかし……今日は……

『どうして私の言うことが聞けないの？』

あぁまただ、と思った。

感情が高ぶった時だけは、人の心を読むこの力をコントロールできなかった。

だからどうしても聞こえてしまう。聞くべきでないことまで。

『貴女は私の娘でしょう？　ちゃんと言った通りにしてよ！！』

（やめ、て……）

紗矢は額を押さえた。

現実と心がごっちゃになる。区別が、つかなくなる。

「まったく貴女はいつも私に余計な心配かけて！」

『本当にあの男そっくり』

あの男とは父のことだろう。母は、父を疎んでいたから。

「少しは私の気持ちも解ってちょうだい」

『自由気ままで、私の言うこと聞かないで！』

「私は、別に憎くて言ってるんじゃないの」
『どうして私の思い通りにならないの？』
「ただ、貴女に何かあったら死んだお父さんに顔向けできないし、それに」
『あの男を殺して、ようやく私だけのものになったのに！』

「……え？」
紗矢は耳を疑った。
今、母は何を？
「お、お母さん……今何て？」
「だから、私は貴女に危険な目に会ってほしくないし」
「違う！　今、何を思った？　お父さんを殺したって、本当か？」
母の目が大きく見開かれた。
「お父さんは交通事故でひき逃げされて、それで……あ」
紗矢はハッとした。
車庫に収まっている車。元は銀色の車だったが、父が死んだ翌日、黒に変わっていた。
それに父が死んだショックでか、昨日まで力が使えなかった。だから、母が父が死んでから何を思っていたかは知らない。
気付かなかった。気付けなかった。
父は事故死したんじゃなかった。殺されていた。
弁護士という職業柄、殺された可能性もあると思っていたが、その犯人が母？
誇りだった。常に毅然として優しく、たくさんの人を救ってきた父。

その父を奪ったのが、お母さん？

痛い。身体中が、痛い。
熱い。脳内が、熱い。

飲まれる、闇に。

『もう、止められないよ』

もう一つの声が、脳内で響く。

「……う」

拳を掴む手を、離す。

もう、抑えられない。

視界が、紅く染まった。

「しまった！　遅かったか」
悠は呻いた。
小さな民家を見上げ、流星は身震いした。
夕日に照らされた家は、何のへんてつも無いように見える。
しかし、家全体から放たれる気配は、流星を恐怖させるのに充分だった。
怒り、憎しみ、哀しみ……負の感情全てが、この家に巻き付いているように思えた。
「悠、説明してくれ！　一体何が起きてるんだ？」
「……西野紗矢は、天性の巫女だったんだよ。それも、超ド級のね」
「巫女？」
「そう」
悠は乱暴に、問題の民家の門を開けた。
「巫女とは、いわば占い師のようなものなの。人の生き筋を辿り、未来を視る。たいがいは修行で身に付けるその力を、生まれつきもっている人間がたまにいる」
「それが、紗矢さん？」
「そう。それに巫女は、自然をも操る。ほっとくととても危険なの」
悠は刀を抜いた。
玄関の扉に向かって振り下ろすが、びくともしない。
「創造師の力まで持ってたの？　想定外だよ……」
「そうぞうし？」
「脳内のイメージを具現化させる力を持った術師だよ。多分、この家の中は、西野紗矢が創り出した亜空間になってる。いや」
悠は難しい顔をした。

「彼女自身の意識ではない、ね」
「は……？」
「とはいえ、これじゃ埒があかない。朱雀、頼むよ」
「はい」
朱雀は前にすっと出た。
さっきまでいなかったのに！　と流星は目を剥く。
「な、何を……！？」
「あぁ、流星は知らなかったね。朱雀の正体」
悠は思い出したように言った。
「まぁ、見てたらわかるよ。朱雀が何者なのか」
悠が言い終わらない内に、流星は解ってしまった。

いきなり現れた銀の毛に覆われた、獣耳と九本の尾で。

「……！？　あ、あれって狐！？」
「そう。それも妖狐の中で最も力がある天狐なんだよ」
「妖狐って……妖魔じゃ！」
流星は身を固めた。
朱雀が妖魔だなんて、知らなかった……
後ずさっていると、悠に刀の腹で思いっきり殴られた。
「あだ！　何す……うわ！　悠、刀危ねぇ！　頭に当たるって！！」
「流星でも、朱雀を侮辱するのは許さないよ」
「は、はぁ？　俺別に侮辱なんて」
刀を目前に突き付けられ、流星はそれ以上の言葉を封じられた。
「朱雀が妖魔であるだけで身を引いた。それが侮辱と言ってるの」
「っ……」
流星は言い返せなかった。
悠の言葉は間違っていない。むしろ、事実だったからだ。

ドガァ！！

破壊音がそこら中に響き渡る。
音源に目をやると、朱雀の尾が、扉を跡形もなく壊したところだった。
「悠様、お急ぎください。どうやら中で、何かが起こっているようです」
「解ってる」
悠は刀を引いた。
「行くよ、流星」
「あ、待てよ！」
家の中は闇の空間になっている。その中に迷いなく突き進む悠を追おうとしてふと、流星は朱雀と目が合った。
謝りたかった。謝ればよかった。
なのに流星は、目を逸らしてしまった。
妖魔に対する恐怖と……そして憎悪で。
「……お気を付けください」
無機質な朱雀の声が、流星の胸を締め付けた。

どれだけ走ろうと、闇、闇、闇――
一体何分たったろうか。一時間かもしれない。それとも数秒？

ガッガッガッガッ……

音が聞こえてきた。何かを叩く音だ。
「この音、何だ……？」
「遅かったか」
悠の口から、歯を喰い縛る音が聞こえた。

ガッガッガッガッガッガッガッガッ！！

一際大きな音を最後に、それは止まった。
「……来たね」
音源には、一人の少年がいた。
目も髪も服も真っ黒で、唯一肌だけが抜けるように白い。
この暗い空間で、本来なら同調するはずの格好の少年は、独特の存在感があるためかすぐ目に止まった。
彼は、何かに跨がっている。
人だ。服装からして女性だろう。
流星はその女性の顔を見て、言葉を失った。

最早それは、原形を留めていなかった。

頭部はところどころへこみ、顔は見ただけで骨が折れてることが解った。
鼻は歪み、目の下は青アザができてる。額は頭と同じようにへこんでいた。
今気付いたが、少年は全身に返り血を浴びていた。手には、血まみれの鉄棒が握られている。
「あ、これ？」
流星の視線に気付いた少年は、女性を見下ろした。
「もう死んでるよ。百回以上頭殴ったから、骨も脳もグチャグチャだろうね。ハハッ」
「なっ……！」
あっさり殺したことを宣言し、楽しそうに笑ってのける少年の神経が、流星には信じられなかった。
「い、一体おまえは何者なんだよ」
「んー？」
少年は幼さの残る顔を少ししかめ、立ち上がった。
「俺の名前はツバサ。それ以外に、何かあるの？」

「あるに決まって……！」
「待って、流星」
悠は流星を手で制した。
「君じゃ向こうは、はぐらかすだけだよ。私が行く」
悠は一歩踏み出して、ツバサと名乗った少年に向かい合った。
「君は、西野　紗矢の別人格だね」
悠の言葉に、流星は目を見開き、ツバサはニヤッと笑った。
見た目は悠と同い年か、少し下に見える。
細面の整った顔には、無邪気さと一緒に殺意が垣間見えた。
「そうだよ。俺は、紗矢の心の奥底にある破壊衝動から生まれた存在だ」
「西野　紗矢は、君のことを知ってるの？」
「まぁね。俺の存在は誰かを傷付けかねないから封じ込められてたけど」
ツバサはつい、と肩をすくめた。
「恨んでは、いないみたいだね」
悠は意外そうに言った。
「俺、紗矢を困らせることはしたくないしね。話し相手になってくれたし、恨んじゃいないよ」
ツバサは前髪をかき上げた。
「今回のことがなきゃ、俺は一生表に出ることは無かったろう。でも、このババアが」
忌々しげな目で、ツバサは死体を軽く蹴った。
「紗矢の父親を殺しやがった。紗矢の心は大荒れ。で、俺が出てきて代わりに仇討ちしたわけさ」
ツバサの口調は軽いが、内容はかなり暗い。
……待て。
「何で、紗矢さんの父親を、その女(ひと)が殺さなきゃならなかったんだ？」
流星が訊くと、ツバサは片眉を上げた。

「この女は、紗矢を自分だけの人形にしたかったんだよ。そのために娘がなついてた夫を殺したのさ」
「……何だって？」
流星は思わず訊き返した。
夫を殺したって？
つまり、死んでいる女性は……
「マ、マジかよ……そんなこと」
「事実だと思うよ。彼の言うことは」
悠が言った。
「朱峯に頼んで情報を集めた。西野　竜介（リュウスケ）、四十九歳。三週間前に事故で死亡。ひき逃げだった。で、裏の情報屋の話じゃ、ひき逃げ犯は、その妻らしい。目撃者もいる」
こんなことを冗談で言う悠じゃない。
ということは、本当に……
とんでもない事実を知った流星は、目の前が不安定に揺れた気がした。
「せっかく紗矢が今まで我慢して怒りを抑えてたのに。まぁ、最近は抑えきれずに力がダダ洩れしてたけど」
「それが、ポルターガイストの正体だね」
悠のセリフに、流星は顔を上げた。
「ポルターガイスト？」
「依頼だよ。原因を調べてくれって、そこで死んでる西野澄加に頼まれてたの。妖気も霊気も感じなかったからまさかと思ってたけど、やっぱりね」
悠は眉間にしわを寄せた。
「ここまで彼女の力が強力だとは思わなかったけど。まさか、亜空間まで創っちゃうなんて」
「俺もびっくりだよ。あいつが、何も無いとこから何かを生み出す

ことは知ってたけど」
とぼけた表情をみせるツバサに、悠は厳しい声を放った。
「西野紗矢はどこ？」
「……知りたい？」
ツバサの手から、鉄棒が落ちた。
「だったらさぁ」
代わりに握られていたのは、巨大な剣だった。
黒い刀身が、光も無いのに煌めく。
「俺に殺されなよぉ！」

ガギィィッ

「……っ！」
「俺さぁ、あんたのこと殺したくって殺したくってたまんないんだよねぇ」
悠の刀に大剣を止められ、だが嬉しそうに笑うツバサ。
鍔迫り合いになりながら、彼は続ける。
「だって俺、破壊衝動から生まれたし？　一人殺したくらいじゃ足りないんだよぉ！！」
ツバサは大剣を引いた。しかし数秒もしない内に、再び体重を乗せて振り下ろす。悠は一歩下がってそれを避け、右足を旋回させた。
霞むような速さで放たれた蹴りは、ツバサの側頭部にヒットする。
少年の軽い身体は、いともたやすくぶっ飛ばされた。
「私を殺す？　無理に決まってるでしょ」
悠は走り出した。ツバサはまだ、起き上がっていない。
「君ごときじゃ、私に触れることすら叶わないよ」
悠はツバサに向けて刀を突き出した。
ツバサはごろごろと地面を転げてそれを避ける。
ツバサは右手をついて跳ね起きた。同時に地面を蹴る。
滑るようにして走り、ツバサは凶悪な笑みを浮かべた。

「やっぱいいよ、あんた！」
再び鍔迫り合いになりながら、ツバサは叫んだ。
「あんたは絶対強いと思ってた。やっぱ殺し合いはこうでなくっちゃな！」
「殺し合い？　何を言っているの」
悠は身を沈めた。
よろめいたツバサの足に足払いをかけ、剣を持った手を踏みつける。
刀を喉元に突き付け、ツバサの動きを完全に封じた。
「ただ暴れるだけの獣と、私は殺し合いはしないよ」
悠は唇に妖艶な微笑を浮かべた。
「狩人が獲物と殺し合いを演じる？　しないでしょ。私は、君みたいな闇から生まれたものを狩るハンターなんだから」
刀の切っ先が、ツバサの喉元に近付く。
「弱い奴には興味無いよ。消える？」
「いっ……」
ツバサは顔を歪めた。
「嫌だ！　まだ、まだ消えるわけにはいかないんだ！！」
ツバサは必死な顔で叫んだ。
「紗矢はもう頼れる奴がいないんだ！　俺が、あいつを支えきゃならないんだっ。あいつが強くなれるまで……！！」
「強くなれるまで？」
悠はきょとんとした。
「紗矢は形はどうあれ、母親に守られ続けた。だからあいつは、強くなりたくてもなれなかった。やっと、やっと紗矢は自由なれたんだ。あいつが強くなれるまで、俺が支えなきゃいけないんだ！」
さっきまで殺気をまとっていたツバサは、今はただ必死に叫ぶ少年だった。
流星はこの変わりように、ただ驚くしかない。
「悪いけど」

悠は冷たくツバサを見下ろした。
「私は闇を滅する人間だ。闇の言葉に耳を貸す気は無いよ」
ツバサは絶望したような顔をした。
しかし、すぐ諦めたように、目を閉じる。
「バイバイ」
刃が風切り音を上げて、ツバサの頭めがけて振り下ろされた。
刀が何かを突き刺さる音が響く。

「……やっぱりやめた」

「は？」
「へ？」
ツバサと流星は、同時に間抜けな声を上げた。
刀はツバサの顔の真横に突き刺さっている。
「考えたら君、妖魔じゃないし、狩ったって意味無いし。それに」
悠は刀を引いた。
「君と西野紗矢は、救われない」
「俺と……紗矢……？」
ツバサは目を見開いた。
「君達は二人で一つ、なんでしょ？　ただ、一つの身体にある、二つの意思じゃない。だから、どっちも失っちゃいけない」
「……っ」
ツバサの顔に、驚きが広がった。
「何で……解って……」
「解るよ」
悠は悲哀の表情を浮かべて、刀の柄に唇を押し当てた。
「私は、君達と似てるから」
「……そうだったね」
ツバサは長々と息を吐いた。
「紗矢は、ここにはいない」

ツバサがぽつりと言った。
「外だ。この亜空間は俺が創った」
「君も創れるの？」
悠が尋ねると、ツバサはこくんと頷いた。
「うん。紗矢ができることは、俺もできるんだ。今、この空間を消すよ。だから」
ツバサは立ち上がって、悠に懇願した。
「紗矢を、あいつを頼むよ。俺じゃ、直接あいつを守れないから」
「……解った」
悠が頷くと、ツバサはほっとしたように、顔を弛緩させた。

グニャンッ……

空間が歪んむ。
まばたきをしてる間に、流星達は小さなリビングに立ち尽くしていた。
「変わった！？」
「いや、これが元の部屋だよ」
悠は足元を見つめた。
ツバサの姿は無い。フローリングの床には、女性の死体と紗矢が横たわっていた。
「……うぅっ」
紗矢が呻き声を上げて起き上がった。
「君達……」
紗矢は悠と流星を見て目を見張り、次いで死体を見て口元を覆った。
しかし、しばらくして顔を上げる。
「……ツバサが、お母さんを殺したんだね」
意外なほど落ち着いた声で、紗矢は尋ねた。
悠が頷くのを見て、長々と息を吐く。

「哀しむべきなのに……母が死んで、気が楽になった。酷薄な娘だな」

自嘲めいた笑いを浮かべ、紗矢は立ち上がった。

「警察に行くべきかな」

「信じると思う？　もう一人の自分が母を殺したって」

「……それもそうか。でも」

紗矢は、強い意思を秘めた目を閉じた。

「罪は償わなければならない。ツバサの罪は、あたしの罪だから」

紗矢の決意に、流星ははっとした。

この人は、強い。

家族を失い、もう一人の自分が罪を犯したのに、その現実を受け入れている。

普通の人間なら、自分の運命を嘆き、己の無力を呪うのに。

俺のように……

紗矢のまっすぐな瞳を見つめ、悠は口を開いた。

「……だったら、退魔師になるといい」

悠の声に、紗矢は目を開けた。

「今回、貴女の母親が死んだのは、貴女の力のせいでもある。その力を、今度は壊すためじゃなく、守るために使えばいい。退魔師としてなら、それができる」

紗矢は、真っ直ぐ悠を見つめた。しかし数秒もしない内に、顎を引く。

「それで罪が償えるなら、やろう」

「……決まりだね。知り合いを紹介する。そこで退魔師の修業をするといいよ」

悠はミニスカートのポケットから、携帯を取り出した。

西野宅を出た流星は、朱嶌と向き合った。

悠と紗矢は何やら話していて、まだ出て来ない。

「……朱華、その」
流星は言葉を探りながらうつむいた。
何を言えばいいのか、まったく見当がつかない。
口を開閉させていると、朱華が手を握ってきた。
「しゅ……」
「私に悪かったとお思いなら」
獣耳も尾も無い朱華は、静かに流星を見つめた。
「悠様の信頼を失わぬようになさいませ」
「え？」
「私は気にしておりません。ですが、悠様のお心が離れぬよう、今後はお気をつけくださいませ」
「そ、それって、どういうことだ？」
「貴方が悠様を想い続けてくだされば、いずれ分かるでしょう」
朱華は手を離した。
この時、流星には彼女の言葉の真意が、まだ分からなかった。

――――

「椿　悠の圧勝か」
熾堕は楽しげに笑った。
「椿　悠の力を計ろうかと思ったが……なかなかどうしてうまくいかない。桐生家の姫持ち二人の力はすぐ解ったんだが」
「彼女はおそらく、力の三割も出していないわ」
手の平に乗った黒い蛾を見つめながら、月読は呟いた。
「私には解る。同じ姫持ちだから」
「ふぅん」
熾堕は片眉を上げた。
二人がいるのは、西野宅からさほど離れていない民家の二階の窓際だった。

しかし、使われた形跡は無く、床にはほこりが積もっている。
それは当然で、実際使われていないのだ。
随分前にこの家は、空き家になっているのである。
「訊いていいかしら？」
熾堕が目を向けると、月読は尋ねた。
「あの母親をけしかけたのは、貴方？」
「まさか」
熾堕は首を横に振った。
「椿　悠のことは教えたが、夫を殺せとは命令してない」
「……ならいいんだけど」
月読は目線を窓の外に戻した。
「まぁ、それはともかく。そろそろあの方がしびれを切らす頃だ。戻らないと」
「……」
「不満そうだな」
熾堕は苦笑した。
「だがしょうがないだろう。期限が迫ってる。ようやく始まるんだ」
窓から離れ、熾堕は銀糸の髪を後ろに払った。
「我ら妖偽教団の一大イベント、人柱狩りがな」

第四話　回りだした歯車<上>

学校閉鎖は終わり、ようやく授業が行われるようになった。
……大半の生徒にとっては、ありがた迷惑だが。

で、その大半の一人である流星（リュウセイ）は、机で友人の会話を聞いていた。
「一週間何してた？」
「俺、お袋に捕まってさー……一歩も外に出してもらえなかった」
「うわっ、最悪じゃん！」
「俺も勉強させられたー。隠れてゲームしてたけど」
「ゲームって言えばさ、新作出たの知ってる？　あのシリーズの……」
「あー、俺やったこと無いわ」
「マジで！？　買えよ！　金無ぇの？」
「……つぅか、流星一言も喋んねーな」
友人の一人、山下（ヤマシタ）の言葉に、全員流星を見る。

流星は爆睡中だった。

「……寝てんじゃん！」
「え、さっきまで起きてたよな？」
「うわ、マジ寝だし」
友人それぞれが好き勝手なことを言う。やがて、全員にやりと笑った。
しばらくして――

「……ぎゃはははははは、やめっだっうわ！　もーギブっ。ギブだって！　ひーっ」

友人五人によるくすぐり地獄に、流星は飛び上がった。
女子がまた馬鹿やってる、と言いたげな目で見てきたが、誰も気にしない。
「やめっマジで……このっ」
流星の拳が、友人達の頭に例外無く落ちた。
「やめろっつってんのにおまえらはっ……」
息を切らした流星は五人を睨んだ。
「あっだ～……。おまえ、ちょっとは手加減しろよ、空手部！」
元木（モトキ）が叫んだ。
「ても最近じゃユーレイ部員だよな」
卓人（タクト）が頭をさすりながら言った。
「バイトしてんだろ。アンティークショップの」
「まぁ、一応……」
実際は退魔師という、妖魔を狩る職業の手伝いなのだが。
「でも、今日は行く。久しぶりにバイト、休みだし」
「久しぶりって……休み中、ずっとバイトしてたのかよ！？」
「いや、二日だけ」
流星は顔を曇らせた。
七日前、急にバイトはしばらく休みだと言われたのだ。
朱華（シュカ）のことで怒ってるのかと思いきや、どうも違うらしい。

『西野紗矢（ニシノサヤ）が気になることを言ってたんでね、調べたいんだよ』

そう言う悠（ユウ）の顔は、厳しいものになっていた。
紗矢は、梅見霧彦（ウメミキリヒコ）という男性に引き取られ、現在は退魔師の修業をしているはずだ。
長身にスーツを着た、優しそうな男性だった。悠も信頼している

ようだし、彼女は大丈夫だろう。
しかし、問題は悠だ。あんな切迫した顔、見たこと無い。
一体何があったんだろう。

黙り込んだ流星を見て、友人達は焦ったように顔を見合わせた。
「あー！　そういやさ」
木下（キノシタ）が声を上げ、山下の肩を叩いた。
期待を込めて残り三人が見つめる中、木下は心なし胸を張った。
「俺、山下とコンビ組んだんだ。コンビ名はダブル下下！」
「サブいよおまえら」
卓人に一蹴され、ダブル下下は解散した。
「そうだ。今日空手部行くんだったら、剣道部の練習試合見れんじゃん」
草太（ソウタ）の言葉に、流星は顔を上げた。
「練習試合？」
「今日、うちの剣道部が他校と交流試合するんだ。空手部と体育館半々で使ってるから、試合見れるぜ」
「ちなみにどことだよ」
「晋羅（シンラ）高校」
「マジ！？　超エリート校じゃねーか！」
木下は目を見開いた。
「でも剣道部の実力はどうよ？」
「えー、微妙じゃね？」
また好き勝手言い出す友人達の声を聞きながら、流星は晋羅高校ね、と口の中で呟いていた。

――――

「久しぶりだな、華鳳院（カホウイン）」
空手部の顧問、冬木（フユキ）はからっと笑った。

今年で五十五になるらしい彼の頭は禿げ上がっている。ただ、身体付きはさすが体育教師だけあってたくましかった。
ごつさでは高野次郎（タカノジロウ）といい勝負だろう。
「ずっと来なかったから、心配してたんだぞ」
「すみません。ずっとバイトだったもんで」
道着を着た流星は頬をかいた。
他の部員は、すでに組手を行っている。
「まぁいい。柳田（ヤナギダ）！　こいつの相手してくれ」
「うっす」
部内でも一、ニを争うほどごつい柳田は、体格に合ったでかい声で返事をした。
流星が彼の前に立つと、身長差が歴然とする。
流星は百八十一センチと高い方なのだが、柳田は百九十センチ越えしている。
で、あるのにもかかわらず、柳田は流星に対して必要以上に警戒していた。
なぜかというと、流星の実力に問題がある。
流星はさっと構え、柳田が構えるのを待った。
柳田は流星と同じ構えをとる。しかし。
（……スキだらけだな）
流星は間合いを一息で詰め、正拳突きを放った。
狙いは外れず、柳田の腹の真ん中に拳は吸い込まれる。
しかし、当たる寸前で拳は止まった。
試合以外で技を決めることは、部内で禁止されているからだ。
「……はぁぁっ。か、華鳳院先輩！　マジで当たるかと思ったじゃないですか！！」
「あ、悪ぃ」
流星は柳田に苦笑いを向けた。一応、柳田の方が年下である。
実は、流星は空手部でも一、ニを争う実力者で、三年にも一目置かれている。

一年に慕われるほどなのだが、今のところ、悠にいいところは見せれていない。
――と。

バシィィッ

小気味よい音が響き渡った。
音の方を見ると、剣道部が交流試合の相手の面を取ったところだった。
「今の副将だな。次大将戦だぜ」
卓人が後ろからやってきた。彼も空手部なのである。
「もうそこまで進んでたのかよ。気付かなかったぜ」
「おまえが着替えてる間に、ほとんど全部終わっちまったんだよ」
卓人は肩をすくめた。
「そっか。草太は？」
「あそこで応援」
「試合出てねーじゃん」
二人で笑って試合を見つめる。
互いの大将が立ち上がった。
面を付けているため、顔はわからない。
しかし、晋羅高校の大将に目をやったとたん、流星はぞくりとした。
普通の高校生が放つことのできない、こちらを圧倒するような気迫を感じたからだ。
構えにもまるで隙がなく、対峙していないのに、流星の頬に冷たい汗が伝った。
こちらの高校の大将は、気迫に飲み込まれたのか全く動かない。
それを周りが不審がる前に、相手がゆらりと動いた。

バシィィンッ

音がしたと思ったら、大将の立ち位置が入れ替わっていた。
向こうの大将の構えからして、こちら側は胴を打たれたらしい。
いつ打ったのか、と思うほどのスピードだった。
こちら側のメンバーは呆然としていたが、晋羅高校は当然といった顔で澄ましていた。
……とんでもない奴がいるもんだ。
流星がそう思っていると、仲間の元に戻った敵方の大将が面を脱いだ。
その下の顔を見て、流星は目を剥く。

……悠!?

艶やかな黒い髪、黒曜石のような切れ長の瞳、信じらないほど整った顔立ち……
似てる、なんてものじゃない。瓜二つだ。
流星は目をこすって大将の顔を見直した。
やはり似ている。髪は短いし、顔立ちはどちらかと言えば男性的ではあるが。
他人がここまで似ることがあるんだろうか。もしかしたら、前に聞いた悠の兄貴かもしれない。
流星は声をかけて確かめようとした。

――目が合った。

悠と同じ、黒曜石のように澄んだ瞳がこちらを捉えた。
深沈とした表情は全ての感情が抜け落ちたかのようで、流星は少しぞっとする。
「椿（ツバキ）、行くぞ」
仲間の一人が、悠の兄（推定）に声をかけた。

彼は流星から目を離し、背を向ける。
流星は無意識に止めていた息を吐き出した。
やはり彼は、悠の兄貴だ。椿と呼ばれていたし、それに。
(悠と、同じ目だった)
悠さっきの彼も瞳には常に強い意思を秘めていて、そして、僅かな影があった。
「……今の奴、凄ぇ美形だったなー」
卓人の呟きで、流星は彼がいることを思い出した。
それどころか、部活中だということすら忘れていた。
「何か女みたいな顔だったな。あんなに強ぇとは思えねーや」
「人は見かけに寄らないもんだぜ」
流星は卓人にそう返した。
悠と会ってから、流星はそれが身に染みて解っていた。
「あ、先輩達、集合かかってますよ」
柳田が言った。
流星はふ、と息を吐くと、冬木の元に歩み寄った。

――――

「恭弥(キョウヤ)、おまえ何見てたんだ?」
友人にそう問われ、紺色の制服に腕を通していた椿恭弥は顔を上げた。
「……妹の知り合いがいたんだ」
「あれ? おまえ妹いたっけ」
「前話したろうが。もう忘れたのか」
恭弥はあきれのため息をついた。
「そんなんだから勉強できないんだぞ」
「それ言うなって!」
友人はギャンギャン喚く。
「そう騒ぐな。事実だろう」

竹刀でつつくと、友人は「やーめーろー」と叫んだ。おそらくポーズだろうが。
「置いてくぞ」
「うおっ、待てって！　俺まだズボン……どわっ」
友人はずっこけてロッカーに頭を突っ込んだ。
「……阿呆」
恭弥は黒のスポーツバッグを肩にかけて、更衣室を出た。

華鳳院　流星か……
恭弥の脳裏に、先程の青年が浮かび上がった。
「とんでもない奴を手元に置くものだな、悠」
妹の行動に、恭弥は眉間にしわを寄せた。

「椿」

急に呼び止められ、恭弥は立ち止まった。
「先生……」
「さっきの試合、さすがだな。瞬殺だった」
顧問はにこにこと笑いながら恭弥の細い肩に手を置いた。
「本当に……強いな」
「……？　はい……」
様子がおかしい。
この、狂ったような、血走った目は何だ？
「失礼します」
恭弥はそれを振り払い、その場を立ち去った。

「本当に強く美しい……壊したいぐらいにな」
顧問の笹木は、ククッと笑った。

「もうそろそろ……我慢も限界だ」

――――

朱華（シュカ）に集めさせた資料を長机に放り投げ、悠はソファーに身体をうずめた。

「やっぱり……妖偽教団（ヨウギキョウダン）の動きが活発化してる」

一人呟き、顔をしかめる。

妖偽教団。退魔師の敵。

退魔師の敵は、妖魔だけではない。

どんなものにも反対の性質を持つものはあるもので、退魔師と対極に位置する者達も、当然いるわけだ。

その集まりが、妖偽教団である。

禁術で妖魔の力を利用し、または自身が妖魔となって闇に生きる者達。

同じ裏の世界の住人でありながら、その性質は退魔師と全く異なっていた。

悠は奴らのことを「政治家や金持ち以下のクズ」と位置付けている。

己の欲のためだけに禁術に手を出す奴は、ゴミより格下だとさえ思っているのだ。

妖魔になっても悲劇しか生まないのに、それに気付かない馬鹿な奴ら。

もっとも、そんなクズ共より厄介な奴がいるようだが。

『銀髪の男に気を付けて』

紗矢の、あの別れ際の言葉が気になる。

彼女の話では、母に退魔師の存在を教えた男らしい。
紗矢はちらっと見ただけだが、その男の気配は、人と違うものだったという。
おそらく妖魔、もしくは半妖だろうが、何者だろうか。
妖偽教団と何か関係があるのか？
沈思していると、長机の上の携帯が震えだした。
「ん？　電話……」
悠は手を伸ばして携帯を取った。
前回のことがあるので、誰かからかを確かめる。
「あれ？　恭兄からだ……」
珍しい。刀弥（トウヤ）と違い、口数の少ない恭弥が電話してくるのはまれだ。
とりあえず、通話ボタンをプッシュする。
「もしもし、恭兄？」
『久しぶりだな、悠』
少し低音の声。間違い無い、恭弥だ。
「久しぶり。でも、一体どうしたの？　珍しいよね、恭兄が電話くれるの」
『あぁ。実は今日、おまえが言ってた奴を見た』
「……流星に会ったの？」
『剣道部の交流試合で見かけた。隣の空手部にいたよ』
「だろうね。彼、空手部所属だもん。……で？」
悠は寝転んだまま、頬杖をついた。
「流星を見た感想をどぉぞ？」
『……おまえの言う通りだった』
恭弥の声が少し低くなった。電話で内緒話でもしてるかのようで、悠は少しおかしみを感じる。
しかし恭弥の声は、真剣そのものだった。
『あれは危ない。よく十七年間生きていられたものだ』
「恭兄もそう思った？　多分、封印か何かほどこされてたんだろう

ね。でも」
『その封印が解けかかっている、か？』
「うん。だからあんなことが起きたんだよ。……ところで、封印で思い出したんだけど」
悠は声をひそめ、尋ねる。
「恭兄、最近身体の方は大丈夫？」
『あぁ。だが、それがどうした？』
「……うぅん。大丈夫ならいいの」
恭兄が大丈夫なら、アレの心配も必要無いだろう。
退魔師が守り続けた、アレ。
決して妖偽教団に渡してはいけない。
もし彼らの手に渡ったら、恭兄は……

『……悠？　どうかしたのか？』

恭弥の声で、悠は現実に引き戻された。
「ごめん、何でもない」
『……ならいいが。で、華鳳院流星の力はちゃんと抑えてるんだろうな』
恭弥の質問に、悠は「うん」と答えた。
「今はとりあえず、呪（シュ）をかけてある。でも近いうちに使い方を教えないとね」
『だな。……あぁそうだ』
恭弥は思い出した、というような声を上げた。
『おまえ、いつ帰ってくるんだ？　明後日誕生日だろう』
「あ……忘れてた」
悠は思わず口に手を当てた。
「明日帰ろっかな」
『だったら、僕の学校でやる剣道部の練習試合、見に来るか？』
「！　行くっ。流星も連れてっていい？」

返答は無かった。無言で尋ねられていた。
「流星と恭兄、同い年でしょ。仲良くなれるんじゃない？」
『……どうかな』
ため息混じりの言葉は許可だと、悠は知っていた。
「じゃ、また明日ね」
『あぁ。……悠』
「ん？」
電話を切りかけた悠は、ふと手を止めた。
「何？」
『……がんばれよ』
切れた。向こうからツーツー、という無機質な音が流れる。
「……どういう意味？」
悠はぽかんと携帯を見つめた。
まぁ、それはともかく。
妖偽教団の動きが活発化してるのは、奴らの中で何か起きたからだろう。
それが何かはわからないが、アレに関係してるのは確かだ。
……しかし、今は放っておいても大禍あるまい。

少なくともこの時は、悠はそう思っていた。
自分の考えが甘かったと知るのは、そう遠くない。

回りだした歯車<中>

流星は携帯画面を見て飛び上がりそうになった。
メールが来てる。しかも悠から。
いくらこっちがメールしても返信しなかったのに。
わたわたとメールを開くと、超が付くほど簡潔な内容だった。

『ニ、三日分の泊まりの荷物をまとめて事務所に来ること』

俺が送ったメールに関しては総無視っスか、悠サン。
泣きたくなった流星である。
ともあれ了解のメールを送り、さっさと着替えを済ます。
「悪ぃ卓人、先帰るっ」
「お？　バイトから呼び出しか？」
「あぁ」
学ランに腕を通し、鞄をひっ掴む。
「がんばれよー」
「おう！」
手を上げて応じ、流星は小走りになった。

マンションに帰ってすぐ普段着に着替えた流星は、スポーツバッグに荷物を突っ込んだ。
テレビをつけると、物騒なニュースが流れていた。
『――連続殺人犯の高島竜介（タカシマリュウスケ）容疑者は、依然逃走中です。高島容疑者は四月七日、二十人をナイフのようなもので殺害し――』

あまり気分のいいニュースじゃないのでテレビを切った。
学校はどうしようか、と思いつつ、替えの服やら何やらを投げ入れる。
「あれ？　シャツどこやったっけ……」
普段から片付けをあまりしないせいで、部屋は荒れ放題である。
よって、探し物はいっこうに見つからない。
昔は、掃除をしてくれる人がいたから、こんなことなかったのに……

ピンポーン

「うげっ。こんな時に客!?」
急がねぇと悠に怒られんのにっ、と考えながら玄関を開ける。
「……若菜。何でここに？」
玄関先に立った幼馴染みに、流星は目を瞬いた。
「渡辺君から、忘れ物預かったのよ」
「卓人から？」
差し出されたのは、未使用のタオルである。
汗をかかなかったので、使わず出しっぱなしにしてたのだ。
「サンキュ」
「ん。……何してたの？」
流星の肩越しに部屋の惨状を見た若菜は、目を丸くした。
「バイトで泊まりするっぽいから、用意してたんだよ」
「ふぅん。今日中にできんの？　これ」
「う〝」
喉から奇妙な声を出す流星に、若菜はため息をついた。
「手伝ってあげるわよ。その代わり、下着とかは自分で管理してよね」
流星を押し退け、部屋に入っていく若菜。
それを止めることはできるが、一人でまとめられないのも事実な

ので、ここは甘えることにした。

十数分後、ギリギリまで入れられたバッグを、流星は肩に背負った。

「ありがとな。一人だったら確実日が変わってた」

「……どうでもいいけど、携帯の充電器はともかく漫画とゲーム持っていくのはどうかと思うわよ」

若菜はあきれ顔になった。

「うっせーな。とりあえずもう出るから。家まで送ろうか？」

「いいわよ。まだ明るいし。知っての通り、うちフリーダムだしね」

「ん。まーな……」

確かに、警察官の家とは思えないほど自由な一家だ、若菜の家は。

「ところで、パパがしょっちゅう流星の心配してるんだけど、何かやったの？」

「え、いや」

多分、悠のことだろうと思った。

今のところ死にかけたことは無いが、これからは何があるかわからないし……

だが、若菜の次の言葉で、思考が一瞬止まった。

「やっぱ、一ヶ月前のことを……」

ダンッ

思わず壁を叩いていた。

「若菜」

「な、何……！？」

「その話は、するな」

我ながら、随分怖い声が出たものだ。

若菜は顔をひきつらせながら頷いた。

罪悪感を感じつつも、流星は若菜を促して部屋を出る。

まだ忘れられないのだ、自分は。
いや、忘れられるはずない。
だってあの日俺は、俺の家族は……

『あまり自分を責めないでよ』

悠の言葉が脳裏に蘇った。

『どんなに願おうと、過去は取り戻せない。大事なのは、今をどう生きるかでしょ』

解ってる。解ってるのだ。
でも俺は、俺を責めずにはいられない。

流星はぐっと唇を噛んだ。
己の無力さと弱さを、思い出して。

――――

背後の気配に、男は振り返った。
「順調かしら？　例の任務は」
巫女装束の女性に、男は「あぁ」と答えた。
「例の人柱なら変わり無い。……なぁ、月読」
男はにたぁっ、と笑った。
「あの人柱、俺がもらってもいいか？」
「駄目よ」
きっぱりと断る女性。
「あくまで椿の人柱は監視。手を出すのはまだ先よ。第一、人柱は

皆、あの方の獲物だわ」
「ふん。なら……」
男は女性の首を掴んだ。
「おまえを壊そうか」
男の手が、振るわれた。

ヒュンッ

空振り。
掴んでいた女性の姿は無く、代わりに男の手には、人型の紙が握られていた。

『忠告したわよ。あの人柱には手を出すな』

女の声が、闇夜に消えた。
「ちぃっ。女狐が」
忌々しげに吐き捨て、男はその場を後にした。

まぁいいさ……俺は好きなようにやる。
伊達に連続殺人犯やってないさ。

男の目に、景色は映らない。
映るのは、狂った欲望を満たす、獲物のみ。
「待ってろよ……椿　恭弥。もうすぐおまえを、壊してやるよ」
男の哄笑が、闇空に響き渡った。

――――

流星は現在置かれている状況が理解できなかった。
事務所の前まで来たら、近くに停まった高級車に乗せられたのだ。

流星の現在地は後部座席。
左隣には悠、そのまた左に朱華。
運転するのは、スーツ姿の見知らぬ男性。
「……悠。どこ行くんだ？」
恐る恐る尋ねると、悠はにっこり笑った。
「私の実家」
「は？　何でまた」
「誕生日明後日でしょ、私。だから流星も連れていこうと思って」
……何でそこに繋がるのか解らない。
「えっと……時間かかるのか？」
「まさか。隣町の山中にあるのに」

実家が山ん中にあるのか！？

唖然とする流星に気付いてないのか、悠は笑顔で続ける。
「でね、恭兄、あ、下の兄貴のことね。明日練習試合あるから見に来いって。だから今日帰ることにしたの。恭兄の学校休みで、試合はお昼からだから」
「へ、へぇ……ん？　試合？」
何のだ？　と一瞬首を傾げかけたが、すぐ思い至った。
「もしかして剣道の？」
「そ。流星今日会ったでしょ。私の兄貴、椿　恭弥に」
流星は驚きよりも、やっぱりという気持ちが濃かった。
「どーりで似てるよなー」
シートにもたれかかった流星が呟くと、悠の表情が一瞬曇った。
そのことを訊くより早く、悠は話題を変える。
「今日、父さんともう一人の兄貴はいないの。今家にいるのは、恭兄と門下の人達だけだよ」
「門下？」
「うちは退魔師の一族の中でも名門の一つだからね。弟子とかがい

るんだよ」
悠は話は終わりとばかりに目を逸らした。
流星は、まだ残った質問を飲み込んだ。
なぜ父と兄が不在なのか、なぜ母親が話題に出ないのか、なぜ兄と似てると言われて顔を曇らせたのか。
しかし今は訊けない。
悠は尋ねることを拒絶していた。
顔をそむけられただけだが、流星には何となくわかった。
拒絶する人間から無理矢理訊き出すのは、たとえ家族でも許されない。
失礼とかそれ以前に、相手を傷付ける。流星自身、経験があるので知っていた。
他人にできるのは、言えるようになるまで待つことだけだ。
流星は少し迷ったが、軽く一回だけ、悠の髪を撫でた。
悠は肩を一瞬震わせたが、それを振り払ったりはしなかった。

悠、俺、待つから。おまえが話せるまで。

流星は心の中で、呟いた。

――――

山奥に突然現れたのは、日本家屋だった。
鉄で補強された門の扉が開くと、日本庭園が広がり、その奥には日本式豪邸が建てられていた。
車から降りた流星は、思わず唸る。
山のど真ん中に家、それもこんな立派な家があるとは。
「びっくりでしょ？　でも歩きだと大変なんだよ」
流星の後から降りた悠は小さな胸を張って言った。
「この山全体に結界が張ってあるから、妖魔も入ってこれないし、

安全なの。だから安心して退魔師修業ができるんだよ。ま、他の流派でもやってることだけど」

「流派？」

流星は首を傾げた。

「退魔師は流派があって、椿家もその一つなの。各家には、姫シリーズと呼ばれる退魔武器を所有している」

「姫、シリーズ……？」

「平安初期、綺羅（キラ）と呼ばれる武器職人がおりました」

朱華が語りだした。

「造るものは共通して皆退魔武器。そして銘には全て姫と付いていました。全部で百〇八個あるそれらを総称して姫シリーズと呼んでいるのです。悠様の刀、『剣姫』もその一つ」

朱華の視線が、悠の右手に握られた刀に注がれた。

例によって、刀は紫の布にくるまれている。

へぇ、などと言っていると、背後から声をかけられた。

「いつまでそこで立ってるつもりだ？」

振り返ると、悠そっくりの青年が離れた場所に立っていた。

「恭兄！　流星連れてきたよー」

「一言目がそれか」

悠のセリフに、恭弥は微苦笑を浮かべた。

それだけで、最初の印象が覆る。

（何だ、笑えるんだ）

てっきり鉄仮面男だと思ってたのに、と失礼すぎることを考えていると、恭弥がこちらを向いた。

もしかしてバレた！？　と焦った流星だったが、全然違った。

「改めて、というのもおかしいが、初めまして」

すっと差し出された手に、流星は目を瞬く。

「椿　恭弥、君と同じ十七歳だ。よろしく」

暖かな微笑を浮かべる恭弥に流星は呆然としていたが、慌てて彼の手を握った。

「こ、こちらこそよろしく。華鳳院　流星デス……きょ、いや、えっと」
「恭弥と呼び捨てで構わない」
「えっとじゃ、恭弥」
流星は頬をかいた。なぜか照れくさくなったのである。
「部屋に案内する。悠、おまえの部屋はそのままにしてあるよ」
手を離した恭弥は、流星達に背を向けた。
「流星、明日と明後日は学校サボりなよ」
悠の言葉に、流星は目を剥く。
「ハァ！？　俺再来週テストだぜ。ただでさえ理科と数学と英語がヤベェのにこの上サボれと！？」
「多いしマンガばっか読んでる奴がよく言うね。でも、その点は大丈夫だよ」
悠はにっこり可愛い笑顔を見せた。
「流星がどれだけサボろうと成績悪かろうと留年させないよう、校長脅したから♪」

何とんでもねーことしてんだぁぁ！！

内心で絶叫し、遠ざかる小さな背中を見つめることしかできない流星であった。

この時、長い悲劇の幕開けが近いことを、まだ誰も気付けないでいた。

回りだした歯車<t;下>

晋羅高校の一角。普通より大きな体育館には、歓声がこだましていた。

そしてそのほとんどが……

「キャーー！！　椿くーん！！」

真隣の黄色い声に、流星は飛び上がった。

「す、凄ぇ……恭弥まだ出てきてねぇ、つうか戦ってねぇのに」

「恭兄モテるからね」

体育館の二階部分にある、一階を見渡せる観戦席に座った悠はクスッと笑った。

「顔よし、頭よし、運動神経よし、おまけに性格よし。これでモテなかったら詐欺でしょ」

「た、確かに……」

流星は大いに納得した。

椿家家宅で色々話したが、恭弥は口数は少ないものの、女子だけでなく男にもモテるような、さっぱりした性格の持ち主だった。

実際、応援には男子の姿もある。妙な雰囲気醸す奴もいるけど。

……しかしだ。

女子が圧倒的に多い。なぜか恭弥の名前が書かれたうちわを持ってる者もいる。

ここはアイドルのコンサート会場かっ、とツッコみたくなる。
出番を待つ恭弥は、遠目からでも不快そうな顔をしていた。
「ハハ、恭兄顔しかめてる。当然だけど」
「だよなー。しかしこれじゃ、敵だけじゃなくて味方も戦いにくいぜ……」
悠と一緒になって笑っていると、向こうの高校が一本取った。
「あーあ。副将負けちゃった。流星、耳塞いだ方がいいよ」
「は？」
流星が首を傾げていると、恭弥が面を被って立ち上がった。
いよいよか、と思って身を乗り出そうとしたその時。

『キャアアア

思わず手を引いた流星の目の前で、女子生徒の肌が変色していく。
すーっと広がるように黒くなり、露出した肌全てがどす黒くなった。そして。

ブシャッ

黒い肉片と生温い血が、流星の頬に飛んだ。
女生徒は、身体を破裂させて、血と肉をそこら中にまき散らした。
形を残した腕が、流星の爪先に当たる。
血の臭いと一緒に、何か別の臭いが漂ってきた。
腐敗した肉と卵を生ゴミと混ぜたような悪臭だ。
「鼻と口を塞いで。これは毒ガスだよ！！」
悠の必死の声で、無意識に言われた通りにした。
「な、何！？」
「人が、人が爆発したぁ！」
近くの人間が現状に気付いて騒ぎだした。
が、すぐすぐバタバタと倒れだした。
肌が黒くなっていく。流星は目を逸らして離れる。
幾つもの破裂音に、流星は目を固く閉じた。
「朱華、いるね」
「はい」
悠が呼びかけると、朱華がどこからともなく現れた。
「空気を浄化して。これ以上被害が広がる前に！」
「はい」
朱華が一礼すると、狐の尾と獣耳が現れた。

ポッポッポッポッ……

そこら中に青白い炎が浮かび上がった。
「うわ！？　って、熱く、ない？」

手元近くに炎が浮かんで驚き、手をひっこめた流星だが、自分が火傷してないことに気付いた。
「この炎は空気中の毒素は燃やすけど、人体には無害だから大丈夫だよ」
悠はそう言って、一階に声をかけようとした。
「恭に……キャッ」
下を覗き込もうとした悠が突然後ろに倒れかかった。
それより半瞬遅く、何かが飛んでくる。
後方の壁に突き刺さったそれを、流星は振り返った。
「!?　木?」
太い木の枝を見つめ、流星は眉をひそめる。
何でこんなのが……
「恭兄!?」
悠の悲鳴に近い声に、流星はそちらを向いた。
悠は再び下を覗き込んでいた。
彼女にならって下を見ると、見知らぬ男が恭弥の喉を掴んでいた。
「!　な、何だあのおっさんっ」
「あの人、確か剣道部の顧問だよっ。恭兄が入部する前からの……でも、何で!?」
悠の焦り声を聞いていた流星は、一階の惨状に息を飲んだ。
一階にいる人間で、恭弥の首を絞めている男以外に立っている者はいなかった。
皆喉を裂かれたり、腹を貫かれたりして血の海に例外無く沈んでいる。
「ククッ……もう我慢できねぇ」
男の声が聞こえてきた。
「き、さま……せ、んせいじゃな、いなっ」
男の手首を掴んだ恭弥が呻いた。
「まだしゃべれるか。……あぁそうだ。俺はこの『顔』の持ち主じゃない」

男は自分の頭頂に空いた左手をかけた。
ズルリ、とマスクを取った下にあった顔は、見覚えのある顔だった。
「あ、あいつ確か！」
流星は身を乗り出した。
「連続殺人事件犯人の高島竜介！　二十人殺して今も逃走中だってテレビで」
「あの男、生皮被ってたみたいだよ」
悠の言葉に、流星は「え？」と訊き返した。
「生皮って……あれマスクじゃねぇのか！？」
「遠目だけど多分そう。死体から頭部分の皮を全部剥いだんだ」
悠はなぜか冷静な声音で言った。
「顔の持ち主を一ヶ月前に殺しておまえの近くにいたのに、まったく気付かんとは、間抜けだな」
男――高島竜介はにやっと笑った。
「あの方は殺さず監視していろと言っていたが、まぁ今殺しても……」

「あの方とは誰だ？」

全然別の方から声がした。
驚いたのか、高島が振り返ると、恭弥が壁にもたれかかって腕を組んでいた。
「ど、どういうことだ！？　確かにおまえは俺に……！」
自分の腕に視線を戻した高島の目が、大きく見開かれた。
彼が掴んでいたのは、人の形をした呪符だったのだ。
「何でだ！？　さっきは確かに恭弥だったのにっ」
流星は思わず身を乗り出した。
「さっきの恭兄は身代わりだよ。本物はあっち」
悠は、余裕の表情で高島と対峙する恭弥を指差した。

「身代わりに気付かないとは、貴様、大した実力じゃないな」
「っ、黙れ！　その減らず口、閉ざしてやる！！」
高島は呪符を投げ捨て、両手を突き出した。

バキバキィッ

高島の腕が変質しだした。
腕が茶褐色に変わり、硬質になる。
数秒で枯木のようになった腕が、増殖するように恭弥へ伸びた。
腕は本物の木のように無数に枝分かれして恭弥に襲いかかる。
恭弥は慌てることなく、懐から何かを取り出した。
さっきと同じ、人型の呪符だ。それを前に投げる。

ズドドドドドドド！！

高島の腕から伸びた枝が、矢のように恭弥に向かっていく。
破壊された壁の土煙で、恭弥の姿が見えなくなった。
「はっは。生意気言うからだ！　見ろ、ボロ雑巾のように……！？」
高島の小さい目が、皿のように大きくなる。
土煙が晴れて見えたのは、無傷の恭弥と、彼を守るように空中に浮かぶ巨大な亀だった。
黒緑の甲羅、四肢の爪は、肉食獣のように鋭かった。

「な、何だ、あれ！？」
「式神だよ」
驚く流星の横で、悠は唇の端を持ち上げた。
「恭兄は式神使いなんだよ。それも凄腕のね。……まぁ」
悠はふ、と笑みを消し、頬杖をついた。
「自分の命を守るためなんだし、当然なんだけど」

「え？」
流星は恭弥から目を離し、悠の横顔を見つめた。
「自分を守るため？　妖魔を倒すためじゃなくてか？」
そう訊くと、ぞっとするほど底冷えした悠の目が、こちらに向けられた。
「流星は、人の業を知らないんだよ」
「ど、ゆう……？」
悠はそれ以上何も言わず、恭弥に目を戻していた。

高島は唯一変化していない顔を汗まみれにした。
「な、なぜだ……俺の攻撃は、コンクリートも貫くんだぞ！」
恭弥は狼狽する高島に冷徹な目を向けた。
「その程度の攻撃、僕の甲奕（コウエキ）には通用しない。諦めろ」
「っ……なめるな、餓鬼ぃ！！」
高島の腕が再び変形していく。
枝同士がくっつき、一本の槍のようになった。
「死ね！　おまえの身体を引き裂いて、内蔵貪り喰ってやるっ」
「接近戦なら殺れると思ったか？　愚かな……」
飛びかかる高島を冷たく見つめながら、恭弥はもう一枚呪符を取り出した。
「走れ、走嵐（ソウラン）」
言葉に反応したかのように、呪符が高島に向かって飛んだ。

ドンッ

呪符が突然巨大な狼になり、高島の腰に食らい付いた。
「な、がっ」
高島は狼を引き剥がそうともがくが叶わず、下半身を食いちぎられた。

「ひ、ぎゃあああ！　お、俺のあし、足があぁぁ」

胸が悪くなるような悲鳴に、流星は顔をひきつらせた。

「か、身体が真っ二つに！」

「あれくらいじゃ死なないよ、彼。どうやら半妖のようだし」

悠は残酷なほど無表情で言った。

「は、半妖……？」

「顔剥ぎさんの佐野和子やあの男みたいに、妖魔の力を手に入れた人間のこと。人でもなければ、妖魔でもない奴らのことだよ」

悠は二階の手すりを飛び越えた。

目を剥く流星だが、悠は空中で猫のように四回転し、一階に着地した。

「やっほ、恭兄。そいつどうするの？」

「悠か。半妖である以上、警察に突き出すわけにもいかない。が、はっきりさせなければならないことがある」

恭弥は、血まみれの床に這いつくばる高島を見下ろした。

腹から下を失い、血と内蔵を引きずりながらも逃げようとしている。

遠目で見ていた流星は、その凄惨な男の様を、背筋が凍る思いで見つめていた。

「なぜ僕を狙った？　僕を監視するよう、誰かに命令されていたようだが」

恭弥の言葉に、高島は何も言わなかった。

あるいは、喋れないのかもしれない。

半身を失ったのだ。当然だろう。

「……く、くく。あはははははは！」

高島は突然笑いだした。

ぞっとするほど、凶気に満ち溢れた笑い声だ。

「なぜ、だって？　わかりきってんだろ！？　人の平和のために生け贄になった、人柱が！！」
「――！！」
悠と恭弥の身体が、一瞬震えた。
「ひと、ばしら……？」
流星が眉をひそめた時だった。

ドスッ

何かが突き刺さる鈍い音が、体育館内に響いた。
「……が、は！？」
高島はびくり、と身体を大きく震わせた。
高島の背には、一本の矢が突き刺さっていた。
矢は、空中に霧散したかのように消えたが、変わりに、新たな人影が姿を現す。

「喋りすぎよ、高島」

一階の、外に通じる扉が開き、一人の女性が弓を携え入ってきた。
漆黒の長い髪を束ね、巫女装束の上に黒コートを羽織っている。
切れ長の瞳と整った顔立ちに、流星は見覚えがあった。
（あの人……前に街でぶつかった人か？）
流星は下を覗き込んだ。
「……嘘」
悠の呟く声が聞こえる。信じられない、という声音だった。
「何で……何で生きてるの？　葵姉！」
体育館に、悠の叫びがこだました。

運命の歯車は廻り始める。
その先にあるのは、悲劇か喜劇か。

第五話　Ｃｒｉｍｓｏｎ&ａｍｐｌｔ；上&ａｍｐｇｔ；

流星は手すりに掴まりながら一階に降りた。
着地しようとしたのだが、血で滑り、床に背中を打ち付けてしまう。
痛みより、服に付いた血の方が気になった。
しかし今はそれより、悠と恭弥だ。
二人は巫女装束の女性を見つめたまま、固まってしまっている。
「……葵姉、葵姉なんでしょ！？　生きてたの？」
悠のこんな必死な声を、流星は聞いたことがなかった。
なのに女性は、少しも表情を動かさなかった。
「葵？　誰、それは。私の名は月読よ」
「嘘！　貴女は、四年前に死んだ葵姉だよっ。だって、同じだよ？この感じは、葵姉と……」
悠は口をつぐんだ。
女性に、弓につがえられた矢を向けられたからだ。
「しつこいわよ、椿　悠。それ以上言うなら、この『鳴弦姫（メイゲンヒメ）』で貫くまでだ」
「あお……ね……」
悠が目を見開く。
女性の手に力が込められた。

ヒュンッ
バキィィッ

巨大な刀が、女性に降り下ろされた。

女性は紙一重でそれをよけ、刀の主を睨む。
刀を持っていたのは、巨躯を誇る鎧武者だった。
黒い堅牢な鎧兜を身にまとい、仮面のような顔を女性に向ける。
その隣に、恭弥が立った。
巨大亀の甲奕と、狼の走嵐が、彼の両脇を守っていた。
「式紙が三体……」
女性は視線を恭弥に向けた。
「普通は一度に一体が限度のはずだけど、三体も同時に操るとは、さすが人柱最強」
「……」
恭弥の顔が険しくなる。
口を開きかけた女性の足首を、地面に這いつくばる高島が唐突に掴んだ。
「つ、月読ぃぃ。てめ、裏切りやがったな……！」
「裏切り？　それはこっちのセリフだわ」
女性は高島を冷たく見下ろした。
「おまえ、椿　恭弥を殺そうとしたでしょう。命令違反は、あの方への背信行為。それが何を意味するか、解ってるわよね」
悠に向けられていた矢が、高島に向けられた。
「死ね、役立たず」

ドパッ

矢が高島の頭を貫いた。
矢が当たった瞬間、頭は爆発を起こしたように破裂する。
頭蓋が砕け、バラバラになった脳と血が床にばらまかれた。
流星はその残酷な最期に、言葉を失う。
「人を殺しすぎて、自分が殺される可能性を考えなかったようね」
女性は再度、恭弥を見た。
「黒鉄丸（クロガネマル）！」

恭弥は鋭い声を上げた。
鎧武者が刀を持ち上げる。
刀が横薙ぎに振られた。
女性は地面を蹴って、後ろに跳ぶ。
彼女が地面に降り立つと同時に、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。
「長居は無理のようね」
女性は顔を少ししかめると、矢を流星に向けた。
目にも止まらぬ速さで、矢が放たれる。
一秒もしないうちに、矢が眼前まで迫ってきた。

ガギィィィン！！

「！　悠っ」
矢と流星の間に割り込んだ悠は、矢を『剣姫』で真っ二つにした。
おそらく朱雀に渡されたであろうそれを下ろし、悠はきっ、と顔を上げる。

女性の姿は、もう無かった。

「……恭兄」
「わからない。気を取られてる間に、いなくな、て、た……」
ぐらっと恭弥の身体が傾いだ。
「恭兄！？」
膝を着いた恭弥に、悠は駆け寄ろうとした。
しかし白い手が伸びてきて、それを遮る。
「ご安心を、悠様。恭弥様は少々お疲れになられただけですわ」
「！　氷華……」

現れたのは、全身真っ白の美女だった。

髪も目も透けるような白で、ゆったりと着こなす着物も、紫がかった白だった。
悠に氷華と呼ばれた女性は、結われていない長い髪をなびかせて恭弥に近付いた。
「大丈夫ですか？　恭弥様」
「あぁ……ただの貧血だ」
恭弥は、眉間に手を当てながら答えた。
「音からして、パトカーと救急車だね」
まだ遠い音に耳をすませていた悠は、ぽそっと呟いた。
「警察には、私が事情を説明しとく。私の方が、警察に顔が効くから」
「あぁ。頼む」
恭弥は氷華に支えられながら立ち上がった。
返り血なのか、防具と胴着が赤く染まっている。
「……悠」
流星が声をかけると、悠はゆっくり振り返った。
「……ごめん。巻き込みたくなかったのに」
「え？」
「流星、後で話がある。ちゃんと聞いてね」
悠にじっと見つめられ、流星は頷くことしかできなかった。

――――

「……そんなことがあったのか」
高野次郎はため息をついた。
病院内であるため、声はひそめられている。
もっとも、この休息室にはその必要は無いのだが。
「椿……おまえとの付き合いはまだ浅いが、俺はこの一年で、十は老け込んだ気分だぞ」

「知らないよ、そんなこと」
悠はふい、と次郎から顔をそむけた。
「悠、おまえな」
妹の身勝手さに頭痛を覚えたのか、制服に着替えた恭弥は額を押さえた。
あきれた目で悠を睨み、恭弥は次郎に頭を下げる。
「すみません、高野さん」
「いや、慣れてるからいい。それより君は大丈夫なのか？」
「ただの貧血なので」
恭弥は淡く微笑んだ。
「しかし……妖偽教団か。厄介な敵を持ってるもんだな」
先程の説明を思い出したようで、次郎は顔を歪めた。
流星はというと、青冷めた顔で突っ立っていた。
そういう集団が本当に存在していたことに、ショックを受けたからである。

悠の話では、妖偽教団とは、自分の欲を満たすためだけに、己自身を妖魔にする者達の集団らしい。
金や地位や権力などを欲する者だけでなく、冗談抜きで世界滅亡を望む者もいるそうだ。
そして彼らは、自分の力を保つために人肉を喰らうのだという。
人の血肉を自分の体内に取り込まなければ、己の中の魔に侵食され、人格を失ってしまうそうだ。
そんな、明らかに人道から外れた人間がいるなんて、信じたくなかった。
悠が嘘でこんなことを言うはず無いということは、解っているが。
……しかし疑問も残る。
妖偽教団は、なぜ恭弥を狙ったのか。

恭弥のことを、高島は『人柱』と読んでいたが、その意味とは？
そして、月読と名乗ったあの女性は、何者なのだろうか。
悠は、彼女のことを葵と読んでいたが、本人は否定していた。
悠からは兄の話は聞いてるが、姉の話は聞いたこと無い。
それに、その姉は四年前に死んでいるようだし……何だか頭がこんがらがってきた。

知恵熱が出そうな流星に気付かず、悠は次郎を見上げて尋ねた。
「それで、死傷者は何人出たの？」
「死者が十二人、重傷者は二人。重傷者の方は、生死の境をさ迷っている」
「そう。……朱嶌」
悠は後ろの朱嶌に声をかけた。
「おそらくここの医者達じゃ彼らの傷は治せない。手を貸したげて」
「はい」
朱嶌は深く頭を下げ、その場から離れた。
「……氷華、いるな」
「はい。氷華は常に、恭弥様のお傍に」
いつの間にいたのか、氷華が恭弥の背後にたたずんでいた。
「おまえも手伝ってやれ。その方が早い」
「恭弥様のご命令ならば」
氷華は恭弥に微笑を向けると、朱嶌の後を追った。
「何でここの医者じゃ治せないんだ？」
次郎は不思議そうに尋ねた。
「妖魔や半妖が付けた傷は、ただの傷じゃない」
悠は淡々と答える。
「傷口から妖気が入り込んで、細胞を破壊してしまうんだ。退魔師は修行過程で耐性を身に付けるから大丈夫だけど、一般人はそうはいかないからね」
「なるほどな。……さて、俺は本庁に戻るとするか」

次郎はがしがしと頭をかいた。
「まったく。指名手配犯は死ぬわ、大量の死者は出るわ、おまえが関わるとロクなことが無いな」
「今更何言ってんの、高野刑事」
ふふん、と笑う悠に、次郎は再びため息。
「ハァ……じゃぁな」
次郎は疲れた顔で、その場を後にした。

「随分迷惑かけてるみたいだな」
恭弥は咎めの言葉を口にした。
「したくてかけてるわけじゃないよ。ね、流星。……って、ショートしちゃってる」
もはや脳の許容量を超えた流星は、立ったまま目を回していた。
「また器用な……」
ズレたところに感心する恭弥に、悠はこけかける。
「恭兄の反応ポイント、そこなの？　……まぁ、天然なのは知ってたけど」
「？　どういう意味だ？」
「解んなかったらいいから。流星ー、生き返ってー」
ぺしぺしと頬を叩かれ、流星は覚醒した。
「……うおっ！？」
近いところにある悠の顔に驚き、流星は後ろに下がる。
その拍子に自分で自分の足を踏み、後ろに倒れてしまった。
鈍い音を立てた頭に、激痛が走る。
「い、いってぇぇ」
「そりゃ痛いでしょ」
凄い音したもん、と言って、悠は流星の目の前にしゃがんだ。
「で、大丈夫？」
「……これが大丈夫に見えるかよ」

「うぅん。まったく」
あっさり首を振り、悠は手を差し出した。
その手を取ろうとした流星だが、手を引っ込め、自分で立ち上がる。
「……悠。教えてくれよ、一体妖偽教団ってどういう存在なんだ？人柱って？　葵って、誰なんだ？」
まくしたてるように尋ねる流星を、悠はじっと見つめていたが、すくっと立ち上がった。
「知りたい？」
「……あぁ」
流星がしっかり頷くと、悠はふ、と息を吐いて恭弥を見た。
「いいよね、恭兄」
「……後で父さんや刀弥兄さんに叱られても知らないぞ」
「解ってる」
悠は少し笑って、流星に向き直った。
「まず妖偽教団ね。奴らは平安初期にできた組織なの」
「……随分昔だな」
「まぁね。昔は名前も、組織のあり方も違ったみたいだけど。教団ってとこでもわかるように、彼らは宗教団体なの」
「ってことは、神様でも祀ってんのか」
流星は妖魔の姿をした神を想像した。
爪と牙を持ち、鱗まみれで火を吐く……
「神じゃないよ、奴らの祀ってるのは」
「そうなのか？」
流星は想像をぱぱっと消した。
「実はね、武器なんだよ」
「武器？」
「そう。でも、ただの武器じゃない」

悠は声をひそめた。周りに誰もいないのに、だ。
「名工と謳われた武器職人、綺羅。退魔武器専門と言われた彼だけど、一つだけ、退魔武器と対極になるものを作った」
「対極……？」
「そう。降魔武器と言ってね、人を殺すことでその魂を喰らい、力にする武器だよ」
悠は胸の前で腕を組んだ。
「どういうわけか一つだけ造ってね。銘は、『羽衣姫（ハゴロモヒメ）』」
「は、ごろも……」
「皮肉めいてるよね。魔性の武器の銘が、天女がまとう清らかな衣と同じ名とは」
悠は肩をすくめ、言葉を続けた。
「でも、『羽衣姫』は千年前に封印された。十人の人間の人生を犠牲にしてね」
「犠牲？」
「……『羽衣姫』の本体は封印できたが、力までは抑えられなかった」
ずっと押し黙っていた恭弥が、ぼそっと言った。
「そこで、十人の退魔師に『羽衣姫』の力を抑えるための呪（シュ）をかけた。以来、彼らの一族には必ず一人に」
恭弥は突然上の制服を脱ぎ、背中をこちらに向けた。
「――！！」
「この印が浮かび上がる」
恭弥の背中には、複雑な形をした黒い刺青のようなものがあった。黒い円を中心に、見たこともない記号のようなものと炎のような模様が、白い背中に刻まれている。
「僕を含む十人の人柱には、この印が背中にある」
「人柱って……恭弥……」
「人柱とは、印を持つ者の総称だ。『羽衣姫』の封印に携わった一族に一人。僕達が死ねば、あれの力は復活する」

「絶対に『羽衣姫』は復活させちゃいけない」
悠は眉間にしわを寄せた。
「千年前、『羽衣姫』は当時の日本人口の半数以上も殺した。今復活したら、少なくともその倍は死人出るよ」
「……」
流星は黙り込んだ。
ことの重大さを理解したからでなく、頭がついていかなくなってきたのである。
「……まぁ、おいおい解ってくるだろうけど。それより」
流星に理解させることにさじを投げ、悠は服を着直す恭弥の方を見た。
「恭兄に監視が付いてたとなると、最悪の事態を考えた方がいいね」
「あぁ。おそらく『羽衣姫』の本体は復活したと考えていいだろう」
頭を抱えていた流星は、その会話にハッと顔を上げた。
「それって、マズイんじゃねーのか？」
「あぁ。実は今、父さんと兄さんが別件で『羽衣姫』が封印されていたところに行ってるんだが」
恭弥は顔をしかめた。
「どうも……胸騒ぎがする」

――――

夜の深い森の中を二人の男が走り抜けていた。
その片割れである椿　刀弥は、前方を走る父の背に、切れ長の漆黒の目を向けた。
刀弥は少し長めの、癖のある黒髪をなびかせ、整った甘い顔立ちを引き締めている。
『羽衣姫』が封印されている村からの報告があったのは、つい昨日

のことだ。
妖偽教団の攻撃があった。救援が欲しい、と。
弟子に任せればよかったのだが、父が嫌な予感がするから自分が行くと言い出したのだ。
しかし、椿家当主が一人行動をするわけにはいかないので、刀弥も付き添ったのだ。

父、椿　奏司（ソウシ）は白髪混じりの短い黒髪、広くがっしりした肩幅をしていた。精悍な顔の表情は、後ろからでは解らない。
（って、んなこと考えてたら引き離されるな）
ハッと我に返り、刀弥はスピードを上げた。

数分ほどして、ようやく視界が開けた。
「――！？」
二人は眼下に広がった光景に、目を剥く。
『羽衣姫』を封印している村は、すでに無かった。

そこは、死臭漂う焼け野原だった。

「これは……！？」
刀弥は愕然として、近くの炭化した柱に手を付けた。
暗くて気付かなかったが、苔むしってる。
「……これ、ここ二、三日で焼けたわけじゃねーな」
周りを見渡してみても、煙らしきものは見えない。それどころか、死体の一つも無い。
死体はともかく、血の跡すら無いのは、明らかに不自然だ。
「おそらく一ヶ月……二ヶ月……いや、もっと経ってるかもしれない」
奏司は焼け野原に足を踏み入れた。
ジャリ、と小石混じりの土が音を立てる。僅かだが、雑草が生えていた。
「妙だ。使いが来たのは昨日だぞ。なのになぜ？」
刀弥は眉をひそめた。
「今まで連絡が途絶えたことも無いな。しかし……」
奏司は突然立ち止まり、人差し指で印を切る。
音叉のような音を立てて、空中から一本の槍が出現した。
紅色の柄に、広い刃は赤がかった銀色をしている。
奏司はそれを掴み、構えた。
「刀弥、気を付けなさい。……いるぞ」
「解ってるよ」
刀弥はポケットから手袋を取り出した。
黒革の、手の甲部分に青い宝玉の付いた手袋で、はめると二の腕辺りまで覆った。

「解除」
呟くように言うと、手袋の姿が変わった。
肩まで覆うようになり、材質も硬質な鎧のようになる。
数秒もしないうちに、右腕全体を覆う鎧手袋になった。
「俺は戦闘準備万端だぜ」
「そうか。あちらも態勢が整ったようだ」

ククク……ハハハ……

微かな笑い声が、二人の鼓膜を震わす。
前後左右から幾つもの気配が、二人を囲むように迫ってくる。
「来い、妖魔共」
刀弥の声が合図だったように――
幾つもの影が、二人に覆い被さった。

――――

銀の双眸が、はるか上空から地上を見下ろす。
「ふん。品も無くがっつきやがって」
熾堕は空中で鼻を鳴らした。
彼の背からは、黒い翼が生えている。それを時折はばたかせ、銀の美しい髪を風に晒す。
地上で炎が舞った。
あそこにいる妖魔や半妖共に、炎を操れる奴はいない。ということは。
「あれが椿家現当主、椿　奏司の退魔武器、『火尖槍（カセンソウ）』か。そして」
妖魔がまとまって数体吹っ飛んだ。
それをなした、遠目でも解るほど巨大な黒い手を操る青年を見つめ、熾堕はふむ、と唸る。

「あれが椿　刀弥。そして奴が操る『如意ノ手（ニョイノテ）』か。能力は書いて字の如し、だな」
すぅ、と微笑し、戦況を見つめる。
「今のところ妖魔側が劣勢か。だが」
左手に目をやり、熾堕は笑みをさっさと消した。
「星の運命には逆らえない。人である限り、さだめからは逃れられない」
瞳を閉じ、芝居がかった口調で、囁くように言う。
「古き星よ。おまえの光は、今日消える」
風が強くなった。

――――

「雑魚は引っ込んでろ！」
「がっ」
鋭い鉤爪のようになった退魔武器、『如意ノ手』を横に振ると、妖魔が一体血に沈んだ。
「大分減ったな」
刃に炎をまとわせた『火尖槍』を振り回していた奏司は呟いた。
戦い始めてまだ十分と経ってないが、既に半数以上の妖魔が地に伏していた。
何体か半妖もいたようだが、気にしていられない。
二人は常人レベルを超えた実力者だが、殺気を持つ相手に気を抜けば、殺られるのだ。
「なぁ。例の使者の奴、裏切り者じゃねーのか？」
刀弥は背中合わせになって尋ねると、奏司は「おそらく」と答えた。
「暗号も知ってたしな。しかしなぜ、ここが壊滅したことを隠していたのか、なぜその場で我々を襲わなかったのか……」

「余興よん♪」

突然響いた女の声に、二人はハッと顔を上げた。

「せっかくの劇だもの、殺陣（たて）には主だった役者が居なくちゃ、盛り上がらないでしょぉ？」

ふざけた、甘い口調なのに、刀弥は背筋が粟立つのを感じた。

「だ、誰だ！？」

勇気をかき立てるつもりで出した声も、無様に震えていた。

恐怖？　恐れているのかっ、俺は！？

刀弥は舌打ちをして構え直した。

「フフ……妾を封印した憎き退魔師の子孫とあいまみえる日が、ようやく来た……♪」

妖魔の群れが割れた。

「初めまして。椿の子達♪」

現れたのは、妙齢の美女だった。

漆黒の髪をくるぶしまで伸ばし、瞳は深淵のように深い黒をしている。パーツ一つ一つが丁寧に造られたかのような、日本人形のような顔をしていた。絶世の美女、と言ってもさしつかえないだろう。着ているのは、平安時代の貴族女性が着ていた十二単だ。色とりどりの柄が美しい。

「……何者だ、貴様は？」

奏司は槍を構え直しながら女性に尋ねた。

穏やかな口調だが、居住まいを正せるような凄みがある。実際妖魔が何匹か後ずさった。

しかし奏司の睨みに、女は何の反応も示さなかった。

口元に扇を当て、微笑しながら衝撃の一言を発する。

「妾は……羽衣姫」

「何……！？」

奏司の目が見開かれた。

「んなわけねぇだろ！」

刀弥は声を張り上げた。

「『羽衣姫』は武器だ。人じゃねぇっ」

刀弥の言葉に、女は声を上げて笑った。

「ホホホホ……人間の身体を乗っとるなんて、妾には造作もないことよん♪」

「何っ……」

「それにぃ、貴方達も知ってるでしょぉ？　姫シリーズの危なぁい性質をねん♪」

んふ、と含み笑いを浮かべる女に、刀弥は顔を歪めた。

「……なるほど。そういうことか」

奏司は静かな声で言った。

「しかし、一体いつ復活した？　女、いや、羽衣姫よ」

「四年前の冬よ。ちなみにこの身体は、この村の巫女のを借りたのぉ」

女は唇の端を持ち上げた。

「結界が張られてたから妾も出られなかったけど、この娘が来てホントよかったわ♪　あと、裏切り者もね」

まぁ妾が呼んだんだけど、と言ってクスクス笑う女――羽衣姫。

「ここを壊滅させた後、ここがまだ存在してるように偽ったのはおまえか？」

「ええ、そうよ♪　……さて、話はこれくらいかしらん？」

羽衣姫のまとう着物が変わっていった。

布地が薄くなり、裾が短くなる。色も黒に変わる。

ほんの数秒で、暑苦しい十二単から、装飾の付いた黒いレオター

ドのようなものに変化した。
「妾が外に出てすぐ行動を起こさなかったのは、外の知識を吸収するため」
赤い唇が、酷薄な笑みを刻んだ。
「ずっと、ずぅっと我慢してたのよ……」
羽衣姫の姿が消えた。

ハッと目を見張る刀弥の眼前に、拳が迫る。
『如意ノ手』で受け止めるも、衝撃と一緒に殴り飛ばされた。
「――っ！！」
少なくとも五メートルはぶっ飛ばされた。
背中が地面を削り、音を立てて瓦礫の山に突っ込む。
肺腑の中の酸素が、全部外に吐き出された気がした。
「刀弥！」
父の叫ぶ声が遠くから聞こえる。
「気絶してっ……たまっかよっ……」
頭を振り、なんとか立ち上がる。足がダメージで震えた。
「ふ、ふふ……あはは！　もう開放しちゃっていいのよねぇ！！
この殺人衝動をさぁ♪」
高笑いする羽衣姫に、奏司は刃先を向けた。
「燃えて鎮まれ！　悪しき意思よっ」
刃が炎に包まれ、その容量を増やしていく。
そして。

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォ！！

空気を焼く灼熱の炎が、羽衣姫に覆い被さった。
遠くからでも解るほどの温度変化に、刀弥の頬に汗が伝った。
我が父ながら恐ろしい……しかし、そう思えたのは一瞬だった。

「ほむら火かしらん？」

炎が引いた後に居たのは、無傷の羽衣姫だった。
服装に変化は無い。晒された白い肌には、火傷一つ無い。
「マジ、かよ……」
刀弥は呆然と立ち尽くしてしまった。
父の実力は、嫌というほど知ってる。
その父の力が及ばない敵が現れるなんて、考えたこと無かった。
これは現実か？
悪い夢じゃないのか？
こんな、こんなことって……

「絶望しているの？」

刀弥はびくりと身体を震わせた。
「当然よね。お父様の力でも妾は殺せないんだもの」
羽衣姫の慈愛の笑みに、しかし刀弥は背筋が逆撫でされたような悪寒に襲われた。
「……刀弥」
奏司の声に、刀弥は顔を上げた。
「刀弥、逃げろ」
「な……！」
目を見開く刀弥に、奏司は繰り返し同じ言葉を放つ。
「逃げろ、早く」
「お、親父置いていけるかよ！！」
「早くしろ！　これは当主命令だ」
初めて聞いた父の激した声に、刀弥は一瞬身を固めた。
しかしすぐ、唇を噛んで奏司に背を向ける。
「……生きてくれよ」

父の声に、刀弥は振り向きそうになりながら、全速力で走った。
「親父の馬鹿野郎」
森に入った刀弥は、足を止めず呟いた。
「お袋、姉貴の次は親父かよ……恭弥や悠に何て説明すりゃいいんだよっ……」

「……よく逃がしたな」
槍を構え直した奏司は穏やかに言った。
「妾が求めるのは、悲劇」
羽衣姫は魅力的な微笑を浮かべた。
「死ぬ者がいる一方で、生き残る者がいるからこそ、悲劇は成り立つ」
両手を広げ、芝居がかった仕草をする。
「悲劇に彩られた妾の完全復活。美しい劇になると思わない？」
「思わんな。少なくとも私は」
「あらん、残念♪」
さほど残念そうでもない羽衣姫は、両手を下ろした。
「もしかしてと思うけど……妾と相討ちを狙ってるのかしらん？」
「……」
「図星のようね♪」
ころころ笑う羽衣姫に対し、奏司は腰を低くした。
「今の妾は確かに力はほとんど無いけど、傷付けることは叶わないわよん？」
返答は咆哮で返した。
槍全体に炎をまとい、常人離れしたスピードで走る。
道を阻む妖魔達を炎で蹴散らし、羽衣姫のすぐ前まで迫る。
槍を振り上げ、首筋を狙った。
本体である着物を貫くことはできずとも、操られた身体なら、と思った攻撃だった。

あと数センチ、そう思った瞬間、奏司が見たのは、羽衣姫の微笑と――

ずぐっ……

「……がはっ」

奏司は血を吐き出した。

槍は、羽衣姫の首筋で止まっていた。

刃は白い肌に喰い込んでいるのに、斬り裂くどころか、血すら出てない。

奏司はぎぎっと、錆びた機械のように首を下に向けた。

自分の腹を貫く細腕を、残された力で掴む。

「だから言ったのにぃん♪」

腕をもの凄い力で掴まれてるにも関わらず、羽衣姫の表情は揺るがなかった。

「ホント、人間って愚かな生き物……自分が死ぬことなんて考えないんだから」

ズブッ……

「あ゛……！！」

「さようなら、椿のの♪」

心臓を貫くと、奏司は身体をビクリと震わせ、だらりと手を下に下ろした。

羽衣姫が両腕を抜くと、奏司の身体は土の中に倒れ込む。

「羽衣姫様……」

妖魔がじりじりと、奏司の死体に近付くのを見て、羽衣姫は血で濡れた手を振った。

とたん、十数体の妖魔がそれに被さる。

肉がちぎれる音と血をすする音を聞きながら、羽衣姫は上空に目

を向けた。
「降りてきたらどぉ？　熾堕ちゃん♪」
そう言うと、銀髪の美丈夫が翼をはばたかせて地面に降り立った。
「お気付きになられてましたか」
「まぁねん♪」
羽衣姫はくすくす笑った。
「月読ちゃん……今回のこと知ったら、どういう顔するかしらねぇん？」
ちろりと目線を投げられ、熾堕は肩をすくめた。
「何とも思わないんじゃないですか？　彼女は過去の記憶を失ってますから」
「フフ……それもそうね♪」
羽衣姫は紅い唇で弧を描いた。
「ハァ……血、紅いあかぁい血……。退魔師の、血……」
自分の両手を見つめ、羽衣姫は色っぽい吐息をついた。
「もっと、もっと……紅く、紅く紅く……空も、大地も、全部ぜぇんぶ紅に……フフ」
こらえきれない、というように、羽衣姫は笑った。
狂ったように、喉を逸らして、大声で。

「アハ、ハハハハハハハハハハハハハハ！　フハハハハハ、ア、ハハハハ、フフフフ、ハハ、アハ、ハ、ハハハハハ、アハハハハ、ハハハハ、アハハハハハハハハハハハハハ！！」

笑い声が響く闇空に浮かぶのは、無数の星と、血のように紅い月。
「星が、動く」
熾堕はその空を見上げ、呟く。
しかしその呟きは、笑い声の中にかき消された。

椿家宅の居間には、重苦しい空気が漂っていた。
畳の上に座り込みながら、流星は横に腰を下ろす悠を見る。
うつむき、初めて見る弱々しい表情は、あまりにも痛々しい。
その顔にさえときめいてしまう自分に、嫌気がさした。
「……駄目だ。やはり繋がらない」
黒い携帯に耳を押し当てている恭弥は小さく呻いた。
「刀兄……仕事とか大学行ってるときは、携帯の電源切ってるからね。父さんに至っては、携帯持ってないし」
ぼそっと呟かれた悠の言葉に、恭弥も「あぁ」と返す。
しばらくの沈黙。それを破ったのは恭弥だった。
「！　繋がった」
「……！」
「もしもし、兄さん？」
安堵した顔で恭弥は携帯の向こうにいる兄に話かけてた。
最初はほっとした顔をしていた恭弥だったが、じわじわと、端正な顔に驚愕が広がていく。
「それは……でも、確かなのか？　……うん、解った」
恭弥は通話を切ると、息をついた。
「悠」
「……何？」
悠が僅かに身を乗り出すと、恭弥は唇を湿らせて、言った。
「父さんが、死んだ」

悠の肩が震えた。
瞳は光を失い、顔色は青くなる。
やがてうつむき、絞り出すように呟いた。
「そんな気、してた」
悠は膝を抱えた。
「恭兄の予感、よく当たるからね。特に悪い方は」
「ゆ……」
「触らないで」
手を伸ばしかけた流星は、拒絶の言葉に固まった。
「部屋、戻る。もう眠い」
悠は立ち上がって、居間を出た。
「悠……」
「一人にしてやってくれ」
恭弥はジーンズのズボンのポケットに携帯を入れて言った。
「誰かがいたら、あの娘は泣けない」
「え……」
「強い人間は、強くあろうとする人間は、人に弱みを見せない」
恭弥は机の上にある湯飲みを手に取り、すっかり冷めた緑茶をすすった。
「だから、一人じゃないと、あの娘は泣けないんだ。強いから、強くあろうとするから、な」
「……恭弥は？」
顔を上げ、問いかけると、恭弥は困ったように笑った。
「僕は、涙を枯らしてな。泣かない、というより、泣けないんだ」
「強いから、じゃなくて？」
「……僕は弱いよ」
恭弥は微笑を、哀しげなものに変えた。
訊いてはいけないことだったか。流星は少し慌てる。
それに気付いた恭弥が「気にするな」と言ったので、結局口を閉じたが。

「あと、父さんが死んだ理由だが……」
言いかけた恭弥は言葉を切った。
「やはり、悠がいる時にしよう。妖偽教団も関わってるし」
「あ、うん。俺、あんま関係無いもんな」
「え、何で？」
「は？」
きょとんとした恭弥を、流星は見返した。
「いや、だから俺関係無ぇし」
「だが、君は悠のところでバイトしてるんだろう」
「いや、してるよ？　してるけど、俺退魔師じゃ……」
「それは解っている。だが、悠と一緒にいる以上、無関係ではいられないだろう？」
「……あ」
そうだった。
悠には、関係大アリだった。
「あ〝ー、そうだった！　俺のアホッ。悠と一緒にいてたら、巻き込まれる可能性大じゃん。どうしよー！　バイト辞めるか？　でも、うぅ……」
頭を抱えて悩んでいる流星を、恭弥は面白いものを見るように観察する。
それに気付いた流星は、慌てて話題を変えた。
「そういえばまだ訊いてなかったよなっ」
首を傾げる恭弥に、流星は尋ねた。
「葵って、誰なんだ？」
恭弥の表情が硬化した。
しかしやがて息をつくと、静かな声で話始める。
「葵は……椿　葵は、僕らの姉だった人だ」
「だった？」
「……葵姉さんは、四年前に亡くなった」
「え……！？」

「夫と一緒にある山に巣食う妖魔を狩りに行って、そいつに……」
恭弥は言葉を詰まらせた。
先の言葉は容易に想像できる。
「何か……ごめん」
「何で謝る。事実だからな。それに過ぎたことだ。……いや」
ここで恭弥は顔をしかめた。
「過ぎたことだった、と言うべきか」
言い直した恭弥に、流星も眉をひそめる。
「……あの女の人、何者だろうな。その、お姉さんに似てたみたいだけど」
「解らない。ただの他人の空似なのか、それとも……。どちらにせよ、悠は相当キツいだろうな」
恭弥は拳を口元に当てて考えるような素振りをした。
「葵姉さんに一番なついてたの、悠だからな」

――――

ベッドに寝転ぶと、自然とまぶたが落ちた。
しかし、頭はさえていて、眠れない。
「父さんが……死んだ」
口の中で、繰り返す。
悠はふ、と息をついた。
わけが解らない。
死んでいたはずの者が生きていて、生きていた人間が死んで……
「葵姉……」
浮かんだのは、優しかった姉の姿だった。
椿　葵。
椿家の長子であり、悠の腹違いの姉だった。
しかし四年前、妖魔と戦い、命を落とした。共に戦った夫と共に。
まだ二十三歳だった。伴侶であり、幼馴染みだった雪宮静流（ユキミヤシズル）も同

い年だった。
十一歳だった悠は、実感がわかず、姉の死に泣けなかった。
そして今、父の死に対しては。
「……最悪の誕生日になりそう」
もう一度目を開けると、夜の暗闇に染まった自室が広がった。
白を基調にした家具の中で、木の茶色が映える部屋。一年前、家を出た時と変わらない、部屋。
この空間は変わらないのに、自分は、周りは変わっていく。
止められない。止まることなど無い。
やがて、つうぅ、と頬に涙が伝う。
悠は涙を服の袖で拭い、起き上がった。
「何の用？　朱嵐」
部屋の一角に、朱嵐がすぅ、と現れた。
「申しわけありません。お邪魔をしました」
「いい。それで、用件は？」
「はい」
朱嵐は一礼して、重苦しく言った。
「桐生（キリユウ）家が攻撃されました」
「！　何だって」
悠はベッドから飛び下りた。
「それで、人柱はどうなったの？」
「……殺されたようです」
「そんな……」
呆然とした悠だが、それは一瞬のことで、すぐさま別の質問をする。
「桐生家の姫持ちはどうなったの？」
「桐生　日影（ヒカゲ）様と家鳴雷雲（ヤナリライウン）様はご無事です。『桧扇姫（ヒオウギヒメ）』も『卯槌姫（ウヅチヒメ）』も、お二方が所持しております」
「そう……よかった」
友人の生存を聞き、悠は胸を撫で下ろした。

「日影達はこっちに向かってるの？」
「おそらく。迎えを送りますか？」
「私が直接行く。今から出よう」
悠は壁に設置されたハンガーから白いパーカーを取って羽織った。

「！　悠、出かけんのか？」
廊下を歩いていた流星は、小走りの悠と朱華を見て声をかけた。
「友達が大変なの。助けに行かなきゃ」
「！　おま……友達いたのか！？」

腹に一発入れられた。

「失礼だよ、君」
「ゲホッ……だって意外過ぎ……あ、スミマセン、斬らないでください」
刀を振り上げた悠を見て、流星はへこへこした。
俺って立場弱いなー、と今更ながら泣けてくる。
「ふんっ。……そうだ。流星も来て」
「……は？」
流星は悠が言ってる意味が解らず、首を傾げた。
「朱華、あれを」
「はい」
朱華はさっと紅い棒を差し出した。
いや、棒ではない。小刀だ。
紅に金の装飾が付いた、美しい脇差だった。
「これ、『煌炎（コウエン）』っていうの。私が昔使ってたんだ」
「悠が……」
「で、あげる」
「あ、ありが……はい！？」

手の上に乗せられた小刀を見て、流星は目を大皿並に大きくした。
「ほら、行くよ」
「ちょ、待て待て！　俺、空手はできるけど、武器使うのはできねぇってっ」
「そんなの関係無いよ。行こう」
「どうしろっつうんだよ、これ！　おぉい！？」
流星の絶叫は、悠にも朱嶌にも無視されたのだった。

――――

「僕はいつまで生きられると思う？」
そう訊くと、電話の向こうの刀弥は一瞬言葉を失ったようだった。
庭の奥に建てられた倉にやってきた恭弥は、鍵を開けて中に入った。
『いきなり何言ってんだ？　おまえを死なせるわけねぇだろ！？』
「死なない生き物はいないよ、兄さん」
恭弥は入口付近で止まったまま言った。
「……兄さん。僕は人柱だ。奴らは必ず、僕を狙うだろう」
『……あぁ』
「だが僕を狙うのは、おそらく最後のはずだ」
『？　どういうことだ』
刀弥不思議そうな声に、恭弥は自分の考えを口にした。
「兄さんの話を聞くと、羽衣姫はこの戦いを劇として見ている」
『あぁ』
「そういう奴は、更に戦いを盛り上げようとするだろう。いわゆる愉快犯だ。なら、人柱最強といわれる僕は、最後になるはずだ」
『……なるほど。弱い者を倒していき、最後に最強を倒す、か。ＲＰＧみたいだな』
「奴にとっては実際そうだろう。人柱を殺すたびに、封印は解けて

いくんだからな」
だが、こちらもただでは殺されない。
恭弥は携帯を握り締めた。

この方法を取れば、僕は……

だが、もしまた羽衣姫を封印しても、同じことを繰り返すだけだ。
(他の人柱達に恨まれるだろうか。だが、これ以上の悲劇を招かないためにも)
「兄さん」
向こうにいる兄に声をかけると、『何だ?』と訊き返してくる。
恭弥は倉の入口近くに積まれた本を一冊手に取って言った。
「結界と封印の共通点、知ってる?」

第六話　血塗られた夜更けに<上>

今から四年前、自分を呼ぶ声に、少女は足を進めた。
村人に近づいてはいけないと言われた祠の前に来て、ようやく我に返る。
しかし足は止めない。どんどん進む。
祠の中に入り、薄暗い奥へ足を向ける。

『おいで。妾には、おまえが必要だ』

頭の中で響く声は甘く、限りなく甘く……ゆえに、少女はその毒に気付けなかった。
『妾の助けに。その身体を、妾に』
やがて祠の一番奥まで辿り着く。
注連縄が張られた石の台の上に、大きな薄い木箱があった。
少女はその箱を手にとる。
『早く、早く妾を自由に！』
「じゆう……自由を。そして」
すでに半分以上、意識を乗っ取られた状態にあることを、少女は気付けなかった。
蓋を手に取った時には、もはや少女の自我は崩壊していた。

『この世に悲劇を！』
「この世に悲劇を！」

禁断の箱が、開かれた。

―――

目が霞む。さすがにダメージは大きいか。
桐生　日影は、路地裏に座り込んだ。
ショートの黒髪をかき上げ、首筋に手を当てる。
汗ばんだ手が、小刻みに震えていた。
「私ともあろう者が……ぐうっ、不意打ち喰らうなんてね」
日影は手を脇腹に戻した。脇腹の傷口から出る血が、服ににじんでいる。
傷自体は浅いが、問題は血の量だ。
（あの妖魔……爪に毒があったのね。血が止まらない）
傷口がぴりぴり痛む。早く治療しなければ、危ないかもしれない。
「こんな時に流亜（ルア）達とはぐれるなんて……ホント最悪」
ため息をついていると、スカートのポケットの中の携帯が振動しだした。
通話ボタンを押すと、懐かしい声が聞こえてきた。
『もしもし、日影？』
「！　悠？　悠ねっ」
親友の声を聞いて、日影の緊張が少し緩んだ。
『そうだよ。元気？』
「正直……元気とは言えないかな。貧血起こしそうなの」
『！　怪我してるんだね。今どこ？』
「桐生家のある山のふもとの町よ。流亜達も多分無事」
傷が本格的にズキズキしてきた。
マジで死ぬかな、これ……日影は笑いそうになった。
人間、ピンチになるとかえって笑えるらしい。
『流亜以外には、家鳴　雷雲だね』
「その口振り、知ってるのね。私達が妖偽教団に襲われたこと。ええ、あと風馬が。人柱は、羽衣姫と名乗る女に殺されたわ」

『朱華から聞いてる。とにかく、今からそっち行くから、動かないで』
その言葉に、日影は返事ができなかった。
近付いてくる気配を感じたからだ。
「……ごめん、悠。一回切る」
『解った。すぐ行くから、それまで持ちこたえてよ』
「ええ」
ピ、と電子音を上げて、通話が切れた。
「……来るなら来なさい、妖魔共」
路地の奥、数十人の人影が現れる。
皆、服がボロボロで、肌が灰色に変色し、崩れている。中には、骨が剥き出しの者も居た。
(亡者か……五十はいるかな)
日影は上着の内ポケットから黒い扇子を取り出した。
広げると、黒地に美しい桜吹雪が描かれていた。
「我が『桧扇姫』の舞いに、倒れ伏せ」
日影は走り出した。

――――

携帯を閉じた悠は、車を運転している男に目を向けた。
「急いで。あまりゆっくりできないから」
「はい」
男がアクセルを踏むと、車はスピードを一気に加速させた。
一応舗装された道なのだが、スピードがスピードなので、揺れる揺れる。
なんせ……
「……俺ら、スピード違反で捕まんねぇか？　これ、軽く二百キロ超えてるよな」
「大丈夫。検問があったら突っ切らせるから」

「全然大丈夫じゃねぇよ、それ！」
流星は後部座席で叫んだ。
朱嶌は、我介さず顔を窓の外に向けている。
「またおじさんに迷惑かけんだろ！？　おじさん前に白髪増えたっつってたぞ！」
「年のせいでしょ」
「どう考えても心労だろうがっ」
ぎゃんぎゃん喚く流星の声を聞かないようにか、悠は両耳を塞く。
なおも叫ぼうとした流星だが、後は続かなかった。

キキィィィィ！！

高いスキール音と同時に、三人はバランスを崩した。
悠と朱嶌はシートに掴まって持ちこたえたが、流星は前の運転席に顔面をぶつける。
「……って～。何なんだよっ」
流星は鼻をさすった。
「どうしたの？」
悠が前に乗り出した。
「悠様、人が……」
「人？」
悠は男が指差す方を見た。
流星も、彼女の横から前方の窓を覗き込む。

家の光も皆無の道。そこに立つ、車に照らされたそいつを、流星は見た。

長い白銀の髪、黒衣をまとった細い身体、うつむき気味の顔は中性的で、見ただけでは男か女か解らないような美貌だった。
身体付きでかろうじて男と解るが、コートか何かを着ていたら、

見分けがつかなかったろう。
「あいつは……！」
悠は男を見たとたん、顔色を変えて車から降りた。
「……貴方、西野紗矢の言ってた銀髪の男だね」
「ほぉ。既に知っていたか」
男はニヤッと笑った。
声も男か女か判別できない。本当に男か疑わしくなってきた。
「なら名乗っておこうか。俺の名は熾堕。妖偽教団の幹部だ」
「へぇ……。外道の集まりにも、幹部とかいるんだ」
悠は不敵な笑みを浮かべた。
「朱華、『剣姫』を」
「はい」
朱華は後部座席の下に置かれた『剣姫』を掴み、悠のところまで行った。
「どうぞ、悠様」
「ありがとう。先に行っててくれる？　私も後から行くから」
「はい」
朱華は悠に一礼すると、車に戻ってきた。
「車を出してください」
「！　朱華、何言ってんだよっ。悠は！？」
「後で来られるそうです」
ドアを閉めた朱華はきっぱり言った。
「早く車を」
「は、はい」
「なぁ！？　ちょ、おい……どわっ」
車が再び動き出したので、流星は再びバランスを崩した。
それでもなんとか立ち上がり、窓を開けて悠に怒鳴る。
「おまえ、こんなとこで戦う気かよ！？　早く友達のとこ行かなきゃいけねーんじゃっ」
「だから日影のとこには、流星達だけで行って」

悠はうるさそうに顔をしかめてひらひらと手を振った。
「幹部ってことはそいつ、強いんだろ!?　一人じゃ無理だってっ」
「……聞き捨てならないね」
悠は振り返って、妖艶な笑みを浮かべた。
「私を誰だと思ってるの？　こんなとこでやられるほど、ヤワじゃない」
その笑みに、流星は見とれてしまった。
朱華に引き戻され、再び車が動き出したので、そう長く見られなかったが。
「あ、あいつ……餓鬼のくせして……」
どぎまぎしながらシートに座り込む流星。
「あ〝ーくそっ。何だこの負けた感は！」
「流星様は精神年齢が低いのですから、しかたがありませんわ」
「それ慰めてんの!?」
流星はまだ喚きかけたが、手に当たった小刀に気付いて、ハッとした。
紅色の小刀。なぜ渡されたのか、まったく解らない。
「俺にどーしろっつうんだよ、クソッ」
流星は理解できず、前髪を握り締めた。

悠は鞘から刀を抜いた。
「この期に及んで、戦わないとか言わないでよ」
「言わないさ。勿論な」
熾堕は腰の短剣を抜いた。
それで戦うのかと思いきや、熾堕はそれで自分の手を傷付けた。
ジワ、とにじむ血が、白い肌に映える。
「契約にもとづき、我が手に剣を」
血のしずくが、ポタリとコンクリートの地面に落ちた。

とたん、地面に印が現れた。

二重の円の中に、五芒星と、悠も見たことが無い文字が描かれている。

悠が見つめる中、五芒星の中心からズズッと剣が突き出てきた。

柄も鍔も刃も、全て銀色だ。飾りは無いが、かえってその方が流麗に思えた。

護拳の付いた、レイピアのような剣を掴み、熾堕は構えた。

「ようやく見れるな……おまえの実力を」

「私の実力を見れるか否かは、貴方の実力次第だよ」

互いにその言葉を最後に……

ガギィィィン！！

刃が、音を立てて交わった。

――――

火がはぜる音が聞こえる。

「羽衣姫様」

月読が声をかけると、羽衣姫はくるりと振り返った。

黒の薄い布地の、水着のような服になっている。

「桐生家の鎮圧、終了いたしました」

「そのようねん♪」

羽衣姫は笑顔を見せた。

「ん～、もう壊すとこ無いわねぇ。いっそのこと、この山全部焼こうかしらん？　……あらん？」

誰かが羽衣姫の足首を掴んだ。

目をやると、生き残りの退魔師が顔を血だらけにしながら羽衣姫を睨み付けていた。

「ぐ……化物、めぇ……」
「……汚ならしい」

グシャッ

羽衣姫は退魔師の頭を踏み潰した。
頭蓋骨が砕け、血が吹き出す。脳か肉片かわからない紅い塊が散った。
「……そう言えば」
月読はそれを見ないようにして羽衣姫に尋ねた。
「熾堕の姿が見えませんが」
「あぁ熾堕ちゃんね。あの子はいつものごとく、自由行動よ♪」
「また、ですか」
月読は嘆息した。
「……羽衣姫様。あの男は、一体何者なのです？」
月読の質問に、羽衣姫は首を傾げた。
「あれは人の気配も、妖魔の気配も持っていません。人でもなく、妖魔でもない。熾堕とは、一体どういう存在なのでしょう」
「……さぁねん」
羽衣姫はつい、と肩をすくめた。
「妾にも解らないわ。ただあの子は、妾に会った時、言ったのよん」
羽衣姫は、表情をふっと消した。
「星の行く末を見たいってね」
「星……？　星見のことでしょうか」
月読は、熾堕が星を見て人の生き筋を占う力を持っていることを知っている。そのことかと思ったのだが。
「妾もそう思ったけど、違うみたいよん♪　ま、いずれにせよ……あれはあくまで、妾の駒」
羽衣姫は歩き出した。
「せいぜい盤上で舞うがいいわ♪」

羽衣姫の高笑いが響き渡る。
頭を下げながらそれを聞いていた月読は、羽衣姫の見えないように、拳を握った。

血塗られた夜更けに<中>

熾堕の剣が、悠の首筋を襲う。
悠は身を沈めてそれをよけ、刀を突き出した。
喉を狙った一撃が当たるより早く、熾堕は後ろに身を投げた。
悠が刀を引いている間に、熾堕はバク転で間合いを取る。
立ち上がった熾堕は、人差し指と中指で印を切った。

バリバリッ

天空から雷撃が落ちてくる。
全てを紙一重でよけつつ、悠は妙なことに気付いた。
なぜ、誰も起きてこない？
これだけの音だ。数人一般人が起き出てもいいはずなのに。

「考えごとしてる場合か？」

ハッとした時には、白銀の刃が目前に迫ってきた。
悠は刀を持ち上げ、刃を受け止める。
「……っく」
腕に鈍い衝撃を感じたと思った瞬間、靴底を滑らせて、後ろに弾かれた。
（……この男、強い）
悠は目を細めた。
「……ふふ」
（本当に、強い）

急に笑いだした悠を不思議に思ったのか、熾堕は銀の瞳を瞬かせた。
「……変な奴。何で笑うかな」
「ふふ、悪いね。ところで」
笑いを少しひっこめ、悠は首を傾げた。
「貴方、この辺り一帯に術をかけたの？　いくらなんでも静かすぎるよ」
「お、気付いたか」
熾堕はクスッ、と笑った。
いたずらが成功した時の子供のような笑みで、影が見当たらない。
「この辺りの人間全員を俺の力で仮死状態にした。害は無いから安心しろ」
「……妙な男だね。貴方」
悠は刀を下ろした。
「貴方の属してる妖偽教団は、人殺しもいとわない集団だ。なのになぜ？」
「人殺しは好きじゃない。むしろ嫌いだ」
「なら、なぜ？」
「……星のままに生きたから、とだけ言っておこう。今はな」
熾堕はすぅ、と微笑んだ。
「そんなわけで、俺は教団内じゃかなり浮いた存在なわけだが」
チャキ、と剣を構える熾堕。笑みの種類は、変わっていた。
「幹部の中じゃ、最強だと自負している」
「ふぅん。じゃ、狩りがいあるね」
悠は笑みを深くした。
「俺も一つ訊いていいか？」
熾堕の言葉に、悠は彼を見返した。
「おまえ、その刀の『封印』、解かないのか？」
「……知ってるんだ」
悠は感心してへぇ、と声を上げた。

「解かない、というより、解けない。認めたくないけど、私の力じゃ抑えられないからね」
肩をすくめ、刀を構え直す。
「でも、必要無いよ。私は充分強いからね」
「……慢心は、敗北を招くぞ」
二人が再び刃を交えようとした時――

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ

かまいたちが次々と熾堕に襲いかかった。
突然の攻撃に熾堕は避けられず、全身を斬り裂かれる。
「このかまいたち……」
悠はくるっと振り返った。
「どうして手を出したの？　燐」
「僕としては、助けたつもりなんですけど」
制服の水色のブレザー姿の燐は、頬をかいた。
「だいたい何で制服なの？　もう深夜だよ」
「家に帰ってすぐ着替えず寝てしまって……起きたら遠くから戦闘音がしたものですから」
「相変わらず耳いいよね」
悠はハァ、とため息をついて熾堕を見た。
熾堕は倒れて動かない。地面に血の池が広がっていた。
一応生きてはいるようで、微かに息遣いが聞こえる。
「ともあれ、とどめは刺しとかなきゃね」
「待ってください、悠」
燐が慌てて止めに入った。
「彼は、妖魔では……」
「ない、ね。でも、人間でもない」
悠は刀を持ち上げた。
「妙な気配だ。人間のものでも、妖気でもない」

切っ先を心臓に向けても、反応は無い。出血のショックで気絶しているのか。
「でも彼は、妖偽教団の幹部だよ。敵の戦力は」
悠は刀を垂直にして、振り上げた。
「早々に削ぐべきでしょ」

ドスッ

「……！！」
「……！？」
二人は目を見開いた。
「なっ……いない！？」
刀を突き立てた地面に、熾堕の姿は無かった。それどころか、血の跡も無い。
「！　身代わりですかっ」
燐は身構えた。
悠も刀を構えるが、すぐ下ろす。
殺気は感じられない。もしすぐ近くに居たとしても、戦う気は無いんだろう。
「……つまんない」
悠は頬を膨らませた。
いつ身代わりを用意したんだろう。
血まみれになった時か、その前か、または最初からか。
どちらにせよ、気に入らないことに変わりはない。
悠はムスッとしたまま、鞘を取りに行った。
「ところで悠、何でこんなところにいたんですか？」
刀を収めていると、燐に尋ねられた。
「日影のとこに行く途中だったんだよ」
「日景さんのところへ？　こんな夜中に？　……！　まさか」
「そのまさか。君も来る？」

「勿論ですよ」
燐は頷いて、ふと、表情を陰らせた。
「本格的に動き出しましたね、奴ら」
走り出した悠は、その言葉に無言だった。
「恭弥さんは、今どこに？」
「本家だよ。人柱が、そうそう出てくるわけないでしょ」
悠はそう返して腕時計を見た。
もう一時だ。日付が変わってる。
「出だしから最悪の誕生日……」
悠はぼそりと呟いた。
小さく言ったつもりだったが、燐にはばっちり聞こえたらしい。
「確かにいいとは言い難いですね……」
「まぁね」
悠はスピードを上げた。
父さんが死んだ、と言ったら、燐はどんな顔をするだろうか。
驚く？　それとも嘆くのだろうか。
……いや、後者は無いだろう。少なくとも表面上では。
（泣く暇があるなら、戦わなきゃ）

怒りで刃を振るうのではない。
憎悪で敵を斬るのではない。

己が戦うのは、信念と守るべきものを守るため。
怒りも憎悪も、刃を鈍らせるだけだ。
（でないと……そう思わないと、抑えられない）
悠は拳を痛いほど握り締めた。
（抑えないと、飲み込まれる）

三年前の、あの日のように。

熾堕は、『分身』人形の消滅を上空で確認して、そっと息を吐いた。
久しぶりに使ったからか、少し疲れた。
「……封印は、まだ解けてないのか」
己の唇に指をそえ、考えることに意識を集中する。
姫シリーズは皆、封印をほどこされている。
それは『彼女』達の性質ゆえだ。
使用者はその封印を『部分解除』して、姫シリーズの力を使うのだ。
しかし悠の口振りから察するに、彼女はそれもままならないようだ。
だが、それは当然かもしれない。
『剣姫』は姫シリーズトップクラスの攻撃力を誇っている。
その反面我が強く、使用者として選ばれた者は、ここ数十年でも一人もいない。
いや、いなかったと言うべきか。
封印されているとはいえ、持った者を狂気へ導く刀を操る少女。
彼女なら、あるいは。
「……とはいえ、星が瞬くのはまだ先か」
熾堕は黒翼をはばたかせ、その場を後にした。

夜は、まだ明けない。

――――

車が停まった。
「この辺りのはずです」
車から降りた朱華は、周りを見渡した。
商店街だ。当たり前だが、全部の店が閉まってる。

流星は、人一人いない商店街に、寒気を覚えた。
「その、桐生　日影って人……もう移動してるんじゃないか？」
「そんなはずは……」
朱雀が言いかけた時、とんでもない音量で破壊音が響き渡った。

ドガアアアアアアアアアアアア！！

店が一つ、跡形もなく消し飛んだ。店主が絶叫するだろうなと流星は反射的に思った。
で、それを成したのは、いきなり飛んできた巨大な火の玉だった。
「ハァ、ハァ……しつこいわよ、死体共！　……て、あら？」
火球から発射された方向から、少女が一人姿を現した。
ショートカットの黒髪、同じく黒の、少しつり上がった目、顔立ちを見れば、目の覚めるような美人だった。
歳は十五、六ぐらいか。もしかしたら自分と同い年かもしれない。
その少女、朱雀を視界に収めたとたん、あっ、と声を上げた。
「誰かと思ったら朱雀じゃない！　よかった」
瓦礫に乗り上げ、ほっと息をつく少女。
赤チェックのミニスカートをひるがえし、なぜか朱雀に抱き付く。
朱雀の顔が、少女の豊満な胸にうずめられた。
……男としては、羨ましい光景である。
「もー心細くって……来てくれてよかった！　……ってあつつ」
少女は突然朱雀から離れ、脇腹を押さえた。
黒いシャツだったため気付かなかったが、血がと服ににじんでいる。
「お、おい、大丈夫か？」
「ええ……って、どなた？」
少女はきょとんと流星を見上げた。
「俺、華凰院　流星って言うんだ。悠のとこでバイトしてる。あんたが桐生　日影なのか？」

「ええ、まぁ。……華凰院って、貴方まさか」

ドガァァァァァァァァァァン！！

……先程より凄い爆発が起きた。

「もー、また来たぁ！」

少女――日影は叫んだ。

壁に穴が空いたブティック店の中から、十数人の人間が出てくる。

いや……あれは人か？

肌は灰色に変色し、ドロドロに崩れている。目は片方垂れ下がっていたり、骨が剥き出しの奴もいた。

よくゲームに出てくる、ゾンビのリアル版に流星はうぇぇ、となった。

ゲームなら幾ら出てきても平気だが、現実となると、かなりきつい。臭いし。

「お、おい……あれと戦うのか？　近付きたくねぇんだけど」

「つべこべ言わず、早くいってください」

「……それ、行く？　逝く？　どっち？」

流星は泣きそうになった。

「日影様は怪我をなさってます。傷自体は深くありませんが、毒も受けたようです」

「え……！」

「私は日影様の治療をするため、動けません。運転手は非戦闘員です」

朱華はそれ以上言わなかったが、言わんとしていることは解った。

つまり、一人で戦えと！？

「む、無理無理！　俺戦えんの、人間限定だからっ」
「脇差を鞘から抜いてください」
「無視か！？」
ツッコミつつ、しょうがないので言う通りにする。

ボオゥッ

「……！？　炎がっ」
「『煌炎』は、その刃に炎を灯すのです」
朱華の言う通り、炎に包まれた刃を見つめ、流星がわたわたしていると、ゾンビ達が近付いてきた。
「ど、どうすんだ！？」
「『煌炎』を逆手に持ってください」
言われた通りにする。包囲は更に狭まった。
「そ、それで！？」
「離れた状態で、亡者達に向かって振ってください」
「な！？　刃が届かないんじゃ……」
「いいから振ってください」
ピシャリと言い放たれ、流星は涙目で言われた通りにした。

ブオォ！！

刃から、炎をまとったかまいたちが発生した。
かまいたちはゾンビをまとめて焼き裂き、勢い余って後方のビルをも破壊する。
ゾンビ達はどんよりした動作で、動かなくなった仲間を振り返った。
「な、な、な、な……」
「今のを繰り返してください。悠様が来るまで持ちこたえればいいですから」

唖然とした流星にそう言う朱華は、獣耳と九本の尾を出していた。
流星は一瞬呆けていたが、すぐ我に返り、小刀を振った。
先程と同じように炎のかまいたちがゾンビを倒していく。
近付きさえしなければ、ゾンビ達は怖い存在ではない。
ばたばたと倒していくと、快感さえ感じた。

それが……油断を生んでいた。

「流星様！」
朱華の声に、流星はハッとして振り向いた。
ちょうどゾンビが、錆びた鉄棒を振り上げたところだった。
マズイ、と思って反射的にゾンビを直接刃で斬る。

ボオゥ！

「ぐ、あ゛っ……」
ゾンビは倒せた。が、炎は流星自身も焼く。
小刀を持った右腕がただれ、流星は思わず小刀を取り落とした。
同時に刃の炎が消える。
肉の焼ける、嫌な臭いが辺りに立ち込めた。
（離れてやれって……こういう意味かっ）
ゾンビを斬った瞬間、一瞬炎が爆発するように膨れ上がった。本来なら、かまいたちとして放たれるはずの炎だろう。
それを敵の至近距離で放ったものだから、被害がこちらまできたのだ。
うずくまっていると、ゾンビ達が迫ってきた。
武器無しで戦える自信は、流星には無い。
無事な左腕を伸ばして脇差を掴んだ。刃に再び炎が灯る。
構えようとするが、既にゾンビ達は数十センチも離れてなかった。
（これじゃ刃が振れねぇ！）

動けない流星に、ゾンビ達が覆い被さった。

血塗られた夜更けに<下>

ドゴォッ

ゾンビが一体、吹き飛んだ。
流星が呆然としている間に、ゾンビ達は次々と視界から消えていく。
最後の一体の体液（臭い付き）が頬に付いてようやく現実に引き戻された流星は、どでかいハンマーを持つ少年を見上げた。
まだ十一、二歳に見える、栗色をした髪の少年は、ニヤッと笑った。
「大丈夫か？　あんちゃん」

「全然大丈夫に見えないだろ」

誰かが少年の頭を後ろからどやしつけた。
少年はつんめのり、素早く振り返る。
「何すんだよ風馬（フウマ）！」
「大火傷の人間が、大丈夫なわけ無いだろ」
少年の頭を叩いたのは、長めの黒髪の青年だった。
きりっとした、整った顔立ちの青年で、流星より年上に見えた。
風馬と呼ばれた青年に叱られた少年は、悪びれずに言葉を返す。
「でも自業自得じゃん」
ぐっ、とつまる流星である。正直言い返せない。
「おまえは……まぁいい。君、傷の具合を見せてくれないか？」

風馬は、流星の腕に触れた。
「あっつ……！」
「酷いな、これは」
右腕全体に針が突き刺さるような痛みに、流星はまた小刀を取り落とした。
風馬は手を離すと、口の中で聞き慣れない言葉を呟き、印を切る。
とたん、右腕の激痛が引いていく。代わりに、心地よい冷たさが腕の傷に広がった。
「これは……？」
「傷を治してる。じっとしていてくれ」
風馬はそう言って、また謎の言葉を呟き始めた。
「風馬、雷雲。無事だったのね」
日影が朱華に支えられ、近付いてきた。
「華凰院君、紹介するわね。黒いハンマー持ってるのが家鳴　雷雲。貴方の傷を治してるのが、疾風（ハヤテ）風馬。二人共、桐生家の退魔師よ」
まだ顔色は悪いが、傷は完治したらしい。血は止まっていた。
「ねぇ二人共。流亜知らない？」
日影の質問に、雷雲と風魔は顔を見合わせた。
「見てねーけど……」
「俺もだ」
二人の返答に、日影は肩を落とした。
「そう……。あいつ、どこで油売ってんだか！」
日影は叫んだ。怒ってるようである。
ルア、というのが誰か知らないが、その人も生き残りらしい。
「……君、傷治った」
「え？　あ、ホントだ！　ありがとうございます！」
すっかり火傷は消え、傷みも無くなっていた。曲げ伸ばししてみても、支障は無い。
服の袖は燃えてそのままのため、少し肌寒いが。
流星は立ち上がり、もう一度お礼を言おうとして、ハッと振り返

った。
他の人達も気付いたらしい。武器を構えている。
日影は黒地に桜吹雪の描かれた扇、風馬は銀色の大柄な銃だ。
朱華は耳と尾を逆立たせ、唸り声を上げた。
流星も小刀を拾って構える。今度は後ろにいよう、と考えながら。
全員が警戒していた気配は、どんどん近づいてくる。
同時に、生ぐさい臭いがしてきた。
「おえっ……何だ、この腐ったみてーな臭い？」
「戦い慣れてない流星様はお下がりください」
朱華は両手を地面に着けて、四つん這いになった。
まるで獣だ。……あ、狐だった。
「……俺、もしかして邪魔か？」
流星も武道をかじっているので、少し解る。
戦い慣れない人間は、集団での戦闘で足手まといになる。
空手は個人戦だが、それは解ってるつもりだ。
集団の足手まといは、個人の弱点のようなものだ。そこを突かれると、こちらが不利になる。
それを解ってるからこそ、流星は素直に下がった。
気配と臭いの主は、その直後に、路地裏から現れた。

ブハァァァァ……

それは、崩れた顔の下部分にある穴から、失神しそうなほど強烈な臭いの息を吐いた。
「！　みんな、吸っちゃ駄目よっ。これは毒の息だわ！！」
日影の言葉に全員、慌てて鼻と口を塞いだ。
「空気を浄化します。皆様は距離を取りつつ、あれを」
朱華は四方八方に狐火を放つ。
流星はというと、妖魔から目を離せなかった。

例えるなら……ゾンビの親玉。

巨体を覆う灰色の肉は泥のように崩れ、目と口は、塞がりかけた穴にしか見えない。

五メートルはありそうな巨人ゾンビの妖魔は、身体を引きずりながら近付いてきた。

「た……て……ひ……お……」

ゾンビの口から、言葉がこぼれた。しかし、意味は全く解らない。

「俺達を追ってきたのか」

「多分ね」

風馬と日影は、妖魔にそれぞれの武器を向けた。

ズガガガンッ

風馬の銃弾が、妖魔の額を貫いた。

妖魔がひるんだ瞬間、日影が前に出る。

「『桧扇姫』、部分解除」

小さく呟き、扇を振る。

「第一の舞い、火炎大蛇（カエンオロチ）！」

火をまとった巨大な蛇が、妖魔の顔面に衝突した。

「第五の舞い、桜乱剣（おうらんつるぎ）！」

更に扇を振ると、無数の花びらが現れ、妖魔に向かっていった。

ザクザクザクザクザクザクゥ！！

花びらが、刃のように妖魔の全身を斬り裂いた。

妖魔の身体から、泥水のようなものが吹き出す。

「……すけ……か……む……」

（すけ？）

流星は妖魔の声に首を傾げた。

先程から、あの妖魔は何を言っているのだろうか。
たてとすけ。たてすけ？　いや、違う。
たす？　たすけて……

……助けて！？

「おぉらぁ！　とどめだぁっ」
雷雲がハンマーを横に振った。
衝撃波が生まれ、妖魔の頭を粉砕した。
肉片と骨が辺りに飛び散る。
「ちょっと雷雲！　なにも粉々にしなくてもっ」
「いーじゃん日影。俺の『卯槌姫』が強力ってことで……うぎゃ！」
雷雲の頭頂部に、風馬の鉄拳が落ちた。
「妖魔は悪霊と違って死体は消えないんだぞ。後始末どうするんだ」
「いいじゃんか！　桐生家の人達が……。……そっか、もういないんだっけ」
しゅん、と雷雲はしぼみこんだ。日影も風馬も、顔を曇らせる。
流星は、気付いてしまった事実を言うか否か迷ってしまった。
「流星様、どうなさいました？」
それに気付いた朱嶺は、そっと尋ねる。
「あ、あぁ。あの妖魔……その、助けてって、言ってた気、するんだけど」
全員、妙な顔をした。
「変ね。こういうたぐいの妖魔は、たいがい自分の意思を、持てない、は、ず……」
日影のセリフが、途中で消える。
妖魔の死体が、いつの間にか無数の髑髏に変わっていた。
「こ、これは……！？」

風馬がそれに走りよって、それを一つ手に取った。
「……これ、新しい骨だ」
風馬の言葉に、朱嵒の獣耳が反応した。
「失礼します」
風馬の傍まで行き、尾で髑髏に触れる。
九本の尾をしばらく動かし、無表情のまま言った。
「桐生家の方々のものですわ」
全員固まってしまった。
「肉や目玉などは喰われたようですね。喰い砕かれた跡があります」
朱嵒は別の髑髏を手に取った。右側頭部に大きな穴が開いている。
「……じゃ、さっきのは、妖魔にされた、桐生家のみんな……？」
日影はぺたんと座り込んだ。
「髑髏を使ってるということは、魂を使った術か」
風馬が苦々しげに吐き捨てた。
「魂使った術って、禁術の一つじゃんか！　妖偽教団の奴ら、外道にもほどがあるよっ」
雷雲は叫んだ。顔は今にも泣きそうに歪んでる。
流星は青ざめて立ち尽くした。

殺し、肉を貪り、更に利用する。

こんなことを、同じ人間が本当にするのだろうか。
信じられない。信じたくない。だが……否定もできなかった。
全員が黙りこくっていると、誰かが走ってくる音がした。
「あれ。ちょっと遅かったか」
「悠！！」
流星は大声を上げた。が、悠の後ろにいる燐を見て、ピシッと固まる。
「な、な、なん、何で……！？」
「あぁ。ちょっと色々あって、燐と一緒に来たの」

燐を指差す流星に、悠は説明する。
「つ、つーか！　その上着、そいつのじゃっ」
悠が着てるのは白いパーカーではなく、薄水色のブレザーだった。
「来る途中で妖魔の群れに会ってね。その中で駄目にしちゃったから借りたの」
下ワンピースだから、と言ってブレザーの裾をつまむ。少しぶかぶか気味だった。
細身とはいえ、やはり悠より燐の方が体格がいいので、当然だろうが。
「もう、この町には妖魔はいないと思うよ。ところで……あの髑髏の山は何？」
悠は少し首を傾げた。
朱華の説明を聞くと、悠は顔をしかめ、燐は憤りを現した。
「魂を使った禁術は、違法中の違法ですよ。いくら敵でも、そこまでするなんて……！」
信じられない、というように首を振る彼の横で、悠はじっと考え込んでいた。
「？　どうした、悠」
「いや。……日影、怪我大丈夫なの？」
悠が尋ねると、日影はにこっと笑った。
「血が足りなくてフラフラするけど、平気よ。ところで、何か気になることでもあるの？」
日影に問われ、悠は少し顔を曇らせた。
「実は昨日、恭兄の学校で……」
悠は日影達に、恭弥の学校でのことを話しだした。
昨日、という言葉に流星が腕のデジタル時計（少し溶けてるが動いてた）を見ると、既に二時を回っていた。
ってことは、今日は悠の誕生日……

こんな最悪な日になるなんて、悠も思ってなかったろう。
兄が襲われ、父が死に、友達の家が襲撃されて。
まともな神経じゃ、耐えられない。
悠の話を聞き終わると、日影は両手を口に当てた。
「そんな……おじ様が、亡くなられた……」
「き、恭弥のにーちゃんは無事か!?」
雷雲が慌てて訊いた。
「うん。恭兄、怪我とかしてないよ」
「刀弥のにーちゃんも?」
「……うん」
雷雲は幼い顔に、ほっとした笑みを浮かべた。
悠も笑い返し、しかし顔を日影に戻した時は、真剣な表情に戻っていた。
「恭兄を襲い、父さんを殺した。だから、最初の狙いは椿家だと思ってた」
「だが、妖偽教団は桐生家を狙った、か」
風馬は胸の前で腕を組んだ。
「確かに、当主を失った椿家を落とすのはたやすいはず。なのになぜ?」
「理由は二つ考えられるよ」
悠は二本指を差し出した。
「一つは何らかの理由で、狙いを変更したか。もう一つは、注意を引き付けるため」
「注意?」
「桐生家は、昔から椿家と交流があった。それは地理的にも明らかだ」
桐生家は椿家のある町から、燐の住む町をへだてた場所にある町に存在する。車で一時間とかかってない。
「もし、策無しに桐生家を叩けば、すぐ椿家の援護が来る。そうなれば、人柱を殺すことは難しい」

「そうか。当主を殺せば、椿家の動きは封じられる。そのスキに、か……」

日影は眉間にしわを寄せた。

「できれば、前者であってほしいな」

悠はフッと笑った。しかし、目は全く笑ってない。

「もし後者なら、敵には頭のキレる奴がいるってことだからね」

誰もが口を閉ざした。

これからくる戦いに、皆背筋が凍る思いなのだ。

……しかし、流星にとってはどうでもいいことだった。

髑髏の山を見つめ、止まらない震えを抑える。

この髑髏達は、自分よりはるかに戦い慣れた退魔師だったはずだ。

なのに、今は物言わぬ屍となっている。骨になるまで、喰い尽くされてる。

流星は傷の消えた右腕に触れた。

あのまま、風馬に傷を治してもらわなかったら、自分はどうなっていた？

己の肌が燃える感覚を思い出し、流星はぞわりとした。

「……流星」

悠の声に、流星はぴくりと肩を震わせた。

「な、何だ？」

「君……」

悠は一瞬、哀しそうに顔を歪めた。しかし平常に戻し、衝撃の一言を言った。

「うちのバイト、辞めて」

脳の機能が停止した。

今、悠は何て言った？

「バイトは今日で終わり。朝になったら、家の人間に車で送らせるから」
「ちょ、待てっ。何でそんなこと言うんだよ！」
「妖偽教団との戦いに、一般人を巻き込むわけにはいかないかね」
「ふ、ふざけんな！　今まで、俺のこと振り回しといて、いきなり辞めろってそりゃねーだろっ」
流星は悠の細い肩を掴んだ。
目を見開く悠に、流星は怒鳴る。
「仕事手伝わせて、妖偽教団のこと教えて、それで関係ありませんでしたって、ありえねーだろ！　俺、俺は……」
「戦いの中でガタガタ震えてた奴が、何言ってんの？」
悠の冷たい声に、流星は言葉を見失った。
「私は弱い奴には興味無いよ。さよなら」
固まる流星を無視して、悠はすたすたと歩き出した。
「！　悠どこへ？」
燐が尋ねると、悠は一言「事務所」と言って朱嶌を引き連れ歩み去ってしまった。
「……珍しいわね」
日影の言葉に、流星は振り返った。
「……何が」
「え？　……あ、何でも無いの、何でも」
慌てた様子の日影に、流星が言葉を重ねようとした時、燐がずいっと前に出た。
「皆さん、これからどうするんですか？」
「そうだな、どうするか」
風馬は頭をかいた。
「なんなら、僕の家に来ませんか？　部屋はいっぱいあるし」
「あら……でも妹さんに悪いわ」
「あの娘なら事情を解ってくれますから、大丈夫ですよ」
がやがやと意見をまとめ始める日影を確認し、燐は流星に近付い

た。
「貴方は、もう少し悠の気持ちをくみ取ってください」
「え？」
流星は燐を見返した。
燐は眉をひそめると、踵を返した。
「何で悠が、貴方を傍に置くのか解りませんよ」
そう、悔しげな言葉を投げて。

――――

これでいい。これでいいんだ。
悠は自分にそう言い聞かせた。
「悠様」
背後の朱雀が、声をかけてきた。
「何」
「よかったのですか？　先程のこと」
「いいよ。最初からそうするべきだったんだ」
悠は目を軽く伏せた。
「自分の我が儘で一般人を引き入れちゃうんなんて……ほんと、馬鹿みたい」
悠は自嘲の笑みを浮かべた。
「ほんと、馬鹿だよね」
自分で自分の恋、踏みにじっちゃうなんて。
悠はぎゅう、と拳を握り締めた。
その様子を、建物の上から見つめる者が、一人。

「椿の姫君は傷心中か」
あいさつでも、と思ったが、無理のようだ。
「しょうがねー。日影んとこ戻るか」
桐生　流亜はその場を後にした。

――――

香の匂いが鼻につく。
月読と熾堕は、羽衣姫の部屋に来ていた。
黒く塗り潰された壁に、同じく黒の床と天井。羽衣姫は、その奥の椅子に座っていた。
玉座かと思うほど豪奢な椅子でくつろぐ姿は、黒いサテンのドレスで借り物の身体を包んでいる。
「桐生は手に落ちた。次はどこを攻めようかしらねぇん？」
「椿家は狙わないのですか？」
月読の問いに、羽衣姫は笑みを深くする。
「あそこはメインディッシュよ♪　退魔師の流派の中で、あそこは最強と言われている……」
結い上げられた髪をいじりながら、羽衣姫は言った。
「結束力も固いようねぇ。一度椿家の退魔師を捕まえて拷問したけど、何も言わずに壊れちゃったしぃ」
羽衣姫は近くに待機していた侍女に目を向けた。
侍女は一礼すると、どこかへ去っていく。
「だから、弱体化させようと思うのぉ。第一の目的はクリアしたから、第二段階に入らないとねぇん♪」
「第二段階、とは？」
「熾堕ちゃんなら解るでしょぉ？　勿論、月読ちゃんもねぇん♪」
侍女が戻ってきた。手に、銀の盆を持って。
その上に乗っていたのは、血のしたたった拳大の生肉の塊だった。
「それは……」

「桐生家の当主の心臓よ♪　おいしそぉでしょぉん」
羽衣姫はそれを掴んだ。
「退魔師の心臓ほど、美味なものは無いわ♪」
小さな口が、限界まで開けられる。

バクッグチャッグチィッ……

咀嚼音を聞きながら、熾堕は再び尋ねた。
「……それで、どうするのですか？」
口の端から伝う血をなめとり、羽衣姫は含み笑いを浮かべた。
「椿　悠の心を、ズタズタに引き裂くわ♪」
「なぜ椿　悠を？」
「彼女は、椿家唯一の姫持ちであり、最強の姫持ちとまで言われる娘」
羽衣姫は頬杖をついた。
「椿の兄妹の中では、真っ先に狙うべきでしょう？　最大の障壁となる前にねぇん♪」
「……しかし、彼女の心を引き裂くというのは？」
月読は眉をひそめた。
「意味が解らないのは、無理無いわね♪　でも、いずれ解るわ」
羽衣姫は、流し目を背後に投げかけた。
「刹嵐、いるわねん？」
「はい」
突然風が起こった。
その場にいる全員の髪を持ち上げた風をまとって現れたのは、十にも満たない少年だった。
茶色の髪に、つり上がった黒い目。細長い顔には、獣じみた笑みが浮かんでいた。
「よぉ、熾堕。相変わらず長い髪してんな。切ってやろぉか？」
「断る。おまえに切らせたら、何が起こるか解らんし」

きっぱり言う熾堕に、残念、と刹嵐は肩をすくめた。
「で、何の用ですか、主(あるじ)？」
刹嵐は羽衣姫に向き直った。
「頼みたいことがあるの。とぉっても重要なことよん♪」
羽衣姫はにっこり微笑した。
「それにぃ……貴方のお父様にも関わることなの♪」
「親父に？」
へらへらしていた刹嵐の表情ががらりと変わった。
それを見て、羽衣姫は満足げに笑う。
「そ。頼みを聞いたらぁ……仇討ちができるかもよん？」
「その頼みって！？」
刹嵐は身を乗り出した。
それを見た羽衣姫は、裂けんばかりに唇の端を持ち上げた。
「華凰院流星を、殺せ」

第七話　Ｒｉｐｐｅｒ&ｌｔ；上&ｇｔ；

広がるのは、赤。
染まるのは、闇。
叫ぶ声は遠く、倒れる姿は小さく。

「当然よ……死んで当然なの」

母の声は、近い。手も匂いも、触れられるほど。

「あれは、死んで当然なの」

なのになぜ？　なぜ自分は独りと感じてしまうのか。
風景が変わる。
ほこりっぽい空間。暗い闇に半分埋まった部屋。そこに、自分と、一人の女がいる。
頬が痛い。熱を持った頬に、熱いしずくが伝う。
手に、何かが触れた。
見ると、それは刀の柄だった。
紅の、血を連想させるような色の柄だ。

『その女が憎いか』

声が、脳内に響く。

『私の力を貸そう』

柄を掴むと、手にしっくりときた。
引っ張ると、鞘から自然と抜けて、白銀の刀身が姿を現す。
目の前に立つ女が、小さく悲鳴を上げた。

『さぁ……殺れ！』

声が一段と大きくなる。
気付けば、走り出していた。
そして、刃を伝って感じる、鈍い感覚。
生あたたかい液体が、手に落ちた。
それは涙か、それとも……
虚ろな目が、こちらを見た。

「いやあああああああ

気付けば泣いていた。
「どうして？」
泣きたいわけじゃないのに、どうして涙が出るの？
「もう、私は弱くないのに」
悠は、顔を両手で覆った。

―――

教室内は、腐臭が覆っていた。
直接的な意味ではなく、例えの意味で。
負のオーラ全開の流星に、誰も近付こうとしなかった。
「り、流星の奴、一体何があったんだ？」
「聞いた話じゃ、女にフラれたとか」
「……よっぽど酷いフラれ方したな」
机に突っ伏し、目が虚ろな流星は、さながら死体のようである。
生気の欠片も感じられない。
「流星……生きてるかー？」
卓人が声をかけても、反応無し。
つついてみるも、動かない。
「えっと……先程まで動いてましたよね？」
「なぜ敬語？」
元木は卓人にツッコんだ。
「おい、りゅう……」
肩を揺さぶると、流星の身体が傾いた。

ドダァン！

「……え？」
椅子から転げた流星を、友人どころか、クラスメイト全員が見つめた。

流星は、まったく動かない。

「……流星ぇーーーーーーーーーー！？」

卓人は思わず叫び、山下に「うるさっ」と言われてしまった。

「寝てんな、こりゃ」

そう聞いたとたん、卓人達はどたどたとこけた。

「しかし、よー寝るな」

保険医の梅見は、ベッドに横たわる流星を見て、がりがり頭をかいた。

三十代の髭面男だが、面倒見がいいため、生徒の信頼は厚い。

新入生などには、胡散臭い目で見られるのだが。

「マジ寝てるだけ？　梅見っち」

「誰が梅見っちだ。昨日、よっぽど寝てないと見える。顔色悪ぃし、場合によっちゃ、早退させた方がいいかもな」

卓人達は顔を見合わせた。

「マ、マジかよ」

「もしかしたら、だ。心配すんな。そろそろチャイム鳴んぞ」

梅見に言われ、全員慌てて保健室を出た。

「しかし……悠嬢も酷なことをする。なぁ、朱嵜」

「悠様は間違っておりません」

背後に現れた少女に声をかけると、朱嵜は表情を変えずに言った。

「だが、こいつのショックは大きいみたいだぜ。よっぽど惚れ込んでたと見た」

梅見が苦笑すると、朱嵜は少しだけ顔を曇らせた。

「流星様は、まっすぐすぎるのです。だから」

「だから、辞めさせた、か。まぁ確かにな」

梅見はベッドの周りをカーテンで囲み、事務椅子に座った。
「しかし、惚れ込んでただけじゃあぁはならねぇ。もしかしてあいつ、退魔師目指してたんじゃねぇか？」
朱華が目を瞬かせるのを見て、梅見は「違うか？」と訊いた。
「それは解りません。ですが……もしそうだとしても、私には解りかねます」
「ん？　何でだ？」
「妖魔を憎む気持ちは解ります。しかし、それだけで、闇の世界に身を置こうなど……」
「本当にそれだけか？」
「え？」
「俺も、憎む気持ち一つで、退魔師になろーって馬鹿いるとは思わねーよ」
梅見はふっと笑った。
「まぁ、言っても女にゃ解んねーな。男の気持ちは」
「……？」
「気にするな。それより、悠嬢はどうした？」
尋ねると、朱華は不思議そうな顔を消した。
「本家です。私は、流星様の様子を見るよう言われて」
「フッたくせに、様子が気になるのか。これが噂のツンデレってやつか？」
ふざけて言うと、思いっきり睨まれた。無表情だから余計怖い。
「冗談だって。しかし、あの娘、いや、あの娘達も大変だな」
梅見はふぅ、と息をついた。
「死体の無い葬式をしなきゃならんとは」

――――

黒い着物を着た刀弥は、前から歩いてきた男に顔をしかめた。
椿家のお得意の政治家だ。正直、あまり好かない。

「兄さん？」
恭弥が後ろからつついてきた。
無言でいると、向こうからこちらに近付いてきた。
「いやいや、このたびはご愁傷様で」
政治家はわざとらしい悲哀の言葉を口にした。
「いえ。貴方が来てくれて、父も喜ぶでしょう。お忙しい中、ありがとうございます」

さっさと帰りやがれ、糞ヤロー！

……内心ではそう思ったが、自重する。
「おや、弟君も。このたびは、ご愁傷様で」
「いえ……」
制服姿の恭弥は軽く頭を下げる。
「しかし……最後に会ったのは六年前でしたが、ますます亡くなられたお母様に似てきましたな」
舌なめずりするような声に、恭弥が僅かに顔をしかめるのが見えた。
しかし、弟はすぐさま愛想笑いを浮かべ、「そうでしょうか」と返す。
切り替えの早さは、兄の刀弥が舌を巻くほどである。
おまけに母親譲りの美貌も相まって、その笑顔は同性ですら魅了してしまう。
事実、相手は気分をよくしたようで、ガマガエルに似た笑みを浮かべ、その場を後にする。
「……さすが恭弥」
「……」
刀弥が肩を軽く叩くと、恭弥はさっさと笑みを消した。
普段は常に穏やかに微笑しているのだが、さすがに今日はそんな気分じゃないらしい。

「……兄さん」
「ん？」
「父さんの死体は……やっぱり残ってないんだな」
「……あぁ」
妖魔に殺された退魔師は、たいがいの場合、死体が残らない。
妖魔に身体を喰われ、骨すら残らないのが普通だ。父の奏司とて、例外では無かった。
血の跡と退魔武器の残骸が残ったら、まだいい方だ。
「死体無き葬式、か。なんか親父が死を偽ったみてぇだな」
「でも父さんは……死んだんだ。嘘でも、何でもない」
恭弥は拳を握り締めた。
「恭弥、昨日の話……」
「くどいな、兄さん」
恭弥は静かに笑った。
それはいつもと変わらない笑みだったが……いつも以上に、儚かった。
「僕の意思は変わらない。この戦いの終盤。僕は……」
僕は、羽衣姫に殺される。
恭弥はすたすたと歩いていく。
「自室に戻っている。葬式が始まるまで、まだ時間があるからな」
その背中は、揺るがない。その目には、一体何が映ってるのだろうか。
「恭弥……」
刀弥は唇を噛んだ。
――――
「ここにいたんですか」

庭先に立ち尽くしていた悠は、燐の声に振り返った。
黒スーツを着た燐は、心配そうな顔をしている。
「大丈夫ですか？」
「……さぁね」
悠は縁側に腰を下ろした。
黒いワンピースに黒い上着を着た悠の隣に、燐も座る。
「ねぇ」
「はい？」
「何で制服じゃなくてスーツなの？」
「僕の制服では、色的にも葬式には合わないでしょう」
燐は肩をすくめた。
「悠、覚えてますか？　僕が貴女に告白した時のことを」
「いきなり何？　……覚えてるよ。転校していきなり『好きです！』って」
クスクス笑う悠に、燐も苦笑を返す。
「そう。アメリカからこっちに来た時、まだ小一だった時の僕は衝撃を受けたんです。こんな綺麗な女の子がいるのかと」
「大袈裟だね」
悠は笑い声を大きくした。
「本当ですよ。それ以来、好意を示すために、挨拶代わりに抱きついて……」
「変態呼ばわりしたんだよね、私が」
「甘酸っぱい思い出です……」
「甘酸っぱいっていうか、酸っぱいよね」
悠はころころ笑い声を上げた。
燐はため息をついて、肩を落とす。
「日本とアメリカの文化の違いを痛感しましたね。父の祖国では、友達と抱き合うのが挨拶になりましたから」
燐がわざとらしく目元を押さえると、悠は笑いを引っ込めずに彼の頭を撫でてやった。

「まぁ、変態扱いしたことは謝るよ。訂正はしないけど」
「してください！」
「無理だね」
悠は立ち上がって、思いっきり伸びをした。
「今までの行動が行動だからね」
「う……すみません。習慣が抜けなくて」
燐は頬をかいた。
「……で。何でそんなこと言いだしたの？」
悠が訊くと、燐はふと、真面目な顔になった。
「好きです」
「……君はそればかりだね」
悠はくすっと笑った。
「いつも通り、答えはノーだよ。私は誰のものにもならない」
ふと目線を上げれば、鳥が舞う姿が見えた。
「私は何にも捕らわれない。気高く、自由に生きる。それが私だよ」

気付いてないんだ、と燐は思った。
何にも捕らわれることなく生きれる人間はいない。
人間だけでなく、他の生物も、何かに捕らわれて生きている。
生命は何かに縛られることで、生きていける。
捕らわれることで命を保っていのだ。
捕らわれないものが居たとしたら、それは死者だけだ。
彼女もまた、一人の人間に捕らわれているのに、過ぎ去った記憶に縛られているのに。
（どうして、気付けないんですか？）
燐は悠の手を取った。
「燐……？」
悠が不思議そうに見つめてきた。
穢れを知らない黒曜石の瞳。

自分のものにしたい。でも、それ以上に。
「本当にいいんですか？」
「……何が」
奥底にあるのは、闇。
（この間は瞳に光があったのに、もう無い）
悔しかった。この瞳に映るのは、自分じゃない。
「前に貴女は言いましたよね。後悔することは、今の自分を否定することだと」
「……」
「今の貴女は……後悔してるんじゃないですか？」
「……っ君に」
悠は顔を歪めた。
「君に何が解るの。私の気持ちなんて、君に解るはず……！」
「解りますよ」
燐はぐいっと悠を引き寄せた。
悠はバランスを崩し、燐の腕の中に閉じ込められる。
「何してんの？　離して！」
「貴女が触れられるのが嫌なのは知ってます。でも聞いてください」
つとめて冷静な声で言うと、悠は上目遣いできっ、と睨んだ。
「……離して」
「離したら行ってしまうでしょう。いいから聞いてください」
悠はまた口を開きかけたが、燐はそれを遮った。
「貴女は、華凰院さんを辞めさせたことを、後悔してるんでしょう」
「してない」
「してます。だから、目が虚ろなんですよ」
目元に触れると、思いっきり振り払われた。
「貴女の瞳に灯っていた光はどうしたんですか？」
「……知らない」
「いつもの不敵な態度は？　いつも前を見据えてたのに、今は」
「やめて！」

悠の大声に、燐は口をつぐんだ。
「……やめてよ。忘れたいのに……流星のこと……巻き込みたくないのに……」
小さな声に、燐はしまった、と思った。
言いすぎたかもしれない。
「あの、悠……」
燐が再び口を開きかけたとき……

気配を感じた。

燐にも覚えのある気配で、悠から手を離す。
「……朱嵐？」
悠が声をかけると、妖狐の少女が姿を現した。
そこまではいつも通りだった。問題は朱嵐自身だ。
左肩を押さえた指の間から、血が吹き出している。白いワンピースが、赤くまだらに染まっていた。
獣耳と尾が垂れ下がり、白面には汗がにじんでいる。
「！　その傷、どうしたの！？」
悠は朱嵐に駆け寄った。
「もうしわけ、ありません……妖偽教団が、流星様を……」

『……！』

悠と燐は顔を見合わせた。
「その傷は、奴らに？」
「はい……」
いつもならすぐ塞がるはずの傷がよっぽど深いのか、治る様子が無い。
「悠、朱嵐の傷は僕が治します。早く華凰院さんのところへ！」
「え、あ……でも……」

燐の言葉に、悠は迷う素振りをした。
「貴女らしくありませんよ、悠」
燐は笑いかけてやった。心の奥が、じくりと痛んだが。
「自分の思ったように行動するのが、椿　悠でしょう。余計なことは、考えずに」
悠は目を見張って、燐を見返した。
「貴女は今、何をしたいですですか？」
目をそらさず尋ねると、悠はうつむき……そしてふっと笑った。
「ありがと、燐。目が覚めた」
悠は朱嶌に目を向けた。
朱嶌は震える手で刀を差し出す。悠はそれを受け取って、朱嶌に微笑を向けた。
「どうも、父さんが死んで弱気になってたみたい。私らしくもない」
苦笑し、悠は歩き出した。
「常に不敵で迷わない。それが私だ」
悠は燐に魅力的な微笑を向け、だっと走り出した。
一方燐は、赤い顔で朱嶌の治療にとりかかる。
「小悪魔ですよね、まったく……人を惹き付けるのが得意というか」
「いいのですか？」
朱嶌が傷を治してもらいながら尋ねてきた。
「ライバルを応援するようなことをして」
「……あんな弱々しい悠、見たくありませんからね」
印を切り続けると、血が止まってきた。
「……まだ、十四歳なんです」
燐は呟くように言った。
「ちょっとしたことで、心が揺れることだってある。おまけに今回、悠は父親を失ったんですよ」
不慮の事故や病なら、悠が心と反する行動を起こすことは無かったろう。
しかし彼女の父親は、殺されたのだ。

今、彼女の心中がどれほど揺れてるか、想像もつかない。
でももし、予想以上に憎悪の感情が大きかったら。
「三年前の悲劇が、繰り返されなければいいんですが」
燐の言葉に、朱嶌の顔が曇った。

Ｒｉｐｐｅｒ&ａｍｐ;ｌｔ;中&ａｍｐ;ｇｔ;

朱華が悠の元に行く二十分前――

流星は山下と卓人と共に帰路についていた。
「大丈夫かよ、流星。まだ顔色悪いぜ」
「あー……一日したら治るって」
流星は山下にひらひらと手を振った。

言えない。
まさか、悠にフラれたイライラを解消するために、ゲームしまくって寝なかったって。
しかも、しすぎて画面酔いしたって！

流星にもプライドというものがある（レンガ一つ分級）。
言ったら、笑われるのがオチだ。
「なぁ、近くのゲームセンター寄らね？」
「え〝。いや、俺パス」
「んだよ。流星ノリ悪ぃなぁ」
山下はつまらなそうに舌打ちした。
「そうイラつくなって。流星体調悪いんだし」
卓人がフォローに入った。
「ところでさぁ……おまえ、女の子にフラれたらしいけど、誰よ？」

卓人いい奴って思った俺、事故れ。

流星は内心でそう一人ごちた。
「誰って……おまえら知らねー奴だし」
「バイト先の娘か？」
「まぁ……一応」
「年下？」
「おう。……ておまえら、何でそんなことまで」
「興味」
「その娘狙い」
「山下てめえぇぇぇ！！」
山下の胸ぐらを掴みかかる流星を、卓人が羽交い締めにして止めた。
「お、落ち着け流星！」
「離せ卓人！　俺はこいつを殴るっ」
道行く人達が、流星達を好奇の目で見つめた。
それに気付かず、山下が怒鳴り返す。
「いいんじゃんかよっ。流星フラれたから関係無ぇし！」
流星はぐっと言葉につまった。
確かにフラれたし、もう関係無いかもしれない。
だが、諦めがついてないのだ。
自分を、どん底から引っ張り上げてくれた、あいつを。
「っ……俺は」

ドパッ

目の前で、血が舞った。
山下の右肩から左腰にかけて、ぱっくり切り裂かれている。そこから血が吹き出していた。
「や、まし……た……？」
山下の血が、流星と卓人の制服を濡らした。

「う……うわあぁぁぁ

また風切り音が鳴る。
流星が煌炎を抜く前に、目の前に銀毛が広がった。

バシィィッ

かまいたちが四散した。
「ご無事ですか？　流星様」
「し……朱華！？」
流星は尾を盾にした朱華に、目を瞬いた。
「！？　何だ、このコスプレ女子っ」
「いや、コスプレじゃねーし」
流星は思わず卓人にツッコんだ。
あの耳しっぽは本物で……でも、信じるわけないよな。
「おまえ、そんな趣味あったのか。女の子に猫耳付けるとか、オタクかよっ」
「勝手に人の趣味捏造すんなーーー！　しかも猫耳じゃねぇしっ」
ガーッと怒鳴った流星だが、現状を思い出した。
「朱華、山下がっ、俺の友達が！」
「……無駄です」
朱華は、僅かに顔をうつむかせた。
「もう、亡くなっておられます」
「そんな……！」
流星は、全身から力が抜けたような気がした。

また、死んだ。
また、いなくなった。
俺の前から、俺の前で。

呆然としている流星に、一瞬だけ視線を向け、朱華は前に向き直った。

「出てきなさい。いるのは解っています」
何も出てこない。
「場所は『臭い』で解っていますよ。焼き殺されたいのなら、動かなくても結構ですが」
「……ククク」
空間が歪んだ。
「狐ぇ……生意気な口きくじゃんかよ」
現れたのは、流星より年下の少年だった。
しかし、ただの子供じゃないのは見ただけで解る。
つり上がった目は殺気でギラギラ光り、口元には凶悪な笑みが浮かんでいる。こんな子供が普通なわけない。
「おまえに用は無ぇんだよ。消えるか死ぬか、どっちか選べ！」
「どちらも選べませんね。私は、主の命令でここにある」
流星はハッとして顔を上げた。
「悠の命令で……？」
なぜ？　もう関係無いんじゃないのか。もう、もう……
朱華がこちらを見た。
何か言おうとして、口を開いた時――

ザンッ

朱華の肩から、鮮血が吹き出した。
「朱華！！」
「っ……」
朱華は肩を押さえた。それでも血は止まらない。
「甘いぜ狐。敵から目を離すなんてよ」
少年は右腕を持ち上げた。
手首から先が、手じゃなくなっている。
黒光りする、鎌のようになっていた。
「かけ声で戦いが始まるとでも思ったか？　これは殺し合いだぜ」

ギチリ、と笑い、少年は腰を落とした。
「気ぃ抜いたらあの世行きだ！！」
少年が走り出した。
朱葦は肩を押さえながらも、尾を持ち上げようとした。

ボボウゥッ

火の塊が、少年の鎌の手に当たった。
「……流星様？」
朱葦はゆっくり振り返った。
流星は真っ青な顔をしていた。青い顔のまま、煌炎を構えていた。
「……許さねぇ」
流星はぎり、と奥歯を噛み締めた。
「今のかまいたち……さっきと同じだ」
朱葦を押しのけて、流星は前に出る。
「山下殺したのもっ、おまえだろ……」
「……あぁ？」
少年は目線を、山下の亡骸に向けた。
「そのゴミ？」
流星の中で、何かが切れた。

ボオオォォォォ！！

煌炎の炎が、一気に肥大した。
「う、うわぁっ」
卓人が悲鳴を上げた。

まずい、と朱葦は焦った。
炎が、抑えられないほど大きくなっている。

煌炎の炎は、使い手の霊力に呼応する。流星のように霊感の強い者の炎は、かなり巨大になる。
ましてや、怒りで我を忘れた彼の力は、煌炎の許容量を越えるかもしれない。
（悠様に、報告しなければ……）
朱華は意識を集中させた。出血のせいで、景色が揺れる。
（どうか、間に合って……）
朱華の姿が、その場から消失した。

――――

流星は走り出した。
煌炎の炎が、長い刃の形を形成する。
それを突き出すも、少年にあっさりよ避けられた。
「手間はぶけた。あんたから向かってくるとはな、華凰院　流星！」
少年は声を張り上げた。
流星は少年に向かって炎のかまいたちを放った。
「おまえを殺せば、親父も少しはむくわれる！」
右手の鎌でそれを斬り裂き、少年は両腕を振った。
かまいたち二発、発生する。一つは避けられたが、もう一つは左の二の腕を浅く斬った。
「っ……親父だと？」
「そうだ！」
少年は笑みを消し、怒りの表情を浮かべた。
「忘れたとは言わせねぇ。一ヶ月前！　椿　悠に殺された妖魔を！！」
「――！」
流星は怒りを忘れ、驚愕した。
一ヶ月前に悠が狩った妖魔といえば、一匹しか思い当たらない。

俺の家族を、殺した妖魔。

その男は、ふらりとやってきた。
対応したメイドを殺し、他の使用人さえも喰い殺した。
その家の主一家が、一番酷かった。
皮を剥がされ、体内をあばかれただけでなく、内臓全てを喰われ、全身をバラバラにされた。
無事だったのは、部活で遅くなっていた、一家の一人息子だけ。
父も母も祖父も、全員喰い殺された。
人の皮を被った、妖魔によって。

「親父の狙いはおまえだった。椿　悠がいなけりゃ、おまえを喰えたんだ！　死ぬこともなかった」
少年はギロリ、と流星を睨んだ。
「許さねぇ、おまえも椿　悠も！　内臓引っ張り出して、蛆虫の餌にしてやるっ」
かまいたちが、少年の周りに無数に発生した。
「おまえ、妖魔と半妖の違いを知ってっか？」
少年はギタッと笑った。
「妖魔は周りの人間の心に影響して、強くも弱くもなる。だが、俺達半妖は、己自身の闇で強くなんだよ」
かまいたちを背負うような姿の少年に、流星はぞっとした。
このかまいたちを受けたら……俺はただの肉塊になってしまうだろう。
「今の俺は最高に強いぜ。おまえらの恨みでなぁ！」
「っ……」
「ただじゃ殺さねぇ。斬り刻んで斬り刻んで斬り刻んで斬り刻んで斬り刻んで殺してやる！！」
かまいたちが目前に迫る。
よける、という選択肢が頭をよぎったが、後ろに卓人がいること

を思い出した。
朱華も、気付けばいなくなっている。
つまり、卓人には防御手段が無いのだ。
よければ、こいつまで死ぬ。
流星はかまいたちに向かって煌炎を振った。
炎のかまいたちが、空中で爆炎をまき散らす。
やった、と思った瞬間、煙を斬り裂いてかまいたちが迫ってきた。
「な！？」
「ブァカ。俺の攻撃がその程度で消えるか。死ねよ！」
少年の声に応じるように、かまいたちのスピードが上がる。
「くそっ」
流星は卓人の首根っこを掴んで走り出した。
「……っあ〝！！」
流星は声を上げた。
肩と足に感じる激痛。次の瞬間、地面に倒れ込んでいた。
「流星！　ち、血がぁっ」
卓人が叫んだ。
同じく地面に倒れ伏してるが、怪我はしてないようだ。
流星は立ち上がろうとして、あまりの痛みに目を見開いた。
右肩と右足、痛みからして、背中にも傷を負ったようだ。
「バッカじゃねぇの？　逃げられるわけねぇじゃん」
少年は嘲笑を浮かべた。
「今度こそ死ねよ。そのクズ友達と一緒にな！」
少年は両手を振った。
クロスされたかまいたちを見て、流星は唇を噛む。
今度こそ避けられない！
無数のかまいたちが、流星達に迫る。
流星はギュッと目を閉じた。

「……あれ？」
痛みも何も感じない。身体もくっついたままだ。
確かに何かが斬り裂かれた音がしたのに……
流星は、恐る恐る頭を上げた。
「なんとか間に合ったね」
艶やかな黒髪、綺麗な声、華奢だが力強さを感じさせる背中。
「ゆ、う……？」
「やぁ、流星。昨日振り」
悠はにっこり笑った。
「え、何で！？　どうしてここに？　つか、今何したんだ？」
「何って……かまいたちを刀で叩っ斬っただけだよ」
「離れ業を当たり前のように言うなっ」
流星は悠に怒鳴った。
何かめまいがする。会えて嬉しい。嬉しいんだが、どっと疲れた。
額を押さえた流星はふと、卓人のことを思い出した。
「そうだ。卓人、無事か……どぉっ！？」
「流星ぇぇぇぇ！　おまっ、ヒヤヒヤさせんなよっ。死ぬかと思ったろうが！」
卓人はいきなり胸ぐらを掴んできた。
「だぁぁぁ！　落ち着けっ。つか泣きすぎだろ。うおっ、鼻水汚ねぇ！」
「どっちにしろ血まみれなんだから変わらないじゃない」
悠はぴしゃりと言った。
「それに、まだ安心はできないよ」

流星は卓人を剥がそうとやっきになりながら少年を見た。
「椿　悠ぅぅ……てめぇだけは、俺が殺す！」
「……私、君に恨まれるようなことした？」
悠は小首を傾げた。
「悠、こいつは俺の……」
声がかすれていることに気付いた流星は、唇を湿らせて言い直した。
「こいつは、俺の家族を殺した妖魔の息子らしい」
「……あぁ、なるほど」
合点がいったのか、悠は再度少年を見る。
「親子そろって半妖になるなんて、頭おかしいんじゃないの？」
「うるさい！」
少年は右手の鎌を振り上げた。
が、それより速く、悠が刀を突き出して地面を蹴る。
鈍い音を立てて、刃が少年の心臓を貫いた。
「がっ……！？」
「私、今機嫌が悪いの。君ごときと長く話すつもりは無いよ」
刀を抜くと、少年の胸からどくどくと赤黒い血が流れ出た。
「雑魚が私の命を狙うなんて、身分不相応もいいとこだね」
「そうか？」
鎌が悠の首筋めがけて横薙ぎにされた。
ガギィィィィィィィィィィン！！
「今のはちょっと危なかったかな」
刀の腹で鎌を受け止めた悠はくすっと笑った。
「心臓貫かれても死なないなんてね。今まで何人喰い殺してきたの？」

「……さぁな。百人超えたとこで、数えんのやめたから――な！」
少年の左手がかすむ速さで悠の頭を狙った。なんと、左手まで鎌になっている。
悠は身をギリギリまで沈める。黒髪が数本舞った。
「おまえこそ、今まで何匹妖魔を狩ってきたんだよっ」
「さぁ？　千あるか無いかくらいかな」
悠は後ろに身を投げた。それを追い、少年は地面を蹴る。
「今度こそ死ねよ！　椿　悠っ」
「君は馬鹿だね」
少年の視界から、悠の姿が消えた。
「なんっ……ぐあぅ！！」
少年の両手が飛んだ。正確には、両手の鎌が。
「風を操ってたにしては遅かったね」
悠は刀を少年の前に突き付けた。
両手首から血をだらだら流した少年は、顔をひきつらせる。
「今なら見逃してあげるよ。私が斬ったのは妖魔化した手だし、心臓もその生命力なら、再生が可能だしね」
切っ先で少年の首筋をつつく悠は、哀れなものを見るような目で言った。
「今なら人の道に戻れる。復讐なんてくだらないこと続ける気なら」
プツリ、と少年の首筋から血がつぅっと流れた。
「ぐ……！　……う！？　あああああっ」
少年は突然めちゃくちゃに走り出した。
恐怖のあまり混乱したかと思ったが、どうも違うような……
「まさか。流星！　自分とその友達の目を塞いでっ」
悠が大声で言った。
不審に思いながらも、流星は言われた通りに卓人の目を塞ぐ。
しかし、自分の方は間に合わなかった。

ブシャッ

少年の身体が唐突にバラバラになった。
複数の刃物に斬り刻まれたように、肉片になるまで。
どこが腕か、足か、頭か、解らないぐらいに。
「……え？」
さっきまで生きてたはずだ。
なのに何だ、このあっけなさは。
何だ、この……息苦しい感覚は。
「なん、で」
流星は卓人の目から手を離しそうになった。
「流星、そのまま」
「え？」
悠が卓人の前に立った。
「何だ？　何が起きてるんだ！？」
卓人が喚いた。しかし、彼は知らない方がいいかもしれない。
流星は悠がしようとしていることを感じ取り、身体を少しずらした。
「悪いけど教えられないよ。ごめんね」
悠は勢いよく卓人のみぞうちを殴った。
くたっと全身の力が抜けた卓人を、流星はなんとか支える。
傷は負ってはいるものの、座った状態だったので苦労は無かった。
「……一体、何があったんだ？」
流星は血だまりを見ないようにしながら尋ねた。
「おそらく、彼には呪いがかかってたんだよ」
悠は刀を収めて答える。
「失敗したら、自分の術が己に逆流する呪だろう。彼の身体がバラバラになったのは、彼の風の力が体内から吹き出したからだと思う」
「そんな……むごすぎる。でも、誰がそんなことを？」
流星が訊くと、悠は顔を僅かにしかめた。
「一人……というか、一団体しか思いつかないでしょ？」

「！　それって……」

妖偽教団……

流星は唇を噛み締めた。

「君の友達には悪いことしたね」

悠は山下の死体に近付き、しゃがみ込んだ。

繊手を伸ばし、山下のまぶたを下ろす。ため息をついて立ち上がった。

「狙いは、多分私だよ。その一環として、流星を狙ったんだと思う」

「？　何で俺を狙う必要があるんだ？」

「それは……」

悠は急に口ごもった。

何か、微妙に顔が赤いような？

「そ、それより、これからのことを話そう」

露骨に話をそらした。

「流星、君はこれからどうしたい？」

「は？」

「私は、もう一度君にバイトをしてもらいたいと思ってる」

流星は卓人を倒しそうになった。

「マ、マジか！？」

「待って。まだ話の途中だよ」

悠は流星を押し留めた。

「その前に、流星の意志確認」

「俺の？」

「そう。君は、こっちに戻る気はあるの？」

悠はしゃがんで、上目遣いでこちらを見た。

じっと見つめられると、色々ヤバイのだが。

「もし戻ったら、もっと大変な目に会う。死ぬこともある。どうする？」

ふと、うもれていた記憶が頭をもたげた。
悠が、自分に手を差しのべてくれた時のことだ。
『こちらに来るか、否か』
「こちらに戻るか、否か」
今とあの時。状況は違うが、よく似ている。
悠は笑った。思わずどきりとしてしまうぐらい、蠱惑的に。
「全ては、君次第だよ」

このセリフを聞いたのも、久しぶりな気がする。
流星はずっと黙っていた想いを口にした。
「悠、俺……退魔師になりたい」
「え？」
「もう、目の前で誰かが死ぬのは嫌なんだ。もう、弱い自分でいたくないんだ」
家族を失って、友達も助けられなくて。
なのに自分は生きている。弱く、無力感を抱えて。
もう、こんな気持ちを持ち続けるのは嫌だ。
「悠、頼む！　退魔師にしてくれ。強くなりたいんだっ」
「……本気なの？」
悠は流星を驚き顔で見上げた。
「死ぬ確率、高くなるよ？」
「死なねぇ。絶対に」
流星は拳を握り締めた。
「誰かが死ぬ哀しさを、俺は知ってるから。だから死なねぇ」
意思表示のために拳を突き出すと、悠は眩しそうに笑った。
初めて見る笑い方だったので、流星の心臓が跳ね上がる。
「じゃ、約束ね。絶対生きるって。私も、生きるから」
悠は流星の頬に触れた。
ひんやりとした心地よい感覚に、流星は目を細める。

その様子を見て、悠は笑みを深くした。
「絶対に生きてよ。死んだら承知しないから」
「……あぁ」
流星は深く頷く。
やがて、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

――――

「また星見なの？　熾堕」
妖偽教団の本拠地にある大広間。本来は茶や会話を楽しむサロンのような部屋に立ち尽くす男に、月読は眉をひそめた。
「ところかまわずするのはやめてちょうだい。邪魔になるわ」
「……ん？　あぁ、月読か」
肩を叩くと、熾堕は初めて気付いた、という顔をした。実際今気付いたんだろう。
「最近星の動きが活発になっててな。が、まだ小さい」
「そう」
興味の無い月読は、ソファーの一つに腰を下ろした。
「刹嵐……失敗したそうよ。それも『視え』てたのかしら？」
「まぁ、一応」
銀糸をかき上げ、熾堕は息を吐く。
「言ってやればよかったか？」
「別に。言っても同じことでしょう、結果は」
「……確かにな」
空気が沈みかけた時、広間の扉が開いた。
「たりない……ビーズ、まだ……」
ショートカットの女の子が入ってきた。ピンクのワンピースを着た、十歳前後の子供だ。
「ピジェッラ」
熾堕が声をかけると、少女――ピジェッラは顔を上げた。

大きな目に、そばかすの浮いた顔をしている。
「シダ。ビーズ、あとちょっとで、そろう」
つたない言葉に熾堕が「そうか」と答えると、ピジェッラはにまぁ、と笑った。
「ピジェッラのねがい、かなう。ヒメサマ、よろこぶ」
ピジェッラのワンピースのポケットから何かが落ちた。
糸を通す穴が空けられている、白い物体だ。
「あとヒトリ、ころしたら、ピジェッラのねがい、かなう！」
ピジェッラは無邪気に笑った。
己の罪も、解らないで。

第八話　祓魔の武器職人<上>

すすり泣く声が聞こえる。
山下の母親のものだろう。
（まさか、こんなに早く友達の葬式をすることになるなんてな）
流星は内心で嘆息した。
「卓人、おまえ大丈夫か？」
木下の声に流星はふと、隣を見た。
卓人は真っ青だった。
無理もない。あんな場面を見たら、誰だってそうなる。
自分も少し耐性があるだけで、あれに何も感じないわけじゃない。
舞う血の臭いは、今でも脳にこびり付いている。
あの後、警察に一部始終を、次郎には全てを話した。
全部聞き終えた次郎の一言目はまたか、だったが、その後は慰めの言葉をくれた。
しかし、流星が退魔師になると言うと、一気に渋い顔になっていた。
悠の説明に納得したようなことを口にしたが、本心はどうなんだろうか。
卓人の方は朱華の力で記憶を改ざんしたため、山下が殺された後のことは覚えてない。
だが、あの凄惨な光景は忘れていない。
朱華の話だと、印象が強すぎる記憶は、消し去るのはほぼ不可能らしい。
一昨日、少しの間だけ病院に居た時も錯乱の様子を見せていたし、

この様子だと思った以上にショックは大きいようだ。
今も、叫ぶのを我慢しているかのような表情を浮かべている。
この場にいる全員が、こんなことが起こるなんて予想してなかったろう。
誰も、山下が死ぬなんて思いもしなかったろう。
それほどまでに、死は突然なのだ。
生きていた者が、次の日死ぬ。
生者が死者になるのは自然な流れだけど、それがいつなんて誰も解らない。
死はゆっくり来るものではない。気付けば傍にあるものだから。

葬式を途中で抜け出した流星は、葬式場の門の前に居る悠を見つけた。
それはいいのだが、なぜか若菜も一緒だ。中にいないと思ったら、外に出ていたらしい。
珍しい、というかありえない組み合わせである。二人は互いのことを知らないはずだ。
とりあえず近付くと、先に悠がこちらに気付いた。
「おはよう、流星」
悠は挨拶と同時に素早く流星の手を取った。
驚いている内に、ぐいぐい引っ張られる。
「ちょっと！　待ちなさいよっ」
若菜が叫んだ。明らかに怒っているような。
「やだよ。君なんかに指図されないから」
悠は若菜に向かって舌を突き出した。
あっ可愛い、と思えたのは一瞬である。
もの凄い力で引っ張られ、流星は悲鳴を上げた。
「いづっ。悠、そんな引っ張んな！　腕もげるっ」
「あの人嫌いだよ」

「い゛!?」
無理矢理歩くことになった流星は、悠の口から出た嫌いという単語に敏感に反応した。
「流星に近づかないでって……意地悪だね、君の幼馴染み」
あ、何だ。若菜のことか。
流星は深く安堵した。
でも、一体二人の間に何があったんだ?
「流星、このままこの間言ってた人のところに行くけど、いい?」
「あ、あぁ」
流星は戸惑いながらも頷いた。

流星が退魔師になるにあたって、一つ問題があると悠は言った。
それは、武器である。
脇差の煌炎でもいいじゃないか、とも思ったが、駄目なんだそうだ。
もともと煌炎は悠専用の退魔武器であり、悠にしか完全に扱いきることができない。
悠は護身用に渡しただけで、流星用の武器など全く考慮に入れてなかった。
しかし流星が退魔師になることで、話は大きく変わってくる。
つまり、流星専用の武器が必要ということだ。 そこで、これから退魔武器専門の武器職人に煌炎を打ち直してもらいに行くのである。
本来は一から造るのだが、妖偽教団のことがある以上、悠長にしていられない。煌炎を元にした方が早いのだ。

流星は横目で悠を盗み見た。
ここ四日間で、悠の気まぐれっぷりが嫌というほど解った。
辞めろと言った次の日にまたやれと言ったり、本当に疲れる。
おまけに自分は、それに一喜一憂してしまうのだ。

神経がいずれ、すりきれて無くなってしまうかもしれない。
離れればいいじゃないか、とも言われそうだが、それもできない。
なにしろ、目を離したらどこに行くか解らない子猫のような存在なのだ、悠は。
（……ん？　それって、俺一生悠から離れられないってことか？）
今更そのことに気付く流星だった。

――――

「華凰院君って、華凰院財閥の人よね」
日影の質問に、紅茶を淹れていた燐は顔を上げた。

鬼道宅の居間である。
家を失った日影達に部屋を提供した燐は、彼女達に同情しつつも、それを表に出さなかった。
同情しても、彼女達の傷は癒されない。むしろ、傷口をえぐってしまうだろう。
今自分にできるのは、彼女らの手助けをすることだけだ。

なので、突然の問いにも穏やかに「そうですよ」と返した。
「……じゃ、一ヶ月前の事件を解決したのも、悠なのね」
「はい」
燐が頷くと、日影はいぶかしげな顔をした。
「華凰院財閥といえば、日本経済を担う超ド級の大金持ちじゃない。何で、あの娘のとこでバイトしてるんだか」
「あ、そのことなんですけど」
燐は口を開きつつ、言っていいかどうか迷った。
しかし、完全に聞く気モードの日影を誤魔化せる自信が、燐にはない。
仕方なく話し始めた。

「華凰院さんは華凰院姓を名乗っていますが、もうその家の人間では無いんです」
「……って、言うと？」
「今の当主は彼の叔父なんですが、その人は兄夫婦を嫌ってました。できのいい兄を妬んでたんでしょう。また、当然でしょうが息子の華凰院さんも嫌ってたようで、彼の祖父である華凰院　竜玄（リュウゲン）にあることないこと吹き込んでいたようです。効果は無かったようですが」
「……」
「そんなことがあって、華凰院さんの家族と祖父が殺された時、真っ先に疑われたのは叔父でした。しかし、証拠不充分で捜査は打ち切り、事件は迷宮入りに……表面上では、ですが」
「真実は、悠が犯人の妖魔を狩って解決したのよね」
「ええ。悠がすぐ妖魔を狩ったからいいものの、そのまま放っておいたら華凰院さんも喰われてたかもしれません。そんなことがあって、叔父は華凰院さんを追い出しました。表では更なる被害者を防ぐため、本当は邪魔者を消すために」
燐がそう話をくくると、日影は複雑な顔をした。
「さすがの情報力ね、燐。それにしても……辛かったでしょうね。彼、家族だけじゃなく、家も失って」
「でしょうね。そんな彼を救ったのが、悠なんです」
燐は、なるべく感情を出さないよう言った。
胸中にある、嫉妬の念が吹き出しそうだからだ。
男の嫉妬は醜いと言うが、まったくだ。
これを表に出したら、醜態をさらしていることと相違ない。
「狙った理由は、彼の異常なまでの霊力ね」
日影の言葉に、燐は頷くだけにとどめた。
「会って解ったわ。あれは、放っとくと危ない。本来、あの力は人が操れるものじゃないのよ」
「ええ。コントロールできなければ、いずれ飲み込まれるでしょうね」

そうなればいいのに、と思ったことは黙っておいた。
「ともあれ……悠に任せるしかありませんよ」
「そうね。ところで」
日影が真剣な顔で口を開いたので、燐は少し身構えた。
しかし、彼女の言葉は拍子抜けするようなものだった。
「他のみんな、どこ行っちゃったの？」
燐が呆然としたのは言うまでもない。

今それ訊きますかっ。

こめかみを押さえつつも、律儀に答える。
「他の皆さんは、仁菜と一緒に買い物に行きましたよ」
「私と燐を置いて？」
「あ、貴女寝てたでしょうっ」
「じゃ、燐は何で？」
「日影さん置いていけるわけないでしょうが。寝てたんですから」
起こせばよかったのに、とふてくされる日影に、本格的に頭痛がしてきた燐だった。

――――

縁側に座った恭弥は庭には目もくれず、手の平ばかり見つめていた。
「恭弥様、そろそろ部屋に戻られては？」
背後に控えた氷華の言葉に、恭弥は首は横に振った。
「おまえこそ、奥に戻ったらどうだ。雪女（ユキメ）のおまえには、この日差しは毒だろう」
「いいえ」
氷華はするり、と恭弥にすり寄った。
「氷華は貴方のお傍に居たいのです」

妖しい微笑を向けられ、しかし表情は一ミリも動かさず、恭弥は「戻れ」と命令した。
氷華は少し傷付いたような顔をしたが、すぐに言われたようにした。
(今頃悠は、景信(カゲノブ)さんのところか)
家にいない妹のことを思い、恭弥は頬杖をつく。
兄は当主代行として、家の奥でいそがしく手を動かしているところだろう。
自分の周りだけ、静かだ。
まどろむ恭弥の左手に、白い蝶が舞い降りた。
焦点の合わない目で、恭弥は蝶を見つめる。
時が流れる。静かに、静かに。

ぐしゃり

恭弥は我に返った。
手にねっとりとした、嫌な感触を感じる。

今、僕は何をした?

左手を開いて目を落とす。
蝶がいた。
羽がひしゃげ、潰れた身体から体液をにじませた死骸がいた。
「僕は……」
一瞬、自分じゃない自分がいた。
意識が、乗っ取られる感覚があった。
「……もう、残された時間は少ない」
内側からがらがらと、自己が崩壊していくのが解る。
いつまで自分は『自分』でいられるのだろうか。
「早く、早く人柱を」

恭弥は唇を噛んだ。

車に揺られて早二時間。
今、流星達がいるのは、古い家が建ち並ぶ小さな町だった。
北側に山がそびえ、東側に大きな川が見える。
「変わってないな。五年前と、変わってないよ」
悠は窓の外を見つめて呟いた。
「この辺りでいい。後は歩くよ」
「はい」
悠に言われ、運転手は道路脇に停車させた。
黒い車から降りると、運転手は「では、後ほど」と言って車を発進させた。
「さて。この近くのはずだけど」
悠はんー、と伸びをした。黒いシャツがめくれて白い腹が見え隠れする。
目のやり場に困った流星は建物を眺めた。
「ここ……東京都内？」
「一応ね」
「マジでか」
こんな田舎が東京にあるのか、と顎が落ちる。
「じゃ、行こうか」
「お、おう」
歩き始めた悠と朱嶌を追いかけるようにして続く流星は、一つ尋ねた。
「なぁ悠。今から会いに行く、その景信さんって人、どんな人なん

だ」

悠は歩きながら、少しだけ首を巡らしてこちらを見た。

「いい人だよ。大阪出身の鍛冶屋なんだけどね。面倒見がよくて面白いの」

「へぇ」

大阪出身だから、面白いのは当然だろうな。

少し偏見がにじむ考え方で一人納得していると、二人が立ち止まった。

「ここだよ」

「……？　普通の民家だけど」

目の前のいかにも古風、といった家に、流星は首を傾げてしまう。

悠はインターホンを押した。　無機質な電子音の後に、家の中からドタドタという音が聞こえてきた。

「悠ちゃん！　久しぶりやなぁ」

玄関が開いたと同時に聞こえたのは、バリバリの大阪弁だった。

出てきたのは、中年の男である。

筋肉質な身体を灰色の着物と白シャツで包み、黒髪を短く刈り込んでいる。武骨な顔に浮かんでいる笑みは、親しみを覚えた。

「久しぶり、景信さん。元気そうでなによりだね」

「元気も元気。今日も元気で酒がうまい、やで。で、そっちが噂の……」

男――景信は流星を見て、笑みを深めた。

「そうか、あんたが華凰院　流星か」

「は、はい」

「わしは白杉（シラスギ）景信や。よろしくな」

景信はごつごつした手を差し出した。

流星はおっかなびっくりその手を握る。たこだらけの、固い手だった。

「話は刀弥君から聞ぃとる。工房に案内するな」
「あ、待って」
悠は踵を返しかけた景信をひき止めた。
「私、他に用があるの。流星、頼める？」
「ええけど……もしかして修行か？」
景信が尋ねると、悠はこくんと頷いた。
「そうか。嫁入り前の大事な身体やし、無茶したらあかんで」
「解ってるよ」
悠はにこっと笑って朱華を連れて、歩み去ってしまった。
「ほんまに解ってんのかなぁ。相変わらず何考えてんのか解らん」
景信は頭をかいた。
「まぁええわ。流星君、なか案内するわ」
「あ、はい」
流星はしばし呆然としていたが、ハッと覚醒した。

裏庭を通ると、家に繋がるようにして建てられた小屋が目に入った。
「あれが、工房ですか？」
「あぁ。煌炎、持ってるか？」
流星は肩にかけた小さいスポーツバッグから、小刀を取り出した。
「うん。見たところ錆びてへんし、半日もあれば打ち直せるな」
「そうですか！」
「待ってな。今、鍵開けるから」
景信は帯にひっかけてあった鍵束から、金色の鍵を取り外した。
それを小屋の鍵穴に差し込んで回すと、かちり、と小さい音がした。
景信が扉を横に引くと、油と鉄の臭いが鼻についた。
「さ、打ち直すか。貸してみ」
景信の差し出した手の上に、流星は煌炎を置いた。

―――

赤く燃える刃に、何度も金槌が降り下ろされる。
流星はテレビでしか見たこと無い光景を、少し離れて見物していた。
「……暑いですね」
口を開けると、思った以上にげんなりした声が出た。
入った当初は肌寒かったぐらいなのに、今やサウナ並みに暑い。
学ランを脱いでもほでるので、腕まくりして上のボタンを二、三個外した。ちっともマシにならないが。
「そうやなぁ。でも我慢しぃや。流星君にも手伝ってもらわなあかんし」
一番暑い思いをしているはずなのに、景信はけらっと笑った。
「血の提供、でしたっけ？」
流星が先程聞いた話を思い出しながら言うと、景信は頷いた。
「あぁ。刃に主の血を二、三滴吸わせな、武器は主を主と認めん。武器の能力を扱いきれん」
まるで武器が生きてるかのような口振りだ。
そのことを指摘すると、景信ははははっと笑い声を上げた。
「わしら鍛冶屋にとっちゃ、武器は生き物や。精根込めて育てた子供や。使い手にとっても、共に戦う相棒やろ？」
流星はそう言われてうつむいた。
流星は武器を、ただの道具だと思っていた。
守ることも、傷付けることもできる戦いの道具。
だが景信にとっては、子供と同等なのだ。
道具だと思っていた自分が、急に浅ましく思えてきた。
「血を、吸わせるのは……認めてもらうためですか？」
「そや。まぁ、契約やな。裏切らんように。打ち直すんは、前の契約を無効化するためや」

「それって……姫シリーズもですか？」
流星はふと、疑問に思ったことを口にした。
不思議に思ったのだ。
姫シリーズは、平安時代に造られた武器のはず。
なのになぜ、現代を生きる悠が姫シリーズの一つである剣姫を扱えるのか。
ただ流星は、単純にこの人が打ち直したんだろうと思った。
だが、事実は違ったのだ。
「姫シリーズは、普通の退魔武器とちゃう」
景信は手を休めず言った。が、明らかに表情は変わっている。
「彼女らは意志を持っとる。それも人間のもんと近い自我をな」
「自我？」
流星は首を傾げた。
「そう。彼女らは誇り高い。ゆえに、使い手を選ぶんや」
景信は脇の鉄製の水桶に、真っ赤になった刃を入れた。

ジュウウウウウウウウ……

凄い音と煙を上げて、刃の色が白銀になった。
「選ばれなかった人間やったら狂い死ぬ。選ばれんかったら、持つことさえできへん」
「じゃ、悠はやっぱ凄いんだ」
複雑な気分である。
好きな女の子が自分より強く、更に自分より凄くては男として立つ瀬が無い。
「……選ばれんかった方が、幸せやったろうな」
「え？」
流星が顔を上げると、景信は刃の腹を見つめながら難しい顔をした。
「彼女らが使い手を選ぶのは、自分を扱う人間としてやない」

景信の目に、かげりが宿った。

「身体を、乗っ取るためや」

「……は？」

流星は驚いて景信を見つめた。

武器が持ち主の身体を乗っ取る？　何だ、その漫画的な展開。

反射的にそう思ったが、景信の表情は冗談を言うものではなかった。

「プライドの高い彼女らが、武器の姿で満足するわけない。自分の肉体にふさわしい身体を欲して主を選ぶんや」

かち、と刃が柄に付けられた。

「特に悠ちゃんの『剣姫』は、百年以上持ち手がおらんかったほど。あの娘にとって、それが幸やったんか不幸やったんか。しかも」

景信はため息をついた。

「選ばれ方が、あんな形やし」

あんな、形……？

流星は目を瞬いた。

「あんな形って、どういうことですか？」

今度は景信が目を瞬く番だった。

「何や。知らんのか？」

「……何がですか？」

「そうか……まだ話してないんか」

意味が解らない。

流星が顔をしかめていると、景信は首を振った。

「わしの口から話すには、少々荷が重い。時が来たら解る。それよりほら、できたで」

差し出された煌炎を、流星は近寄って手に取った。

炎は出ない。今はただの、美麗な小刀だ。
「刃を手の平に押し付けて、刃に血を吸わせて」
流星は固まった。
「え、あの……ちょっと勇気いるんですけど」
「軽くでええから」
促され、流星は恐る恐る手の平を刃で斬る。
ピリッと傷口が血が刃を伝うのが同時だった。

ボオゥッ

「！　うわっ、あづ！　げ、髪の毛の先焼けたー！！」
あわてふためく流星の手の中で、煌炎は刃にこうこうと炎を揺らめかせていた。
「ハハ！　成功やな」
景信はからから笑った。
「ちょ、景信さん！　鞘、マジでどこ!?　火力強すぎだしっ」
「落ち着け。火に小さくなれって念じてみ?」
言われた通り火が小さくなってほしいと思うと、ぼうぼう燃えていた炎が急激にしぼんだ。
「し、死ぬかと思った……」
「常に冷静でおらな、退魔師にならられへんで。慌てたらミスるだけや」
「はい……」
一気に気が抜けた流星である。なんか、腹も減ってきた。
「時間も時間やし、ちょっと遅いけど昼飯にするか?」
流星が同意したのは、言うまでもない。

―――

町の北に位置する山は、霊山としてあがめられている。

人の出入りは禁止され、動物達ですら息をひそめてしまうほど、音は無い。

――いつもならば。

無粋にも、草をかきわけて山の中腹まで足を踏み入れている者がいる。

悠と朱嵒である。

だが、二人は決して招かれざる客ではない。

悠は山の主に許可を取ってあるし、朱嵒にいたっては。

「どう、朱嵒？　久しぶりの故郷は」

『変わりありません。景色も空気も、何もかも』

悠の目線の先には、人間ほどの大きさの身体に白銀の毛、九本の尾を持つ巨大な狐が居た。

これが、朱嵒の本来の姿である。

そして同時に、この山の主でもあった。

『悠様。頂上なら、開けた場所がございます。そこで修行なされるのがよろしいかと』

朱嵒の声は鼓膜を震わせるものではなく、脳に直接響くものだ。

狐の声帯では人間の声を出すことはできないので、念を送って会話するのである。

「じゃ、そうしようか。朱嵒、乗せて」

『御意』

朱嵒は身を低くした。

悠はひらりと朱嵒の背に乗ると、彼女の首に腕を巻き付けた。

浮遊感が来た。

高所恐怖症ではないので、身を乗り出して下を見る。
町が小さい。ジオラマみたいだ。
「流星、どうしてるかな」
思わずそう呟き、笑ってしまった。
ここまで彼の存在が、自分の中で大きくなっていたとは。

今朝、流星の幼馴染みだという高野　若菜（高野刑事の娘だろう）が言ったのだ。
流星に近付かないで、と。
勿論笑い飛ばしてやった。そんな命令する権利、貴女には無いと。
一昨日まで流星を傷付けたくないと思っていた弱気な自分が、嘘のようである。
傷付けても巻き込んでもいい、一緒に居たい。今はそう思っている。
身勝手なのは解っている。でもこれが、自分の素直な気持ちなのだ。

考えごとをしている間に、頂上に着いていた。
低い草が生えているだけで、風も弱い。
「うん。ここなら集中できるよ」
悠は朱葦から降りて、刀を抜いた。
心臓の音が、少し大きく聞こえる。
（緊張してるのかな）
悠はふっと笑った。
……らしくない。
「剣姫、部分解除」
悠がそう呟いたとたん。

刀を持った右腕に激痛が走った。

「……――っ！！」

悲鳴にならない悲鳴を上げ、それでも刀を落とさないでいると、今度は声がしてきた。

『愚かな娘。私を操れると思うたか？』

脳と視界が揺れる。足元がぐらぐら震えている気がした。

吐き気がしてくる。だがそれをこらえ、刀を持ち上げた。

『罪にまみれたおまえに、妖魔を狩る資格があるか？　罰を与える資格があるか？』

「黙り、なよっ……」

悠は両手使いで構えた。左手にも激痛が走る。

『苦しみたくなかろう？　辛い思いは嫌だろう？　楽になりたくば、私に心を預けよ』

悠はふっと笑った。

こんな痛みの中で、よく笑っていられる。私はマゾだったか？

悠は眉をひそめた。

……違う。

笑っているのは、自信からだ。この刀をねじ伏せる自信があるから。

「いい加減、喋るのを止めたら？　『剣姫』」

『何……！？』

「私は、おまえに負けない」

刀を振り上げ、悠は声を張り上げた。

「あの日誓った。私は、何にも屈しない！！」

白銀の刃が降り下ろされた。

とんでもない破壊力を持って。

ドゴオォォォォォォォォォォンッ

地面が割れた。

刀から放たれた衝撃波が、山を斬ったのだ。

斬られたところは、谷のように深い溝ができてしまっている。

想像以上の破壊力に、さしもの悠も唖然としてしまう。

同時に、全身の力が抜けて座り込んだ。

疲れて立ってられない。息も絶え絶えだ。

「第一関門は……クリア、か。ハァ……」

『はい。しかしこれでは、即戦力にはなりませんね』

「いや」

朱嶌が歩み寄ってくると、悠は首を横に振った。

「多分次は大丈夫だよ。……それよりおまえの山、斬っちゃったけど……」

途方に暮れた声を上げる悠に、朱嶌は深紅の瞳を向けた。

『この程度で崩れる山ではありません。幸い巻き込まれた動物はいないようですし』

「ならいいんだけど。……ん？　あれは……」

悠は町の西側を見て、眉をひそめた。

上空に黒い雲が見える。いや……あれは雲か？

目を凝らして見つめること、数秒。

「……朱嶌」

『はい？』

「今すぐ、流星のところに戻るよ。すぐにだ！」

悠は朱嶌に飛び乗った。

「あれは、百鬼夜行だ」

ぎりっと奥歯を噛み締め、刀を鞘に戻した。

「あの方角には梅見家が……奴らの狙いは人柱だ！」

「ごちそうさまでした！」

流星は箸を置いた。

「マジうまかったです！　俺も一人暮らしなんですけど、料理はうまくできなくて……」

まさか実物を見ることがあるとは、と思っていたちゃぶ台に器を置き、素直に食事の感想を述べる。

「一人暮らし始めて、まだ日ぃ浅いんやろ。それやったらしゃぁない。慣れや慣れ」

景信はそう言って食器を下げ始めた。

手伝いましょうか、と訊いてもいい、と笑顔で返される。どうやら相当の世話好きらしい。

「しかし、流星君も大変やったなぁ」

景信は居間の奥にある洗い場で食器を洗いながら、呟くように言った。

「その歳で一人暮らしやし、何よりその」

顔だけこちらを向け、流星を見つめる。

「霊媒体質や。今まで他人に言えんような辛い思いや、怖い思いしたやろ」

「……はい」

流星はうつむいた。

確かに、昔は酷い目に何度も会った。悠と行動を共にするようになってからは、そんなこと無くなったのだが。

「しかしそんな強力な力持っとったら、とっくの昔に妖魔に喰い殺されとるはずやけど」
洗い物を再開してさらっと恐ろしいことを言う。流星はひきつった笑いを浮かべた。
「何で無事やったんか……もしかしたら……」
景信が口を開きかけた時、玄関を叩く音が聞こえた。
「何や何や。騒がしいなぁ」
景信は顔を少ししかめつつ、玄関の方へ向かった。

――そうだ。何で俺は生きてるんだろう。

流星は自身の手の平を見つめた。
家族の中で一人だけ、物心ついた時から霊が見えていた。
誰にも見えてないのになぜ自分だけ、と思ったこともあった。
姿無き者の苦しみの声を聞くことも多かったが、何もできなかった。
見えても聞こえても何もできず、恐怖と苦悩にはさまれ、息苦しい日々を送った。
家族の死も自分のせいだと知った時、どれほど苦しんだか。

――でも、今は違う。

もう、無力さに泣くことはしない。
強くなりたいから。
もう、弱くはいたくないから。
もう二度と、大切なものを失うわけにはいかないから。

「流星！」

自分の考えに浸っていた流星は、悠がいつの間にか目の前にいる

ことにびっくりした。
「悠、どっ、どうしたんだよ」
「話は後。とにかく来て」
悠は流星の手首を掴んで小走りになった。
「景信さん、ごめんね。ろくにお礼もできなくて」
玄関で突っ立てた景信に悠が声をかけると、彼は表情を引き締めた。
「いや、それはええけど、気ぃ付けてな。わしは戦われへんから、応援しかできへんけど」
「それだけで充分だよ」
悠はふっと笑って玄関を出た。
「お、おい悠！　いい加減、説明しろよっ」
「妖偽教団が居た。奴ら、梅見家の人柱を狙う気だよ」
悠の言葉に、流星は目を剥いた。
「おい、梅見って……紗矢さんの居いとこじゃねぇか！？」
「そう。梅見家の方には既に連絡してある。私達も加勢しよう」
悠は走り出した。
「この先で車に乗り込む。十分もあれば梅見家の本家に着くはずだよ」
悠は足を速めた。
「大丈夫なのか？」
「多分。でも」
悠は顔を歪めた。
「嫌な予感がする……間に合えばいいけど」

――――

燃えていく。何もかもが。
「そんな、馬鹿な」
梅見　霧彦は舘の本館に駆けつけ、呆然とした。

結界も張った。十数人の手練れも護衛として付けた。
なのに……人柱は討ち取られた。

護衛の退魔師は全員血に沈み、妖魔に身体を喰い荒らされている。
人柱の少年の死体も無惨なもので、全身を針のようなもので貫かれていた。
そしてその針は、人柱の傍に立つ妙齢の美女の服が変化したものだった。
「……あらん？　貴方なかなかの美形ね♪」
美女はくるりと振り向いた。
ぞっとするほどの美貌に、霧彦は気圧される。
しかし身体の震えを抑え、キッと女性を睨み付けた。
「貴様が羽衣姫か」
「そうよん♪　貴方は……梅見家当主、梅見　霧彦ね」
人柱の身体から針がずるりと抜けた。
頭も無数の針で貫かれているため、服装以外での判別は不可能だった。

まだ十歳だったのに……

「夢人（ムト）……すまない」
霧彦は拳を握り締め、カッと目を見開いた。
「羽衣姫！　貴様は私が討つっ」
スーツの袖から透明な糸が飛び出た。
「！　それは『綾糸姫（アヤイトヒメ）』ね。当主がそんな危ない武器使っていていいのぉ？」
「百も承知だ。しかしたとえ己の精神が喰われようと、貴様を狩る！」
「……面白い自己犠牲ねん♪　でもぉ」

シュルシュルシュル……

羽衣姫の服が一部、彼女の両手に集まる。
「貴方もまた、妾に傷すら付けられないわ♪　だって妾には」
両手の布が、ガントレットのように羽衣姫の手を包んだ。
「忌々しく、強力な防御があるんだものぉ！！」
羽衣姫は地面を蹴った。
「『綾糸姫』、部分解除」
霧彦の声に呼応するように、糸がぼうっと光を灯した。
霧彦は右手を振るう。
「大蛇（オロチ）の陣」
ボソッと呟くと、糸が一つに集束した。
人の胴ほどもある太さまで集まり、黒がかった青緑色の鱗が現れる。
まばたきをしているうちに、糸は巨大な蛇に変わっていた。
大蛇は大口を開け、羽衣姫に突っ込んでいった。
「愚か♪」
羽衣姫はくすっと笑って手を持ち上げた。

受け止めらた。

蛇の鋭い牙を掴み、なおも迫る大蛇の動きを細腕で抑え込んでいる。
（馬鹿なっ。あれを受け止められるなど！）
呆然としていると、羽衣姫は掴んだ大蛇の牙を握り潰した。
音を立てて牙が砕け散る。とたんに大蛇は糸に戻ってしまった。
「これで終わりじゃないわよねぇん♪」
「……無論だ」
霧彦は再び右手を、そして左手も振った。糸が空中で舞う。

「龍の陣！」
両手の糸が、一本に集束する。

グギャアアア

水着のような薄い服装なのに、火傷一つ、焼け焦げ一つ無い。
防いだ様子も無かった。なのに、羽衣姫は何事も無かったように目の前にいる。
悪夢のような光景に、霧彦はめまいがした。
「封印が解けかかってる妾に、傷を付けられないなんて……期待外れもいいとこねぇん」
羽衣姫はつまらなそうに謎の言葉を呟いた。
「弱い奴に興味は無いわよん。消えて」
「くっ。なめるな！」
霧彦は龍を再び羽衣姫に向けようとした。

ドスッ……

突き刺さる音が響く。
「その両側に付いてるのは飾りなのん？　妾は消えてと言ったのよ」
羽衣姫の手はいつの間にか目の前に移動し、霧彦の胸を貫き、心臓を掴んでいた。
「ぐ、あっ……」
霧彦は苦痛で呻く。
「こ、のっ……」
それでもなお、残った力を振り絞ろうと腕を持ち上げた。
「あらん♪　まだそんな元気があったの」
羽衣姫は笑った。
背筋が、いや、全身が凍り付くような嘲りの微笑だった。
「じゃぁ……動けなくしてあげる♪」

ブチブチブチィッ

血管が引きちぎられる音が耳に届く。
霧彦の目に最期に移ったのは、狂気に満ちた羽衣姫の笑みと、彼

女の手の中にある己の心臓だった。
「すまない……みんな……」
霧彦はかすれた声で呟く。
意識が、永遠に閉ざされた。
――――
グチャックチッ……
きな臭い部屋の中で、咀嚼音が響く。
中に足を踏み入れた熾堕は、凄惨な光景を見てその美貌に僅かな嫌悪を浮かべた。
もはや誰だか解らない幾つもの焼死体。その下の床は、血で変色している。
唯一生前の姿を保っている死体も心臓を失い、焦点の合わない目を天井に向けている。
先程死んだばかりのようで、左胸からはまだ血が流れ出ていた。
手には、透明な輝く糸が幾つも握られている。
(梅見家当主、梅見　霧彦か)
熾堕は男の死体をしばらく見つめた後、目を外す。
「羽衣姫様」
表情を消し、死体の山に座る美女に一礼した。
羽衣姫は死体の一部をちぎり、口に運ぶ。絶世の美女だけに、その様子に吐き気を覚えた。
「熾堕ちゃん……♪」
屍肉をあさりながら、羽衣姫は満面の笑みを浮かべた。
「フフフ……人って、なんて愚かなのかしら♪」
「は……？」
「心だとか、意思だとか、そんなもの関係無いのにぃ♪」

すぐ傍の、半妖の頭を持ち上げる羽衣姫。
首が脆くなっていたのか、ちぎれて胴体が再び床に伏した。
「しょせん人間は肉と骨！　目に見えぬものなど、生きるのに邪魔なだけだわ♪」
フフフ……アハハハハ！
子供のように笑いだす羽衣姫を見つめていた熾堕は、少し声を張り上げた。
「ご命令通り、ピジェラを向かわせました。しかし、なぜその必要が？」
羽衣姫の笑いがぴた、と止まった。
「……この家のもう一人の姫持ちは、まだ一週間ほどしか退魔師の修行をしてないそうよ」
半妖の頭を抱えながら、羽衣姫は独り言のように言った。
「それなのに『卯杖姫（ウヅエヒメ）』に選ばれた。今は大した力は無いようだけど、危険な芽は摘んでおかなくちゃ……♪」
クスクスと笑いながら、羽衣姫は半妖の頭蓋に歯を立てた。
――
肩の衝撃で、紗矢は誰かにぶつかったのが解った。
すみません、と頭を下げ、また商店街の街道を走り出す。
『紗矢、急げ。気配が近付いてきてる』
ツバサの声が脳内で響いた。
（解ってる。……もっと体力作り、すればよかった）
自分の体力の無さに嘆息し、紗矢は切れる息を抑えた。
（せめて街を抜けなければ、周りを巻き込んでしまう）
手元にある杖をは抱え込む。
三十センチほどの、黒い杖だ。先端に緑色の宝玉があしらわれて

いる。
（霧彦さん……なぜ）
自分が未来を教えたのが間違いだったのだろうか。
死の運命を教えなければ、かえって彼は助かったのではないだろうか。
『どっちにしろ、あの人は死んでたと思うぜ』
ツバサのあきれ声が響く。
『責任感強い奴だったし。おまえには逃げろっつったのに、自分達は残るって』
（……それもそうだな）
本当に、父に似た人だった……

「みぃぃぃっけぇぇ」

影が重なった。
ハッと顔を上げると、巨大な骨のみの手がこちらを押し潰そうと迫ってきた。
地面を蹴り、ギリギリのところでよける。すぐ後ろで、衝撃を感じた。
『あっ……ぶね！　もうちょっと遅かったら潰されてたよっ』
「あ、あぁ……」
思わず口に出して返事をしていると、笑い声が聞こえてきた。
子供の、女の子の声だ。
巨大な手が落ちてきたことで、周りの人間は音一つ立てられず、恐怖で固まっているのに。
「さいごの、ヒトリ……これで、そろう。ねがい、かなう」
道の奥から、人の間を縫うようにして少女が一人現れた。
茶色の髪に黄土色の瞳、顔立ちはあどけなく、頬にはそばかすが浮いている。
ピンクの子供っぽいワンピースの少女は、にっこり笑った。

「あたし、ピジェッラ。あなたのビーズ、ちょぉだい」

第九話　髑髏と少女、そして邂逅＆lt;上＆gt;

炎が舞った。

「グ、ガァ……」

古臭い鎧を着込んだ骸骨達が、炎に焼かれて呻く。

「流星、ナイス。後は私に任せて」

刀を構えた悠は地面を蹴り、骸骨達の頭上まで飛んだ。

その際に淡いブルーの下着が彼女のスカートの下から見えたので、慌てて流星は目をそむける。

戦闘中に何やってんだ俺っ、と己にツッコみつつ、小刀を構え直した。

が、自分が手助けする必要はもう無さそうだ。

悠はかかしでも相手にしてるかのように、骸骨達を薙ぎ倒していく。

いつものことながら、少女（しかも超絶美少女）だということを忘れそうになるくらいの戦いっぷりだ。

しかも、目を奪われるくらいの鋭い美しさを兼ね備えている。

凛とした横顔、鬼女のような動き、舞踏のような剣さばき……

それらに流星が見惚れている間に、骸骨達は一体残らず地に伏してしまった。

「口ほどにも無いね」

悠はいつもの不敵な笑みを浮かべて刀を下ろす。

彼女の首に巻かれたチョーカーに付いた十字架が、キラリと輝いた。

流星達は現在、梅見家のある街に通じる国道にいた。
人気の無い道だと思っていたら、骸骨達の足止めを喰らったのだ。
全員落武者の姿のようで、ボロボロの鎧を着て、干からびた髪はざんばらだった。
悠は淡々と敵を倒していたが、流星は正直ゾッとした。
自分も死んだら、あんな骨だけになるのか。そんな想像を浮かべてしまう。
皮も肉も失い、誰か解らない骸骨になった自分……考えただけで恐ろしかった。

「ちょっと時間かかったね。急ごうか」
悠の声と刀を鞘に収める音に、流星は意識を現実に戻した。
「人柱は無理でも、せめて霧彦さんや西野　紗矢が生きていればいいんだけど……」
さすがの悠も知り合いは心配なのか、顔を歪めている。
「……っていうか、随分後ろ向きな考えだな。悠らしくねぇ」
流星が言うと悠はきょとんとして、次いで嘆息した。
「確かにね。ただ、嫌な予感が消えないものだから」
悠は頭を軽く振り、近くに停めさせてあった車に足を向けた。
「行くよ」
「あぁっ」
流星もまた、悠を追いかけるために小走りになった。

――――

紗矢はじっと、ピジェッラと名乗った少女を見つめた。
人の気配ではない。どちらかといえば、妖魔に近い。
しかし、人間と同じ気配も感じられなくはない。
「半妖だな」

紗矢は手に持った杖を握り締めた。
「あなた、よわい。ピジェッラ、つよい」
にたぁ、とピジェッラは薄い唇に笑みを形どった。
「ピジェッラの、かぁち」
「勝ちを確定するには、少々早計過ぎやしないか」
紗矢はじろっとピジェッラと、巨大骸骨の手を睨んだ。
「確かに精神面に置いて、あたしは弱いが」
杖を構え、走り出す。
「実力が無いとは、一言も言ってないよ」

パキャアアァァァ！！

杖が骸骨の手の甲を打ち砕いた。
バラバラに崩れる手。ピジェッラの目が、大きく見開かれた。
「あたしはどうも、男にケンカをふっかけられやすくてね」
杖をピジェッラの鼻先に突き付け、紗矢は淡々と言った。
「だが負けたことは、ただの一度も無い」
紗矢が目に力を入れると、ピジェッラの目の端に涙が溜まった。
本来なら慌てる場面だが、ピジェッラの人間離れした気配と紗矢の頭に流れてきる思考が、彼女をかえって落ち着かせた。
『ゆるさない。コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス！』
ピジェッラの背後に、ドス黒い煙が吹き出した。
「――――！？」
「いじめるやつ、キライ！」
思わず後ずさった紗矢の目に、ピジェッラの服の下から飛び出した何かが映った。
白くざらついた、ごつごつしている表面を持つ、糸の通された大量のそれ。

まさかあれは……人骨か！？

紗矢はゾッとした。

あれだけの骨を手に入れるのに、あの娘は一体何人殺したんだ！

「しんで、ビーズになれ！」

糸でまとめられた骨が、紗矢の腕にまとわりつこうとした。

紗矢は杖を薙いで、それを阻む。歯を食い縛った彼女の耳が、幾つかの悲鳴を拾った。

（まだ人が残っていた！　こんなところで戦ったらまずいっ）

紗矢は走り出した。

ピジェッラの脇を通り過ぎ、街の外へ向かう。

「にがさない！」

ピジェッラが振り返る気配を感じる。

追いかける気か。しばらく足止めをするか。

紗矢は右手で印を切った。

「！？　なに、これぇ？」

ピジェッラの動揺した声に、紗矢は彼女の方を向いた。

ピジェッラの足元から、コンクリートを突き抜けて太いツルが伸びていた。

ツルはピジェッラの足や腕に絡み付き、ピジェッラの動きを封じている。

あのツルは自分が作りだしたツル。そう簡単に外れやしない。

紗矢は顔を周りに向けた。

「逃げろ！　早くここから離れるんだっ」

紗矢の言葉に、周りの人々は身体を震わせ、霧散するように逃げ出した。

紗矢も、ピジェッラと間を置くために後ろに下がり始める。

「にがさないっていった！」

ピジェッラの怒鳴り声と何かが飛来してくる音が同時に聞こえた。
反射的に上を見ると、五回建てビルほどもある巨大骸骨が落ちてくるのを見た。
紗矢はだんっと地面を蹴る。

ドシィィィィィィィィィィィン！！

直後に、衝撃と震音が襲ってきた。
「！　きゃっ……」
紗矢は震動に足を取られ、転んでしまった。
『大丈夫か、紗矢！？』
ツバサの声に、紗矢は「あぁ……」とかすれ声で返した。
立ち上がりながら振り返ると、周りの建物を押し潰して先程の骸骨が四つん這いになってこちらを見ていた。
黄色い目玉をギョロギョロ動かすのが、なんとも不気味だ。
「にげちゃ、だめ」
ピジェッラはツルで動きを封じられながらも言った。
紗矢はふと少女の顔を見て、思わず声を上げた。
「な、に……！？」
ピジェッラの顔から、皮と肉がなくなってる。

骸骨のそれになってる！

「ねぇ、ビーズちょうだい。もうちょっとでねがい、かなうの……」
カタカタと骨がぶつかる音が、少女の声と一緒に鼓膜を震わせる。
「ねぇおねがい。あなたのビーズ、ちょおだいぃぃぃ」
ピジェッラの声に呼応するように、巨大骸骨が手を振り上げた。
「っ。『卯杖姫』、部分解除！」
バチィッ、とスパークがはじけ、杖先の宝玉に光が灯った。
「雷神招来（ライジンショウライ）、雷撃刀（ライゲキトウ）」

杖先から放たれた雷撃が刃の形を成した。
紗矢は押し潰そうとする骨の手を紙一重でよけ、杖を薙ぐ。
刃は骸骨の右腕の肘に叩き込まれた。
肘は見事に断ち斬られ、巨大骸骨はバランスを崩して倒れる。
どでかい音と同時に、鈍い衝撃が地面に広がった。
「……見かけ倒しか」
拍子抜けした紗矢はピジェッラに目線を向けた。
顔が骸骨なだけに、表情が解らない。
ましてや、うつむいていては顔自体見えなかった。
もう人は残っていないし、これで全力で戦える。
紗矢がそう思った時だった。

「……いじめないで」

え？　と紗矢が眉をひそめる前に、背中から衝撃が来た。
骨がきしむ音を聞いた次の瞬間、気付けば建物の壁に叩き付けられる。
とっさに受け身は取ったものの、左半身に熱さと冷たさが入り交じった激痛が走った。
一瞬ぴったりと壁にくっついた後、ズルズルと肌をこすりつけるようにして座り込む。
足は無事だったものの、それ以外の痛みは尋常じゃなかった。
左手首は妙な方向に折れ曲がり、二の腕の肌は皮がめくれて血がにじんでいる。頬は腫れ上がっているようで、視界が狭まっていた。
紗矢は起き上がろうと右手を着いた時、左耳からどろりとしたものが垂れていることに気付いた。
思った以上にダメージが大きい。でも、今の攻撃は一体……
紗矢は右目だけピジェッラに向けた。
ピジェッラの顔は骸骨のままだった。
問題は、あの巨大骸骨だ。

身体は地に伏したまま、だが無事な方の腕はガラガラ動いている。
（しまったっ。片腕だけでなく、両腕を使えなくするべきだった！）
紗矢は今更ながら後悔する。
おそらく、さっきの衝撃はあの骸骨に殴られたものだろう。
よほどの怪力だったのか、背中の痛みで足腰に力が入らない。
確実にとどめを指す前に、もう動けないと思って油断してしまった。
とんだ失態に紗矢が唇を噛んでいると、ピジェッラの声が響く。
「ビーズ……ビーズあつめれば、ピジェッラのねがい、かなうんだ……」
巨大骸骨が、身体を引きずりながら迫ってくる。片腕とは思えないスピードだ。
「くっ……」
紗矢は杖を振るった。
「氷神招来（ヒョウジンショウライ）、氷塔壁（ヒョウトウヘキ）！」
杖先の宝玉から氷風が吹き荒れる。氷風は紗矢とピジェッラ達の間に、分厚い氷壁を作り出した。
「ハッ、ハッ……」
浅い呼吸を繰り返しながら、紗矢は思考を巡らす。
あの氷壁はあくまで時間かせぎだ。すぐ壊されるだろう。
対抗できる手が無いわけではないが、うまくいくかどうか。
（どちらにせよ、あたし自身は満足に動けない。一か八かにかける！）
紗矢はパーカーの内ポケットから、人型の呪符を取り出した。
梅見家でやり方を教わっただけだが、この際仕方がない。
（ツバサ、いい？）
『当然！　紗矢がしたいことは、俺のしたいことだし』
頭の中で響くツバサの声に、紗矢は思わず声を上げて笑った。
頬が痛むし、口内に鉄の味が広がったのですぐやめたが。
（そうだね。ありがとう）

紗矢は呪符を前に投げた。
「創身呪術（ソウシンジュジュツ）、無在具現（ムザイグゲン）」
指で印を切り、意識を呪符へ向ける。
呪符がぐにゃりと歪んだ。
ぶくぶくと膨らみ、人一人の大きさになっていく。
色も変わっていった。白だったのが、黒と肌色に変色していく。

パリィィィィィンッ

氷壁がガラスが割れるような音を立てて破壊された。
崩れた氷の瓦礫の間から、ピジェッラが姿を現した。
ツルを引きちぎったのか、ゆらりと前に出る。
顔だけでなく、露出した肌全てが白骨化していた。おそらく、ワンピースの下も肉など無いだろう。
ピジェッラは歯をカタカタ鳴らしながら、少女姿の時そのままの目玉でギョロリ、とこちらを睨んだ。
目と同じくそのままの髪を風になびかせるその姿は、恐怖をあおるには充分だった。
「……ダァレ？」
ピジェッラは呪符をじっと見つめた。
「おまえを壊す者さ」
呪符はにやっと笑った。
いや、呪符ではない。
黒髪に黒目、黒服に白い肌をした少年だった。
「おい、餓鬼。これ以上紗矢に傷を付けたら、怪我する程度じゃすまないぜ」
少年――ツバサはニヤッと笑って走り出した。

髑髏と少女、そして邂逅＆lt;中＆gt;

ツバサの右手には、既に巨大な剣が握られている。黒光りするそれを、ツバサは振り上げた。

ガギィィィィィンッ

受け止めらた。

とんでもない質量と勢いだったのに、骨の欠片を通した糸に防がれた。

「ぴじぇっら、ツヨイ」

骨のみのピジェッラの声は、明らかに変質していた。

地を這うような、おどろしい嫌な声に。

「アナタ、カテナイ」

骨がぶつかる音と共に響く声に、ツバサは唇を歪めた。

「どうか……な！」

がら空きだったピジェッラの腹に、ツバサの蹴りが入れられた。

身体をくの字にしてよろめくピジェッラに、ツバサは拳を叩き付ける。

見事顔面にクリーンヒット。遠目からでも顔にひびが入ったのが解った。

ツバサは更に、ピジェッラに回し蹴りを喰らわせる。

予想通り、ピジェッラの身体はツバサとは逆方向に吹っ飛ばされた。

しかしツバサは追撃せず、素早く後ろに下がっる。

さっきまでツバサがいた場所に巨大骸骨の手が落ちてきた。
そこで紗矢はふ、と息をついた。
呪符を媒体にしているとはいえ、やはり無い存在をあるものとするのには精神力がいる。
精霊などを呼び出す術である式神ですら、かなりの精神力を使うのだ。『創身具現』はその倍に疲れる。
集中していなければ、ツバサの意識を宿した呪符はただの紙に戻ってしまうのだ。
だが、今の実力では頑張ったところで十分が限界だ。早々に決着をつけなければ。
「ツバサ、一気にたたみかけろっ」
「解ってるって」
ツバサは大剣を構え直した。
「……キライ」
向こう側に転がっていたピジェッラが起き上がった。

ミシッミシミシッミシィッ

きしむ音と共に、ピジェッラの骨格が大きくなっていく。
「キライキライキライキライキライキライ！　ミンナ、ぴじぇっらノコトイジメルッ。ミンナ、キライ！！」
声すらも、人のものではなくなかった。
人に害をなす存在……妖魔だった。

カハアアアアアアアアア……

ピジェッラ――否、妖魔の口から、瘴気が発せられた。
「ぐ、うっ……」
紗矢は顔を歪めた。妖魔が吐き出す息は、大概人間なのだ。
おまけに紗矢は傷を負っている。このままだと悪化しかねない。

せめて空気に触れないようにと、印を切って創り出した包帯を巻く。片手では無理なので、術で浮遊させて、だ。
「紗矢、大丈夫か？」
「あぁ……！　ツバサ、前っ」
こちらを振り返っていたツバサはハッとして剣を持ち上げた。

ギギィィンッ

鈍い音を立てて、剣が弾き飛ばされた。
「！　マジィッ、剣が！！」
ツバサは空中でぐるぐる回る剣を見上げた。
「シネ！」
妖魔の拳がツバサの頬に叩き込まれた。
後ろに倒れるツバサに、妖魔はなおも拳を振るう。
「シねシねシねシ

「そろそろ壊れちゃえよ、バァカ」
ツバサはべぇ、と舌を出して、剣を妖魔に突き刺した。

ズプッ

「ギャアァァァァァァァァァァァ！！」
目玉に剣が差し込まれ、妖魔は絶叫した。
剣が引き抜かれると、どす黒い血が吹き出し、ツバサの顔を濡らす。
ツバサはニヤッと笑っても片方も潰そうとした時――

ツバサの姿が消えた。

正確には、呪符に戻ってしまったのだ。
紗矢は「しまったっ」と口の中で呻いた。
『ご、ごめん紗矢！　もう少しだったのにっ』
（……仕方がない。あたしの実力不足だからね）
脳内に響くツバサの声に、紗矢はため息をつく。
「まったく……絶対絶命っていうのは、こういうことを言うのかな」
のんびり言ったものの、状況はかなり悪い。
妖魔は潰れた左目を押さえながら、じりじりと近付いてくる。
残った目をギョロギョロ動かし、身体中の骨をかたかた鳴らす。
服は破れかけてるがそのままだし、髪も残ったままなのだが、それがかえって不気味さを際立たせていた。
そんなホラー映画さながらの光景に、紗矢は座ったまま後ずさりしたくなった。
しかしそれをこらえ、杖を握り締める。
「コンドコソ、シンデ。びーず、チョウダイ？」
小首を傾げる妖魔を、紗矢はキッと睨み上げた。
「悪いがまだ死ねない。あたしはまだ、生きなくちゃならない！」

紗矢は妖魔に杖を突き付けた。
「炎神招来（エンジンショウライ）、紅蓮百華（グレンヒッヤカ）！」

ブオォォォォォォッ

妖魔の頭が炎に包まれた。
近距離での攻撃だ。かなり効いているはず。
少なくとも、もう動けはしまい。なにせ、胸元辺りまで燃えてるのだから……

ガッ

「ぐっ！？」
いきなりの喉への圧迫感に、紗矢は息をつまらせた。
見ると、骨だけの腕が、己の首へと伸びている。首に手をやると、固い指に触れた。
「アトヒトリ、アトヒトリ、アトヒトリ、アトヒトリ、アトヒトリ、アトヒトリィィィ」
「あっ、ぐぅっ……かはっ！」
気管を完全に抑え込まれ、呼吸ができない。

『助けて』

不意に流れてきた声に、紗矢は目を見開いた。
ツバサの声ではない。では誰の？
「……！？　うぐぅっ」
突然視界がブラックアウトした。
うっすらと、周りの風景とは違う光景が目の前に浮かび上がってくる。
意識が、泥に沈むかのようにゆっくり闇に飲み込まれていく。

数人の少女達が、周りを取り囲んで見下ろしていた。
幼い顔に似合わない残虐な笑みを浮かべ、手を振り上げる。
拳が振り下ろされた。頬に痛みがはじける。
少女達は、休む間も無く拳を振るった。
頭が、頬が、腕が、足が、腹が、殴られた反動で何度も跳ね返る。
喉がやめて、と叫んだ。
だが少女達は聞き入れず、むしろ更に激しく殴った。
『やめてって、どの口が言ってるのよ』
少女の一人が、口角をにぃぃ、と吊り上げた。
『そうそう。何もできないクズのくせに』
『クズが喋らないでよ』
『黙ってストレス発散させてよねー』
『存在自体、むかつくんだから』
『それくらい、役に立ってよぉ』
最後の言葉と同時に、腕に鋭い痛みが走った。
視界の隅に映り込んだ赤が付いた銀色の光に、背筋が凍り付く。
逃げようとするも、全身を多勢で抑えられて動けなくなった。
自身の肉が斬り裂かれる音と、身体中に感じる激痛が、絶え間無く続く。
助けて、助けて、助けて、助けて！
どれほど叫んでも、誰も助けてくれない。
ふと、今は亡き家族の顔が、脳裏にかすめた。
家族が生きていたら、こんなことにならなかったはずだ。独りぼっちにもならなかった。
でも今は誰でもいい、助けてほしいっ。
助かるなら、悪魔に魂を売ってもいい！
突然、周りの風景が戻ってきた。
目の前には、焼け焦げた髑髏が迫っている。

「アトヒトリ……アトヒトリデ、ぴじぇっらノカゾク、モドッテクル……」
「かぞ、くっ……？」
紗矢は意識が再び沈むのを感じた。
もうろうとする頭で、先程の光景を思い出す。
（あれは妖魔の……この娘の記憶か！）
しかしそれが解ったところで、もう抵抗する力も残っていない。
紗矢の全身から、力が抜けていった。

ドゴオォッ

妖魔の頭に炎の塊がぶち当たった。
首を締め付けていた手が離れる。急に呼吸が可能になったせいで、紗矢はせき込んだ。
「ゴホゴホッ……い、一体何……？」
喉をさすりながら、紗矢は首を巡らせた。

「紗矢さん！」

遠くから、見覚えのある青年が走ってくるのが見えた。
「き、君は……！」
走り寄ってきた青年を見上げ、紗矢は目を丸くする。
「流星、君……」
「ッハァ～。大丈夫ですか、紗矢さん？」
青年――流星は安心したように微笑んだ。

流星は傷だらけの紗矢を見て、笑顔を消した。
かなり酷い。腕も折れてるようだし、重傷だ。
「流星！」

追いかけるような声に流星が振り向くと、悠と朱華がこちらへ向かってきていた。
夢中で走ってる間に、置いていってしまったらしい。流星は思わず頬をかいた。
「西野紗矢は無事？」
傍まで寄り、紗矢を見下ろした悠は眉をひそめた。同じことを思ったらしい。
「朱華、治療を頼む。私は、あれを片付けるよ」
悠の目線の先には、少女のような服装の妖魔が居た。
流星の攻撃によって服はところどころ焼失し、頭の髪は縮れてしまっている。
「ゴロズゴロズゴロズゴロズゴロズゴロズゴロズゴロズ……ヴゥゥゥ！」
妖魔は隻眼を動かしながら呻き、だんっと地面を蹴った。
悠も刀を鞘から抜き、迎え撃つように走り出す。
妖魔の服の袖から何かが飛び出した。
白い物体が連なった糸だ。それが束になって悠の右腕に絡み付く。
悠の身体が空中を舞い、次の瞬間には地面に叩き付けられていた。
「ぐっ」
悠は呻きつつ刀を薙いだ。
ザンッ、という音を立てて糸が全て断ち斬られた。めいっぱい引っ張っていた妖魔は、ぐらっとよろめく。
そこに攻め込もうとした悠はピタッと足を止めた。
向こうで転がっていた巨大骸骨が、急に動きだしたのだ。
「流星、君の出番だよ」
悠が振り返って言った言葉に、流星は目を剥いた。
「あんな巨大生物を一人で倒せと！？」
「あれは生物じゃないでしょ。じゃ、よろしく」
「反応ポイントそこかい！」
ツッコミを入れつつ、小刀を構え直した。どうせ逆らえないのだ。

流星はぶんっ、と小刀を振った。
炎のかまいたちが放たれ、骸骨巨人（勝手に命名）の額に当たる。
おそらく紗矢にやられたのだろう、動かない右腕を引きずりながら後退する骸骨巨人を、流星は追撃する。
目の端で、悠が妖魔の左腕を斬り飛ばしたのが見えた。
だが、流星はすぐ意識を目の前に戻す。
頭の中で炎の長刃を思い浮かべると、小刀に宿った炎が長剣のような刃を形成した。
骸骨巨人が左腕を薙いだ。
流星は間一髪で下がり、ギリギリ避ける。
（こっえぇ！　悠は何でこんな化物相手に毎回圧勝できるんだよっ）
流星は内心で叫びながら、再びダッシュする。
骸骨巨人は再び腕を薙ごうとした。
それより速く、流星は骸骨巨人の懐に入れ込む。勢いをつけて、小刀を振り下ろした。

ガラガラガラガラガラァッ

悲鳴のように骨が崩れる音が響いた。
頭を縦割りにされた骸骨巨人は盛大な音を立てて崩れていく。
「……ップハァ。し、死ぬかと思った……」
一気に息を吐き出した流星は座り込んだ。
妖魔ってやっぱ間近で見るとこえー……などと思っていると、悲鳴が上がった。
見ると少し離れた場所で、悠が妖魔の上半身と下半身を切断したところだった。
骸骨とはいえかなりえげつない光景に、流星は顔をしかめる。
「これで終わりだよ」
悠が言うと同時に、妖魔の身体は地面に落ちた。
「ねが、い……」

妖魔の顎が、微かに動いた。
「ピジェッラはただ……かぞくをいきかえらそうと、しただけ……」
片眼から涙がにじむ。紅い、血の色だった。
「ヒメサマ、やくそくした……ヒャクニンころしたら、かぞくを」
「君の過去に何があったかは知らないし、知りたくもないけど、これだけは言える」
悠は妖魔の言葉を遮った。
「死者はどれほど願おうと望もうと、決して生き返ったりしない。たとえ、神が死者を求めても」
悠は無表情だった。だがその言葉には、痛いほどの思いが込められている気がした。
妖魔がその言葉を聞いて、何を思ったかは解らない。
なぜか悠の方に手を伸ばそうとして、途中で力尽きたのか腕が地面に落ちる。
カラン、と乾いた音が、妙に大きく響いた。

髑髏と少女、そして邂逅＆lt;下＆gt;

悠は動かなくなった妖魔を一瞥した後、流星の方を見た。
「流星、梅見家の方に行くよ。まだ生き残ってる人がいるかもしれない」
「あ、ああ」
流星は小刀を鞘に戻しながら走り出そうとした。

「誰も残っちゃいないよ」

紗矢の静かな声に、二人は振り返った。
朱華に術で傷を癒してもらいながら、あくまで平静な声で言う。
「視たんだ、未来を。あたし以外の全員が、死んでいた」
紗矢の声は、冷たい。感情の欠片も感じられない。
ゆえに、哀しすぎた。
「昨日、視えて。話したんだけど、聞き入れてもらえなかった。例えそうでも、戦うって。あたしだけは、逃げろって」
紗矢はうつむいた。だが、一瞬彼女の瞳が揺れたことを、流星は見逃さなかった。
「あたしが視た未来が現実になってるなら……もう、誰も生きていないよ」
紗矢は言い終えると、口を閉ざした。
悲劇を予見して、それを止められなかった紗矢が、一番辛い。
しかしこんな時、どう言葉をかければいいのか流星は解らなかった。

流星が戸惑っていると、悠はふい、と紗矢から目線を外した。
「忠告のつもりだろうけど、それはいらないよ」
歩き出しながら、言葉だけ投げかける。
「私達は、貴女みたいに未来を視ることはできない。だから、諦めないよ。最後までね」
紗矢はバッと顔を上げた。
困惑や哀しみが入り交じった複雑な表情を浮かべ、口を開く。が、結局何も言わず、口を閉ざした。

――――

流星は、当然ながら戦争に関わったことなど無い。
だがもし戦場を見る機会があるなら、目の前の光景と大差無いのだろう。

「何だ、これは……」
最早門としての用途を果たせていない残骸をくぐると、死臭が二人を迎えた。
血と肉の焼けた嫌な臭いに、流星は鼻と口を押さえる。
建物は数本の焼けた柱を残してるだけで、壁などは崩れ、原形をとどめていない。
本来は美しい日本庭園だったのだろう。今はただ、焼け野原が広がるだけである。
地面には人だか妖魔だか解らない死体が転がっており、地獄絵図のようなありさまだ。
「ひでぇ……ここまでするかよ、普通っ」
「妖偽教団に人道を求めたって無駄だよ。殺すことが最高の快楽だって連中だからね」
悠はふ、と息をついた。そのまま奥へと足を進める。
その後を追いながら、流星は辺りを見渡した。

人の気配は無い。直視するのは耐え難い光景なので、すぐうつむく。

やはり皆死んでしまったのか。もう誰も生き残ってないのか。

ふと、急に悠が立ち止まった。

「？　どうしたんだ」

「敵だよ」

「え！？」

流星は慌てて身構える。

耳を澄ますと、声が聞こえてきた。温かさからはほど遠い、冷たい声が。

『人間、人間、にんげん、ニンゲン』

姿は見えない。声だけが、やたら大きく聞こえる。

「なん、だ……この声は……」

流星は後ずさった。心情的には逃げたい気分なのだが、悠の存在が後ずさりにとどめさせた。

「向こうが何言っても、君は答えちゃ駄目だよ」

悠の言葉に、流星は首を傾げる。

「は？　どういう意味？」

「いいから黙っとく」

ぴしゃりと言い放ち、悠は目を閉じた。

謎の声はいつしか、笑い声に変わっていた。少女のように軽やかで、甲高い声だ。

『クスクス……クスクス……クスクス……』

そこら中から響いてくる一つの笑い声に、流星の背中はざわざわしてきた。

不安げに悠を見やるが、彼女はこちらに目線を合わせてくれなか

った。
『ウフフ……ねぇねぇ』
声が突然友好的な言葉を発した。
『貴方は赤が好き？　それとも青が好き？』
「は……」
実にのんきな質問に、流星は思わず答えかけた。
が、悠の肘鉄を喰らい、言葉と息をつまらせる。
一方悠は微笑を浮かべ、静かに答えた。
「好きな色、だよね。私は青が好きだな」
『青、あお、アオ……青はぁぁぁ』
悠の目の前に、突如として一人の少女が現れた。
青いワンピースを着て、黒髪をおかっぱにしている。
流星はその顔を見て目を見開いた。
目と鼻が無い。口だけが、笑みをたたえて浮かび上がっている。
唇の下から見え隠れするのこぎりのような歯は、血でぬらぬらと光っていた。
「青はぁぁ、血の気の無い肌の色ぉぉ！」
少女はぐわっと口を開けて、悠の首筋に噛み付こうとした。
「遅い」
しかし悠は不敵に笑い、目では捉えられないようなスピードで抜刀、同時に少女を横薙ぎにした。
ビクンッ、と少女は一瞬硬直し、パタリと倒れる。
その姿が地面に溶けるように消え去ると、悠は刀を鞘に戻した。
「何だったんだ……今の」
流星が思い出したように訊くと、悠は肩をすくめた。
「例えるなら『赤いちゃんちゃんこ』みたいなものだよ」
「赤いちゃんちゃんこって？」
流星が首を傾げると、悠は説明を始めてくれた。
「赤いちゃんちゃんこっていうのは、ある質問に答えたら殺されるって話なの。赤いちゃんちゃんこ着せましょうかって訊かれてはい

と答えると、首を切られるんだよ」
悠は人差し指と中指で自分の首を切るフリをした。
「で、首の血が服を赤く染めるから、赤いちゃんちゃんこなの」
「へぇ……」
「こういうたぐいの妖魔は、質問に答えないと実体を見せない。でも」
悠は突然刀を抜いた。
「ただ姿を隠してるだけの奴の問いには、答える義理無いけどねっ」
刀で思いっきり地面を打つと、這うように衝撃波が地面を走った。
衝撃はそのまま、かろうじて形を保っている家屋を破壊する。
「出てきなよ。ずっとこちらを見てたのは解ってるよ」
悠の言葉とほぼ同時に、人影が土煙の中から浮かび上がった。
生き残りかと思ったが、悠の顔がけわしいのを見て、流星はその考えを捨てた。
悠は自分よりも感覚が鋭い。その彼女があんな行動を起こしたのだから、味方ではあるまい。
「気配は消したつもりなのにねぇん……やはり侮れない子供だわ♪」
甘く、なまめかしい響きをはらんだ声が流れてきた。
「あはん♪　初めまして、椿　悠ちゃん」
煙が晴れた。人影の姿に、流星は息を飲む。
まっすぐ伸びた豊かな黒髪、しなやかで豊満な肢体、そして何より、信じられないほど整った顔立ち。
全てがゾッとするほど美しく、そしてゾッとするほど恐ろしかった。
悠と同レベルの、絶世と呼ぶにふさわしい美貌なのに、見ていると恐怖がわき起こる。
醜い妖魔より、この女の方が怖い。根元的な恐怖を引き起こされる。
冷や汗を流す流星とは対称的に、悠は平静そのものの声で女に尋ねた。

「貴女が羽衣姫？　いや、正確にはその服か」
悠の目が女の着ている服に向けられた。
黒い、西洋のドレスのようだ。胸元がざっくり開けられ、谷間が見えている。
「今やこの身体は妾のものと言っても過言じゃないわ。だから、話しかける時はこっちにしてねぇん♪」
女――羽衣姫はウインクを送った。
しかし悠はそれに無反応で、質問を投げかけた。
「さっきの悪霊、貴女がけしかけたの？　私の力を試すために」
「あらん？　気付かれちゃった♪　そ。敵となり得るか確かめるためにねぇん」
ふざけた口調で喋る羽衣姫に、悠は片眉を上げた。
「敵となり得る？　敵じゃなくて？」
悠の言葉に、羽衣姫はにんまりと笑った。
「だぁって、貴女のお父様でも妾には勝てなかったんだもの♪　娘の貴女が――」
言葉が途中で消えた。
「それ以上父のことを言えば」
悠は羽衣姫を睨み付けていた。
隣にいた流星は、悠の様子を見て唾を飲み込む。
怒り、などという可愛いものではない。激情が、悠の全身を包んでいた。
「二度と喋れないように、首を切断するよ」
刃を向けてるわけではない。ただ悠は、羽衣姫を睨んでいるだけだ。
なのに……死神の鎌の存在を感じる。睨まれているのは、自分ではないのに。
流星の肌にざぁっと鳥肌が立った。
今まで悠を怖いと思ったことはあったが、近付きたくないと思ったのは初めてだ。

流星は一歩、また一歩と後ろに下がった。
一方羽衣姫は、悠の怒気を一身に受けてるにも関わらず、にいっと唇を歪める。
「家族を想うなんてらしくないわよ、哀れな罪人ちゃん♪」
悠の表情がぴくりと動いた。
「……何が言いたいの？」
「妾に、どうこう言える立場じゃないでしょぉん？」
「だから何が言いたい！」
悠は声を荒げた。
今まで無かった悠の様子に、流星は目を丸くする。
「忘れたわけじゃないでしょぉ？　貴女の手は、血で真っ赤に染まってるんだからぁ」
「……やめて」
「人形から人になる代償に咎を背負ったのに、逃げようとしてるのぉん？」
「言うな……言うな……」
「逃げようったって、無理なのは解ってるでしょお？　だって貴女の罪は」
「言うな！！」
悠の悲痛な叫びも、羽衣姫には届かなかった。
酷薄な笑みを浮かべ、羽衣姫は声高に言う。

「母親殺しの罪なんだから！」

時が止まった気がした。
流星は呆然と、羽衣姫を見つめる。
今、あいつは何と言った？
母親殺し？　誰が？　悠が？

ユウガ、ハハオヤヲコロシタ？

驚きなどよりもまず、信じられなかった。
悠がそんなことするはずない。流星はそう思って、悠の方を見る。
「……」
悠は立ち尽くしていた。
いつもの不敵な笑みも、瞳に秘めた強い意思の光もない。
今にも崩れ落ちそうな姿に、流星は絶句する。
「ゆ……」
声をかけようとして、流星はやめた。
何と言っていいか解らない。こんな時、どう声をかければいいのだ？
「アハハ！　面白い反応♪」
羽衣姫は口元に手を当てて笑った。
「本当に哀れな娘♪　でも、一番哀れなのは貴女のお兄様、椿　恭弥よねぇ」
羽衣姫の言葉に、悠の肩が震えた。
「だってあの子、貴女のお母様に」

「黙れ！」

悠はいきなり刀を振った。
刃が地面を打つ。同時に、衝撃波が生じた。
地面を這う衝撃波が、羽衣姫に迫る。
「笑止♪」
羽衣姫は両手を突き出した。
瓦礫を粉砕して進んできた衝撃波を受け止め、ニヤリと笑う。
「どんな攻撃であろうと、妾には……！？」
羽衣姫の表情が変わった。
一瞬目を見開き、次いで顔をしかめて一、二歩後退する。
「くっ」

羽衣姫の口から呻き声が上がった。

ドガァァァァァッ

大気を震わす爆発が起こった。

木片が飛んでくるのを見て、流星は慌てて悠を抱き締めて地面に倒れ込む。

バラバラと何かが落ちてくる音と感覚が背中にあったが、痛みなどは無かった。

音がやみ、しばらくして恐る恐る上体を起こしてみる。

「何ともない……！　羽衣姫は？」

バッと見てみるも、全壊した家屋に人の影は見当たらなかった。

「逃げたか……。……悠？」

流星は腕の中の少女を見下ろす。

悠は震えていた。目は焦点が会わず、自分で自分をかき抱いている。

刀は繊手から離れ、足元に転がっていた。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ……」

悠は頭を小さく振りながら同じ言葉を繰り返していた。

壊れたステレオみたいに、何度も、何度も。

流星は自然と、悠の頭に手を伸ばしていた。

「大丈夫だから」

頭を撫で、そのまま抱き締め直すと、悠の身体がピクリと反応した。

流星は流星で、自分の行動に驚いていた。

でも何となく、これでいい気がした。

「訊いたり、しねーから。攻めたりもしねーから」

離れたりも、しねーから。

流星がそう言って背中を撫でてやると、悠がきゅっと流星の制服を掴んだ。

「……いつか、話すから」

悠のか細い声を、流星は黙ったまま聞いていた。

「流星には隠したり、しないから……だから今は」

悠は、こんなにも小さかったか。こんなにも、弱々しかったか。

今まで忘れていた。悠はまだ、十四歳の少女だった。

自分よりも年下の、一人の少女だった。

悠は、顔を上げずに囁く。

「お願い……今は何も……訊か、ないで」

「……あぁ」

流星はじんわり広がる胸の痛みを感じながら、静かに頷いた。

――――

転移してきた羽衣姫の姿を見て、月読は目を丸くした。

羽衣姫の手――借り物だが――が壊死している。

肘から下が黒く変色し、亀裂が入っている。

おそらく、あの腕の修復は不可能だ。損傷が酷過ぎる。

「どうなされたのですか。その腕は？」

月読がややあって訪ねると、羽衣姫は「やられたわ……」と呟いた。

「封印がある限り、妾自身は傷付けられない。でも、この身体は別のようね」

暗く広い部屋。そこに置かれた豪奢な椅子に身を沈め、羽衣姫はため息をつく。いつものふざけた調子ではなかった。

「まったく……新しい身体が必要だわ……」

「では、新たにふさわしいお身体を探しましょう。では、私はこれで」

月読は深々と頭を下げた後、さっさと部屋を出ていく。

廊下に出て、月読は眉をひそめた。
（一体誰にあの傷を……？　梅見家は既に全滅したはず……）
しばらく考え、ハッと顔を上げた。
「まさか……悠？」

羽衣姫はだらりと両腕を下げたまま、己の考えにひたっていた。
今の自分は、誰にも傷付けられることは無い。
それは本体は勿論、借り物のこの身体にも言えるはずだった。
（なのに、このあり様は……）
ふつふつと、憤怒が心に染み渡る。
それほどまで、あの娘の力は強力だというのか。
それほどまで、高い潜在能力を持つというのか。
これでは、人を喰らうことで高めてきたこの身体の力が全て無駄ではないか。
それに人柱を殺すことも、しばらくは無理だろう。
自分の新たな肉体を探すのは、時間がかかるだろうから。
「あぁ、あぁ……憎らしい、怨めしい」
羽衣姫はぎり、と奥歯を噛み締めた。
「どれほど妾の邪魔をすれば気がすむ……千年前も、現在も！　忌々しい椿の血！！」
黒い瞳が、一瞬紅く染まった。
怒りと憎しみを、虚空へ向けながら。

第十話　独りぼっちの歌姫<上>

その歌声は、どこまでも伸びていく。
澄みきった声が紡ぐ詞は、心に突き刺さるような切なさをはらんでいた。
（私も、歌いたい）
枕元の音楽プレーヤーから流れる歌を聞きながら、彼女は思った。
だが、それは叶わない。解っている。

彼女は、声を失っていた。

喉に病が凝り固まり、その病を治すために声帯ごと切り取ったのだ。
耳に入ってくる歌声に、彼女は涙を流す。
どれほど白いベッドに横たわり続け、白い天井を見つめ続けたんだろう。
彼女は唇を噛んで、音楽プレーヤーを止めた。
きしむ身体を内心で叱咤し、ベッドから降りる。
（あ、晴れてる）
カーテンを開けると、陽光が彼女を照らした。
まぶしさに目を細めつつ、窓を開ける。風が前髪を持ち上げた。
頬に熱い何かが伝う。それが涙と気付くのには、さほどかからなかった。
（もう、終わらせる……）
白い空間に囚われるのは、もう嫌だ。
音も色も無い世界なんて、耐えられない。

窓辺に手を置き、身を乗り出す。次の瞬間、浮遊感を全身に感じた。

（あぁ、でも……）

ふと、頭の中で後悔がかすめた。

（最期に、最期に……）

最期に、あの歌を――

――

「……あ」

流星は声を上げた。

ケーキ屋を出たとたん、紙袋を抱えた西野紗矢と出くわしたのだ。

「あ、君は……」

紗矢は目を瞬き、流星の服装を見て首を傾げた。

「……学校帰り？」

流星は自身の服を見下ろした。学校指定の学ランである。

「あー、まぁはい」

「ケーキ、好きなの？」

紗矢の視線が、流星の右手にそそがれた。

流星の後ろにあるケーキ屋の箱が下げられており、中身はケーキが三つ入っていた。

「あ、これは俺のじゃないですよ。悠のです」

「あぁ、あの娘の。……三つも？」

また心読んだこの人っ。

流星はちょっと顔をしかめつつ、「あいつなら喰えます」と答えた。

「細っこいくせに、甘いもんはやたら喰うんですよー」

「女の子だから、しょうがないよ」
紗矢はハハッと笑った。
紗矢の笑顔に、流星は驚く。
「笑え、るんですか？　昨日の今日なのに」
「辛いのは、あたしだけじゃないからね」
紗矢は軽く目を伏せた。
紗矢は今、梅見　霧彦の兄、梅見　雨彦の家にいる。
雨彦は退魔師としての才能がほとんど無かったらしく、早々に家を出ていたそうだ。
梅見家の血を引く唯一の存在として、紗矢を引き取ったのである。
実は、その人物は流星の見知った人であった。
何しろ……
「まさか保険医のおっさんが、梅見家の人間とはなぁ。名字同じとは思ってたけど」
流星は頭をかいた。
そう、流星の学校の校医が、梅見雨彦だったのである。
紗矢の元に戻った時、あの人がいたために流星は仰天した。
ただ、校医が梅見家の者だと知らなかったのは流星のみだったようで、おいてきぼりな気分を喰らった。
「雨彦さんも家族を失った。辛いのはあたしだけじゃない。だから、笑えるよ」
紗矢は紙袋を抱き締めた。
「痛みを共有すると、気持ちはずっと楽になる。だから」
紗矢はふと、真面目な顔付きになった。
「君も、悠ちゃんの傍にいてあげて。それだけで、彼女の痛みは軽くなるはずだから」
「え？」
「大丈夫。君が気持ちに素直であれば」
紗矢はにこっと微笑んで、たたっと走り去ってしまった。
「……あっ、悠んとこ行かねぇと」

呆然としていた流星は我に返り、小走りでその場を後にした。

――――

とん、とん、とん、とリズミカルに階段を上がり、事務所に入ると、誰もいなかった。

「あれ？　悠？」

少女の姿が見当たらず、流星は部屋を見渡した。二階にいると、朱華は言っていたのだが……

「……って、寝てるし」

よく見れば、革張りのソファーに寝転がっているのだった。

切れ長の瞳は閉じられ、微かに寝息が聞こえる。

（……つぅか。綺麗過ぎだろ、こいつ）

悠の寝顔を見、流星は改めてため息をつく。

常々思うが、悠の美貌ははっきり言ってありえないレベルだ。それなら、顔がそっくりな恭弥にも言えることだが。

（母親殺し、か……）

流星は悠の傍まで歩み寄り、しゃがんだ。

本当に綺麗だ。化物の返り血を浴び続けたとは思えないほど。

流星は昨日の悠の様子を思い出す。

明らかな怯えと後悔がにじんだあの顔は、今も目に焼き付いていた。

（悠の過去に何があったかは解らない。でも、話してくれるまで、何も訊かない）

再び決心し、悠の頭を撫でた。

「んっ……りゅ、せ……？」

悠が目を開けた。

「悪ぃ、起こしたか」

「いいよ、別に」

悠は上体を起こしてあくびをもらした。

「あ、悠。これ、来るまでに買ったケーキ。三個」
「えっ」
差し出された箱を見て、悠は目を丸くした。
「いらなかったか？」
流星が尋ねると、悠は首をふるふると振った。寝起きのためか、仕種が幼い。
「今喰う？」
「うん」
箱を受け取った悠は満面の笑みで頷いた。
（やべぇ。めちゃくちゃ可愛い……！）
流星が内心で悶えたのを、悠は知るよしもない。

しばらくケーキを無言で食べていた悠だったが、いきなり「ありがと」と言ってきた。
「？　何が」
向かい側のソファーに座っていた流星は顔を上げた。
「元気付けるために、ケーキ買ってきてくれたんでしょ」
どうやらお見通しらしかった。
「何か……手ぶらで行くの、気まずかったからさ。ケーキでも持っていこーと」
「そう……」
悠は最後の一口を食べ終えると（すでに二個完食済み）、立ち上がった。
流星の傍まで来ると、いきなり抱き着く。
「え、ちょっあの、悠サン？」

「……流星」

悠の甘い声に、流星の背筋に痺れが走った。

痺れが脳まで達して動けないでいると、悠は流星の胸板に手を添えて顔を上げた。
どこまでも澄んだ、漆黒の瞳。色付いた頬。艶やかな唇。
それらに吸い込まれるようにして、流星は悠に顔を近付けた。
悠もそれに応えるように目を閉じて――

突然電話が鳴った。

悠と流星、どちらかの携帯ではない。
事務机に置かれた、旧型の電話機である。
黒電話の無粋な音で固まってしまった流星に対し、悠は何ごとも無かったかのように電話機に近付き、受話器を取った。
「はい、こちら椿事務所」
悠のいつもと変わらない調子の声に、流星は自失から復活した。
「はい、依頼ですね。はい……解りました。では、明日うかがいます」
悠は受話器を戻した。
「……悠、俺帰るわ」
流星はソファーから立ち上がった。
「あ、うん。明日学校サボってよ。仕事あるから」
「あぁ」
流星はフラフラしながら事務所を出ていった。

「むぅ……あと三センチだったのにー」
流星が帰った後、悠は再びソファーに寝転がった。
狙って雰囲気を作ったのに、あの電話のせいでパァである。
「まぁ、依頼だからしょうがないけど」
一人呟き、仰向けになる。ふと、昨日のことが思い出された。

『大丈夫だから』

優しい言葉だった。偽り無い、安心できる言葉だった。
どんどん大きくなっていく。流星の存在が、自分の中で。
「流星……」
悠はそっと呟いた。
ついさっきまであったぬくもりを、確かめるように。

――――

帰路を歩きながら、流星はぼうっと先程のことを思い出していた。
（あれは幻じゃねぇ……でも、何であんなことに……）
からかったわけではないだろう、多分。では、なぜあのような状況になったのか。
いくら考えても思い浮かばない。それにしても……
「あれは……ちょっと惜しかったな」
「何が惜しかったんだ？」
「何がっておまえ、そりゃぁ……って、恭弥ぁぁぁぁぁ！？」
流星は振り返って絶叫した。
一方、流星を驚かした張本人――恭弥は肩をビクッと震わせ、目を丸くした。
「……驚かすな、心臓に悪い」
「こっちのセリフだっ」
流星は恭弥に向き直った。
おまけに悠と瓜二つなもんだから、よけい疲れる。
「……つか、おまえ一人で何してんだよ」
学校帰りらしく、紺色のブレザーを着た恭弥に尋ねると、彼はあぁ、と声を上げる。
「いや、一人じゃないんだ。さっきまで一緒だったんだが……あ、来た」

恭弥は首を巡らせ、ある一点を見つめた。
つられるように流星も見ると、くせのある黒髪をした美形が走り寄ってくるのが見えた。
女性が思わずぽっとなるような甘いマスクに、なぜかボサボサとは思えないくせの強い長めの髪、切れ長の目に収まる漆黒の瞳。
この年上の青年が誰かに似てることに流星が気付くのには、さほどかからなかった。
特にこの切れ長の瞳には、とても見覚えがある。
「紹介する」
恭弥は青年の右二の腕に触れた。
「兄の椿　刀弥だ」
「えっ」
予想はしていたが、多少は驚いた。他人の空似の可能性もあったので。
「いきなり走り出したと思ったら……知り合い見付けたのか」
青年――刀弥は頭をかいた。
「初めまして、椿　刀弥だ。えっとー」
「流星だよ。ほら、悠の」
恭弥の妙な説明がひっかかったが、流星は「ども」と頭を下げた。
「あー、霊感少年A！」
「は？　A？」
納得顔の刀弥に、流星は戸惑う。
だいたいAって何だ、Aって。
「兄さん、普通に言えよ、普通に」
恭弥は脱力したような顔をした後、流星に向き直った。
「帰りに本屋に寄ってな、そこで兄さんにあったんだ」
恭弥の言葉に流星はへぇ、と返した。
「何買ったんだ？」
「僕は社会派ミステリーで兄さんはＳＦ」
……自分には縁の無い種類だった。特に恭弥のは。

「つぅか、自分が住んでる町で買えばよかったんじゃねぇか？」
流星がそう言うと、恭弥は肩をすくめた。
「あっちには本屋が無いんだ。だからわざわざ遠出してる」
「うわっ……めんどくせぇな」
流星がそう返すと、恭弥は「そうでもない」と言ってにこっと笑った。
「恭弥、そろそろ帰ろうぜ」
刀弥が腕時計を見つめながら言った。
「早く帰らねぇと、家の奴らが心配する」
「あぁ、解った」
恭弥は兄に頷きを返すと、「またな」と流星に小さく手を振った。
流星も「じゃぁな」と言って手を上げ、去っていく二人の背を見つめる。
（……恭弥、笑ってる）
兄と会話しながら楽しそうに笑う恭弥。
その笑顔は、命を狙われてるとは思えない。
そういえば、羽衣姫は恭弥のことも言いかけていた。
何があったというのだろう。悠と、そして恭弥の過去に。
（でも俺は、何も訊かない。悠が話すまで、待つって決めたんだ）
流星は一瞬目を閉じ、再び開けると同時に、歩き出した。

「……なぁ」
「何？」
「おまえ、オーディション受けるわけじゃねーよなぁ」
「当たり前でしょ。そんなわけないじゃない」
「そうか。なら」
流星は目の前のビルを指差した。
「何でレコード会社の前にいるんだ、俺達はっ」
灰色、というより銀色のしゃれたデザインのビル。入口へ行くための低い階段脇には、会社名が書かれたプレートと銀色に輝くオブジェがあった。
流星でも知ってるような大会社だ。なにしろ、好きな歌手が所属してるので。
「依頼人がここの歌手なんだよ。電話してきたのはマネージャーだけどね」
悠は説明しながら階段をのぼった。
流星も後に続くが、どうも気遅れしてしまう。
何でこいつはいつも堂々としてるんだ、などと思っていると、いつの間にか距離ができてしまっていた。
慌てて追いかけ、そのまま勢いでビル内に入ってしまう。
磨き抜かれた床に、吹き抜けの天井。スーツの男女が行き交う内装は、外とは別世界に思えた。
「お、俺……すげぇ場違いな気、するんだけど」
私服の人間は少なからずいた。だが誰もが美男美女な上に、服装もキマってる。

普段着で来るんじゃなかった……流星は激しく後悔した。
一方悠は超絶美少女だし、服装もばっちりなので問題無かった。
……いや、逆に問題があるかもしれない。
なにしろ、ここにいる全員が悠を盗み見ているので。
ダメージ加工された黒と青のホットパンツから伸びる白い素足など、かなりまぶしい。
「あの、すみません」
とうとう声をかける奴までっ、と思いながら振り向くと、気の弱そうな男が一人立っていた。
灰色のスーツを着た、二十代後半らしき男だ。おどおどした目でこちらを見ている。とてもじゃないが、ナンパするような人物に見えない。
「依頼人のマネージャーだね」
悠がすっと前に出た。
仕事か、と流星が安堵して再度男を見ると、彼は悠の膝あたりを見つめていた。おそらく、目のやり場に困ってるのだろう。
「依頼人は今どこに？」
「レコーディング中です。もうしばらく待っていただけますか？」
男の言葉に悠は一瞬思案顔を作った後、さらっと言った。
「レコーディング風景が見たいから連れてって」
頼む口調ではなく、どちらかといえば命令形だった。
「こ、困ります。どうかもうしばらく」
男の言葉も完全無視し、悠はすたすたと歩き出す。
結局、男は悠達を案内するはめになったのだった。

ビルの五階のあるドアを桑原（クワバラ）は開けた。
ちなみに桑原とは先程の男の名である。
室内に入って最初に目に映ったのは、機械の前に座った数人の男達だ。

上げ下げできるレバーのようなものがあり、細長い、幾つもの画面が付いている。さっきからその中のライトが上下運動をくり返していた。

さしてその奥の部屋で、誰かが歌っている。ガラス越しに後ろ姿が見えた。

女性のようで、セミロングの薄茶色の髪の両サイドにヘッドホンを付けている。

「あの人が依頼人だね」

悠がぼそっと呟いた。

「はい、オッケー！」

男の一人が突然大声を出した。流星はびくっ、と肩を震わす。

「未來（ミライ）ちゃん、お疲れ様ー」

男が口にした名前に、流星はふと、片眉を上げた。

（ミライ……？　どっかで聞いたことあるような）

首を傾げている内に、女性がレコーディング室から出てきた。その顔を見て、流星は目を剥く。

「あれ……？　桑原さん、その子達もしかして」

「あぁ。昨日話した退魔師の方だよ」

桑原の説明に、女性は悠と流星を見つめた。悠より少し背が低い、小柄な人だった。

「驚いた？」

悠は流星にいたずらっぽい笑みを向けた。

「驚くに決まってんだろっ。依頼人が『Ｍｉｌａｉ（ミライ）』だなんてさ！」

流星は興奮して拳を握った。

『Ｍｉｌａｉ』といえば、現在人気沸騰中のシンガーソングライターだ。

澄んだ歌声と切ない詞が人気を集め、愛くるしいルックスも相まってすでにファンクラブまでできてるらしい。

まだ曲は五曲しか出してないのに、知名度も半端じゃない。デビュー曲など、三十万枚売れたそうだ。

老若男女問わず聴かれている、注目度ナンバーワン歌手である。
かくゆう流星も、彼女のファンの一人だったりする。
流星は悠と話を進める『Ｍｉｌａｉ』――本名は宮岡未來（ミヤオカ）というらしい――を見つめた。
大きな黒目に人形のように整った、どこか儚げな顔立ち。
悠と並ぶと少々かすんでしまうが、それにしたってテレビで見るよりずっと可愛い。
ぼーっと見とれていると、服の裾を引っ張られた。
下を見ると、悠の不機嫌そうな表情が目に映る。
「どうした？」
「……別にっ。行くよ、他の部屋に移動するから」
悠はぷいっと顔をそむけて出ていった。
（何だ？　俺何かしたか！？）
流星は首を傾げながらも後を追った。

宮岡未來は、最近妙な視線を感じるようになったという。
「追っかけの人かと、最初は思ったんですけど」
応接室のソファーに座った未來は、歌っている時と変わらない澄んだ声で話し始めた。
「でも家にいる時も視線を感じて……。マンションの六階に住んでるんで、覗かれるはず無いし。それに、この間」
未來は一瞬、その顔に恐怖の色を浮かべた。しかし、意を決したのか話を再開する。
「帰り道、誰かが後ろからつけてくる気配がして。振り返ったら……血まみれの女の人が、身体を引きずりながら……」
その時のことを思い出したのか、未來はきゅっと目を閉じた。
「昨日も……家にいたらいきなり食器が落ちてきて……戸棚にしまっておいたのに」
未來は薄桃色の唇を震わせ、それ以上続けることは無かった。

「なるほど、霊の仕業だね」
悠は頬杖をついて未来の顔を覗き込んだ。
「悪いものではないみたいだよ。何らかの理由で貴女に気付いてほしいんでしょう。でも」
悠はそこでいぶかしげな表情をした。
「妙だね……微かに妖気を感じる。妖魔が、関わっている……？」
悠は黙り込んでしまった。だんまりしたまま、未来を見つめている。
「あ、あの……大丈夫なんですか？」
桑原がそぉっと尋ねてきた。
「……まず霊の方を何とかする。とはいえ、悪霊ではないから無理矢理ひっぺがすことはできない」
悠は肩をすくめた。
「しばらくは傍に付いているよ。何かあったらすぐ対処できるように」
悠の言葉に、桑原ははぁ、とあいまいな返事をした。

「何ですぐ霊を払わないんだ？」
ビル内の休憩室にある自動販売機を前にした流星は、悠に尋ねた。
多人数用の椅子に座りながら缶コーヒーを飲んでいた悠は流星をちらっと見た。
「悪霊みたいに人体に強い影響を与えるわけじゃないからね。とりあえず憑いた理由を考えないと」
悠はぽいっと向こう側のゴミ箱に空の缶を投げた。
普通入るはず無いのだが、丸い缶用の穴にすぽっと吸い込まれてしまった。
「……お見事」
「当然」
悠はにっと笑った後、足を組んだ。

ホットパンツなので下着が見えることはないのだが、それにしたって目に毒だろう。
目をそらしながら流星はため息をついた。
「理由っつってもなぁ。何か後悔してるとか？」
「多分ね。私はそれより、妖気の方が気になるよ」
悠は髪をかき上げた。
「朱嶌には店番頼んじゃってるし、この際別行動した方がいいかもね」
「別行動？」
「そう。私は妖気の正体を。流星は」
そこで悠は顔をしかめた。が、すぐ無表情に戻る。
「宮岡未來に付いて。もしもの時は、煌炎で対応して」
「解った。……でもさ」
流星は悠の方に向き直った。
「その妖気、本当に未來さんに関わってんのか？」
「さぁね。直接関わったわけじゃないようだけど……まだ何とも」
悠は立ち上がった。
「ね、飲み物買わないの？」
「んー……やっぱやめとく」
流星は結局持っていた財布をポケットにしまった。
「煌炎は持ってるね？」
悠に訊かれ、流星は「あぁ」と頷き、腰から下げたホルダーを叩いた。
煌炎を収めるためのもので、朱嶌が作ったのだという。茶色の革製で、見た目はなかなかかっこいい。
「じゃ、私は行くけど。気を付けてね」
悠は流星の二の腕にそっと触れた。
「約束、破らないでよ。死んだって、泣いてやらないんだから」
流星は悠が言ってることを読み取った。
（俺が退魔師になるって言った日の約束）

流星はふっと思い出し、にっと笑った。
「大丈夫だ。約束は守るって」
流星が保障すると、悠はいきなり抱き付いてきた。
「な〝!?」
「約束だよ。絶対、絶対に……」
悠は名残惜しそうに流星から離れると、そのまま休憩室を出ていってしまった。
一人になった流星は、ほてった顔を両手で覆った。
「あ〝ーもー！　あいつはっ……」
流星は一人悶える。
（あいつ……俺が男って解ってやってんのか!?）
悠が触れてくるたび、流星は自分が思いのまま動かないように自制せねばならない。
悠を腕の中に収めたい……そんな衝動と戦う日々なのだ。
「相手は俺より子供……十四だ。まだ中学生……って、あれ?」
自分に言い聞かせている途中で、ふと疑問が生じた。
「あいつ……中学通ってねぇよな」
なぜ今まで何も思わなかったのか。幾らなんでも自分は鈍すぎる。
よくよく考えれば、中学に通いながら事務所を開くことなどできないはずだ。
それに勉強などやってる様子は無いし、制服姿も見たことない。
なぜ、学校に行ってないのか。なぜ、事務所など開いているのか。
（俺は、悠の……何も知らない）
近くにいるのに、傍にいれない。それが、もどかしい。
流星は軽く頭を振った。
「今の俺がやるべきことは、別にある」
自分にそう言い聞かせ、流星もまた、その場を後にした。

―――

悠は髪をまとめ上げ、流星からもらった髪留めで留めた。
「全く……今日は妙に暑いね」
汗が伝う白いうなじをさらしながら、悠はため息をついてぼやく。
その姿を流星が見たら卒倒しそうだが、いたとしても悠は気にしない。
エロオヤジ共の視線を嫌というほど受けたのでそちらの危機感が無いわけじゃないが、撃退できる自信がある。
それに……
「いざとなったら、朱嶌に半殺しにさせるしね」
物騒な言葉を呟き、辺りを見渡す。
悠は現在、未來が住むマンション付近にいた。
霊気を感じ取ろうとして来たのだが、なぜか妖魔の気配まで感じる。
（やはり妖魔が……でも実体はどこに？）
悠は道中でじっと考え込んだ。

『……い、て……』

微かな、風にまぎれそうな声が聞こえてきた。
悠は驚いて周りを見渡す。

『き……い……』

人の声ではない。この声とこの感じは……
悠は目線を動かし、電信柱の傍で目を止める。
太陽の光から逃れるように、電信柱の影に女が一人いた。
身体をコンクリートに横たえ、頭から紅い液体が流れている。全身も着ている白い服も紅に染まっていた。
「貴女は……」
悠はその女を見つめる。

女は悠を見つめ返した。洞窟のような、虚ろで暗い目に、僅かな光を灯しながら。

ステージ上で歌う未来は、悩みや苦しみなど無いように見える。
テレビ局のスタジオ。スタッフ達が動き回るスペースの隅に、流星は桑原と一緒に立っていた。
「生で聞くと、スゲー綺麗な歌声……」
機械を通して聞くより、直接聞く方がずっといい。流星はそう思う。
「未来ちゃんの売りの一つは、あの歌声だから」
桑原は自慢げに言った。
先程聞いた話によると、彼の妹が未来と同い年らしい。だから本当の妹のように可愛がっているんだそうだ。
桑原の言う通り、あの澄みきった声は耳に心地よい。
そして切ない詞が組み合わさって、心を貫くような歌が産まれるのだ。

『月を見ては涙を流してた無力な自分。
振り返らずにいれば、怖い思いはしないと思ってた。
足音に怯えて耳を塞いでも意味がないことぐらい、解っているのに……』

まるで、弱い自分をさらけ出すかのような詞だ。
だからこそ、彼女の歌は哀しくも美しいのかもしれない。
流星は目を閉じ、未来の歌に聞き惚れていた。
(やっぱり好きだな……この人の歌)
心にじんわりと広がる、言いようの無い切なさを感じていると――

『殺してやる』

流星はハッと目を開けた。
「今の声は……!?」
きょろきょろと辺りを見渡していると、金属同士がこすれる音が上から聞こえてくる。
流星は顔を上げ、目を見開いた。

未来の頭上のスポットライトが、外れかけている!

「危ない!」
流星が叫ぶと、未来は歌うのを止めた。
周りがざわつくより早く、ライトが未来めがけて落下する。
流星はだっと走り出した。スタッフを押しのけ、ステージに乗り上げる。
流星は勢いそのまま、未来を押し倒した。

ガシャァァァァァンッ

無人の床にライトの破片がぶちまかれる。
流星は未来を庇いながら声をかけた。
「大丈夫ですか?」
「あ……大丈夫」
呆けたような顔の未来はこくこくと頷いた。
流星はほっとしたものの、すぐスタッフ達に目をやった。
スタッフ達は呆然としていたが、その内の一人が覚醒して流星と未来に近付いた。
「二人共、大丈夫か?」
「未来さんは大丈夫です。俺も……つっ」

流星は痛みを感じてこめかみを押さえた。
嫌な予感がしてその手を見ると、案の定、手の平に血が付いている。
ガラスでもかすったのか、血がだらだらと頬を伝って床にボタボタ落ちだした。
流星が思わず口の中で「げっ」と呻くほどの量だった。
「き、君っ。血がっ」
「お、おい！　誰か救急箱取ってこいっ」
一瞬にして、さっきとは別種のざわめきがスタジオに充満した。

「すみません」
流星は開口一番謝った。
「どうして謝るの？　私を助けてくれたのに」
未来は流星の傷口にガーゼを当てながらにこっと微笑んだ。
テレビ局の一室。流星は傷の手当てをするために未来の控え室に来ていた。
「君が助けてくれなかったら、私死んでた。ありがとう」
「いや、その……」
流星は照れ入り、うつむいた。
「あ、動かないで。貼れないから」
「は、はい」
流星は今度は動かないよう神経を使った。
「……はい、終わったよ」
未来の言葉に、流星は頭に手をやった。
ガーゼ越しに少し強く押すと、ずきりと痛む。
「跡、残るかもね」
「俺は別にいいですよ。未来さんが怪我しなくてよかったです」
流星は笑顔を未来に向けた。
「あー、でも学校の奴らの質問攻めに合うな、こりゃ」

流星が頬をかいていると、ふと、未來の表情がかげった。
「あの……どうしたんですか？」
流星が尋ねると、未來はため息をついた。
「……私ね、昔ひきこもりだったの」
「え……」
「生きるのが哀しくて苦しくて……自殺も考えたっけ。当然学校は行ってなかった」
いきなり始まった語りに、流星は戸惑った。
何を言うべきか迷ってる間にも、未來の話は続く。
「世間体を気にする両親、特に母は、私のことを理解しようとはしてくれなかった」
「……」
「でも、ね。歌うことで、私は心を保つことができたの。歩くことが、できたの」
未來の言葉に、流星は聞き覚えがあった。
少し考え、ハッと思い出す。
「生きることは哀しくて、あがくほどに苦しくて、でも歌うから、私は歩き続ける……」
流星の呟きが聞こえたらしく、未來は淡く微笑んだ。
「私のファーストシングルのサビね。そう……私の想いが、そこに詰められてるの」
未來はもう一度ため息をついた。
「ずっとずっと独りぼっちで。寂しくて、哀しくて、苦しくて。それでも生きなくちゃならない。それが人だと、伝えたかったの」
「未來さん……」
流星はじっと未來を見つめた。未來は、応えるように微笑む。
「貴方にも伝わったのかな。私の、気持ちと想い」
「未來、さ……」

バンッ

突然ドアが開いた。それも、壊れるかと思うような勢いで。
「!?　って、悠かよ……驚かすなよな」
「驚いたのはこっちだよ」
ノックも無しに入ってきた悠は、流星に近付き、額のガーゼに手を添えた。
「怪我したって聞いて……びっくりしたんだから」
ほっ、と安心したように息をつく。どうやら心配してくれたらしい。
いや、それよりも。
（ち、近ぇ……！）
流星は間近にある悠の顔を見て、かあっと顔面に熱が集まるのを感じた。
更に昨日のことを思い出し、相乗効果で熱が増す。
「ゆ、その、怪我は大丈夫だからっ。頭だから血がちょっと多かっただけだし！」
「……本当に？」
悠が疑わしげな顔をしたので、流星は何度も頷いた。
「……ならいいけど」
悠が離れたので、流星はホッと息をつく。
悠の方は、ぽかんとしている未來に向き直った。
「妖気の正体が解ったよ、依頼人。……その前に、訊きたいことがあるの」
「訊きたいこと？」
未來は首を傾げた。
「何？」
「貴女の亡くなった母親……どんな人だった？」
悠は近くの机に持っていた紙の束を置いた。
「これは貴女についての資料。勝手ながら、調べさせてもらったよ」
「はぁ……」

未來は目を瞬いた。短時間でこれだけのことを調べられることに感嘆したのだろう。
「で、貴女の母親についてだけど。ベランダから落ちて事故死、だよね」
「は、はい」
「近所の評判では……とてもいい母親だったみたいだね。夫に従順、娘のことを第一に考えて。少なくとも、表面上は」
悠は意味深な言い方をして、未來を見つめた。
「貴女にとっての母親は……どんなものだったの？」
「それは……」
未來はうつむき、震え声を絞り出した。
「母は……理想の娘を作ろうとしていたの。従順で、おとなしくて、自分好みの娘を」
「でも、貴女にとってそれは苦痛だった」
悠が言うと、未來は頷いた。
「子供にとって、親の理想を押し付けられるのが一番苦しい。なりたい自分とその理想が違ったら、なおさら」
「だから、家を出たんだね」
悠の言葉に、未來は再び顎を引いた。
「どれだけ説得しても、私が歌手になることを認めてくれなかったから。だから家を出て、認めてもらえる歌手になろうとしたの。でも」
未來の顔が、哀しげに歪んだ。
「母は私が本格デビューする前に亡くなった……認めてくれる、前に」
膝の上で拳が強く握られた。力が強すぎたのか、白っぽくなっている。
「……そう」
悠は一つ頷いた。
「……今から言うことは、貴女にとってかなりショックだと思う。

心して聞いて」
あくまで静かに、悠は衝撃の一言を放った。
「貴女の母親は――」

――

恨めしい、恨めしい、恨めしい。

そんな想いが心に宿ったのはいつだったろうか。
手塩にかけて育てた少女。だが、腕の中に彼女はいない。
思い通りにならないのなら。
もう二度と、この手に戻らないのなら。

いっそ、殺してしまおうか。

流星は背筋が凍り付くような悪寒を感じた。
激しい憎悪と……吐き気がするような何かが、室内に渦巻いている。
「華鳳院さん。きついでしょうが、耐えてください」
そう言ったのは、隣にいる燐である。
鬼道家宅の地下。流星達がいるのは、前に除霊をしに来た時にも使った広い部屋だ。
注連縄で描かれた円の中心に、悠と未來がいる。
悠はオリジナル（らしい）の経を読み、未來はきゅっと目をつむっていた。
「……それにしても怨霊なんて。凄い執念ね、あの人の母親」
なぜか当たり前のようにいる日影は頭を振った。
怨霊。憎しみと強い思念によって妖魔化した魂。

怨霊は、他の霊とは一線を画す。
普通の霊が主に精神に働きかけるのに対し、怨霊は他の妖魔のように肉体に影響を及ぼすのだ。
とり憑き始めはまだいい。が、怨霊は人にとり憑く月日が長ければ長いほど力と念を増幅させる。
今回は気付くのが早かったからいいものの、事故を起こしたりと力が強くなってるのは確かだった。
「ん、くっ……」
未來の口から苦悶の声が漏れた。
彼女の身体から黒い煙が吹き出る。

『憎い、憎い、憎い』

ざらりとした声が部屋に反響する。
流星はぞわっと全身の毛が逆立った気がした。
腕に触れると鳥肌が立っている。横を見ると、燐が苦しそうな顔をしていた。
「仁奈を上に置いてきて……正解でしたよ。妄執でここまで強大になるとは……」
恐怖を感じているのは自分だけではないらしい。
そのことに少し安堵しつつ、悠を見る。
悠はずっと唇を動かし続けていたが、ふと顔をしかめた。
「燐！」
声を張上げ、こちらを見る悠の表情は少し強張っていた。
「結界を強化して。今すぐにっ」
「は、はいっ」
燐は頷いて、注連縄に近付いた。
ズボンのポケットから呪符を取り出し、何やら呟く。
バシッと呪符を張り付けると、注連縄がぼうっと輝いた。

同時に未來に巻き付いていた煙が膨れ上がる。
煙は上へ上へ上がり、天井近くで収束した。
「すぐ結界から出て！　この中は危険だよ」
悠に言われ、未來はふらつきながら流星達の元に行く。
注連縄から出た未來が倒れかかると、日影が支えた。
「大丈夫ですか？」
「うん……平気よ」
日影にそう返し、未來は天井でうごめく黒煙を見つめ、顔を歪めた。
「あれが……お母さん、なの？」
「……もはや、お母様と呼べるかどうか」
日影は表情を暗くした。
「もう、人としての自我など無いでしょうから」
煙は少しずつある形を成していく。
灰色の肌をした細腕が伸び、骨と皮だけの黒い下半身が現れる。
鱗まみれの上半身はてらてら光り、脂ぎった艶の無い髪がだらりと垂れた。
「ひっ」
未來の口から悲鳴が漏れた。おそらく、前髪の隙間から見えた怨霊の顔のせいだろう。
流星も思わず唾を飲み込んだ。

その顔、まさに鬼の如し。

ギョロギョロと飛び出した目の白目部分は黄色に変色し、瞳はギラギラと金色に輝いている。黒い肌は遠目でもやすりのようにざらついてるのが解った。
そして、その顔。
憤怒と憎悪が入り交じった表情は鬼以外の何者でもなかった。
口唇からのこぎりのような歯が見え隠れし、眉間や目の周りに深

いしわが刻まれている。同じくしわを刻んだ額には、二本の角があった。
怨霊は首を巡らせ、未來を視界に収めた。
「ミ〝、ラ〝、イ〝……」
「あ、あぁ……」
怨霊は猛禽類のような黒い爪を未來に向かって伸ばした。
そしてその巨体からは考えられないようなスピードで飛びかかってくる。

バチバチバチィッ

怨霊が眼前に迫る瞬間、スパークが弾けて怨霊の動きを止めた。
「悪いですが、僕の結界は破れませんよ」
燐はふっと笑った。
「燐、ナイス♪」
悠は刀を鞘から抜き払った。
美貌に不敵な微笑を浮かべ、声を少し張り上げる。
「そこの怨霊！　おまえの相手は私だよ」
悠の声に反応したのか、怨霊は緩慢な動きで振り返った。
それを見計らったように、悠は間髪入れず走り出す。
一気に間合いを詰め、刀を横に薙いだ。
怨霊の右腕が血の筋を残して空中を飛ぶ。
悠は勝ち誇ったような笑みを見せた。が、すぐさまそれは強張る。

ズギュルゥ

斬り落とされた腕が再生した。傷口から突き出るように生えてきたのだ。
「くっ」
悠は顔をしかめて後ろに跳躍した。それを追うように、怨霊も地

面を蹴る。
怨霊の拳が振り下ろされた。悠に当たりはしなかったものの、殴られた床に亀裂が走る。

（嘘でしょっ）
悠は内心ぞっとした。
あんな威力のパンチを受けたら、自分はたちまち肉塊になってしまうだろう。
それに今の再生力。ただ攻撃するだけではらちがあかない。
「出し惜しみしてる暇は無いね」
悠は更に間合いを取って『剣姫』を構え直した。
「『剣姫』、部分解除」

「部分解除！？」
日影は目を見開いた。
「あの娘、部分解除はまだできなかったはずじゃ……？」
「部分解除？　何それ」
流星が尋ねると、日影は顔をしかめた。
「姫シリーズはね、強すぎる力を封じるたむに封印をかけられてるの。その力の一部を一時的に解放するのが、部分解除よ」
日影は悠の姿をじっと見つめた。
「いつの間に……今まで飲み込まれる可能性があったから、できなかったのに……」

飲み込まれる……？

流星は眉をひそめた。
身体を乗っ取られるという意味だろうか。

だが、悠がそうやすやすと身体を乗っ取らせるとは思えない。
何か、あるのだろうか。

グギャアアアアアアアアアッ

突然怨霊が咆哮を上げた。
怒り狂ったように、悠に鋭い爪を振り下ろす。
悠は動かない。何かを待つように、瞳を閉じて微動だにしない。
「悠！」
流星の声に反応したかのように、悠がすぅっと顔を上げた。
赤い唇が静かに声を紡ぐ。
「初の手（ソメ）――風刃斬（フウジンザン）！」
刀が振り下ろされた。

ガガガガガガガガガッ

刃から白い衝撃波が放たれる。
衝撃波はコンクリートの床を削り、避ける暇も与えず怨霊にぶち当たった。
怨霊の身体が縦割りにされる。黒い血が傷口からどぱっと吹き出した。
（今の技……羽衣姫と戦った時の！）
技名があったのか、などと思ってる内に、怨霊が音を立てて倒れた。
血がどくどく流れ、床を汚す。その様子は、見ていて吐き気をもよおした。
戻ってきた悠ははあっと息をついた。
「まだ肉体を保ってはいるけど、その内消滅するだろうね。もう安心だよ」
「え。でももう一人の霊は？」

流星が尋ねると、悠は肩をすくめた。
「あれは悪いものじゃないよ。それどころか」
悠は未来に微笑みかける。
「彼女は、貴女を守っていたんだよ」
「えっ……」
未来は目を見開いた。
「どうもその人、ただ貴女の歌を直接聞きたかっただけみたい。自殺する直前の、最期の願い」
悠は未来の背後を見つめた。
流星も視えている。未来の肩辺りにいる、黒い影が。
「でも先客、つまり貴女の母親がいた。しかも、貴女を殺そうとしていた」
悠は怨霊に目を向けた。
怨霊の身体は崩れかけていた。肉体がぼろぼろになり、ミイラのように干からび始めている。
「貴女に生きてほしい。そんな思念を持った彼女が守っていたから、今まで無事でいられたんだろうね」
「じゃ、今までのことは……」
「貴女に怨霊のことを教えようとしたんだよ。それが実を結んだから、私がいるんだけど」
悠は少し胸を張った。
「……でも解りませんね。母親が娘を殺そうとして、赤の他人が守ろうとするなんて」
燐は信じられないというように頭を振った。
悠は軽く目を伏せ、再び肩をすくめる。
「家族であるなしは関係無いよ。血が繋がっていることは、想うことに影響しない」
悠は静かな目で怨霊を見つめた。
「家族が互いを憎むことも、他人同士が愛し合うこともある。人が誰かを想うことに、家族であるか否かは必要無いよ」

悠の言葉に、未來は顔を歪めた後、怨霊に注連縄越しに話しかけた。

「私……お母さんに認めてもらいたかった」

怨霊の顔が動いた。うつむく未來を、その目に映す。

「お母さんと同じ道に、お母さんが敷いた道になんて嫌だった。私が好きな道に進んで、認めてもらいたかった」

未來の頬に涙が伝った。しかしその言葉は、何より力強く響く。

「お母さんが私を愛してくれてたのは解ってたよ。でも、腕の中に閉じ込めて守ってもらうより、外へ歩き続ける姿を応援してほしかった！」

未來の言葉に、怨霊は何を思ったのか起き上がろうとした。

しかし怨霊の肉は崩れ骨だけになり、風化してちりになり……やがて消えた。

しばらく全員がそれを身じろぎせず眺めていたが、悠の一言でまた動き出した。

「未來さん、歌ってくれる？」

「え」

驚く未來に、悠は微笑を向けた。

「もう一人の霊のおかげで、貴女の命を救うことができた。お礼ぐらいしてあげたら？」

最後の方は随分偉そうである。だが、未來はそれに怒った様子は見せなかった。

戸惑ったように悠を見つめ、流星達を見つめ――ゆっくり後ろに二歩下がった。

両手を胸元に当て、すぅっと息を吸い込む。

息と共に、歌声が紡ぎ出された。

『独りぼっちで泣いた夜。もう何度重ねたかな。

歩くべき道も共に行く人も見えず、闇の中で立ちすくんでいたの。
キラキラ光るものは掴んでもこの手から滑り落ちた。
道標も無いまま、時折聞こえる雑音から逃げていた。
傷を見せるのが怖いから、強がりで笑っていたよ。傷を広げる結果になっても。
道は見えない。闇も晴れない。でも私の足は動き続ける。
生きることは哀しくて、あがくほどに苦しくて、でも歌うから歩き続けるよ。
ねぇ、いつか見つかるのかな。私だけのたった一つの光。
でも今は、今だけは、闇の中で泣かせて。
いつか本当に笑顔でいられる道を、探して……』

伴奏もスポットライトも無い。きらびやかな衣装を着ているわけでもない。
なのに、今の未來はとても輝いて見えた。
「凄い、ですね」
燐の震え声に、流星は顔を彼の方へ向けた。
「歌声だけで、こんなに心を揺さぶられるものなんでしょうか」
「そうね……」
日影は思わず、といった感じでため息をついた。
「きっと彼女の想いが、詰まった歌だからでしょうね」
日影の言葉に、流星は頷きながら悠を見た。
悠は穏やかに微笑んでいた。まるで歌声に酔いしれるように。
歌声は響く。どこまでも切なく哀しく、だが、力強く。

『ありがとう』

微かに、感謝の言葉が聞こえてきた。
それは霊の声か、それとも……
それは心に突き刺さり、ゆっくり染み込んでいくように。

孤独の歌は、ただ静かに紡がれる。

第十一話　狐狂い<上>

暗い教室。電気もつけられず、窓からのみ明かりが入る空間に、声が響く。

「こっくりさんこっくりさん、鳥居からおこしください」

不気味な少女の声。しかし無感情に思えて、その声は切実な願いが込められていた。

「こっくりさんこっくりさん。おいでしたらはいとお答えください」

声に呼応するように、何かがこすれる音が空気を震わせた。

少女が言葉を重ねるたびにスス、とこすれる音が連続で響く。やがて息を飲む声が聞こえた。

「そんな……」

愕然とする声。しかしハッとしたのか、慌てたように再び口を開いた。

「こっくりさんこっくりさん、お帰りください」

再びこすれる音。

「か、え、ら、な、い……！？」

声が悲鳴に変わった。

「お帰りくださいお帰りください、帰って、帰って帰って帰って！」

『帰らない』

声が、笑みを含んで響く。

「帰って……お願い……」
悲鳴がこだまする。
「こっくりさんこっくりさんこっくりさんこっくりさんこっくりさんこっくりさん……」
声はいつしか、消えていく。

――――

流星は頭痛がしてきた。
「何、その顔」
悠はソファーに座ったまま首を傾げた。
その隣には恭弥がおり、困惑顔で悠と流星を見比べていた。
「おまえ……言ってること解ってんのか？」
流星が尋ねると、悠は細い顎を引いた。
「当然でしょ。これも仕事だと思って割り切ってよ」
「いや、仕事はいい。それよりも、だ」
流星は声のボリュームを上げた。
「何で俺が、恭弥の学校に転校しなきゃならねぇんだよ！」
流星の怒鳴り声も、悠は涼しい顔で聞き流した。

ことの発端は今朝に始まる。
日曜日ということもあって朝から事務所に来ていた流星は、偶然恭弥と鉢合わせた。
遊びに来たとかそういうわけではなく、なんと仕事の依頼だった。
恭弥の高校――晋羅高校で今、こっくりさんがはやってるらしい。
恭弥が言うには、こっくりさんは降霊術を略式化させたものだそうだ。
なので普通は力の無い者がやっても何も起きないが、こっくりさんをやった生徒が意識不明で数人病院に運ばれたらしい。しかも未だ昏睡状態だという。

これはまずいと思った恭弥は悠のところに来たのだと語った。
恭弥が解決すればいいじゃないかと流星は言ったが、人柱である以上、あまり単独行動ができないのだ。
それで悠を頼ったらしい。
……が、しかしである。悠が提示した条件は、流星にも恭弥にも驚愕ものだった。

「潜入して校内を探れだぁ？　あそこの偏差値どんだけあると思ってんだよっ」
「個人偏差値四十一の流星じゃ、逆立ちしても無理だろうね」
「何でそのこと知ってんだぁぁ！」
絶叫する流星に対し、悠はくすくす楽しそうに笑った。
「二十四ほど足りないね。恭兄は余裕なのに」
「……幾つなんだよ」
悠の言葉に、流星は眉をひそめる。一方、恭弥は言いにくそうな顔をした。
「恭弥？」
「……ご」
「え？　何て言ったんだ？」
聞き取れなかったのでもう一度尋ねると、恭弥は驚愕の数値を言ってくれた。

「七十五だ」

……ちなみに晋羅高校の偏差値は六十五である。
つまり、恭弥はそれを十も上回ってるわけで。
流星は当然のことながら呆然とした。
「……すみません、コンピュータ搭載してるんですか？」
「いや。そんなもの搭載できるわけないだろ」
真面目に返された。

流星は額を押さえつつ、悠に向き直る。
「俺、来週からテストなんだけど」
「別の日に受ければいいでしょ」
「恭弥のとこも、中間テストあるだろ」
「恭兄のとこは再来週からだよ」
「ちょっとしか通わねぇっておかしいし」
「諸事情で少ししかいられないって言えばいいでしょ」
「勉強、付いていけねぇだろうしさ」
「一時的な編入なのに、どうして付いていく必要があるの」
「……」
万事休す。もう言いわけは残っていない。
救いを求めるように恭弥を見ても、困った顔をしただけである。
流星はがっくり肩を落とした。

――――

「……というわけで、しばらく共に学ぶことになった華鳳院　流星君だ」
嘘だらけの説明を教師がしたのを見計らい、流星はぎこちない笑みを作った。
「少しの間だけど、よろしくお願いします」
黙ったままこちらを見つめる目、目、目。
（こ、怖ぇ）
流星は内心ビクつきながらも指定された席に向かった。
席に座り、取りあえず愛想よくしなければと右隣の女子に声をかける。
「よろしく」
「……！」
声をかけられた眼鏡におさげのいかにもおとなしそうな少女は、ぴくんと肩を震わせた。

妙な反応に流星が首を傾げていると、左隣の男子が「悪ぃ」と言ってきた。
赤がかった茶髪に鳶色の瞳、精悍な顔立ちは日焼けしている。なかなか格好いい青年だが、制服をだらなしなく着崩してるあたり、あまり真面目には見えなかった。
「結城(ユウキ)サン、人見知りするから。気ぃ付けてやって」
「え、そうなのか？」
流星は目を瞬かせた。
「わ、悪ぃ……知らなかったから」
謝ると彼女――結城はふるふる首を振った。
「いいんです。私、結城　静奈(シズナ)です。彼は……」
「火神透(ヒガミトオル)。よろしく、華凰院」
男子生徒――透はにかっと笑った。
「あ、よろし……」

「そこ！　授業始まってるぞっ」

教師からの怒鳴り声に三人は首をすくめた。
「特に火神！　来週のテストはおまえが一番危ないんだ。少し気を引き締めろっ」
「……ウーッス」
透はやる気無さげに返事をした。

授業が終わった時には、流星は抜け殻と化していた。
やはりと言うべきか、授業には全く付いていけない。ノートすらまともに取れなかった。
机につっ伏しながら意識を手離しかけていると、黄色い悲鳴が聞こえてきた。
顔を上げると、見覚えある姿が目に映る。

「……恭弥」
「大丈夫……じゃなさそうだな」
恭弥は苦笑した。
その後ろでは数人の女子が熱い視線を飛ばしているのだが、気付いた様子は無い。
「……なぁ、後ろ」
そう言うと、恭弥は後ろを振り返り、また流星の方を向いた。
「ただの人だかりだろ」

鈍感にも程があるだろ。

そうツッコむ気にもなれず、流星はぐったり机にもたれかかった。
恭弥は何か言おうと口を開いたが、第三者によって阻まれる。
「よっす、恭弥！」
透だ。授業が終わったとたんいなくなっていたのに、いつの間に戻ってきたのか。
「クラスにいねぇと思ったら、何？　華凰院と知り合いだったのかよ」
「あぁ。……っていうか、重いんだが」
肩を組んで乗りかかってくる透に、恭弥は顔をしかめた。
「……友達だったのか」
流星は少し驚いた。
見たところ、全く接点が無さそうだが。
「おう！　中学の時からの仲だぜ。つぅか大親友だし」
透は親指をぐっと上に向けた。一方、肩を組まれたままの恭弥は苦笑を浮かべる。
だが、否定しないあたり、親友というのは嘘ではないようだ。
「……あ、そうだ流星。昼休み話せないか？　屋上でいいか」
「ん？　お、おう」
恭弥の言葉に流星が頷くと同時に透が反応した。

「恭弥てめっ、親友をハブる気か！？」
「あーはいはい。来たければ来いよ」
恭弥はひらひらと手を振ってあしらった。
しかし顔はにこやかなので、特別酷い扱いだとは感じられない。
「それじゃ僕は教室に戻る。またな」
恭弥は透の腕を外して教室を出ていった。女子の集団がそれを追いかける。
「……すげぇ人気。アイドルかよ」
流星の呟きに、透は肩をすくめた。
「中学の頃からファンクラブあるくらいだからな。あの時なんて大変だったぜ」
「あの時？」
「あいつ長く休んでたことがあったんだよ。中二の時な。女子が泣くわ泣くわ」
軽く頭を振る透に、流星はふぅんと返す。
（そういやそろそろチャイム鳴る……）
時計に目をやり、気持ちが急降下を始めた。
（い、生きてるかな、俺。あと三時間……）
流星は再び机につっ伏した。

――――

五月晴れのさわやかな空の下の屋上で、なんとも似つかわしくない空気が漂っていた。
「おい、透。流星の身に何が起きたんだ？」
透と並んで座った恭弥はそっと尋ねた。
「何だか……魂が抜けているようなんだが」
流星は精根尽き果てて床に転がっていた。

レベルの高すぎる授業に付いて行けず、質問喰らうわ小テストはあるわで精神的に死の直前まで追い込まれてたのである。
昼食を食べる気にもなれず、結果床に転がっている。
「おーい、華凰院ー」
透の声にも流星は反応する気が起きない。
「……仕方がない。最終手段だ」
恭弥の声の直後に、カチカチと携帯のプッシュ音が聞こえてきた。
しばらくして恭弥の話し声。そしてピ、という電子音が鳴ったとたん――
『しゃきっとしなよ、馬鹿流星！』
流星はガバッと起き上がった。
ぐるりと振り返り、恭弥の持つ黒い携帯を凝視する。
「ゆ、ゆゆゆゆゆゆ悠！？」
『どもり過ぎだよ』
あきれたような少女の声に、流星の意識が浮上した。
「おー、効果テキメン」
「だろ。絶対効くと思ったんだ」
おかしそうに笑う恭弥と透に流星はう〝、と呻いた。
『全く。恭兄からの電話で何かと思えば……。何？　頭は毛虫並なの？』
「言うな。めちゃくちゃ傷付く」
流星は悠の言葉にふと目頭が熱くなった。
『その様子じゃ、こっくりさんの情報はゼロだね』
「うっ。まぁ、な……」
流星は言葉を途切れさせた。
今頃透の存在を思い出したのだ。
透は退魔師とも妖魔とも関係無い、恭弥の友人というだけの一般人である。

彼の前でこの話はまずい。非常にまずい。
焦った流星だが、恭弥はにこにこと口を開く。
「大丈夫。透は知ってるから」
「……は？」
「だから、退魔師のこと知ってるんだって。今回のこともな」
「……はぁぁ！？」
流星の顎が落ちた。
「な、な、なんっ」
「何で知ってるかって？」
恭弥の代弁に、流星はこくこく頷く。
恭弥は頭をかいて苦笑した。
「昔、式神使ってるとこ見られてな。あと、妖魔を倒しているところも」
実にあっさり暴露した。
「あの時はビックリしたなぁ。特撮かと思ったし」
透はのんきに笑った。流星からすれば、信じられない光景だが。
『……話、戻したいんだけど』
悠の不機嫌な声に、男三人はハッとした。
「あぁ、悪い」
恭弥がまず謝り、携帯に向かって口を開いた。
「さっき言ってた通り、こっちは特に情報を得ていない。ただ」
恭弥は透の方を見た。
透は頷き、話し出す。
「俺んとこのクラスの女子によると、こっくりさんの使いって噂があるらしい」
『……聞いたことの無い声だね。貴方が火神　透？』
悠に尋ねられ、透は「あぁ」と返した。
『そう。続けて』
「おう。こっくりさんの代わりに、こっくりさんを信じない奴に制裁を与えるっつーんだが……具体的なことは、どうもな」

透が話をくくると、悠は『ふぅん』と唸った。
『……流星』
悠は低い声に、流星は嫌な予感がした。
『素人がちゃんと情報手に入れてるのに、君は何をしてたの？』
「……スミマセン」
『君は仕事のために、そこの学校に入ったんだよね？』
「ハイ」
『自覚あるの？　仮とはいえ、君も退魔師でしょ』
「ホントウニゴメンナサイ」
悠の声に恐怖を感じ、流星は片言になる。
恭弥と透は、その様子にため息をついた。

ひとしきり言って満足したのか、悠はようやく流星を言葉責めから解放した。
ふらふらの流星は、やつれた顔でパンをかじりだす。哀れとしか言いようがない。
『それより、火神　透の話で一つ、作戦を思い付いたよ』
悠は何ごとも無かったかのように話し出した。
「作戦？　何だ？」
恭弥は携帯の向こうにいる妹に尋ねた。
『うん。今夜、明日でもいいけど……』
悠はその作戦とやらを話し始めた……

狐狂い<中>

夜の校舎はどこも不気味だ。
特に、古びた校舎は目に見えない何かが渦巻いてるように見える。
「はぁぁ。何でまた、夜の学校で……」
「昼間するわけにはいかないでしょ」
疲れたように息を吐き出す流星に、悠はツインテールにした髪を指に絡ませながら言った。
その様子を見て、またため息。
「……それよりいいのかよ。一般人巻き込んで」
「この際仕方がないだろう」
ぼうっと夜空を眺めていた恭弥は、視線を流星に戻した。
「僕らだけでやっても、こっくりさんの使いとやらは出てこないだろうしな」
「だから俺らのクラスメイト集めたんじゃねぇか」
校門にもたれかかっていた透はあくびを噛み殺した。
「あと十分くらいか、みんなが来るのは」
「もとい、こっくりさんの使い候補だね」
腕時計を見つめる恭弥の呟きに、悠は下唇をぺろ、となめた。

悠は、こっくりさんの使いは晋羅高校の生徒だと推測した。
何かがただ取り憑いただけなら、クラスは特定できても霊気や妖気が弱すぎて誰に取り憑いてるかまでは解らない。
そこで深夜の学校でこっくりさんをすることにしたのだ。無論、特定されたクラスの人間と一緒に、だ。

こっくりさんの名を出せば、使いの方も出てくるだろう……悠はそう予測した。

少々不安が残るし、完璧な作戦とは言えなかったが、他に策は思い付かない。

さっそく恭弥が妖気を探ってみたところ、なんと流星と透のクラスからだということが解った。

それでこっくりさんをしようと透がクラスメイト全員に提案し、四人が来ることになったのである。

思ったより人数が集まらないのは、ノリのいい人間が少ないからだろう。

十分弱ほどたって、校門前にメンバーが集まってきた。

「うっそぉ！　椿君もいるぅっ」

四人の内二人の女子が黄色い声を上げた。

恭弥は一瞬きょとんとした後、にこっと笑って「こんばんは」と返す。女子がまたきゃぁきゃぁ言った。

そこで恭弥は三人目の女子に目を止める。

「あれ、結城さん？」

「っ！！」

眼鏡の少女は大げさなほど肩を震わせた。

「恭兄、知ってる人？」

悠は恭弥の後ろから顔を覗かせた。

「あぁ。中学が一緒だったんだ。同じクラス委員だった」

透は覚えてないだろうが、と言って、恭弥は後方の親友を見やった。

「んだと！　お、覚えてるに決まってるだろ……」

「語尾が弱いぞ」

恭弥はやれやれとばかりに首を振った。

「あ、あのっ」

結城は震え声を振り絞った。

「椿君……私のこと、覚えてて……」
先を続けられないのか、結城はそこでうつむく。恭弥はその様子を見つめた後、頷いた。
「勿論だよ。席が隣だったし、よく話したよね」
「……！」
結城の顔が赤く染まる。
そんなやり取りを見ていた流星は、四人目である男子生徒が固まっているのに気が付いた。
「どうしたんだよ」
声をかけても反応無し。
不思議に思って視線たどると、納得できる人物がいた。
悠だ。おそらく彼は、悠に見惚れて動けなくなってるのだろう。
ふと見れば、女子陣も固まっている。悠が原因なのは間違い無い。
「あ、紹介する」
恭弥はにこやかに悠の肩に手を置いた。
「妹の悠だ」
数秒の沈黙。

『えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？』

四人は仲良く合唱した。

その後もうだうだ校門前で話していたが、十分ほどしてようやく校内に侵入した。
懐中電灯の光を便りに階段を上り、薄暗い廊下を進んでいく。
「椿君もこんなことするんだねぇ」
女子の一人が甘ったるい声を出した。髪を茶色に染めており、お世辞にも進学校の生徒には見えない。
「ん？　あぁ。たまにはいいだろ」

先頭を歩いていた恭弥はさわやかに笑った。
黄色い悲鳴が上がる。話しかけた女子は失神寸前だった。
「……あれ、わざとか？」
「や、素だよ」
耳打ちした流星に、悠は肩をすくめて見せた。
「いわゆる天然タラシってやつかな。本人無自覚だし、そんな気も無いけどね」
「……」
（恭弥がモテんの、見た目や性格だけじゃない気がしてきた）
流星は頭をかいた。どちらにせよ、うらやましいことにかわりないが。
「あ、ここだ、ここ」
恭弥と並んで歩いていた透は、廊下の一番奥にある教室のドアを開けた。流星と透、結城達のクラスである。
「鍵はどうしたんだ？」
恭弥が尋ねると、透はにっと笑った。
「掃除当番の特権。鍵閉めるフリして実は開けといたり」
一同あきれ返った。感心の意を示したのは恭弥ぐらいである。
中に入って、懐中電灯で室内を照らす。当然誰もいない。
「まずは机を動かして、あと五円玉と紙が必要だね」
悠はそう言って目配せを――

「用意ならできてます」

突然結城が教室の中心を指差した。
全員指の先を追う。次いで目を見開いた。
いつの間にか、机が全て後ろに下げられている。一つ、部屋の中心に残されているだけだ。
そしてその机の上に、紙と五円玉が一枚置かれていた。
流星は鳥肌が立つのを感じた。

さっきまで普通だった空間に、ぴんと張りつめたような『何か』が混ざっている。
異常に気付くまで無かった、一種の緊張のような感覚。そしてそれに真っ先に気付いたのは、悠でも恭弥でもない。
（結城、さん？）
ごく普通の女子校生であるはずの彼女が、感覚の鋭い椿兄妹より先に気付いた事実。
偶然なのか、それとも。
「悠……」
流星が小さく声をかけると、悠の瞳に刃のような光が灯る。
「アタリ、だね」
悠は首のチョーカーの十字架をいじり、すうっと微笑んだ。
「……始めるか」
恭弥の言葉に、皆我に返ったように机に集まった。
紙に書かれた五十音のひらがなと「はい」、「いいえ」の一番上には、鳥居のマークが描かれている。
紙もその上に置かれた五円玉も、特に妖しいところなど無い。
全員手を伸ばし、五円玉の上に指を乗せた。
「ね、誰がこっくりさん呼ぶ？」
女子の一人の言葉に、皆顔を見合わせた。
全員、流星達ですら迷っていると、結城が口を開く。
「こっくりさんこっくりさん、鳥居からおこしください」
流星は身を固めた。
右隣から聞こえる声があまりにも冷たくて、ぞっとするほど異質に聞こえたからだ。
「結城さ……！？」
声をかけかけた流星は言葉を飲み込む。
五円玉が動き出した。

「やだ……ちょ、誰が動かしてんの！？」
女子が一人悲鳴もどきを上げた。
「俺じゃねぇよっ」
「あ、あたしじゃない……！　結城さんが動かしてるんじゃないの？」
三人が騒ぎ出した。結城の声はなおも続く。
「こっくりさんこっくりさん、おいでしたら『はい』とお答えください」
すす、と五円玉が移動し、「はい」のところで止まる。
「ひっ……」
「う、嘘っ」
事情を知らない三人は顔を見合わせる。流星も薄気味悪くなってきて指を離そうとした。
だが、力を入れても、指は動かない。
（外れない！？）
流星は目を剥いた。
どれほど指を離そうとしても、腕自体が固まってしまったように微動だにしない。
流星は悠に声をかけようとして、女子の片割れに遮られた。
「ね、マジでこっくりさんなんているの？」
揺れる瞳を落ち着けなさげに動かしながら、彼女は囁くように言う。
おそらく、言葉自体は恐怖を抑えるためだろう。
「だって、いるわけないじゃん、そんの。そうよ。今だって誰かが動かしてるのよ。こっくりさんなんているわけな」

ガッ

結城が女子の首筋に噛み付いた。
目を見張る女子が抵抗する暇も与えず、首の肉を喰いちぎる。

女子の首筋から紅い血が吹き出し、机や紙を染め上げた。
首の一部を失った女子生徒は、重力に逆らえずに床に倒れ込む。
「なっ……」
流星はけいれんして横たわる女子を見つめ、言葉を失った。
首から流れ出る血は止まらず、床に紅い池を作っる。
呆然とする一同を前に、結城は血で染まった口を開いた。
「こっくりさんこっくりさん、貴方を信じない奴らを、殺してもいいですか？」
結城は、焦点の合わない目で周りを、流星達を見渡す。
五円玉は、「はい」を示していた。

――――

彼女は笑った。自分を呼ぶ声に。
尋ねる言葉は決まっている。誰が誰を好きかとか、そんなことだ。
そんなくだらないことを……わざわざ何かに尋ねなければ解らない。
そんな人間は、とても愚かで、おもちゃには最適だ。
「私を求めなさい。そして……しもべと成り果てなさい」
彼女は、嘲笑った。

――――

悠と恭弥の行動は早かった。
「朱華！」
悠が鋭く呼ぶと、何も無い空間から白ワンピースの少女が現れる。
「彼女を頼むよっ」
「はい」
朱華はたたっと倒れた女子に駆け寄った。
「みんな、机から離れろっ」

恭弥は怒鳴った後、結城の右腕を掴んだ。
結城は抵抗するように左腕を振り上げる。
しかし恭弥はその腕も掴み、両腕を彼女の背中の後ろへひねった。
そのまま、容赦無く床に叩き付け、完全に抑え込んだ。
結城はじたばた暴れる。しかし恭弥の力の方が強く、足を動かしただけに終わった。
「やっぱ、結城さんがこっくりさんの使いなのか？」
恐る恐る近付いた流星に、悠は唇に人差し指を押し当てて見せた。
黙ってろ、ということらしい。
「全員そこを動くな！」
恭弥の鋭い声に、全員ピタッと動きを止めた。逃げかけていた女子と男子ですらだ。
結城の呻き声以外の物音が、ぱったりと消える。
呼吸を忘れそうな沈黙が流れ――

「そこだ！」

悠が動いた。
静から動への切り換えがあまりにも速く、流星の目では捉えられない。
解ったのは、悠が黒のレッグウォーマーをはいた右足を旋回させたことぐらいである。
鈍い音を立てて、悠の蹴りが止まった。
「見付けたよ……こっくりさん」
悠はニヤッと笑った。
暗闇でよく見えないが、誰かが悠の蹴りを腕で防いでいる。
体型からして女らしい。つり上がった目は深紅に輝いている。
悠は足を下ろすとすぐさま間合いを取った。
「その瞳とこの気配……狐の眷族だね」
悠の言葉と同時に、女は完全に姿を現した。

薄い金髪を腰まで伸ばし、整った面差しに冷笑を浮かべた女は、ふんと鼻を鳴らした。
「まさか私に気付くなんてね、椿　悠」
「私だけじゃないよ」
悠は結城を抑え込んだままの恭弥に視線だけ投げかけた。
「恭兄もおまえの監視に気付いていてね。それとなく私に教えてくれた」
「……いつ？」
「私をみんなに紹介した時。恭兄は術師だ。言葉を使わなくとも伝達方法はいくらでもある」
悠は朱嵜の方に右手を向けた。
「朱嵜」
「はい」
朱嵜は銀色に発光する右手を倒れた女子にかざしながら長細い何かを投げた。
悠はそれを受け取り、鞘を抜き払う。悠の刀、『剣姫』だ。
「あの植物男が死んだから、今度はおまえが見張りに来たわけ？妖偽教団」
悠のセリフに、流星は目を見開いた。
「妖偽教団！？　じゃ、こいつは恭弥を狙って……？」
流星が女を凝視すると、彼女は不快げに顔をしかめた。
「口のきき方に気を付けることね、坊や。私はおまえ達人間よりはるかに上位にいる存在よ」
尊大な態度に反論するより早く、恭弥が後ろを振り返った。
「透、校舎から出ろ。僕らに任せるんだ」
透は一瞬、戸惑ったような、後ろめたいような表情を浮かべた。
だがすぐ頷き、まだ呆けてる二人の背を押して教室を出る。
「朱嵜、おまえも怪我人を連れて外に」
「はい」
朱嵜は一礼すると、女子生徒をずるずる引きずっていった。

「……さて『こっくりさん』」
朱華が出ていった後、悠は刀を女に向けた。
「何でこっくりさんを流行らせたの？」
「退屈しのぎよ」
女は再び鼻を鳴らした。
「人柱の監視なんて、つまらないことこの上無いわ。だから遊ばせてもらったの」
女はまだ暴れている結城を見つめ、瞳を光らせる。
「人柱……そろそろ私のおもちゃを返してもらうわよ」
「っ……！？」
恭弥が蹴り飛ばされた。
結城が無理矢理身体をひねり、足を蹴り上げたのだ。
恭弥は机の山に突っ込んだ。音を立てて机が幾つも倒れ、姿が見えなくなる。
「恭兄！」
悠は女から視線を外した。
「甘い」
「！　あうっ」
悠が視線を戻した瞬間、女の拳が彼女の腹に入った。
吹っ飛ばされた悠は、教卓に叩き付けられる。
「悠っ」
流星は悠の元に駆け寄り、彼女を起き上がらせた。
「うっ、くぅ。油断した……私としたことが……」
悠はよろめきながらもやんわり流星を押し退けた。刀は離していない。
「恭兄は……」
悠と流星は恭弥の方を見た。恭弥も起き上がるところで、頭を軽く振っていた。
「油断した。だがもう……」
恭弥の言葉が途切れた。

視線は結城にそそがれており、苦渋に満ちた表情が浮かんでいる。
恭弥の視線を追って結城の方を見ると、彼女は全身を震わせていた。
「血、血、血、ち、チ」
真っ赤になった手の平を見下ろす結城。目の焦点は合わず、意識が正常かさえ疑わしい。
確認せずとも解る。彼女の心は……壊れてしまった。
「貴様……彼女の魂を喰ったのか」
恭弥の問いに、女はにんまり笑った。
「そ。この娘だけでなく、他にも何人かね。全員おまえのことを訊いてきたよ。本当、恋する娘の愚かしいことったら」
「黙れ」
低い恭弥の声に、女の言葉が止まった。
「悠、依頼しておいて悪いが、こいつは僕に任せてくれないか」
恭弥は上着のポケットから呪符を取り出した。
「こいつは……僕が狩る」
恭弥の顔に表情は無い。ただ憤怒だけが、漆黒の瞳を彩っていた。

狐狂い<下>

呪符が黒い鎧武者の姿となり、巨大な槍を突き出す。
女はふっと笑って身をひるがえした。槍は空を貫き、女は笑みを深める。
「そんな遅い式神じゃ私を捉えられないわよ！」
ふっ、ふっ、ふっ、と女の周りに青白い火球が浮かぶ。
「行け！」
女が指差すと、火球は鎧武者に向かって突撃していった。
「玉鼎（ギョクテイ）！」
恭弥はもう一枚呪符を投げた。
呪符はぐにゃりと歪み、青に変色、そしてある姿に変形する。
長い青銀の髪に白い肌、瞳と魚の尾のような下半身も青だ。髪から突き出している耳は、白い貝のような形である。
人魚の容貌を持つ式神は、繊手から水を放出させた。
狐火と水がぶつかり合い、蒸発する音が空気を震わせる。
「くっ。狐火と人魚の水は相性悪いのよっ」
女は余裕の表情を消して四つん這いになった。
九本の金毛の尾と獣耳が現れる。
「こうなったら、人柱！　貴様を殺して羽衣姫様の手土産にしてやるっ」
金色の尾が伸びて弾丸のようなスピードで恭弥に迫った。
しかし恭弥は焦ること無く、新たに呪符を取り出す。
「甲奕！」
恭弥の声と同時に、呪符は巨大な亀の姿になる。巨大亀は尾の猛攻を全て受け止めた。

巨大亀の甲羅に攻撃を防がれ、女は舌打ちを漏らした。
「悪いが僕はまだ死ぬわけにはいかない」
恭弥は新たな呪符を取り出し、放り投げた。
「僕にはまだ、やるべきことがある」

ドガァッ

巨大狼が女の首筋に喰らい付いた。
「が、あっ……」
女は苦悶の声を上げた。首筋からだばだばと血が流れる。
それでも狼を振りほどき、身をひるがえそうとした。
「黒鋼丸」
恭弥の声に、鎧武者が反応した。
床を蹴り、女の腹を槍で貫く。
「ぐあ〝あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」
女は悲鳴を上げて膝を付いた。
「ぐぁ……こ、この私が……あの男の二の舞になるなんて……」
美貌を歪め、しばらく浅い息を繰り返していたが、やがて途切れがちに笑い出した。
「はは、はっ……私を殺したって、新しい監視役が付く……そ、それにおまえは死ぬんだ……」
血ヘドを吐きながら狂ったように女の姿は、あまりにも凄惨だった。
「そう！　たとえ殺されなくとも、おまえはいずれ狂い死ぬんだっ。己の首をかき切ってねぇ！！　あは、ははは、あははははっ……」
紅い瞳から光が消える。笑い声も段々弱々しくなっていき、やがてぷつりと途絶えた。
それと同時に女の姿が溶けるように消えていく。後に残ったのは、首が取れかかり、腹を血で染めた一匹の大きな狐だった。
「……マジで、狐だったんだ」

流星はいつの間にか止めていた息と一緒に、言葉を吐き出した。
「なぁ悠。結城さんはもう……」
「うん……無理だろうね」
悠は無表情で結城を見つめた。
結城は目を虚空に向け、血だらけの身体を放り出すように床に座り込んでいる。糸の切れた操り人形のように、生気も何も感じられない。
「私達退魔師や、流星みたいに強い霊力（ちから）を持った人間はともかく、普通の人間は一度魂を取られたら、二度と身体に戻せない」
悠は鞘を拾って刀を収めた。
「どちらにせよ、魂はあの狐の腹で消化されてるだろう。もう取り戻せないよ」
「そんな……」
流星は結城を眺め、呆然とした。
一生彼女はあのままだというのか。身体が死ぬまで……
流星は何もできない自分が腹立たしくなって唇を噛んだ。
「ま、ある意味自業自得かな」
悠は髪を束ねていた二つのゴムを外した。
「！　おまえ、そんな言い方……」
「だってこれは彼女が選んだ結果だもの」
悠は再度結城を見つめた。
「こっくりさんなんておまじないに身を委ねた結果。頼らないって選択肢もあったはず」
「っ……」
「頼るか否か、全ては彼女次第だった。彼女は『応』を選んだ。それだけ。そう考えないと」
悠はこちらに瞳を向けた。鋭い目に、流星は後ずさりかける。
「いちいち心に留めておいたら、精神が耐えられないよ」
「……」
流星は悠の目に耐えきれず、そっぽを向いた。

悠はため息をついて、流星から目線をそらす。
「後味悪いけど、そろそろここから……恭兄？」
悠の声に不審の色が混じった。
顔を上げると、悠は恭弥の方を見つめている。彼の方に目をやると、こちらに背を向け、立ち尽くしていた。
「恭弥？」
流星が声をかけても返事は無い。代わりに、いきなり横倒しになった。
「恭兄っ」
「おい、どうした！？」
悠と流星は駆け寄り、恭弥を仰向けにさせた。
恭弥は目を閉じ、ぐったりしている。顔は紙のように白く、意識は失っていた。
「気絶、したのか……？」
流星は恭弥の上体を起こした。影を落とすほど長いまつ毛はぴくりともしない。
ただの気絶にしてはおかしかった。第一、何の前触れも無かったではないか。
「……まさか」
悠の震え声に、流星は顔を上げた。
悠は目に見えて動揺している。大きな瞳を揺らし、細い肩は小刻みに震えていた。
こんな様子を、つい最近見たことがある。
そう、羽衣姫と会った時……何かにおびえたような、そんな様子だ。
「そんな、もう……？　早過ぎる……」
「早過ぎるって……何がだよ？」
流星が問いかけても、悠は答えない。
ただもう一度、「早過ぎる」と呟いた。

―――

「そうか、そんなことが……」
刀弥は悠の話に少し顔をしかめた。
「馬鹿弟め……普段冷静な分、一度感情的になると後先考えねぇ」
「恭兄らいしよ……今日も凄く怒ってた」
悠は呟くように言った。
椿家の邸宅。当主の間だという部屋に、流星達はいた。
あの後、透以外の人間の記憶を改ざんし、結城と傷が残る女子生徒を病院に送った。
あの三人の記憶には、あの場に流星達がいたことは無い。自分達のことがバレる心配は無いだろう。
たが流星はそれより、恭弥のことが気になった。
悠のあの様子……ただごとではない。
何より、この兄妹の間にある空気がいやにピリピリしている。口調も苦々しい。
（それに恭弥……どう考えたって、いきなり気絶なんておかしい）
訊きたい。だが、土足でずかずかと奥に踏み込んでいいのだろうか。
自分は二人から見れば他人で、家族でも何でもない。
隠したいことを訊くなんてできないし、傷付けずに聞き出す方法など解らない。
頭では解ってる。だが、口は己の思いに正直だった。
「なぁ。……何で恭弥は倒れたんだ？」
悠と刀弥の表情が硬化した。流星は後悔したが、口はなめらかに動く。
「最初は確かに吹っ飛ばされたけど、それ以降は怪我らしい怪我、してないし。なのに顔色は悪過ぎた」
「……」
「言ってたよな、早過ぎるって。一体、何が？」

流星は悠は真正面から見つめた。
悠はうつむき、何かに耐えるかのように押し黙る。
刀弥も何も言わず、十数秒の沈黙が流れた。
やがて顔を上げた悠の顔に、流星はどきりとする。彼女があまりにも真剣な瞳と表情だったからだ。
「……このことを知っても、恭兄を見る目を変えない？」
「確信は、できないけど……約束する」
「……そう」
悠は再びうつむき、刀弥の方を見た。
「いいよね？」
「……あぁ。おまえがいいと思うならな」
刀弥は淡く微笑んで頷いた。そこに僅かな影があることに気付き、流星は少し戸惑う。
しかし悠が話し始めたことで、意識がそちらに向いた。
「人柱の呪印は彼らを守る家の人間に継承される。年齢や性別は決まってない。恭兄は三年前、中二の時に先代から受け継いだ。でも、継承を繰り返すためには、ある条件がある」
「条件？」
「そう」
悠は顎を引き、一瞬顔を歪めた。
「その条件は……」
一拍置き、悠はわななく唇で囁くように言った。
「人柱が己を……殺すことだよ」
脳が停止した。
言葉を理解するのに数十秒かかり、流星はようやく口を開く。
「そ、それって……自殺？」
「……少し違う」
答えたのは、悠ではなく刀弥だった。

「自殺とは己の意志で己を殺すことだ。人柱の場合は、違う」
刀弥は男らしい、大きな左手を伸ばし、傍に置かれた煙管を手に取った。
紅の塗料と金箔で彩られた、美しい煙管だ。
「人柱は、羽衣姫と間接的に繋がっている。力を封印してんだ、当然だァな。だが、ほんの僅かな繋がりでも、羽衣姫の影響は受ける」
煙管に火をつけ、すぅっと吸う。吐き出された煙は天井辺りを舞った。
「むしろ直接的な繋がりだった方がよかったかもな。苦しみも一瞬だ」
「何が、言いたいんですか」
「……人柱の最期は決まってる」
刀弥の顔から表情が消えた。
「狂い死にだ」
「……えっ」
流星は刀弥の言ってることが解らず、彼を見返した。
「狂い死にって……？」
「そのままの意味だ。羽衣姫の力に含まれる邪気にさらされ続けた人柱はやがて発狂し、己を傷付け、結果死ぬ」
刀弥の声は淡々としていて、瞳には光は無かった。
悠はさっきから黙ったまま、畳をじっと見つめている。どんな顔をしているか、流星からは解らなかった。
「古い呪術らしい。狂ってしまうほど魂がボロボロになり、宿主が死ぬと新たな人柱が選ばれる。逆に言えば、そうでない場合の死は、それを途絶えさせる」
「つまり、力を封じている術が解ける」
悠がぽつりとこぼした。
「そして羽衣姫の力は戻っていく。……あと八人」

悠はそう言って急に立ち上がる。
「刀兄、私帰るよ」
「え？　あ、あぁ」
妹の行動に、刀弥は目を瞬きつつも頷いた。
「行こう、流星」
「あ……おう」
流星は慌てて後に続く。
「……刀兄」
部屋を障子を開けた悠はふと立ち止まり、煙管を持つ刀弥を振り返った。
「その煙管……父さんのだよね。刀兄、タバコだったし」
「……あぁ。代理とはいえ、親父の跡を継いだんだ」
刀弥は煙管をじぃっと見つめた。
「少しでも親父に近付きたくて、な。形だけ真似しても親父に成り代われないのは、解ってるが」
「……そうだね。でも」
悠は淡い微笑を浮かべた。
「そんなことしなくても、刀兄は父さんに負けないぐらい凄いよ」
悠の言葉に、刀弥は酷く驚いた顔をする。
だが、すぐ笑みを返して「サンキューな」と囁くように言った。

退室した悠と流星は、互いに無言だった。
喋る気力が残ってるはずもなく、ただ廊下を歩くだけ。
「……酷ぇよな」
流星はその沈黙に耐えられず、口を開いた。
「封印を封じるためだけに、狂い死んでいくなんて、恭弥が、そんな……」
言葉が出てこず、結局言いよどんでしまう。
また黙っていると、今度は悠が言葉を発した。

「今日、恭兄が倒れたのは……影響が表れ始めたんだよ。封印のバランスが崩れてきてるから」
悠は立ち止まった。
「このままいけば……恭兄は狂い死ぬ」
「悠……」
「死ぬ、んだ……」
悠の声は、酷く弱々しかった。普段からは考えられないほど。
「前の人柱は、全身をかきむしって死んだ。恭兄、も……」
誰の目にも明らかな、悠の怯え。
あの時、羽衣姫と対峙した時と同じ、奥底の弱さ。
流星はどうしようか迷った後、手を伸ばして悠の頭を撫でた。悠の華奢な肩がぴくんと震える。
「大丈夫、大丈夫だ」
あやすように何度も同じ言葉を繰り返すと、悠はぎゅっと抱き付いてきた。
驚いている流星の胸に、悠は顔をうずめる。
「流星……」
「え、なっ、何だ?」
「……ありがと」
小さくくぐもった声。でも震えは、止まっていた。

――――

夜の山奥に降り立つ者が、一人。
銀髪の美丈夫――熾堕は、目の前のほこら見下ろした。
石でできたほこらは、しかし今は無惨に壊されている。
辺りには真新しい血痕が散っており、肉片らしき物も落ちていた。
しかし動くもの、生きてるものは見当たらない。
「ここにはいない？　どこに……」
熾堕は呟き、辺りを見渡す。

しばらく立ち尽くしていたが、ばっと振り返った。
目の前に迫る無数の白い糸を瞬時に呼び出した剣で横凪ぎにする。
絶ち斬られた糸が闇に煌めいた。月光も届かない中で、それはいやに輝いて見える。
「……随分なゴアイサツだな、土蜘蛛」
木々の間から現れた老人に、熾堕は笑いかけた。
白髪を下ろし、しわだらけの顔に厳しい表情を浮かべた老人は、金色の瞳で熾堕を睨み付けた。
「何用だ、童（わっぱ）」
「童、ね……まぁいい」
熾堕は友好的な笑みを浮かべつつ、古めかしい服を着る老人に尋ねる。
「いきなりだが、俺達の仲間にならないか？」
「……何者かは知らんが、断る。何かに所属するのは好まん。それに」
ふと老人は遠い目をした。
「約束がある……ここを離れるわけにはいかん」
「……そうか。なら仕方ない」
熾堕は未練無く背を向けた。
「従わなければ殺せという命令だったが、面倒だ。俺は帰らせてもらう」
「帰れると思うか」
老人の声に、熾堕は足を止める。
「わしは今、空腹だ……先刻四人喰ろうたが足りぬ」
老人の声が低くなった。
「貴様の血肉も喰ろうてやろう」
「……俺を、喰らう？」
熾堕はすっぱり笑みを消し、顔だけを老人に向けた。
「頭に乗るな、小蜘蛛が」

老人の表情が変わった。
厳めしい顔に驚きと動揺が走り、わらじをはいた足を後ろに引く。
「たかが千数百年生きた程度で俺より格上だと思うな。一見で見抜けん愚者が」
熾堕は黒い翼を出し、はばたかせた。
「言っておく。俺を地上の生物と比べること自体間違いだ。……意味が解るか？」
あいにく老人は解らなかったようだ。目を見開き、喚く。
「き、貴様は何者だっ」
「教える気は毛頭無い」
熾堕はふわっと空へ飛んだ。
「おまえは、その星に望まれていない」
そのまま、はるか上空まで飛び立った。

一人残された老人は、わなわなと震える節くれ立った手を見下ろした。
「何だ……あの者は」
老人は初めて感じる恐怖に身をよじった。
（あの気配、あの目……人か？　わしと同じ妖魔か？）
いや、どちらも違う気がする。では何か。
「おぬしなら知っていようか……月凪（ツキナギ）」
老人は、見えぬ月に手を伸ばす。
闇の中で焦がれた、月に。

第十二話　月と蜘蛛<上>

「なぁ、土蜘蛛」
女は婉然と微笑んだ。
女だというのに狩衣をまとい、艶やかな黒髪を革紐で束ねている。飾ることはせず、媚びることも無い。なのに女は美しく、男を強く惹き付けた。
「一度、休戦といかぬか」
女は紅の刀を鞘に収めた。切れ長の目に輝く漆黒の瞳が男を射ぬく。
「互いに疲弊しておる。我はおぬしを一旦封印し、都に戻るとしよう」
「……わしがおまえを帰すと思うか？」
男は女の細い顎を掴んだ。
「是が非でも、我が物にする」
そのまま女の顔に自分の顔を近付けようと――
防がれた。
間にある刀を男が不快げに睨み付けているうちに、女は男から離れる。
「再び会う日、その時に我を負かせば、そうだな、その時はおぬしのものになってやろう」
女は右手で印を切った。
男の意識が沈む。闇に、闇に。
「その日まで、しばし眠れ」

女の声が、遠い。
男は手を伸ばした。
美しい月に。月に愛された、女に。
女の姿は、月光を背後に男の目に美しく焼き付いた。

――――

流星が目を覚ましたのは、事務所のソファーの上だった。
なぜ自分がこんなところにいるのかと考え、ややあって思い出す。
「悠を送ってって、そのままここで……」
昨日は椿家を出て悠を事務所まで送った。帰るのが億劫になり、結局そのまま、事務所のソファーで寝てしまったのだ。
起き上がると、薄茶の毛布が身体の上からずり落ちた。
「これ……悠がかけてくれたのか？　それとも朱嵐？」
どちらにせよ、感謝せずにそのままとはいかないだろう。
毛布をたたんでいると、廊下側のドアから朱嵐が入ってきた。
「あ、おはよう」
流星が声をかけると、朱嵐は軽く低頭した。
「おはようございます。お目覚めでしたか」
「あぁ。……なぁ、これ誰がかけてくれたんだ？」
たたみかけの毛布を持ち上げると、朱嵐はにこりともせずまた低頭する。
「私めですわ」
「そっか。サンキューな」
「五月とはいえ、夜は冷えますから」
朱嵐は淡々とした口調で返した。
こうやって一対一で話してみると、朱嵐が人間らしくないことがよく解る。
返答は機械のようだし、仕種や口調も決められた枠内で動いてるようにしか見えない。

それは彼女が人外のものだからか――それとも、彼女が意識的にそうしてるからか。
流星は考えるのを止め、朱嵐に尋ねる。
「どうしたんだ？」
「悠様を起こしに来たのです」
朱嵐は事務所の奥にあるドアに目をやった。
「悠様は昔から眠りが浅いので早くに起きられるのですが、今日は私が起こした方がよろしいかと」
朱嵐は奥のドアの前まで進み出た。
流星はその様子を眺めていたが、ポケットの携帯が振動しだしたので慌てて廊下に出る。
「はい、もしも」

『ちょっと流星！！』

いきなりのキンキン声に、流星の脳が揺れた。
ふらぁっと意識が消えかけるも、なんとかこらえて叫び返す。
「いきなり何だよ、若菜！　耳痛ぇじゃねぇかっ」
『んなことどーだっていい！』
ばっさり斬られた。
『あんた、何で昨日休んだの？　テストあるの忘れたわけっ？』
「だあぁぁ！　うるせぇっ。こっちにも事情あんだよ。携帯に叫ぶな！　切るぞっ」
あんただって叫んでるじゃないっ、という声は無視して通話を切る。
ついでに電源も切っておいた。後で怖いことになりそうだが、まぁいい。
「はぁ……今日はいったん帰るか」
学校へ行くかどうかは、帰り道に決めよう。
流星は頭をがりがりかいて、携帯をポケットになおした。

政府からの客人、と聞いて、刀弥は眉をひそめた。
「何だってんだ？　こんな平日の朝から」
「急をようする依頼だそうで」
刀弥のサポート役である草薙（クサナギ）哲彦（テツヒコ）が畳の上で膝をついて頭を下げた。
今年二十五となる哲彦は、刀弥より三つ上である。
にもかかわらず、主である刀弥にためらいなく頭を下げ、命令にも逆らわない。
部下として刀弥の行動をいさめることもあるが、あくまでそれは進言だった。
哲彦は武骨な顔に頭にいかつい表情を浮かべた。
「どうします？　これ以上待たせるのは、向こう側に不快を与えますが……」
「だな。それに、政府の依頼を無下に断るわけにもいかねぇし」
やれやれと首を振り、立ち上がる。着物を整え、刀弥は客間に足を向けた。

客間の座布団に正座する神経質そうな男に、刀弥は愛想笑いを向けた。
「待たせて申しわけありません。一体今日は何用でしょう？」
机をはさむようにして向かいに座ると、男は細い目を刀弥に向けた。
「時間が無いので手短に話しましょう。実は……」
男は要点のみを話し始めた。
現在、政府はある山を開拓しているらしい。
奈良にある小さな山だそうで、工事は順調に進んでいた。

が、三日前、四人が行方不明になった。今朝見付かったのだが、見るも無惨な死体で、だったそうだ。
あきらかに人の所業ではなく、政府は慌てて椿家を頼ったのである。
そこまで聞き、刀弥は片眉を上げた。
「少々引っかかるのですが。奈良、もしくは近畿地方の退魔師に頼めばいいでしょう」
刀弥の言葉に、男は顔を苦くした。
「実は、あの山の開拓に現地の退魔師達は反対していたのです。死者が出ると、忠告を聞かなかったからだと」
「つまり、誰も協力してくれなかったと？」
「はい」
男は顔をしかめた。忌々しげに思ってるのだろう。
刀弥は腕を組んで考え込んだ。
（退魔師達が反対した……奈良……奈良……？）
刀弥はハッと顔を上げる。
（まさか……あの山か！）
今度は刀弥が顔をしかめる番だった。
（死者が出たということは、ほこらを壊したのか。政府の馬鹿共めっ……）
胸中の悪態を抑え込み、刀弥は顎を引いた。
「いいでしょう。了承しました」
「ありがたい。これでは開拓が進みませんからな」
男は表情を一変させ、立ち上がった。
歩き出したところで、思い出したように足を止める。
「ところで、あれの管理は万全ですかな」
「あれ……？」
「あれですよ、あれ。人柱のことですよ」
男は目を細めた。
「あれは国家の危機を防ぐものだ。壊れないよう、丁重に扱っても

らわねば困りますね」
「……何が言いたいんです？」
刀弥はわき出そうな激情を抑えながら問うた。
男は唇の端を持ち上げる。
「解っておられるでしょう、代理殿。物は大切に扱わねば傷が付きます。そうなっては困るのですよ」
では、と頭を下げて背を向ける男の首を、刀弥は締めてしまいたい衝動に駆られた。
だがここでそれをしてしまえば、自分はこの家を守れなくなる。
なので、皮肉を言うだけにとどめることにした。
「さすが人の上に立つ方々の言葉は重みがありますな。国民に注目されるのも、当然というわけですか」
男の足が止まる。
しかし何も言わず、そのまま出ていった。

男の足音が遠ざかった後、刀弥は内心でしまった、と思った。
「あぁぁ……俺のアホ。また余計なこと言っちまった……」
ここは笑って受け流すとこだろっ、皮肉で痛いとこ突いてどーする！？
内閣の支持率低迷のことを思い出し、ついつい口を突いて出てしまった。
両手で顔を覆って後悔するも、当然遅い。
「ハァ……俺もまだ青いなぁ」
改めて、代理が務まるか不安になってきた。
だが、弟の――恭弥のことを出されると、どうしようもなくなってしまう。
「……恭弥のことを物扱いしやがって」
刀弥は顔を歪め、今度こそ悪態をついた。
恭弥は、自分にとって弟であると同時に、忘れ形見でもある。

大切な、あの人の……

「……お袋」

刀弥は呟くと、膝に顔をうずめた。

自分の顔を、誰にも見られないように。

――――

「えっ……流星帰っちゃったの？」

悠は遅い朝食を食べる手を止めた。

ショックで停止しかけたが、すぐ我に返って食事を再開する。

「ええ。今日はいったん家に帰えられると」

「ふぅん……」

悠は朱葦の言葉に顔をしかめて白米をパクついた。

と、そこで机の上の携帯が鳴る。

「ん？　朝から誰……って、刀兄？」

携帯の画面に表示された名前に、悠は目を丸くした。

「一体何だろ……もしもし？」

『おはよう。朝から悪いな』

電話から流れる刀弥の声は平静そのものだった。だが悠は微妙な違和感を感じ、口を開く。

「何かあったの？」

声を低めて尋ねると、少しの間が空いた。その後、疲れたような声が流れてくる。

『今回は椿家当主代理として電話している。心して聞いてくれ』

その言葉に、悠は眉をひそめた。

「それって、依頼ってこと？」

『……あぁ』

刀弥の肯定の声に、悠は唇で弧を描く。

「それって、刀を振れる？」
『ん？　あぁ。妖魔狩りだからな』
「そう」
悠は空いた左手の人差し指で、己の唇をなぞった。
このところ、不安やら何やらでむしゃくしゃしていたのである。
「いいよ。それで……依頼内容は？」
悠は携帯を持ち直した。
そこにいるのは兄と通話する少女ではなく……一人の、確かな実力を持つ退魔師だった。

突拍子無いことは慣れている。
悠といたら、常に驚きの連続だからだ。
でも、これは度を越してるように思う。
何で……何で……

いきなり奈良に行くんだ!?

流星は状況を把握するために視線を動かした。
幾つもの固定席。向かい合って座り、談笑する人々。天井の荷物置き場には、アタッシュケースやリュックサックが収まっている。
窓の外の風景はほんの一、二秒で移り変わる。かなりのスピードにも関わらず、揺れはあまり無い。
(当たり前か。新幹線なんだし)
自己完結し、今度はメンバー確認。
隣には悠が座っている。窓際の席で、何やらご機嫌だ。
向かいの席には、朱巣と刀弥だ。刀弥が通路側、朱巣が窓側である。
流星は次に、一時間前のことを思い出した。

マンションから出た流星は、なぜか待ち構えていた悠に捕まった。
そして刀弥の部下が運転する車に乗せられ、奈良に行くと一言言われてそのまま東京駅に行った。
で、結局問答無用で奈良行きの新幹線に乗せられたのである。

――以上。

（って、説明一つも無ぇぇぇぇぇぇぇ！！）

流星は内心で絶叫した。

全く解らない。奈良に行く理由も、刀弥がいる理由も。

「なぁ、おい」

「何？　観光は明日にしてね」

「違ぇよ！」

流星は声を低めつつも悠にツッコんだ。

「じゃなくて！　いい加減、奈良に行く理由教えろよっ」

「何だ、知らないのか？」

刀弥が文庫本の小説から顔を上げた。

「おまえ説明してなかったのか？」

刀弥の問いかけに、悠は悪戯っぽく笑った。

「だってその方が面白いでしょ」

何だそりゃ！？

流星の顎が落ちた。

（つまりあれか、遊ばれてたのか俺！？）

今更気付く流星である。

「ったく。……まぁいい。俺が説明する」

刀弥はあきれの表情を消して、真面目な顔付きになった。

流星も釣られて身を引き締める。何となく学ランの襟も直した。

「察してるとは思うが、奈良に向かうのは、妖魔を狩るためだ」

刀弥は本にしおりをはさみ、静かに閉じた。

「日本政府からの依頼でな。それでおまえらだけでなく、当主代行の俺も同行している」

「日本政府から？　その依頼って何ですか？」

流星が首を傾げると、刀弥はふっと息をついた。

「政府が開拓を進めてる山に現れた土蜘蛛って妖魔を狩れとさ。退魔師達の反対を押し切って進めたもんだから、奈良に協力者がいねぇんだ」
刀弥は頭の後ろに左手を置き、そこに頭を乗せた。
「俺達の祖先が関わっているからってのも、理由の一つだがな」
「祖先？」
流星は首を傾げた。
「土蜘蛛は、私達の祖先に封印されていたんだよ」
悠の言葉に、流星は顔をそちらに向けた。
悠は窓から視線をそらさずに続ける。
「椿家に書記が残ってたよ。椿家開祖、椿月凪が土蜘蛛を封印したってね。もっとも、その書記を残したのは月凪の兄だけど」
「兄がいたのか？」
流星が訊くと、悠はなぜかにやりとした。
「そ。いたの。双子の兄で」
笑みが深まる。

「安倍晴明って名前」

流星は頬杖をつこうとして失敗した。
つるっと肘がずれて支えを失う。そのまま前倒しになり、膝と額をぶつけた。
「っ～～～！！」
「器用だね。普通ならないよ、そんな風に」
悠はによによしながら流星の頭を撫でた。
「っは、安倍晴明って妹いたの！？　しかも悠達の先祖って……」
「世間じゃ知られていないけどな」
刀弥は肩をすくめた。唇がけいれんしているのは気のせいか？
「退魔師の間じゃ有名な話さ。一般人は知らねーけどな」
「何でですか？　安倍晴明ってめちゃくちゃ有名じゃないですか」

流星が言うと、刀弥は苦笑した。
困ったような、寂しいような、そんな笑い方だった。
「俺達退魔師は影の存在だ。決して表に出てはいけない」
「は、ぁ……」
「安倍晴明は例外中の例外。天皇に気に入られてたし、長命だったしな」
だが、と刀弥は少しだけ顔をうつむかせた。
「月凪は違った。自分みたいな存在が表に出てはいけないことは解っていたし、なにより人嫌いだった。名字も、晴明の妹と知られたくなくて変えたそうだし」
つまり目立つのも特別扱いも嫌いだったということだろうか。
流星は首を傾げた。よく意味が解らない。
「……ま、いずれ解るさ。それより」
刀弥は急に話を変えた。
「今回の妖魔のことなんだが。気を付けた方がいいぞ。かなりの実力らしいからな」
四人の間にピン、と張りつめた空気が漂った。
「……ま、無茶はするなよ。特に流星」
刀弥がこちらを向いたことで、流星は目を丸くした。
「お、俺？」
「戦い慣れてないからな。無理だと思ったらすぐひけ。いいな」
「は、い……」
流星は戸惑いながらも頷き、腰のホルダーに収まった小刀を握り締めた。

――――

奈良県にある都市。古い建物が並ぶ街に、その山はぴったり収まっていた。
「ここが例の山だね」

悠が木々に覆われた山を見上げた。高い位置にある太陽をバッグにした山は、暖かい空気から切り取られたように寒々しい雰囲気を放っている。
「初めて見るけど……なるほど、妖気をまとってる。強いね、この山の主」
呟く悠の隣で、流星はきょろきょろと視線を動かしていた。
「どうしたの？」
悠に尋ねられ、流星は視線を彼女に向ける。
「いや……鹿いねーなと」
流星の返答に、悠はあきれ顔になった。
「奈良全域に鹿がいるわけないじゃない」
もっともな言葉に、流星は頭をかいた。
「まぁ、初めて来たならしょうがないって」
刀弥は笑いながら左肩を揺らした。
「さて、行こうか。そう時間喰ってられねーしな」
一行が山のふもとへ向かおうとした時――

「待ちなさい！」

いきなり呼び止められた。
何だと思って振り向くと、老人と中年の男が一人ずつ、こちらに厳しい顔を向けていた。
「あんたら、あの山に行くつもりか？」
「そうですが……何か？」
刀弥が答えると、男二人はますます表情を苦くした。
顔を見合わせ、中年の方が前に進み出る。
「悪いことは言わへん。山には近付かん方がいい」
「そうはいかないんだよ」
悠は腰に拳をそえて前に出た。
「私達はあの山の主に用がある。国の依頼でね」

その言葉を聞いたとたん、男二人は目を見開いた。
「じゃ……あんたら同業者か！」
「ええ。椿家の者です」
刀弥が言うと、二人はますます目を丸くした。
「あ、あの椿家がっ」
「何でまた、東京から奈良に……」
慌てる二人に対して、悠はふん、と鼻を鳴らした。
「貴方達がおじけづいて妖魔を狩らないからじゃない」
「っ……我々はっ」
「おじけづいたんでしょ」
悠は冷めた目で二人を見つめた。
「開拓を反対したのは、妖魔の復活を恐れたから。依頼を断ったのは、妖魔と戦うのを恐れたから。違う？」
「……」
二人は何も言わない。悠のことを直接見れないのか、顔をあらぬ方向に向けている。
「どうして私の目を見ないの？　違うというならこっちを向きなよ」
悠の問いかけにも、二人は微動だにしなかった。
「……答えないならそれでもいいよ」
悠はくるっと二人に背を向けた。
「貴方達は結果を待ってればいい。震えながらね」
すたすたと歩き出す悠を慌てて流星達は追いかける。
気になって流星が振り向くと、二人の男はまだ立ち尽くしていた……

山の中は木の枝や葉、高い草で視界がせばまっていた。
「こんなとこで戦いになったら、まともに戦えねーな」
刀弥は草をかきわけながらぼやいた。
「動きを感付かれないように開拓されてない方に来たけど……失敗

だったかもね」
悠は顔をしかめた。
「朱雀、何か感じる？」
悠に尋ねられ、朱雀はすっと目を閉じた。
「……頂上付近に、大きな力を感じます……周りに、小さな力も幾つか」
「小蜘蛛か」
刀弥は唇をぺろ、となめた。
「その辺りも狩らなきゃだな」
「そいつ、メス蜘蛛なんですか？」
流星は刀弥の背に問いかけた。
「いや。ただ、普通の蜘蛛に力を与える能力を持ってるらしい」
バキバキと小枝を折りながら進む刀弥。その後に悠、流星、朱雀が続く。
十数分ほど歩いただろうか。突然朱雀が周りを見渡した。
「どうした？」
流星は振り返り、朱雀の顔を見た。
朱雀は厳しい顔で木々の間を睨んでいたが、いきなり声を張り上げた。
「皆様方、敵です！」
まるでそれに応えるかのように、上空から黒い物体が飛来してきた。
蜘蛛だ。大人ほどもある巨大な蜘蛛が、何匹も落ちてくる。
「小蜘蛛襲来、てところだね」
「あれ小蜘蛛！？」
悠の言いように流星は思わず蜘蛛達を指差した。
キシャアアアアアアアアアアッ
蜘蛛達が雄叫びを上げた。

ビリビリと空気が震える。こちらがひるんでる内に、蜘蛛達は飛びかかってきた。
「絶対小蜘蛛じゃねえぇぇぇぇぇ！」
流星は絶叫しながら小刀を抜いた。
あらわになった刀身に炎が灯り、こうこうと輝く。
「はぁっ」
流星は気合いの声を上げて小刀を振った。
炎のかまいたちが近くにいた蜘蛛の口にぶち当たる。ギィィッ、などと悲鳴を上げ、蜘蛛はもがきながら炎に焼かれていった。
「やるじゃねぇか」
流星は感心したような声を上げた刀弥の方を見た。
右腕に鎧のような手袋をはめており、手の平は三倍ほどでかくなっている。指先は鷲のように鋭かった。
「それは？」
「あぁ。俺の退魔武器――だ！」
刀弥は右腕を振った。
襲いかかろうとしていた蜘蛛を鉤爪のような指で斬り裂き、次いで地面に叩き付ける。
「『如意ノ手』っつってな。俺の意思に応じて姿を変えるんだ」
刀弥はにっと笑い、すぐさま表情を引き締めた。
流星も周りの敵に目を向ける。まだ四匹いた。
「流星と刀兄は下がって」
刀を抜いた悠は、パッと構えた。
「試してみたい技があるの」
じりじり迫ってくる蜘蛛を前に、悠は平静そのものの声で呟いた。
「『剣姫』、部分解除」
刃を垂直に突き出し、すぅっと息を吸う。
「二の手――」
葉が一枚落ちてくる。
「百華裂刃（ヒャッカレッジン）！」

悠は刀を薙いだ。

ズバババババババババババババッ

一瞬何があったのか解らなかった。

斬撃音がしたと思ったら、蜘蛛の動きも風も、落ちる葉さえ停止する。

だが半瞬にして、風景は変わった。

蜘蛛の身体は原形を留めないほどバラバラになり、黒い体液をまき散らす。周りの木々が音を立てて倒れ、草はバッサリ斬られていた。　まるで、悠の前方にだけかまいたちが大量発生して通り過ぎたような光景だ。

流星達が呆然としている間に、悠は鞘に刀を収めた。

「さて。通りやすくなったし、進もうか」

誰も、異論は唱えなかった。

山の中腹辺りまで来た。

日は傾き始め、多分時間は二時か三時かぐらいになってるだろう。

「よし、いったん休憩しよう」

刀弥に言われたとたん、流星の腹が鳴った。

新幹線で昼食を取ったはずなのだが、思ったより体力を使ってしまったらしい。

「流星様、おにぎりです」

「あ、サンキュー」

朱華から差し出された握り飯を受け取り、流星はパクついた。

「腹が減っては戦はできぬっつーが、腹八分目にしとけよ」

同じく握り飯を食べていた刀弥は言った。

「満腹だといざって時に動けないからな」

「それにしても、敵の動きが全く無いね」

刀を抱えた悠は、ぽつんと呟いた。
「こっちの動きは、もうとっくに気付いているはずなのに」
何か気になるのか、悠は厳しい表情で木々の間を睨んでいる。
流星は残りの握り飯を口に放り込み、悠にならって周りを見渡してみた。
別に何てことはない。特に変わった様子の無い森だ。
視界も広いし、ここは開けた場所だから戦いやすい。何を警戒する必要があるのだろう。
流星はそう思っていたが、現実はそう甘くはなかった。

バシュシュウゥゥッ

突然白い糸の束が視界を覆った。
あっと思う間も無く絡み付かれる――かと思いきや、悠が刀で糸を絶ち斬ったため、それはまぬがれた。
「いっ……！？」
「やっぱり待ち伏せされてたか」
目を白黒させる流星に対し、悠、刀弥、朱華の三人は臨戦態勢に入っていた。
草むらからさっと同じような大きさの蜘蛛達が出てくる。口からは白い糸が垂れていた。
「妙だと思ったんだよ。なぜかこの辺りだけ開けた場所になってるのが。こっちを油断させようとしたんだね」
悠は刀を軽く振った。
「悪いけどそんな手には引っかからないよ。私達は間抜けじゃないからね」
……つまり俺は間抜けだと言いたいのか。
流星は肩をがっくり落とした。反論できないのが哀しい。
蜘蛛達はいっせいに糸を吐いた。まるで波のように悠達に襲いかかる。

「させるかよっ」
素早く刀弥が前に出た。
『如意ノ手』をはめた手が、黒い巨大な刃のようなものに変化する。
「はぁっ」
刃は蜘蛛の糸を一緒くたに横凪ぎにした。
刃はすぐさま手の形に戻るも、ぐんっと五指が伸び、五匹の蜘蛛を貫く。
残り数匹、というころで、思いもよらないことが起きた。
後方から蜘蛛の糸が伸び、悠の身体に巻き付いたのだ。
「え！？」
いきなり動きを封じられた悠は目を丸くする。
糸は悠の上半身と二の腕を巻き取ると、ぐいっと引っ張った。
「え、きゃっ」
悠の足が地面から離れる。
「悠！」
流星は手を伸ばすが、届かなかった。
悠は糸と共に草むらへ消えてしまう。
流星はすぐさまそこへ飛び込むも、そこには悠はいなかった。
「……え？」
糸を吐いていたはずの蜘蛛も、いない。
何も、いなかった。

――――

頭の鈍い痛みに、悠は目を覚ました。
「っつ、ここ……どこ？」
頭を押さえながら起き上がると、石の壁が目に入った。
床も天井も、全て石でできている。というか、ここは部屋というより洞窟のようだ。
うっすらとした光が辺りを照らしているので、完全に閉ざされた

空間ではないらしい。
悠は立ち上がって身体に異常が無いか確かめた。
怪我は無いし、頭の鈍痛も収まってきている。動くことに支障は無いだろう。
見渡せば、少し離れた場所に『剣姫』が抜き身の状態で落ちていた。それを拾い上げ、気配を探る。
あった。一つだけ、背後に強大な力を放つ気配が。
悠は振り返り、刀を構えた。
しかし気配の主は動こうとしない。光が届かない洞窟の奥で、じっとしている。
悠は不審に思い、一歩進み出ようとした。

『嬉しや、再びあいまみえる日が来た』

重厚でおどろしい声に、悠は思わず足を止めた。
『今度こそ……貴様を手に入れようぞ』
高い天井と広い空間。そこに押し込められたような巨大な妖魔が、暗闇から姿を現した。
黒く巨大な全身、そこに付いた細い複数の脚、ぬらぬらした鋏、赤く光る八個の目玉。
外の奴らとは比べ物にならない。三、四倍はありそうな、巨躯を誇る大蜘蛛だ。
「土蜘蛛……！」
『今度こそ……今度こそこの手に。月凪！』
土蜘蛛の身体から殺気が放たれた。

いなくなった。いなくなった！？

流星は呆然と立ち尽くした。
視界には悠の姿も、影すら映らない。
どこに行ったというのだ。
「流星様」
「流星！　……悠はどうした？」
駆けつけてきた朱嵐と刀弥に、流星は救いを求めるように目を向けた。
「悠が……悠がいない！」
「……！　解った、とにかく落ち着け」
刀弥は流星の肩に左手を乗せ、朱嵐の方を見た。
「朱嵐。おまえなら悠の居場所解るだろう」
「おまかせください」
朱嵐は一礼し、獣耳と九本の尾を出した。
尾を扇のように広げ、薄赤の瞳を閉じる。
数秒の時が流れ、朱嵐はパッと右手側の林を見た。
「この奥の洞窟です。連れ去ったのは、土蜘蛛のようですね」
それを聞いたとたん、流星は走り出していた。
刀弥の制止も聞かず、草木をかきわけていく。
頭の中が熱い。悠を連れ去った妖魔を、今すぐ斬り裂いてやりたかった。
（……何だ？）
全身がほでる。内側に、何か異質なものがうごめいているような、

そんな感覚があった。
激情が吹き出ていくごとに強まっていく……

「落ち着け！」

いきなり脳天に衝撃を受けた。
バットで殴られたのより酷い激痛に流星は倒れ、ついでに意識も失いかける。
完全に気絶しなかったのは、二つの足音が近付いてきたからだ。
「ったく。素人が暴走すんじゃねぇ！　死にてぇのか？」
顔を上げると、刀弥が顔を歪ませて仁王立ちしていた。
彼の右腕を見るに、どうやら『如意ノ手』で殴られたらしい。
さすが悠と恭弥の兄。とてつもない迫力だ。はっきり言って怖い。
「何が起こるか解らないんだ。一人で行動するのはひかえろ！」
刀弥の叱責に、流星は頭が急速に冷えていくのを感じた。
全く刀弥の言う通りだ。
一人で山を走り回ったって悠は見つかるわけないし、感情に流されていてはまともに戦えるわけがない。
「ごめん、なさい」
「……解ったならいい」
刀弥は左手を差し出した。
流星はその手を取り、立ち上がる。
「なぁ、一つ訊きたいんだが。おまえ、いつから霊が見える？」
服の泥を払っていた流星に、刀弥は尋ねてきた。
「いつからって……物心ついた時からですけど」
唐突な質問に、流星は目を瞬いた。
「変なことができるようになったとか、そういうことは？」
「別に……。あ、でも」
流星は一つ思い出したことがあった。
「何か……最近力が強くなってる気がするんですよ。空手やってる

から、元々腕力は強い方なんですけど」
「……そうか。いや、急に質問して悪かった。いこうか」
刀弥はすたすたと歩き出す。流星は首を傾げつつもその後を追った。

（封印は解けかかってる）
刀弥は顔を苦くした。
すでに表面化してるようなので、完全に抑え込むのは無理だろう。
別に普段の生活に支障は無い。だがもし、先程のように激昂したら。
（悠、おまえはこいつをどうする気だ？）
刀弥の眉間に、深いシワが寄った。
（このままだとおまえは……こいつを狩らなきゃならなくなるぞ）

――――

鋏が目の前に迫る。悠は刀を持ったままバク転してそれを避けた。
『どうした月凪！　逃げてばかりではないか』
「だからっ」
悠は刀を構え、声を張り上げた。
「私は月凪じゃないって言ってるでしょ！」
ぶんと刀を降り下ろし、地面を叩く。
「風刃斬！」
衝撃波が石のかけらを飛ばし、土蜘蛛に襲いかかる。
『笑止！』
土蜘蛛は前の片足を払い、衝撃波をかき消した。
『この程度でわしを滅するなど……！？』
土蜘蛛の言葉が途切れた。悠の姿を見失ったのだ。
「上だよ」

悠の声に、土蜘蛛は八つ目を上に向けた。
悠はすでに高々と跳んでおり、天井を蹴ったところだった。
「はぁっ」
勢いをつけて落下、刀を薙ぐ。

『ぐおぉぉぉぉっ！？』

土蜘蛛の目を四つ斬り裂いた。赤い目から、黒い血が流れる。
土蜘蛛の頭部を蹴って着地した悠は、思わず舌打ちした。
頭を一刀両断するつもりが、避けられてしまった。
しかも手負いの妖魔は厄介だ。かえってまずったかもしれない。
しかし土蜘蛛は怒り狂うこともなく、じっとこちらの様子をうかがっているようだった。
『……さすが月凪。あいかわらず見事な腕だ』
「いや、だから月凪じゃないって」
悠の否定にも、土蜘蛛は首を横に振る。
『いいや。おまえは月凪だ。刀も声も気迫も全て、な』
悠は一瞬むっとしたが、ふとひっかかりを抱いた。
「おまえ……もしかして目、見えてないの？」
『……なぜそう思う？』
土蜘蛛はすっと顔を上げた。
「おまえのセリフには、容貌を表す言葉が無かった。声は聞くもの、気迫は感じるもの。この刀には独特の気配があるから、そっちはそれで解ったんでしょ」
『……』
「でも、目で見えるものは表現しなかった。となると、選択肢は二つ」
悠はぴっと二本の指を上に向けた。
「私の顔を見てないか、目が見えないのかのどちらか。今向かい合ってるんだから前者は無い。となると、後者だよね」

中指を折り、人差し指を土蜘蛛に向ける。
「違う？」
『……全く鋭い。僅かな言葉で、そこまで看破するとは』
土蜘蛛はやれやれとばかりに首を振った。容姿のせいで、仕種との違和感が尋常じゃない。
『その通りだ。わしの目は、もう輪郭しか見えておらん』
「ふ……ん。なるほど」
悠は刀を持ったまま腕を組んだ。
「……土蜘蛛。私の話、聞いてくれるかな」
悠が尋ねると、土蜘蛛は首を傾げた。
悠は土蜘蛛の赤い目を覗き込む。
「勿論聞きたくなければ聞かなくてもいい。聞くか否か、全ては、おまえ次第だよ」
土蜘蛛は答えない。ただじっと、悠を見下ろす。

――――

日が落ちた。闇色の空には、鮮麗な輝きを放つ満月が浮かんでいる。
「先程移動しました。おそらく頂上にいるはずです」
先頭を行く朱華は息も切らさず走り続けた。
すでに呼吸が絶え絶えの流星は、返事すらできずに足だけを動かす。
「あと少しだな……！」
隣で走っていた刀弥の足が止まった。
「ゼェ、とう、やさん……？　どうし……？」
「悪ぃ。先行っててくれ！」
刀弥は全然別の方向へ走り出す。その顔には、驚愕が浮かんでいた。
「ど、したんだろ」

「……解りません。とにかく我々は急ぎましょう」
つられて止まってしまった流星と朱華は再び走り出した。
飛び出した枝や草で服が破れたり、ひっかき傷を作ったりするが、いちいち気にしていられない。
(悠、頼むから無事でいてくれっ)
どうしようもない不安が、胸中をじわじわ侵食してくる。
悠が負けるとは思っていない。だがもし、もしものことがあったら?
それを想像した時、流星の全身にざぁっと恐怖が広がった。
今にも止まりそうな足を無理矢理動かし、走り続ける。
「あそこです」
朱華は前方を指差した。木々の間の奥に開けた場所が見える。
流星と朱華はその間に飛び込んだ。

視界が広がった。

木も高い草も無い、平原のような場所だ。
一瞬呆然とした流星だが、見覚えある人影を見付け、思わず声を上げる。
「悠!」
人影は、黒髪を揺らして振り返った。
「流星……」
こちらを向いた少女の姿を見て、流星は絶句した。
服がボロボロだ。白い半袖のシャツはところどころ切り裂かれ、ノースリーブの黒い上着は土や泥で汚れている。黒ミニスカートはすそがばっさり切られていた。
露出した腕は切り傷やすり傷だらけで、刀を持つ手も力無くだらんと下げられている。
黒いニーソックスも裂けており、血がにじんでいた。
悠の顔には疲れと虚無感が浮かんでいる。流星が近付くとぐらり

とよろめいた。
「だ、大丈夫か！？」
流星は慌てて悠を抱き止める。
「大丈夫……それより」
悠は流星に支えてもらいながら、顔をある方向へ向けた。
目線を追った流星はあっ、と声を上げる。
少し離れた場所に、老人が倒れていた。
薄茶色の狩衣の上に部分鎧を付けているが、それは無惨に砕け、衣も悠同様ボロボロだ。
老人は灰色の目を空に向けて咳き込んだ。腹の傷から血がにじむ。
「さ、さすが月凪の……子孫。強い、な」
満足げに笑う老人に、悠は首を横に振った。
「違う。貴方が弱くなったんだよ。生きる支えを、失ったから」
悠の言葉に老人は一瞬目を見開き、次いでふっと笑った。
「全くだ。わしは己が異類のものであるにも関わらず、一人の女を求めた。その者がこの世にいないと知ったとたん、このざまよ」
老人の目に、月が映った。
「のう……今日の月は綺麗か？」
悠は老人にならうように月を見上げた。
傷だらけだというのに月光を浴びた姿があまりにも美しくて、流星は息を飲む。
「綺麗だよ。とても綺麗な……満月だ」
静かな悠の声につられ、流星も月を見た。
黒夜に浮かぶ月は寒々しくも気高く、届かぬほど高い空で銀色に輝いている。
降り注ぐ光はあくまで静かで、全てを静寂に包む光だった。
「そうか……満月か。めしいた目では、それも解らぬわ……」
老人は夜空に向かって手を伸ばした。
「遠い、遠い」
がふっ、と血塊を吐きながら、老人は呟く。

「結局わしは……月を、得ら、れ……なかっ」
ぱたり、と老人の腕が落ちた。
ぴくりとも動かなくなった老人の身体がどんどん縮んでいく。
まばたきをしてる間に、老人の横たわっていた場所には一匹の小さな蜘蛛がいた。
傷だらけの小蜘蛛は次第に風化し、土と同化してしまう。その場に残ったのは、悠と流星、朱華の三人だけだった。
「……何だったんだ？」
「大したことじゃないよ」
思わず呟いた流星に、悠は月を見上げたまま囁くように言った。
「蜘蛛の糸は月に届かなかった。ただ、それだけだよ」
月は輝く。
気高く美しく、遠く届かぬ空で、常に。

――――

刀弥は走っていた。
目ではなく気配で、目的の人物を追跡する。
「待てよ！」
刀弥は声を張り上げた。
「待てっつってんだろ、姉貴ぃ！」
『如意ノ手』が追いかける人物まで伸び、足元の地面をえぐる。
立ち止まった人物を、刀弥は奥歯を噛み締めて睨み付けた。
「なぜ逃げる。なぜ俺を避ける！」
刀弥が必死に呼びかけるが、相手の返答は冷たかった。
「今は敵と戦う気は無いわ」
「……！　そうかよ……だったらっ」
『如意ノ手』を戻し、爪を鋭くした刀弥は叫んだ。
「引っ張ってでも連れ帰ってやる！」
だんっ、と地面を蹴り、その人物に腕を振り下ろす。

「訂正を入れとくわ」
さっと繊手が伸びる。
「私の名は月読よ」
繊手と『如意ノ手』がぶつかり合った。

バチバチィッ

スパーク音が響く。暗い周辺がパッと明るくなった。
刀弥の攻撃は、受け止められていた。
人物――月読の手が、がっちり『如意ノ手』を受け止めているのだ。
彼女の腕は微かに発光しており、何らかの術によるものだろう。
月読は右手で持った弓を持ち上げた。
「……『鳴弦姫』、部分解除」
月読はぼそりと呟き、『如意ノ手』を掴んだ手をぶんっと振った。
「ぐあっ！？」
いきなり投げられた刀弥は受け身も取れずに地面に叩き付けられる。
動けなくなった刀弥に、月読は光の矢を向けた。
「断罪の矢……」
ボオゥッ、と矢が大きくなる。
「帝釈天（タイシャクテン）の光！」
巨大な光の矢が発射された。
矢は周囲の木や草を焼き焦がし、刀弥に迫る。
「うぐっ……」
刀弥は『如意ノ手』を突き出した。
「鎧壁障護（ガイヘキショウゴ）！」
『如意ノ手』がごおっと巨大化した。
巨大化した『如意ノ手』と輝く矢がぶつかり合う。

バヂバヂバヂバヂバチバヂバヂィッ

再びスパーク音が響き渡った。しかし、先程の比ではない。
電気がこの場で大爆発を起こしたような、そんな音なのだ。
「ぐ、うぅっ」
刀弥の身体が後方に押された。靴底が滑り、踵の後ろで土が盛り上がる。
「う……うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
刀弥が叫ぶと同時に。

バァァァァァァァァァァァァァァァン！！

光の矢がはじけ飛んだ。
力の競り合いに敗れ、耐えられなくなったのだろう。
息が絶え絶えになりながら、刀弥は『如意ノ手』をを下ろして顔を上げた。

いなかった。誰も。影すら無い。

刀弥は呆然とした。
先程までいたはずの月読の姿が見当たらない。見渡してみても、気配すら感じられなかった。
一体いついなくなったのだろうか。あの矢を放った瞬間か？　それとも……
それ、とも。
「……アハハ。何、だよ、それ……」
刀弥は目を押さえて膝を着いた。
「何だよ、それ」
刀弥の頭の中で、一つの言葉が浮かんでいた。

彼女はもともと、存在しなかったと。

そんなわけないことぐらい、解っている。
彼女は確かに存在していた。姿も声も、はっきり思い出せる。
ただ、それを自分が幻だと思い込もうとしただけだ。
彼女の姿は、失ったと思っていた者と、あまりにも似ていたから。
いや、あれは同じ。失った存在そのものだった。
それに自分の手は、届かなかった。
「……くっそおおおおおおおおおお！！」
刀弥は左手の拳で思いっきり地面を叩いた。
「……何で、何で」
手の甲に落ちた熱いしずくを見、空を仰ぐ。
「何で大切なモンばっか消えちまうんだ！　何で大切なモンばっか腕から滑り落ちちまうんだ！！」
叫んでも応える者はおらず、反響が消えた後は、静寂が戻っただけだった。
「……何で、心なんてあるんだ」
刀弥は己に問うように呟く。
そんなものが無ければ、これほど苦しまずにすんだのに。そう、思いながら。

――――

「哀れだな」
山を降りた月読はその声に振り返った。
「いたの、熾堕」
「いたも何も……元々この件は俺の担当だったからな」
手近の木の幹にもたれかかった銀髪の美丈夫は肩をすくめた。
「もっとも、仲間に引き入れることは不可能だったが。ただの蜘蛛に成り下がっていた」

「そのただの蜘蛛に本気でキレたのは誰だったかしら」
月読の言葉に、熾堕は「手厳しいな」と苦笑した。
「確かに、小物相手に熱くなってしまった……俺もまだ青い」
そう言ってからいや、と首を振る。
「心がある者は成熟などできない。いつまでも未完で、未熟で、矛盾している。だからこそ、心と呼べる」
どこか遠い目で独白する熾堕に、月読は「ところで」と切り出した。
「哀れって誰が？　土蜘蛛のことかしら」
問うと、熾堕は静か過ぎる瞳をこちらに向けて木から背中を離した。
「おまえ以外に誰がいる？」
「私が、哀れ？　何を言ってるの」
月読は声が震えださないよう動揺を抑え込んだ。
それを見透かしたように、熾堕の目が月読の瞳を覗き込む。
「哀れだ。嘘で嘘を飾ってるおまえが。何より哀れで、そして愚かだ」
熾堕の翼が広がった。闇夜だというのに、その黒翼は随分目立って見える。
「嘘をつくことは否定しない。だが、己にさえ虚構を見せるおまえの行為は、おまえの望んだものか」
「っ……！」
ぎり、と奥歯を噛み締める月読を残し、熾堕は飛び去ってしまった。
「……貴方に」
立ち尽くした月読は拳を握り締めた。
「何が解るっていうの？　私の、私の何が……！」
月読の声は、全て黒夜の空に飲み込まれた。

「解るさ」
高き空で、熾堕は呟いた。
「俺もまた……嘘で己を創り出す者だ」
己の手を見つめ、熾堕は誰に向けるわけでもなく囁く。
「偽りの名、偽りの忠誠、偽りの同志」
熾堕は己の両肩を抱いた。
「俺にとっての真実（ほんとう）は、この翼だけ」
黒翼がはばたく。月光を浴び、艶やかに輝きながら。
「罪の証、罰の証。……堕天の、証」
熾堕は両手を下ろした。
「まだ、だ。まだ星は瞬かない」
熾堕は月を見上げる。しかしその銀の瞳に映るのは、月ではない。
「俺はまだ、偽りの道を行く」

空に星は輝いていない。月のみが、哀し過ぎるほど白い光を降らし続ける。

第十三話　沈む村<上>

生きたいと思うことに、何ら罪は無い。
生きるからこそ生物であり、生きるからこそ、世界は成り立つのだ。
己の、そして他者の死を願う生物など存在しない。そう、いるはずがない。
人間を、除けば。

――――

土蜘蛛の件から一週間が過ぎた。
流星がテストが全くできなくて発狂しかけたという事件もあったが、それ以外はおおむね平和である。
しかし、平穏というのは唐突に無くなってしまうのが、世の常であろう。

「妖魔が大量発生!?」
流星は目を見開いた。
紅茶をのんびりと飲んでいた悠は「そう」と頷く。
「今度ダムに沈む予定の村があってね。その村にゾンビ達が出たんだよ」
長机の上にあるソーサーにカップを置き、悠は頬杖をついた。
「工事が進まないってね……また政府からだよ」

「刀弥さん経由？」
「そう。全く、余計なことに使うから借金が増えるんだよ」
悠はあきれたように呟き、座ったまま流星を見上げた。
「でも、狩る数が多くてね。日影達にも頼んだんだよ。もともとこういう仕事は、多人数でやるものだからね」
「ふぅん……。にしても、何でゾンビが大量発生なんか……」
流星が首筋をかきながら言うと、悠は肩をすくめた。
「知らない。でも、結果があるなら原因がある。その村には、何か後ろめたい闇があるんだよ」
意味深な言葉に流星は顔をしかめつつも尋ねる。
「いつ行くんだ？」
「色々都合があるからね。明後日だよ」
悠は再びカップを持ち上げた。
「それって俺も……」
「当然来てもらうよ。どうせ金曜でしょ」
いや、金曜でも学校あるんだけど。
流星は反射的にそう思った。
言っても同行するのは決定事項のようなので、口にはしないが。
「日影……さん達だけ？」
「うん。西野紗矢にも声かけたけど、まだ精神が不安定な時があるからって、雨彦さんに断られた」
悠はため息をついた。
「一応都内だけど、泊まりになるかもしれないからその用意もしといて」
「オッケー」
流星は面倒臭いと思いながら返事をした。
「そうだ。これあげる」
悠はホットパンツのポケットから数珠を取り出した。
朱色の小さな珠と、大きめの水晶の珠がつらなっている。
「何だよ？」

「お守り。退魔師はみんな持ってるんだよ」
悠は首のチョーカーの十字架を指でいじった。
「もしかしてそれもか？　いつも付けてるよな」
「そ。可愛いでしょ」
可愛いかどうかはともかく……キリスト教徒でもないのに、十字架がお守りなのはどうだろうか。
流星は返答に困り、頬をかいた。
「とりあえず……ありがとう」
流星は数珠を受け取り、右手首にはめた。
「いつも付けときなよ。少しとはいえ、妖魔から受ける影響を防いでくれるから」
悠の言葉に、流星は素直に頷く。
「じゃ、俺帰るな。用意もだけど、明日朝早いし」
「部活？」
「おう。じゃあな」
流星は片手を上げ、そのまま事務所を出ていった。

一人残った悠は、もう冷めてしまった紅茶を飲み干した。
「私が作ったお守りが……流星の精神（こころ）を守れるといいんだけど」
悠は組んだ両手に唇を押し当て、瞳を閉じた。

――――

「流星、話があるんだけど」

体育館の脇にある手洗い場で顔を洗っていた流星は振り返った。
「若菜か。どうした？」
水道の栓をひねり、水を止める。まだしずくが少し落ちていた。
「流星。あんたさ、最近おかしいわよ」

少し離れた場所でこちらを見つめる若菜に、タオルで顔をふいていた流星は眉をひそめた。
「おかしい……って何がだよ」
「学校無断で休んだり、とか。それにこの間の、椿　悠って娘」
この間というのは葬式でのことだろうか。流星は黙って次の言葉を待つ。
水が落ちる音がいやに大きく聞こえる気がするが、流星は特に気にしなかった。
「何か……あの娘もおかしいよ。関わっちゃ駄目。絶対だまされてるわよっ」
さすがにこれにはむっときた。
「若菜。言っとくが俺は悠にだまされちゃいねーし、おかしくもねぇ。だいたいおまえには関係無ぇだろ」
「あるに決まってんじゃん！」
若菜は甲高い声を上げた。

ぴちょん、ぴちょん。

水滴の落ちる音がうるさい。先程は気にしなかったのに、いやに耳についた。
「私は幼馴染みだよ！　それに昔からあんたの世話焼いてたしっ」
「何だよそれ……餓鬼じゃあるまいし」
今度はあきれてしまった。
確かに昔はうっとうしいぐらい口出しされたが、それに得したことも、感謝したことも無い。
勿論頼りにすることはあったが、それにしたって数えられる程度だ。
なので、若菜の言葉は流星には理解しがたかった。
「おまえは確かに幼馴染みだけどさ。でも、それが俺の行動に口出しできる理由じゃねぇだろ」

「っな……」
「俺は信じてるんだ、悠のこと。だからあいつのこと次悪く言ったら、許さねぇからな」
流星は忠告をしてその場を離れた。
若菜が焦燥をその顔に浮かべ、涙を流しているのも気付かずに。

――――

ここにいる全員が退魔師と思うと、何だか不思議な感じだった。
仮設の建物。工事現場によくある倉庫のような建物内に、悠達はいた。
窓の外には昼の太陽に照らされた土砂の小山が幾つも存在しており、遠くに小さく木々が見える。
「まず、班の確認」
室内の大きな四角い机に廃村の地図を広げた悠は、メンバーの顔を順に見ていった。
「私と流星は南側、日影と流亜は北、雷雲と風馬は東側ね」
「西側はどうするんだ？」
桐生流亜が尋ねた。
日影の双子の弟らしいのだが、彼女と似てるところが少ない。
黒い髪や瞳は同じなのだが、日に焼けた肌や筋肉の付いた腕など、全く似てなかった。
そんな彼の質問に、悠は地図の西側を指差した。
「西側には山がある。人間の足じゃ越えるのは難しい。ましてやゾンビの足じゃ、向こう側にたどりつくのは不可能だ」
「つまり、最終的には山のふもとに妖魔達を追いつめるというわけですね」
燐が地図を覗き込んだ。
「そう。念には念を入れて、結界頼むよ」
「はい」

燐は力強く頷いた。
「じゃ、何か質問ある？」
悠が全員の顔を見ると、パッと手が上がった。
「雷雲、何か言いたいことでも？」
「何でこの流星ってあんちゃんがいるの？　役立たずなのに」
パシィィンッ
雷雲の言葉が流星の心に突き刺さるより速く、風馬の平手打ちが少年の頭にヒットした。
「いってぇぇ！」
「おまえはどストレート過ぎるっ」
その叱責もどうなんだろう。
傷付いた流星はそう思った。
「まぁ確かに流星は役立たずだし弱いし駄目駄目だけど」
「悠まで！　つかそこまで言う！？」
「でも退魔師である以上、戦闘経験を積んでもらわないとね」
悠は胸の前で腕を組んだ。
「妖偽教団との戦いもあるんだ。実戦を積んでもらわないといけない」
悠は真剣な表情を浮かべた。
「戦いにおいて必要なのは、実力と経験。みんなも解ってるでしょ？」
全員黙り込んだ。悠に反論できる者がいないからだ。
「……解ってるならよし。じゃ、行こうか」
悠は立てかけてあった刀を手に取った。
廃村と言うからにはもっと崩れかかっているかと思ったが、そんなことはなかった。

確かに家屋は木でできた古いものが多いが、比較的新しい建物もある。
道もコンクリートで舗装されていて、特に過疎化が進んでる様子も無かった。
「本当にここ……ダムに沈んじまうのか？　何か……そんな風には見えねぇや」
「確かに……妙だね」
流星と悠は立ち止まり、辺りを見渡した。
「ダムに沈むにしては、やけに近代化が進んでる。沈める必要は無いはずだ」
悠は顔をしかめた。
「どうやら日本政府は、何か抹消したいことがあるらしいね」
「抹消したいもの？」
流星は首を傾げた。
「政府の常習の手さ。都合の悪いものを政策と称してもみ消す。歴史も随分書きかえられてるしね」
「じゃ、日本史とか正しくないってことか？」
流星は目を見開いた。
「そう。矛盾が生じてるとことかが改ざんの跡だね。正しく伝わってるのは、当時の文化や風潮ぐらいだよ」
悠は肩をすくめた。
「羽衣姫に関してもそう。当時の人口を多く失ったにも関わらず、ある理由で歴史から抹消したんだから」
「……随分裏事情知ってんなぁ。何か怖いんだけど」
流星が顔をひきつらせていると、悠はこちらに向き直った。
「退魔師の一族は政府の裏仕事を請け負ってるからね。嫌でも知るよ」
「そうなのか……でも、危なくねぇか？」
流星が尋ねると、悠は小首を傾げた。
「何で？」

「だってある意味、退魔師も存在してほしくない存在じゃねぇの？」
流星が言うと、悠はすぅっと微笑んだ。
「その点は大丈夫だよ。政府と退魔師は、一蓮托生だから」
「え？」
「退魔師は政府の裏を知っている。それに個々の力も強大だ。腰抜け共に、私達は裏切れない」
悠は何気無い動作で刀を抜いた。
「私達を裏切れば政府は大打撃を受けるしね。それに、理由はもう一つある」
「もう一つ……？」
「妖魔だよ」
悠は流星に向かって歩き出した。
「時代と共に、光が強くなるほどに、闇は濃くなる。妖魔の力もしかり」
悠の意図が解らず、流星は固まる。悠の言葉と足はまだ止まらない。
「私達がいなければ、妖魔は消せない。妖魔を狩る者がいなければ、妖魔でこの世はあふれ返ってしまう。だから」
悠は流星の横を通り過ぎ、刀を横に振った。
「政府は私達を頼りにこそすれ、裏切るなんてできないんだよ」
何かが落ちる音がした。
道路に目をやれば、なんと腐りかけた頭が転がっていた。
灰色に変色したそれの脇に、頭部の無いボロボロの身体が倒れる。
「な……！」
「背後を取られるなんて、まだまだだね」
悠は刀を薙いだ体勢から元に戻した。
「流星、気を抜かないでよ。気をゆるませたら、死ぬから」
全く気付かなかった。
すでに周りは、ゾンビに囲まれていたのだ！

―――

燐は地図を前に集中していた。
机上の地図は微かに発光しており、燐の術が発動してることを示している。
広範囲に結界を張る場合、地図などの媒体を必要とする。
更にこの術を発動している際、燐は完全に無防備だ。
だが、今は政府が派遣した警備隊が外にいるし、何よりここもまた結界内のため、安心して術を発動することができた。
「っ！？」
だが、突然建物内に入ってきた気配に、燐は驚いた。
なぜならその気配は、明確な殺気を持っていたからだ。
燐は振り向こうと身体をひねった。
その瞬間、目の前に鉄棒が迫り、燐の額を勢いよく殴り付ける。
「あっ、ぐ……！？」
頭にいきなり来た衝撃に、燐はたまらず膝を着いた。
押さえた額から、ぼたぼたと血が落ちる。脳と視界がぐらぐら揺れた。
「だ、誰だっ……！？」
燐は顔を上げるが、目に血が入ったせいで視認できない。
（マズい……結界がっ……）
燐は何とか耐えようとするが、そのまま横倒しになってしまう。
「ゆ、う……逃げ……」
燐はそのまま、最後まで呟くことができずに意識を失った。

「おやすみ、鬼堂燐」
血で濡れた鉄棒を放り投げ、その人物は唇を歪めた。
足元に広がる血の池。それを少し踏みつけながら、目を細める。
動かない燐を映した目は、狂気と歓喜に染まっていた。

流星は小刀を横凪ぎにした。
肉が脆くなっているゾンビの首は簡単に絶ち斬られる。
確かこれで五匹目だったはずだ。そう思って振り返ると、悠の周りに、立っている妖魔はいなかった。
あまりの討伐の速さに、流星は舌を巻く。ゲームでもこんな量を数分で倒せるはずが無い。
改めて、椿　悠という少女の実力を実感した。
数十はいたはずのゾンビが、例外無く斬り裂かれているのは、かなりゾッとする。
「怪我無い？」
悠が振り返りながら、刀に付いたゾンビの体液を振り落とした。
「無ぇよ。無ぇけど……」
流星は腕に残る感触に顔を歪めた。
直接ゾンビを斬った感覚が、心に鈍い苦しみを植え付けてる。
「……いや、やっぱ何でも無ぇ」
流星が首を振ると、悠は無表情で「そう」と返した。

パリイィィィィンッ

ガラスが割れるような音が響き渡った。
「な、何だ!?」
流星は目を見開いて空を見上げた。
残響が聞こえる中で、悠が呟く。

「燐の結界が破れた……！」
「はぁっ！？」
「燐に何かあったんだ……」
悠は走り出した。慌てて流星も後を追う。
「ど、どこ行くんだよっ」
「燐のところに決まってるでしょ！」
悠は走るスピードを速めた。

「行かせん」

突然響いた男の声に、二人は急停止した。
「な、何だ！？」
「まさか……」
悠は刀を構え直した。
「貴様らには、ここで死んでもらう」
建物の影から中年の男が一人現れた。
白髪混じりの黒い髪、茶褐色の瞳、黒スーツの男だ。取り立て特徴の無い、平凡な容姿だった。
「……妖偽教団だね」
悠は腰を低く落とした。
「左様。それがしは亜紅妖法師（アクタホウシ）。その命、もらい受ける」
男――亜紅妖法師の右腕がミシミシと歪み、変色する。みるみるうちに、ぶっとい木の槍のようになった。
「妖木か。この間恭兄に倒された奴と同じだね」
悠は不敵に笑った。
「そやつと一緒にしてもらっては困る。それがしは、妖偽教団の幹部なり」
「ふぅん。それにしても、時代錯誤なおじさんだ――ね！」
悠は踏み込み、一気に間合いを詰めた。
刀を下段から、素早く上段に振り上げる。

「ぬっ」
亜紅妃法師は木と化した腕でそれを防いだ。
間髪入れず、悠は刀を振り上げ、次々攻撃をしかけていく。亜紅妃法師はそれを防いでいった。
「悠っ。……！？」
参戦しようとした流星の腕に、何かが絡み付いた。
「！！　か、髪？」
黒髪だ。髪が束になって流星の右腕に巻き付いている。
「邪魔はさせないわよ」
女の声に振り向くと、黒髪の根源が少し離れて立っていた。
黒々とした長い髪の、妖艶な美女だ。遊女のような着方で、派手な着物を着ている。
「っんだ、おまえ……！」
「苦妃徒太夫（クピトダユウ）でありんす。どうぞよしなに」
女――苦妃徒太夫はぶんっと頭を振った。
「うお！？」
髪が引っ張られ、当然流星も空中に投げ出される。
そのまま自分に叩き付けられるところを、流星はぎりぎりで髪を外した。
空中で身体をひねり、よろめきながらも地面に降り立つ。
小刀を構え直し、流星は苦妃徒太夫を睨み付けた。
「いいわねぇ、その目」
苦妃徒太夫は紅のさされた唇をちろ、となめた。
「殺しがいがあるよ、坊や！」
黒髪がぶわっと広がり、流星へと伸びた。
流星は小刀の刃に炎を灯し、勢いをつけて振りかぶる。
炎のかまいたちと幾つもの髪の束がぶつかり合った。
本来なら燃えてしまう髪だが、しかし。
「……！？」
かまいたちが四散した。

一方、髪は焦げもせずに炎を貫き、流星に迫る。
「！！　がはっ」
髪の束が鞭のようにしなり、流星の身体を打ちすえた。
流星はぶっ飛ばされ、近くの民家の壁に叩き付けられる。
木でできた家屋は壊れなかったものの、流星自身が受けたダメージは大きかった。
背中を強く打ったため、立ち上がることができない。
「これでおしまいよ」
苦妃徒太夫の髪の束の先が、針のように鋭くなる。
「さようなら」
髪の槍が、動けない流星の眼前に迫った。

――――

「おい燐。起きろって、おい！」
誰かが自分を揺さぶっている。
燐はうっすら目を開けるも、視界がなぜか赤く染まっていてよく見えない。
頭を起こすと、額に激痛が走った。
「！　あ、つぅっ……」
思わず頭を押さえると、手の平にべっとりしたものが付いた。
「血……！？」
「はぁぁ。よかった、生きてたか」
聞き覚えのある野太い声に、燐はよく見えない目を声の方に向けた。
「……流亜、さんですか？」
「おう。しかし酷ぇな」
顔に何かが触れた。感触からしてタオルだろう。
「顔中血だらけだ。……何があった？」
流亜に訊かれ、燐は気絶する前のことを思い出した。

「……確か、誰かが侵入してきて、振り返ったら、頭を……」
先程から続く痛みのせいで、うまく言葉を紡ぐことができない。
顔を歪めていると、頭に何かを巻き付けられた。
「まだ血ぃ出てんぜ。包帯代わりに巻いとけ」
「は、はい、すみません。あの……流亜さんは何でここに？　日影さんは？」
先程から流亜の声しか聞こえない。尋ねると、ため息が聞こえてきた。
「はぐれちまったんだよ。急にいなくなってさ。探してたら急に結界が解けたから、慌ててこっちに来たんだ」
案の定これだ、とまたため息。燐は頭を下げた。
「ありがとうございます。おかげで助かりました」
「あぁ。にしても……運がよかったな。へたすりゃ失血死だぜ」
驚きを含んだ声に、燐は微苦笑を返すことしかできなかった。
自分が死ななかった理由は何となく解る。だがそれを流亜に言う気にはなれなかった。
どう返そうか考えあぐねいていると、流亜が言いにくそうに「あのさ」と切り出した。
「実は日影がいなくなった後、妖偽教団の幹部に会ったんだ」
「えぇ！？」
燐は見えない目を見開いた。
「だ、大丈夫だったんですか？」
「あぁ……まいてきた。だがよ、気になることを二点、言ってきやがったんだ」
流亜の声は、戸惑いを隠せないようだった。
燐が黙って先を促すと、流亜は低い声を響かせた。
「桐生家の生き残りに……裏切り者がいるらしい」
――――

金属同士がぶつかり合う音が響き渡った。
実際ぶつかり合ったのは金属と金属ではない。
この亜紅妥法師という男の腕、一見ただの木にもかかわらず、金属並の硬度を誇っていた。
「どうした、椿　悠！　ぬしの力はそんなものか？」
木の槍と化した腕を振り回しながら、亜紅妥法師は挑発してきた。
無論そんなことで感情を揺らす悠ではない。刀で防御しつつ、不敵に笑ってみせ、挑発を返す。
「そっちこそその程度？　所詮口だけか」
「何！？」
亜紅妥法師の額に血管が浮き上がった。随分激しやすい質（たち）らしい。
「ほざくな人間！　それがしは、おまえ達より高みに位置する者なり！！」
「おまえ半妖でしょ？　なら元は同じ人間だったはずだ。もっとも」
悠は嘲笑を見せつけた。
「半妖になるぐらいだから、弱い部類に入る人間だったんだろうけど」
「このっ……ほざくなあぁぁぁぁぁぁぁ！」
亜紅妥法師は腕を振り上げた。
木の槍はコンクリートを粉砕し、破片を辺りにぶちまける。
しかし。

そこに、悠はいなかった。

「怒った奴は御しやすい」
亜紅妥法師の背後に回った悠はくすりと笑った。
「本気を出す価値も無い」
白銀の刃が一閃した。

――――

幾つもの髪の束が、家屋ごと流星を襲った。
「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」
苦妃徒太夫の口から、呪詛のように何度も同じ言葉が吐き出される。
その攻撃が止んだ時には、辺りは土煙が舞い上がっていた。
「これだけやれば……」
「げほっ」
「な！？」
せき込む声に、苦妃徒太夫は驚いたようだった。
身体を震わせて「な、ななっ……」と言葉にならない声を発している。
「げ、ほっ……あー、くそ。さすがに煙は防げねーか」
炎の防護壁をまとった流星は、煙を手で払いながらぼやいた。
「ゲームのキャラみたいなシールドがあったらって思ったらマジでシールド作っちまいやがった……凄ぇなこれ。今更だけど」
炎をまとう小刀を見、流星は苦妃徒太夫に目線を向けた。
髪先が焦げている。シールドによるものだろう。
炎のかまいたちを打ち破った髪が、炎のシールドで焦げるというのは、なんとも妙なことだが。
「おのれ……この攻撃を防ぐばかりか、髪を傷付けるとはぁっ」
苦妃徒太夫の髪がぼわぁっと増えた。
「げぇっ。逆ギレ！？」
当たり、である。

ズドドドドドドドドドドドドドドドド！！

髪がぶっといミサイルのように飛来してきた。
「だぁぁぁ！？　髪焦がしたぐらいで怒んなよー！」
「髪は女の命なのよ！」

「だったらそれで攻撃すんなあぁぁぁ！」
流星は逃げながらも全力でツッコんだ。
はたから見ればかなり笑える光景だが、本人達はいたって真面目である。
（くそっ。何だよあの剛毛っ。全っ然燃えねぇし！　シールドの時は焼けたのに……）
無駄と理解しつつも、流星は連続でかまいたちを放った。
「甘い！」
苦妃徒太夫は全てを髪で打ち破る。炎の残滓が空中で舞った。
呆然としている間も無く、幾つもの髪の槍が襲いかかってくる。
「くっ」
流星は再び炎のシールドを張った。
炎の膜が髪の槍を無効化する。それどころか、髪先を焦がしだした。
「――っ！！　またあたしの髪がっ」
苦妃徒太夫は目を見開いて髪を引かせた。
しかし驚愕したのは、流星も同じである。
（シールドよりかまいたちの方が攻撃力あるのに……）
呆然とした両者だが、苦妃徒太夫が先に我に返った。
「はぁっ」
小刀を見つめていた流星に髪を伸ばした。流星は反射的に小刀を持ち上げる。
炎の刃に、黒々とした髪が絡み付いた。が、すぐさま嫌な臭いがたち込める。
「あ〝あ〝あ〝！！　あたしの髪がっ」
苦妃徒太夫はすぐさま髪を引いた。
さすがに直接では燃えるのだろう。焼け焦げの範囲が広がっている。
（でもシールドは何でだ？　俺どうしたっけ？）
苦妃徒太夫が自失から戻ってくる前に必死で考える。

炎のシールドをイメージして、炎を前方に集中させて……
……集中させて？
「あっ」
流星は思わず声を上げた。
「そうか、何だよ、スゲー単純じゃん！」
難しい問題が解けたかのような、そんなすがすがしさを感じる。
気付いたからには、すぐやるしかない。
流星は刃に己の霊力を注いだ。
炎はイメージと霊力に呼応する。今流星は巨大な炎をイメージしていた。
炎が一抱えほども大きくなり、熱気が空気を焼くのが解る。
熱風でじわっと汗が吹き出た。シャツがへばり付くのが不快だ。
流星がやろうとしていることに気付いたのか、苦妃徒太夫は慌てたように髪を広げる。
だがその時には、流星は『タメ』を終えていた。
「喰らえ！」
巨大な炎の矢が放たれた。

金属音と共に、鈍い衝撃が腕に伝わった。
「……邪魔しないでくれる？」
悠はふっと笑った。しかし、頬には汗が伝う。
「一緒に斬られたいの？　熾堕！」
「相変わらず鋭い目だな、椿　悠」
銀髪の男――熾堕は、剣で刀を受け止めながら笑った。
「熾堕、おぬし何故に……」
かばわれた亜紅妥法師は、わけが解らないという顔で熾堕を見つめる。
「人手が足りないんだよ。幹部が死んだら、教団内をまとめにくくなる」
熾堕はそう言い、刀を弾いた。
悠は後方に飛ばされながらも、何とか体勢を立て直す。
「作戦はほぼ成功なんだ。小娘相手に熱くなるのは、どうかと思うぞ」
「ぬ……」
亜紅妥法師は黙り込んだ。言い返せないようだ。
その様子を見て、熾堕はふっと笑った。
「退くぞ。苦妃徒も回収する」
「！　逃がすかっ」
悠は刀を振り上げた。
「初の手、風刃斬！」
衝撃波が地を這い、熾堕に迫る。

バアァァン！

はじかれた。

熾堕が片手を突き出したと思ったら、破裂したように四散したのだ。

「まだまだ弱いな」

呆然とする悠をよそに、熾堕は亜紅妥法師を抱え込んだ。

「これでは俺どころか、羽衣姫すら壊せない」

「くっ……！」

悠は唇を噛んだ。

それを見た熾堕は、面白そうに微笑む。

「強くなれ。星の瞬きが消えないように」

熾堕はだっと走り出した。

「っ、待て！」

悠は我に返って熾堕を追いかけた。

民家が焼き崩れる。

「う、ぐあ……」

苦妃徒太夫は全身を焼き焦がし、それでもなお生きていた。

流星はほっと息をつく。殺す気は無かったので、彼女が生きていて安心した。

「もうこれ以上戦ったら、あんたの身体もたないぜ。諦めろよ」

流星の言葉に、苦妃徒太夫はぎろっと睨んできた。

恐ろしい形相にひるみそうになりながらも、流星は言葉を続ける。

「それに俺、あんたのこと殺したくないし」

「何……！？」

「あんた半妖だろ。元々は人間だったわけだし、俺人殺しなんてしたく、ないし」

流星の言葉に、苦妃徒太夫は酷く驚いたようだった。

目を見開き、流星の顔を凝視する。
その視線を居心地悪く感じていると、苦妃徒太夫はうつむいた。
肩が震えている。泣いてるのかと思えば、笑い声が聞こえてきた。
小さな笑い声。やがて苦妃徒太夫は喉をのけ反らせて高笑いし始めた。
「あは、あはははははははは！　あははは、ははっ、あっははははは！」
「なっ……」
今度は流星が驚く番だった。
何を笑われているのか解らず立ちすくんでいると、苦妃徒太夫はぴたっと笑うのを止めた。
「ふざけんな、餓鬼が！」
般若のような表情で睨まれる。思わず後ずさる流星に、彼女は声を張り上げた。
「何が殺したくない、よ！　いい子ぶってんの？　だったらあんたは、妖魔も殺したくないわけ？」
「あ、え……？」
「あんたは何の命も奪ったこと無いの？　違うでしょ。あんたは犠牲の上に立ってる。無意識でも命を殺してんのよ！」
苦妃徒太夫はぐいっと流星のシャツを引っ張った。
逆らえずにそのまま膝を着くと、彼女は顔を近付けてくる。
血の臭いがする。血や髪の焼けた臭いがする。
死人の、臭いがする。
「それとも人の形をした奴を殺したら『殺し』なわけ？　それ以外の生き物を殺しても『殺し』じゃないわけ！？」
「それは……」
「ふざけんな！　ここは戦場よっ。殺すか殺されるかなの。そんな場所で気色悪い優しさ振りかざすな、この偽善者が！！」
流星は心臓を貫かれたかのような衝撃を受けた。
（偽善……？　俺はただ、人を殺したくないだけだ。そう、人を殺

したくない、だけ）

でも……それが偽善なのか？

流星は呆然と地面を見下ろした。

「っ、く……」

苦妃徒太夫は叫んだせいで残り少ない体力が尽きたのか、力無く地面に伏した。

しばらくその場には、僅かな呼吸音しか響かなくなる。それを破ったのは、第三者だった。

「よう。随分なナリじゃねぇか、苦妃徒」

背後の声に流星が振り返るより速く、腹を思いきり蹴り飛ばされた。

「っがは……！」

肺全ての酸素が無理矢理吐き出される。

みしっと骨がきしんだ気がした。受け身は取ったものの、背中をしたたかに打つ。

何とか起き上がった時に流星が見たのは、煌めく長い銀髪だった。

「……！　おまえ、確か……」

「久しぶりだな」

銀の双眸を細目ながら、銀髪の美丈夫は笑った。

「おまえにはちゃんと名乗ってなかったな。俺の名は熾堕だ。覚えておけ」

忘れるはずなかった。その容貌は、あまりにも印象深過ぎる。

「苦妃徒、掴まれ。教団へ転移する」

「え、ええ」

苦妃徒太夫は熾堕の手を掴んだ。

「待て！」

再び声。振り向くと、悠がこちらに走ってくるのか見えた。

「逃がさないよ、熾堕っ」

向かってくる悠を見て、熾堕はにやっと笑った。
「ふっ……今のおまえに、俺を止める術（すべ）は無い。そう」
熾堕と、妖偽教団幹部二人の姿が透けていく。
「今は、な」
謎のセリフを残し、熾堕達の姿はその場から完全に消失した。

しばらく呆然としていた二人だが、流星は沈黙を破った。
「……なぁ」
「……何」
「俺は……偽善者か？」
悠を見ると、無言で先を促してくる。流星はぼそぼそと、苦妃徒太夫に言われたことを話した。
全部話し終えた流星は、ぐしゃりと前髪を握り潰す。
「俺……間違ってんのか？」
傍に立つ悠を見上げ、流星は問うた。
「例え半妖でも、人を殺すのは悪いことだろ。でもそれは、間違ってるのか？　例え半分は妖魔でも、半分は人間じゃねえか。でもそれは……ただの俺の偽善だったのかよ……！？」
自分を構築していたものが、がらがら崩れていく気がする。
正しいと思っていたものが全て間違っていたような、そんな気が。
まともに悠を見れない。こんな弱い自分、できれば見せたくなかった。
流星はうつむき、拳を握り締める。
そんな彼の頬に、悠の手が触れてきた。
驚いて顔を上げると、抱き寄せられる。小さな膨らみが、頬に当たった。
「え、ちょっ、ゆ……」
「流星は間違ってないよ」
首にまわされた腕に力が込もった。

悠の鼓動がじかに聞こえる。それを聞いている内に、気持ちが落ち着いてきた。
「流星はただ……人としての優しさを持っているだけ」
悠の声はいつもより優しく、温かい。
「だから流星は、間違ってないよ」
流星は肩を震わせた。
肯定されることが、これほど嬉しいことだとは思わなかった。
視界がにじみそうになるのを必死で抑えていると――

「何やってるんですかあぁぁぁ

建物の影から現れた朱華は燐に駆け寄り、頭のタオルを外す。
悠から顔を離した（腕はまわされたまま）流星は、怪我の具合を見て顔をしかめた。
服などに付いた血の量から見て軽くないのは解っていたが、ここまで酷いとは。
前髪の付け根部分の皮膚は裂け、そこから血が流れ出ている。周りが少し腫れ上がっており、傷が深いために骨が見えそうだった。
見ただけで背筋がゾッとする傷口を、悠は冷静な目で眺める。
「金属バットか何かで一撃、だね。刃物との傷とは違うし、もしそうなら即死してる」
なかなか怖いことを言う。頬をひきつらせている流星を、燐はじろっと睨んだ。
「……いつまでくっついてんですか」
言われ、流星は現状を思い出して赤くなった。
「慰めてあげてるんだよ。落ち込んでたから」
そう言って更に密着してくる悠。嬉しいのだが、燐の顔が凄いことになってる。
「悠、俺もう大丈夫だから。別にもう慰めなくても」
「ん？　そう」
悠はようやく腕を外した。少々名残惜しいが。
「……で、燐。その傷誰にやられたの？」
悠が尋ねると、燐は朱華に治してもらいながら顔を伏せた。
「解りません。いきなりのことで、相手の顔は見てなくて」
「解らないってことか……」
悠はチョーカーの十字架をいじりながら考え込んだ。
「……裏切り者かもな」
流亜がぼそっと呟いた。悠が瞬時に顔を上げる。
「裏切り者って？」
「いや、妖偽教団の奴の話だから、信憑性は無ぇんだけどよ……」
流亜は顔をしかめた。

「俺達桐生家の中に……妖偽教団と繋がってる奴がいるらしいんだ。誰かは、解らねーけど……」
「そんな！」
流星は目を見開いた。
「妖偽教団と退魔師が繋がってるなんて……」
「いや、ありえない話でもないよ」
悠は胸の前で腕を組んだ。
「退魔師といえど人間だからね。心変わりもするよ」
「脅されて、とか？」
「……だったら救いがあるんだけどね」
流星が尋ねると、悠は眉間にシワを寄せた。
「ところで、まだ何か言いたそうだけど、何？」
悠は横目で流亜を見た。
流亜は地面に目を向けながらぼそぼそと話し出す。
「この村のことも、妖偽教団から聞いたんだよ。ここは、命であがなわれた村だってな」
「命であがなわれた、村？」
「……ここのゾンビ達」
流亜は村を見渡した。
「あれは墓から出てきたとか、誰かに操られて来たとかじゃなくて……生け贄の死体なんだよ」
流亜は顔を上げながら歪めた。
「この村は十年前まで、年に一度、人間を山に生き埋めにしてたんだ」
「なっ……！　それって殺人じゃねぇかっ」
流星は目を剥いた。
「あぁ。それも集団殺人。普通なら村自体が罪に問われるところを、与党の人間がこの村出身だったためにもみ消されることになった」
「それを、妖偽教団が？」
悠が訊くと、流亜はこくりと頷いた。

「そんなの、私達も知らなかったことだよ。政府内にも妖偽教団が紛れ込んでるのかもね」
「え？　何でそうなるんだ？」
流星は目を瞬いて悠を見つめた。
「裏の事情を知ってるってことは、国の内情に詳しいってこと。つまり内部に敵がいるってわけ。全てが事実だったらの話だけどね」
悠は口元に手を当てた。
「それにしても、無くは無い話だね。近代まで、生け贄を捧げることは、ざらにあったし」
「……は？　どういう意味だ、それ」
流星は眉をひそめた。
悠は一瞬考え込むような仕種をした後、口を開く。
「……日本では工事中に事故が多発すると、土地神の怒りと信じて人間を捧げたんだ」
「なっ……！」
「コンクリートに埋めたり、焼き殺してその灰を材料に混ぜたり、ね。最近まで、それが普通だったんだよ」
「っんだそれ！　そんな、そんなこと……！」
流星はいきりたって身を乗り出した。
そんな流星を、悠は冷た過ぎるほど静かに見つめる。
「でもこれは事実だよ。建築物には、未だに骨が埋まってるところもあるはずだ」
「っ……」
熱くなりかけた脳が、急速に冷えていった。
（本当に、こんなことが……）
流星はぎり、と奥歯を噛み締めた。
「こんなことがあって、たまるかよ……！」
「流星……」
悠は手を伸ばしかけた。
だが無機質な電子音により、それは阻まれる。

「……もしもし」
悠は顔をしかめて携帯を取り出し、通話ボタンを押した。
最初は不機嫌だった悠の顔に、みるみる驚愕が広がっていく。口から「そんな」という言葉がもれた。
「悠、どうしたんですか？」
燐は恐る恐る尋ねる。
「橘家が……」
悠は携帯から耳を離し、顔を上げた。
「人柱が、襲われた」

――――

美しかったはずの日本庭園は、戦場の焼け野原となっていた。
家屋は原型をとどめず崩れ、辺りには血まみれだったり身体の一部が無い死体が転がっている。
死臭と焦げ臭さが混じり合う中を、一人の美女が闊歩していた。
「あはん♪　いいわぁ、この身体……さすが橘家当主の肉体♪」
女――羽衣姫は己の手を見下ろした。
椿　悠に壊された手ではない。傷一つ無い無い、白い肌をした繊手だ。
「月読ちゃんの言う通りねぇん。妾の身体にふさわしい♪」
「おほめいただき、光栄です」
付き従っていた月読は深々と頭を下げた。
「さぁてぇん……もう用は無いわねぇん♪　さっさと行きましょ」
羽衣姫の言葉に、辺りの妖魔や半妖達は咆哮で応える。
異形の者達が絶世の美女を先頭に進む姿は、見ていて圧倒されるものがあった。
月読もそれに続こうとして、ふと、ガレキの一部が動いていることに気付いた。
月読は足を止めてそのガレキをじっと見つめる。

やがてガレキは少しだけ倒れ、少年が姿を現した。
十五、六ぐらいだろう。黒髪に薄茶の瞳をしている。
少年は月読と目が合ったとたん、精悍な、しかし幼さを残す顔を強張らせた。
何やらガレキの中から引っ張り出そうともがく少年に、月読は声をひそめて声をかける。
「私は別に、人肉を喰らう趣味は無い。だから今回は見逃してあげるわ」
「へっ……？」
少年は間の抜けた声を上げた。その手には、半ば現れた黒い槍が握られている。
「ただし、見逃すのは一度きりよ。次会った時は即刻殺す」
月読は少年を一睨みして背中を向けた。
「……あぁそうだわ」
一つ思い出して、顔だけを少年に向けた。
「椿　悠に伝えなさい。桐の裏切り者に気を付けろ、とね」
月読は今度こそ、その場を後にした。

残された少年は痛みや疲れ、もろもろの感情も忘れ、ただ呆然としていた。
「桐？　桐って……桐生家のことか？」
それに解答する者は、いない。

第十四話　笹の兄妹<上>

さすがに夜が明けきっていない早朝は眠い。
しかし、流星達はそんなことにかまってられなかった。
「着いたよ」
悠は車が停まると同時にドアを開けた。
大きな門。いつぞやの梅見家のように半壊しており、家屋を囲む塀も似たり寄ったりだ。
空に向かって立ち上る煙を見るに、中は更に凄惨な光景が広がっているだろう。
「ねぇ、襲撃があったのは昨日でしょ？　だったらもう……」
日影は言いかけて口をつぐんだ。
「なぁ」
雷雲は風馬の服のすそを引っ張った。
「もうだれもいねぇの？　橘家のみんな、死んだの？」
「……多分」
風馬は手短にそう答え、拳を握り締めた。
「この様子だと、あのゾンビ達はおとりだったのかもしれませんね」
燐はぽつりと発言した。まだ血が足りないのか、または別の理由からか青ざめた顔をしている。
「生け贄達を操り、僕達をひきつけている間に橘家を叩く。邪魔が入らなかった分、やりやすかったでしょうね……」
燐の震え声に、流亜は「全くだ」と頷いた。
「妖偽教団が現れたのもそのためか。くそ！　何でこんな残酷なことできんだよっ」
流亜の言葉を聞いて、悠と日影は妙な顔をした。

意外だとでも言いたげな、不思議そうな表情はすぐ消えてしまったが、何か思うことがあったのは違いない。
「……とりあえず、中に入ってみましょ」
日影の提案に、全員固い動きで頷いた。

流星は吐きたくなってきた。
人間が燃えた臭い。鉄錆の臭い。
嗅覚だけでも気分が悪くなるのに、視覚が入ると吐き気どころじゃなかった。
バラバラの肢体。地面に染み込んだ血痕。変色した肉片。
これは本当に現実なのだろうか。あまりにも非日常過ぎて、理解できない。
「妖偽教団の奴ら……いかれてるとか、そういうレベルじゃねぇ……」
流星は奥歯を噛み締めた。
「こんなことして何になる!?　ただ人が死ぬだけじゃねぇか。何も、何も残らねぇじゃねぇか!!」
こんなことをするのは人間じゃない。こんなの人ができるはずがない。
（でも……）
なぜか、肯定する自分がいる。
人は、残虐なことをする前に理性がブレーキをかける。だから悪行に眉をひそめるし、自らの手を罪に染めることも無い。
だがひとたび理性が――ブレーキが外れれば、何者より残酷になれるのだ。
流星は退魔師の仕事を通して、そんな人間を見てきた。
完全に否定できず、完全に肯定できず。流星はどうすればいいのか解らなくなる。
苦妃徒太夫の言葉が、またよみがえってきた。

「ちょ、あれ！？」
日影が突然ある一点を指差した。
全員、指差された方を見る。
「あ、あれって……猛（タケル）じゃないのか！？」
風馬が叫んだ。
がれきの下から這い出るように、一人の少年が現れる。
ほこりをかぶって白くなっているが短く切られた髪は黒で、薄茶色の瞳は人のよさそうな光を灯している。少し日焼けた顔は精悍でなおかつ整っていた。
背が高く、身体付きは無駄の無い筋肉が付いているのが服越しでも解る。
普段なら感心するかうらやましくなる容貌だが、今の彼の状態はそれどころじゃなかった。
「た、猛のあんちゃんぼろぼろだぜっ」
雷雲の言う通り、少年――猛は傷だらけだった。
いたるところに傷を作り、服は返り血だか何だか解らないもので真っ赤染まっている。
薄い唇からもれる息は絶え絶えで、立つことさえできないようだった。
全員猛に駆け寄る。風馬は彼を助け起こして額に手を当てた。
「おい、熱あるぞ！」
「この傷……ほっとくと化膿するわよ」
日影は厳しい表情を浮かべた。
「う……ゆうは、いるか？」
猛の口が動いた。
「いるよ。私に何か？」
悠はしゃがんで猛と目線を合わせた。
「敵の……伝言、だ」
猛は悠の肩に大きな手を置いた。
「桐の裏切りに……ハァ、気を、付けろ……」

「桐……！？」
悠は目を見開いた。流星も思わず燐と流亜と視線を交わらせる。
猛は言い終えると、力尽きたように悠の方へ倒れ込んだ。

――――

椿家の邸宅。和風の大広間の一番奥であぐらをかいていた刀弥は煙管から口を離した。
「裏切り者、なぁ……。無くは無ぇ話だな」
悠と同じことを言ってる、と流星は思った。さすが兄妹、というべきか。
「桐生家襲撃の際の手際の良さ。内通者がいた可能性は高い。だが……生き残り組にとはな」
この場に桐生家の面々はいない。いるのは椿家三兄妹、それと流星と燐のみだ。
裏切り者のことがある以上、桐生家の者を話し合いに参加させるわけにはいかず、別室で待機してもらっている。
猛はというと、彼もまた別室で治療中だ。しばらくしたら起きるだろう。
「……別家でも、裏切り者がいるみたいだな」
恭弥が紙の束を見つめながら呟いた。
「梅見家の退魔師と死亡者のリストだ。四人足りない。骨ごと喰われた可能性もあるが、おそらくは。橘家でも同じ結果が出るはずだ」
「何か、嫌というか恐ろしいですね」
燐は正座した両膝に置いた拳を握り締めた。
「すぐ近くに敵がいるかもしれない。すぐにでも首をかっ切られるかもしれない。そう思うと……少し、怖いです」
燐の言葉をそんな馬鹿な、と笑い飛ばす者はいなかった。全員厳しい表情を浮かべ、黙り込む。
「……裏切り者の目星はついてるよ」

悠が顔を上げて言った。流星は思わず片膝立ちになる。
「マジか!?　誰だ?」
「言えない」
「何で!?」
「推測の域を出てないから……だろ?」
刀弥は肩をすくめた。
「おまえは勘がいい。……そのせいで一人で突っ走る傾向があったが、それも無くなったみたいだな」
「……私は、三年前に何も学ばなかったわけじゃないよ」
悠がそう言ったとたん、流星以外の全員の顔が曇った。
特に恭弥は、哀しそうな顔をうつむかせている。
「……それより、裏切り者をどうやって推測から確定に変えるんですか?」
燐の問いに、悠は考え込むような仕種をした。
「……朱華に色々調べさせてる。とはいえ、一応私から鎌をかけてみるよ」
「僕は他の裏切り者のことを調べよう」
恭弥は手に持ったリストを軽く振った。
「でも恭兄、身体の方は……」
「デスクワークぐらい大丈夫さ。氷華にも手伝ってもらうしな」
恭弥はさわやかに笑った。
しかし今気付いたが、顔色が少し悪い。
(体調、よくねぇんだ)
流星は恭弥をじっと見つめた。
封印のバランスとやらが崩れているせいか、多分辛いはずだ。
なのに笑って、何かをしようとしている。
強い精神力だ。けっして折れることはない、崩れることもない。
悠も、多分刀弥や燐も、絶対な意志を持っている。だから強い。
(でも俺は?)
敵の言葉で揺らぎ、迷い、崩れる。とても、弱い。

（俺は、戦っていけるのか？）
流星が弱々しく拳を握った時、遠くから喧騒が聞こえた。
「どうした？」
「は、はい」
刀弥は外に声をかけると障子が開き、スーツ姿のごつい男が入ってきた。
「実は……」
「何だ？」
「……笹宮家の人柱と姫持ちが、こちらに……」

『……』

数秒の間。
ゆっくり時間をかけた後――

『……はあぁぁ！？』

五人はぴったり声をそろえた。

客間でまず目に入ったのは、茶髪の縦ロールという髪型の少女だった。
薄茶色の長髪を童話に出てくる姫のように幾つもの縦ロールにしている。幼さの残る顔には薄ピンクの化粧をほどこしていた。
しかし流星が何より驚いたのは、少女の服装である。
白を基調としたピンクのリボンやフリルがあしらわれたブラウス。下は白いレースを三段重ねにしたスカート、頭には、どういうわけかでかいピンクのリボンを付けていた。
乙女趣味全開の服に、流星はドン引きする。
（何だ、あのイタイ存在は！）

言葉が出てこない。できることなら、視界に入れたくない。
しかしそういうわけにはいかず固まっていると、少女は立ち上がった。……ハイソックスまでレースとリボンだった。
少女は一直線に恭弥まで走り寄る。
「お久し振りです、恭弥様ぁ！」
甘ったるい声を上げて、少女は恭弥に抱き付いた。恭弥が目を見開いている間にも、少女はすり寄っている。
「……なにあれ」
「美少年に抱き付くロリファッション少女の図」
流星の呟きに、悠はため息まじりに答えた。
「ロリ……？　ロリコン？」
「それは幼女嗜好。ロリータファッションっていう服の系統だよ」
悠は常識を話すような口調だが、流星には全然常識じゃない。
「私はゴスロリの方が興味あるな。まぁ普段はパンク系着てるけど」
どうしよう、悠の言葉が呪文に聞こえてきた。
流星が頭を抱えている間に、少女はベラベラ喋っている。
「もう二ヶ月前になりますね……私は貴方を忘れたことはありません。再会できる日を、どれほど待ち焦がれたことか……！」
何やら芝居がかった口調だ。目は本気だが。
「あー、解った。君の気持ちはよく解ったから離れてくれ」
恭弥は少女を自分から剥がした。
「あいかわらずだな……」
恭弥はこめかみを押さえた。
「いいえ恭弥様。この可憐（カレン）、恭弥様のために美しさに磨きをかけましたもの～」
再び迫る少女を、恭弥はさらりと避ける。随分慣れた動きだ。
「ホント、あいかわらず恭兄にベタ惚れだよね、彼女」
「僕は貴方に心酔しておりますが」
どっからわいてきたのか、一人の青年が悠の右手を取っていた。
薄茶の髪を伸ばし、どういうつもりか黒革の服を着ている。顔立

ちは悪くない。むしろいい方だ。だが、服装のセンスはいいとは思えなかった。

けっこうな存在感だが、さすがに少女の傍ではかすんでいたのだろう。

「忍（シノブ）、いたの？」

悠は冷めた目で青年を睨んだ。

「私に触らないで。手、離しなよ」

「まさか！　貴女の繊手を離すなどできな」

『何言ってんだ（ですか）、この変態野郎ぉぉぉぉぉ！！』

流星と燐は青年の言葉を遮るように絶叫した。

青年は不愉快そうに振り向く。

「いたのか鬼堂　燐。害虫めがっ」

「誰が害虫ですか！」

燐はすかさず反論した。

「うるさい。……で、そっちのアホそうな餓鬼は？」

「ガッ……大して歳変わんねーじゃねぇか！」

流星がガーッと吠えた。

「同い年ぐらいだろ！？　俺十七だしっ」

「勝った。僕は十八だ！」

「一歳しか違わねぇだろおぉぉぉ！！」

ぎゃあぎゃあと客間が騒がしくなった。

可憐はまだ恭弥を追いかけてるし、忍と流星、燐は悠をはさんで睨み合っている。

「……ここは幼稚園か」

刀弥はぼそっと呟いた。

その様子を、部屋の外から見つめる者が一人。

「飛んで火に入る人柱……」
その唇が歪められた。

「何で俺達がこいつらの護衛なんて……」
「文句言わないでよ」
悪態をつく流星と並んで歩いている悠はため息をついた。
目の前を歩く笹宮兄妹、忍と可憐の背を見つめ、またため息。
「……私だって嫌だよ」
忍は鉄鞭姫（カナムチヒメ）という姫シリーズの一つを持ち、可憐はその背に呪印を持つ人柱だ。
本来なら外出などできるはずがない。その二人がなぜ街中、しかも椿家の山のふもとの街にいるかというと。
「閉じこもるのが嫌で抜け出すとか……危機感無ぇってより馬鹿だろ、アホだろ」
「全くだよ。元々、あの二人は退魔師にしては楽天家過ぎる」
前方の兄妹に聞こえないよう、二人はそれぞれ言いたいことを言う。ここまで意見が噛み合うのは初めてだった。
「……先程から思ってましたが」
突然忍が振り返った。聞こえたのかと思いきや、どうも違うらしい。
「なぜ悠さんは僕ではなく、そのちんくしゃと並んで歩いているのです？」
「な！　誰がちんくしゃだっ」
流星が悪口には悪口で返すっ、と意気込む前に、忍は悠の手を取った。
「貴女にはそんな男より、僕の方がふさわしい……」
忍が手の甲に唇を押し当てようとした瞬間、悠はその手を振り払

う。
「私に触るな。私に触っていいのは、私が心を許した人間だけだよ」
「……失礼」
忍は酷く残念そうに肩をすくめた。
流星はというと、悠の言葉を頭の中で反芻（ハンスウ）する。
（触れていいのは心を許した人間……俺は大丈夫ってことは……！）
内心でガッツポーズする。勝利者の気分だった。
「ハァ～。私は恭弥様がよかったわぁ」
可憐は憂いっぽく呟いた。服装と声音が全然合ってない。
「……恭兄は人柱だから出られないよ。本来なら、君も行動をひかえるべきだ」
「やぁよ。狭い場所に追いやられるなんて！」
可憐はぷいっとそっぽを向いた。
「それに私達は強いもの。妖偽教団なんて目じゃないわ」
「その通りだ、妹よ」
忍は可憐の肩に手を置いた。
「僕らは強い。ご心配無く。あ、護衛は悠さんだけでいいです」
そう言って笹宮兄妹は再び歩き出した。
「むかつく奴らだなっ」
流星は眉根を寄せた。
「確かにね。でも大事な戦力だよ」
悠は本日三度目のため息をついた。
「裏切り者のこともあるのに、人をわずらわせて……」
「……なぁ悠」
流星は思い切って尋ねる。
「その裏切り者って誰なんだ？　教えてくれよ」
「駄目。朱華に情報収集させてる段階で、まだ推測の域だからね。ただ」
悠はふと、表情を曇らせた。
「その人であってほしくないとは思うよ。……傷付けたくないから」

「え……」
思わず足を止めた流星にかまわず、悠はすたすたと歩いていく。
（傷付けたくない？　悠と親しい奴ってことか？）
桐生家の中で、悠と一番親しい人物。思い当たるのは……
（……日影さん！？）
悠が友達と言っていた人物は彼女しかいない。
傷付けたくない、というのは、戦いたくないということではないだろうか。
もしそうだとしたら……誰だと言いたくないのも頷ける。
（でも、もしそうだとしたら……悠はどうするつもりなんだ？）
もし日影が本当に裏切り者だとして、悠は彼女をどうするつもりなんだろうか。
「な……」
もう一度声をかけようとした時。

ドバアアアアアアアアンッ

爆音がコンクリートと共に辺りにまき散らされた。
辺りの人間はざわめき、いきなり爆発した小さなビルを凝視する。
「あはん♪　お久しぶりぃん」
土煙から一人の女が姿を現す。
ゾッとするほど美しい顔立ち、女を主張する肢体、煌めく漆黒の髪、布地の少ない黒衣……
「は、羽衣、姫……！？」
流星はその場から動けなくなった。背筋どころか、全身が凍り付く。
「さぁ……死の舞踏を始めましょぉん♪」
羽衣姫はすぅっと微笑んだ。

――――

「じゃあ、羽衣姫は桜さんの身体を……」
猛の話を聞き終え、恭弥は顔をしかめた。
屋敷の一室。部屋の中心にしかれたふとんの上に座った猛は顎を引いた。
「羽衣姫と名乗ったあの女が着ていた服がお袋の全身を包んだと思ったら、女の方はミイラみたいに干からびて、お袋の姿が、あの女の姿に……」
両手の拳を固めてうつむく猛は、その時のことを思い出したのか、唇を噛んだ。
「……羽衣姫の本体は服の方。羽衣姫を完全に滅殺するには、本体を狩るしかないな」
「狩るって……先人達ですら、封印するしかなかったんスよ！　現代の俺達がどうしろと？」
猛は驚いたのか、顔をバッと上げた。
「それは戦力が大幅に減っていたためと文献にあった。戦力を確保すれば、不可能じゃない」
恭弥が冷静に返すと、猛は再びうつむく。
「……羽衣姫」
猛の口から、きしむような声がこぼれた。
「あんなもののせいでお袋も、親父も、みんな……死んだ」
大きな両手で顔を覆い、猛はぎり、を歯を噛み締めた。
「あんなものが無ければ誰も、誰も死ななかったんだ！　誰も不幸にならなかった！！」
大声を出した後、猛は顔から手を離した。
「……恭弥さん」
「ん？」
真剣な声に、恭弥は首を傾げた。
「親父や、他の人柱のみんなの分まで、生きてください」
「……」

「お願い、します」
哀れなほど歪んだ顔と、懇願するような声音。恭弥は頷くしかなかった。

部屋を出た恭弥はふぅ、と息をついた。
自分は頷いた。あんな目を、あんな顔を、されたから。
「……何をやってるんだ、僕は」
彼の想いを裏切ることぐらい、最初から解っているのに。
「っ、く……」
恭弥は急に苦しくなって心臓を辺りを掴んだ。
鼓動がいつもより早い気がする。人柱が殺され始めてから、体調は悪くなる一方だ。
「まだ、駄目だ」
唇を噛むと、口の中に鉄の味が広がった。
「僕はまだ、僕である必要がある」
切れ長の瞳に宿る瞳は、揺るぎなかった。

――――

悠は刀を振った。
「風刃斬！」
地を這う衝撃波がコンクリートを削る。
「あの時は動揺したけど、今度はそうはいかないよっ」

その前に、いつの間に刀を持った！？

唖然とする流星の視界の隅で、当然のように朱葦が存在していた。
（あいつって……神出鬼没過ぎ）
非常時だというのに、そんなことを思ってしまう。

「んふ♪　前の妾と今の妾は違うわよぉん」
羽衣姫は含み笑いを浮かべ、右手を突き出した。
「四天壁晶（シテンヘキショウ）！」
羽衣姫の前に薄ら発光する四角い壁が現れる。半透明のそれは衝撃波を受け止め、かき消えてしまった。
「なっ……！？」
「言ったでしょぉ？」
澄んだ音を立てて、薄い障壁は崩れる。その破片をまとった羽衣姫は、にいぃっと唇を歪ませた。
「前の羽衣姫と今の羽衣姫は違うのよん♪」
こっ、とブーツのヒールが音を立てて進み出る。

ギュルウゥゥッ

羽衣姫の身体に何重も長い何かが巻き付いた。
銀色に鈍く光る、ロープのようなものだ。
「ふはは、捕えたぞ！」
忍は高笑った。
鋼鉄のロープの先、同じ色に輝く柄を握り締め、忍はぐいっとそれを引っ張る。
「鉄鞭姫、部分解除！」
パリィ、とロープ――否、鞭に電流が走る。
「電雷閃光（デンライセンコウ）！」

バリバリバリバリィッ

鞭から電流が流れ、羽衣姫の全身を電光を覆った。
「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
羽衣姫が悲鳴を上げた。忍は笑みを深める。
「出力を上げる！　まだまだ上がるぞっ」

かあぁっと電光がまぶしいぐらいに辺りに覆い被さった。
「うお！　す、すげぇ。このまま羽衣姫倒しちまうんじゃねぇか！？」
「……いや」
驚く流星に対し、悠は眉をひそめた。
「そう簡単にはいかないだろうね」
「何言ってるの」
可憐はハッと鼻を鳴らした。
「お兄様の電撃を受けて生き残れるはずが」

ドスッ

可憐の言葉が止まる。
鈍い音と同時に、血がぽたりと地面に落ちた。
「……え？」
可憐は目を見開いた。
「何……これ」
小さな唇の端からつ、と紅いものが伝う。
貫かれた腹からあふれる血が、白い服を濡らした。

『うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？』

誰か、一般人が叫んだ。
息を飲んで見守っていた人々が逃げ騒ぐ中で、流星は絶叫によりかえって冷静になる。
可憐は先のとがった太く黒い何かに、腹部を貫かれていた。
そしてその根元は。
「しびれるぅ～……なんちゃって♪」
今なお電撃をあび続ける羽衣姫の唇が歪められた。

右腕の手袋が伸びて、可憐の腹を貫いている！

「いつまでこれ、放出し続けるのかしらん？」

羽衣姫は忍に目だけを向けた。睨まれたわけでもないのに、忍の顔がひきつる。

「邪魔よん♪」

羽衣姫の左手が動いた。

バアアアアアアアアアアン！！

電撃がはじけ飛んだ。

「ぐあっ」

「きゃっ」

離れた場所に立っていたはずの流星と悠は、その衝撃により吹っ飛ばされる。

悠はなんとか耐えられたようだが、流星は無様に建物に叩き付けられた。

「……ってぇ。昨日といい、今日といい、俺壁に叩き付けられ率高くねぇ？」

「そんなことより忍と可憐！」

悠に怒鳴られ、流星は頭を押さえながら起き上がった。

羽衣姫の足元に、とぐろになった鞭が落ちている。忍は柄を持ったまま倒れていた。

羽衣姫は笑みを浮かべたまま可憐から槍もどきを抜く。同時に長さが元に戻り、何のへんてつもない手袋に戻った。

可憐は一瞬ふらつくが、何とか踏みとどまる。

「うぐ、この……」

可憐はおぼつかない手付きで数枚の呪符を取り出した。

「可憐、駄目！」

悠が止めに入ろうとするが、間に合わない。

「羽衣姫ぇぇぇぇぇぇぇ！！」
呪符が矢になって飛来した。あなどれないスピードで矢はまっすぐに羽衣姫に迫る。
「無駄♪」
羽衣姫は目を細め、両手を広げた。
両腕を覆う手袋から、蛇のような細長いものが突出する。
それはぐんっと伸びて矢を真っ正面から叩き落とした。
「マズいっ」
悠は慌てたように前に出ようとした。

トスッ

しかし彼女の足元に突然矢が飛んで来たことにより、足を止める。
可憐の矢ではない。なぜならその矢は、突き刺さったとたん霧散したからだ。
悠がそれに一瞬動きを止めたことで――結果は決まってしまった。

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ

あっと思う間も無く、可憐は全身を貫かれた。
腹の傷はえぐられ、右腕と左腕と左足が吹き飛ぶ。右腕は筋一本でぶら下がる状態となり、首の半分の肉がもっていかれた。
羽衣姫の手袋が元に戻る。彼女の唇には、子供のような笑みがかたちどられていた。
可憐の顔に、様々な表情が浮かぶ。怒り、嘆き、驚愕……しかし何より色濃かったのは、恐怖だった。
「た、たすっ……助けっ」
血塊を吐きながらの懇願も虚しく――

ドシャッ

頭が砕かれた。
羽衣姫の指先が伸び、槍のように可憐の頭を貫いたのだ。
肉片と血をまとわりつかせた骨片が散らばる。ハラハラと髪がざんばらに舞った。
バラバラになった脳が地面でひしゃげ、光を失った眼球が転がる。
血の臭いがたち込み、視界を血と肉の色が染めた。
血走った目玉が、流星を見上げる。
流星は口元を押さえた。
「っ、うっ……おぇっ」
たまらなくなって、膝を着いて胃の中のものを吐き出す。目に涙がにじんできた。
「……っく、う〝ぅっ」
胸辺りまでせり上がってくるものを抑え込み、つばを飲み込む。
「っは、なん……」
言葉が出てこない。嘔吐物で喉が塞がっているため、喋れるわけがなかった。
「足止めご苦労様、月読ちゃん♪」
「いえ」
羽衣姫が右手側に目をやると、巫女装束の女が姿を現した。
「それで、どうなされますか？　二人の姫持ちを」
「そうねぇん」
羽衣姫は腕に付いた血を振って雄とし、小首を傾げた。
「羽衣姫！」
突然悠が声を張り上げた。
「訊きたいことがある」
「……何かしらん？」
羽衣姫は眉をひそめた。
「さっきの術、四天壁晶についてだ」
悠の声が低くなった。

「あれは退魔師の防御術だ。橘家の術師が使う……」
「だから？」
「前は使ってなかった術、前とは違うという言葉、それに橘家の死体をざっと確認した時のことを踏まえると……」
悠の後方にいる流星には、彼女の顔は解らない。
だが更に低くなった声で、悠が怒っていることが何となく理解できた。
「羽衣姫……おまえの今の肉体、橘家当主の橘　桜のものでしょ？」
「え……！」
流星は口元を押さえたまま目を見開いた。
そういえば、生き残りの人間を探している時、悠は「いない」と呟いていた。
結局生き残りは猛以外いなかったわけだが、その言葉を妙に思わなかったわけじゃない。
その言葉が、橘家当主のことだとしたら。
流星は羽衣姫を見た。
羽衣姫の唇には、先程とは違う種類の笑みが浮かんでいる。
いたずらっぽい――流星から見れば、恐怖で思考が止まりそうな笑みだった。
「ホント……鋭い子供だこと」
羽衣姫はかつん、と足音を立てて、後ろに下がる。
「頭のいい子は嫌いじゃないわん♪」
「そのふざけた口調続けていると……」
悠の言葉が途切れた。視線が羽衣姫から、忍に移る。
いつの間か起き上がっていた忍は、地面に散らばった残骸を見つめ、ぶつぶつ呟いていた。
「死んだ、可憐が、羽衣姫、抑えられない、勝てない、負ける、死ぬ、死ぬ、死、死……」
忍は鞭の柄を握り締めたまま頭を抱えた。
「忍、落ち着いて！　それ以上は駄目だっ」

悠が焦ったように声をかけても、忍は呟くのを止めない。
「もう駄目だ。勝てない」
「忍！」
「勝てない、勝てない、勝てない」
忍は顔を上げた。恐怖で顔が歪み、瞳には絶望しか映っていない。
「僕達は殺されるんだ！」

ミシィ……

何かがきしむ音がした。
「が、ぐあっ……」
忍はいきなり血塊を吐き出した。
「忍、武器を離してっ」
悠の声も聞こえていないようで、忍の身体は嫌な音を立て続ける。
「何が起きているんだ……？」
流星は悠の隣に移動した。吐き気はおさまったが、まだ気分が悪い。
だがそれより、今は忍の身に起きていることの方が気味悪かった。
「忍は、折れてしまったんだよ」
悠は険しい顔を浮かべ、刀を握り直した。
「鉄鞭姫に精神を喰われてしまってるんだ」
「そ、それってどういう……」
「姫シリーズは、従うために持ち手を選ぶのではない。己の『肉体』として持ち手を選ぶんだ」
それは――いつか、武器職人の景信にも言われたことだ。

それが……今目の前で起きている！？

「う、が、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
忍は叫び声を上げた。その間に、髪の色が変化する。

薄茶色がどんどん色を失っていく。否、金色に変わっていく。
「か、髪の色が……」
「あれがなれの果て」
悠が呟くのと同時に、忍は叫ぶのをぷつりと止め、立ち上がった。
虚空に向けられた瞳も、爛々と輝く金色に変わっている。
「あれが、身体を乗っ取られた者の姿だよ」
悠は少しだけ前に出た。
「心が闇に負けた時……姫シリーズ達はそこをついて使用者の心を喰らう。身体を乗っ取るためにね」
「乗っ取る……」
「あれはもう、忍じゃない」
悠は刀を構えた。
「あれは、鉄鞭姫だ」
悠が見つめる中で、忍は忍じゃないものの瞳に羽衣姫を映した。
唇の端が、にぃぃと持ち上がる。
「ヒサシブリ、姉妹（キョウダイ）」
声も、忍のものじゃなかった。

顔は忍のものだ。身体も忍のもの。だが髪と瞳、そして中身は、全く別物にすり換わっている。

忍の形をしたものは、己の手を見つめて唇を歪ませた。

「くっ……くくっ……ふはっ。あはははははははははははははははは！」

喉をのけぞらせて笑う様は、どこか異質な、別次元のものを思わせた。

「身体だ！　肉体だ！　私のものだ！！」

高笑いし続ける彼を、流星は霊を見る目で眺めた。

「あれが、姫シリーズに乗っ取られた姿……？」

「そう。姫持ちである私は断言できる。彼女達は壊すためにある、傲慢な姫達だ」

悠の言葉に彼、いや『彼女』は笑うのを止めた。

「剣（つるぎ）の使い手か。あの我の強い我らが長子をよく御せたものだな」

「あいにく私も我が強い方でね」

悠はふっと笑う。

『彼女』――鉄鞭姫はふんと鼻を鳴らすと、羽衣姫に向き直った。

「久しいな、羽衣」

「いやん♪　お久しぶりですわぁん、お姉様♪」

「姉、だと。白々しい」

鉄鞭姫の顔が苦々しげに歪んだ。

「貴様は忘れたわけではあるまいな。貴様は、我らと違うっ。今度こそ、貴様を壊してくれるわ！」

鉄鞭姫は勢いよく鞭を振るった。
羽衣姫を狙った一撃は、しかし、横からはじかれてしまう。
「鉄鞭姫、相手は私がするわ」
弓で鞭を弾き飛ばした月読は、冷めた目で鉄鞭姫を睨んだ。
「私と、この『鳴弦姫』がね」
「邪魔をするな、小娘が！」
鞭が空を切った。
鞭の先に付いた刃が、月読の心臓を狙う。
「『鳴弦姫』、部分解除」
月読は呟くと同時に走り出した。
「接撃打破（セッゲキダハ）」
弓と鞭がぶつかり合う。
「爆（バク）・破道（ハドウ）」
ぶつかり合った場所から火花が散り、そして。

バアァァァァァァァァンッ

耳の奥が痛くなるほどのどでかい爆音が辺りに広がった。
「くっ」
「うわっ」
悠と流星はまたもや飛ばされそうになった。
何とか踏みとどまるも、周りが煙に覆われ、視界が悪くなる。
「げほっ。何も見えねぇ！　どうなった!?」
流星はむかむかする胸元を押さえながら首を巡らせた。
「今の技……葵姉の。やっぱり月読は、葵姉……！?」
悠は刀を握り締めながら呟く。しかしハッと顔を上げたかと思うと、刀を持ち上げた。
一瞬意味が解らなかった流星だったが、煙を押しのけて突進してきた人物を見て慌てて身を引く。
白銀の刃と鋼鉄の籠手がぶつかり合った。

「あはん♪　やるわねぇん」
「っく……」
拳を刀に押し付けたまま笑う羽衣姫に対し、悠は汗の浮かんだ顔を歪める。
二秒ほどつばぜり合いのような状態を続けた後、悠は右足を蹴り上げた。
羽衣姫はバッと間合いを空ける。間髪入れず、今度は悠から向かっていった。
「三の手、烈火炎刃（レッカエンバ）！」
刃を覆うように、刀に炎が灯った。炎をまとった一撃は、羽衣姫の脳天を狙う。

ガィィンッ

しかし鈍い音を立て、攻撃は受け止められた。
「んふふ、弱い弱い♪」
籠手を付けた手で刃を掴みながら、羽衣姫は唇で弧を描く。
「人間は脆い。とても、脆い。そんな存在が、妾に勝てると思ってるのん？」
ぶんっと刀が悠ごと振り投げられた。
目を見開いた悠だが、空中で身体をひねり、地面に降り立つ。
「あ、そうだわん♪」
羽衣姫はいいことを思い付いたとばかりに両手を叩いた。
「一つ、バットニュースを教えてあげるわん♪」
「バットニュース？」
体勢を立て直した悠は眉をひそめた。
羽衣姫はにっこり微笑む。
「お気付きの通りぃ……月読ちゃんは貴女の姉、椿　葵よん♪」
流星はハッと悠を見た。悠は、ぎり、と歯を食い縛る。
「……やっぱり。でも疑問が残るよ」

悠は羽衣姫を睨み付けた。
「何で葵姉は私のことを忘れていの？　私だけじゃない。おそらく、恭兄や刀兄のことも……」
「そう。彼女は『知ら』ないの」
羽衣姫はすぅっと微笑んだ。とたんに流星の背筋がぞわりと粟立つ。
「だって彼女の元の人格は、壊れちゃったんだもの♪」

――――

矢が放たれた。
数十の矢の大群が、忍の肉体を乗っ取った鉄鞭姫に迫る。
「笑止！」
鉄鞭姫は本体の鞭を振るった。
矢を全て叩き落とし、なおかつ反撃までしてみせる。
蛇のように飛び出してきた鞭を、月読は右に跳んで避けた。
しかし鞭は進行中にまがり、月読の左腕に絡み付く。
「っ、しまっ」
叩き付けられた。
地面に強く押し付けられ、骨がきしむ。口の中に鉄の味が広がった。
左腕の圧迫感が消える。すぐ立ち上がろうとして、膝がぐらついた。
「邪魔しないでもらおう。抵抗しなければ、楽に死ねるぞ」
鉄鞭姫は追撃せず、ただこちらを見つめるだけだった。
唇には残虐な、人間には共感されないであろう種類の笑みが浮かんでいる。
「どちらにせよ……殺すんじゃない」
月読は落ちてしまったコートを拾い、羽織り直した。
「全く姫シリーズはみんな」

月読は突然弓を放り投げた。
目を見開く鉄鞭姫に向かって、身を低くして走り出す。
慌てたように振るわれた鞭を紙一重で避け、相手の懐に入り込んだ。
「危険思想家ばかりね」
正拳突きを鉄鞭姫の腹に叩き込み、間髪入れず回し蹴りを放つ。
「がはっ」
鉄鞭姫はぶっ飛び、無様に地面に転がった。
「やはり本体の扱いは特級でも、身体を使う体術は不得手のようね」
月読は束ねた髪を後ろに払った。
「当然よね。ついさっき手に入れた身体だもの」
立ち上がろうともがく鉄鞭姫に、月読は手刀を持ち上げ、構えて見せた。
「だてに人間の身体で妖魔達をまとめているわけじゃないの。体術だって、妖魔共に引けを取ったことは無いわ」
月読が睨み付ければ、鉄鞭姫は表情を厳しくした。

――――

「四年前、妾はたまたま妖偽教団の妖魔を倒していく退魔師の夫婦に出会ったわん♪」
羽衣姫は語り出した。自然体なのだが、隙が無い。手出しができなかった。
「妻の方……椿　葵ちゃんは妾に気付くと夫と共に逃げようとしたのん。ま、気持ちは解らなくもないけどん♪　でもぉ、逃げられたら誰だって追いかけたくなるでしょん？」
「……それで葵姉を追跡し、捕えたわけ？」
悠がきしんだ声を絞り出した。
「そ♪　夫の方は、妻をかばおうとして死んだわん♪　ま、結局犬死なんだけど♪」

「葵さんのダンナさん、殺したのかよ!?　何のためにっ」
流星が問えば、羽衣姫はつまらなそうに唇を動かした。
「だっていらないじゃない？　妾は葵ちゃんにだけ用があったんだものん」
「それだけ……？　たったそれだけで？」
流星は絶句する。
羽衣姫は流星から目を離すと、再び話し始めた。
「妾は葵ちゃんから退魔師達の情報を得ようとしたのん。他家に嫁いだとはいえ、椿家の長子。いい情報源になると思ったわん。でもあの娘、拷問しても口を割らなくて……その内、心が壊れちゃったわん」
「……！」
「残念だったわぁん。でも、妾はいいことを思いついたの」
羽衣姫はにまっと笑った。
「葵ちゃんの中に、別の人格を入れることを思いついたのよ♪　妾に従順で、冷酷な心をねん。今の彼女は、まさにそれ」
「……じゃああれは、葵姉であって、葵姉じゃ、ない……？」
悠は蒼白な顔で目を見開いた。
「そうよん♪　……っとぉん」
打撃音を聞き、羽衣姫は振り返った。
「あらん♪　そろそろかたが付きそうねん♪」
煙はすでに晴れている。羽衣姫の肩越しに、接近戦を繰り広げる二人が見えた。
明らかに鉄鞭姫が劣勢だ。近接戦であるため、鞭の能力を発揮できていない。
「マズい！」
悠は走り出そうとした。
「やっだぁ、妾のことフッちゃう気ぃん？」
しかし羽衣姫が進路に立ち塞がる。
「忘れないで♪　貴女の相手はぁ……妾よん！」

羽衣姫は長い脚を蹴り上げた。爪先の部分がレイピアのようにとがる。
悠は後ろに身を投げ、間合いを取った。
体勢を立て直し、地面を蹴って刀を突き出す。
喉を狙った一撃は、しかし羽衣姫の前に現れた黒い布の壁によって阻まれた。
「やめてよねぇん。妾自身は無敵でもぉ、この身体はそうじゃないんだからん♪」
羽衣姫の蹴りが悠の腹に入った。口から血をほとばしらせながら後退させられる。
「んふふふ♪　やっぱり悠ちゃんの白い肌には、紅がよく映えるわん♪」
羽衣姫は楽しげに笑った。
「待っててねん。すぐに全身を真っ赤に染めてあげる♪」
両手の指部分が鉤爪のように鋭くなった。
羽衣姫は走り出した。数秒で間合いを詰め、腕を振り上げる。

ドガアァッ

炎が爆発した。
火の粉がまとわり付く腕を見、羽衣姫は目を細める。
「あぁ……もう一人いたわねん」
羽衣姫に見つめられ、流星は小刀を構えたまま震え上がった。
全身に恐怖が駆け巡る。それでもしっかり、羽衣姫を見据えることができた。
「……面白い子供だことん♪」
羽衣姫は唇を歪ませた。

ガッシャアァァァァンッ

鉄鞭姫が吹っ飛ばされてきた。
近くの店のシャッターにぶつかり、地面に倒れ込む。
「ぐっ、おのれ……小娘がぁ！」
「慣れない身体で戦ったことが、貴女の敗因ね」
月読は掌底の構えを解いて髪をかき上げた。
「さっさと逃げるか、間合いを取ればよかったのに」
月読は離れた場所に落ちている弓の方へ歩いていく。
「敵に背を向けるとは！」
鉄鞭姫は鞭を振るった。……否、振るおうとした。
「……！？」
鉄鞭姫の右手首に、銀色に発光する印が浮かんでいた。
右手首だけではない。左手首、両足首にも同じものが浮かび上がっている。
それに抑え込まれているかのように、鉄鞭姫の両手足はぴくりとも動かない。
「あれは封縛印（フウバクイン）！」
悠が我に返ったように呟いた。
「な、何だよそれ？」
流星は顔を悠の方へ向けた。
「相手の動きを封じる椿家の術だよ」
悠の瞳が揺れる。刀の先が、少しだけ下がった。
「本当にあれは、葵ね……」

「ぼーっとしてる場合ん？」

羽衣姫が再び爪を振り上げた。
悠は顔を上げて刀でガードする。
ギチギチと刃と爪がせめぎ合う。
「ここは戦場。呆けてたら」
羽衣姫は手を伸ばして悠の腕を掴んだ。

「死ぬわよん♪」
悠の身体が空中に舞う。次の瞬間、地面に叩き付けられた。
「か、はっ……」
「まだまだ子供ねぇん。心を揺らすなんて♪」
羽衣姫はくすりと微笑んだ。
「っの野郎！」
流星は小刀を振り上げて走り出した。
「ま、ヒーロー登場ねん♪　でもぉ」
羽衣姫の姿が視界から消える。
驚いて急停止する流星の背中に、衝撃が加えられた。
「ぐあっ！？」
「特攻はいただきないわねん♪」
背骨がミシィッと嫌な音を立てる。足が地面から離れたと思ったとたん、倒れ、突っ伏す結果になった。
「あはは、弱い弱い。人は何て脆いのかしら♪」
羽衣姫は長く豊かな髪を後ろに払った。
「さぁてぇ……あちらも片付きそうねん♪」
「っ……」
悠がガバッと起き上がった。
まだダメージから回復しきれてない流星は顔だけを上げる。
月読は鉄鞭姫に矢を向けていた。
鉄鞭姫はまだ動けないらしく、未だもがき続けている。呪印の浮かぶ手足首から血が流れていた。
「くそっ……くそっ……人間めがあぁぁ！」
憎悪の込められた声を聞いても、月読の表情は変わらなかった。
「目に焼き付けておきなさい、悠ちゃん♪」
羽衣姫は楽しそうに笑う。その声は酷く耳障りで、神経を逆撫でされるようだった。
「あれが、現在（いま）の椿　葵、月読ちゃんよ♪」

光の矢が放たれた。

矢は吸い込まれるように鉄鞭姫の左胸――心臓に突き刺さる。

鉄鞭姫は一瞬身体を強張らせた後、目を剥いた。

「お、の、れ……」

口から怨嗟の声がこぼれる。しかし矢が消えた瞬間、その身体から力が抜けた。

胸から血が流れるのと比例して、髪と瞳の色が元に戻っていく。

完全に戻った時には、忍の身体から生気は感じられなかった。

悠が目を見開く。流星もまた、その光景に閉口いた。

「あっはははは！　よくやったわぁん、月読ちゃん♪」

羽衣姫は唇を歪めた。

「そんな……何も殺すことねぇじゃねぇか！」

流星は憤りを口にした。

「敵は殺す。そのことの、どこが間違っているの？」

月読は冷めた目で流星を見返した。

「貴方が妖魔を狩ることと、何の大差があるというの？」

「っ……！」

流星は言葉を失った。

再び頭の中で、苦妃徒太夫の言葉がよみがえる。

『偽善者が！！』

繰り返されるその言葉。頭の中で、何度も、何度も。

「大差？　あぁ、確かに無いね」

悠が刀の切っ先を月読に向けた。

「でもね、私達は守るために妖魔を狩る。欲望と目的のために人を殺すおまえ達とは違う！」

悠の声は、吹っ切れたような、それていてまだ何か縛られているようなものだ。

しかし強い意志を秘めたそれは、流星の顔を上げさせるのには充分だった。
「月読。おまえが葵姉であろうと、もうそれは関係無い」
悠は凛とした表情を浮かべ、月読に言い放った。
「おまえは今から私の敵だ。それ以上にも、それ以下にもならない！」
とたん、軽やかな拍手が響き渡った。流星は思わず身体を強張らせる。
「素晴らしい宣言ねん♪」
いつの間にか月読の隣に移動した羽衣姫はにんまり笑う。
「姉妹が刃を交える……なんて美しい悲劇でしょぉん♪」
でも、と羽衣姫は右手を持ち上げた。手袋が槍のような形状になる。
まるで本物のように、黒い槍もどきはぎらりと輝いた。
「残念ね……ここでエンディングよん♪」
裂けるかと思うほどつり上がった口角に、流星はゾッとする。
「幕引きは、妾がしてあげる♪」
そう言って羽衣姫は槍を振り上げ――

ガギィィィィンッ

金属音が鳴り響いた。
白銀の刃が、羽衣姫の槍もどきを止めている。
悠の刀ではない。両刃の、細身の剣だ。
そしてそれを操っているのは、モノクロの服を着た少女だった。
スカートが広がった白いワンピースの上から、黒いレース付きベストを着ている。黒いニーソックスをはいており、靴はベルト付きの黒いローファーだった。
黒い髪を少年のように短くして、日本の花を模したらしい銀細工の髪飾りを付けたその姿は、まるで着飾った人形だ。

少女は幼さの残った愛らしい顔に似合わない、傲岸不遜な笑みを浮かべた。
「あらん？　貴女……」
羽衣姫の目が僅かに見開かれる。
少女は笑みを深めて羽衣姫の槍もどきを弾き返した。
後退させた羽衣姫を追いかけもせず、少女はだらんと両腕を下げる。

「幕引きはさせないよ」

声が発せられた。
少女の、ではない。声は何と、上空から聞こえてきたのだ。
「まだ、終わらせない」
二人の前に、降り立つ者が一人。こちらに向けた背中で、長い髪が風に舞った。
「だぁれ、貴女？」
「ハジメマシテ、羽衣姫。私は貴女の敵でです」
小首を傾げる羽衣姫に、彼女は堂々と言い放った。

第十五話　邪教徒<上>

現れたのは、一人の少女だった。
おそらく流星より年下。身長も悠と変わらない。
腰まで伸ばした亜麻色の髪をツインテールにしており、小造りの整った顔立ちをしている。肌は陶磁器のように白く、琥珀の少しつり上がった瞳はやたら大きい。
よくできた人形のような美少女の登場に、流星は戸惑う。
「え、誰……？」
流星が目を瞬いている間に、少女はミニスカートのポケットから何かを取り出した。
小さな、薄茶のボールだ。それが三つ、右手の指の間にはさまれる。
「退くよ」
少女はそう言ってボールを地面に叩き付けた。

ボフンッ

ボールが割れたと思った瞬間、煙が辺りにたち込めた。
「こっち！　早くっ」
少女の声と同時に、腕が引っ張られる。
否応無しに、流星は走り出すはめになった。

煙が晴れた時には、すでに悠達の姿は無い。
「逃げられましたね」

月読の言葉に、羽衣姫は「そうねぇん」と肩をすくめた。
「気配、たどれるぅ？」
「いえ……術か何かで完全に消したようですね」
月読は首を横に振った。
「残念。……興が冷めちゃったわん」
羽衣姫はつまらなそうに眉をひそめる。
「妾は帰るわ♪　後始末、お願いねん」
「はっ」
月読は深々と頭を下げた。顔を上げた時には、羽衣姫の姿は消えている。
辺りを見渡しても人はおらず、死体が二つ、転がっているだけだ。
「……おごりも慢心も無ければ生きていられたのに、馬鹿な子達……」
頬に熱いしずくが伝う。
「でも、私が一番愚かだわ」
嘆く声は、誰の耳にも届かなかった。

――――

路地裏を抜けたところで、少女はようやく足を止めた。
「ここまで来ればダイジョブね」
「……あのっ、さぁっ」
流星は汗だくの顔を上げた。
「手、離してくんねぇ？　つ、疲れたんだけど！」
「あ……ゴメン」
少女は今流星の存在に気付いたような顔をした後、パッと手を離した。
「あいかわらずだね」
単独で走っていた悠はクスリと笑った。
「傀儡姫（クグツヒメ）の操り方も様になってきてるじゃない」

「まぁね。道士……じゃない、コッチでは退魔師だっけ。その家の娘だしね」
少女は悠に笑い返し、流星に向き直った。
「バジメマシテ、流星サン。私、中国から来た李舜鈴（リ シュンリン）です。ヨロシク！」
「え、中国……？　ってことは中国人！？」
流星は目を見開いた。
「な、何で？　っていうか今、傀儡姫って……」
姫、と付くということは、姫シリーズということだろう。
しかし、この少女――舜鈴は武器など持ってなさそうだ。彼女の後ろに控えている短髪の少女は剣を持っているが……
（……待てよ）
流星はふと眉をひそめた。
悠が口にした名称は、傀儡姫。
傀儡……人形……？
「――！？」
流星は短髪少女を再度見、指差した。
「ま、まさかそれ、人形か！？」
「当たり。よくできてるでしょ」
「そういうレベルじゃねぇよ！」
流星は悠にそうツッコまずにはいられなかった。
「だいたい、姫シリーズは日本で造られたんだろ。何で中国人のその娘が持ってんだよ」
その意見に、少女二人は顔を見合わせ、悠が口を開いた。
「姫シリーズは長い年月を経て幾つか……ていうか大半が国外に流出したの。理由は一つ」
悠はぴっと人差し指を立てた。
「美術的価値が高いからだよ。部分解除されない限り危険は無いし、一般人から見ても相当な業物だからね。戦後、真価を知らない外国人なんかが国に持ち帰ってしまったの」

「江戸の鎖国以前にも、当時の中国やポルトガルとかに流れたりしてたらしいよ。日本国内では十五しか残ってないって聞いた」
舜鈴は肩をすくめた。
「何でそんなことに……。退魔武器って、凄ぇ重要なものじゃ」
「そこまでは、ね。ただ、当時は姫シリーズの大半は幕府や朝廷が所有していたとしか知らないし」
悠は流星にそう言って、舜鈴に向き直った。
「……で？　さっきの羽衣姫に対する発言から察するに、一緒に戦ってくれるの？」
「勿論。ヨロシクネ、悠チャン」
舜鈴はにっこり微笑んで手を差し出した。

舜鈴の術で気配を消しながら椿家に戻ると、いきなり怒号に迎えられた。
「いない、だと！？　そんなはずない！」
焦ったような言い振りに、流星は耳鳴りする耳を押さえて「何だ？」と間抜けな声を上げる。
山を自力で登った疲れを忘れてしまうほどの驚きに固まっていると、また声が空気を震わせた。
「確かに来たはずだ、うちの人柱と姫持ちがっ」
「だから今外出中で……あ」
玄関の方へ行ってみると、壮年をとうに過ぎた男と刀弥が口論している。刀弥の方はこちらを見てほっと息をついた。
「おまえら帰ってきたのか！　今笹宮家の使いが……あれ？　舜鈴？」
刀弥は舜鈴を見て目を丸くした。
「何で日本に……それに笹宮兄妹は？」
そのことを訊かれ、流星は思わず下を向いた。
「刀兄、二人は……死んだよ」

悠は前に出て、冷静な顔付きを見せた。
「羽衣姫と月読に、殺されたんだ」
「なっ……」
刀弥は目を見開いた。
「本当か!?　それに月読って確か……」
刀弥は途中で言葉を濁した。
一方、刀弥にまくしたてていた男性は両膝を着く。
「……もう、終わりだ」
頭を抱え、瞳を揺らす姿は情けないと思うと同時に……妙な恐怖感を流星に与えた。
「わ、私達は……みんな殺されるんだ……羽衣姫に、全員が……」
「震える前に、やるべきことがあるのでは?」
突然響いた声に、全員そちらを見た。
恭弥だ。玄関から出てきて、男をじっと見下ろしている。
「羽衣姫の性格上、人柱を殺したから笹宮家を襲わない、という考えは無いでしょう。この戦いを派手に演出するために襲撃を行うはず」
恭弥は厳しい表情で男の目を見つめた。男の震えがぴたっと止まる。
「すでに僕から逃げるよう連絡しました。貴方は彼らと合流してください」
「いや、私は、その……解り、ました……」
男は立ち上がって門の方へ走っていった。
車は?　と問いかける刀弥にいい、と返し男はそのまま帰っていく。
「……解ったのか?　人柱が死んだこと」
刀弥に問われ、恭弥は顎を引いた。
「人数が減ったせいだろう。羽衣姫の力を強く感じるようになった。

人柱のことも……」
恭弥は軽く目を伏せ、再び開けた時には舜鈴と向き直った。
「……久しぶりだな、舜鈴」
「っ……」
恭弥が微笑を浮かべると、舜鈴の肩がぷるぷると震えた。
顔をうつむかせ、地面を見つめる舜鈴を流星は不思議に思い、声をかけようとして――

「会いたかった、恭弥ぁ！」

――危うく吹っ飛ばされそうになった。
舜鈴はいきなり顔を上げ、地面を蹴ったのだ。近くにいた流星は、その勢いで彼女とぶつかりそうになったのである。
そんなこと気付いていない舜鈴は、そのまま恭弥に抱き付いた。
「元気だった？　怪我とか病気とかしてない？　勉強うまくいってる？」
「あぁ、大丈夫だ。大丈夫だから……どいてほしいんだが。これじゃ動けない」
首に腕を回されてる状態では、誰だって動けない。
それに気付いたのか、舜鈴は目をぱちぱちさせた後、そっと離れた。
「ゴメン……つい嬉しくって」
「まぁ……今まで電話やメールだけだったからな。……ん？　流星、どうした？」
固まっている流星に気付いた恭弥は首を傾げた。
「……どういう関係？」
「何が」
「おまえら」
「どういうって」
舜鈴は恭弥の右手を掴み、ぐいっと引っ張った。

よろめいた恭弥の唇に、素早く自分のそれを重ねる。
「こういう関係」
ハートマークが付きそうな言葉に、流星は再び固まった。
「……まぁいわゆる恋人関係だ」
補足するように恭弥が説明する。照れているのか、頬がほんのり赤い。
口を開閉させている流星に対し、悠はどこまでも冷静な声音で言った。
「それで、今後の対策はどうするの？」
ぴりっと空気が引き締まった。
「……まずは居間に全員集めよう。次に狙われるのはどこか、検討付けなきゃな」
「あ、そのことなんだが」
刀弥の言葉に、恭弥が真っ先に口を開いた。
「おおよその見当は付いている。候補は……二家だ」
「明日葉（アシタバ）家と伊吹（イブキ）家？」
日影は目を瞬いた。
「根拠を話してくれるか？」
風馬は恭弥に尋ねた。
大広間。椿三兄妹と流星、桐生家の面々が座布団の上に座って向き合っていた。
猛はまだ体調が悪いため不参加、燐は仁奈が心配するから、ということで帰ったらしい。
「兄の話では、羽衣姫はこの戦いを劇に見立てているようです」
恭弥は話始めた。隣には舜鈴が当たり前のように座っている。
「そして、襲われた人柱を順番に並べると、実力順で並んでいる」
恭弥は後ろに控えていた氷華から大きめの紙とボールペンを受け取り、そこに襲撃された家名を書く。

「桐生家、梅見家の人柱はまだ子供で、橘家は老齢だった。兆候も現れ始めてたそうです。笹宮家の人柱も、全体的に見れば実力は低い」

「つまり、実力が低い順に襲われてんの？」

雷雲は身を乗り出した。

「あぁ。それだけじゃない。これを見てほしい」

今度は地図を広げる恭弥。どうやらここ周辺のものらしい。

「ここが桐生家、ここが梅見家、笹宮家、明日葉家、伊吹家……」

恭弥は地図に丸を書き込んでいく。

「……そしてここが椿家。これを線で繋ぐと」

スッと線が描かれる。その途中で悠がハッとしたように「らせん」と呟いた。

「そう、悠の言う通り」

描き終えた恭弥は顔を上げた。

「桐生家から内側に向かうように、渦を巻いて存在しているんだ、人柱を持つ家は」

地図上に描かれた渦を見つめ、皆黙り込んだ。

「これはどうやら、龍脈などを考慮しての結果らしい。封印との関係は謎だが」

全員が顔を見合わせる中で、流星だけがおいてきぼりの気分だった。

「な、なぁ……龍脈って何？」

流星がぼそぼそと尋ねると、悠は目を瞬いた。

「……大地に流れる、力の流れだよ。確か風水にも使われてたはずだけど」

「ふ、ふぅん……」

聞いてもよく解らなかった。

「それにしても、龍脈で守られている家を離れるのは、かえって危険だね」

悠の言葉に、恭弥は頷いた。

「あぁ。逃げたとして、安全な場所を確保できる可能性は低い。だから……迎え撃つしかない」
恭弥は地図を指でとん、と叩いた。
「反撃の糸口が掴めない今、守りに徹するしかない。戦力を集中させ、人柱を守る」
細い指がススッと移動する。
「そしておそらく奴らの次の狙いは……ほぼ隣り合ってるこの二家だ」
恭弥の指が、二つの点を突いた。

邪教徒<中>

今日が日曜日でよかったと思う。
若菜の小言を電話で聞かなくてすむのだから。
流星は軒先に座りながら背筋をうん、と伸ばした。
明日葉家の屋敷。例に洩れず、山の中の日本庭園を誇る豪邸である。
細部は異なるものの、造りは椿家の屋敷に似ていた。
（二分して護衛かぁ……）
流星は昨日のことを思い出した。

恭弥の提案で、椿家と桐生家の手勢を二分することになった。
勿論、椿家の護りのことがあるのでそう割けるわけがない。
なので、悠、流星、桐生家の生き残り組と猛、そして舜鈴がそれぞれ二分して護衛に当たることになった。
明日葉家は流星、日影、雷雲、風馬。伊吹家は悠と流亜、舜鈴と猛が担当することになる。
これは恭弥ではなく、悠が提案した振り分けだ。自分と悠が別々なのが気に入らないが、何か考えがあるのだろうと無理矢理納得している。
しかし桐生家の裏切り者が解ってない今、自分はかなり危ない状況に置かれていると言えた。

（あの三人の内の誰かが裏切り者なのに俺一人とか……せめて朱華がいてくれたって）
「どうしたの？　頭抱えて」

「ぅわっ！？」
背後から声をかけられ、流星は飛び上がった。
「ひ、ひひひ日影さん……」
「そんな驚かなくても。あと呼び捨てでいいわよ。私の方が年下だし」
日影は自分の顔を指差した。
「私十六。貴方十七でしょ」
「ま、まぁ……つうか年下に思えねぇんだけど」
流星は目をあらぬ方向に向けながら頬をかいた。
流星はまだ、日影裏切り者説を捨てていない。過剰に驚いたのもそのためだ。
（もし日影……が裏切り者なら、俺なんか簡単に殺られる）
流星はごくっとつばを飲み込んだ。
とりあえず気を緩めず、彼女が裏切り者かどうか判断するために幾つか質問をぶつけることにした。
「あの、さ」
「ん？」
流星の隣に座った日影は首を傾げる。
「何？」
「あー……妖偽教団のこと、どう思う？」
いい質問が思い浮かばず、そんな突拍子も無い質問になってしまった。
「妖偽教団の、こと？」
案の定、日影は目を丸くする。しかしややあって口を開いた。
「ある意味、存在しても仕方無いものかもね」
「え？」
流星は膝を強く握って眉をひそめた。
「どういう意味だよ」
「光があれば闇があるように、善があれば悪がある。つまり、どんなものにだって対極なものがあるものよ」

日影の言いたいことが解らず、流星は眉間にしわを寄せた。
「平和を願う人達がいる一方で、悲劇を求める人がいる。妖偽教団は、後者の集まりなのよ」
「……」
「別に奴らのやってることを肯定してるわけじゃないよ。ただ平和を望む人がいる一方で、全然別のことを望む人がいる」
日影は空を仰いだ。昼の空には、かすんだ雲が幾つか浮かんでいる。
「なぜかいつも釣り合っているのよ。光が濃くなるほど……人々の希望が増すほど、闇も色濃く、絶望も増す」
「それって……妖魔の数にも影響してるんじゃねぇのか？」
流星はふと気付いたことを口にした。
「妖魔は人の闇から生まれる。光が濃くなると闇も濃くなるなら、妖魔の数も……」
「ええ、増えるわよ。よく昔より今の方が平和になったっていうけど、現代だって、めくってみたら底無しの闇がある」
日影は軽く目を伏せた。
「人が増えれば闇も増す。正味の話、昔より現代の方が強いわよ、妖魔」
「マジ！？」
流星はゾッとした。
これから更に強く恐ろしい妖魔と出会うかもしれないと思うと、生きた心地がしない。
「で、でも何で……？」
「原因の一つは平和ボケね」
日影は肩をすくめた。
「平和に慣れ過ぎたのよ、人は。不幸や悲劇もどこか遠いことに感じて、自分には起こらないと思い込んでる」
日影の話に、流星は聞き入っていた。当初の目的は完璧に忘れている。

「でももし自分にそれらが振りかかったら、現代人は絶望するわ。どうして自分だけってね。貴方にも覚えがあるんじゃない？」
「へっ……？」
流星はいきなりの問いかけに間抜けな声を出した。
「何言って……」
「聞いたの、貴方のこと。一夜で家族を全員失って……思ったんじゃない？　どうして自分だけって」
「……」
言葉が出てこなかった。全くその通りだからだ。
ニュースや新聞で誰かが死んだと聞いても、人が死んだという実感は湧かない。
誰が誰を殺したと聞いても、それをその日の出来事として片付けていた。
今思うと、自分の周りでそんなことは起こり得ないと過信していたのかもしれない。
日常が壊れる可能性も、何かを失う可能性も考えてなかったのかもしれない。
だからこそ、家族の死に何もかもが壊れたかのような錯覚を起こしたのだ。
内側から信じていたものが喰い破られる感覚は、忘れたくても忘れられない。
あれが絶望というなら、妖魔は。
「妖魔は、永遠に消えてなくなったりしないのか。ずっと、あの化物達は存在し続けるのか」
意識して口についた言葉ではない。しかし日影は、それを質問だと思ったらしい。
少し考える素振りを見せた後口を開いた。
「一つだけ、妖魔を消す方法があるけど」
「！　本当か？」
流星は顔を上げて、日影の次の言葉を待った。

日影の唇が動く。

「人がいなくなれば、妖魔もいなくなるわ」

流星の背筋が凍った。

日影の言葉に、そして表情に、感情が込もってないように見えたからだ。

流星の中で、また猜疑心が目覚める。膝を握る手に力が込もった。

「……日影は」

喉がからからに渇いている。流星は唇を湿らせた。

「日影は、流亜と離れて何をしてたんだ？」

「え？」

日影は目を丸くした。

「一昨日、流亜が言ってたんだ。あんたが急にいなくなったって。どこ行ってたんだ？」

「ちょっと華鳳院君。何か勘違いしてない？」

日影はむっとしたような表情をした。

「急にいなくなったのは、流亜の方よ」

「は……？」

「だから、流亜がどっか行っちゃったんだって」

日影は額を押さえてため息をついた。

「探そうとしたらゾンビ達に阻まれるし、気付いたら雷雲と風馬がいるポイントに押しやられてたし、おまけにいつの間にか流亜は悠と合流してて」

「ちょっ、待てよ！　いなくなったのは流亜の方なのか？」

慌てて尋ねると、日影は細い顎を引いた。

「そうよ。でも、それがどうかしたの？」

「それは……」

流星は口ごもりながらも必死で考えた。

（いなくなったのは流亜の方？　でもそれが嘘の可能性も……だけ

ど、雷雲や風馬と一緒に戻ってきたのは事実だ）
流星は額を押さえた。
（雷雲達もグルってことは？　裏切り者は一人とは限らないし……。
でも、もし本当なら？）
流星はサッと青ざめた。
思い至った結論は、日影が裏切り者であるよりも悪いかもしれない。
「……？　華鳳院君どうし」

パリィィィィィィィィンッ

日影の言葉を遮るようにガラスが壊れたような音が響き渡った。
「な、何だ！？」
流星は空を仰ぎ見た。
「これは……結界が破られた音だわ！」
残響に負けないようにか、日影は声を張り上げた。
「来たのかっ」
流星はホルダーから小刀を抜いた。
「人柱を討たれるわけにはいかないわ。行きましょ！」
「おう！」
二人が立ち上がって走りだそうとした時だった。

「行かせないわよ」

二人の両手足に、黒い髪が巻き付いた。

――――

悠は伊吹家の庭にある松の木にもたれかかっていた。
「……だから！　何で俺だけ伊吹家護衛なんだよっ」

流亜はいらいらしたように頭をかきむしった。
「俺と流星って奴を入れ換えりゃあいいだろ？　こういうのはチームワークが必要だから、俺は日影達と行動すべきだっ」
「落ち着いてくださいよ」
たえらなくなったのか、猛が慌てて止めに入った。
「悠には悠の考えがあんだって。な、悠！」
振り返った猛に言われ、悠は肩をすくめる。
「さぁ？　どうかな」
「秘密主義者なのもあいかわらずネ」
舜鈴が空を見上げながら言った。
「何か視える？」
訊くと、舜鈴は視線を動かさずに顎を引いた。
「明日葉家の方……襲撃始まったみたい」

『……！』

流亜と猛が目を見開いた。
「最初の狙いはあっちか！」
猛が呻くと同時に、流亜は走り出す。
「どこ行くの？」
悠が尋ねると、流亜は足を止めて振り返った。
「明日葉家に決まってんだろ！　日影達が心配だし、それに」

「今度こそ日影達を殺すつもり？」

場が静まった。
目と口をめいっぱい開けた流亜に、悠は更に言葉を投げかける。
「それとも、ここを手薄にして同時襲撃させるつもり？」
「ちょっ、待てって！　何の話だ？」
流亜は悠の言葉を遮った。

「何だそれ。俺が裏切り者とでも言いたいのかよっ」
流亜は悠に詰め寄る。
「もし俺が裏切り者なら！　自分からその存在を教えるわけねぇだろっ。第一証拠は！？」
「証拠は無いよ。でも」
悠は余裕の表情を崩さないまま、胸の前で腕を組んだ。
「証拠が無いことが、逆に証拠になっている」
「何っ……！？」
「朱華に生き残り組のことを調べさせた。でも偽の情報が多くて判断できなかった。唯一、君を除いてはね」
悠は流亜の目を覗き込んだ。流亜の瞳に動揺が走る。
「多分他の生き残りに疑いをかけたかったんだろうけど、ミスったね。自分にも偽情報を付けるべきだった」
悠が見つめる目に力を込めると、流亜は後ずさった。
顔には汗が浮かび、瞳をきょときょとと落ち着かなく動かしている。
「それから……例えば猛」
「え、お、俺？」
いきなり名指しされ、猛は目を瞬かせた。
「君の知る桐生　流亜ってどんな人？」
「どんなって……」
猛は一瞬眉をひそめた後、口を開いた。
「一言で言うと、破壊主義っつーか……妖魔を狩ることに快楽を見出してるみたいな……妖偽教団のやることにも、何でか好意的だったし」
実に言いにくそうだが、それはまぎれもない事実だ。
悠の記憶でも、流亜にはそういう傾向があった。
「猛の言う通り。でもこの戦いでは、そんな様子無かった」
「それは……改心したんだよ。自分の考えが間違ってたって」
「人間の本質はそう簡単に変えられないものだよ」

悠はじろりと流亜を睨んだ。
「何か本人にとってショックなできごとが起きない限りね。でもそんなこと無かったはず」
「っ……」
「それに昨日」
悠が言葉を重ねるごとに、流亜の視線は下に向いていく。
もうここからではどんな表情か解らなかった。
「私が裏切った奴らは妖魔に喰われたんじゃないかって言った時、それは無いって断言したよね」
「……」
「なぜ断言できたか。それは、君が裏切った奴らがどうしているか知ってるからでしょ？　そしてそれを知ることができたのは」
悠は指先を流亜に付き付けた。
「君もまた、裏切り者だからだ」
「……」
流亜の肩がふるふると震えた。ばれたことに対する緊張からなのか……または別の理由なのか。
「あとこれは私の推測だけど、これらの計画は君一人で考えたことなんじゃないの？」
悠の言葉は7なおも続いた。
「妖偽教団が考えたにしてはずさん過ぎる。さっき上げた点から見て、おそらく自分で計画を立て、自ら桐生家を裏切ったんだ」
違う？　と小首を傾げて見せる悠を前に、流亜の口から嗚咽がもれた。
いや、嗚咽ではない。
喉奥から絞り出すようなこの声は――
「……プハァハハハハハハ！」
流亜は突然顔を上げ、笑いだした。

「さすが椿の姫！　よく解ったな。いつから感付いてた？」
「あの村のことはともかく、裏切り者に関しては敵が言うはずが無い。知られてない方が動きやすいからね。私達を疑心暗鬼にするための作戦だったんだろうけど」
悠は髪を後ろに払った。
「なるほど……最初からか」
流亜は嫌な笑みを張り付けたまま唸る。
「無駄が多過ぎたんだよ」
悠は木に立てかけてあった刀を手に取った。
「じゃ、あの女の人が言ってた桐の裏切り者ってのも、疑いを他の奴らに向けるため？」
猛の言葉に、流亜は片眉を上げた。
「女？　誰のことを言ってんだ。さっき悠が指摘した通り、このことは俺が一人でやったことだぜ。協力者はいない」
「え。じゃあ、あれは……」
「それより」
猛を遮り、悠は刀の鞘を掴んだ。
「一つ訊きたい。なぜ桐生家を裏切った？」
「……なぜ？」
流亜はにいぃっと唇を歪ませた。
「妖偽教団に入りたかったからに決まってんだろ！　ずっと憧れてたんだ……」
流亜の目がすぅっと細められる。
「壊す、奪う、殺す。サイッコーじゃないか。人間のあるべき姿。快楽だよ」
言ってる間に、流亜の骨格がごきりと歪んだ。

ゴキッメキッグキィッ

耳を塞ぎたくなるような音が鼓膜を震わす。

こちらの異変に気付いたのか、辺りから様々な声が上がった。
「どうした!?」
「半妖だ、桐生家の者が半妖に!」
「そんな、我々を裏切ったのか!?」
ざわめく周囲。中庭だったため、動揺の波はすぐ広がった。
その間にも、流亜の身体は変形していく。
上半身の筋肉は膨張し、爪は猛獣のように鋭く、そして黒くなる。
口は耳まで裂け、やすりのような歯が見え隠れした。
瞳は血色に変色し、露出した肌に黒い毛がざあっと広がる。獣じみてきた顔は更に獣に近付いた。
「狼……?」
舜鈴が呟く通り、上半身は狂暴な狼のそれだった。下半身はそのままなので、酷くアンバランスだが。
「おいおい満月どころか夜でもないのに狼男出現かよ」
猛は軽口を叩きながら槍を構えた。
「待って、猛」
悠は刀を抜かないまま制止をかけた。
「こいつは私が狩る」
「……ハァ?」
流亜は鼻を鳴らした。
「刀鞘になおしたまま俺と戦うのか?」
まるで獣の咆哮のような声だ。人の名残があるため、聞き取れなくはないが。
「もう一つ訊きたいんだけど」
それらを総無視して、悠は刀を左手に持ち替えた。
「おまえ、桐生家の人を喰った?」
視界の端で、猛と舜鈴の顔が強張るのが見えた。同時に、流亜の唇がめくれあがる。
「あぁ、喰った。うまかったぜ」
「……そう」

悠は刀を握る手に力を込め、歩き出した。
「おいおい歩きかよ。せめて走るか刀抜けよ」
「……」
悠は答えない。足も止めない。
「俺を殺す気あんの？　まさか素手で勝てるとか考えてんじゃねぇよな」
「……」
悠は唇すら動かさない。
そのまま――

流亜の脇を通り過ぎた。

「……おい」
いらだちを含んだ声を上げ、流亜が振り返った。
「何だよ、逃げんのか？」
「……逃げる？」
悠は刀を収めながら流亜から少し離れた場所で立ち止まった。
「もう終わったよ」
チン、と刃が鞘に収まりきったとたん。

流亜の上半身と下半身が離れた。

獣顔に呆然とした表情が張り付く。
上半身が地面に落ちたとたん、その顔に苦悶の表情が浮かんだ。
「てめえぇぇぇぇぇ！　何、しやがった……！」
「四の手――風抜斬（フウバッザン）。あえて解説を付けるならそうだね、居合抜きの進化形ってところかな」
悠は冷厳な声で流亜に言い放った。
「苦しみながら死ね、裏切り者」

邪教徒<下>

ぎりぎり腕を締め付ける黒い糸――否、黒い髪に、流星は目を見開く。

「これは……まさか！」

視線を巡らせれば、見覚えのある女が髪を生き物のようにくねらせて立っていた。

「苦妃徒太夫（クピトダユウ）……！」

「やぁ。おとといはどうも、坊や」

苦妃徒太夫の白い顔に青黒い鱗が浮かび上がる。

「おまえを殺す！」

ぶわっと髪が広がり、流星と日影の全身に巻き付いた。

外そうともがくが、腕も足もほとんど動かない。それどころか、更に強く締め付けられた。

「がっ、はっ……」

髪は首にまで絡み付き、気管を抑え込まれる。

酸素が脳まで行き届かず、意識がもうろうとしてきた。

「っく。この！」

日影の声が聞こえてきた瞬間、突然呼吸ができるようになった。

「っげほ、げほげほっ」

流星はせき込んで膝を着いた。喉をさすりながら辺りを見渡すと、黒い髪が地面にバラバラに散っている。

視線を上に上げると、扇を前へ垂直に構えた日影が立っていた。

「大丈夫？　華鳳院君」

「大丈夫。大丈夫だけど……」

流星は恐る恐る苦妃徒太夫を見た。
おととといの戦いで、髪を傷付けられて怒り狂う彼女の姿を思い出したのだ。
……やはりというべきか、苦妃徒太夫は確かに怒っていた。
だが、おととといとは怒り方が違う。
「小娘ぇぇ……よくもあたしの髪を！」
半妖としての本性が剥き出しになってきた。
うろこは顔だけでなく露出した肌全体に広がり、口の端が耳まで裂ける。瞳は金色に輝き、白目部分は黒く染まった。
「許さない。おまえらまとめて絞め殺してやる！」
口から細く鋭い歯が見え、蛇のような舌がちろちろ揺れた。
「妖偽教団ね。悪いけど、負けるわけにはいかないわよ！」
日影は扇を広げた。
「『桧扇姫』、部分解除！」
扇を振り上げ、風を巻き起こすように前方にあおいだ。
「第六の舞、風牙乱舞（フウガランブ）！」
扇から大量のかまいたちが発生した。
真っ直ぐ苦妃徒太夫を狙った攻撃は、しかし長い髪に全て弾かれてしまう。
「この程度であたしは倒せないわよっ」
ぶわっと髪が逆立った。
髪が一本に集束する。全てが集まり終えると、ぐんっと日影に迫った。
何度も突き出される髪の槍。日影は全て紙一重でかわしていた。
流星はその隙に移動する。苦妃徒太夫の背後に回ったところで地面を蹴った。
足音に気付いたのか、苦妃徒太夫はすぐさま振り返る。すでに流星は眼前まで迫っていた。
流星はそのまま小刀を降り下ろす――

「あたしを殺せるの？」

炎の刃が、苦妃徒太夫に当たる寸前で止まった。

「その甘い心で、緩んだ覚悟で！　あたしを斬れるの？」

「それ、は……」

流星は動けなかった。

刃先が震えている。これを動かせば、苦妃徒太夫を倒せるのに。

なのに……それができない。

「華鳳院君！」

日影の声に流星は我に返る。

ドスッ

腹を何かが通過するのを感じた。

「……え……？」

間の抜けた声を出す。同時に激痛が全身を駆け巡った。

「ぐ、あ〝ぁ、あ……！？」

流星は膝を着く。ズボンが己の血で染まっていった。

穴の開けられた腹。それを開けたのは、背中まで貫通する黒い髪の束だった。

「弱いね、坊や」

苦妃徒太夫の唇がめくれ上がった。

ずるり、と髪が抜けると、流星は崩れ倒れた。

「弱い奴は戦場に立つな」

苦妃徒太夫の声がぐらぐらと脳を揺さぶる。

（痛い、痛い、痛い、痛い）

視線が歪んだ。失血のせいだけではない。

（……こわ、い）

流星は血塊を吐き出した。

「よくもっ」

日影の声と、地面が削れる音が聞こえた。
顔を上げると、日影が扇を苦妃徒太夫に向かって振り上げたのが目に映った。
苦妃徒太夫は髪でそれを受け止めるが、底に厚い黒い下駄を滑らせて後退させられる。
「彼のこと、親友に頼まれてんのよっ」
日影は勢いを落とさず、足を旋回させた。
しかし苦妃徒太夫の髪に絡み付かれ、流星の横に叩き付けられる。
「かっ、は……！」
日影は身体をバウンドさせて倒れた。
「だ、大丈夫、か？」
「えぇ……あの女、強いわ」
日影は全身を震わせながら身体を起こした。

ドガアァァァァァァァァァァッ

いきなり家屋の一部が吹き飛んだ。
こなごなにぶっ飛んだ木材と一緒に、なぜか妖魔達も飛んでくる。
それから遅れて、二つの人影が視界に入ってきた。
「！　日影にあんちゃんっ」
雷雲と風馬だ。さっきまで戦っていたんだろう。それぞれ武器を手にしている。
「……！　おいその傷っ」
風馬がみなまで言い終わらない内に――

「もういいぞ、苦妃徒！」

男の声がした。聞いたことない、若い男の声だ。
流星が上空に目を向けると、空中に浮かぶ青年の姿が見えた。
黒い髪に赤いメッシュを入れており、鎖やダメージ加工がされた

革製の上着とズボンを着ている。左頬に黒い龍の刺青まで入れていた。
「遅いじゃない！　誘きだすのも時間かかったしっ」
「悪ィって。木の上に登れ」
男に言われ、苦妃徒太夫は顔を歪めつつも手近の木に飛び乗った。
「何をするつもりだ！？」
風馬が声を上げると、青年はにやっと笑った。
「地獄への切符をやろうと思ってな」
突然だった。

足がぐにゃりと地面にめり込んだ。

全員目を剥く。
足はまるで泥に突っ込んだかのようにずぶずぶ沈んでいく。
「何、何だよこれっ」
雷雲が叫び声を上げた。
「ぬ、抜けない……！」
風馬ももがくが、足はぴくりとも動いていない。もう腰辺りまで埋まっている。
流星と日影は倒れていたため、すでに身体の半分が沈んでいた。
「嫌、何これ！？」
日影は悲鳴を上げて右腕を伸ばした。
流星は傷のせいで動くことすらできない。
ただ、見えなくなった足に這い上がる嫌な感覚に顔をひきつらせた。
「う……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
気持ち悪い。見えなくなった身体に、何かが絡み付いている。
背筋が逆撫でされ、全身に鳥肌が立った。
「嫌、嫌だ！」
もはや首まで沈んでしまっている。出ているのは顔と武器を持っ

た右腕だけだ。
「だ、れか……」
流星はそれ以上喋れなかった。
全身が、土の中へ沈んだからだ。

――――

沈む、沈む、沈む。
（ここは、どこだ……？）
流星はぼうっとする頭を動かした。
腹の傷はまだ痛むが、なぜか先程ではない。
目に映るのは黒ばかりで、他の色は見当たらない。
（一体、ここは……）
入る時はあんなに嫌な感じがしたのに、今は何ともない。
「日影！　雷雲！　風馬さん！」
大声で呼びかけても返事は返ってこない。
流星は途方にくれた――

『助ケテ』

声がした。
何重もの声が重なったそれに、流星はゾッとする。桐生家の三人でないことは確かだった。
全身がざわざわして、血が凍り付くような感覚に思わず小刀を握り直した。
『助ケテ』
無数に繰り返される単語に、流星は耳を塞ぎたくなった。

しかし手足は硬直したように動かない。
目を見開く流星の前に、一つの顔が現れた。
男の顔だ。ざんばらの髪で頬はこけているため、皮が張り付いた骸骨のようだ。
男は地色の涙を流してぼろぼろの歯が並んだ口を動かした。
『助ケテ』

視線を感じた。

四方八方から大量の目玉に見られるような視線。
それは気のせいではなく、事実多くの目がこちらを見ていた。
視線に隙間無く収まった無数の顔。ズラリと並んだそれらは闇色だった空間を土気色に変える。
前方でこれなのだから、後方も同じことになっているだろう。そう思いつつ確かめる気にはなれなかった。
無数の顔は女だったり男だったりしたが、皆共通して目から紅い涙を流していた。
全員幽鬼のような顔をしていて、中には頭が割れていたり顔が半分ただれている者もいる。
『助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ助ケテ』
今度は無数の手が伸びてきた。
顔と同じく、血の通ってなさそうな腕。やはりただれていたり肉がざっくりえぐられていたりして、骨が見えるものもあった。
それらの腕は流星の腕や足を掴み、顔を引き寄せる。
「や、やめろ……来るな！」
流星はたまらなくなって叫んだ。
まるで亡者だ。生を失い、朽ちていく死者のようだ。

ガブッ

突然右肩に激痛が走った。
痛みに驚いて肩を見ると、顔の一つが噛み付いている。
肩に血がにじむ。呆然としている間に顔達は流星に噛み付かんと大口を開けた。
漂う臭気、虚ろな目、血の気の無い顔。
全部違う。全部人じゃない。全部生者じゃない！
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
噛み付かれる感覚を全身に感じながら、流星は叫んだ。
（嫌だ、死にたくない、嫌だ、嫌だ、嫌だ！）
流星はもがき、前に――

バンッ

顔達や腕達が吹き飛んだ。
先程まであったものの消失に、流星は目を見開く。
前方にぽっかりと穴が開き、最初に来た時と同様の闇が向こう側に広がっている。
その開いた穴から、白い手が伸びてきた。
亡者の腕が離れ、自由になった流星の二の腕を掴む。その手に、流星は見覚えがあった。
しかしどこで見たかなんて覚えているわけ無いし、そもそもその手の持ち主の顔が見えない。
「だ、だれっ、誰っ……」
「死なれては困る」
はっきりした声。流星はハッとした。
（もしかして……）
口を開こうとしたとたん、ぐいっと引っ張られた。

――――

雨が全身を打ってる。
見上げる空は灰色で、湿っぽい臭いが鼻についた。
「戻っ、た……？」
流星は上体を起こした。肩がずきりと痛み、見ると血が肩から流れている。
他の手足も似たような状態で、ただなぜか貫かれたはずの腹の傷だけは塞がっていた。
「あれは夢じゃ……ない……？」
身体を喰いちぎられる感覚を思い出し、流星はゾッとした。
なんとか立ち上がって辺りを見渡す。
「日影……雷雲……風馬……」
共に地面の中に沈んでいた三人も、自分と同じように倒れていた。
全身が血だらけで、生きてるかどうかさえ疑わしい。
流星は目を家屋の方に向けて愕然とした。

そこに、家屋は無かった。

焼けた木材。溶けた何かの塊。
そして、折り重なる死体、死体、死体。
あるのは、戦場の光景だった。
「誰も、いない……？　誰も……？」
流星は前に足を踏み出した。
悠からもらった数珠がほどけて地面に散らばる。しかし、呆然とする流星は気付かない。
傷の痛みも忘れ、流星は足を進めた。
目に映るのは死体ばかりで、生きている者は見あたらない。
それを見ているうち、流星の心の中で何かが積み重なっていった。
数分ほど歩いて、流星は足を止める。
人を見つけたのだ。しかし、流星が望む存在ではなかった。

「あらん？　貴方、地獄に沈められちゃったんじゃなかったのぉ？」
黒衣の女。根元的な恐怖を呼び起こす美貌。
「羽衣、姫」
しかし、今の流星にとってはただの『動くもの』でしかなかった。
それに彼女の足元に転がっているものは、けっして好ましいものではない。
「何を、していた」
地面に染み込んでいる血。
「何を、持っている」
散らばった肉片。
「何を……何を喰っていた！」
噛み砕かれた、骨。
「何って……人♪」
にっこり笑うその姿が、足元に散乱しているバラバラの死体が、流星の中で何かを切った。

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォッ

小刀の刃に宿る炎が膨れ上がった。
しかしそれはいつもの赤い炎ではなく、黒い禍々しいものだった。
流星は気付いていなかった。自分の瞳が黒から、細い瞳孔を持った紅になっていったことに。

羽衣姫は目の前の青年を凝視した。
「予想外だわん……この時代にもいたなんて♪」
その顔に焦りや動揺は無く、むしろ歓喜が浮かんでいた。
青年の姿をなめるように見つめ、ほうっとため息をつく。
雨の中でも勢いが衰えない黒い炎、ギラギラ輝く血色の瞳、口から覗く犬歯は鋭く延び始めている。

「まさか敵の中にいるとはね……鬼童子（オニドウジ）♪」

羽衣姫の歓声が曇天に響く。

雨は、土砂降りになっていた。

第十六話　鬼童子<上>

流星の祖父は、古い地獄絵図を持っていた。
一度だけ、流星はそれを見せてもらったことがある。
裸の男や女を追いかけ、髪を掴み、道具を使ってすり潰す鬼の姿を、十五歳だった流星は気持ち悪いと言った。
薄い色合いの人間に対し、鬼や血、炎などはやけに鮮やかに描かれていて、気味悪く感じたのを覚えている。
「ていうか、幽霊はともかく鬼なんているわけないし。昔の人は何でこういうの信じたんだろうな」
そう肩をすくめた流星に、祖父は笑いながらも……その瞳には何かを隠すかのように光を灯していなかった。
それが何を意味するのかその時は解らなかったし、気にもしていなかった。
解るはずもないし、気付くはずもなかった。

自分が、『鬼』なんて。

――――

流星は羽衣姫の言っている意味が解らなかった。
（オニドウジ？　何だ、それ）
だが今の流星にとってはどうでもいいことだった。
怒りに身を任せ、小刀を振るう。
羽衣姫は服の一部を盾のようなものに変形させ、炎のかまいたち

を受け止めた。
すかさず流星は黒い炎を刃の形にし、羽衣姫との間合いを詰めた。
周りの風景がかすむのを目の端で捉えながらも、脇目もふらずに走る。
炎の刃と羽衣姫の右腕がぶつかり合った。
手袋で包まれた腕はまるで鋼鉄の義手のようにびくともしない。
それを流星は力で押し返そうとした。　羽衣姫は目を見開く。
いきなり押され始めたのだから当然だろう。
しかし羽衣姫は見た目に反する剛力で対抗してくる。
流星は更に力を入れ、無理矢理押し返した。
よろめいた羽衣姫に、流星は思いっきり体当たりする。
羽衣姫の身体が前方に吹っ飛んだのを見て、流星は間髪入れず炎のかまいたちを放った。
黒い炎は空中で膨れ上がり、羽衣姫自身を飲み込む。
バアァァァァァァァァンッ
炎が弾け飛んだ。
「いやん♪　この程度？」
透けるほど薄い、黒いボールの中にいる羽衣姫はにやっと笑った。
しゅるしゅるとボールがほどける。流星は姿がはっきり見えだした羽衣姫に向かって突っ込んだ。
「貴方と戦う気は無いのよねぇん」
羽衣姫は右手を持ち上げた。
手袋が鞭に変形し、生き物の如く動き出す。
羽衣姫は右手を振った。鞭はしなって空を切る。そのまま流星を打ち据えた。
「ガッ」
今度は流星が吹っ飛ばされる番だった。
ぬかるんだ地面に身体を叩き付けられ、肺の中の酸素を吐き出す

はめになった。
　服が水を含んで重く感じる。だが身体が冷える一方で、頭の中は酷く煮えたぎっていた。
「フーッ、フーッ、フーッ、フーッ」
　口から獣のような呼吸音を上げ、流星は立ち上がった。
　腰を低く落とし、両腕を何かを抱えるようにして構える様は、人の姿をほとんど保てなくなっていた。
「あらあらん♪　やっぱり初めはきついわよねぇん」
　羽衣姫はクスクス笑った。
　流星はすでに走り出している。形相はもはや、妖魔と形容するにふさわしかった。
「でも安心してね♪　妾がすぐ、コントロールする方法を教えてあげるからん」
　羽衣姫は両手を広げた。が。

　シュルシュルシュルシュルシュルシュルッ

　流星の身体に何かが巻き付いた。
　それは九本の銀毛の尾であり、その持ち主は。
「落ち着いてください、流星様」
　薄赤の瞳をした少女は獣耳と九本の尾を出しながら淡々と言った。
「あらん？　貴女は確か……」
　羽衣姫の顔から笑みが消えた。
「朱嵐。確か今はそんな名前よね」
「お久しぶりです」
　少女――朱嵐は軽く頭を下げた。
「未だ解らないわねぇん。狐の最高位である天狐でありながら、なぜ人に仕えているのか」
　羽衣姫はかくんと首を傾げた。
「椿家を守護することが、伯母の願いです。私は、貴女の方が解ら

ない」

朱華は流星を抑える尾の力を緩める様子無く言い放った。

「かつては日本を統べていた血筋の人間が、なぜこのような凶行を繰り返すほど堕ちてしまったのか」

「……！！」

朱華の言葉に、羽衣姫の目が大きく見開かれた。

「違う！　妾は人間なんかじゃない。落ちてもいない！　妾は羽衣姫。姫の名を冠する、最強にして最凶の存在！！」

「人の身体を借りなければ、かつての姿を取り戻すことすらできないのに」

朱華は右の手の平を着き出した。

「今なら、私の力で貴女の借りている身体を破壊することもできます。それが嫌というなら、この場は退きなさい」

羽衣姫は苦々しげに美貌を歪めた。

しかしふっと力を抜くと、口角をつり上げる。

「……まぁいいわん♪　今日は伊吹家の人柱も殺すつもりだしぃ。今日は下がってあげる♪」

羽衣姫は両手をさっと広げると、ふわりと浮かび上がった。

「でもぉ……妾を侮辱した罪は思いわよん？　いずれそれ相応の罰を与えてやるから覚悟しなさい♪」

フフフ……アハハハハハ！

高笑いを残し、羽衣姫はその場を鳥のように飛び去ってしまった。

朱華は抑え込んでいる流星を見つめた。

獣じみた声で叫び続ける流星は、人とはだいぶ違ってしまっている。

目は瞳だけでなく白目部分まで紅く染まり、犬歯はすでに牙と呼

べるまでになっていた。
腕や顔には太い血管が浮かんでおり、今にもいましめを解いてしまいそうである。
朱華はワンピースのポケットから数珠の珠を取り出した。糸は新しいが、珠は悠が渡した数珠のものだ。
朱華が口の中で呪を唱えると、珠と糸はすぅっと浮かび上がった。糸が珠の穴を通っていき、一繋ぎにする。それが流星の右手首に巻き付いた。
「ウガッ！？」
流星は一瞬硬直し、ゆるゆると力を抜いた。その間に、姿も平常に戻っていく。
完全に元に戻った時には、流星は地面に倒れ込んだ。気絶したらしい。
朱華は流星の拘束を解いて彼を背負った。それなりの体重だが、朱華にとってはどうってことない。
「……羽衣姫に目を付けられましたね」
朱華はぽつりと呟いた。
無論、聞こえていないことは解っている。それでも言わずにはいられなかった。
「流星様、貴方は生まれながらにして『鬼』を宿しているのです。貴方は人でありながら、妖魔になる可能性も秘めている」
足元の死体や降り続ける雨には目もくれず、朱華は歩を進める。
「人であるか鬼であるか。……選ぶのは貴方ですが、お覚悟を」
朱華の声は、終始淡々としていた。
「おそらくもう、平穏な学生生活はできません」

流星は目を見開いた。
朱華に背負われながら、シャツが雨以外でじっとりと濡れるのが解る。

（鬼？　妖魔？　誰が？　俺が？）
心臓が痛いぐらい脈打っている。
頭が吐きたくなるぐらいガンガン鳴っている。
（俺は普通じゃないのか？　霊を見るだけの普通の……普通の……？）
流星はまだ手にしていた小刀を横目で見た。
今は炎を宿していないが、羽衣姫と対峙した時。あの時の炎の色は何色だったか。
（黒、だった。何か、嫌なものを持った黒い炎）
あれが朱華の言葉を肯定しているのでないだろうか。
（俺……俺は……一体何なんだ？）
流星はぎゅっと目をつむった。

――

雨が降ってきた。
半分獣と化した身体を今は真っ二つにされながらも、流亜は雨に打たれながらも笑い声を上げた。
「アハッ、アハハハハハハハハッ！　俺を殺してもすぐ新手が来るぜ。そういう計画だったからな！」
雨音と共に流亜の言葉を聞いて、集まってきた矢吹家の人々は青ざめる。
ただ悠だけは冷たく流亜を見下ろしていた。
「あ〝ぁー……俺、も見て……見たかったぜ……世界、が……壊れる、とこを……」
ごふっと血塊を吐き出し、流亜の瞳から光が消えた。
「……彼は、半妖になってからだいぶ時間がたってたんだね」
舜鈴が歩み寄ってきた。
「間も無い頃なら、妖魔の力だけを狩って救えたはずなのに」
「どっちにしろ救えなかったよ」

悠はすっかり濡れてしまった髪をまとめ上げ、蝶の髪飾りで留めた。
「彼はすっかり闇に心を奪われていた。それにどちらにせよ、退魔師には戻れなかったろうね」
悠はしゃがみ、流亜の目を閉じさせた。
「日影を向こうにやったのは正解だった。きっと自分で流亜を狩るって言ったろうから」
服が濡れて身体が冷えていく。心まで雨のせいで凍えていくようだった。
「家族殺しで苦しむのは……私だけで充分だよ」
空気が生暖かい。それに顔をしかめつつ、悠は立ち上がって刀を抜いた。
「全員迎撃準備を！　戦えない者は防御に専念、人柱は家の奥へ！」
空気が揺らいだ。中には空を見て動揺する者もいる。
全員気付いたのだ。上空にまだらに浮かぶ、異形の影に。
「け、結界強化しろ！　急げっ」
誰かが叫んだ。が、それより早く。

パリィィィィィィィィィンッ

結界が破られる音がした。
呆然とする退魔師達の前に、次々と妖魔が降り立った。
数は数十、へたすると百近いかもしれない。皆姿はバラバラだったが、共通して翼があり、そして醜い。
そのためか、最後に降り立った美丈夫――熾堕は、その中で酷く目立っていた。
残響以外は音を立てない退魔師と妖魔。
互いの武器を構え、睨み合う両者の間に、水を差す者はいない。
「……さぁ」
熾堕の口が動いた。薄い唇から、非情の命令が下される。

「殺れ！」

妖魔達が動き出した。

雄叫びを上げ、爪や牙を振り上げる様は圧倒される。

「『鉤槍姫（カギヤリヒメ）』、部分解除！」

猛の声に、悠は振り返った。

「どいてろ！」

槍を構えた猛は悠に向かって怒鳴った。

悠は言われなくても、と内心で呟きつつ、横に跳んだ。

猛は悠がいた場所を走り過ぎ、妖魔の群れに躍り込む。

「円陣（エンジン）――残裂（ザンレツ）！」

槍が円を描いた。そう思った瞬間、その円の周辺にいた妖魔十数体から血が吹き出す。

刃に触れていたようには見えなかった。実際触れていなかったのだ。

「餓鬼だと思って油断すんなよ！　人柱を殺させるわけにはいかねーんだっ」

猛は一瞬動きの鈍った妖魔に槍を突き出していった。

「おい！　奴を止め――ぐはっ」

半妖の一人が斬り倒された。

舜鈴が操る『傀儡姫』に後ろから剣で叩き斬られたのだ。

「敵は一人じゃないこと、忘れないよーに」

舜鈴はくすっと笑った。

「ほう……あれが」

手下がやられているにも関わらず、熾堕は目を細めて微笑した。

「余裕もそこまでだよ」

熾堕に白刃を降り下ろした悠は、そう声をかけた。熾堕はパッと

顔を上げる。
「遅い！」
刀が熾堕を袈裟がけに斬り裂いた。

鬼童子<中>

「地獄送りは失敗ね」
月読はどうでもよさそうに呟いた。
「何でだ？　ぜってェ成功してたのに」
髪に赤いメッシュを入れた青年は頭を抱えた。
明日葉家の屋敷から少し離れた林の中。待機を言い渡された妖偽教団幹部達は話し合いを始めていた。
「誰かが干渉したんじゃないの？」
苦妃徒太夫の言葉に、全員顔を見合わせる。
「考えられるけど……地獄の亡者達をはねのけて奴らを引きずり上げられるほどの実力者が、現代にいると思う？」
月読が言うと、全員黙り込んでしまった。
いくら生者とはいえ、地獄送りにされた人間を引っ張り上げるなど、少なくとも人間では無理だ。
「……熾堕はどうだ？」
ずっと口を閉ざしていた亜紅太法師が顔を上げた。
「あやつなら、あるいは……」
「おいおい亜紅太のおっさん！」
青年は亜紅太法師を遮った。
「仲間疑うのはやめようや！　ただでさえ人手不足なのによ」
「ぬ……。だが、ここにいる全員が見ただろう」
亜紅太法師は負けじと続けた。
「あやつが入団直後、他の幹部四人を触れずに殺したところを」
「う……」
青年の口が閉じられた。

「あれは、妖魔の力ではない。肉体を蒸発させて殺すなど、聞いたことがない」
「それを言うなら、奴の部下だってそうよ」
苦妃徒太夫はイライラと髪を指に絡めた。
「名乗らない、喋らない。あたし達にも感情はあるけど奴らは……無いみたいだ」
全員顔をしかめて互いの視線を交える。
ただ一人、月読だけが無感動に髪をかき上げた。
「……ま、どちらにしても熾堕の実力は本物よ」
月読の脳裏に、あの銀髪の青年が浮かび上がった。
何を考えているか解らない。どこか掴みどころの無い男。
しかし、味方にするならあれほど心強い戦士はいないだろう。
「奴は絶対倒れない。そして絶対死なないわ」
話は終わりとばかりに月読は立ち上がった。

――――

熾堕の胸から血が吹き出した。
紅い血だ。人間と変わらない、真紅の血。
(今のは内蔵までいった。即死とまではいかなくとも、もう動けないはず)
悠はさっと身を引いた。同時に、熾堕の身体が後ろに倒れる。
「不意討ちなんてしたくなかったけど、この際仕方無いか」
悠は刀を振って血のりを落とし、熾堕に背を向けた。

「容赦無いなぁ」

全身が凍り付いた。
雨とは違う意味で、身体が冷えていく。
悠は刀を構えて振り返った。

「……嘘、でしょ」
悠は震え声をしぼり出した。
熾堕は立っていた。口の端から伝う血をなめとり、余裕の表情で。
「馬鹿な！　あの傷でどうやって……」
「傷？」
熾堕は破れた服をめくって見せた。
「……傷が、塞がってる」
悠は愕然とした。
確かに斬ったはずの場所に、傷が無い。あるのはうっすら浮かぶ傷跡だけで、それもすうっと消えていく。
（悪霊みたいな、元は思念体の妖魔ならある程度回復できるけど、これは違う？）
悠は腰を低く落とし、地面を蹴った。
全体重を載せた突きが、熾堕の胸を貫く。
悠は刀を引き抜き、さっと後ろに下がった。
「……おいおい。確かめるために心臓貫くなんてことするなよ」
今度は倒れなかった。血すら出なかった。破れた服から見える胸には傷跡すら無い。
「回復っていうより、回帰レベルじゃないの……！」
悠は奥歯を噛み締めた。
「ふむ……まぁ手間ははぶけたか」
熾堕は自身の血と雨が染み込んだ地面に手をかざした。
地面に魔方陣のようなものが現れ、そこから剣が突き出てくる。
熾堕は剣の柄を掴むと、剣を引き抜いた。
「さて……本腰を入れるか」
熾堕の唇がめくれ上がった。

妖魔の間を猛と『傀儡姫』が駆け巡る。
「うおぉぉぉぉぉぉ！」

猛は槍を振り回して鬼神の如く暴れ回る。
『傀儡姫』は人間には無理な体勢で妖魔達を斬り倒していた。
「に、人形使いを狙え！　操り手は無力なはず……がぁっ」
叫んでいた半妖らしき男が倒れ込んだ。胸に四本のクナイが刺さっている。
「悪いね。李家の実子はみんな暗器使いよ！」
右手に三本のクナイ、左手にナイフを四本持った舜鈴はクスッと笑った。
「凄いなぁ。人形操りながら武器使うなんて」
一旦身を引いた猛は感嘆の声を上げた。
「マァネ。糸を使って操ってるわけじゃないし！」
舜鈴はクナイとナイフを同時に投げた。
何体もの妖魔が攻撃を受けて倒れる。舜鈴は更に、服のそでからワイヤーを飛ばした。
糸が刃のように妖魔を斬り裂いていく。頑丈な身体を持つはずの彼らがばたばた倒れていく風景は、少しゾッとした。
「さすが恭弥さんのカノジョ……ハンパじゃねーや」
「フフ、トーゼン……」
舜鈴の言葉が途中で途切れた。
「どうしたんだ？」
猛が声をかけても返答は無い。表情が固まってしまっている。
「……何、この気配」
舜鈴は動揺が見え隠れする瞳を周囲に向けた。
「これは人？　妖魔？　違う……あの熾堕って奴と同じ気……」
「気？」
猛は首を傾げたが……すぐ視線を前方に戻した。
新手が、近付いてくる。
しかも向かい合っただけで解る。地面に倒れている妖魔達など比べ物にならないほど、強い。
新手は二人だった。

一人は黒いマント、同色のフードを被っている。僅かに見える髪は薄墨色で、顔は白く細い顎と白い唇しか見えない。

もう一人は長い金髪で、神父のような格好の若い男だった。整った顔は、まるでできのいい人形のようである。

「さっき言ってた気って、あいつらから感じる？」

猛が尋ねると、舜鈴はこくんと頷いた。

「嫌な感じじゃない。でも妙な気……」

顔にはまだ動揺が残っている。だが手には、すでにクナイが握られていた。

「だけど……人の気じゃないってことは、敵だね！」

「……確かにここに人外の者で、敵じゃない奴がいるわけねーよな」

猛もまた、槍を構え直した。舜鈴の言う気と言うものは正直よく解らないが、あの二人が味方でないことは確かだろう。

「我々の実力が解らないわけじゃないでしょうに……妙な人間達ですね」

フードの方が口を開いた。声だけでは男か女か判断できない。

「私がフードのをやる。貴方はもう一人をお願い」

「了解」

短いやりとりの後、舜鈴と猛は地面を蹴った。

二本の刃がぶつかり合う様は、周りを圧倒していた。

悠は刀をはじかれると、すぐさま手首をひねり、刃を降り下ろす。

熾堕はそれを受け止め、長い足を振り上げた。

悠は上半身だけを後ろに倒してそれを避け、起き上がると同時に回し蹴りを喰らわした。

横腹に直撃を受けた熾堕の動きが止まったのを見逃さず、彼の胸を一閃。

手応えからして、かなりの深手だ。が、しかし。

「ふぅむ……さすがにやるな」

塞がった。また、傷が跡かたも無く消えていく。
いい加減驚きはしなかったが、さすがにげんなりしてきた。なんせ、付けた傷全てが消えてしまうのだから。
「どうなってるの？　一体、その身体」
「どうなってるって……言われてもな」
熾堕は長い銀髪をかき上げた。
「悪いが俺の身体は人間が理解できるような原理でできてないんだ」
「ふぅん……まぁいい」
悠は刀を降り下ろした。それを熾堕は剣で受け止める。鈍い金属音が辺りに響き渡った。
「その再生力も、無限ではないでしょ？　それに、必ず再生の『核』があるはずだ」
悠は刀を持つ手に力を込めた。
「そこを斬れば、致命傷になるはずでしょ」
「……どうかな」
熾堕は刀をはじき飛ばした。
かろうじて刀は握ったままだったものの後退させられた悠に、熾堕は体勢を立て直す隙も与えず剣を勢いよく薙ぐ。
悠はとっさに刀を盾にした。剣と刀の刃がぶつかり合う。
（この斬撃……さっきより重い！）
目を見開いた悠は、攻撃に耐えきれずに吹っ飛ばされた。身体がぬかるんだ地面を滑り、そして沈む。
どろだらけになった身体を起こすと、熾堕が追撃してくるのが見えた。
悠は横に跳んで回避すると、刀を突き出した。刃は急停止した熾堕の脇腹を貫く。
「……効かないな」
熾堕の顔にすうっと笑みが広がった。
驚愕している悠の右腕を掴み、顔を近付けて囁く。
「俺は殺せない」

ぐんっと右膝を蹴り上げた。
動けない悠はもろにそれを腹に受ける。
「がっ……」
崩れかけた悠はなんとか持ちこたえ、刀を引き抜いた。
熾堕はぎくんっ、と身体を硬直させたが、すぐさま腕を伸ばして悠の胸ぐらを掴んだ。
自然と上を向いた顔に雨が当たる。髪や服が濡れて、服にひっつくのがうっとうしかった。
（……！？　身体が、動かない……）
熾堕の手を振り払おうとして、悠は自身の手が動かないことに気付いた。
手だけではない。全身が筋肉が固まってしまったように動かなかった。
「一体、何をした……！？」
「ん？　あぁ、しばらく眠ってもらおうと思って、俺の力を送り込んだ」
くすっと笑う熾堕を見ているうちに、頭がぼんやりしてきた。脳をはっきりさせたいが、それもできない。
「っ……一つだけ、教えて……」
声を出すのも不可能になってきた。それでも気力をふりしぼり、悠は疑問を熾堕にぶつける。
「貴方の気……妖気のような、邪悪な気じゃない。むしろ聖気に近い……。そんな気を持つ貴方が、なぜ妖偽教団にいる……？」
身体に力が入らない。刀を離さないようにするのがせいいっぱいだ。
「……知りたいか」
熾堕は自身の唇をなぞりながら少し間を置いた後、悠の耳元で囁きかけた。
「知りたければ生きるがいい、人間。何もかもを知る覚悟があるならな」

あいにく悠は、熾堕の言葉を半分も聞き取れなかった。
その後すぐに、意識を失ってしまったのである。

全身から力が抜けた悠を抱え、熾堕は戦況を確認した。
周りにはほとんど生者が残っていない。ただ、人間の死体はここには無く、おそらく家の奥で人柱を守っているのだろう。
逆に妖魔の死骸の数がおびただしい。槍の少年と人形とクナイの少女がどれほどの実力者かうかがい知れた。
もっとも、その二人はもう戦えないが。
「ご苦労」
背後に現れたフードと神父姿の二人に、熾堕は声をかけた。二人の腕にはボロボロの少年と少女が抱えられている。
「殺してはいないな？」
「はい。ご命令ですので」
神父の方がそう答え、少年と槍を地面に置いた。
「それと……人形も回収しました」
フードの方が全身を覆うマントをさばくと、先程まで剣を振るっていた人形がごとんと落ちた。
「上々だ。こちらもうまくいった」
熾堕は悠を横抱きにして辺りを見渡した。
「熾堕様、そいつら……」
生き残りの妖魔達が近付いてくるのに気が付いた。その目は悠達に固定されており、何が目的かは目に見えている。
熾堕は口角をつり上げると、悠を抱いたまま手の平を彼らに向けた。
「ここにいる者だけだな、俺達の戦いを見たのは」
「はい」
頷く妖魔らに、熾堕は笑みを深くした。
「そうか。じゃあ」

熾堕の手の平の上に光の球が浮かんだ。光の珠は一気に膨れ上がる。

「消えろ」

次の瞬間、妖魔達の足元から光があふれ出した。

「ぐ、ぎあっ！？」

「熾堕様ぁ！　何をぉっ」

光の中の妖魔達はボロボロと崩れ、血さえ蒸発してしまう。

「熾堕は椿　悠以下三名の姫持ちを生かした……そんなこと、あの者に知られるわけにはいかない」

熾堕はすぅっと微笑んだ。暖かみが全く無い、冷厳な笑みを。

「我々は見届けねばならない。古き星が瞬く様を。そして創らねばならない。新たな瞬きの足がかりを。そのために！」

熾堕が光球を握り潰すと、妖魔の足元から光が消えた。

妖魔の姿は消えてしまっている。死体どころか、肉片すら残っていなかった。

「我々は妖偽教団にいなければならないのだ」

熾堕は雨水を吸った銀髪を揺らした。濡れた長髪が艶を増して輝く。

「……さて。いい加減、傍観者はやめたらどうだ」

熾堕が声をかけてやると、戦闘でガタガタになった家屋の陰から一人の女が現れた。

長い髪も肌も、着ている着物でさえ真っ白だ。濡れた身体は細く、華奢だった。

「何者かは訊かないでおこう。予想できるしな。とりあえずこいつらに危害を与えるつもりが無いことだけ、理解してもらいたい」

「敵なのに？」

女は首を傾げた。

「あぁ。とりあえず、こいつらを連れていってくれ。もうすぐ羽衣

姫が来る」
　熾堕が言うと、女はこちらに近付いてきた。
　地面の少年と槍を背負ったものの、少し顔をしかめて悠とフードが抱えた少女を見比べる。
「……途中まで手伝ってやれ」
　熾堕は神父の方に悠を渡して女を顎を指した。
「解りました。……貴方はどうなされますか？」
「俺は残る。早く行け」
　熾堕に言われ、部下二人は無言で顎を下げて背を向けた。女の方は何か言いたげな目を向けてきたが、すぐに同じように背を向ける。
　数歩歩いたところで、三人の姿が消えた。転移したのだろう。
　遠くで怒声や絶叫が聞こえた。雨音では消しきれず、ノイズのように耳に届く。
　熾堕は腕を組み、羽衣姫が来るのを待つ。

　十数分後、多くの妖魔を従えた羽衣姫が門を破壊して現れた。
「やっほぉ♪　熾堕ちゃぁん♪」
　羽衣姫は熾堕に駆け寄った。
「んふふ♪　水のしたたるいい男ってやつねぇん」
　羽衣姫は含み笑いを浮かべ、熾堕をなめるように眺めた。
「……人柱はほっといていいんですか？」
　表情を一ミリも動かさず尋ねると、羽衣姫は目をパチパチさせた。
「あらん……そうだったわねぇん……」
　少し残念そうに、羽衣姫は熾堕から離れ、背を向けた。
「……そうだわ」
　歩き出そうとした羽衣姫の足が止まる。
「こっちに三人、ここのを入れて四人姫持ちがいるはずだけど、知らないん？」
　羽衣姫はこちらを見ない。しかしその声には、こちらを怯えさせ

る凄みがあった。
　熾堕は見えないのは解っていながら、肩をすくめて少し顔をしかめた。
「逃げられました。現在部下が捜索中ですが、おそらく見付からないかと」
「……そぉん」
　羽衣姫はそれ以上何も言わず、再び歩き出した。
　熾堕はため息をついて空を仰いだ。
（雨は、まだやまないな）
　曇天から落ちるしずくは、未だとどまることを知らない。

鬼童子<下>

うっすら目を開けると、見覚えの無い天井が瞳に映った。
「……どこだ、ここ」
しぼり出した声があまりにもしわがれていて、流星は唇を湿らせた。
「起きたか」
ほっとしたような声に顔を動かすと、少し離れた場所に恭弥が正座していた。
「恭弥がいるってことは……ここは椿家!?」
流星は勢いよく上体を起こした。
辺りを見渡すと、畳や障子のある、和風で広めの部屋である。調度品は少なく、天井の明かりは暖かい光色だった。
そんな部屋の中心にしかれたふとんに、自分は寝かされていた。服も白Tシャツに黒ズボンに着替えさせられている。
「戦いは？　みんなは？　人柱はどうなった!?」
「落ち着け。順を追って話していく」
一気にまくし立てる流星を、恭弥はそっとなだめた。
「まず戦いだが……僕達の負けだ。人柱も二人共、殺された」
「そんな！」
流星は立ち上がりかけた。しかし全身に鈍痛が駆け巡り、前めりに倒れそうになる。
「っぐ……」
「無理するな。身体に変化が生じてるんだ。しばらく痛みは抜けないぞ」
恭弥の言葉に、胸元を掴んでいた流星は顔を上げた。

「なぁ、『鬼童子』って何だ？」
「……」
「羽衣姫が言ってたんだ。俺のこと鬼童子って。何なんだ、それ。一体、俺の身体に何が起きたんだよ！？」
流星はふとんからはい出て恭弥の服にすがり付いた。
「俺は何なんだ……人じゃねぇのかよ……」
震える手でぐっ、と恭弥の服を握り締める。
一体自分の身に何が起きたのか、まだ理解できない。一体、自分は何者なのか。
「……君は、人間だ」
ややあって、恭弥が口を開いた。
「だが君は……同時に鬼でもある」
流星は顔を上げた。
「お、に……？」
「あぁ」
恭弥は細い顎を引いた。
「鬼童子は、人間の突然変異のようなものだ」
恭弥は流星の手を外し、下に下ろした。
「生まれつき鬼としての特徴を持っていて、成長すると、妖魔のように人を喰らうようになる」
恭弥は流星の目を真っ正面から覗き込んだ。そのあまりにも悠に似ている目に見つめられ、流星は思わず目をそらす。
「それを防ぐ方法は二つ。殺すか封印するかだ。君の家族は、封印を選んだんだろう」
恭弥の説明を、流星は呆然と聞いていた。
少し間を置いて、顔を上げる。
「恭弥は……知ってたのか？　そのこと……」
「……あぁ。実力のある退魔師なら、大概気付く。今までそういう奴らに会わなくてよかったよ」
流星は意味が解らず、眉をひそめた。

「どういう意味だ……？」
「鬼童子は、昔から忌み嫌われている存在なんだ。普通なら、問答無用で殺されている」
恭弥がさらっと言った言葉に、流星はゾッとした。
「殺すって、そんな……」
「退魔師はある一定の辺りまで犯罪行為が認められている。殺人も理由次第では……」
恭弥は言いよどんだ。
その先は、言わなくとも理解できる。流星は再びうつむいた。
「……んだよ、それ」
畳の上に拳を置き、喉から声をしぼり出す。
「俺……それってつまり、化物だったってことか？　人として認められてねぇってことかよ、なぁ！」
流星は恭弥の胸ぐらを掴んだ。周りには誰もいないため、それをとがめられたりしない。
「……人だよ」
しかし恭弥の静かな微笑に、憤りをごっそり削がれてしまった。
「少なくとも、僕ら兄妹はそう認めている」
「それって……悠、も？」
「勿論」
恭弥はこくんと頷いた。
悠が人として認めてくれている。それだけで、流星の気持ちは少しだけ軽くなった。
「それに君の家族も、君を人と認めてくれていたはずだ。だから君は今、生きてるんだよ」
「家族……」
流星は、家族との想い出を思い出した。
封印されていたなら、両親と祖父は自分の身体のことを知っていたはずだ。
なのに家族は、常にありのまま、変わらず接していてくれたはず

だ。
　流星はにじんできた涙をぬぐい、立ち上がった。まだふらつくが、動けないほどではない。
「恭弥、悠どこ！？」
「え……。この部屋を出て左側の、小さな家屋だ。だが……」
「サンキュッ」
　流星は最後まで聞かず、部屋を出ていった。

「……入浴中だって、言いそびれた」
　恭弥は座したまま、ぽつんと呟いた。

――――

　流星は目的の家屋の前まで来て、辺りを見渡した。
　辺りはとうに日が落ち、真っ黒である。雨は上がっていて、月や星が夜空に浮かんでいた。
「どこだ……まさかもういないとか？」
　呟いてから、中に手をかけようとして止める。中から水音が聞こえてきたからだ。
（もしかして……ここ風呂場か！？）
　物置小屋大の木材建築物は、本宅から少し離れている。よくよく見れば、窓から白い煙が立ち上っていた。
　間を置くこと十数秒。流星は忍び足でその場から離れようとした。
（恭弥の奴……風呂入ってるって教えろよぉ！　見付かったらヤベーじゃんっ）
　恭弥が教える前に自分は出ていってしまったとは思っていない流星である。
　息を殺して移動を始める。が、結局徒労に終わった。

「誰？」

流星は声にならない悲鳴を上げた。

今のは、聞き間違えようがない。

「……何だ、流星か。どうかしたの？」

「あ……え、とだな……！」

流星は振り返りかけ、すぐさま顔を戻した。

声をかけた人物――悠は、窓から顔を覗かせている。

それはいいのだが、木の格子をはめた窓から、白く細い肩が見えたのだ。つまり、今彼女がどういう状態でいるかよく解る。

「お、おおおおまえ、服着ろよ！」

「お風呂に服来て入る馬鹿がどこにいるの」

全くもって正論である。しかし、流星は落ち着かない。

隔てがあるとはいえ、好きな女子が裸で後ろにいれば、誰だって落ち着かないだろうが。

「……っ、俺、一回戻る！　また後で話すから」

「待って」

呼び止められてしまった。ちょうど歩き出そうとしていたのに。

「ちょっとでいいから……傍にいて」

「で、でもさ……」

「お願い」

甘えたような声。これに逆らえるほど、流星の意志は固くない。

うつむき気味に悠の方に足を向ける。建物の壁に背を預け、悠の方を見ないようにした。

しばらくの沈黙。先に口を開いたのは流星だった。

「恭弥から……聞いた。人柱、二人共死んだって」

「……うん」

弱々しい声が返ってくる。いつもの調子じゃない。

靴越しでも、足元がぬかるんでいるのが解る。正直、あまり長く立っていたくなかった。

「熾堕って奴、いたでしょ。彼に負けた」
淡々とした声。流星からは顔は見えないので、悠がどういう表情をしているかは解らなかった。
「負けたの、久しぶりだった」
「あぁ」
「この数年……特にここ一ヶ月、強くなってるって思ってたのに、全然駄目だった」
ぱしゃん、と水音が跳ねた音がした。
「変わってなかった。私……弱いままだった」
悠の声が、どこか独白するようなものに変わった。
自分に向けられていないような感覚に、流星は何とも言えない気分になる。
「どうしてかな？　『剣姫』を手にして、部分解除もできるようになって……実戦続きだったから、実力だって上がってきたはずなのに」
自分はまだ……弱い存在にしか思えない。
耳に届いた声に、流星はぐっと拳を握り締めた。
「悠は、弱くなんかねぇよ」
微かに聞こえていた水音が止まった。
「悠は俺を救ってくれたろ。俺の学校で起きた事件を解決したし、悪霊だって倒した。紗矢さんに進む道を示したし、未來さんを助けてあげた」
流星は今までの依頼人達の顔を思い出した。
中には救われなかった人もいるけれど、悠がいなければ、悲劇は今なお続いていたろう。
「全部、弱い奴じゃできないことばっかだ。だから、悠は強いよ」
返答は無かった。
顔を上げてどうしているか確かめたかったが、それはどうもはば

かれる。
どうしようかと考えあぐねいていると、中から物音が幾つか響いた。
それに戸惑っていると、いきなり引き戸がバンッと開いた。
「わっ！　って、悠……」
「今のセリフ……本気で言ったの？」
服を着込んだ悠は、ぬれた髪を揺らしながら流星を見上げた。
風呂上がりのせいか、いつもより艶が増している。流星は思わず見とれてしまった。
「聞こえているの？」
しかし悠に思いっきり睨まれ、すぐ我に返った。
「私が強いって……本気で思ってる？」
「思ってなきゃ、あんなこと言わねーと思うけど」
流星は目を瞬かせた。
悠が疑うように目を覗き込んできたので、たじろぎ、後ろに下がる。
「な、何だよ」
「……嘘を言ってるわけじゃないんだね」
「嘘言ってどうすんだよっ」
「普通、こういう場合は嘘をついてでも慰めようとするものだけど」
悠はふ、と息をついた。
「君の場合は……違うよね。愚直なんだもん」
ほめられてるんだろうか、これは。
流星は首をひねった。そもそも、愚直の意味すら解っていない。
「……ま、とりあえずほめ言葉として受け取っておくよ」
悠はすでにいつもの調子に戻っていた。ひねくれた返答を返し、髪をかき上げて髪留めで留める。
「あ、その髪留め……」
銀色に輝く蝶の髪留めを見て、流星は小さく声を上げた。
「あぁ、これ？　ありがたく使わせてもらってるよ」

悠はふっと微笑した。それを見て、流星は頬が熱くなるのを感じる。
「そ、それよりっ」
流星は慌てて話をそらした。
「俺……悠に言いたいことがあって」
改めてかえりみると、何だか照れ臭い。妙に緊張して、口からごにょごにょと意味をなさない言葉を発した。
悠は不思議そうな顔でこちらを見つめ続けている。
流星は意を決して、深呼吸した。
「その……ありがとう」
悠は目を丸くした。礼を言われる理由が解らないのだろう。
流星は慌てて説明を付け加えた。
「恭弥から聞いたんだ、俺の身体のこと……。鬼になるかもしれないんだよな」
我ながら他人事のような口調だ。内心自嘲しつつ、話を続けた。
「どう考えても人じゃない。いつ人を襲うようになるか解らない身体だ。だけど……恭弥と刀弥さん、悠は……俺を人間として認めてくれたよな」
流星はにかっと笑った。
「だから、ありがとう」
とたん、悠は肩を僅かに震わせ、ふいっと顔をそむけた。
「っ……それ、恭兄と刀兄に言ったの？」
「あ、言ってねぇ！」
流星は慌てて走り出した。
「俺、二人にもお礼言ってくる！　じゃあな、悠っ」
悠に手を振り、流星はその場を後にした。

悠は流星の姿が見えなくなると、自身の胸に両手を当てた。
「まっすぐ過ぎるよ、流星……」

静かに脈打つ心臓。さっきより、鼓動が速くなってる気がする。
「ハァァ……駄目だ、完全に惚れ込んじゃってる」
悠はため息をついた。
我ながら、何であれに惚れたのか解らない。
（でも私に……彼からあんなまっすぐな目を向けられる価値があるのかな）
彼は確かに妖魔の力を身体に宿しているが、その心は人間と変わらない。
笑ったり泣いたりする、ごく普通の青年なのだ。
（そんな彼の目に……私はどう映る？）
悠は己を抱くように両二の腕をぎゅっと掴んだ。

――――

妖偽教団のアジト内は歓声がわき起こっていた。
一日に二人も人柱を殺したことで、団内の士気も上がっているらしい。
妖魔、人間、半妖……全てが混じり合い、別の部屋で騒いでいるようだ。
熾堕は、その馬鹿騒ぎに参加する気にはなれなかった。
木でできた床を足音も立てずに歩き、特に何も考えずに進む。

「不機嫌そうだなァ、熾堕」

声をかけられ、熾堕は足を止めた。
「何だよ、騒ぎに乗らねェのか？」
周りが暗いため、赤メッシュの入った髪の青年は陰から飛び出るように立っている。
青年が漂わす酒気に、熾堕は振り返りながら顔をしかめた。
「誰があんな、品の無い乱痴気騒ぎに参加するか」

「乱痴気、ねぇ。そう言わず、行って脱いできたらどうだ？」
「男の裸なんて見たい奴がいるか」
熾堕はあきれ声で返し、髪を後ろに払った。
「ククク、オ・ト・コねェ」
しかし青年は愉快そうに笑い、熾堕の左胸をつついた。
「男でも女でもないその身体に、性別なんてあんのかよ」
「……」
「両性具有（アンドロギュノス）っつーんだよなァ。面白いよねェ」
青年はくつくつ笑いながらつつくのを止めた。
「なァ、おまえは一体何なんだ？」
青年は熾堕を見上げた。熾堕の方が背が高いので、どうしてもそうなってしまう。
酔ってるのか、青年の声は少しおかしい気がした。
「人でもない、妖魔でもない、半妖でもない。更に男でも女でもない。一体どういう存在で、何のためにここにいるのか。俺の能力でも解らない……」
「……知りたいか？」
熾堕は青年を見下ろし、唇で弧を描いた。
「知りたければ生き続けるがいい、人間」
青年に背を向け、また歩き出す。
「貴様の星に、それができればの話だがな」
熾堕はそのまま、その場を後にした。

「ククク、ゴーマンたねェ」
青年は笑った。
「俺が死ぬようなことを……全く、ありえねェ」
タトゥを入れた頬に触れ、ますます笑みを深める。
「人間？　俺が？　何を言っている……」
青年はすでに見えなくなった後ろ姿に向かって囁きかけた。

「俺達は化物だ。光を、人間を踏みにじる、闇の軍団だ」
その声は、廊下に静かに響き渡る。
「さァて、俺も行くか」
任務を果たすためにな。
青年もまた、その場を離れた。
笑い声を響かせながら。

第十七話　死花<上>

教室に入ったとたん、流星は違和感に気が付いた。
何だか……自分に向けられた視線が痛い。
しかし、昨日の戦闘と鬼童子と解ったショックによる疲れがまだ残っている。
だから特に気にせず、自分の席に倒れ込むように座った。
しかし、周りが安息を与えてくれない。
「若菜フッたって……」
「ひっどー」
「泣かせたらしいよ」
「サイテーだよねー」
流星は音を立てて立ち上がった。
大声でヒソヒソ話すクラスメイト（主に女子）の方を向く。
「ちょ、待て！　俺は若菜フッた覚えは無いぞっ。そもそも、コクられてもねぇし」
「え……でも若菜本人が言ってたわよ？」

あいつか、あいつが元凶かっ。

なんてことを話してるんだ。とんだガセじゃないか。
頭痛がしてきた。寝不足というのもあるけれど。
「……つぅかその話、いつしてたんだよ」
「先週の金曜」
……しゃがみ込みたくなった。
「俺……木曜にあいつの提案つっぱねたけど、好きだの付き合うだ

の、そんな話じゃなかったぞ」
流星はそう弁明したが、女子陣はうろんげな目で見つめてきた。
運悪く、今流星の友人は教室にいない。色々ピンチである。
（あいつ腹せいになんてことを……あぁっ、マジどうすれば！）
流星が頭を抱えていると、いきなり携帯が鳴り出した。
慌ててズボンのポケットから携帯を取り出す。
ディスプレイには、悠の名前が映っている。通話ボタンを押すと
『もしもし』と聞こえてきた。
『いきなりで悪いんだけど、事務所に依頼が来たの。今から言う場所まで来てくれる？』
「あ、ちょい待って」
流星は机に置いた鞄を肩にかけた。
この嫌な空気から抜けられると思うとホッとする。そそくさと教室を出た。
「ちょっと！　逃げる気！？」
「うっせぇな！　バイトだバイト」
流星は女子にそう言い返し、小走りで廊下に出た。
「で、場所は？」
『……私もしかして、タイミング悪かった？』
尋ねる声に、流星は「いいや」と返した。
「逆に助かった。完全アウトロー状態だったし。それで、場所どこ？」
『うん。場所は……』
悠が説明した場所に、流星は思わず足を止めた。
「そこって……確か……」

――――

その場所は、廃虚と呼ぶにふさわしかった。
鉄でできた門は赤サビが浮いていて、塀にはツタが絡み付いてい

る。その奥にある青い屋根の屋敷は、人が住んでいたとは思えないほど荒れ果てていた。

明るい住宅街の中で、ここだけやけに暗く感じる。寒気さえ感じた。

「官僚一家殺人事件……ニュースでがんがん流れてたよなぁ。確か、四年前だっけ」

門の隙間から屋敷を眺めていた流星が言うと、悠もこくんと頷いた。

「かなり凄惨な事件だったらしいね。よくそんなことがあった家を買ったね」

悠は依頼人を振り返った。

二十代の若い男だ。スーツに眼鏡をかけた、臆病そうな男である。昨日転んで付けたという、ガーゼに覆われた左頬の傷を見るに、かなりドジらしい。

男は黒髪をいじりながら、困ったように眉根を寄せた。

「確かにいわく付きですが、安かったし建物自体はまだしっかりしてますから。しかし……やっぱりねぇ」

入るのに勇気が、と呟く男の気持ちは、流星も解らなくはない。

ぱっと見、ここはリアルお化け屋敷だ。

「それに色々噂が立ってるし……」

「噂？」

流星と悠は顔を見合わせた。

「噂って……」

「窓から光が漏れていたとか、すすり泣く声を聞いたとか」

つまり霊が住んでるかもしれないということか。

流星は普通の霊媒師か神社に頼めよと思った。さすがに口にはしないが。

（にしても……）

生い茂った木の先にある家は、霊気というよりも、別のものをまとってる気がする。

もっと嫌な、何かを……
流星は額から吹き出した脂汗をぬぐった。

家の中は、当然ながら荒れ果てていた。
床や壁は崩れているし、カビやホコリの臭いで充満している。
「うわっ……四年ほっといただけで、ここまでなるもんか？」
流星は舞い上がったホコリを手で払った。
「私が買い取るまで管理者もいなくて、掃除も何もされなかったそうですから」
男――墨丘が答えた。先程名乗ったのである。
「そうなんだ……にしても」
流星は歩を進めつつ、足元に目をやった。
「……悠」
「……君も気付いたみたいだね」
悠に声をかければ、彼女は難しい顔で頷いた。
「地面の下……何かいる」
ホコリの積もった床。普通の人間からすれば何のへんてつも無い床だ。
しかし床下に流れる何か……その何かは、強い妖気を帯びていた。
悠と流星には、それが解った。
「足元……気持ち悪ぃ」
流星は口元を押さえた。
「少し我慢しなよ。多分地下に、複数の妖魔が住み着いているんだ」
悠は爪先で床を軽く蹴った。
「……そういえば人柱の護衛、おまえ付かなくていいのか？」
流星が尋ねると、悠は「少しならね」と答えた。
「今回は一人だし、戦力が増えたからね。普通はこんな時に依頼は受けないんだけど、事務所の維持費や生活費もあるからね」
悠はため息をついた。

「椿家から援助は受けてないし、依頼をなるべくこなしていかないと」
「けっこう……切羽詰まってたんだな……」
初めて知った事実に、流星はそう返すしかない。
「だから俺のバイト代も出ないわけか」
嫌味を込めた言葉は完全無視された。
「さっき話した怪奇現象が起こるのはこの部屋です」
墨丘の声に、二人は顔を上げた。
少し大きめの、木製のドアだ。他のドアがガタガタなのに対し、このドアだけがしっかりしている。
「開くの？」
「開きますよ……」
悠に尋ねられ、墨丘はドアノブに手をかけた。
「どうぞ……お気を付けて」
墨丘がドアを開けたとたん。

ビュビュッ

部屋から飛び出した何かが、悠と流星の腕に絡み付いた。
黒い糸のようなもの。否、これは髪だ。
髪は二人を引っ張り、部屋の中に引きずり込む。
二人はいきなりのことで対処できず、部屋の中心に無様に倒れた。
悠はすぐさま立ち上がって抜刀したが、流星はもがいてやっと身体を起こした。
「……何だ、ここ」
流星は思わず呟いた。
床一面に、謎の円形陣が広がっている。薄赤く発光しており、わけの解らない文字や図形が描かれていた。
「……これはどういうこと？」
悠はドアの方に向けた。

「……ククク。まんまとひっかかってくれたなァ」
墨丘は眼鏡を外して低く笑った。
「華鳳院　流星、まだ俺が誰か気付かねェの？」
「何……！？」
「まァ、気付かれねェ自信があったから、この役買って出たんだけどよ」
ぺりぺりとガーゼを外してく。その下にあったのは、黒い龍のタトゥだった。
「……！　まさか昨日のっ」
「やっと気付いた？　いやー、カツラって疲れるねェ」
ずるりと髪、ではなく、カツラがずれる。その下の髪には、赤メッシュが入っていった。
「よォ。椿　悠は初めましてだな」
墨丘――否、妖偽教団の幹部はニヤッと笑った。
「ふん……どうやら罠だったようだね」
悠は前に踏み込もうとした。
しかしそれより早く、男の唇がますます歪められた。
「悪夢に二名様、ごあんなァい♪」
次の瞬間。
視界が全て、黒に塗り潰された。

上も下も右も左も、全て黒。
そんな中で、流星は唯一色を持って立っていた。
「何が起きた？　あいつ、何をしたんだ……」
流星は起き上がりながら呟いた。
一応身体は何とも無い。周りは黒ばかりで、かといって暗いわけでもなかった。
「悠はどこだよ……」
目の前で刀を構えていた少女は、どこにもいない。気配すら感じ

なかった。
「おーい、悠ぅぅ」
大声で呼んでみても、返事はおろか、反響すら聞こえない。流星は段々心細くなってきた。
「うぅ……こういう時、俺って情けねぇよな」
流星はがっくり肩を落とした。
しかしふと、聞こえてきた声に顔を上げる。
「……歌声？」
旋律をともなった声に誘われるように、流星はフラフラと歩き出した。
正直なところ、この声しか頼るものがない。この声に近付けば、光明が差す気がした。
おそらく子供の声だろう。美しい声だが、たどたどしい。
（確か……これ手鞠唄じゃなかったか？）
小さい頃、母がよく歌ってくれた。手鞠など興味無かったから、うろ覚えなのだが。
そのままおっかなびっくり足を進めていると、突然視界が広がった。
驚いて辺りを見渡す。どうやら、日本庭園のようだ。
しかし、どうも四季がおかしい。
あと四日すれば六月、つまり梅雨に突入するはずなのに、木の葉は赤く色付いている。これはどう見ても……秋だ。
「何これ……俺立ちながら夢でも見てんの？」
色々おかしい。いや、最初から変だったけども。
というか、歌声が随分近くなったような……
流星は振り返り、小さく声を上げた。
女の子だ。十歳ぐらいの女の子が手鞠で遊んでいる。
長い髪に赤と桃色の花をあしらったかんざしを差し、紅の綺麗な着物を着ていた。艶やかな黒髪は、誰かを思い起こさせる。
流星の心臓が大きく跳ね上がった。

まさか、と思った。ありえないことだ。ついさっきまで一緒にいた少女とは、身長も服も違うのに。

少女はふと、鞠つきを止めて横を向いた。

幼いながら驚くほど整った顔立ち、陶磁器のように白く滑らかな肌、何より目を惹く、大きな切れ長の瞳。

流星は言葉を失った。

これは何の冗談だ。何の夢だ。

幼い悠が、目の前にいるなんて。

流星は動かない。幼い少女も、動かない。

――――

「悪趣味ねぇ。悪夢に引きずり込んで精神攻撃なんて」

苦妃徒太夫は肩をすくめた。

目の前の赤く光る結界陣に、二人の人間が倒れている。

片割れである少女の刀を回収したいが、陣内に入ると自分まで『夢』に飲み込まれかねない。

「じゃ、あたしは行くけど……椿　悠と華鳳院　流星は任せたわよ、獏僧（バクソウ）」

赤メッシュにタトゥの青年にそう言い、苦妃徒太夫はその部屋を出ていった。

「ククククッ……」

青年――獏僧は低く笑った。

「あぁ……やってやるさ。椿　悠を殺し、華鳳院　流星を捕まえ帰る。しかし正面じゃ分が悪い……」

ネクタイを外し、床に放り投げる。シャツのボタンを三つ外して笑みを深めた。

「だからまずは……心を弱める。その過程で心が壊れても、まァい

いや」

猿僧は壁に背を預け、目を閉じる。

（待ってりゃ結果が来る。それまで休ませてもらう）

口の端を、吊り上げたまま。

死花<中>

庭に面する廊下を歩いていた刀弥は、ふと足を止めた。
廊下の真ん中に、誰かが座っている。いや、あれは倒れている……？
「お、おい！　恭弥っ」
陽光のまぶしさに目をしばたたいていると、その人物が弟と気付く。
慌てて駆け寄ると、制服姿の恭弥は浅い息をしながら壁に寄りかかっていた。
「んっ……に、さ……？」
恭弥は眉根を寄せ、額に脂汗を浮かべていた。固く閉じられていた目を開け、焦点の合わない目で見上げてくる。
「こんなとこで倒れんなよ……心臓に悪い」
「ごめん……学校に行こうとして……うっ」
突然恭弥は咳き込み出した。刀弥は慌ててしゃがみ込む。
「おい！　誰か」
「いい……もうおさまった」
胸を押さえた恭弥は刀弥を手で制した。
「封印のバランスが崩れてきてるんだ……ただ、それだけだ」
恭弥はふらつきながら立ち上がった。
その姿に、刀弥はきっぱりと声をかける。
「……恭弥、おまえ今日休め。いや、今日から休め」
「でも……」
「いいから、休んでくれ……頼むから」
我ながら弱々しい声が出た。手など、見なくても解るぐらい震えている。

「……解った」
恭弥はすくっと立ち上がった。
「兄さんに言われたら、しょうがないしな。おとなしくしておく」
にこっと微笑するその笑顔が、刀弥の胸を突く。やはり母と似てる……思わずそう感じたからだ。
そんなこと知らない恭弥は、踵を返して自室に戻っていこうとした。
「……なぁ」
刀弥はつい声をかけた。足を止めて振り返る弟に、逆に自分が戸惑ってしまう。
素早く考えを巡らし、一つ思い出す。
「額の傷跡、もう痛まねーのか？」
恭弥は目を丸くした。
こちらをじぃっと見つめ……また微笑した。
困ったような、それでいて儚げなものだったけど。
「……うん」
恭弥は今度こそその場から歩み去った。
恭弥の姿が見えなくなった後、刀弥はため息をついて片手で顔を覆った。
「そうか……もう痛まないのか」
指の隙間から、嫌味なほど青い空が目に映る。
そう、あの日もちょうどこんな空だった。
あんなことが起こるなんて、思ってもなかった。
三年前の、あの日が……

――――

流星は目の前の少女を凝視した。
間違いない。この娘は小さい悠だ。
どうも自分は、タイムスリップしたらしい……

（って、んなわけあるかあぁぁぁぁぁぁぁぁ！）

流星は自分にツッコんだ。

（タイムスリップとか！　どこのファンタジーだっ。つかどうなってんの、マジで！）

軽く混乱状態の流星をよそに、小さい悠は鞠を持って走り出した。

「あ、待てよチビ悠（勝手に命名）！」

流星は慌ててその後を追う。

（つうかこっちのこと、気付いてねぇのか？　今でかい声出したのに……聞こえてないとか？）

だが声はちゃんと出たし、彼女が耳栓をしているということはあるまい。

おかしい。まるで自分は、ここにいないような……

悠の足が止まった。

流星は足を止め、息を整える。向こうは着物で、しかも子供なのに、付いていくのに必死だった。

「ハァ、どんだけ早いんだ、よ……」

流星は前方を見て、口を閉じた。庭の木の葉を眺める少年を見付けたからだ。

「あ、あれ……あいつ……もしかして……」

流星が目を瞬かせていると、悠は口を動かした。

「だぁれ？」

少年がこちらに顔を向けた。

悠に似た、驚くほど整った中性的な顔立ち、病的に白い肌、切れ長の澄んだ漆黒の瞳。

……恭弥！？

幼い悠を見た時より驚いた。なぜ彼がいるんだろうか。

しかも、記憶より幼い気がする。確か恭弥は自分より背が高いはずだが、目の前の彼は目線が自分より下にある。

（つぅか恭弥も俺のこと、気付いてない？）

自分は悠の後ろにいるため、視界に入ってくるはずだ。なのに恭弥は、悠にのみ視線を注いでいる。

流星は両手を見下ろした。別に透けてはいない。

「何で……」

呆然としている間にも、目の前のやり取りは続く。

「君こそ……誰だ？」

恭弥は首を傾げた。記憶より長い髪が、さらさらと揺れる。

「悠。椿、悠」

「悠？」

悠が名乗ったとたん、恭弥の表情が変わった。

「君が僕の妹……？」

悠に近付き、しゃがんで目線を合わせる。

近くで向かい合っていると、本当によく似ている。鏡みたいだ。

「誰……なの？」

悠は不安げな顔を恭弥に向けた。

お互いの反応を見るに、どうやら初対面のようだ。

（この二人……兄妹だよな）

なのに今初めて会ったような反応だ。一体どういうことだろうか。

「僕は恭弥。君の兄だ」

「恭弥……私が生まれる前に、遠くに修行に行っちゃった？」

「あぁ」

恭弥は細い顎を引いた。

（修行……？　式神のか）

なるほど、と流星は納得する。それなら互いを知らないのも無理は無い。わざわざ遠くに行った理由が、少々謎だが。

「貴方が……恭兄？」

髪はかくんと小首を傾げた。かんざしと黒髪が揺れる。

「そうだよ」
恭弥は悠の頭に手を伸ばし――
「何をしているの？」
全員ぴたりと動きを止めた。
恭弥は顔を上げ、不思議そうに流星を見ている。
こちらが見えるのかと一瞬びくりとした流星だが、すぐ自分を見ているのではないと気付いて振り返った。
女性が、しずしずと近付いてくる。
長い絹糸のような黒髪を結い上げ、黒地に白い牡丹（ぼたん）が映える着物を上品に着こなしている。完璧に整った顔立ちは、悠と恭弥に共通していた。
流星はその女性と悠、恭弥を見比べた。
（似てる……もしかして二人の母親！？）
末恐ろしいほどに美しい容貌は、他人と終わらせるには酷似している。し過ぎている。
違うのは目の形ぐらいだ。悠と恭弥が切れ長の鋭い目元に対し、女性の目はアーモンド型をしている。
女性は悠を見、そしてその後恭弥を見たとたん、明らかに表情を硬化させた。
まるで幽霊を見たような表情だ。美しい顔が、みるみる内に歪んでいく。
「あの……？」
恭弥が声をかけたとたん、女性はつかつかと彼に早足に歩み寄った。
着物なのも構わず、大股で歩み寄って右手を振り上げる。
バシィィン

肉を叩く音が響き渡った。
よろめいた恭弥は目を見開き、赤く腫れ上がった左頬を押さえる。
じっと女性の様を見つめていた流星は、言葉を失った。
母親が自分の子供を殴るなんてありえるのだろうか。
流星が呆然としている内に、女性は恭弥に怒声をあびせた。
「二度と私の娘に近寄らないで！」
上ずった声。何かにおびえたような、本能的な恐怖を含んだ声。
女性は身をひるがえし、悠の手を取った。
「あっ」
悠が声を上げるのも構わず、女性はその場から逃げるように立ち去る。いや、本当に逃げたのかもしれない。
遠退く母娘を見つめたまま、恭弥は根を張ったように動かない。
流星はどうしようか迷っていると、急に風景が変わった。
いや、変わったというより、動いた。
足元が移動していくように、周りの光景がスライドしていく。
「な、俺、動いてないのに……！」
流星の身体は、母娘の方へ近付いていく。逆に、呆然と立ち尽くす恭弥の姿は遠ざかっていった。
（何だ……一体何だ！？）
わけが解らない。悠と恭弥の幼い姿も、季節のおかしいこの風景も、今起きている現象も！
移動してみても、やはり結果は変わらない。母娘の方へ引き寄せられる。
「何だよ一体……何なんだよっ……」
流星がそう言ったとたん、風景が止まった。
流星が辺りを見渡すと、家屋の廊下の真ん中で悠と女性が向かい合っていた。
「ねぇ……何で恭兄と話しちゃ駄目なの？」
悠は女性を見上げて首を傾げた。大きな瞳は、不安げに揺れている。

女性は一瞬顔を歪め、しかしすぐ笑顔になってしゃがみ、悠と視線を合わせた。
「悠、いい？　あの子は貴女の兄じゃないわ」
「でも……」
「いいえ。そもそも貴女に兄はいない。私が産んだのは、貴女だけだもの……」
（え？）
これに驚いたのは、悠ではなく流星だった。
（この人が産んだのは悠だけ？　でも、それじゃあ……）
頭が混乱する。
赤の他人なら、なぜ悠と恭弥は似ている？　恭弥とこの女性は……なぜ似ている？
「私の愛しい娘」
女性は悠を抱き締めた。慈しむように、何度も悠の頭を撫でる。
普通なら、微笑ましい光景だろう。しかし流星は戦慄する。
女性の表情。口角を上げ、笑みを浮かべている。
それは狂気に喰い破られたかのようだった。
人であることを止め、人外の道に走った笑みだ。
流星はその笑みに見覚えがある。
道徳も何もかも捨てた者の顔。彼女の顔は、半妖達に酷く似ていた。
――――
流れていく風景の中で、流星は漠然と、これは悠の記憶だと理解していた。
その中で、幾つか知らなかった事実を知ることになる。
これが三、四年前のできごとであること、悠の母が後妻であるこ

と、前妻は恭弥を産んですぐ亡くなっており、名前は百合（ユリ）と言う。
しかし何より流星が驚いたのは、百合と悠の母――蘭（ラン）が双子の姉妹であることだった。
これで悠と恭弥、そして蘭が似ている理由にも説明が付く。
しかし、はたから見れば奇妙な家族だ。
なんせ、悠と恭弥達は、兄妹であると同時に従兄妹でもあるのだ。
奇妙過ぎて……そしてでき過ぎた。
こんな家族、自然な流れでできるわけない。
（……てか、それより俺はいつ戻れるんだ？）
普通なら理由を明かそうとするはずが、流星はそう思っていた。
正直な話、流星はこれ以上踏み込みたくなかった。
これは悠の記憶であり、流星はそれに土足で荒らすつもりは無いのだ。
何とかして抜け出したいが、そのための糸口すら掴めない。
今だって、逃げ出したいのに動けなかった。

「どうして一緒にいるの？」

問う声に、悠と恭弥は答えられなかった。
最初の時より少し成長している二人は、床を睨み付けている。
悠は着物ではない。現在の彼女がよく着ているような格好だ。和でまとめられた部屋では、多少異質に見える。
一方恭弥は、中学の制服である学ランを着ていた。
「ましてや外に出るなんて……！　何てことを……」
蘭は全身を震わせ、二人を怒鳴り付けていた。
美しい顔を歪ませ、黒い瞳はぐらぐら揺れている。
「悠！　どうして私との約束を守れないの！？」
怒声が室内に響き渡った。
「おまえもよ……なぜ私の娘に近付く！」
蘭は恭弥を睨み付けた。その目に、ありったけの憎悪を込めて。

蘭は、恭弥を毛嫌いしていた。
いや、毛嫌いというより、憎しみとおびえを抱いていた。
理由は解らないが、恭弥の顔を見るたび、思い出したように何かにおののくのだ。
それは外から見るととても奇妙で、その様子は鏡の中の自分に恐怖しているかのようだった。

蘭はそんな目で恭弥を刺すように見つめ、言い放った。
「おまえなんかいなければよかったのに！　いなければ、悠が私の元を離れなかったのに！」
それに反応したのは、恭弥ではなく、悠だった。
「母さん、恭兄にそんなこと言わないで」
初めての娘の反抗に、母は目を向く。その驚きと怒りの矛先は、恭弥に向いた。
「おまえ、悠に何を吹き込んだの！？」
「……」
「悠はこんな娘じゃない！　私の言うことを聞くいい娘なのに……」
「……」
「何とか言ったらどうなの！？」
悲鳴のような声。しかし恭弥は動かないし喋らない。
ただ顔を上げ、真っ直ぐ蘭を見据えた。
睨んだわけじゃない。ただ見ているだけ。なのに蘭は、ぐっと押し黙った。
「母さん」
悠が声を発した。ぎこちなく見下ろす母に、悠はきっぱり言い放つ。
「私は母さんの人形じゃない。だから、母さんの言いなりになるわけじゃないの」
蘭の顔色が変わった。一瞬にして顔を歪ませ、近くにあった花ビ

ンを掴む。
「私に、逆らうな！」
振り上げられる花ビン。状況が飲み込めていないのか、悠は動かない。
鈍い音を立てた後、花ビンは中身をぶちまけてごとんと落ちた。
「なっ……」
蘭が絶句した。
ぽたり、ぽたり、と落ちる紅いしずく。白い頬と細い顎にそれを伝わせ、恭弥は顔を上げた。
「恭兄、頭っ……」
悠が小さな悲鳴を上げた。
それは当然だ。兄が自分をかばって傷を負ったのだから。
悠を抱き締めるように覆い被さっていた恭弥は、少しだけ身体を離した。
血は恭弥の右の額から流れている。頭であるためか、量が多い。
しかし恭弥はそれに顔をしかめるわけでもなく、ただ顔を上げて蘭を見据えた。
言葉を失うほど澄んだ、美しい黒水晶の瞳。本来なら人を惹き付ける瞳を、蘭は恐怖でいっぱいになった顔で見つめる。
蘭は口紅をさした唇を噛み、早足でその部屋を出ていった。
それと入れ換わりで、先程の音を聞き付けたのか数人の女中が入ってきた。
「どうなさったのですか？」
「恭弥様、その傷は！？」
「悠様、何があったのですか！？」
「みんな、恭兄が……」
悠が口を開いた時、恭弥が彼女を抱えたまま「悠」と呼んだ。
悠が恐る恐る顔を上げると、恭弥は目を細め、微笑した。
「よかった。無事だな」

流星は言葉を失った。
自分が大怪我なのに、彼はどうして妹とはいえ、他人を思いやれるんだろう。
自分は大丈夫じゃないのに、何で。

何で、笑えるんだろう。
何で、泣かないんだろう。
何で、何で――

この時、流星は気付いてなかった。
これから、更なる悲劇を目の当たりにすることに。
幼かった悠も、気付かなかったに違いない。
自分が、人殺しになることに。

死花<下>

朝の風景だった。

椿一家が広間の畳の上に正座し、朝食をとっている。

一番奥にいる壮年の男性――悠達の父を、流星はぼんやりな眺めていた。

白髪混じりの黒髪、精悍かつ整った顔立ちは刀弥と似通っており、切れ長の漆黒の瞳は子供達に共通していた。

なぜ、この人は蘭と結婚したんだろうが。前妻である百合の面影を、彼女に求めたのか。

彼は――父は、妻の歪んだ何かに気付いているのだろうか。

何てことはない朝の風景。せいぜい、現代より少し若い刀弥が、しきりに恭弥の傷を心配しているぐらいだ。

恭弥はそんな兄の様子に、困ったような笑顔で、薬用の白湯を口に含んだ。

「……！」

しかし、恭弥は目を見開いた直後、突然白湯の入った湯飲みを畳に投げつけた。

「恭弥……？」

刀弥と父は、片膝になって恭弥を見つめる。悠は大きな目を見開き、兄と湯飲みを見比べていた。

一方恭弥は身体を小刻みに震わせた後、激しく咳き込んだ。何度かそれを繰り返し、最後に血塊を吐き出す。

一瞬の沈黙。止まった空気が、恭弥が倒れたことにより動き出した。

「恭弥？　恭弥ぁ！？」
「おい、しっかりしろっ」
駆け寄る兄と父。倒れたまま動かない兄。騒ぎ立てる女中達。
ここでようやく、悠は我に返ったように立ち上がった。兄の方へ、近付こうとする。
「駄目よ」
しかし、母に阻まれた。
蘭は娘の腕を掴み、動きを止めているのだ。
「母さん、離して！　恭兄が……」

「当然よ」

悠はもがくのを止めた。熱を帯びた母の声に、表情を固くして振り返る。
流星は同じように蘭の顔を見て、背筋が凍り付いた。
最初の時見た、あの狂気に満ちた顔を蘭が浮かべていたからだ。
「当然よ……死んで当然なの」
口唇の端が裂けんばかりにつり上がる。らんらんと輝く瞳は、狂熱に浮かされていた。
「あれは、死んで当然なのよ」

景色が一転した。

明るい室内から、暗い物置に変わっている。いきなりの変化に付いていけず、流星は辺りを見渡した。
様々なものが乱雑に置かれている。窓から僅かに見える空は、妙に澄んでいた。
「いきなり何だ！？　き、恭弥はどうなった！？」
現代で生きているのだから、死んではいないだろうが……気になる。

（そういえば……悠は？）
これは悠の記憶なのだから、悠がいないはずないのに……
「母さんでしょ？」
凛とした声が響いた。
振り返ると、悠が母と対峙している。悠はいささか顔色が悪いが、背筋を伸ばして立つ様は、現代に通じるところがあった。
「母さんが恭兄の白湯に毒を入れたんだ」
「何を言ってるの？　わけが解らないわ」
蘭はにっこり微笑んだ。しかし苛立ちを隠しきれないのか、頬がひきつっている。
「母さんが珍しく料理を運んだって聞いたよ。それに、毒を入れたと思われる小さな包み紙も見付けた。指紋を調べれば、母さんの指紋が出るはず」
「それだけで……」
「母さんの部屋も調べた。案の定、毒が出てきたよ。恭兄に盛られたものと、おそらく同じものが」
「……」
「他にもナイフやハンマー……殺傷力の高いものも隠されてた。入手経路は、多分近くの工具屋でしょ？」
否定を許さない、畳みかけるような言葉。蘭はしばらく沈黙を保った後、ふっと息をついた。
「あれが死にかけたのは一昨日。たった二日で調べたの？」
「……正確には一日も無かったけどね」
「そう……本当に頭のいい子」
蘭は悠の左頬にそっと触れた。
「それで、その証拠は？　移動させたのかしら？」
「……さぁね」
悠がそう言ったとたん、蘭の手が左頬を捉えた。

重なった木箱に突っ込む悠。倒れた娘を、蘭は金切り声で怒鳴り付けた。

「言いなさい！　今すぐ！」

蘭の顔が、おどろしいほど歪む。近くの柱にかかっている鬼女の面と大差無いように思えた。

「本当に頭のいい娘だこと！　馬鹿でよかったのに……どうして私の子供なのに、あの女に似ているの！？」

「あの、女……？」

悠は殴られた頬を押さえながら上体を起こした。

「誰のことを言ってるの……？」

「おまえの伯母のことよ」

蘭は忌々しげに呟いた。

「双子なのに……姉というだけであの女は全ての才能を私から奪い取った！　勉強ができる頭も、澄んだ歌声も、豊かな芸術センスも！　上げ出したらきりが無いっ」

髪を振り乱し、嫉妬に狂う姿は鬼としか言いようがなかった。

流星は生まれつき鬼を身に宿す。しかし、彼女は心の内から鬼に――妖魔に喰われ始めていた。

悠と同じ顔だと言うのに、恭弥同じ顔だと言うのに、なんという差だろうか！

「あの女が死んで、やっと愛する人と結ばれたのに、あの人はあの女と同じ私の『顔』しか見てくれない！　それに、あれは」

蘭の瞳に、暗い光が灯った。

「あの女の最後の子供は、あの女とそっくりだった！　顔も仕種も何もかも！　だから殺そうとしたのに、なぜ生きている！？」

叫び続ける母を、悠は呆然と見つめていた。しかしその顔に、みるみる怒りが広がっていく。

「う、あっ……！？」

流星は頭を抱えた。脳の中に悠の想いが――怒りが、直接流れ込んできたからだ。

それだけで恭兄を殺そうとしたの？
それだけで恭兄に酷いことを言ったの？
それだけで恭兄に酷いことをしたの？
それだけで……たったそれだけで！

しゃらん、と鞘走りの音が響いた。
顔を上げると、悠の右手に一本の刀が握られている。ぶつかった時にこぼれたものなのか、鞘が床に転げていた。
そして刀の方は。
紅の柄、白銀の刀身、見る者全てを魅了する美しい刀。あれは……まさか……
「な、何を持っているの！？」
蘭は悲鳴を上げて、悠を凝視した。悠は立ち上がり、ゆらりと構える。
「どうして……」
動いた。勢いよく踏み込み、切っ先が空気をかきわけていく。
「やめろ、悠！」
届かないと解っているのに、流星は制止の声を上げた。

ドスッ

鈍い、何かを突き破る音が聞こえた。
「あ、あ、あ」
流星は後ずさった。
動かない女。動けない少女。女に突き刺さった刀は、少女が握り締める刀は、血に濡れて更に美しく輝いている。
じわり、と白い着物に紅がにじんだ。描かれた牡丹の華上に、紅華が咲いていく。
「こ、こんなことって……こんなことって」

流星は両手で頭を抱えた。
「こんな、こと……」
やがて意識が遠のいていく。
「ゆ、う……」
伸ばした手は、少女に届かなかった。

――――

目覚めは突然だった。
「っぶはぁ！　はぁ、はぁ、はぁ……」
目を開けたとたん、さっきまで全速力で走ったかのように息が絶え絶えになっていた。心臓が突き出そうな感覚だ。
目の前に広がるのは古びた白い天井で、よく見れば空気中にほこりが飛んでいた。
「よーぉ。起きたか？」
いきなり声をかけられ、流星は飛び起きた。
よどんだ空気の部屋。大した広さではなく、廃墟の一室、という感じだ。
いや、ここはまさに廃墟。
自分は確か、依頼でここに来て、それで……
（そうだ。あの時、この部屋に引っ張られてそのまま悠の記憶に……）
流星は首を動かして声の方を見る。赤メッシュに顔刺青の男は、にやりと唇を歪めた。
「どうだ？　目覚めは」
「……何だ、あれ」
流星は渇れた声を絞り出した。
「あれは……あれは、一体……」
「んー？　解んなかったのかよ。その娘の記憶だ」
男は流星の傍を指差した。流星はハッと振り返る。

「悠！？」
悠はまだ倒れていた。顔は青白く、不明瞭な言葉を口から発している。
「そいつはまだ悪夢を見てもらってるよ。心が壊れるまでそうやってるつもり」
「何でそんなことをっ……」
低く問えば、男はにんまり笑った。
「羽衣姫様がおまえをご所望なんだよ、鬼童子ィ」
「何っ……」
「その身に鬼を宿す人間。話じゃ、とんでもねェ力持ってんだろ」
男は値踏みするような目で流星を見つめた。
「その娘がいなければ、退魔師の味方する理由無くなるよなァ。だっておまえは俺らと同じだから」
男は一歩進んだ。近付いてくるかと思いきや、それ以上寄ってこない。
足元を見れば、入った時に見た陣が変わらず発光している。
「なァ、認めちまえよ。自分は化物だってな。楽になるぜ」
「……」
「おまえはその娘に惚れてるようだが、どうせその娘はおまえを化物扱いしてるんだろ」
「……くも」
「あん？」
男が少し身を乗り出した瞬間、流星は間合いを一気に積めて拳を振り下ろした。
「がはっ」
無防備にも突っ立っていた男は、抵抗もできずに殴り飛ばされる。
壁に叩き付けられ、男は目を見開いて座り込んだ。
「げほっ……てめェ、俺ァ戦闘向きじゃねぇんだよ」
腫れ上がった頬を押さえて呻く男を、流星は見下ろした。
「よくも悠を傷付けたな……」

「傷付けたァ？　アホか。あいつは自分の過去に勝手に傷付いてるだけだぜ。俺知らね」
馬鹿馬鹿しそうに言い放つ男に、流星はもう一度拳を振り上げた。

ガゴォッ

床が砕けた。木片が散らばり、陣の辺りまでひびが入る。
「っとォ。……おいおい嘘だろ」
今度は何とか避けた男は、ひきつった笑みを浮かべた。
「それがおまえの本当の姿か、華鳳院　流星！」
言われ、流星は自身の手を見下ろした。
マニキュアを縫ったように黒く、鋭くとがった爪だ。人の爪ではないことは、明らかだった。
おそらく、他のところにも身体の変化は表れはじめているだろう。
「……それでも」
人間なんだ。
悠達が認めてくれた通り、俺は。
「おまえを倒す！」
「……面白ェっ」
男は唇を歪ませた。
「さっき俺は戦闘向きじゃねェって言ったがな、だからって弱ェわけじゃねェ！」
腰を低く落とし、舌で上唇をなめる。
「何せ俺は、妖偽教団の幹部だからな！」
男の姿が、変質し始める。
流星もまた、小刀を抜く。黒い炎が、空気を焦がした。

――――

「大丈夫なんスか？」

猛は槍を抱えながら日影に尋ねた。
衝羽根（ツクバネ）家の屋敷の中庭。説明するまでも無く、彼らは人柱護衛のためにいた。
「悠達のこと？　大丈夫よ、少しなら二人がいなくても対抗できる」
「や、悠や流星さんのことじゃなくて」
顔の前で手を振り、目線を庭の隅に突っ立ってる人物に向ける。
その青年は、短い茶髪を掴むように抱え、縮こまっていた。
「大丈夫か、弱気さん」
「弱気じゃなくて雄輝（ユウキ）。……でも、同じ姫持ちとは思えないメンタルの弱さね」
図体の割に小さく見える白いパーカーを着た背中に、猛と日影はため息を投げつけた。
「ある意味、しょうがないかもな」
風馬が近付いてきた。雷雲はなぜか彼に肩車されている。小柄な少年なので、風馬は特に苦にした様子は無いが。
「家族を失ったばかりだ。そうすぐ立ち直れるもんじゃない」
「……それもそうね」
日影は思うところがあったのか、唇を噛んでうつむいた。
それを見て、猛はあっと思う。
日影は今朝、流亜の裏切りを知ったばかりだ。家族を失った、というくだりで、その時のショックを思い出したのかもしれない。
「あぁ～！　やっぱ駄目だっ。怖いし緊張するっ」
茶髪の男――伊吹（イブキ）雄輝は頭をがしがしかいた。ウェーブがかった髪が、くしゃくしゃになる。
「俺だけ帰っちゃ駄目ですかね」

『駄目です』

「……ですよねー」
全員に否定され、雄輝は涙目になった。

「気持ちは解るけどサ」
舜鈴はツインテールを指でくるくるからめながら肩をすくめた。
「弱々しくしてたらそこにつけ込まれちゃうよ。奴らは……妖魔達はまさに、闇そのものなんだから」
ふと顔を上げる舜鈴。全員つられて上を向き。

パリィィィィィィィィィィィンッ

結界が破られる音を聞いた。
あ然とする一同の前に、一人の男が降り立つ。
「なっ……」
猛は立ち上がり、槍を構える。ほとんど反射的な動きだった。
「嘘だろ……たった一人の力で、結界を破るなんて！」
雷雲を下ろした風馬は叫んだ。
「まさかこの男が先陣切ってくるなんてね」
舜鈴はすでにクナイを構えている。隣には『傀儡姫』立っていた。
「何、なの……？　こいつは……」
日影が呟くように言った。
男に、猛は見覚えがあった。
陽光に煌めく長い銀髪、全てを見透かしたような銀の双眸、彫刻の如く完璧な顔立ち。
「妖偽教団幹部――」
背中にあった黒翼がすぅっと消える。彼は前髪をかき上げ、薄い唇を歪めた。
「熾堕、参る」
黒衣をまとった長身が動き出した。

第十八話　防戦＆lt;上＆gt;

熾堕は一直線に走り出す。
向かう先にいるのは……風馬。
「風馬！」
「くっ」
日影の声に我に返ったか、風馬は腰のホルダーから銃を引き抜いた。
遅滞無く銃を構え、素早く引金を引く。
銃声が二度響いた。風馬は更に引金を引こうと指に力を込める。
しかし熾堕は先に放たれた二発の銃弾を上体をひねって避けた。
一息で間合いを詰め、裏拳で銃の軌道をそらす。よろめいた風馬に、回し蹴りを喰らわせた。
銃声と共に、風馬は家屋の障子に突っ込んだ。障子はバラバラになり、風馬は昏倒してしまう。
「っの野郎！」
雷雲は日影の制止も聞かずに跳び上がり、槌を振り上げた。
骨さえ粉々に砕くであろう一撃を、熾堕は左手でたやすく受け止める。
「ふむ、なかなか。だが」
熾堕は槌ごと雷雲を投げ飛ばした。
五メートルも離れた木に叩き付けられ、雷雲は動けなくなってしまう。
身体の向きを変えようと熾堕が振り返った瞬間、日影は扇を開いて振った。

「六の舞、桜乱剣（オウランツルギ）！」
扇を向けられた熾堕の周りを、無数の白い花びらが覆った。
「桜の下には死体が埋まってる……桜のように、その花びらを血で染めなさい！」
日影が言ったとたん、花びらは熾堕の全身を斬り裂いた。
声を上げることもなく、肉を斬る音を響かせ続ける熾堕。
銀髪や白い肌が血まみれになるまでその攻撃は続くが……なぜか倒れない。
息はあっても、あれだけめった斬りされたのだ。筋肉はずたぼろで、立っていられるはずがない。
攻撃が止み、明らかに失血死にいたるほどの大量の血が地面に染み込んでも、熾堕は立っていた。
「ど、して……」
日影は後ずさった。
「ふん……椿　悠といい、退魔師の女は容赦無い」
熾堕はまだらに赤く染まった前髪をかき上げた。
吹き出していた血の量が減じている。数秒もしない内に、血は完全に止まってしまった。
「そんな馬鹿な」
雄輝がぼそっと呟いた。声が震えている。
「こんなに早く傷が塞がる妖魔なんて、聞いたこと無いぞ！」
「妖魔と一緒にされるのは心外だな」
熾堕の眉間にしわが寄った。
「まぁ仕方が無いことか。それより」
熾堕はぐるりと退魔師を見渡した。
「かかってこいよ。どこを攻撃しても、無駄だがな」
「なら頭はどうだ」
かちり、という音が聞こえた瞬間、爆発音と共に熾堕の頭が吹っ

飛んだ。
　熾堕の身体は頭に引きずられるようにして倒れる。もうぴくりとも動かなかった。
「頭に銃弾受けて、生きてる奴はいないだろ」
　風馬は構えていた銃を下ろして短く息を吐いた。
「大丈夫ッスか！？」
　猛が問えば、風馬は障子の残骸から立ち上がりながら「あぁ」と頷いた。
「しかし何だ、あいつは。悠からあの男のことは聞いていたが、あそこまでとは思ってなかった」
　風馬がそう言った時、衝羽根（ツクバネ）家の退魔師達四人が駆け付けてきた。
「皆さん、向こうで妖魔達が……」
「門を破ってきたの？」
　舜鈴に尋ねられ、一人が頷いた。
「よし。全員そっちに……」
　歩きかけた風馬の足が止まった。
　風馬だけではない。全員根を張ったように、その場から動けず、ある一点を凝視する。

　熾堕が立ち上がった。

「頭を撃たれて死なない生き物はいない、か。その通りだな。もっとも」
　熾堕はけふっと一発の弾丸を吐き出した。ぬぐったこめかみに、銃創は無い。
「それは地上の理（コトワリ）だろう？　俺には当てはまらない」
　誰も何も言わなかった。いや、言えなかった。
　目の前で起きている現実は、数秒で処理するのは不可能なものだった。
「ふん……手応えの無い。おまえ達はかなりの実力者だと思ってい

たのは、俺の買い被りか」
　熾堕は酷く失望したような顔をした。
「俺も向こうに行くか……しかし服がこんなにボロボロじゃなぁ……」
　熾堕が考えあぐねいているのを見て、猛は熾堕の前に立った。
「熾堕！」
「ん？」
　槍を構えた猛は、僅かに震えながらも声を張り上げた。
「おまえ、橘家の人間を殺したか？」
　しばしの沈黙。やがて、熾堕の薄い唇に微笑が浮かんだ。
「さあ？」
　その、相手を小馬鹿にしたような笑いに、猛は表情を厳しくした。
「『鉤槍姫（カギヤリヒメ）』、部分解除！」
　両手使いで槍を振り上げ、熾堕に向かって突き出す。
「業火魔槍（ゴウカマソウ）！」
　柄まで覆う炎と共に、槍の刃で熾堕の胸を狙う。

　ガィィィィィィィィンッ

「なっ……」
「さすがにこれ以上は示しがつかないだろう？」
　槍は止められていた。
　いつの間にか熾堕の手に握られていたレイピアに防がれたのだ。
「そろそろ本腰を入れさせてもらう！」
　右膝が猛の腹に打ち込まれた。
　猛は吹っ飛ばされ、地面をごろごろ転がる。
　それを追撃しようと走り出した熾堕の頭上に刃が振り下ろされた。
　熾堕は足を止め、レイピアを持ち上げる。火花を散らして刃同士がぶつかり合った。
　その反動で地面に降り立ったそれを、熾堕は目を細めて見つめた。

「『傀儡姫（クグツヒメ）』か……」

そう呟き、上体をひねる。さっきまで熾堕の胴があった場所をクナイが通り過ぎた。

「敵はまだまだいるってこと、忘れないで！」

舜鈴は両手に逆手でクナイを持ち、熾堕に向かっていった。

右のクナイを一閃。熾堕がそれを受け止めると、左のクナイも振るう。

熾堕が身体をななめにしてそれを避けると、舜鈴は右足を振り上げた。

熾堕は身を後ろに投げて回避する。舜鈴もまた蹴りの勢いを殺さずに大回転で後ろに下がった。

「『蹴鞠姫（ケマリヒメ）』、部分解除！」

張り上げられた声と共に何かが熾堕に襲いかかった。

熾堕はレイピアでそれを弾き返す。球体のそれは、雄輝の元へ戻っていった。

「ふぅん……変わった武器だな」

熾堕はサッカーボールのように雄輝が踏みつけている球を見つめた。

黒地に紅がかった金の美しい模様が描かれた鞠だ。模様は梅か桜だろうか。はたまた想像上の花かもしれない。

「……ビビってるわりにはキレのあるシュートだったな」

熾堕は視線を雄輝に向けた。

「ま、負けるわけにはいかないんだ」

雄輝は鞠から足を下ろした。

「おまえらに殺された、仲間のためにも！」

勢いよく鞠が蹴飛ばされた。スパークをまとい、閃光のように熾堕に突っ込む。

今度は熾堕も受け止めなかった。さすがに危険と感じたのだろうか。

「逃がさないわよ！」

日影が扇を垂直に構え、その場で一回転した。
「十の舞、流蛟(ナガレミズチ)！」
扇の先から水があふれ出たと思うと、それが四本の足を持つ蛇をかたちどった。
水の蛇は大口を開け、熾堕を飲み込む。
「雄輝、さっきのをもう一発よ！」
「は、はいっ」
雄輝は戻ってきた鞠を水蛇に向かって蹴り飛ばした。
スパークをまとった鞠は水蛇にぶつかり、電流を走らせる。水中で電撃がはじけるのがはっきり見えた。
「よし、今度こそ……！」
歓声を上げかけた日影の表情が固まった。
水蛇の様子がおかしい。膨張したり、収縮したりしている。
それを何度か繰り返した後、盛大な音を立てて水蛇が破裂した。
飛び散る水。全員がその水を頭から被った。
「随分な真似をしてくれるな」
水蛇から出てきた熾堕が、全身を水浸しにしながら濡れて艶(あで)やかに輝く銀髪をかき上げた。
上半身の服はぼろぼろでもはや布切れでしかない。細く引き締まった身体には傷一つ無かった。
「そんな……嘘……」
日影は後ずさった。
日影だけではない。濡れねずみとなった全員が恐怖で動けなくなる。
「ふん……終わりか？」
熾堕は薄く笑って一歩踏み出した。が、その足が止まる。
突然家屋の一部が爆破されたからだ。爆破に巻き込まれたこの家の退魔師達は、残骸に押し潰されて見えなくなる。
「何だっ」
猛は振り返り、爆破された場所を見つめる。

「随分なりだな、熾堕よ」
土煙からゆらりと、一人の男が現れた。背後からは、怒号と悲鳴が聞こえてくる。
「手を貸そうか？　ぬしには借りがある」
「……それには及ばないよ、亜紅妥法師（アクタホウシ）」
熾堕は右腕に残っていたそでの布を引き裂き、地面に捨てた。
「こいつらは、俺の獲物だ」
構えられるレイピアに、猛達の身体が固まった。
向こうの離れから火の手が上がる。家屋が崩れる音もするが、気を向けるだけの余裕は無かった。
誰もが緊張して物音一つ立てられない中で、熾堕の姿が消えた。
いや、消えたのではない。姿勢を低くしつつ走り出したのだ。
腕を伸ばし、まだ木の根元でうずくまっている雷雲の首を掴む。
「まずは一人」
熾堕は剣を持ち上げた。
「貴様！」
風馬が熾堕の背に銃口を向けた。
熾堕は唇の端を持ち上げ、風馬に向かって雷雲を投げ付ける。
雷雲を受け止めた風馬に、熾堕は間合いを詰めて蹴りを放った。
雷雲と共に蹴り飛ばされる風馬。入れ替わりに舜鈴が『傀儡姫』と共に突っ込んでいった。
『傀儡姫』の剣を受け止めた熾堕に、舜鈴がクナイで腹を狙う。
しかし熾堕が左膝を振り上げたために後退せざるをえなくなってしまった。
更に熾堕は『傀儡姫』を拳で殴り飛ばす。人形の身体が空中へ舞った。
「くっ……『傀儡姫』、部分解除！」
舜鈴が叫ぶと『傀儡姫』が地面に降り立った。
剣はいつの間にか消えている。しかも手の代わりに両袖から五本ずつ、合計十本の細身の刃が飛び出していた。

「へぇ」
　熾堕は面白そうに唸る。
『傀儡姫』は地面は蹴って右手を一閃させた。熾堕はそれを受け止め、弾き返す。
　人形は上半身をひねり、右足を旋回させた。
　蹴りを受け止めた熾堕は剣を横凪ぎにする。
　人形は上半身をそらし、人間ではできない動きでそれを避ける。

　戦いを息を止めて見つめていた猛は、先程の男がまだいることに気付いた。
　右手が茶色い。木の枝のような腕だ。しかしそれ以外に奇妙な特徴は無い。
（……半妖か）
　猛は槍を握り直すと、亜紅妥法師とかいう男に向かって走った。
　驚いたように振り向く亜紅妥法師に、槍を振りかぶる。
「はあっ」
「ぬう！」
　槍と木と化した腕がぶつかり合った。
「……！　貴様は橘家の……」
　亜紅妥法師の顔色が変わった。
　槍を弾き、猛との間合いを取る。
「……俺はあんたを知らない。何者だ？」
　猛は槍を油断無く構えながら眉をひそめた。
「知らないのも無理は無い。それがしは十年前に橘家を去ったのだからな」
「十年前……？　橘家を去った……？」
　十年前というと、自分が四歳の時か。
　一瞬悩んだ後、ハッと思い至る。
「あんたまさか……禁術を使ったせいで御神木に取り込まれたお袋

の内弟子か！」
「いかにも。あの女め……それがしをないがしろにしおって……」
ミシリ、と音を立てて、亜紅妥法師の顔の皮膚が裂けた。その下から、木の皮のようなものがあらわになる。
「貴様はあの女の息子！　生かしておけるものか！」
亜紅妥法師の木の腕が猛の首へ勢いよく伸びた。
（ヤベッ……）
猛は槍を持ち上げようとしたが、間に合わない。

ボアァァァァッ

「ぬお！？」
亜紅妥法師の腕が突然炎上した。
「炎神招来」
火の玉を放ち、亜紅妥法師の動きを封じた『彼女』は、健を見て首を傾げた。
「君は味方……で合ってるな？」
「あ、あの……？」
「あぁ、合っているな。一瞬間違ってたらどうしようかと思ったよ。橘　猛君」
「え……！？」
猛は目を丸くした。
なぜこの女（ひと）は自分の名前を知っているんだろうか。
「何者だ、貴様……！？」
亜紅妥法師が呻くと、彼女は少しだけ眉根を寄せた。
「わざわざ名乗らなければならないか？　敵に……まぁいいか」
名乗るほど有名でもないが、と前置きして、彼女は手に持っていた杖を構えた。
「西野　紗矢。『卯杖姫（ウヅエヒメ）』の所有者だ」

防戦<中>

流星の拳が当たったとたん、ドアがバラバラに壊れてしまった。
「おいおい……鉄で補強されたドアだぜ。なんちゅー馬鹿力だよ」
獏僧（バクソウ）と名乗った男は廊下に逃れた。
顔に冷や汗がにじむ。その顔は、半分が灰色の分厚い皮に覆われていた。
顔だけではない。腕も同じような皮に覆われている。しかも五指が太くなり、爪が指先全体を覆うようになった。
獏僧は嫌な緑色をした瞳をぎらつかせ、笑う。
「いい化物さ加減だねェ。羽衣姫様が欲しがるのも解るよ」
「俺は化物じゃない。人間だ」
流星はそう反論して小刀を構え直した。
「人間だァ？　ハッ、笑わせんじゃねェよ。見た目は鬼で馬鹿力、しかも黒い炎を操って。これを化物と呼ばずに何とする？」
「……そういうおまえはどうなんだ？」
流星は腰を低く落としながら尋ねた。
「俺？　俺は化物だよ。化物の中の化物さ」
獏僧は楽しげに言った。
「てめェも認めたらどうだよ。もうすでに角まで出てんぜ。てめェを見た人間、百人中百人が化物って言うだろうぜ」
言われ、流星は自分の額に触れてみた。
眉の上部部が盛り上がっている。左右どちらもだ。これ以上大きくなれば、額の皮膚を突き破るかもしれない。
「本当ならすでに理性が無くなって暴れまくってる頃なんだが……その数珠のおかげか？　まだおまえがかろうじて人型でいるのは」

獏僧の視線が流星の手首にはまった数珠にそそがれた。
流星はハッとして数珠を見下ろす。
（悠、もしかして……）
流星は奥歯を噛み締めると、だっと走り出した。
「いきなりか！」
獏僧は右手を上げた。
黒い炎をまとった小刀と異形となった右手がぶつかり合う。
防がれたのと同時に、流星は右足を振り上げた。
獏僧は後ろに下がるも、避けきれずに顎に蹴りを喰らう。
しかし流星が足を下ろすと同時に頭突きをしてきた。
直撃した頭を押さえながら、流星はたまらず後退する。廊下の床がきしんだ音を立てた。
無理して戦えば床が抜けるかもしれない。しかし、それを気にして勝てるほど相手が甘いとも思えなかった。
（何より悠の心がいつまでもつか解らない！　早くここから出ねぇと！）
流星は小刀の炎をかまいたちにして放った。
獏僧はそれを左手でかき消し、流星に突っ込んでいく。
流星は炎を長い刃にして獏僧へ横凪ぎに振った。獏僧は紙一重でそれを避け、流星に飛びかかる。
流星は振り下ろされた右手を受け止め、よろよろと後退した。
とん、と背中に壁がぶつかる。もう後が無かった。
「終わりだ」
舌なめずりするような獏僧の声。それを、流星はにっと笑って押し返した。
「かかった」
刃の炎が膨張した。
「な、なぁ！？」
獏僧の狼狽した声。それを封じ込めるように、彼の身体を黒い炎が包んだ。

「っぎゃあァァァァァァ！　てめっ、何をっ……」
「炎に包まれたおまえを想像しただけだよ」
廊下でのたうち回る獏僧をそのままにし、流星は再び室内に入った。
「悠、おいしっかりしろ！」
流星が上体を起こしてみるも、悠は一向に目を覚まさない。
その代わり、ぶつぶつと呟いていた言葉が明瞭に聞こえてきた。
「ゆ、う……？」
呆然としている流星の前で、白い頬に涙が伝う。悠は何度も同じ言葉を繰り返していた。

産まれてきて、ごめんなさいと。

何でそんなことを言うのか全く解らなかったが、その言葉はあまりにも哀しいもので、流星は言葉を失う。
しかしすぐにハッとすると悠を抱きかかえて立ち上がった。

「逃がすかよ」

言葉が背中に投げかけられた。
振り返ると同時に全身に衝撃を喰らう。
「が、はっ……」
悠をかばいながらふんばるも、耐えきれずに後ろの壁に衝突した。
ずるずると座り込む流星の前に、全身を焦げ付かせた獏僧が顔をしかめさせて立った。
「全く……とんでもねェ餓鬼だぜ。こっちの計画が大狂いだ」
獏僧の指先を覆う爪が鋭くとがる。それを見た流星はぎゅっと悠を片腕で抱き寄せた。
「……おい、邪魔なんだけどよ」
「うるせぇ」

「そいつは親殺した餓鬼だぜ。かばう必要あんのか？」
「うるせぇよ！」
流星はきっ、と顔を上げ、獏僧を睨み付けた。
よほど凄い形相だったのか、獏僧はひきつった顔で後ずさる。
「おまえに悠の気持ちが解るかよ！　悠はおまえらとは違う。殺しなんてしたくなかったんだ！」
「……そいつ、母親を憎んでたみたいだけど？」
「それでも、殺したいとは思わなかったはずだ！　いや、例え殺したいと思っていても、悠は人殺しの哀しさや虚しさを知ってる。殺しをして喜んでるおまえらとは違う！」
流星は小刀を持ち上げた。
「俺はおまえ達みたいな奴らの仲間にはならない。俺の力は、守るために使う！」
流星がそう言った時――

ダンッ

目の前に銀色の何かが飛び込んできた。
ふわりと広がる九本の尾に、流星は目を瞬かせる。
「し、朱嶌……？」
『ご無事ですか、流星様』
銀色の狐はくるりと振り返って軽く頭を下げた。
「や、やっぱり朱嶌！？　ってかその姿……」
『私の本来の姿です』
狐はそう言って（それが声なのかどうかあいまいだけども）獏僧に向き直った。
『半妖、この方達に手出しは無用。去りなさい』
「天狐か……戦いたくねェがそうもいかねェんだよ！」
獏僧は腕を狐に向かって振り下ろした。
狐は横に避け、その際に流星の学ランの襟をくわえる。

「え、え、えぇぇぇぇ！？」
そのままもの凄い速度で引きずられていく流星は、悲鳴を上げるしかなかった。

「っち。逃げたか」
獏僧は人間の姿に戻りながら舌打ちした。
追いかけてもいいが、あいにく足が遅いので追い付くのは無理だろう。
「あー俺何でスピード無い妖魔と合体したんだろ……せめて鴉天狗（カラステング）とかなら飛べたのによォ」
呟きつつも、今の状態がベストだということは解っている。
それぞれの人間には適応というものがある。半妖は自分にもっとも『近い』妖魔と融合しなければならない。
そうでないと肉体を喰われるし、しかし、それでも半妖は常に精神を喰われる危険性がある。それを避けるための人肉喰らいだ。
適応できなければ喰われる。
喰わなければ喰われる。
しかし得られる力は……大きい。
「……けっ、まァいいか。次がある」
唇を歪ませ、獏僧は腕を組んだ。
「いずれ気付くさ。守る力なんざありゃしねェと」
触れた壁が少し崩れる。それを見つめながら、獏僧は目を細めた。
「力を持つ者は破壊者だ。それ以上にもそれ以下にもなれねェんだよ」

――――

屋敷の外に出た。
しかも門とか裏口とかではなく、塀を跳び越えて。

「ぐえっ……首、しまる……」
『失礼いたしました』
首をばんばん叩いた流星を、狐はようやく離した。
流星は息を長々と吐き、無意識の内に悠を抱き締める。
「……あ、そういえば『剣姫』……」
『すでに回収しております』
狐が右前足で刀を前に出した。
紅の柄の刀……『剣姫』だ。
『ここは一旦退きましょう。……ですがその前に、流星様のお姿をお姿を戻さなければ』
「そ、そういえば……」
流星はまだ自分が鬼であることに気が付いた。
「そうだな……このカッコじゃ戻るに戻れないし……人間に……」

間。

「……戻り方解んねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
流星は絶叫した。
ここは住宅街であり、人に見られたらかなりやばいのだが、幸いにも誰も来なかった。
「え、どうすんの!?　俺一生このまま!?　あれ、でもこの間戻ってたよな……でもほとんど覚えてねぇよ！　意味無ぇよ！」
一人で騒ぐ流星。見た目が見た目なので、暴れまくってるようにしか見えない。
そんな彼に、狐は尾で持ち上げた『剣姫』の鞘で一撃を喰らわせた。
「あだっ、何す……」
『そんなことではいつまでたっても戻れませんよ』
狐の一言に、流星は目を見開いた。
「へっ……どういう？」

『その姿は、いわば興奮状態です。怒りなどが色濃く表に出ている状態。心を落ち着かせれば、元に戻れます』
流星は狐の言葉に顔をしかめる。
「落ち着かせるっても……」
『目を閉じて……静かに。そう、そのまま深呼吸。吐息の音だけを意識してください』
狐に言われるまま、流星は呼吸を繰り返した。
そるとふと、何かが消失したような感覚を覚え、目を開けた。
手が元に戻っている。額に触れてみるが、角など無かった。
「よかったぁ……」
流星はほっと息をついた。
『では、椿家に転移します』
「え、でも人柱は？」
流星は小刀を鞘に戻しながら尋ねた。
『すでに戦いが始まっていますが、今から行けば、かえって邪魔でしょう。それに、悠様のこともありますし』
「そう、だったな」
未だ目を覚まさない悠を、流星はぎゅっと抱き寄せた。
『では、転移いたします』
言下と共に視界がぶれた。

何度か目をしばたかせた後、見慣れた椿家を確認して力が抜けた。
悠を落とすことは無かったものの、その場にへたり込んでしまう。
「大丈夫ですか？」
いつの間にか人型に戻っていた朱嶌が顔を覗き込んできた。
「大丈夫……。それより、恭弥と刀弥さんは」
立ち上がろうとした流星が顔を上げると、着流し姿の青年が走り寄ってくるのが見えた。
「刀弥さん……」

「悠、流星？　一体どうしたんだ！？」
刀弥ははだしのまま駆けつけると、悠の様子を見て眉をひそめた。
「何があった？」
「あの……」
一言で説明するのは難しい。長々と説明しても伝えられる自信も無い。
流星が言いかねていると、刀弥は膝を着き、悠の額に触れた。
「……とりあえず、悠を家の中へ。話はそれからだ」
刀弥の言葉に、流星は黙って頷いた。

流星は大広間の畳の上にほこりだらけの学ランを置いた。
流星自身は何とも無いが、制服は少しボロボロになってしまっている。まぁ洗えば何とかなるだろう。
「……おまえの話、いまいち解らないが」
目の前に座った刀弥はハァァ、とため息をついて片手で顔を覆った。
「しかしおまえが知らないことを……俺達しか知らないことをおまえが知ってるとなると、信じるしかないな」
刀弥の顔は酷く辛そうだった。
当たり前だ。あれは他人に触れられたい過去ではあるまい。
「……刀弥さん、大学行ってたんですね」
「……あぁ。一年でやめたがな。今行ってたら、四回生か」
沈黙。
互いに何も喋らないし動きもしない。
女中が二人の目の前に茶を置いて出ていくまで、それは続いた。
「……悠は」
先に口を開いたのは、流星だった。
「多分悪夢にうなされてたんだと思いますけど……うわごとみたいに何度も繰り返していました。産まれてきてごめんなさいって」

刀弥の表情が変わった。顔から手を離し、呆然とする。
「あいつはまだ、そんなことを……」
固まってしまった刀弥に、流星は「刀弥さん?」と声をかけた。
「だ、大丈夫ですか?」
「あっ。あぁ、まぁ……」
刀弥は我に返ったように流星を見返した。
「悪ぃ……あいつはまだ三年前のことを自分のせいだと考えてると思うと、何かな」
「自分のせい……」
流星は何と返していいか解らず、口を閉ざした。
「これ以上は悠に訊いてくれ……。俺が言えるのは、おまえが見たことは、三年前に確かにあったというだけだ」
刀弥の表情はすでにいつも通りに戻っている。しかし切れ長の瞳はぐらぐら揺れていた。
「三年前、あの日は一気に色んなことが起きた。空は穏やかな青なのに、この家では騒がしくてさ。義母兼叔母が死んで、人柱だった大伯父が狂い死んで、弟が人柱に選ばれて……」
「選ばれて……?」
流星は刀弥の言葉を繰り返した。
「毒を盛られたばっかで、それで人柱に選ばれたんですか!?」
「椿家の中じゃ、あいつが一番適任だったんだ。親父の奴、恭弥に呪をかけた時は今にも発狂しそうな顔してたよ」
刀弥は目元を押さえてため息をついた。
「そしてそれからなんだよ……恭弥が泣かなくなったのは」

防戦<下>

紗矢の持つ杖の宝玉に光が灯る。
「雷神招来」
宝玉が亜紅妥法師に向けられた。
「電光砲撃！」
宝玉から膨大な量の電撃が放たれた。亜紅妥法師の近くにいた猛は、慌てて後ろに下がる。
スパーク音が鼓膜を貫いた。目の前が電撃のせいで白に覆われる。
「な、何！？」
遠くから日影の声が聞こえてきた。しかしそれもかき消し、電流の弾ける音は鳴り響く。
それらがおさまった頃には、土煙が巻き起こっていた。
「げほっ……あ、あいつはどうなった……！？」
猛はまだ奥でちかちかする目を凝らし、辺りを見渡した。
土煙が晴れてくる。明瞭になってきた視界に、亜紅妥法師が飛び込んできた。
「なっ……！？」
猛は目を剥く。
亜紅妥法師が生きていたから、ではない。
耳にシューシューという音が届く。何かが溶けるような音だ。
そう溶けていた。
木でできた日本家屋か。亜紅妥法師がちょうどさっきまで立っていた場所が。
どろどろに溶けていたのだ！

ぎりぎりで避けたのだろう。焼け焦げを作った亜紅妥法師は、呆然と紗矢を見つめた。

「ぬ、ぬしは一体……」

「言っただろ。西野　紗矢って姫持ちだ。それ以外に言う言葉は無い」

紗矢は少し面倒臭そうに言った。

「あえて付け加えるなら、少し参戦が遅れた、かな」

その言葉で我に返った猛は、慌てて声を張り上げた。

「い、今の！　もし人がいたらっ」

「それは無いから大丈夫」

やけに自身がある言い方だ。そんな根拠、どこから来るのだろうか。

「わけの解らん……ことを！」

亜紅妥法師が自失からよみがえった。あなどれないスピードで紗矢に迫る。

紗矢は冷静な顔付きのまま、爪先で地面を軽く蹴った。

ボゴォッ

亜紅妥法師の足元の地面が割れた。

獣の頭のように土が盛り上がり、亜紅妥法師をぱっくり飲み込む。

「……何、今の？」

猛が呟いたのも紗矢は意に介さず、戦い続けている『傀儡姫』と熾堕の方に杖を向けた。

「李　舜鈴さん！　その人形下げてっ」

いきなり呼ばれた舜鈴はぴくんと肩を震わせ、いぶかしげな顔で紗矢を見つめた。

しかしすぐさま「戻って！」と声を上げて人形を下がらせる。

熾堕の方は振り返り、眉をひそめる。何かを言おうとしたようだ

が、それを紗矢が許さなかった。
「炎神招来、業火炎砲！」
宝玉からあふれんばかりの炎が飛び出した。
身動きする間も無く、熾堕はその炎に飲み込まれる。
地鳴りのような音に呼応して炎がくねり、空気をなめる。上空が熱のせいで揺らいでいた。
「す、凄い……これならあいつも」
「いや、まだだ」
日影の言葉を遮り、紗矢は首を横に振った。
「あれは簡単に死ぬ存在じゃない」
炎を放った紗矢自身の言葉だが、どうも信憑性が無い。
あれだけの炎だ。骨だって残らないだろう。
いくら頭を撃ち抜かれても死ななかったとはえ、全身が焼失してしまえばさすが再生は無理だ。

「やるなぁ」

しかし甘っかった。その予想はあえなく吹き飛んだのだった。
「人間がこれほどの炎を出せるとは、こちらは期待以上だな」
炎から声が流れてきた。その奥から人影が現れる。
炎は防がれていた。熾堕自身は無傷だ。
ただ彼の背中に生えた黒い翼が、白い煙を上げていた。
それだけだった。他は何ともない。
（そんな……あれが効いてない！？　翼で防いだみてぇだが……あの炎を翼だけで遮断できるもんなのか！？）
猛は軽く混乱していた。
直接攻撃、炎も効かない。なら何で倒せるというんだ！？
全員が後ずさる中で別の音が、なぜか全員の耳にはっきりと聞こえてきた。
僅かな音のはずだ。なのにいやに大きい音。

カリッ
クチャッ
ゴリッ
グチュッ
ミチッ
ジュクッ

耳を塞ぎたくなる、背筋を逆撫でする音。
全員その場から動けなくなる。誰かがつばを飲み込む音がした。
それは猛だったかもしれないし、日影だったかもしれない。
もしくは彼女が肉を飲み込む音、か。
「あはん♪　退魔師勢ぞろいねん♪」
全員ぎこちない動きで振り返った。
「んふふ♪　いいわねん、注目されるのは♪」
ぞっとするほどの美貌、長く豊かな髪、豊満な身体を包む黒衣。
「おや、羽衣姫様。狩りはお済みですか？」
熾堕がそう問うと、紅い唇が弧を描いた。
彼女の右手には、えりを捕まれ引きずられる男がいる。
いや、いる、という表現はふさわしくないだろう。
頭を砕かれたそれは、もう生気が無かった。
「ええ、ツマラナイ狩りだったわん♪　ところで……いい格好ね、熾堕ちゃん♪」
羽衣姫は含み笑いを浮かべた。
首を巡らせて退魔師達を見、ふと猛に目を止める。
「んまぁ♪　そこにいるのは橘　猛ちゃん！？　お久しぶりぃん♪」
羽衣姫は笑顔をはじけさせ、猛に近付いた。
「貴方のお母様には感謝してるのよん？　妾に身体を提供してくれたことぉん」
「ふっ、ふざけるな！　勝手におまえが奪ったんだろ！？」

猛は声をはげまして張り上げた。
（こいつがお袋を奪った！　親父も、みんなも！！）
ゴォッ、と槍に光が炎のように灯った。
槍を持つ腕にまでその光は及び、猛は地面を蹴った。
「羽衣姫ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
槍の先端が羽衣姫の額に迫る。羽衣姫は右手を上げて――

辺りが霧に包まれた。

何も見えない濃霧。空も見えず、しかも目の前にいた羽衣姫はいない。
「何で……」
呆然と呟く猛。同時に意識が遠のく。
「う、くぅっ……」
何とか耐えようとしても、身体が言うことを効かない。
猛はそのまま、地面に倒れ伏した。

「全く世話のかかる……」
白い着物を着た白い髪の白い女は、ため息混じりに呟いた。
「恭弥様も人使い、いえ、雪女使いが荒いわ」
濃霧の中の言葉も主に伝わるはずもなく。
「……まぁ、私はそのために創られたのだけれど」
そう。創られた。
主の血から、主の手で。
「さぁ、命令は忠実にこなさなければね」
女はそう自分に言い聞かせた。

それが自分の存在意義。
あるということの証明だから。

消えた。
そこにあったはずの、人間全て。
「……どういうことん？」
羽衣姫は眉をひそめた。
「何の前触れも無く消える？　そんなことありえるのん？」
熾堕は尋ねられているのに気付き、首を横に振った。
「いえ。これは消えたのではなく、見えなくなったのです。ですが、おそらくもうこの場には誰もいないでしょう」
そしてそれをしたのは第三者、そう感じていたが黙っておいた。
ここでそんなことを言えば、『傍観』ができなくなるかもしれない。
「んん？　幻覚ってことぉん？　よく解らないわ……」
一方羽衣姫は首を傾げていた。
（これは無知だ……『こちら』のことについて、ほんの一部しか知らない）
熾堕は一瞬そう考えたが、すぐそれを頭の隅に追いやり、笑顔で尋ねる。
「ところで、その男はここの当主ですか？」
羽衣姫は顔を上げ、男の死体を持ち上げた。
「これぇ？　そうよん。でもね、何でかしら。まずいのよん」
ぺいっと地面に投げ捨て、口元をぬぐう。形のいい眉は歪んでいた。
（……身体の変化に気付いてないのか）
熾堕はその考えを先程のようにすぐ止めて盛り上がった土に右手を向けた。
右手を握り締めると、土が破裂し、中からよろよろと亜紅妥法師が出てくる。

「あらん、亜紅妥ちゃん♪　そんなとこにいたのん」
「は、はぁ……」
呼吸ができなくなっていたのだろう。亜紅妥法師の息は乱れていた。
「あの女……何者だ……それがしを封じるとは」
表情に力は無いが、目は輝いている。いや、ぎらついている、という方が正しい。
「あぁ、西野　紗矢ちゃんね♪　あの娘は特別なオプション付き退魔師だものん」
楽しげではあるが、ドスの効いた声。体感温度が十度ほど下がった気がした。
「あはぁ……一手一手で局面が変わる。まるで碁のよう」
石を打つ仕種をする羽衣姫の目は、どんどん血の色に変わっていく。
「でももうそろそろ終盤♪　残る人柱もあと四人……そろそろ、追い込みしようかしらん」
右腕を振り上げ、形の残った家屋に向ける。腕が発光し、光が膨張する。
次の瞬間、家屋が光に焼かれて爆発した。
ぱちぱちとはぜる火。それを見つめ、羽衣姫は唇を歪ませた。
「いい加減、多人数で攻めるのもあきちゃったわねぇん♪」
「と、言いますと？」
亜紅妥法師は恐る恐る尋ねた。罰せられると思い、ビクビクしているらしい。
「ちょっと今から、一人で野蔦家（ノヅタ）襲撃してくるわん♪」
まるで散歩をしてくるというような口調だった。亜紅妥法師は顎を落としたが、熾堕は予想していたので特に反応しない。
その代わり、恭しく頭を下げた。
「そうですか。お気を付けて」
「……そっちもねん♪」

羽衣姫は熾堕と亜紅妥法師に背を向け、足早にその場を去った。
「……また何故急にお一人で」
「焦っておられるのかもな」
それだけ言って、熾堕は空を仰いだ。
すでに日は沈みかけており、赤と群青の美しいコントラストを生み出している。
「焦っておられる？　何をだ」
「俺が知るか」
ずばっと斬り捨て、眉間にしわを寄せる。
（俺の部下が、うまくやっているといいがな）
熾堕はふっと息をついて、一歩踏み出した。

――――

日陰達が戻ってきた。
どうも、もしもの時のために恭弥が配置していた氷華に連れ戻されたようである。
全員特別酷い怪我は無かったが、精神的ショックは大きかったらしい。

「熾堕って奴は不死身かよ……」
唯一ショックが薄かった舜鈴から話を聞いた流星は、口元を覆った。
「頭撃たれても死なないなんて……いや、そもそも生き物か？」
「生物であることは確かだと思うよ」
畳の上に座った舜鈴は、大広間の遠くに目線をさまよわせながら言った。
「気配は生物のものだった。でも私達とは違う。地上の生物とも、妖魔とも違う気配。でもそれ以外の生物がいるなんて聞いたこと無いし」

「確かに……それに奴の言っていたことも気になる。地上の生物の理に当てはまらない生物？　そんなもの存在するのか」
刀弥が難しい顔で考え込んだ。
「とにかく、倒す手が無い以上、牽制などして逃げる手を取ろう。こちらの攻撃が効かないわけじゃないからな」
刀弥の言葉に頷く舜鈴。しかし流星は納得できない点があった。
（あいつは敵なのか？　敵の目をしてなかった。でも剣をこっちに向ける……）
まるで試されているようだ。実力はいかほどか？　と訊かれているようだ。
（……って何で俺、こんなこと思ってんだろ。あいつは妖偽教団。間違い無い敵なのに）
流星がため息をついていると、障子の開く音がした。
振り返って入ってきた人物を見、目を見開く。
「悠！？　起きたのかっ」
少し青白い少女に、流星は安堵の声をかけた。しかし悠は返事どころか目を向けることも無く、刀弥に向かって口を開いた。
「野蔦家がやられた」
「何！？」
座していた刀弥は立ち上がった。
「一日で二人も！？　どこにそんな戦力が……」
「朱華の話だと、野蔦家は羽衣姫たった一人にやられたそうだよ」
悠の声は平静そのものだ。平静過ぎて、冷めたさ以前に機械的に感じる。
「となると、次に狙われるのは白辛樹（アサガラ）家か……」
刀弥はふうっと息をついた。
悠は更に付け加える。
「野蔦家の姫持ちは、外出中だったために難を逃れたそうだよ。今、朱華と一緒にこちらに向かっている」
「そうか……解った。他の奴らにも伝えておこう。もう休んでろ」

「……解った」
悠は頷き、素直に部屋を出ていく。結局最後まで流星の方は見なかった。
刀弥はそれを見送った後、口を開く。
「……そういや、遅れて来たっていう、巫女で創造師の……」
「西野　紗矢サンですか？　今どこにいるか解らないんですよ。流星サン知らない？　ってアレ」
刀弥から流星に視線を戻した舜鈴は目を瞬いた。
「悠に無視された……」
流星は、現在進行形で落ち込んでいた。

――――

人の気配を感じた恭弥は、ふとんから起き上がって障子の向こうに声をかけた。
「入ってもかまいませんよ」
「……鋭くて助かる」
入ってきたのは、二十歳ぐらいの女性だった。
女性は虚無な瞳を恭弥に向け、胸元に手を当てる。
「西野　紗矢。……君が椿　恭弥か」
「はい」
恭弥は頷き、畳の上に座るよう促した。紗矢は示された通り、畳に座る。
「……ふむ」
紗矢は一つ唸り、口を開いた。
「あたしは以前、悠ちゃんはあたしと同じだと思った。しかし……性質的には君と似ているかもしれない」
「僕も同意見です」
恭弥はにっこり微笑み、しかしすぐさま真顔になった。
「貴女が来たのは、僕がやろうということについてですか」

疑問ではなく確定だ。彼女の能力(ちから)なら、すぐ気付くだろうと踏んでいたから。

そして……

「そう。君のやろうとしていることについて、一つ提案がある」

紗矢は少しだけ前に出た。

「あたしも一つ、乗らせてくれ」

「……なぜ？」

「君ほど頭のいい人間なら、言わなくても解るだろう」

やはりこちらの考えは筒抜けのようだ。予想に違(たが)わずに。

「君の考え通りだ。羽衣姫を倒すには、これしかない。君の兄は反対しているようだが……」

「酷いとは思わないんですか？」

恭弥は不思議そうに尋ねた。

「僕がやろうとしていることは、僕達人柱が死ぬことが条件ですよ」

「……返答は解ってると思うけど」

紗矢はふ、と短く息を吐いた。

「正直、これは正しくない。確率的に、かなり危険な賭けだ。場合によっては、君達は犬死にになるだろう。それでも」

紗矢の瞳が、真っ直ぐ恭弥を見据えた。

「何もせずにはいられない。……そうだろう？」

恭弥は少し視線を下ろし、自分の手を見つめた。

手が震えている。しかしこれは、恐怖やおびえなどではない。

近いのだ。限界が。

「……お願いします」

恭弥は顔を上げ、紗矢に笑顔を向けた。

『どう思うよ？』

部屋に戻る途中、ツバサに尋ねられた。

（どうって……何が）

『あいつ！　絶対何かたくらんでるぜ。イケメンほど腹黒いし』
（うん。確かにたくらんでるな）
そう、自分の代で悲劇を終わらせるたくらみ。
他の者を、生かすたくらみ。
（どうしてかな。儚げな印象なのに、悲愴さが全く無かったそれに）
『それに？』
（……死に足を突っ込んでるのに彼は）
紗矢はここで、考えるのを止めた。
（考えても意味が無い。もうあたしは彼の作戦の片棒をかついでしまってるんだから）
紗矢はため息をついて廊下を迷い無く進んでいった。

第十九話　呪術の師弟＆lt;上＆gt;

白辛樹家（アシガラ）の中庭に接する廊下。
「……大丈夫ッスか？」
猛に声をかけられた流星はのっそり顔を上げた。
その顔に、負のオーラを思いっきりまとって。
「……悠が」
「はい？」
「悠が無視する……」
「……はぁ？」
中庭には流星と猛以外誰もいない。
他のメンバーは一番奥の家屋に行ってしまっているのだ。
全員昨日の戦いでかなり精神ダメージを受けたのに、回復が早いのはさすがと言うべきか。
しかし流星のダメージは比較的小さいはずなのに、まだ落ち込んでいた。
「一緒にいても、目が合っても、声かけてもガン無視！　俺が何したっていうんだよ！！」
「あー……そういうことッスか」
猛は喚く流星を見て苦笑いを浮かべた。
「あいつが無視するってことは……嫌いかー」
「嫌い！？」
「いや、最後まで聞いてくださいよ」
冗談抜きで涙目になった流星に、猛は本気で引いた顔をした。
「もう一つは……関わりなくないか」
「関わりたくない……」

しばらく沈思する流星。ふと顔を上げた。
「それは、嫌いと同義語なのでは……」
「同じようで全然違いますよー。あいつややこしい性格してるから」
猛はあきれたようにため息をつき、顔の前で手を振った。それは誰に対するあきれだったのか。
「……悠のこと、よく知ってるんだな」
「そりゃ幼馴染みッスから。燐のこと知ってますよね。あいつと同じ。ちなみに中学も燐と同じ」
「ふぅん……」
流星はそのまま流しそうになって——はたと気付いた。
「……今日、学校は？」
「人のこと言える立場ですか」
逆にツッコまれた。
「戦ってる方が気が楽なんスよね。こんな心境じゃ、友達とだべったりとかできないし。燐にも電話で『終わってから来てください』って言われました」
あははと笑う猛。しかしその瞳に力は無い。
「正直解らないんスよ。家族の仇を討ちたい。みんなだって、無念を晴らしてほしいと思っているはずだ。なのに」
猛は自分の手の平を見つめた。
「何でですかね。仇を討った後、俺はどうなるのか……想像できない」
憎しみが晴れるのか、否か。虚しさがつのるのか否か。
今、猛の心は大きく揺れているのかもしれない。
「昨日、お袋に恨み持つ奴に会って、そいつの顔見た時、俺もあんな顔してるのかなって思うと、ちょっと」
言葉が途切れ途切れになってきた。
「憎しみで動いて、仇を討つ。気分は晴れるかもしれないけど、それは一瞬だけ。何かが戻ってくるわけじゃ、ないし……」
流星は何も言えなくなってしまった。

ここで慰めの言葉をかけてやればいいのか、それとも選ぶべき選択肢を示せばいいのか。
いや、どちらも違う。
自分はそれができるほど大人ではないし、それが解らないほど子供でもなかった。
今、どのような言葉をかけてもどれも薄っぺらい気がしてならないのだ。
自分はまだ未熟で、こんな時にどうすればいいのか解らなかった。

「ねぇ」

沈み続けていた空気に、凛とした声が響いた。
「そろそろみんなのところに来たら、猛」
悠だった。しかも、猛の名前しか呼んでいない。
ショックで固まる流星に対し、呼ばれた猛は「解った」と返して悠の肩を叩いた。
「流星さんのこと、無視するなよ」
「……」
「俺、二人は割とお似合いだと思うからさ！」
「……意味が解らないよ」
不機嫌そうに悠は返すが、猛は明るく「あはは」と笑ってその場を去った。
猛の姿が見えなくなると、流星と悠の間に沈黙が転がった。
十秒たち、二十秒たち、三十秒たち――
「何とも思わないの？」
ようやく悠が口をきいてくれた。
それを嬉しく思うと同時に質問の意図が読めず、流星は首を傾げた。
「何が」
「……私の過去」

悠は紅い唇をきゅっと噛んだ。
唇を噛みき切ろうかというぐらい、強く。
「何もかも、私のせい。私のせいなの！　でも誰も責めない。それが苦しくて……泣くに泣けなくて……」
悠は胸の前で拳を作った。
「恭兄が泣けなくなったのも、私のせいなの……」
「悠、それは」
言いかけ、流星は口をつぐんだ。
昨日、刀弥は言っていた。
恭弥が泣かなくなったのは、毒のせいだと。

『盛られた毒のせいで、脳の一部が麻痺したんだ。感情を司るところで、日常生活に支障は無いし、笑ったり怒ったりはできるが……哀しむことはできない。つまり、泣くことができないんだ』

前に恭弥は、自分は涙が枯れたのだと言った。
とんでもない。枯れたどころか、栓がされていた。
哀しみたくても哀しめない。泣きたくても泣けない。それがどれだけ苦しいか、流星には想像がつかない。
でもそうなったのは、けして悠のせいじゃなかった。
「悠のせいじゃない。それはおまえのせいじゃないよ」
「でもっ……」
切れ長の大きな瞳が揺れ動いた。今にも溢れそうで、流星の胸をつく。
「恭兄が傷付いてきたのは、私と、私の母さんのせいなのに……どうして、どうして誰も……」
悠は頭を抱え、その場にしゃがみ込んだ。
「慰めなんて欲しくなかった！　大声で怒鳴ってもらう方が、ずっと楽だったよ！」
声が震え声に変わる。悠の足元にポタポタとしずくが落ちたのを

見て、流星愕然とした。
同時に、むくむくと胸の内に、同情以外の感情が膨れ上がる。
「このっ……弱虫！」
思わず叫んでしまった。悠が驚いた顔を上げる。
「泣き虫、弱音吐き、この大馬鹿野郎！」
「な、何っ……」
「いつもの調子はどうしたコラ！　いつもの悠はちょっとムカつくぐらい不敵だろっ」
少し言い過ぎか、と思いつつも、流星は叫ぶのを止めない。
「何弱気になってんだよ。過去がどうだろうと悠は悠だろ？　怒鳴ってもらう方が楽だった？　甘いこと言ってんじゃねぇ！」
流星がびしぃっと人差し指を突き付ければ、悠はぽかんと薄ら口を開けた。
「誰もおまえを責めないのはなぁ、みんなおまえが好きだからだよ！　大切だからだよ！　おまえが傷付いてると思って、みんな言葉を選んで接してくれてんだ、それを！」
流星は目線を合わすために、彼女の前にしゃがんだ。
「責めてほしかったとか怒鳴ってほしかったとか、わがまま言うんじゃねぇ！　解ったか」
「……」
「解った・かー」
「ふみっ！？」
流星は何の反応も示さない悠の両頬を引っ張った。
素面では到底できなかったろうが、今は恋心より怒りが勝った。
「ひゅーへぇー、は、離ひへよっ」
「解ったか？」
「わはっはは！」
多分、解ったから！　と言ったんだろう。悠は赤くなった頬をさ

すり、うる目で流星を睨む。……めちゃくちゃ可愛かった。
「全く……初めて流星が年上に見えたよ」
「初めてかよ！」
せっかく癒されたのにちょっと傷付いた。
「でも……うん、流星の言う通りだね。みんな私を傷付けないよう考えてくれたんだよね」
でも、と言って悠は立ち上がり、目元をぬぐった。
「私が母さんを殺したことは変わらない。消えない事実だよ」
変わるはずなかった。消えるはずなかった。
過ぎ去ったからこそ過去なのだ。どれだけ力を持っていても、どれだけ強くても、過ぎた時間に変化は無い。
忘れることはできるかもしれない。しかし背負うものは、増えはしても減りはしないのだ。
過去を変えられるのなら、やり直しができるのなら、こんなに苦しんだりしない。
「一生消えない罪だから、生きて苦しんで償おうと決めたのに……こんなに揺らいちゃって、馬鹿みたい」
悠は乾いた笑い声を上げた。
力も感情もこもらない、さばさばとした笑み。
（違う。俺が見たいのは、こんな顔じゃない）
流星は立ち上がり、悠の頭をそっと撫でた。
「揺らいだっていいじゃないか。いくらでも迷えよ。俺がどんな時でも一緒にいてやるから。決めるのはおまえだけど、一緒にいるぐらいはいいだろ」
上目遣いでこちらを見上げる悠。流星はなるべく明るく笑いかけてやった。
「いつもの悠でいろよ。人殺しだろうが何だろうが、俺は一緒にいてやるからさ」
きっと支えてくれる人を探してたんだ、と流星は思う。
家族に対して後ろめたさがあって、頼りたくても頼れなかったに

違いない。
最大の庇護者になるはずだった母を殺してしまった苦しみは、流星には正直想像できない。
でも受け入れることは。
一緒にいることは、できるはずだ。
流星はそう思っていたし、そう信じていた。
「……私」
悠が背中に腕を回してきた。驚く流星の胸に、顔をうずめる。
「母さんのこと嫌いだった。憎んでた。でも、殺したくなかったんだよ」
肩が震えている。しゃくり上げる声を、確かに聞いた。
「殺したくなかったの。だって、どんなに嫌ったって私のたった一人のお母さんだったから……！」
震える小さな身体を、抱き締めてやればよかったんだろうか。
でも流星はまだ自分にその資格が無いような気がして、悠の撫で続けた。
「……本当に一緒にいてくれる？」
「……うん」
「いなくなったりしない？」
「うん」
「死んだりしない？」
「うん。少なくとも悠より先に死なない」
「……私のこと、独りぼっちにしない？」
「当たり前だろ」
流星は頭を撫でるのを止め、ふと空を見上げた。
雲が少し多いが、それ以外変わった様子の無い晴れ空だ。
それを見ていると、視界がほんの少しだけぶれたような気がした。

――――

猛が本堂まで行くと、荒い呻き声が聞こえてきた。
「……限界、近そうッスね」
視線の先にいる青年。全身を縄でぐるぐる巻きにされ、猿ぐつわを噛まされている。もがくその様は捕縛された猛獣のようだ。
目は血走り、くぐもった唸り声を上げている。守るべき対象にはとても思えない。
あれが人柱のなれの果てかと思うと、猛はやるせない気分になる。父が同じ人柱だっただけに、あれが他人事には思えないのだ。
「術で眠らそうにも、彼、生まれつき術が効きにくいらしいしね」
日影が壁に寄りかかりながら言った。
「苦しみを和らげようがないの……ああして、自身を傷付けないようにするのがせいいっぱいだわ」
「……彼の精神力が弱いのも原因の一つだ」
ぼそぼそとした声に猛が顔を向けると、紗矢は一瞥もくれずに日影に言った。
「精神の方が完全に崩壊している。恭弥君はまだ持ちこたえているのに、随分な差だ……」
「でも、だから恭弥さんの方が楽ということではないでしょう」
日影の言葉に、紗矢は小さく顎を引く。
「勿論。むしろ、精神力の強い方が苦しい。弱い奴はすぐ折れることができるけど、強い奴はなかなか折れない。折れられない。強さがかせになっているから」
紗矢の目がじっと、人柱を見据えている。猛は視線を追いかけ、すぐ紗矢に戻した。
「強さがかせ？　強い方が、自由が多いと思いますけど」
紗矢は顔を猛に向け、無表情のままじっと見つめた。
顔をひきつるのを感じた猛は後ずさろうとして、すぐ後ろが外であることを思い出した。
何というか……紗矢の顔は表現でも何でもなく、冗談抜きで能面みたいだ。

細い目といい、丸みを帯びた顔といい、彼女の顔は能面そっくりだった。

「悪かったな、能面みたいな顔で」

「うおっ！？」

思っていたことを指摘され、猛は飛び上がりそうになった。

（そういえばこの人、巫女だっけ）

人の生き筋を読み、心を読む者。それが彼女だ。

つまり、心の声も彼女の前では口にしているのと一緒である。

「ご、ごごごめんなさい」

「別に気にしてない」

本心からの紗矢の返答だったか、無表情なのでいまいち猛には伝わらなかった。

むしろ怒ってるのでは？　という思いを増幅させてしまう。

図体のでかい男（十四歳なのでまだ少年なのだが）が自分より小柄な女性にビビる。はたから見れば、さぞ滑稽だろう。

頭の隅でそう思いながら、猛は今度こそ後ずさった。

「っと」

「へ……？」

背中に誰かが当たった。

「あ、あれ？　あんた、もしかして……」

首を捻り、ぶつかってしまった人物を見た猛は目を見開く。

背の高い男だった。百七十以上ある猛よりずっと高い。百九十以上あるかもしれない。そのわりに細身で、しかしひょろりとした印象を受けないのは、服越しでもちゃんとした筋肉がついてるのが解るからだろう。

顔立ちは落ち着いた物腰をそのまま映すように穏やかで、それでいて整っている。それゆえにどこか人らしさの抜けた顔でもあった。

「橘の長子か」

男は艶を持った自身の髪を指ですいた。色は灰色で、顔が若々しいだけに年齢不詳に見える。
「り、龍石（リュウセキ）さん!?　やっぱり」
猛の声に、その場の全員が男を見る。男――龍石はこちらに向く顔を一巡した。
「全員……ではないのか」
「龍石さん？　なぜ貴方がここに……」
風馬は眉をひそめて前に出た。
「きっと加勢しに来てくれたんですよ！　心強い」
雄輝が嬉しそうな顔をした。
だとしたら本当に心強い。彼の強さは、ここにいるほとんどの人間が知っている。
何せ龍石は――

「全員そいつから離れろ！」

紗矢が突然大声を上げ、杖先から火球を打ち出した。
あっけにとられる皆を横目に、龍石は向かってきた火球を素手で明後日の方向に弾き飛ばす。
よく見ればその手はうっすら発光しており、火球を弾くとすぐにその光は消えた。
「……何をする？」
龍石はろくに表情を動かさず、じっと紗矢を見つめた。
ガラス玉みたいな目が、じっと。映すように。
「その服でそれを訊くか。心を読むまでもない」
彼女の言葉に、猛はそこで初めて気付いた。
龍石の服。黒衣で解らなかったが、よく見れば少し変色している。
しかも、水が染み込んだかのように湿っていた。
猛は手を自分の背に持っていった。そして、その手をまた前に持ってくる。

紅かった。ぬめりとした、紅いものが付いていた。
静まり返る一同。龍石は悠然と、懐から呪符を取り出した。
人型の呪符だ。恭弥が使っているものと、よく似ている。
龍石の唇が動く。言ノ葉が、呪符に乗る。
「風那（カザナ）――」
刹那、目の前を大量のかまいたちが覆った。

血の臭いがした。
それはどこから漂ってきているのか解らなくなるぐらい、四方八方から臭っていた。
特に、この家屋内が一番酷い。
壁にも床にも血が飛び散っている。高い天井には、さすがに血は無かった。
唯一の救いは、床に倒れている血の主達が生きていることだろう。
「日影！　猛、ちょっと！！」
悠は日影と猛の元に走り寄った。ニーハイが汚れるのも気にせず膝を着き、二人の首元に手をやる。
「生きて、いるのか……？」
「かろうじてね。でも危ない。一応致命傷は無いけど……でも、何で……」
血染めの部屋に青ざめる流星は、悠の話を半分以上聞いていなかった。
呆然と辺りを見渡す。本当にここにいる人間は生きているのか、と疑いたくなった。
荒い息が聞こえてくる。確かに生きてるのだろう。しかし放っておけば、全員死ぬのではないか？
「致命傷は無いし……出血ほど傷は深くないから、死にはしないよ」
すぐ近くで声が聞こえた。右側を見ると、誰かが上体を起こしている。
「さ、紗矢さん！」

流星は慌てて駆け寄り、紗矢を抱き起こした。
「何があったんですか!?　敵……？」
「あぁ。妖偽教団の人間だ……一人だが、あの男……式神を使った」
式神と聞き、流星はますます青ざめた。
「それって退魔師ってことですか？　じゃ、裏切り者……？」
「……裏切り者は裏切り者だろうがな」
紗矢は顔を歪めて立ち上がろうとした。
服に血が更ににじんだのを見て、流星は再び座らせる。
「無茶しないでくださいよ！　怪我人なんですからっ」
「あぁ……それより、さっき言っていた男が」
紗矢はゆるゆると息を吐いた。
「人柱を……連れていった。おそらく、もう羽衣姫に殺されている」
「っ！　ゆ、悠っ」
「聞いてる」
悠は立ち上がり、細顎を引いた。後ろでは、いつの間に現れた朱雀が日影と猛の治療をしている。
「彼女の言う通り、もう殺されているだろうね……まだ殺されてないにしても、術師が自分が進んだ道筋を教えるようなことはしないだろう」
「じゃ、追いかけるのは……」
みなまで言う前に、悠は首を横に振った。
「そんな……じゃああと、恭弥を入れて二人しかいないじゃねぇか！」
流星は思わず大声を出した。
「……さっき何か言おうとしたよね」
考える素振りを見せていた悠は、流星には答えずに紗矢に目を向けた。
「一体、相手は何者なの？」
「……名を聞けば解る」
紗矢は少しだけ身体を動かして座り直した。

「その式神使いの名は、龍石」
「……！！」
悠の目が見開かれた。唇と肩がわななき、目がつり上がる。
「あの人がっ……！　私達を、恭兄を裏切るなんて！」
「な、何？　何だ？」
あまりの剣幕に、流星は思わず後ずさった。
「どうしたんだよ！　そのリュウセキって人、何なんだ？」
流星が困惑していると、悠はパッと顔を上げた。
表情が歪んでおり、また泣き出すのではないかと流星はどきりとした。
「龍石は……」
悠は赤い唇をぎゅっと噛んだ。
「龍石は、恭兄の師匠だよ」

――――

白辛家襲撃から三日たった。
鼻がむっとする湿気の臭いがかすめ、肌にまとわりつく。それを感じながら、流星は息を吐き出した。
「まだ着かねぇのか？」
「もう少しかかるかな……」
答えたのは恭弥だ。周りの木々を眺めながら、ぬかるんだ土を踏み締めている。
森の中だった。雨明けの朝特有の湿った空気を漂わせる深い森。道なりに進んでいるが、そもそもここが道なのかすら解らない。
なのに恭弥の足取りに迷いは無かった。
「恭兄、ここに来るのって何年振り？」
悠の問いに、恭弥は足を止めて振り返った。
「……四年振りかな」
「なのによく場所覚えていられるよね」

悠はあきれとも感心ともとれるため息をついた。

龍石からの手紙が恭弥の元に届いたのは、一昨日の夜のことだった。

多くは書かれておらず、ただ会いたいとだけ書かれていた。

どう見ても罠なのは明白で、しかし恭弥は行くと言い張った。

普段柔和な恭弥だが、一度決めたら絶対にやるという頑固さも持ち合わせていたらしい。過去にも、周りに反対されつつ、結局最後までやりとげたことがあるようだ。

刀弥との押し問答の末、最後は兄の方が折れたのである。言いくるめられた、という表現の方が正しいかもしれないが。

しかし人柱という立場上、やはり条件はつけられた。

護衛である。道中、そして会ってから、何があるか解ったものじゃない。

それで悠と流星が同行することになったのだ。この点は恭弥もすんなり承諾した。

で、現在三人（と一匹？）は龍石が居を構える東京外の森の奥まで来ているのだが……

「と、遠すぎる……」

流星はその場にしゃがみ込んだ。

もう息が絶え絶えだ。体力には自信があったが、すでにがらがらに崩れてきている。

「確かに、少し面倒になってきたね」

悠も立ち止まり、流星があげた髪留めを付け直した。

「ここで一旦休憩しようか。恭兄、あとどれぐらい？」

「十分弱かな。遅くとも二十分はかからないはずだ」

恭弥は額に薄くにじんだ汗をぬぐった。

「そう。じゃ、私は朱華とその辺を見てくるから、流星と恭兄はここで休んでて」

悠はそう言って朱崋と共に道（どう見ても踏み固められた地面にしか見えないが）を外れた方へ歩き出した。
残された流星と恭弥は顔を見合わせた。
「休んでろっても、なぁ」
「座る場所も何も無いからな」
十七の男二人が森の中でぽつんと立っている。何とも寂しい光景だが、本人達はこの状況に戸惑うしかなかった。
「あーもー。足疲れてんのに足休めらんねーじゃん」
「だな。まぁ……座って服が汚れるよりいいだろう」
恭弥の苦笑に、流星は顔をしかめた。
「……よく笑ってられるよな。今から会う人、おまえを裏切ったんだろ」
目を瞬く恭弥に、流星はますます顔を歪めた。
「怒ったり……そういうこと、しないのかよ」
「……そう、だな。怒るべきなんだよな、僕は」
恭弥は淡く微笑んだ。
「でも、何でだろうな。怒りとか、そういう感情がわいてこないんだ」
「何で……」
「さあ？　僕は普通とは違うからな。自分でも、よく解らない」
恭弥は終始笑顔だった。にこにこと、穏やか過ぎるぐらい穏やかで。
「……おまえほんわかし過ぎ。つか天然？」
「ハハハ」
あきれ返る流星に対し、恭弥は声を上げて笑った。
「自覚はしてる。だが直す気も無いな」
「あー、何か怒ってる俺が馬鹿みたいだ」
敵のところに向かう途中だというのに、交わされるのは気楽な会話だった。
普通ならありえない。恭弥に感化されているのだろうか、と流星

は思う。
（こいつ、悠と似てるけどやっぱ違うな）
悠と違う人間だということになぜかほっとしつつ、流星は再び口を開いた。
「あの、さ」
「ん？」
「恭弥は哀しいって感情がマヒしてるって、本当か？」
ゆっくり問えば、恭弥は目を瞬いて首を傾げた。
「誰から聞いたんだ？」
「……刀弥さん」
「兄さんか……」
恭弥はふっと息を吐いた。
「その通りだ。僕は哀しむという感情が無い。封じ込められている、という方が妥当かもしれないが」
恭弥は笑顔を消し、睨み付けるように遠くを見つめた。
「哀しまないから、自分で言うのはあれだが……普通の人間より、非情な考えができる。でも、それは人としてどうなんだろうな」
「俺に訊かれても……」
流星は返答できずにうつむいた。
流星にとっては哀しむことができるのは普通のことで、もしもできなかったらなんて考えたこともない。
「哀しむ感情が邪魔だと思う人もいるが、僕はそう思えない。哀しみは時として人の暴走を止めてくれることもある」
恭弥は「だが」と再び微笑した。
「深い哀しみは人を大きく狂わせる。考えるたび、僕は感情を取り戻したいのかどうか解らなくなる。いや、そもそもどうしたら戻れるのかすら、解らない」
微笑む顔は、酷く寂しげだった。
彼は感情を取り戻したくないわけじゃない。ただ、解らないだけだ。その時、自分はどうなるのか。

取り戻して、その後自分はどうなるのか、それを知るのが怖いだけだ。

知ることは怖い。なぜなら、それは知らないことだからだ。知った後どうなるかなんて、誰も解らない。

「今から師匠に会って、本当に裏切られてるんだとしたら……その時僕は哀しめるんだろうか。それとも、それ以外のことで……？」

恭弥の言葉はすでに独白になっていた。笑みも残滓すら残っていない。ただ無表情のまま、ここではないとこかを見つめていた。

流星は何も言えないまま、黙って恭弥の横顔を眺めるしかなかった。

悠以上に、何を考えているのか解らない。それは彼に一部の感情が欠けているからなのか、それとも別の理由なのか。

両者が黙って時間の経過を持っていると、足音が聞こえてきた。

二人が顔を上げると、悠と朱華を連れて歩いてくるのが見えた。

行った時と表情がさほど変わってないところから見て、特に何も無かったようだ。

「そろそろ行こう。この辺りには罠もしかけられてみたいだし」

「お、おう」

流星は悠に歩み寄った。恭弥も遅れて彼女に近付く。

「ねぇ、恭兄。あとちょっとって言ってたよね」

「あぁ。多分、そう長く歩かなくてもいいと思う」

恭弥は頷き、先頭を歩き出した。

悠も踏み出そうとして——流星の方を振り返った。

「……どうしたの？」

「あ、いや……」

流星は口ごもった。

「……とりあえず歩こ。それで話して」

ふいに悠は流星の手を取り、彼を引っ張った。

悠の行動にどきりとして転びそうになるも、流星はなんとか歩き始めた。

「で……恭兄と何かあったの？」
悠はじっと見上げてきた。その瞳に促されるまま、流星は先程のやり取りを小声で放す。
聞き終えた後、悠は眉をひそめて地面を見下ろした。
「何で急にそんなこと……」
「悠にも解んねぇのか？」
「うん」
悠は顎を引き、目を軽く伏せた。
「恭兄って、何考えてるか解らない時があるんだよね。頭よ過ぎるし、それが原因かもしれない」
悠は流星の手を強く握った。
「いつもひとり歩きしてる気がするの。一人じゃないけど独り。……昔の私と同じ」
悠は目を開き、恭弥の背中を見据えた。
「恭兄は何でも一人で背負い込もうとする。それは恭兄が強いからだけど、でも強いからって、何でもできるわけじゃないよね」
「……うん」
流星は悠の手を握り返した。
「私、恭兄にいっぱい迷惑かけた。苦しめた。……だから、今度は助けたい」
悠はほんの少しだけ微笑んだ。あまりに綺麗な笑みに、流星の心臓が飛び跳ねる。
「人柱としてじゃない。罪滅ぼしでもない。恭兄自身の命を守りたいの。誰かに言われたわけでもない。これは私が決めたこと」
悠はふ、と息をついた。
「何かをするか否か、全ては、私次第なんだから」
悠の澄んだ瞳に、強い光が宿った。いつもの、揺るがない光が。
「……そのセリフ、何か久し振りだな」
「そう？　口癖なんだけど、これ」
流星が笑うと、悠は自身の唇をなぞった。その手が、足と一緒に

ぴたりと止まる。
「悠？」
首を傾げた流星は悠の視線を追い――固まった。
いつの間に出現したのか、朱塗りの鳥居が立っていた。
木のはえてない開けた場所に立った、全長十メートルはありそうな巨大な鳥居だ。
自然の中にいきなり現れた人工物に、流星は目を見開くしかない。
「何だ……これ」
鳥居を見上げ、それだけ呟いた。
「恭兄……これって」
悠が声をかけると、じっと鳥居の先を見つめていた恭弥は「あぁ」と細顎を引いた。
「結界の入口だ」
恭弥は手を伸ばし、鳥居で隔てられた向こう側へ突っ込んだ。
恭弥の手が消えた！？
向こう側に行った部分だけが、切り取られたかのように消失したのだ！
「きょっ……腕！」
「見えなくなっただけだよ」
口をあんぐり開ける流星の肩を、悠は軽くこづいた。
「建物などを隠す結界だね。でも、入口があるってことは……」
「あぁ。歓迎されているようだ」
恭弥は鳥居をくぐった。腕だけでなく、全身が見えなくなる。
「私達も行くよ」
悠は流星から手を離し、さっさと鳥居をくぐってしまった。
残された流星は、汗じとの顔を朱葦に向けた。
「先にお進みください」
……そう言われては進むしかなかった。

「付いていかなくてよかったの？」
日影の質問に、舜鈴は目を瞬いた。
萩原家の邸宅内である。人柱を守るために、姫持ち達はこの家に集まっていた。
今のところ妖偽教団の動きは無いが、油断はできない。
幸い三日という時間のおかげで身心共に癒えたし、龍石の裏切りによる動揺もある程度収まった。これでいつでも戦える。
で、舜鈴、日影、雄輝とで部屋を移動中、最初の質問に至る。
「付いてくって……何に？」
「恭弥さんのことよ」
首を傾げた舜鈴に、日影は少しだけ距離を詰めた。
「舜鈴の性格なら、付いていくと思ってたんだけど……」
「ンー……」
舜鈴は廊下の壁にもたれかかった。
「俺もてっきり行くかと……まぁ戦力が減らなくていいですけど」
雄輝も日影に同意した。最後の発言は彼らしい。
「まぁ、ネ……ホントは一緒に行くき気だったんだけど……恭弥に断られちゃって」
しゅんとする舜鈴。一方、日影と雄輝は顔を見合わせた。
「そう落ち込むことは無いわよ。恭弥さんも心配して断ったんだろうし」
「あ……そうじゃないの」
慰めに入った日影に、舜鈴は首を振った。
「別に断られたことに落ち込んでるんじゃなくて……ちょっと違和

感が」
「違和感？」
日影と雄輝は再び顔を見合わせた。
「うん……龍石って人のやり方が……」
舜鈴は口ごもった。
（何だったんだろう……あの違和感）
龍石が式神を放った時。
あの時はとっさに紗矢が盾を創ったおかげで難を逃れたが――本当にそうだろうか。
盾は砕かれたものの、自分達を守ってくれたことに変わりは無い。
だが、自分達が生きているのは、それだけの理由だろうか。
もし龍石が本気を出せば――盾があっても一人ぐらい死者が出てもいいはずだ。
屋敷内にいる者は勿論、屋敷外にいた者からも。
なのに死者は出ていない。一人としてだ。
死んだのは……人柱だけ。
（恭弥……貴方の師匠は何を考えているの？　本当にその人は……恭弥を裏切ったの？）
舜鈴はわけが解らないまま、頭の中で問いかけた。

――

空気を切る音がした。
恭弥の頬の横を通り抜け、後ろの鳥居に突き刺さる。
流星は驚いて矢を見、そして前方を見た。
「……外れたか」
弓を携えた龍石は悪びれずに呟いた。
神社の社のような屋敷をバックにこちらを見据える龍石に、悠は呟いた。
「決定打だね」

すでに刀を持っており、柄に手をやっている。
それより流星は、この空間の方が気になった。
ただ隔離されただけの空間なのに、こんな違いが出るんだろうか。
まず空が無い。
白い。
雲に覆われているのではなく、絵の具に塗り潰されたように白い天井が続いている。
しかし地上は外と同じだ。土も木々も草もある。
だが、空気が冷たい。
太陽が無いせいなのか、または別の理由なのか。
それに、何だか息苦しい。息がしずらいのだ。
まるで呼吸を制限されているような、そんな感じだ。
流星はきょろきょろと動かしていた視線を龍石に戻した。
龍石は弓を下に置き、恭弥の顔を見つめていた。
「……いい面構えになったな、恭弥。それに羽衣姫の力に耐えれるだけの精神力もできあがったようだ。何より」
ずっと変わらなかった、龍石のガラス玉のような目がすっと細められた。
「大きくなったな。四年前よりずっと」
「……お言葉を返すようですが」
恭弥は口を開いて平坦な声を出した。
「僕はまだ未熟ですし、精神力の方だってこうしてここにいること自体不思議なくらいボロボロです」
「それでも」
龍石の右手がかすんだ。

ビュオォウッ

土煙を上げるほどの突風が吹いた。流星と悠は思わず目を閉じ、髪を押さえる。

再び目を開けた流星は、飛び込んできた光景に愕然とした。
木がない。草も屋敷も、全部なくなっている。
全部斬り倒されている。跡形も無く。
自分達と恭弥、龍石の周りだけ何とも無い。
正確には、恭弥から流星と悠のところにかけてが無事なのだ。
それに恭弥は、亀の姿をした式神を出している。つまり、龍石が攻撃をしかけたということなんだろう。
でもどうやったら、風景を斬り裂くなんて芸当ができるんだ！？
「師匠……」
恭弥は式神を消した。後ろからでは表情は解らないが、肩が上下している。
式神を一体出しただけだというのに、変に疲れていた。
「理性を保つだけでも大変だろうに、式神など使ったからだ」
龍石は呪符をもう一枚取り出し、前に投げた。
「風那――」
「走嵐（ソウラン）！」
龍石の手から呪符が消えたと同時に、恭弥の呪符が狼に変わった。
「喰らえ」
風鳴り音が聞こえる中で、恭弥は狼に命令を与えた。
走り出す狼。めちゃくちゃに辺りを走り回ったと思ったら、ぴたりと足を止めた。
足を止めた狼の口に、何かがくわえられている。キィキィ鳴くそれは、なんといたちだった。
狼がいたちを噛み潰すと、いたちは呪符に変わった。どうやら龍石の式神だったらしい。
「……式神は精神で操るもの」
龍石は薄い唇を開いた。
「羽衣姫の力にむしばまれている身心で私の式を捕まえられるとは

大したものだ」
「……」
「だが、平素なら三体でも操れたおまえも、今は一体が限界のようだな」
「……教えてください」
戻ってきた狼を呪符に戻し、恭弥は尋ねた。
「なぜ僕を……僕達を裏切ったんですか？」
「……裏切りとは、味方の者が敵となること。私は裏切ってなどいない」
意味の解らない言葉を言ったとたん、恭弥の肩が震え、悠も「まさかっ」と呻いた。
「え、何？　何がまさかなんだよ！」
流星は意味が解らず悠を見下ろした。
「解らないの？」
「解らないから訊いてんだよ！」
「それもそうだね……。いい？　龍石の口振りから察するに、龍石は現在だけでなく過去でも味方ではなかったということ」
悠は顔を歪めた。
「つまりあいつは、元々妖偽教団の人間だったということだよ！」
「え、じゃ、えぇ！？」
流星は目を剥いた。
「てことは、だましてたってことなのか！？」
「おおまかに言えばそう。問題は、なぜ妖偽教団でありながら、なぜ恭兄に術を教えたか」
悠の顔がますます険しくなった。
「単純な話だ、椿　悠よ」
龍石は一歩踏み出した。
「恭弥は幼い内から人柱になる素質を持っていた。小さき時から手の内に入れておくのがよい」
龍石の手から何枚もの呪符が飛んだ。

数、十数、いや数十――！
「流星、伏せて！」
悠の叫びに、流星は意味も解らず朱雀に地面に押し付けられる。
呪符は恭弥の横をすり抜け、悠達に迫った。一つ一つが意思を持つかのように、悠達『だけ』を狙う。
悠は飛んできた呪符を斬り裂いた。しかし、ほとんどが残ってしまう。
「第五の手、刀刃障（トウジンショウ）！」
更に刀を一閃。半透明の障壁が現れる。そこに呪符が張り付いた。
「爆（バク）」
龍石が印を切った。

ドガガガガガガガガガガガガガガッ

呪符が爆発を起こした。
外の様子が解らなくなるほどの爆発に、障壁が揺さぶられる。
「っく。思ったよりきつい！」
刀を壁にするように、横に垂直に持った悠は舌打ちをもらした。
「何だよこれ！？」
顔中どろだらけになった流星は上体を上げた。
「永続呪術だよ。一度発動すれば、術者が止めるか倒されるかしないと止まらない……」
「ってことは、これが破られたら……」
流星は思わず想像してしまい、ゾッとした。
「私はこの技の発動中は動けないし、どっちにしろこの爆発じゃ外に出れない！」
悠の唇がわなないた。
「このままじゃ……恭兄が！」

「やっと二人きりだな」
龍石は呪符を振った。呪符は炎をまとい、鳥の姿となる。
「そして死んでくれ」
「……まだ」
恭弥も呪符を取り出した。空中に放ると、青い人魚姿になる。
「やるべきことが、あるんです」
「ほう？　何だ？」
龍石は首を傾げた。ここまで来てなお、表情に変化は無い。
「反撃の……のろしですよ」
恭弥は印を切った。
「玉鼎（ギョクテイ）！」
「鳳凰丸（ホウオウマル）！」
炎の鳥と青き人魚がぶつかり合った。
水と炎が辺りにぶちまかれたと思うと、すぐさま恭弥が別の呪符を放つ。
「叩き斬れ、黒鋼丸（クロガネマル）！」
呪符から鎧武者に変わると同時に走り出していた。
巨大な刀が振り下ろされる。だが龍石は、それを素手で受け止めてしまった。
「ぬるい攻撃だ」
龍石は武者ごと刀を持ち上げると、ぶんっと放り投げた。
空中を舞った武者は呪符に戻り、ひらひらと地面に落ちた。
（やはり一体じゃ太刀打ちできないか）
恭弥は呪符を二枚放った。
「玉鼎、走嵐！」
呪符が人魚と狼となり、だっと龍石に迫った。
「風那」
龍石も呪符を一枚投げる。いたちの姿になった呪符は人魚と狼と戦いを始めた。
「っく……」

恭弥は頭を押さえた。
脳がぐらぐら揺れてる気がする。視界もおぼろだ。限界が近いらしい。
（だが、こんなところで倒れるわけには……いかない）
やらなければいけない。
やらなければいけないことが――ある。
恭弥は更に呪符を取り出した。
「式神、形変術（ケイヘンジュツ）」
呪符がぐにゃりと歪む。
「武器化、『草薙ノ剣』」
呪符がかたちどったのは、鍔の無い両刃の刀だった。
柄の先に白い宝玉が付いており、柄と刃は青銀に輝いている。
「……！　そんな術、教えた覚えは無いぞ」
龍石の目が見開かれた。驚いているようである。
初めて見た師の焦り顔に、恭弥は思わずふっと笑った。
「そうでしょうね。僕が創った術ですから」
恭弥はだっと走り出した。龍石に向かって刀を振り下ろす。
龍石が冷静にそれを避けると、恭弥は足をもつれさせた。
「扱うだけの技量が無ければ、武器は己の首を絞めると教えたろうに」
龍石は呪符を刃のようにして、恭弥の首をかき切った。
喉から吹き出す血が龍石の顔にかかる。倒れていく弟子を、龍石は目を閉じて視界から追いやった。

「一応剣道部なんですよ、僕」

龍石はハッと目を開けて振り返った。
瞬間、頭に衝撃。金属バットで殴られたかのような一撃に、龍石はぐらりとよろめいた。
踏ん張ろうとするが、耐えられずにそのまま後ろに倒れ込む。

「……恭弥」
目の前に立つ自分に対し、龍石は驚きの声を上げた。
恭弥は無傷だった。血どころか、すり傷すら首に無い。
「まさか私が斬ったのは……」
龍石は痛む頭を無理矢理動かした。
すぐ傍に人型の呪符が落ちている。首にあたる部分が裂けていた。
「身代わりか……今の一撃も、刀の平でのものだな」
龍石はふー、と息を吐いた。

「恭兄！」

怒鳴り声に近い妹の声に、恭弥は振り返った。

無傷な恭弥を見て、流星はひとまず安心した。
だが、恭弥の顔色は悪く、今にも倒されそうだ。
「大丈夫なのか？」
流星が不安げに尋ねると、恭弥は少しだけ笑って頷いた。
「……なぜだ」
龍石が突然口を開いた。何をされたのか解らないが、動けないらしい。
「なぜとどめを刺さない。私は、おまえを殺そうとしたのに」
どこか痛むのか、龍石は顔をしかめていた。
「……何でしょう」
一方恭弥は、自分でも不思議だと言わんばかりに首を傾げた。その後、にこっと笑う。
「きっと、師匠と同じだと思います」
「何、を」
「師匠も、人を殺したくないんでしょう？」
しんっと辺りが静まった。全員、恭弥をありえないものでも見る

ような目で見つめる。
「何を、馬鹿馬鹿しい」
「以前師匠は言いました。人という種族が嫌いだと。だから妖偽教団に入ったんじゃないですか？　人という種族を消すために」
恭弥は静かに語り始めた。
「ですが本当に、心の底から消えてほしいと願っているわけじゃない。今までの行動を見ても、師匠が殺した人間は一人もいませんでした。僕にしたって、もっと早く殺せたはずだ」
結論を言いますと、と恭弥は穏やかな笑みを深くした。
「師匠は本当は誰も傷付けたくないし、殺したくない。違いますか？」
淀み無い言葉に、龍石の顔中に驚愕が広がった。
右腕を上げ、恭弥へ手を伸ばす――

ビキィッ

壊れる音がした。
「あがっ、が、ぐあぁっ」
龍石は右腕を押さえた。
「何……！？」
悠は慌てた顔で龍石の右袖をめくり上げた。
「うっ……」
流星は思わず口元を押さえた。
龍石の腕が、腐っている。
肉の一部が変色し、ぐずぐずに溶けて骨が見えていた。その骨も、どんどん黒ずみ、崩れていく。
「これって……呪い？」
「そうだ」
悠の呟きに、龍石は荒い息で答えた。
「腕に刻んだ妖偽教団の印が、私を裏切り者と判断したらしい……。

十分もすれば全身が腐るだろう」
「そんな！　じゃ、あんた死ぬんじゃ！」
流星が叫ぶと、龍石は顔を彼に向けた。そうしている間にも、腐食は進んでいく。
「鬼童子か……子供の貴様には解らないだろうな。背負った罪が大き過ぎる人間は、死を選ぶしかない時があるのだ」
龍石は長々とため息をついた。
「これでやっと終わる……罪をつぐなえるのだ」
その呟きを聞いたとたん、悠の眉間にしわが寄った。
「朱嵐」
思わずびくりとなりそうな鋭い声に、しかし朱嵐は無感動に「はい」と答えた。
「彼の腐った腕を取れ。まだ間に合う」
「はい」
「すぐに止血しなよ。失血死したら本末転倒だよ」
「はい」
「なっ……待て！」
龍石はバッと上体を少しだけ起こした。
「私を生かしてどうする。私は、死ぬことで罪をつぐないたいのだ！　死という罰を受けることで私は罪をつぐないたい。なのに……」

「うるさい！」

悠の拳が龍石の左側頭部に直撃した。
悠は知らぬことだが、場所こそ違えど頭に二度も攻撃されたことで龍石は意識を手離しかける。
その間に、朱嵐は腐りかけの腕を尾で切り落とした。
血がびちゃびちゃと吹き出すが、朱嵐が肩に手を押し当てると量が減じていった。
「……なぜだ」

龍石は顔をうつむかせ、弱々しい声を発した。
「なぜ、皆私を……私なんぞを生かすのだ」
先程までの、余裕さえ見えた姿の影さえない。そんな彼の胸ぐらを、悠は乱暴に掴んだ。
「逃がさないよ」
「何……」
「死んで逃げようたって、そうはいかないって言ってるんだよ」
悠はキッと龍石を睨んだ。
「死んで罪をつぐなう？　何を言ってるの。罪は生きてこそつぐなえる。罰は生きてこそ受けられる。どう言ったって、死は罪や罰から逃げることになるんだ！」
悠の剣幕に、龍石は呆然としていた。それにかまわず、悠は続ける。
「貴方が死んだって、一人の人間が死んだという事実が残るだけ。罪は消えないしつぐなえない。いい歳して、どうしてそれに気付けないの！」
「っ……」
「罪をつぐなう気があるなら、罰を受ける覚悟があるなら、生きて生きて生き続けろ！」
悠は一息にそういうと、ようやく龍石の胸ぐらから手を離した。
「……私、は」
龍石はぎり、と歯を喰いしばった。
「いずれ裏切らねばならぬと理解しながら、恭弥に情が移ってしまった。弟子を殺すことになるのに……」
目のふちから流れ出た涙をぬぐわず、龍石は両目を押さえた。
「私、はっ……」
「師匠……」
恭弥は龍石に手を伸ばそうとした。
「！？　うぐっ」
が、急に心臓を押さえ、その場にうずくまった。

「恭弥！？」
一番近くにいた流星は恭弥の背中に触れた。
恭弥のシャツ、背中が濡れている。しかも、紅く染まってる……？
流星は恭弥の服をめくり上げて背中を見た。
「……！　何、だこれ……」
人柱の証である呪印。禍々しいその印から、なんと血が出ていた。
呪印が刻まれた場所の肉が裂け、印に沿うように血が流れている。
ナイフか何かで斬られたかのようだった。
「どうなって……おい、恭弥！？」
恭弥の口から荒い息がもれ始めた。
「悠！　どうなってんだよ、おい！」
「解らない……こんなこと、初めて……」
悠の顔から血の気が引いた。
「……やったのだ」
龍石は腕の無い肩を押さえ、呻いた。
「私が恭弥を連れていく間に、もう一人の人柱を殺す手はずだった」
「じ、じゃあ……」
「あぁ」
龍石の顔が、これまでに無いほど歪んだ。皮肉にも、それが流星にとって初めて見る、彼の人間らしい表情だった。
そんな、ようやく人間らしい人間の顔で、龍石は低く言った。
「人柱は、もう恭弥だけだ」

第二十話　月人<1t;上>gt;

自室に敷かれたふとんの上に、恭弥（キョウヤ）は寝ていた。
いや、寝てるというのは正確ではない。昏睡状態と言った方が正しいだろう。
「術のおかげで、今は意識が無い。……このまま、目覚めない方がいいかもな」
畳の上であぐらをかいていた刀弥（トウヤ）の呟きに、舜鈴（シュンリン）はバッと顔を上げた。
「そんな！　そんなことしたら恭弥が……」
大きな瞳に涙がたまる。
「眠ったまま……」
目元をぬぐう舜鈴に、刀弥は呻くように言った。
「だが目覚めたとしても、羽衣姫（ハゴロモヒメ）の力で苦しむだけだ」
刀弥は恭弥の顔を見下ろす。
彼の兄ではなく、椿（ツバキ）家当主代行としての表情で。
「人柱はもう、こいつだけなんだからな」

九人目の人柱の死の翌日だった。
恭弥はもう立ってられなくなり、いつ発狂し出すか解らない状態におちいったため、呪術で意識を沈めた。
術を施したのは龍石（リュウセキ）である。共に戦うことを悠（ユウ）がすすめたが、彼は断った。
「弟子がそうなった一因である私が、簡単に味方になれるわけがない……」
哀しそうに、龍石は言ったという。

彼の話では、昨日の戦いで妖偽教団の戦力が減っているらしく、そこに突破口がありそうだ。
しかし、今できることはあまりにも少ない。

部屋にいるのは刀弥と舜鈴だけである。
他の者は精神を酷くすり減らしているために今は眠って英気をやしなっているのだ。
「とりあえず今は様子を……」
言いかけた刀弥は、開けられた障子に目をやった。
「……君は、西野紗矢（ニシノサヤ）だったよな」
入ってきた女性は、名前を言われて頭を下げた。
「どうも。……あの、話がしたいんですが」
紗矢はちろ、と舜鈴の方を見る。
舜鈴はその意図に気付き、すくっと立ち上がった。
「顔……洗ってきます」
目をぐしぐしこすり、出ていく舜鈴。それを見送った後、刀弥は紗矢を見上げた。
「で、一体何の用だ？」
「はい」
紗矢は恭弥をはさむようにして刀弥の向かい側に正座した。
「単刀直入に言います。あたしは恭弥君の策を知っています」
「なっ……」
刀弥は思わず片膝を上げた。
「更に……追い討ちをかけるようですが、あたしも一枚噛ませてもらっています」
「……」
淡々と話す紗矢に、刀弥は半分浮かしかけていた腰を落とした。
「……まだ、こいつはあの考えを捨ててなかったのか」
刀弥は額に手をやった。
「何で……あんな作戦……あれは、あれは……」

「恭弥君も最善ではないことは解ってます」
紗矢は抑揚の無い声で続けた。
「でも封印があり続ける限り、おびやかされ続ける限り、悲劇も続く。止めるには、これしかないと」
「……それは、恭弥が本当に思っていたことか？」
刀弥は疑惑を込めた目を紗矢に向けた。しかし彼女はひるんだ様子も無く、頷く。
「あたしの力が、恭弥君の心を感じ取りました。いえ、それは正しくありませんね。彼は感じ取らせるために気持ちを表面化させていたんでしょう」
「……こいつらしい」
刀弥はその場に倒れ込みたくなったが――肯定した。
「昔からそうだ。こいつは自分のことに、全く興味が無かった。むしろ否定的と言っていい。傷付こうが死にかけようが、結局優先するのは他人だ」
他人が傷付かなければ自分はどうなってもいい。誰かが幸せになればそれでいい。
そう。誰かが幸せなら――
「……しかしある意味、今回のことはこいつらしくないぞ」
しかし肯定はしても信じられない刀弥は、頭を軽く振った。
「こいつの考えた作戦はこいつだけが死ぬんじゃない。他の人柱はおろか、退魔師達や関係の無い人間が犠牲になる。実際、この戦いで何人も死んで……」
刀弥はハッとした。
「まさか、それも作戦だと？」
「そうです」
紗矢はこくりと頷いた。
「彼はこのことを最後まで迷っていたようですが――これらの戦いで退魔師達が倒れていけば、妖偽教団にほどよい優越感を与えられる。油断が生まれるほどの優越感を」

「……」

「もう一つは戦力の減少を狙ったもの。妖魔がいなくなることはありませんが、妖偽教団に所属する妖魔は限られている。これまでの戦いで、それはほぼ成功してます」

「っ、だが、こちらも大幅に戦力を失ったぞ」

刀弥の反論にも、紗矢はひるまなかった。

「対抗しうる人材は、すでに確保しています。少数で、羽衣姫に対抗しうる人材を」

「……姫持ちか」

少し間を置き、刀弥は理解した。

「そうか……それで保護した奴ら、日影（ヒカゲ）達は死ななかったのか。昨日も、君が手助けしたんだな？」

「はい」

紗矢はこくりと頷いた。

「色々危ない場面もありましたが、あたしの力と恭弥君のしもべのおかげで、全員生還しました」

「氷華（ヒョウカ）か……」

刀弥は口元を押さえた。

「あれを使っていたのか……だろうな、式神だけではうまくいかないよな」

だが刀弥はなおも反論した。今更言っても、もうどうにもならないのに。

「だがこの作戦が最善でないなら、最善の策を考えればよかったじゃないか。何でこんな」

「最善の策が無いからこそ」

紗矢の言葉に、刀弥はびくりとした。

一瞬、口調と声が恭弥に似ていたからだ。

「次善、三善の策をやるしかないでしょう。例え最悪だったとして

も、手は打たなければならない」
紗矢は立ち上がり、障子に手をかけた。
「貴方も解ってるはずですよ、椿家当主代行殿」
からり、と障子が開けられる。
「人柱がいる限り、羽衣姫は死なない」
そのまま紗矢は、部屋を出ていった。
残された刀弥は、ゆるゆると息を吐いて弟の顔を見る。
綺麗な顔だった。その身が狂気に蝕まれているようには、とても思えない。
「恭弥……俺は解らなくなってきたよ」
うなだれると、前髪で視界が黒に遮られた。
視覚的な意味だけでなく、精神的にも目の前が真っ黒だ。
「俺は、親父に代わって、当主としての判断をくだせばいいのか？それとも、兄としておまえを守ればいいのか？」
呼びかけても、返事が返ってくるはずがない。
しかし、もし起きていたなら「父の意志を継いでほしい」と言うだろう。
いや、それとも「自分の考えに従えばいい」か？

……解らない。

恭弥はこんな時、何を言うだろう。何を思うだろう。
兄弟と言うには、自分が弟と過ごした時間は意外にも短かった。
「今思うと、俺、おまえのことよく解ってなかったな」
刀弥は拳を握った。
「おまえはいつもにこにこ笑って、でも悠以上本心を見せない奴なんだ。なぁ、おまえは一度でも、俺に本心を言ってくれたか？」
問うても答えがあるはずなく。
恭弥は微かな呼吸音を上げるだけだった。
「頼むから……起きてくれよ……答えてくれよ……」

ぎり、と唇を噛み締めると、鉄の味がした。
唇がぴりぴりと痛んで、ひびわれていることに今頃気が付く。
「なぁ恭弥……お袋の時みたいなことは嫌だ」
目の前にいたはずなのにいつの間にか消えてなくなっていた。
母はそんな風に――逝った。
あの時、五歳の時受けた死に対する傷は、今でも残っている。
母と入れ替わりに現れ、すぐいなくなった弟を、帰ってきたら守ってやろうと思った。
なのに、なのに――
「どうして……こんな……」
死へ進む弟。若くして逝ってしまった母と重なる。
もともと似ていた。笑顔も性格も儚さも。刀弥自身、母と弟を重ねて見ていたところがある。
たが、人生まで似てほしいとは思っていない。
「恭弥……」
刀弥は力無く壁にもたれ込んだ。
「どうして……人柱なんて存在するんだよ」
答えられる者は、今はここにいなかった。

――

流星（リュウセイ）は帰路についていた。
土曜日は本来授業は無い。そもそも最近はサボり気味なのだから行く気自体失せている。
が、部活の試合は別だ。
「まだ妖偽教団来てねーよな。来てねーといいんだけど……」
早く椿家に行かなければならないため、流星は小走りだ。
（ごり押しして部活行ったからなぁ。悠に斬り殺されるかと思ったし）
ことの重要性解ってるのっ、と思いっきり睨まれたのである。冗

談抜きで殺されると悟った。
（妖偽教団と戦う前に戦闘不能になったらシャレになんねーし。つか、俺って悠にどう思われてんだろ……）
嫌われてるわけではないのは確かだ。だが、好きでいてくれるかは微妙なところである。
人混みの間をすり抜け、ため息をついた流星は、信号の前で立ち止まった。
ついさっき赤になったばかりで、しばらくは進めないだろう。
（あー、何で急いでいる時に限って信号にひっかかるかな）
流星は肩にかけたスポーツバックを揺らし、学ランのえりをゆるめた。
ふと向かい側の歩道に目をやり――

――固まってしまった。

向かいの、信号待ちをしている人々の中。そこにありえない奴がいた。
黒い頭の中で長い銀髪が陽光で輝いている。色とりどりの服の中で黒衣だけがいやに目立っている。驚くほど白い顔が黄色人種の顔の中で妙に浮かび上がっている。
「……熾堕（シダ）」
流星の首筋に、冷たい汗が伝った。
（何でここに熾堕が！？　いやそれより……何で誰も気付かないんだ！？）
あれほど異様なまでの存在感を持つ男に、誰も彼も見向きもしない。あんな目立つ男に対して、皆何もいないかのように振る舞っている。
（みんな無視しているのか？　それとも俺だけが見えてる？　それとも……これは全部夢なのか？）
降り注ぐ日差しが首の後ろを焼いている。今更ながら、学ランな

んて着てこなければよかったと思った。
流星はまばたきしてみた。熾堕の姿は消えない。
（やっぱ幻覚じゃない。でも、ならどうしてあいつは誰にも気付かれてないんだ！？）
額から汗が幾つも伝う。学ランの中に熱がこもってきた。
十秒――二十秒――三十秒と時が流れ――

信号が変わった。

周りの人々がぞろぞろと、向こう側の歩道へ渡ろうとする。流星は我に返った。
（ヤバい……逃げないと……）
あれが本物かどうかはともかく、今ここにいてはいけない。本能的にそう感じ取っていた。
もともと流星は、こういう勘は鋭いのだ。だからこそ今まで生きてこられたとも言える。
悠に会う以前だって、霊関係で色々危ない目に合ってる。無事でいれたのは、このおかげだ。
流星は一歩、二歩と後ろに下がった。熾堕はまだ向こう側だ。
誰かにぶつかったのを皮切りに、流星は振り返って走り出した。
ここに長居してはいけない。早く離れなければ。
頭の中でまだ警鐘が鳴り響いている。随分走ったのに、どうして――

「よう」

声をかけられた。男か女か解らない、中性的な声。
（この、声）
聞いたことがあった。
あの時、自分が鬼童子と知る直前。わけの解らない空間に放り出

されて、そこから引き上げてくれた声と同じ――
流星は振り返った。同時に迫る白い手。

瞬間、全てがブラックアウトした。

月人<中>

目が覚めた場所は、ほこりっぽかった。
流星は頭の鈍痛で、気付いてすぐは動けなかった。
しばらくして、手に何かが巻き付いているのに気付く。
「……って、鎖！？」
目を開けて後ろ手になっている手を見ると、手首にぶっとい鎖が巻き付いていた。
「何だこれ！？　つーかここどこ！？」
自分が寝転がっているのは、見知らぬ牢獄だった。
石でできた床と壁。目の前には鉄の棒が幾つも並んでいて、外と隔てられている。向かい側にも同じような部屋があり、隅に骸骨が転がっていた。
流星の背にさあぁっと冷たいものが広がった。
「ま、まさか俺……ここで死ぬんじゃねーだろうな。ど、どう考えてもここ、牢屋っぽいし」
流星の頬がひくついた。頭の中が半分ぐらい真っ白になってる。
ずらずらと不吉な言葉が脳内を蹂躙していった。
最終的にたどり着いた結論は。

ずっとほっとかれたら、確実死ぬ。

「……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　ちょ、待て待て待て！　誰か助けてっ。ちょ、ここで俺終わり？　死亡フラグ？　ぎゃーぎゃーぎゃー！！」
もう流星自身、わけが解らなくなっている。発狂する寸前だった。

そのため、近付いてくる足音にも気付けなかった。

「あらあらん♪　元気いいわねぇん」

流星はぴたりと叫ぶのを止めた。

途中からごろごろと床を転げ回ってたりしたのだがそれも止め、顔を上げた。

黒衣の女が立っている。露出度の高い、水着のような服だ。

そして着ている人物は美しい――恐怖するほど美しい美貌の持ち主だった。

「羽衣、姫っ……」

「お久し振り、流星ちゃん♪」

今度は別の意味で背中が冷たくなった。流星はバッグを求めて辺り見渡す。

「あ、武器は回収したからん。後でぽっきりいっちゃうつもりぃ♪」

「なっ……！」

流星は呆然とした。

縛られてる。武器も無い。おまけに目の前には羽衣姫。

最悪の状況だ。

「こうも見事に捕まえられるなんて、さっすが熾堕ちゃん♪」

羽衣姫は隣の男に目をやった。美丈夫は銀の双眸を細める。

「熾堕……ってことは、あれは幻覚じゃなかった……」

そこまで来て、流星はハッとした。

「こ、ここどこだよ!?」

「あらん？　妾がいる時点で解らないん？」

羽衣姫は小首を傾げた。

「ここは妾が支配する地下の都。つまりぃ、妖偽教団のアジトよん♪」

「なっ……！」

流星は愕然とした。

さっきまで帰り道にいたのに、敵陣のど真ん中に連れてこられたらしい。
口をパクパクさせていると、羽衣姫はクスクス笑った。
「やっだぁん。魚みたいよん♪」
言われて恥ずかしくなった流星はうつむいた。だがすぐさま顔を上げる。
「何で俺をここに連れてきたんだ？　俺に、何の用だ？」
声が震えていた。羽衣姫の意識全てが自分に向けられている。それが恐ろしかった。
「なぜ？　決まってるじゃない、鬼童子ちゃん♪」
羽衣姫の手が鉄棒の間をすり抜け、流星の顎を掴んだ。
ゾッとするほどひんやりした手から逃れたいのに、流星の身体は凍ってしまったように動かなかった。
「生まれつきその身に鬼を宿す子供……あぁ、もっと早く会いたかった……♪」
「は、はなっ……」
「離さない♪　貴方はもう、妾のものだものん」
羽衣姫の唇の端がにいぃっとつり上がった。
「っ……離せぇ！」
流星は身をよじって羽衣姫の手を振り払った。
ただそれだけの行為なのに、息が乱れてる。身体中ががたがた震えていた。
「ねぇ、考えてみて♪」
羽衣姫は更に笑みを深めた。
陥落はもうすぐだ、というように。
「ここでは助けも来ない、そもそも捕まってる自体誰も知らない♪　そんな状況下では、貴方は妾を拒絶することはできない」
「っ……」
「ね、妾のものになりなさいん♪　その身に鬼を宿す以上、日の下（もと）を歩くことはできないんだから♪」

羽衣姫の言葉は、一言一言流星の胸にぐさりと突き刺さった。
おまえは人ではない、人の真似事をしている化物なんだと、はっきり言われた気がしたからだ。
でも、と流星は思う。
よくよく考えれば、自分はもとより日の下を歩いてはいないのだ。
あの日、悠に救われた時から、もう。
「……俺は別に、日の下で歩きたいとは思ってねーよ」
気付けば流星は、自分でも不思議なぐらいしゃんとして羽衣姫と向き合っていた。
「俺はただ、一緒にいたいと思う奴と一緒にいたいだけだ。日の下だろうが日の陰だろうが、関係無い」
「……妾と一緒にいたいと思わないのん？」
羽衣姫の顔から、笑顔がすっぱり消えた。
代わりに、漆黒の瞳が鋭さを増して睨み付けてくる。
しかし流星は、それにひるまなかった。逆に睨み返し、再び口を開く。
「思うわけねーだろ！　おまえみたいな、周りをかえりみない奴に。何もかもが、おまえの思い通りだと思うな！」

バシィィッ

頬、いや頭全体に殴られた衝撃が加えられた。
「かっ……」
いきなりのことに脳が付いてこない。
流星はそのまま、意識を手離した。

伸ばした指で流星の頬を打ちすえた羽衣姫は、気絶した青年を見下ろした。
『何もかもが、おまえの思い通りだと思うな！』

彼の言葉が、遠い昔にできた胸のしこりに傷を付けた気がした。
「あの女と同じことを……」
羽衣姫はぎり、と奥を噛み締め、振り返った。
「明日、この子を殺すわん」
「……よろしいので？」
熾堕は片眉を僅かに動かした。
「いいのよん。妾の言うことを聞かないものは、全て死ねばいい」
羽衣姫は近くの石壁に拳を叩き付けた。ぼこりと壁がへこみ、石のかけらが落ちる。
「……そうですか。決められたのなら逆らいませんが」
しかし、と熾堕は微笑した。
「はたしてそれが正しい選択か……」
「……正しい？」
羽衣姫はぐるりと振り返り、素早く腕を伸ばして熾堕の首を掴んだ。
「妾は常に正しい！　妾は常に最良の選択をしてる！　妾はこの世で、一番正しい存在なんだから！！」
「……別に間違っているとは言ってませんよ」
首を締められているにも関わらず、熾堕は涼しい顔で笑った。
先程と変わらず、先程より深く。
「ただ、それによって星がどう動くか……気になるとは思いませんか？」
腕をあっさり外され、羽衣姫は目を見開く。熾堕は唇に笑みを浮かべたまま、くるりと背を向けた。
「俺は『観察』を続けさせてもらいます。では」
軽やかな足取りでその場を去る熾堕を、羽衣姫はずっと睨んでいた。
誰も彼も思い通りにならない……千年前も現代も！
『貴様は求めてはいけないものを求めたのだ』

ふいに、あの女の言葉が脳裏をよぎった。
常に衣(きぬ)を被(かづ)ち、白拍子のように白い狩衣に身を包んだ女。
あの女が操る『剣姫』に、自分は斬られたのだ！
「求めて、何が悪い」
羽衣姫は唇を噛み、瞳から紅い涙をこぼした。
無くしてしまったかつての栄華を思って。
「愛しい男を求めて、何が悪い」

――――

目が覚めたとたん、頭の鈍痛に流星は呻いた。
自分がいるのはやはり石造りの牢であり、羽衣姫と熾堕の姿はもう無い。
「あー……気絶、してたのかな、俺」
何とかして身体を起こすが、状況は変わらない。
流星は鎖の下にある腕の数珠に目をやった。
（いっそのこと、この数珠外してみるか？　でも何が起こるか解ったもんじゃねぇ）
へたすれば、この間のように理性を無くして、完全に鬼になってしまうかもしれない。
もしそうなったら、何もかも意味が無い。羽衣姫を喜ばせるだけだろう。
「せめて『煌炎(コウエン)』さえあればなぁ……はぁ」
「これ？」
「そうそう、そ……れ？」
差し出された小刀に、流星は目を瞬かせた。
朱色の柄と鞘。間違い無い。
「こ、これ『煌炎』じゃん！　てか、え、え、えぇ！？」
差し出した人物に、流星は目を剥いてしまった。

そこにいたのは、巫女装束にコートを着た女。
月読（ツクヨミ）だった。

「……でえぇぇぇぇぇ!?　ちょ、何であんむぐっ」
あんたがここにっ、と言いかけた流星の口を、月読は素早く塞いだ。
「静かに。他の奴らに気付かれるわ」
月読は念押しして、流星の口から手を離した。
よく見れば彼女の後ろで、鉄格子の扉が揺れている。鍵穴には鍵が差し込まれていた。
「ど、どうしてここに……」
今度は声をひそめて尋ねる流星に、鎖を外し始めた月読は、
「助けに来たのよ」
「あぁそうですか……って、はい!?」
また大声を上げてしまった。
今言われた言葉――あきらかにおかしい。
「どうして……あんた敵なのに……」
「……そう、『月読』は敵」
鎖を外し終えた月読は流星の手に小刀を掴ませた。
「でも『椿葵（アオイ）』は味方よ」
「え……それ、て……まさか……」
流星は愕然とした。
羽衣姫は言った。椿葵は月読になったと。
でも、今の発言はまるで。
まるで葵はまだいるかのような――
流星はじっと月読の、悠や恭弥に似た顔を見つめた。しかし月読はにこりともしないまま、立ち上がる。
「さて、貴方をここから逃がさないとね」
「え、でも……そんなことしたらあんたが……」

流星が言うと、月読はおかしそうに笑った。
初めて見る笑顔は、あまりにも哀しく、そして優しかった。
「敵の……月読の心配をするなんて、おかしな子ね」
「え……あ……」
流星は言葉に詰まった。
どう返せばいいのか解らない。彼女は敵なのだ。しかし、目の前にいる彼女は本当に敵なんだろうか。
わけが解らない。流星は頭を抱えたくなった。
「早く行きましょう。途中で話すから。私の行動理由をね」
月読は牢の外に置いた弓を手に取った。

月読の手引きで牢から出た流星は、まず牢屋の外にある『街』に驚かされることとなる。
「俺……タイムスリップでもしたの？」
第一声がそれである。
無理も無かった。外にあった景色には、木でできた古くさい平屋が並んでいたのだから。
「安心しなさい。ちゃんと現代よ」
「現代って……こんな江戸時代なところが？」
「江戸じゃなくて平安京を模したものよ」
月読は近くの建物に身をかがめた。同じようにした流星は「ところで」と切り出した。
「本当に、何で俺を助けてくれたんだ？　やっぱり、葵さんとしての記憶を思い出したから？」
「……思い出すも何も」
月読は眉間にシワを寄せて笑った。
その笑い方が刀弥と似ており、虚を突かれる。
「最初から忘れてないわよ。月読としての人格を植え付けられたのは、本当だけどね」

「……」
流星は固まってしまった。
声も出せないまま、月読の話を聞くしかなかった。
「夫と一緒に羽衣姫に捕まった私は、夫を殺されたショックと拷問によって精神を病んでしまった。それでもなんとか理性を保てたんだけど、そこに別の人格を植え付けられたの」
「あ……それが、月読？」
我に返った流星が尋ねれば、月読は「ええ」と頷いた。
「それにより、私は月読の人格と同化した。椿家長子、葵と……月読の精神がね」
月読は苦々しげに笑った。
「今私は羽衣姫を憎みながら、羽衣姫様の忠実な部下。羽衣姫様のご命令がある時は、自由に動けない」
「……」
「でも今なら、彼女の命令は無い。今が貴方を助けるチャンスなの」
月読は周りを見渡した後、歩き出した。
「急いで。今なら気付かれないわ」
月読のせかす声に、流星はただ従うしかなかった。

流星と月読は、ある小屋にいた。
立ってるのが不思議なぐらいのボロ屋である。
「な、なぁ。ずっと気になってたんだけど」
外を点検する月読に、流星は尋ねた。
「何でここ、空が黒いんだ？　暗いわけじゃないのに」
流星の言う通り、ここの空は墨で塗り潰したように黒かった。
今まで通り抜けた道のどこも明かりなど無く、空に太陽や月らしきものも無い。
なのに風景ははっきり目に映って、暗いという印象は受けなかった。

「あぁ、それは」
戻ってきた月読は、今度は立てかけてある梯子に触れた。
「ここが一種の結界の中だからよ。羽衣姫が地下に都を造る時に、ここを維持するために亜空間を産み出した」
「地下……？　ここ土の中！？」
流星は口をあんぐり開けた。
「ええ。もっとも、感覚的ほどスペースは取ってないけどね」
月読はコートを羽織り直した。
「さっきも言ったように、ここは平安京を模したもの。羽衣姫は内裏の清涼殿（せいりょうでん）にいるわ」
月読の説明は、あいにく歴史に弱い流星には解らなかった。
「……ところで、上はどこに繋がってるんだ？」
とりあえず、流星は一番重要そうな質問をした。
「君の知ってるところよ。出たからびっくりするかもね」
しかし月読はどこは言わず、弓を持ち直した。
「さ、行きなさい。多分もう気付かれてるわ」
「……あんたは？」
梯子の方へ背中を押された流星は、じっと月読を見つめた。
やはり、見れば見るほど悠に似ている。いつもの冷たい表情が抜け落ちているせいか、余計美人に見えた。
相手が年上の美女ということを今更思い出し、流星は気恥ずかしくなって目をそらした。
「無理なのよ……無理なの……」
しかしかすれた声に、すぐまた顔を上げる。
月読は、眉間にしわを寄せて笑っていた。流星は彼女の顔を凝視する。
「言ったでしょう。私は月読の人格と同化してるって。君を逃がすことでせいいっぱいなのよ。それに、これ……」
月読は装束を引っ張り、胸元をはだけさせた。
豊かな胸を抑えるようにサラシが巻かれている。そして鎖骨の下

には。
「それ……刺青？」
赤く塗り潰された円の上に、黒い蛾が描かれている。流星は知らぬことだが、それは妖偽教団の印だった。
それが白い肌に、毒々しく刻まれている。嫌なぐらい、はっきりと。
「これは呪印。呪いの印よ。すでにこれは発動しかけてる。君を逃せば、完全なものになるでしょうね」
「呪い……印……」
流星は呟き、ぞっとした。龍石の、反腐乱した腕を思い出したのだ。
「そ、そこでして俺を助ける必要無ぇよ！　他に、他に何か方法があるはずだ。俺もあんたも助かる方法が！」
「いいえ」
勢いよく吐き出した言葉は、しかしあっさり否定されてしまう。
「これ、左胸にあるでしょう。心臓の真上なのよ。だから、逃れられないわ」
「し、印を取ればっ……」
「私の場合、心臓ごと切り取りことになるわ」
そう言われてしまえば、もう何も言えなかった。
印を取らなければ死ぬ。印を取っても死ぬ。もう、どうにもならない。
「さ、早く行きなさい」
月読は流星を梯子に押し付けた。
「これだけは絶対に伝えて。羽衣姫は内裏の清涼殿にいるわ」
「あ、あんた自身が伝えればいいじゃないか！」
梯子を登りかけている流星は、月読に手を伸ばした。しかし月読は、その手を避けるように身体を引く。
「早く行きなさい」
「あ、あ……」

流星は手を伸ばすのを止めた。
きっぱりした声に手を止めたのではない。小屋の外。入口から、黒い塊が迫ってくるのが見えたからだ。
気付いてないわけでは無いだろう。
なのに月読は、後ろを気にもせず流星に叱責をあびせた。
「早く行きなさい！」
「っ……！」
流星はひくっ、と頬をひきつらせた。近付いてくる塊に押されるように、梯子を駆け登る。
天井に行き当たり、その木でできたもろい板を押し退け――

出たのはホコリ舞う部屋だった。

「あ……？」
転げるようにして登りきり、床に立った流星は、その場所に唖然とした。
そこは獏僧と戦った――悠の過去を見た、あのボロ屋敷だった。
間違い無い。このホコリっぽさも、足元を流れる、妖魔が無数にうごめいている感じも。
入ったことの無い部屋だから、ところどころ違いはある。しかし大まかな特徴は、悠の過去を見せられた部屋と似ていた。
しばらくその場に立ち尽くし、はっと振り返る。月読の姿を確認しようとしたのだ。
だがそれは叶わなかった。
そこに、通ってきたはずの穴は無かった。
ただ、ホコリっぽいが傷一つ無い床板があるだけだった。

月人<下>

祖先の逸話を、寝物語にいつも聞いていた。華奢な母の身体を揺らし、何度も、何度も。

その名の通り、月のように美しく気高い、祖先のようになりたかった。

同じようになれなくても、近い存在になりたかった。

姉として、長子として、娘として、妻として、女として。

一人の、人間として。

でももうそれは、叶わない。

――――

月読は――葵は、左胸を押さえた。

痛い。傷口をナイフでえぐられているような、身をよじりたくなるような鋭い痛みだ。

「まだ、舞台から降りるのは早いのよ、『月読』」

葵は唇を噛んだ。

「降りるのは、終わってからよ」

弓を構え、弦を引く。光の矢がつがえられた。

「さぁ……最後は派手に舞ってやろうじゃない！」

小屋が吹き飛ぶ。

「『鳴弦姫（メイゲンヒメ）』、部分解除！」

光の矢が――放たれる！

ドガアァァァァァァァァァッ

黒い塊が消し飛んだ。

「く、ぅ……」

月読は膝を着いた。

彼女を囲うのは無数の妖魔達。しかしもう、動くことは無い。人形の残骸のように身体を散らばらせている。

戦えば戦うほど、胸の痛みは増すばかりだ。今や、首ももげそうになっている。

見なくても解る。今自分の身体は、壊死しかけている。

動くたび、痛む皮膚と着物がこすれて悲鳴を上げたくなる。

だがそんな暇無かった。妖魔達の攻撃は絶え間無く続き、月読の、葵の身体を喰いちぎろうとする。

葵の身体は反射とも言える動きでそれを凪ぎ払った。

そうすることで葵の身体はぼろぼろに、否、ずたずたになっていく。

「限界、近いかな」

ぽつりと呟く。黒い空に、それは響かない。

何度、この空に気が狂いそうになったか。そうならなかったのは月読の中の忠誠心と、葵の中の復讐心ゆえだった。

どこまでも静かな月読と、激しい憎悪に揺れる葵。拮抗する二つの意思が、彼女をぎりぎりで保っていた。

しかし、今は。

「……来たわね」

近付いてくる足音に、葵は顔を上げた。

周りの風景に溶け込めてない美女を睨み付けると、相手の顔が歪められる。

「どうして妾を裏切ったの？」

女の――羽衣姫の手がすぅっと上がった。

「おまえは……妾の忠実なおもちゃでしょう！」
羽衣姫の五指――正確には手袋の指部分が伸びた。五本の槍のごとく、葵に襲いかかる。
葵は立ち上がって右に飛んだ。背後のほぼ木片と化していた家屋が粉砕される。
足が地面に着くと同時に、葵は弦を引き絞り、狙いを定めた。
「持国天ノ光！」
光の矢が放たれた。
弓から離れた瞬間、矢はぐぉっと膨れ上がり、人の顔を成す。
憤怒の形相の、兜を被った男の顔だ。
象ほどもある顔は、巨大な口を開けて羽衣姫を飲み込んだ。
やった、と葵が思った瞬間。

ドスッ

肩を、何かが通過していった。
葵は固い動きで目を左にやる。弓を持たない手に、紅いしずくが伝っていった。
「あ、うぁっ」
葵は苦悶の声を上げた。
羽衣姫の伸びた指が、肩を貫通している。かなり後ろまで伸びており、自力で抜くのは無理そうだった。
「ねぇ月読ちゃん。妾は寛大よん」
弾け飛んだ光の中から、羽衣姫が現れる。彼女が近付くたび、肩を固定している指が短くなっていった。
「今なら許してあげる。呪いも解いてあげる。妾の隣で、ずぅっと可愛いがってあげる」
距離が十数センチだけになる。顔が近付けられ、その差は更に縮まった。
「だから、ねぇ？　妾の元に戻りなさいん。妾の手の内で、ずぅっ

と、ずぅっと舞ってなさい」
鼻がぶつかりそうだ。至近距離から見ると、羽衣姫の瞳は洞(うろ)のように冷たい。なのにその奥には、業火のような狂熱を秘めていた。
(あぁ、何て矛盾した目)
自分と同じ。熱さと冷たさに取り憑かれた目。
隅に追いやっていた『月読』が語りかけてくる。
『この方の元にいればいい。全てをこの方にゆだねれば、苦しまなくてすむ』
そう、苦しまなくてすむ。
壊死はもう左肘まで広がっており、半身が使い物にならない。戦えなくなるのも時間の問題だろう。
肩の傷だって、壊死したところだったせいが意識がぶっ飛びそうになるくらい痛い。
このままいけば、流星に言った通り死ぬことになる。
苦しみと痛みで、気がおかしくなりそうだ。
『月読』に意識全てを手渡せば、『葵』はそれから離れることができる。
もう良心をいとわなくていい。家族への裏切りに涙する必要も無い。夫の死に、苦しまなくてもいい。
だけど。
「私、は……」
失いたくない。自分を。誇りを。
覚悟はとっくにできている。
迷う必要は、無い。
「おまえのものになどならないわ。おまえの舞台で踊るのはまっぴらよ」
驚くほどはっきりと、拒絶の言葉が出た。
瞬間、肩から血が吹き出す。羽衣姫が指を抜いたのだ。
痛みは更に激しくなったが、代わりに腕は自由になった。
無論、壊死しているためにそう簡単に肩が上がるわけがない。

しかし葵は、まだ無事の指を弦にかけ、引いた。
（一矢だけでいい。一矢だけで、私は私を取り戻せる！）
光の矢をつがえる。
「うあぁぁぁぁぁぁ！！」
矢が、弓につがえられた状態で膨張した。
距離は十数センチしかない。照準は定まらないが、これだけ近ければ外れることは無い。
壊せなくてもいい。ただ、一矢むくいたい！
「喰らえ！」
最期の光の矢が、放たれた。

――――

走っていた。足がもつれそうになりながら、山の中を。
「ハァ、ハァ、ハァ」
流星は顎を伝うしずくをぬぐった。
学ランはとっくに脱いでおり、どこかに捨ててしまった。
走るたびに枝が手や頬をひっかいていく。頬の傷が、しずくが伝うたびにひりひりした。
制服はもうぼろぼろだ。替えはあったか否かを考えている余裕などない。
「ハァ、ハァ、ハァ……う、ぐっ」
喰い縛っていた歯の間から、嗚咽が漏れる。耐えようとしてるのに、全然無理だった。
「……っんなことで、泣くな俺」
目をこすってもこすっても結局元に戻る。流星は諦めて、手を振るだけにとどめた。
（早く、伝えないと……羽衣姫の居場所を。早く、早く！）
感情が酷く揺れているせいか、流星の額から角が盛り上がっては戻った。スピードも、どんどん常人から離れていく。

半日近くかかる椿家の屋敷に、たった一時間でたどり着いた。
人間離れしていることを皮肉ってる時間は無い。急がなければ。
「悠……どこだ……っ」
さすがに、もう息が絶え絶えだ。歩くのも辛くなっている。
門を開け、玄関に行き着く途中で膝を着いた。
「流星？」
倒れそうになっていると、声をかけられた。
顔を上げると、目的の人物が目に映った。おかげで全身の力が抜ける。
「ちょっと流星！　どうしたの？」
悠は駆け寄って流星の肩に触れた。
「一体何が……とにかく中へ」
「待て」
流星は悠の細い手首を掴んだ。
「それより……アジト」
「アジト？」
「妖偽教団の……アジト」

「言わせないん♪」

背後の門が吹き飛んだ。
粉々に破壊され、残骸が二人の頭に降ってくる。
疲れて動けない流星を、悠が引っ張って移動した。木片鉄片の雨を逃れ、抜刀する。
「流星、下がって。その身体じゃ戦えないでしょ」
悠に言われ、流星は素直に後ろに引いた。
「んふふ。さぁさぁ、フィナーレよん♪」
土煙から、影が現れる。
長い黒髪をたなびかせ、紅い唇をほころばせ、漆黒の瞳を輝かせ、人形のように整った顔をゆるませ。

「全員、妾が殺してあげる♪」
羽衣姫が現れた。
――――
「愚かなことをしたな」
熾堕は言った。
相手は答えない。当たり前だ、彼女はすでに、もの言わなくなっている。
しかし熾堕は語りかけるのをやめない。
「一人で苦しみ、一人で哀しみ、一人で戦い、一人で散った。それはおまえが望んだ結果か」
しゃがみ、彼女の髪に触れる。彼女の妹と同じ、美しく豊かな黒髪だ。
「この国では、冥界を彼岸と呼ぶのだったな。そこは、どんなところだ？」
熾堕は手を引いた。酷く寂しげな顔で。
「俺には解らない。死んでも、きっと。俺には、そこに行くべき魂が無いからな」
熾堕は引いた手で胸元をこすった。服がくしゃりとしわになる。
「どうしてだろうな。星を読み、見、人の生き筋を知ることはできても、変えることはなかなかできない。力があるのに、いや」
熾堕は銀の瞳を閉じた。
「力があるからこそ、か。力ある者は色々制約が多い。守らなければ、待つのは崩壊のみだ」
彼女の上身を起こし、囁きかける。
「おまえもだ。力があるゆえに制限されていた。しかし、一つだけ特権がある。それは運命を変えること。もっとも、変えた先がよりよい未来かなど解らないがな」

事実結末がこれだ、とため息をつく。

異様な光景だった。

限り無く美しい男が、限り無くおぞましい死体に囲まれ、限り無くむごい女の死体に話しかける。

女の身体は半分変色していた。首から左頬にかけてまで肌が黒ずんでいる。手など崩れ、五指がくっついていた。

左肩とみぞうちには穴が開いて、向こう側が見えてしまっていた。その傷を、男は眉をひそめて見つめる。

「あれも酷いことをする。さすがはあの男が造っただけある。いや」

ふと、遠い目になった。

「宿ったのか。千年以上も残り続けるとは、あれの念も強い」

一つの目的のために念を残し、それを叶えられないから破壊に走る。

あいつの、思惑通りではないか。

「悲劇作家気取りか、あいつは」

小さく悪態をつき、男は女を抱きかかえた。

「墓を造ってやらないとな。夫と共に眠れるように」

男は呟き、ここで初めて微笑んだ。

慈愛も冷酷も含まれない、ただの静かな笑みを。

「安らかに眠れ。月になりたかった女よ」

おまえの出番は、もう終わったから。

女の手から、握られていた弓が滑り落ちた。

からん、と乾いた音を立てて転げる弓。その横にしずくが一つ、ぽたりとしみを作った。

第二十一話　散華<上>

受け止める。重い攻撃が、腕をしびれさせる。
「う、ぐぅっ」
悠は苦悶の声を上げた。
「うふふふふ♪　この程度ん？」
大きな刃と化した腕を悠の刀に押し付け、羽衣姫はにんまり微笑んだ。
「もっと、もっと楽しませてよ、悠ちゃあぁぁん♪」
右膝が振り上げられた。悠は後ろに跳び、ぎりぎり避ける。着地と同時に刀を突き出した。
羽衣姫は振り切った足を墜落させた。頭を粉砕されそうになるも、悠は紙一重でかわす。髪が数本舞った。
悠は流星から離れるようにして羽衣姫との間合いを取った。
ほんの少し戦っただけなのに、精神力をごっそり削ぎ取られた気分だ。
人柱を九人殺したことにより封印はほとんど解け、多くの人間を殺し喰ったことにより、羽衣姫は本来以上の力を得ている。
平安初期に造られた、退魔武器の対極となる降魔武器、羽衣姫。
人を心身共に喰らう『彼女』は、恐るべき力を持っている。
しかし、何より恐ろしいのはその力ではない。
プレッシャー。
その完璧過ぎる美貌。相手を圧倒する存在感。それらが、こちらを押し潰そうとする。
（一対一だとそれが顕著だね。できれば、向けられる意識が分散されてると助かるんだけど）

悠は刀を持ち直した。
並の戦闘力では向かい合うことすら困難だろう。殺気が上乗せされていれば、なおさら。
悠自身、常人より鍛えられた精神を持っている。しかし、羽衣姫と相対していると普段以上の実力が出せない。
（それでも、ここで奴は……倒す！）
悠は刀を振りかぶった。
「初の手、風刃斬（そめ ふうじんざん）！」
衝撃波が地面をえぐった。狙いは外れず、羽衣姫に向かっていく。
「いやん♪」
しかし羽衣姫はそれを受け止め、弾き飛ばしてしまった。
「この程度で妾を……！？」
羽衣姫は言葉を中断させ、ばっと上を向いた。
後ろに跳びのき、上空から突き出された槍を回避する。
「くそっ」
跳び上がり、槍を共に降ってきた猛は舌打ちを漏らした。
脳天を狙った攻撃。それを避けたということは、やはり肉体は本体より脆い。
「『打球姫（ダキュウヒメ）』、部分解除」
声が響いた。
歌うような、旋律を伴った声。
「頼むよ、文菜（フミナ）」
悠は背後の少女に声をかけた。
肩上まで伸ばした茶葉に、少女にしては太めな眉、つり上がった瞳は光を灯しておらず、小さな唇はきゅっと閉じている。
それだけならどこにでもいそうな、無気力気味の女の子だ。
しかし着ている服は黒に白いレースが付けられまくったゴスロリワンピースで、両手首にはありえないものが鎖で繋がれている。
「鉄球……！」
羽衣姫が呻いた。

彼女の手首には、大人の男が身体を丸めてもなお足りないぐらい大きな鉄球が一つずつ繋がれていた。
そんなものを付けて、悠と同い年の子供が動けるわけがない。大人でも無理だろう。
しかし彼女は――野蔦（ノヅタ）文菜は、動けた。
「粉砕」
呟きと共に、文菜は鉄球を振るうた。
鉄球が宙を舞う。一瞬ぴたりと止まったかと思うと、そのまま羽衣姫に向かって落ちていく。
質量プラス重力。とてつもないスピードに、羽衣姫も紙一重で避けた。
しかしとてつもないのはスピードだけではなかった。
地面に触れたとたん、半径五メートルの範囲で土が沈む。地震が起きたかと思うほどの震動が全員の身体を揺さぶった。
しかし文菜の攻撃は止まらない。もう一つの鉄球を、今度は投げつけた。
しかも片手。ボールを投げるように、易々と。
しかし、速度は投げつけたという騒ぎじゃなかった。
銃弾か何かのようなスピードに、羽衣姫の目が見開かれる。
今度は真っ正面から受け止めた。驚くことに、彼女は吹っ飛ぶどころか大勢すら崩れない。
「甘いわ……よん！」
鉄球が弾き飛ばされた。それはまっすぐうずくまる流星と、移動していた猛の方へ向かう。
「うぉ！？」
「わわっ」
二人は慌てて横に跳んだ。背後にあった木が鉄球とぶつかり、バラバラに砕ける。
更に向こうに飛びそうになった鉄球を、文菜はぐいっと引っ張って手元に戻した。

それを目で追った羽衣姫の後ろに回った悠は、刀を突き出した。
狙いは――首。

ギィィィィィッ

手がしびれた。白銀の刀身と紅い柄が視界をかすめる。
「しまっ」
手から離れた刀に、悠は手を伸ばした。
「終わりよ、悠ちゃん♪」
羽衣姫の手が、刀を弾き飛ばした鋼鉄の手が、悠の顔に落ちる――

バチィィィィィィィィィィッ

羽衣姫の胴に炎の塊がぶち当たった。
動きの止まった羽衣姫に一瞬呆けた悠だったが、すぐさま後ろに跳び、落ちてきた『剣姫』を受け止めた。
「……妾を拒絶するばかりか、攻撃をしかけるなんて、いい度胸ねん」
羽衣姫はじろりと流星を睨み付けた。流星はおびえなど出さず、小刀を構えて睨み返す。
それに対し、羽衣姫の眉がぴくりと動いた。
「嫌な目……嫌な顔……嫌嫌嫌」
すぅっと両腕が上げられる。目はちろちろと火のように揺れていた。
「あぁぁ、あの女と同じ目。殺したのに、どうして同じものがある？」
女、という単語に、流星の顔色が変わった。
目を見開き、羽衣姫を凝視する。その顔は、今にも発狂し出しそうだった。
「まさか……」

「んん？」
「おまえ、月読は……葵さんはどうした？」
ほとんど叫び声に近い叱責に、悠の方が驚いた。
なぜ、ここで姉の名が出てくるのか、全く脈絡が掴めない。ただ、羽衣姫の笑みと言葉に、全身を震わせた。
「月読ちゃんね。妾に逆らったから殺したわ♪　妾の役に立たない駒は、早々に捨てないとねぇん」
あまりにも軽々しく言われた言葉に、頭が一瞬ついていかなかった。
月読を殺した？　月読が殺された？
月読はもうこの世にはいない？　なら葵は。
葵姉、は。

ダンッ

地面を蹴る音がした。
「狩りの対象」
唇を僅かに動かした文菜は空中へ跳んだ。両手の鉄球を、鎖を使って振り下ろす。
「いやん♪」
羽衣姫はそれらを受け止め、今度は弾くのではなく引っ張った。
空中で身動きの取れない文菜は簡単に引き寄せられる。
羽衣姫はそんな彼女の腹に膝を叩き込んだ。
蹴り飛ばした文菜には目もくれず、羽衣姫は猛との間合いを詰める。
突き出された槍をあっさり避け、猛の喉を殴った。
「がっ……」
地面に倒れ伏す猛。更に腕を振り上げた羽衣姫の背中に、流星が炎のかまいたちを放った。
防がれた直後に走り出し、間合いに入ったところで炎で形成され

た刃をけさがけに振り下ろす。
だが、炎は羽衣姫とぶつかった瞬間に飛び散ってしまった。
「妾自身には効かないわよん♪」
羽衣姫の右手の巨大な刃が流星を追った。流星は目を剥いて後ろに跳ぶ。
だが、少し遅かったらしい。左肩から右脇腹にかけて浅く斬り裂かれた。
「っぐ」
流星は顔を歪めて傷を押さえた。体力がまだ完全じゃなかったようで、早くも息が切れ出している。
「姫持ちでもないのに、妾に対抗しようなんて失笑ものだわん♪」
羽衣姫の唇の端がつり上がった。
「大丈夫♪　むごたらしく殺してあげるからぁん」
羽衣姫の刃が、再び上げられた。

ギィィィィィィィィンッ

金属音と共に、羽衣姫の身体がぶっ飛んだ。
ヒールの底を滑らせ、顔を上げる。
「一体な、に……」
羽衣姫の目が見開かれた。
「ゆ、悠……？」
流星の呟く声も、今の悠には聞こえない。
「よくも葵姉を……葵姉を！」
悠は刀の切っ先を羽衣姫に向けた。
美貌を歪め、すずやかな声を張り上げて。
「おまえは一体何人殺せば気がすむの？　父さんや葵姉、多くの退魔師達！　おまえは何のためにあるというの？　破壊しか生めない、存在してはいけないおまえか！」
羽衣姫の表情が変わった。

その変化は劇的で、別人と入れ替わったのではないかというほどだった。
「小娘に何が解るというの？」
きしむような呻き声。みるみるうちに、目がつり上がっていく。
ただでさえ強力なプレッシャーが、更に強くなる。しかし悠は、それをものともしなかった。
「おまえは私が狩る！」
「思い上がるな、小娘！」
二つの刃がぶつかり合った。

――――

まるでわいて出てくるようだった。
「こんな数の妖魔……どっからだしてんのよ」
日影は舞いながら叫んだ。
無論、ただ舞っているわけではない。扇を使い、妖魔を斬り裂いていっている。
倒れていく妖魔は人型で、ただれてうじのわいた身体を引きずっていた。
「妙だ、本当にどこから出てきてきてる？」
風馬は顔をしかめながら弾倉を替えた。更に腰のホルダーからもう一つ銃を引き抜き、引き金を引く。
見事、四発の弾が一匹の妖魔に撃ち込まれた。
隣では雷雲がちょうど大槌で妖魔を殴り倒したところだった。
（この状況……弾を入れ替える時間があるか……！？）
風馬は右手の銃を妖魔に向けた。二発。次にもう二発放つ。
更に引き金を引く。が、ガチャッという音を上げただけだった。
（詰まった！？）
風馬は慌てて左手の銃を向け、右の弾倉を入れ替えようとした。

ドガアァァッ

吹き飛んだ。銃口を向けるつもりでいた妖魔が、近くにいた妖魔ごと。

「……ったく、てめーら」

そして吹き飛ばした張本人である刀弥は、大音量で叫んだ。

「人ん家の庭、壊してんじゃねぇよ！」

言下と共に振るわれる鎧の手。ぐいっと伸びたかと思うと、妖魔達を凪ぎ払った。

「と、刀弥さん……」

「凄ぇ……」

日影と雷雲の呟きに気付いたように、刀弥は振り返った。

「大丈夫か、おまえら」

「は、はい」

風馬が頷くと、刀弥はふ、と息を吐いた。

「よかった。……しかし」

回りを取り囲む妖魔達を見、刀弥は顔をしかめさせた。

「裏切った退魔師のしわざだな。亡者達を召喚するとはたちの悪い」

「亡者って……呼び戻された死者達のことですよね」

日影は妖魔達を見渡した。

死に、あの世に送られた者達、亡者。

現世に呼び戻された彼らは救いを求め、ゆえに生者を喰らう。

人であって妖魔であり。

妖魔ではなく人でもない。

哀れな、魂の残滓。

日影達は初めて見る。いや。

（初めてではないか。地上に限定しなければ）

妖偽教団の幹部に送られた、あの闇の空間。あそこがあの世ならば、あの無数の顔達は亡者達だろう。

――いや、今はそれを思い出す余裕は無い。

「こいつらが亡者なら、一体何匹いるんですか！　現世界人口の数億倍はいますよ、亡者って」
風馬の言う通りだ。
亡者はすでに死んでおり、倒してもあの世に戻るだけである。
つまり、呼び出されたらまた来るのだ。
エンドレスである。キリが無い、とも言う。
「大丈夫だ」
しかし刀弥は、気にも留めてない風に笑った。
「術者の見当はおおよそ付いている。舜鈴が行ってるよ」

――

印を結び、呪を唱える。そうしなければ操れないのを、男達は知っている。
暗い室内で、六人の男が円を描いて座っていた。
唱える声も動く指も、きっちりそろっている。少しでもずれれば、亡者をあの世に戻すことになるのだ。
一人であの量を操るのは無理だろう。恭弥レベルでも十匹が限界だ。
もっとも、彼がこの禁術を使うとは思わないが。
「そろそろ止めてもらうよ」
舜鈴はその中に割り込んだ。男達はいきなりの乱入者にのけぞり、しかし手も口も動かしたままだった。
その意気だけは認めよう。だが。
「性根腐ってるのは見過ごせないね！」
舜鈴はクナイの柄頭で二人の男のみぞうちを打った。
倒れた二人の背中に手を着き、背後の男の二人を両足で蹴り飛ばす。更に身体をひねって、残った二人にも回し蹴りを喰らわせた。
「終了ッと」
舜鈴は足を床に着けて一つ頷いた。

「これで妖魔の方はモーマンタイ。あとは……羽衣姫」
舜鈴は表情を引き締め、その部屋を後にした。

――――

恭弥の部屋に入った紗矢は、彼の枕元に座った。
「起きてる？」
「……ええ」
恭弥はむくりと起き上がった。
「調子、悪そうだな」
「まぁ、それはそうですよ」
恭弥は青い顔に困ったような笑みを浮かべた。
「……こんな時でも笑うのか」
目を丸くする紗矢に、恭弥は答えなかった。
答えないまま、微笑んだ。
微笑んだまま、呟いた。
「最後の一手だ」

刀が振り下ろされる。巨大な刃がそれを受け止める。
ハイヒールが蹴り上げられた。少女はそれを上体を後ろに投げて避ける。その反動で、少女の長い足が振り上がった。
女はそれを避け、刃を薙ぐ。少女は刀で動きを止め、横に跳んで勢いを減じさせる。

目にも止まらぬスピードで行われる戦いに、流星はつばを飲み込んだ。
速過ぎて目が付いていかない。割って入る気も起きない。
しかし、かと言って目をそらすこともできなかった。
「……っげほっ。う゛ぅ」
だから、咳き込む声に必要以上に驚いてしまった。
「！　だ、大丈夫か、おいっ」
喉を押さえてうずくまる猛に、流星は視線を向けた。
「えげづ、な……喉、いで……」
「喋んない方がいいってっ」
流星は慌てて猛の傍にしゃがみ込んだ。
「悠、は……」
「戦ってる。今んとこ互角だ。もしかすると勝てるかもしれない！」
流星は期待を込めて悠を見た。ちょうど、刀で羽衣姫の攻撃をしのいだところである。
「今は、そうでも……後々どうなるか……げほっ、それにあれ……」
喉の痛みがましになってきたのか、普通の調子に戻ってきている猛の声が低められた。

「怒り狂ってるって、感じだ。正気に戻ったら……戦えなくなるかもしれない」
「……」
流星は口を閉ざした。
確かにその通りだ。あれは怒りに身を任せた戦闘であり、その怒りが消えてしまったら、どうなるか解らない。
「で、でも悠は強いし」
「強いのは認める」
いきなり背後に鉄球少女が現れた。流星と猛は思わずびくぅぅっ、と全身を震わせる。
「でも今は、普段の理性的な動きとはほど遠い」
「心臓に悪いからその登場やめろ！　げほっ」
猛は叫んだ直後、案の定また咳き込んでしまった。
「と、ところでこの娘、何者（ナニモン）？」
流星は少しだけ少女から離れた。装飾された鉄球が、正直なところ怖い。
「野蔦文菜。俺らと同じ姫持ちッスよ……。その鉄球は『打球姫』」
「打球……野球かよ」
こんな状況下でツッコむ流星である。
ドガアァァッ
何かが後ろの木に叩き付けられた。
驚いて振り向く流星の視界に、ずるずると座り込む悠の姿が映る。
「悠！！」
流星が駆け寄ろうとすると、悠は刀を向けてきた。
「邪魔だよ……！」
「お、おまえ……」

流星は悠の姿を見て絶句する。
ボロボロだった。服は裂けて、白い肌は傷だらけだ。速過ぎて気が付かなかったが、かなり押されていたらしい。
「あぁぁぁ。妾は強くなった」
思わず出た、という体の声に、全員視線をそちらに向けた。
羽衣姫が、こちらを見ている。
見ているけど、見ていない。
別のところを、見ている。
「この力があれば、誰も拒否しない。誰も、妾を拒まないのよ……♪」
うっとりした声。何かに酔っているのか、言ってる意味が解らない。
流星達がそれの不気味さに、僅かに後ずさった時だった。

「悠、みんな！」

庭の向こう側――屋敷の方から、刀弥、日影、風馬、雷雲が走ってるくるのが見えた。
助けが来たことで、流星はほっと気を緩ませた。これだけいれば、羽衣姫を倒せるかもしれない。
更に、どこからか舜鈴も駆け付けてきた。他にもぞろぞろと、椿家の退魔師達も姿を現す。
全員すでに戦闘をどこかでしていたのか、疲れた顔をしていた。
しかし、これだけいれば羽衣姫も――

「多勢に無勢とはよく言うが」

たん、と。軽やかに地に降り立つ音がした。
嫌でも目につく銀色と黒色に、流星は呻く。
「熾堕……！」

「実力的には……多勢に多勢か？」
美丈夫は振り返り、にこりと微笑む。その彼の頭上に――突如として巨大な黒い手が振り下ろされた。
熾堕は翼を出したまま背後に跳躍する。はばたく音と共に、長身が十メートル上空まで浮かんだ。
「椿家当主……油断も隙も無いな」
「訂正する。代理だよ！」
鎧腕が伸びた。人間の腕としてはありえない長さまで伸び、鋭い爪を振り下ろす。
熾堕は更に上昇することでそれを避け、ぐんっと急下降した。刀弥も伸びた鎧腕を戻す。が、熾堕の方が速い。
熾堕の左足が振り下ろされた。刀弥はそれを生身の腕で防ぎ、戻ってきた鎧腕の拳で熾堕を殴り飛ばす。
もろに脇腹に入った。口から血をほとばしらせ、熾堕は三メートルは吹っ飛ぶ。
しかし黒翼が大きく動くと、空中でぴたっと止まった。
「……兄妹だからか。動きが椿　悠と似ている」
半反転していた身体を直立に戻し、熾堕は呟いた。
「皮肉でも言いたいのか」
不機嫌そうに顔を歪ませる刀弥に、熾堕は「いや」と首を横に振った。
「再確認しただけだ。兄弟は似る……そう、似るんだ。逆の道を進んでいても」
その時一瞬、熾堕の眉間にしわが寄った。
不快さを表しているわけではないようだ。不機嫌さを表しているわけでも、ない。
ただ、常にひょうひょうとして掴みどころの無いこの男の仮面が、ほんの僅かにほころんだ――そんな感じだった。
「……羽衣姫様、陶酔なさっておられる場合ではないでしょう」
しかし熾堕はすぐさま表情を戻し、羽衣姫に声をかけた。

「最後の人柱を殺さなければならんでしょう。ここは俺にお任せを」
「っ、させるか……！？」
走り出そうとした刀弥の身体が崩れるように倒れた。
刀弥だけではない。日影達や舜鈴、他の退魔師達まで同じように地面に伏してしまった。
「え、何で、どうして……！？」
流星は愕然として周りを見渡す。が、そうしてられたのも数秒だった。
「！？　ぐ、あっ……」
身体が地面に抑え付けられた。
背中や頭を踏みつけられているような感覚で、腕で地面を押し返しても上身はびくともしない。
何とか首だけを動かし、悠達を見る。全員同じような状態だ。
「少しだけ本気を出した。しばらく大人しくしてもらおう」
熾堕はにっこり微笑んだ。
「く、そっ……！？」
流星は顔を羽衣姫に向け、そこでありえない光景を目の当たりにする。
羽衣姫の正面に、一人の青年が立っていた。
正面とはいえ五メートルほど離れている。だが、危険なのに変わりは無い。
更に、その青年というのがここにいてはいけない人物だった。
「恭弥……」
人形のように美しいその横顔に、流星は呆然と呟くと、視界の端で悠が顔を上げた。大きな目が更に大きくなる。
「恭兄！　何でここにいるのっ。早くここから離れて！」
「……」
恭弥がこちらを振り返った。
笑ってる。恐怖心も何も感じられない、ただただ静かな笑みだった。

「どこを見ているのん♪」

羽衣姫が恭弥との間合いを詰めた。唇の端を吊り上げ、刃を頭上へ振り下ろす。

恭弥はたんと地面を蹴り、後ろへ跳んだ。

地面をうがった腕の刃が土をまき散らす。その土を払いながら、恭弥は呪符を取り出した。

「走嵐――」

呪符が手の中でぴくんと動き、離れる。狼の形になったと思うと、一気に巨大化した。

そうして地へ足を着いた恭弥の膝ががくんと崩れる。それでも切れ長の瞳は、しっかり羽衣姫を見据えていた。

襲いかかって狼を、羽衣姫は眉一つ動かさずに一文字に斬り裂いた。

首を斬られ、前足を振り上げたまま横倒しになる大狼。地に伏した時には、呪符に戻っていた。

「んー、式神に力が無いわねん」

羽衣姫はくすくす笑った。

「当然でしょうけどん♪　妾の力のせいで、理性を保つのも大変じゃなくて？」

「……」

「外を出歩いてるだけでも拍手ものよん♪　どうしてうごけるのぉ？」

「……」

恭弥は答えなかった。

よろよろと立ち上がり、また呪符を取り出した。

「式神形変術」

呪符がぐにゃりと歪み、一メートルほどにまで伸びる。

「武器化、『草薙ノ剣』」

刀へと変化した呪符を、恭弥は力強く握った。
走り出す。恭弥の刀が、羽衣姫に振り下ろされる。
刀を腕の刃で受け止めた羽衣姫は、もう一方の腕を槍へと変えた。
恭弥は突き出された槍を身体をひねることで避け、身体を引く。
しかし羽衣姫はそれを追撃し、刃と槍を同時に振り下ろした。
避ける恭弥。しかしふらついていたために完全には避けられず、
血の筋をほとばしらせた。
「この程度？　ねぇこの程度？　ねぇねぇねぇねぇ！」
羽衣姫は笑いながら武器と化した両腕を振り続ける。一方恭弥は
防戦するのに必死に見えた。
「恭弥、いい加減止めろ！」
刀弥が震える声で叫んだ。
「これ以上やったら、これ以上やったら……！」
しかし刀弥の声は聞こえていないのか、恭弥はふらふらしながら
も攻撃を受け止め、受け流す。その間にも、傷は増えていった。
恭弥の意図が解らない。これじゃあまるで、死ぬために戦ってる
ようじゃないか。
流星は死、という単語を頭に浮かべ、全身を震わせた。
家族の死、友人の死、月読の――葵の死。そして名も知らない退
魔師達の死。
それらが頭の中でぐるぐる回る。止めようにも、決壊したように
その想いはあふれ出た。
「嫌だ、嫌だ」
またあんな思いをするのは。
また無力感を感じるのは。
また、死を見ることは。
「……ぬな。死ぬな、恭弥！」
流星が叫んだ瞬間、恭弥の視線が僅かにこちらを向いた。
そのほんの少しの隙を、都合よく見逃す羽衣姫ではない。
「！　がっ」

恭弥の腹に羽衣姫の膝が叩き込まれた。
一番近くにあった木に背中を叩き付ける恭弥。動けなくなった彼の頭上に、刃と槍の腕が振り下ろされた。
「これで終わりぃ♪」
「ぐっ」
恭弥は顔を歪めながら上体をひねった。腕から赤い線を引きながら、持った刀の刃に人差し指を添える。
「武器化――『与一（ヨイチ）ノ弓』」
刀がぐにゃりと伸びた。細長く、そしてゆるやかなカーブを形取り、両端を繋ぐように糸がぴんと張る。
恭弥が糸――弦を引くと、光を集束したような矢がつがえられた。
矢が羽衣姫に向かって放たれる。小爆発を起こし、羽衣姫の周りが煙で見えなくなった。
「や、やったのか……？」
流星は気が抜けたように呟き、次には驚愕で叫んだ。
「危ない！」
遅かった。煙から伸びた手は、恭弥の細い喉元を掴んでいた。
「この程度ん？　期待外れもいいとこね」
恭弥の身体を持ち上げ、羽衣姫はつまらなそうに唇をとがらした。
「人柱最強と言われるぐらいだものん。でもぉ、大した力じゃ」
バシィ、と羽衣姫の顔面に呪符が貼り付けられた。
人型ではない。長方形の札だ。
「爆（バク）」
呪符から手を離し、恭弥はすぐさま印を切って口の中で呟いた。

バアァンッ

爆発が羽衣姫の頭を包んだ。
ざわめく周囲。今度こそ倒したと思ったのだ。
首を掴んだ手はそのままで、煙が晴れていく。

だが羽衣姫は。
無傷、だった。

「……興冷めよん」
次の瞬間。声を上げる間も無く目も見開く間も無く。
容赦も無く慈悲も無く。
恭弥の身体は、貫かれた。

散華<下>

何も、誰も恨まなかったわけじゃなかった。

家族と離された時、毒を盛られた時、人柱になった時。

どうして自分が、と叫びたかった。

なのに……どうしてか、直前で引っ込んでしまう。

自分に向けられる目が普通と違うからなのか、思った以上に自分は現状を受け入れているからなのか。

解らない。けれど、自分は哀しむことができないから、それが一因かもしれない。

悲嘆も悲観もできない。ただただ現状を受け入れるだけ。

あまりにも人間として欠けた心だ。それゆえに感じられるはずのことも感じられない。

だからか。

苦しみも痛みも恨みも怒りも何もかも。笑うことでかき消していた。

哀しませたくなかったから。

最初は何が起きたのか解らなかった。

しかし視線を下ろし、我ながら冷静に現在身に起きていることを把握する。

（あぁそうか。腹を貫かれたのか）

そう認識したとたん、恭弥の身体に激痛が巡った。

「っ……！」

あまりの痛みに叫ぶことができない。どちらにせよ、喉を掴まれているため声は出ない。
「つまらない舞だったけど、妾の手間をはぶいてくれたことだけはほめてあげるわん♪」
羽衣姫の囁きに、恭弥は視線だけ彼女の方へ向けた。
羽衣姫は心底嬉しそうに、慈愛を込めた声をかけてきた。
「もう貴方は用済みよん♪」
腹から刃と化した腕が引き抜かれた。
身体をむしばむ痛みは更に酷くなったが、服を濡らす血の温かさになぜかほっとした。
しかしそう感じたのもつかの間、気付いた時には空中に放り出されていた。
地面を転がり、木の根元で止まる。周りには誰もいなかった。
それは当然で、皆がいるのとは反対方向に放り投げられたのだ。
恐らくは治療されないためだろう。――我ながら、どこまでも冷静である。
（そんな心配、しなくていいんだが）
この傷を治す気は無かった。
最後の布石は打ったし、後は自分が死ぬだけだ。
ようやく、終わりが近付いた。
先祖が作り出したこの『悲劇』が、やっと終わる。
「さぁ、とどめを刺してあげるわ♪」
羽衣姫が一歩踏み出した。刃は、まだ血でぬらぬら光っている。
「やめろ！」
誰かが叫んだ。同時に何かが弾けるようなバチバチという音が響く。
恭弥は閉じかけていた目を再び開いた。
「……ゆう……」
悠だ。悠が叫びながら、熾堕の術を力任せに解こうとしている。
かなり無茶な行動だ。実際、術に無理矢理抗おうとしたせいで皮

膚が裂け、血が吹き出している。
「あらあらん♪　無駄なことを」
悠の必死な抵抗を見て、羽衣姫は笑った。
「無理をすると身体が壊れるわよん♪　諦めて兄が殺される様を見てたらどーお？」
「黙れ！　おまえに何が解る！？　おまえに、おまえなんかに！」
悠は刀を持った手を前に突き出した。
「家族を失いたくない気持ちが解るもんか！」
刀が振り下ろされた。
動かないはずの腕が動き、刀を振るう。それだけでも驚きなのに、技まで発動された。
地面をはうようにして突き進む衝撃波は、羽衣姫と衝突して彼女を飲み込む。
先程まで鉄壁を誇っていた羽衣姫の防御が、その時初めて崩れた。
衝撃波によってたおやかな身体は吹っ飛び、地面に伏してしまう。
皆驚愕して羽衣姫と悠を見比べる。だが悠は気にもとめず、ボロボロの身体を引きずるようにして恭弥に駆け寄った。
「きょ、に……」
恭弥の傍にぺたんと座り込んだ悠は、酷く弱々しかった。
「恭兄、死んじゃ嫌だよぉ」
大きな瞳から涙がこぼれ出た。大粒のそれを頬に受け、恭弥はあっ、と思う。
昔、三年前にも同じようなことがあった。
あの日――あの時に――

――――

父から聞かされた話は、まだ中学生だった恭弥に大きな衝撃を与えた。
「悠が、継母（かあ）さんを……殺した？」

信じられない、と恭弥はふとんの中で呟いた。そんなことをする必要が悠にあるものか。

しかし父は――奏司は冗談を言う人ではない。特に、こんな悪ふざけなど言うわけが無かった。

「衝動的なものだったらしい……倉の刀で。よりによって、あの刀で……」

奏司は畳に向かって重々しいため息を吐き出した。

「いつ、そんなこと……」

「おまえの目が覚める三日前だ」

「……」

恭弥は拳を握った。

「僕のせい、ですよね……」

哀しいとは思わなかった。ただ、ふがいなさが自分を責めている気がした。

「僕が毒なんて飲んだから……」

「それは違う！　悪いのは毒を盛った蘭だ。そしてそれに気付かなかった私だ。だから哀しまなくていい」

父の言葉に、恭弥はあいまいに笑うしかなかった。

哀しくはなかった。ただ悔しかった。

妹を守ってやれなかった。負う必要の無い罪を背負わせてしまった。

悠はどうしているだろう。会いたい。会って謝りたい。

ごめんな、と。おまえを守ってやれなくて、ごめんなと。

しかし毒と、人柱になった影響で、しばらくはふとんから起き上がれないだろう。

どうしようかと思案していると、からりとふすまが開いた。

「悠……」

父が口にした名前に、恭弥は驚いて顔をふすまの方に向けた。

妹は確かにいた。だが、その姿は生者かどうか疑わしいほどにやつれていた。

瞳は光を失い、手は力無くだらりと下げられている。目の下にはくまもできていた。

ほんの数日でここまで変わってしまうのかと、恭弥は言葉を失った。

恭弥はそのまま動けなかったが、父は何かに気付いたようだった。立ち上がり、「私は戻ろう」と小さく言って退出してしまった。

部屋に沈黙が漂う。恭弥はどう声をかけようか迷っていたし、悠も同じ気持ちだったのだと思う。

そのまま数分が経ち――悠が枕元に、ちょうど先程まで奏司が座っていた場所に、崩れるようにへたり込んだ。

「ゆ、悠？」

恭弥は横たわったまま、妹の顔を覗き込んだ。

「……嫌だよぉ」

口をついたのは拒絶の言葉。悠が何を拒絶しているかは、すぐに解った。

「死んじゃ嫌だよぉ」

ポロポロと落ちてくる涙。それを頬に受けながら、恭弥は再びかける言葉を見失った。

「わた、私……母さん殺しちゃった。この手で、さ、刺して」

「悠」

「刀、が語りかけてきて……私あれが、『剣姫』だなんて知らなくて」

「悠、もういいから」

「殺すつもりなんて無かったのに！　母さんがき、恭兄のこと殺そうとして」

「もういいんだ」

「私、こんな……こんなこと……」

「もう、いいんだよ」

恭弥は手を伸ばし、悠の頬に触れた。指で目元の涙をぬぐい、笑いかけてやる。

「誰もおまえを責めはしない。少なくとも、僕はおまえを恨んじゃいないよ」
「でも恭兄がそうなったの、私の……母さんのせいで……」
悠はしゃくり上げた。あふれる涙が恭弥の指先をぬらす。
涙から感じる温かみに、恭弥はそこから全身が温かくなっていくのを感じた。
この娘は自分のために泣いてくれているんだ。そう思うと、心に何かが染み渡るようだった。
大切にしたい。兄が自分をそうしてくれるように、自分はこの娘を守りたかった。
「ごめんなさい、ごめんなさい」
だから、泣かないでほしい。たった一人の妹には、笑っててほしい。
「ごめ、なさ……」
「僕の方こそ、ごめん」
優しく頬を撫でて笑いかけると、悠の肩がぴくんとはねた。
なぜ謝られているのか解らない、という顔だ。まぁ当然だろうが。
しかし恭弥は、言葉を止めなかった。
「ごめん、ごめんな」
悠の目からはまだ涙が流れている。目が充血してはれていて、それでもなお美しかった。
自分とよく似た顔。でも自分よりずっと、この娘は強く輝ける。
輝いて——きっと誰かに愛されるんだろう。
もしその誰かを悠自身も好いたなら、その誰かが悠を守ってくれる。
でも、それまでは自分が守らなければならない。
なのに、自分は守れず傷付けてしまった。
だから、謝りたい。
「守ってやれなくて、ごめん」
言って、微笑んでやる。

悠は目を見開いて、ただ兄を凝視するだけだった。
「あ……」
小さく声を上げ、眉尻を下げる。何度か目をしばたかせ、ようやく涙をぬぐった。
乱暴に拳でこすったせいで、目元が赤くなる。しかしそれには気にもとめず、悠は「お願い」と口にした。
「約束、して」
さっきまでかすれた声だったのが、今はもう平素に戻っている。だが、まだ震えが残っていた。
「お願い……私より先に死なないで……私を、置いていかないで」
「……」
恭弥は押し黙った。
人柱として呪印を背に受けた以上、あまり長生きはできない。精神が病んで狂い死ぬのが、寿命より早いからだ。
それに、元より虚弱なこの身体が、健康体の妹より長生きする可能などほぼ無い。
昔から家の力を保つために血縁者との婚姻を繰り返したゆえ、身体の弱い者や問題を抱える人間が多い椿家。
兄の刀弥は片腕に問題を持ち、それをおぎなうためその腕に『如意ノ手』をはめて戦う。
亡くなった母も椿家の分家の娘だったが、やはり自分と同じく弱い身体だった。
悠のように全く問題無く産まれた人間は、この家には珍しい。
椿家の負の側面によってこんな弱い身体を持ってしまった自分が長生きなど、あまりにも無謀過ぎる。
でも、それがこの娘の望みなら。
なら少しでも頑張ってみようか。
もう傷付くことが無いように。
「……解った」
恭弥は笑みを深くした。

「約束する。おまえを置いて死んだりしない」
「……本当？」
悠は不安げに表情をかげらせたまま首を傾げた。
「勿論。僕が約束を破ったことがあるか？」
問いかけると、悠は目の端からこぼれた涙をまたぬぐい、首を振った。
「うぅん。いつも、守ってくれる」
「だろう？　だから泣くな」
恭弥は悠の頬から手を離し、その黒髪をぽんぽんと叩いた。
「大丈夫。ちゃんと生きるから」
恭弥はしっかり約束してやった。
そう、約束した。
生きると、約束したんだ。
なのに。

――

何で忘れていたんだろう。
あんなに強く約束したのに、忘れるなんて。
覚えていたら、こんな選択しなかったかもしれない。
「やだ……嫌だよ……死んじゃ嫌ぁ」
あの時よりずっと強くなった妹。なのにこんなにも泣きじゃくっている。

この娘を残して僕は死ぬのか。
僕はなぜ死ななければならないのか。
――この結果を僕が望んだからだ。

恭弥は手を伸ばした。幸い右手は汚れていない。涙をふいてやることができる。

約束を守れなかった。
こんなにも傷付けてしまった。
謝っても謝りきれない。
この娘だけじゃない。多くの人間を傷付け死なせてしまったのは、自分の独断のせいだ。
自分の選択が間違っているとは思わない。だが正しいとも思えなかった。
正しいはずがなかった。自分は、こんなにも妹を傷付けている。
妹だけではない。多くの人達を、自分は傷付けてしまった。
なんて自分勝手で酷い人間だろう。たった一つ感情が欠けてるだけで、こんなにも残酷になれるのか。
罪をつぐなえないまま死んだら、兄はどう思うだろうか。あるいは友は？
（あぁ、でもせめて）
妹には謝りたかった。約束を破ったことをわびたかった。
「ごめん」
あの時と同じように涙を指でぬぐい、謝罪の言葉を口にすると、やはりあの時と同じように悠の肩がぴくんと跳ねた。
「ごめん、ごめんな」
「恭、兄？」
「約束守れなくて、ごめん」
視界がかすんで見える。声も、だんだん遠くなっていっている。
目の前の悠はまだ泣いているのか。
叫ぶ声。この声は兄か？　それとも流星？　二人の声は似てるから解らない。
羽衣姫はどうなってるだろう。
椿家の退魔師達はどうしてるだろう。
姫持ち達はどんな気持ちだろう。
兄さんと悠は……
……あぁ、もう。

何も見えない、何も聞こえない。何も、何も……

第二十二話　戦意<上>

手が落ちた。
虚ろな目。血の気の無い顔。
知らない。こんなの知らない。
違う。こんなの違う。
これは……これは……
恭兄なんかじゃ……

「嫌あぁぁぁ

「う、あ〝ぁ……」
羽衣姫は苦悶の声を上げていた。
本体と肉体は傷など負ってはいない。だが、なぜか身体が思うように動かなかった。
（どうして……力が復活して、妾は完全になったのに……！）
千年前と同じ、あるいはそれ以上の力を手に入れたのに、身体の自由が効かない。
そして、何より羽衣姫が愕然としたことは。
（誰も妾を、見ていない……！？）
誰一人として自分に視線を向けていなかった。全く別方向を見ている。
まるで、自分を拒絶しているかのように――
（許さない。許さない許さない許さない！）
自分を拒むことは罪だ。
自分に従うことが正義だ。
そうでない者には――罰をやらねばなるまい。
羽衣姫は手から布帯を飛ばした。一番近くにいた退魔師二人を巻き取り、浮かび上がらせる。
その二人が上げた悲鳴に気付いたのか、全員が羽衣姫を振り返った。
自然と羽衣姫の唇が緩む。それでいい、と思いながら二人を締め付けた。
絞め殺す、なんて甘いことはしない。絞め潰してやる。
浮かんだ二人の足から血のしずくが垂れた。めきめきと骨の砕ける音を立てて二人の身体が原形から離れていく。
「て、めっ……」
刀弥が身体を起こそうとした。が、やはり動かない。
「ほほほほほ。今まで妾をわずらわせてきた存在もこれで終わり♪妾に殺され妾の力のかてとなりなさいん♪」
一際大きな音を立てて二人の身体から力が抜けた。

こと切れた二人を投げ捨て、次の獲物へと伸ばす。
「もっとも妾を侮辱した愚か者、椿　悠ちゃん♪　そんなに哀しければ兄の元へ連れてってあげるん！」
生き物のようにくねる布帯は悠の背中を――

バチィィィィィィィィッ

跳ね返された。弾き返された。
「え……！」　なぜ、と思った。
完全なはずなのに。この時代に置いて鉄壁なはずなのに。

斬られた。

『剣姫』が振るわれたかと思うと、その刃が布帯を斬り裂いたのだ。
「今まで誰も、傷付けられなかった羽衣姫を……」
誰かが呟いた。それは誰かなんて羽衣姫に解らなかったし興味も無かったが、現実に引き戻されるには充分だった。
「っ、よくも、よくも妾の身体をぉぉ！」
羽衣姫の咆哮。しかし悠はそれに身体縮めたりはしなかった。
ただ振り返り、顔を上げる。その顔に、羽衣姫はひっ、と小さく悲鳴を上げた。
浮かんでいた表情は、まるで幽鬼のようだった。
憎しみと哀しみと苦しみがごちゃまぜになって、鋭く暗い光を灯した切れ長の瞳からは今なお涙が流れている。
そんな顔見慣れてる。見飽きてる。
なのになぜだ。身体中が震えて止まらない！
「っ……熾堕ちゃん！」
羽衣姫は部下に目をやった。
腕を組み、静観を決め込んでいたらしい熾堕は片眉を上げた。
だがすぐ翼をはばたかせ、傍まで飛んでくる。

「今すぐアジトに転移して！　早く！！」
「……はっ」
熾堕は「失礼」と断りを入れて羽衣姫を抱え上げた。そのまま転移するかと思いきや、銀の双眸を悠に向ける。
「星が――」
口が動くが、最初しか聞こえなかった。
羽衣姫が焦りの声で「熾堕ちゃん！」と呼ぶと、熾堕は目を閉じる。
とたん、視界から退魔師達の姿は消えた。

――――

羽衣姫と熾堕がいなくなったとたん、身体の自由が戻ってきた。
ふっ、と身体が楽になり、立ち上がれるようになる。
「悠様！」
誰かが流星の脇を通り過ぎていった。
見るとそれは朱華であり、初めてその無感動な顔に焦りをにじませている。
朱華は倒れそうになった悠を支え、尾で恭弥の腹に触れた。
「こ、これは、まさか……」
今度は驚きの表情に変わる。珍しく感情の変化が前に出ていた。
「悠様、恭弥様が、恭弥様は生きております！」
ざわ、と空気が揺れた。
「え、だって、そんな、本当……！？」
悠はへたり込んだ。目からはまた涙があふれ出ている。
「ええ。ですが、これは……」
朱華の眉間にしわが寄った。その間に、恭弥の傷口は塞がっていく。
血が止まり、大きな傷の穴が塞がり――

しかし恭弥は動かなかった。

悠は呆然と兄の顔を見つめた。

「どうして……生きてるんでしょ？　どうして生きてるのに起きないの？　ねぇ朱嵐！」

叫び出す主に、朱嵐は恐れたように後退り、「おそらく」と切り出した。

「恭弥様のお身体には、現在魂がございません。ゆえに、身体が生きていても精神が無いので起きることができないのかと……」

「魂が、無い……！？」

悠は目を見開いた。

悠だけではない。全員が驚いて言葉を失った。

「で、でも恭弥は生きてるんだろ！？　なら何で魂が抜けてるんだよ！」

流星が言うと、朱嵐は顔を上げた。

「幽体離脱というものがあります。身体から魂が抜けること自体は、さほど珍しくないのです」

では恭弥の魂はどこにあるのか。そう問うと朱嵐はうつむいた。

誰も恭弥の魂のゆくえなど知るはずがない。霊とは違い、魂は視認することも難しいのだ。どこに行ったか、見た者はおそらくいないだろう。

希望が絶望に変わるのは早かった。皆沈みきった顔を歪ませる。

しかし、悠の呟きによってその空気は一転した。

「……羽衣姫」

全員顔を上げた。悠の方はぶつぶつと何か言っている。

「そうだ……降魔武器の性質……失念してた……となると恭兄の魂だけじゃ……」

「ゆ、悠……？　一体何の話を……」

流星が声をかけると、悠は立ち上がって身体をこちらに向けた。

もう、泣いてなどいない。

「恭兄の魂。おそらく羽衣姫の中だ」
全員固まった。というか空気そのものが固まった。
「ちょ、待て。何でそんな突拍子も無いこと……」
「突拍子ではないよ。前に病院で話したこと、覚えてる？」
何とか口をきくことができた流星に、逆に問う悠。こっちが質問したいのだが。
「病院……？　って、前恭弥の練習試合見た時か？」
「そう。その時話したでしょ？　羽衣姫の――降魔武器の性質を」
まず降魔武器という単語自体忘れていたのだが。
だが周りが「そうか！」とか「確かに……」とか言ってるため、何だか言いそびれてしまった。
「降魔武器の性質。それは殺した人間の魂を取り込むこと」

覚えてるか、そんな一ヶ月前のことっ。

そう叫ぼうかと考えた流星だが、結局口を閉ざした。空気を読んだのである。
「勿論これは性質のみを上げただけ。いわば仮死状態の恭兄の魂が羽衣姫の中にあるとは言い切れないし、あったとしても無事とは限らない」
だけど、と悠はしっかりした口調で、さっきまで泣いていたとは思えない口調で言った。
「かといってこのまま手をこまねいているつもりはないし、どちらにせよ羽衣姫を放っておく気もない。早く体力を取り戻して奴らの居場所を突き止めないと……」
「あ、そのことなんだけど」
流星ははたと思い出した。今の今まで忘れていたことである。
「妖偽教団のアジト、俺知ってる」
一瞬の沈黙。
数秒であるはずの時間がなぜか数十分にも感じた後――

『……はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？』

絶叫と視線がいっせいに流星に畳みかけた。

「ちょっと流星！　何でそんな大切なこと言わなかったの！？」

「言う前に羽衣姫が襲撃してきたんだよ！」

ぎろりと睨み付けてくる悠に、流星は座ったまま後ろに下がった。

「前に行った、あのボロ屋敷！　敵が罠張ってたとこがアジトだったんだよっ」

「な……！」

悠は絶句したようだった。前めのりの姿勢のまま、固まってしまっている。

しかしすぐさま自失から復活し、「なるほどね」と納得した。

「なら、あの時床下に流れていた妖気も説明がつく。場所さえ解ればこっちのもの……」

「なぁ」

と。悠の言葉を遮る者がいた。

「……刀兄？」

悠は急に声を上げた兄に目を向けた。

「どうしたの？」

「……みんなに」

刀弥はすうっ、と息を吸い、はあ、と吐いた。背後には、いつの間にか紗矢が立っている。

そういえば彼女はこの戦いの中、どこにいたのだろうか。姿は見えなかったし、別の場所で戦ってるようでもなかった。怪我をしている様子も無い。

しかし話をしているのは刀弥なので、皆刀弥に注目した。

「みんなに、話さなければならないことがある」

刀弥の声は、僅かに震えていた。

戦意<中>

人柱が羽衣姫を守っていた。

そう切り出されて、姫持ち達は言葉を失った。

大広間である。椿家の退魔師達はいない。刀弥の話は、彼らの忠義心を揺らがしかねない。今そうするのは得策ではなかった。

恭弥は自室で寝かされている。

寝かされている、というのは正しくないかもしれない。なにしろ彼は、精神そのものを失っているのだから。

肉体の方は紗矢がいつの間にか呼んだ雨彦（アメヒコ）が看てるが、目を開けることは無いだろう。

それより今は、刀弥の話である。

刀弥と――恭弥の『作戦』に加担していた紗矢は、悠達にとってとんでもない話をしてくれた。

人柱狩り。妖偽教団が行っていたそれを、恭弥はスムーズになるよう氷華（ヒョウカ）と式神を使って暗躍していたのだ。

なぜそんな必要があるのか。それは人柱にかけられた封印にあった。

封印とはその名の通り封じる術である。そして解かれないようあらゆる防術がかけられている。

そこまではいい。問題は、封印をかけられたものを攻撃できるか。

答えは否、である。

攻撃したら封印が解けるとか、そういうことではない。攻撃そのものが効かないのだ。

封印と防術は似ている。どちらも守る術だ。

元をたどってみると、封印と防術の呪術の起源はなんと同じだった。

羽衣姫の場合、かけられた封印は強力なものだ。しかも、人柱が変わるたびにかけ直されるようなものだった。

つまり、強力な防術をかけられ続けられているのと同じなのである。

それに気付いた恭弥は、自分を含めた人柱がいる限り羽衣姫を倒せないと悟った。

そのため、人柱を妖偽教団に殺させるよう仕組んだのだ。紗矢の話では、最初は被害を最小限に納めようとしたらしい。

だが妖偽教団の攻撃は予想以上に苛烈だった。羽衣姫をよみがえらせてから、団内を充分過ぎるほど強化していたらしい。

だから、羽衣姫に対抗しうる姫持ち達だけでも助けられるようにした。

ちなみに恭弥が関与したのは梅見家からであり、桐生家の日影達が生き残ったのは偶然だった。

梅見家では当主以下、全員は無理でも多人数を助けようとしたが、当主である梅見霧彦は頑として申し出を受けなかった。

また、悠と流星が羽衣姫と接触したこと、橘家当主の身体を乗っ取られたことは恭弥にとって計算外だった。

それでも恭弥の計画は、多少の曲折はあったもののほぼ完遂していた。あと羽衣姫を倒すだけである。

そう。あとそれだけ。

羽衣姫を倒すということはこの戦いが始まってから一貫して変わらない最終目的であり、そのために戦ってきたところもあった。

何より、退魔師達の悲願でもある。羽衣姫の存在は多くの人間の命を奪い、妖偽教団まで作り出したのだから。

だから、こんなところで揺らぐとは思わなかった。

「俺、嫌だ」
言い出したのは猛である。
今こそ羽衣姫を倒す時、という時に何を言い出すんだと、全員猛を見た。
「悠達はまだいいよ。家族だし、情がある。目をつむればいいだけだ」
「猛？　何を言ってるの？」
悠は幼馴染みの発言に眉をひそめる。猛はその視線にもひるまなかった。
「でも俺は、俺達は」
猛の目には涙がにじんでいた。炎のように瞳が揺らめいている。
「家族を殺された。その原因は恭弥さんが作ったも同然じゃないか。恭弥さんが殺したも同然じゃないか！」
抑え付けていたものを吐き出したような言い方だった。顔も酷く歪んでいる。
「羽衣姫を倒すだけならいい。でも同時に、恭弥さんを救うことになるなら俺、俺は……」
「……私も」
文菜が低い声を出した。
「正直、恭弥さんのために戦いたくない。みんな同じ気持ちだと思う」
「……どっちにしろ、この人数でアジトに乗り込むのは無謀だな」
風馬がぼそりと発言した。
姫持ち全員を助けられたわけじゃないし、姫持ちが全ての家にいたわけじゃない。
姫持ちではない流星や風馬を入れても、突入できるのは九人しかいない。
そこから二人抜けるだけでも、かなり厳しかった。
「雄輝さんは？　雄輝さんは何とも思わないんですか！？」
「え……」

猛にいきなり話をふっかけられ、雄輝は目を丸くした。目じりが下がり、たれ目がよけいにたれ目になる。
「俺は……恭弥君を恨まないわけじゃないけど……でも」
「でも？」
「あっと……一応感謝もしてるんだ？」
雄輝の発言に、猛は信じられないという顔をした。
「何、で……」
「俺、どうやって生き残ったか覚えてないんだけど。もし生きれたのが恭弥君のお陰なら、礼が言いたい。言いたいから戦う」

戦う理由は、それで充分かな。

最初は戸惑いがちだったが、最後はしっかりした物言いだった。元より雄輝は弱気な男だが、意志は強い。こうと言ったら遠回りながらも貫き通す男だった。
つまり、戦ってくれるということか。
「ありがとうな、雄輝」
「いや、俺姫持ちの中では弱い方なんで、あまり役には立てないかもだけど……」
危なかったら逃げるし、と情けない発言を刀弥に返す雄輝。だが、共に来てくれるだけありがたかった。
「勿論あたしも行く。片棒かついだ以上、最後までかつぐさ」
紗矢は『卯杖姫』を胸元に引き寄せながら言った。
「パワーはさほどないが、サポートはできると思う」
「……ありがとう」
悠が小さく頭を下げた。
「……どうして」
猛が信じられないものでも見るかのような目で、悠達を睨み付けた。
「恭弥さんのせいでたくさんの人が死んだんだぞ！　恭弥さんの計

画とやらのせいでっ。もっと別の方法があったはずなのに！」
叫ぶ声は皆の心を代弁しているようだった。
どうしてこの方法を取った？
もっと他の方法は無かったか？
どうして、どうして、どうして！
言い出したらきりが無い。だがどれだけ言っても何も変わらない。
猛は揺れ続ける瞳を紗矢に向けた。
「片棒かついだあんただって同罪だよ。どうして気付いたなら止めなかった！？　どうして促進するような真似したんだよ！？」
「……」
「何とか言えよ、なぁ！」
「……人間は、哀しいぐらいにエゴの塊だな」
何の脈絡も無い言葉に、猛の勢いが削がれた。
全員が注目する中で、紗矢の唇がもそもそ動く。
「君はたくさんの命が奪われたことに、さして憤ってはいないだろう？」
「なっ」
「あたしに嘘はつけないよ。君が怒っているのは、理不尽と私怨ゆえだ。それを恭弥君やあたしに向けてるだけだろう」
「違う、俺は、俺……」
「建前でそれを覆い隠して、その理不尽に関わってるあたし達を責めて自分を保ってるに過ぎない。本当は解ってるんだろう？　これしか方法がなかったと」
「違う！」
猛は怒鳴り声を上げて紗矢を睨み付けた。
しかし紗矢と目が合うと、すぐさま目をそらす。顔には狼狽が浮かんでいた。
「文菜ちゃん、君も気付いてるだろう」
いきなり名前を呼ばれ、文菜の身体がぴくんと震えた。
「退魔師は使うか使わないか関係無く術を学ぶ。その過程で恭弥君

と同じ結論に至った人間は少なくないはずだ。あたしもその一人だしな」

沈黙。結論に至っていようとなかろうと、先程の話で全員ほぼ納得しているのだ。反論しようにもできるはずがない。

ただ猛と文菜はそれを信じたくなくて、無意味で虚しい反抗をしているだけだった。

「猛、文菜」

悠が立ち上がりながら二人に視線を向けた。

「別に来たくないならこなくていいし、戦いたくないなら戦わなくていい。別にそれを責めたりしないし、責めるつもりもない」

悠は視線を外し、ふすまに近付く。そのまま開けると、日の光が入ってきた。

もうすでに夕方で、日の光は赤色を帯びている。

「それが君達の意思なら、それに従えばいい。行くか否か、全ては、君達次第だよ」

部屋を出ていく悠。一瞬華奢な肩が震えているのに気付いた流星は、立ち上がって彼女を追いかけた。

「待てよ悠！」

廊下を早足で進む悠だが、半分走っている流星にすぐ追い付かれる。

腕を掴み、こちらを向かせた流星は、悠の頬がぬれていることに気付いた。

予想していたのに、流星は必要以上にうろたえる。

「え、あ、えっ、もしかして腕、力入れ過ぎた！？」

結果、的外れで見当外れなことを言ってしまった。

「違う、違うの……」

悠は目じりをぬぐった。そうしながらしゃくり上げている。

「気、張ってて……出たと同時に切れちゃったの……。流星のせいじゃないの」

「そ、そっか……」

流星はぱっと手を離して頬をかいた。
そういえば、何で自分は悠を追いかけたんだろう。
自分はどうしたいんだ。悠に対して、どうしたい？
……というか、泣いてる女の子はどう慰めればいいんだ？
女子に免疫が無い流星は少し混乱してしまった。
（頭撫でてやればいいの？　いや、そこは抱き締め……恋人か！
いや、でも何度か抱き締めて……ってうわぁぁぁぁぁぁぁぁ！）
脳が沸騰しそうな流星は、自分の顔がどんどん赤くなっていくのに気付かなかった。
その様子を見ていた悠は。
「……ぷ、ふふっ」
吹き出してしまった。
「え……何で笑うの！？」
「だって顔……変だよ？　汗吹き出してるし」
「マジで！？」
流星は額をぬぐった。手の甲にじっとりとした汗がにじむ。
「うぇ……嫌な汗」
「くすくす……変なの」
悠は笑いながら髪を耳にかけた。
「……うち、他と違って被害少なかったね」
木や花がめちゃくちゃになった中庭を見つめ、悠は呟く。
庭や家屋は一部破壊されたが、退魔師達の被害は思ったより少ない。
今までの襲撃を踏まえて対策を行っていたのもあるが、恭弥の行動が大きかった。
紗矢の話では、恭弥は氷華に一時的に人柱の呪術を肩代わりをしてもらっていたらしい。
肩代わりと言ってもほんの一部で、起き上がれないほどの苦痛が伴っていたはずだ。
なのに恭弥は起き上がり、悠達の元に行くまでに他の退魔師達を

助けていったそうだ。
誰より苦しかったはずなのに。
誰より皆の無事に安心して微笑んで。
そして――逝った。
「全く……酷いんだが優しいんだが解んないよ」
悠はまだ少し笑いながら呟いた。
「……悠」
流星は口を開き、ゆっくり尋ねた。
「どうして恭弥を助けるんだ？」
悠の視線がこちらに向く。流星は動揺すること無く続けた。
「猛の言う通り、人柱を殺す手助けをすることが罪なら、それは凄ぇでけぇ罪だ。そんな兄を、どうして助けたいんだ？」
とんでもない問いだった。つい口について出た言葉だが、悠の傷をえぐるかもしれない。
流星は押し黙った。悠は視線を庭に戻し、紅い唇を開く。
「そんなの決まってるじゃない。生きてほしいから。ただ、それだけだよ」
その後、みぞうち辺りに軽い衝撃。流星が視線を下ろすと、悠のつむじが目に映った。
「ゆ、悠？」
「……それに恭兄が死なないといけないなら、直接人を殺した私は、とっくに死なないといけないよ」
声が震えていた。声だけじゃない。全身が震えている。
あまりにも弱々しい。頼りなげにすがりついてくる。
「助けなきゃ。助けたい。恭兄は私達を助けるためにああなった。今度は私が、私達が助ける番」
しかし顔を上げた時には、その震えも止まっていた。
顔にも弱気など浮かんでいない。凛とした、ハッとするほど美しい顔だ。
「そのために、付いてくるよね。流星」

「……当たり前だろ！」
流星はにっと唇の両端を上げた。
「俺も恭弥には死んでほしくない。……それに、行かないっつったら無理矢理引っ張ってくだろ」
「当然」
悠はふふんと笑った。しかしすぐ、その笑みを消す。
「多分、日影達も来てくれると思う。とはいえ、苦しい戦いになることには変わらない」
「あぁ。妖魔はまだいるだろうし、幹部は誰も倒せてない」
月読を除いて、と流星は心の中で付け加えた。
助けられなかった命だ。もっと他に方法があったかもしれなかったのに。
でも時間が無かった。……多分、恭弥もそうだったんだと思う。
時間が無くて、他に方法が無くて。犠牲になる命を思った時、一体どんな気持ちだったろう。
だが、今はそんなことを考えてもしょうがない。
「最後の戦いだよ。千年前の因縁に決着を着けるためのね」
悠はどこを見るわけでもなく、何も無い虚空を睨み付けた。

流星が出ていった後、急に飛び出した猛を日影は追いかけていた。
「どこ行っちゃったのかしら、全く」
すぐ追いかけたからそう引き離されてはいないはずだが。
小走りになった日影は、廊下の端で膝を抱える少年を見付けた。
「猛！　いきなり出てっちゃって、どうしたの？」
駆け寄ると、彼はすっと顔を上げた。
眉根を寄せ、瞳は光を失っている。怒りによるものとはいえ、先程まで元気があったのに今はどこか暗い。
「……本当にどうしたの？」
日影はしゃがんで、猛と視線を合わせた。
大人びた容貌を持つ少年は、整った顔を歪めた。
「日影さん、俺……解んなくなってきた」
大きな身体を縮こませるようにして、両膝に顔をうずめる。
「俺、どうしても恭弥さんが許せなくて、憎もうとしたけどでも、悠が恭弥さんに生きてほしいって言うのを聞いたら……」
どうやら少し前まで悠がいたらしい。今は自分達以外、誰もいないが。
「本当は誰も憎みたくないんス……憎しみの顔は、あんなに歪んでんだって思うと……でも、でもっ……」
「怒りを抑えきれない？」
後を引き継ぐと、猛はためらいがちに顎を引いた。
「……沙矢さんの言葉、否定できないです。俺は他の人はどうでもいい。家族が殺されたことに怒ってる」
「猛君……」

「もし家族が生きてたら、きっと恭弥さんをかばってた。……身勝手にもほどがある」

ぎり、と奥歯を噛み締める音がした。日影の目の前で、猛の頬がぬれていく。

「良心に従えばいいのか怒りに従えばいいのか、俺には解らない。解らないんだ……」

声が震えている。十四歳の少年だ。心は自分以上に揺れているのだろう。

そういう自分も彼と二つしか変わらない。彼みたいに心の内を吐き出してしまいたかった。

でもそうするほど自分は子供ではなく、それをうまく表現できるほど大人でもなかった。

正直今回のことは予想外だった。

親しい人間が、誰よりも優しい人間が下した非情な決断。

その罪を言及するのか、許すのか。日影にはその選択権は無い気がした。

紗矢と刀弥の話を信じるなら、桐生家に恭弥は関わっていない。

関わったのは、裏切った流亜（ルア）。

自分の双子の弟。今となっては、たった一人の肉親だった。

家族同然に過ごした雷雲と風馬はいるけれど、血の繋がった者はもういない。

独りなんだ。猛と同じように、支えてくれる家族はもういない。

「……ふ」

急に目が熱くなった。猛の顔がぼやけて見える。

「う、ふっ……ふぇっ」

「え、ちょっ、日影さん……！？」

猛の慌てた声が聞こえてきた。その間にも目の熱はどんどん酷くなって、ついにはあふれてしまった。

「え、えぇ！？　うわ、俺のせいスか！？」

「ちがっ……ごめん、自分の置かれた状況思い出して……」

日影は目元をぬぐった。
「なんか猛君見てると、私も君と同じ独りなんだって……思っちゃって。流亜も、いないし」
「あ……」
目は小さく声を上げ、そして黙り込んだ。
目をしばたかせ、視界をはっきりさせた日影が彼を見ると、なぜか申しわけなさそうな顔をしていた。
「日影さんは、恨みますか？」
突然の問いに、日影は首を傾げる。
「誰を？」
「流亜さんを狩った、悠を」
しばらくして問いかけの意味が解り、日影は苦微笑を浮かべた。
「恨めないわよ。私も同じことしてたろうから」
猛の目が見開かれた。ありえないとでも言いたげだ。
「きっとそうするしか止められなかったもの。もっとも私は、刺し違え覚悟だったでしょうけど」
「……」
「悠はそれを見抜いてたのね。あの時別々にしたのはそのせい。そして自分の手で……」
後が続かなかった。瞳の熱がまたよみがえり、流亜の裏切りを聞かされた時のことを思い出す。
「……っ、悠は馬鹿よね。私達のために、何もかも背負おうとして。人間そのものには、びっくりするぐらい冷たいくせに」
「そう、ですね」
猛も力無く同意した。
「そういえばあいつ、燐のことあしらってるけど見捨てたりはしないんスよね。仲間は、絶対裏切ろうとはしないんだ」
猛の顔を再度見ると、なぜか寂しそうな顔をしていた。
「強いんスよ。こけそうにはなるけど、折れることは無い。強過ぎて、付いていけないや」

「それが悠を諦めた理由？」
「まぁそうで……何で知ってんスか！？」
頷きかけた猛は、座ったまま飛び上がった。
「私、同じ小学校だったじゃない。悠の取り合い、有名だったわよ」
「うっわ……恥っ」
猛は真っ赤な顔を両手で覆った。
「ガード固かったらしいじゃない。悠は綺麗過ぎるから、逆にライバル少なそうだけど」
「その少ないライバルが強敵なんス！　燐も、アメリカ式アタックとんでもねーし」
父親の影響ッスね、と断言した後、猛はふと表情を改めた。
「でも俺、本気で好きだったのに、何か駄目になっちゃったんです」
「駄目？」
「……悠が母親を殺した後」
猛は顔を少しだけうつむかせた。
「人殺して、今にも壊れそうなのに……家出て事務所開くって聞いて、俺じゃ一緒にいるの無理だなって悟ったんですよ。小五にして」
はー、と吐き出された息は、どこか憂いを帯びていた。
「何であんなに強いかな。きっと心はズタボロだ。なのに、何であんなにしっかりしてられるんだろう」
人間は弱い。ちょっとしたことでぐらつくし、楽な方へと流れてしまう。
だけど悠は己を曲げず、どんなことがあっても信念を変えなかった。
それは容易ではない。彼女の言うように、「自分次第」とはなかなかいかないのだ。
いや、変わるか否かも、彼女に言わせれば自分次第なのか。
もしかしたら、彼女はいつも自分に言い聞かせてるのかもしれない。
「どうするかは全て、自分次第」なんだと。

だから、あんなにも強い。いや。
「強く、あろうとしているからからかしらね」
「え……？」
日影の呟きに、猛は顔を上げた。
「どういう……？」
「あの娘は強くあろうとしてるのよ。ぶれそうになるたびに、『口癖』を言って軌道修正してる。それでも、まっすぐいるのは簡単じゃないけど」
日影は思わず唇がゆるむのを感じた。
「ほんと、年下なのに尊敬しちゃうわ。どうしてあぁも強いのか」
日影は頬をぬぐい、立ち上がった。
「さて、そろそろ戻りましょ」
「あ、あの」
踵を返しかけた日影は、猛に呼び止められて足を止めた。
「日影さんは、行くんですか？　妖偽教団のところへ」
「……行くわ。奴らは家族の仇だし、それに」
日影はにこっと笑いかけてやった。
「親友だけを戦わせるわけにはいかないしね」
そう言って、今度こそその場を後にしようとして——再び足を止めた。
耳に聞きなれた、不吉な音を聞いたからだ。
「これって……戦闘音？」

——

「敵の襲撃だ！」
「何人、いや何匹だ！？」
「妖魔及び半妖が数十、いや百数十！」
「守りはどうなってる？」
「配置はどうなってる！？」

庭ではすでに戦闘があちこちで始まっていた。
屋敷の方へ入れまいと皆必死になって止めているが、明らかに妖魔の方が数が多い。
だが、今までと比べれば少ない方だった。
「はあぁ！」
流星は小刀を凪いだ。炎のかまいたちが妖魔を数体焼き斬る。
「二の手――」
悠の刀が目ではとらえられない速さで動いた。
「百華裂刃（ヒャッカレッジン）！」
彼女の前方にいた妖魔が例外無く全身を斬り裂かれる。
肉片になっていく妖魔達には目もくれず、悠は闇夜の下で刀を煌めかせた。
「全員守りをかためろ！　雑魚にかまうな！　屋敷そのものに結界を張るんだ！！」
悠が大声で指示を出した。退魔師達は素早くそれに対応する。
「悠、これは一体どういうことだ！？」
流星は妖魔を薙ぎ倒しながら悠に駆け寄った。
「妖偽教団の奴ら、残りの兵力を使って椿家を潰しにかかったようだね」
流星と背中合わせになりながら、悠はどこまでも平静な声で答えを返す。
「それってやばいんじゃねーのか！？」
「待ちなよ流星。逆に言えばそれは」
悠は刀を前に突き出した。
切っ先が妖魔の喉を突き破り、首の後ろから黒い血と共にその刃先が姿を現す。
悠が手首をひねると、潰れた犬のような頭が吹っ飛んだ。
容赦無い凄惨な攻撃に流星は言葉を失いかけたが、悠の次の言葉に慌てて耳を傾けた。

「ここに攻撃を一点集中させている。つまり、アジトの方は手薄ということだよ」
「あ……！」
流星も今気付いた。
確かにここに戦力を集めているなら、アジトの方はほぼすっからかんということだ。
それに連日の戦闘で妖魔の数も減っているはず。葵も随分減らしてくれたはずだ。
数が少ないと感じたのはそのためだ。もはや、手元に戦力はほとんど残っていないのだろう。
「勿論これは一つの説。もしかしたら大部分をアジトへ残しているかもしれないし、どちらにせよ、ここからどうやって抜けるか……」
悠はゾンビの身体をけさがけに斬った。美しい顔はしかめられている。
「どうにかして抜けたいけど、残ったみんなでどうにかなるかどうか……」

『行ってください！』

いきなり声を、それも複数でかけられた。しかも大声。
驚く悠と流星が振り返ると、屋敷を囲むようにして守っていた退魔師達が口々に叫んでいた。
「我々のことは気にせず！」
「早く行ってください！」
「お兄様方のことはおまかせを！」
力強く言う彼らに、二人は顔を見合わせる。
ためらう二人の前で、いきなり妖魔がまとめて吹っ飛んだ。
思わず流星は目でその妖魔を追い、次いで逆方向に目をやった。
「え、え、って刀弥さん！？」
妖魔を殴り飛ばしたのは、『如意ノ手』を装備した刀弥だった。

「ったく。誰をまかせろって？」
刀弥はぐるぅりと退魔師達を睨み付け、『如意ノ手』をはめた手をぶんっと振った。
「恭弥はともかく、俺は守られる側じゃない！　束ねる者だっ」
大喝した後、刀弥は悠と流星の方を見た。
「早く行け。朱嶌の転移術なら、そう時間はかからねぇだろ？」
「でも……」
まだためらう悠に、妖魔が飛びかかった。
「悠！」
流星の声で我に返ったのか、悠は刀を振り上げようとした。
「ッギャ！」
しかし刃が届く前に、妖魔はクナイに貫かれて絶命する。
悠は刀を下ろし、クナイが飛んできた方に目をやった。
「間に合った」
ツインテールをなびかせた少女は、微笑しながら駆け寄った。
「舜鈴……いいの？　恭兄の傍にいなくて」
悠が尋ねると、舜鈴は少しだけ笑顔をかげらせた。
「いたいよ……一緒に。でも、何もしないわけにも、いかないから」
だから、と舜鈴は少しだけ前に出た。
「私も行く。一緒に。恭弥のために、何かしたい」
舜鈴は真っ直ぐ悠の瞳を覗き込んだ。
悠も正面から舜鈴の目を見返し、やがてふっと笑った。
「いいよ。戦力は多い方がいい」
「うん！　謝謝（シェシェ）、悠！」
舜鈴の顔がぱぁっと明るくなった。
「じゃ、当然私達も一緒よね」
また声がかかった。
顔をその方へ向けると、日影や雄輝達が走り寄ってくるのが見えた。
その中には、猛の姿もある。

「あ、あれ？　一緒に行かないんじゃなかったのか？」
流星が言うと、猛はうつむいた。やがてぼそぼそと口を動かす。
「恭弥さんは許せないけど……羽衣姫はもっと許せない。だから」
「君さ」
悠は猛に近付き、彼の胸を軽く小突いた。
「も少し自分の気持ちに素直になったら？」
にっと笑う悠に、猛も困り顔に笑みを浮かべた。
「これで全員？　これ以上、長居は無用だよ」
自分達を取り囲む妖魔達に目をやり、悠は刀を構えた。
「できるなら、今夜中に終わらせたい」

「誰かを忘れてないか？」

たん、とすぐ傍に立つ者達がいた。
「沙矢さん！　それに、えっと……文菜、ちゃん？」
「呼び捨てでいい」
沙矢にくっついていた文菜は、流星にそっけなく言った。
「一人は寂しいんだって」
しかし沙矢にカミングアウトされ、肩を跳ね上げさせた。
「結局恭兄の思惑通り」
「姫持ち全員集合……」
悠と流星は再び顔を見合わせた。
「こうなること見越してたのか、あいつ」
「さぁね。朱嵐！」
悠が声を張り上げると、銀毛と九本の尾を持った大きな狐がすぅっと姿を現した。
「転移する。全員飛ばせる？」
『それが悠様のお望みなら』
狐が静かに頭を下げると、目の前の景色が消失した。

行ったか……
刀弥はふと、顔を歪めた。
悠と一緒に行ってやれない自分が情けなかった。
できることなら共に戦いたい。だが、自分にはここを守るという役目がある。
それに、ここにいれば恭弥を守ってやることができるのだ。だから、ここを離れるわけにはいかない。
刀弥は少しずつ距離をせばめていく妖魔達を見、咆哮を上げるように言った。
「絶対ここを守りきれ！！」
『おう！！』
退魔師達の力強い声が、妖魔を押しのけるように応えた。

――――

最初に目に映ったのは、錆びた門だった。
「ここが妖偽教団のアジトか……？」
風馬が呟いた。
「見たとこ、ただのボロ屋敷だけど……」
雷雲は片眉を上げる。
「で、ここのどこだって？」
悠の視線を受け、浮遊感に少し酔っていた流星は我に返った。
「あ、ここの地下。確か平安京と同じ造りになってて、ダイリのリョウセイデンに羽衣姫がいるとか……」
「……それ、清涼殿じゃない？」
間を置いての悠の指摘に、流星は「あ……」と声を上げる。
……皆の目が冷たかった。

「さて。流星無視して家探ししようか」
「わー！　マジなんだってっ」
このままでは冗談抜きで放って置かれると思った流星は、わたわたと悠達の前に回り込んだ。
「俺ここの地下から出てきたしっ。それに月読が……葵さんが教えてくれたんだ！」
悠の耳がぴくんと反応した。いぶかしなげな顔で見上げてくる。
「それ……本当？」
「今言ったって意味無ぇだろ」
流星は顔をしかめた。
「俺、あいつらに一回捕まったんだよ、今日。その時葵さんに助けてもらって、でも……」
後が続かなかった。
後悔せずにはいられないのだ。やはりあの時、無理にでも一緒にいればよかったと。
一緒にいたら呪いを解く方法が見付かったかもしれないし、死ぬことだって無かったかもしれない。
やっぱり駄目だ。誰にも死んでほしくない。
人間でも半妖でも、殺したくないし生きててほしい。
――そう思うことは、やはり偽善なのだろうか。
苦妃徒太夫に言われたことは、未だ胸に突き刺さったままだ。
突き刺さったまま、まだうずいている。このまま自分は、戦えるのだろうか。
「葵姉は」
悠はぽつりと言葉を落とした。
「『椿　葵』として死んだんだね」
「え……？」
流星は一瞬首を傾げる。
少し考えたが、「多分……」としか返せなかった。
しかし、悠はその答えで納得したらしい。「そっか」と安心した

ようにため息をついた。
意を決したように屋敷を睨み付け、一歩踏み出す。
「最後の戦いだ。みんな、気を抜くなよ」
『おう！！』
全員、進み出した。眼前の風景を見据えながら。

第二十三話　分散<上>

暗い部屋。その部屋の主は酷くいらだっていた。
羽衣姫はかり、と自分のものではない自分の爪を噛む。大きな瞳は、怒りでつり上がっていた。
「どうして……どうして……妾は無敵だというのに……」
どうしてあの一撃で、自分は一時的でも動きを止められたのか。
「封印が解けたからでしょう」
突然響いた声に、羽衣姫はハッとした。
そういえば熾堕（シダ）もいたのだ、と今更ながら思い出す。
「……どういうことん？」
問えば、闇からすぅっと姿を現した銀の美丈夫は長い銀髪を後ろに払った。
「知っているはずですよ。封印は確かに貴女の力を封じていた。ですが、貴女を守りもしていました」
「……」
「封印は、一種の強力な防術にもなっていました。人柱を殺すことは、守を代償に力を得たも同然」
熾堕はくすりと笑った。冷笑でも嘲笑でもない、ただ唇がゆるんだだけの笑い。
しかしそれは、羽衣姫のしゃくに触った。
「失敗しましたね、羽衣姫様。力ではなく、守りを得るべきだっ」
熾堕の声が途切れた。
途切らせたのだ。羽衣姫が熾堕の頭を砕いて。

「お喋りねん、熾堕ちゃん」
羽衣姫は腕から伸ばした太い帯を戻し、付いた紅い血をなめ取った。
「でもぉ、いい男は、黙っていた方が見栄えがいいわん……♪」
「……そうですか」
頭の無い、血まみれの身体が起き上がった。ゾンビさながらに、ゆらりと。
「しかし、俺は観賞用にされるのは遠慮したいですね」
立ち上がった時には、熾堕の頭は完全に元に戻っていた。
何ごとも無かったように。何もされてないというように。
頭蓋をこなごなにしたのに、全くこの男はどういう身体をしているのだろう。
全ての傷、全ての死。己に降りかかった全て、この男は無効にできる。
どういう要因だろうと、どういう災難であろうと、この男には無いのと、あるいは起きていないのと同じだ。
例え、自分の攻撃であろうとも。
本人はそのことを「地上の理（ことわり）に当てはまらないから」などと言っている。
馬鹿馬鹿しい、理は地上にしかない。なぜなら地上にしか生物はいないから。
その理に当てはまらないのなら、もはやそれは生物ではない。
だが熾堕は生物だ。なら地上の理は彼にも適用されるはず。
この再生能力には別の理由があるはずだ。そう、何か理由が……

『理由など無いよ』

脳裏に突然、封じ込めていた声が響いた。
そう、あの男は言ったのだ。
理由など無い、と。

『なぜ貴女などに私をやらねばならない』

あの男は妾を拒否した。

『内に醜い淫魔(いんま)を持つ貴女などに』

あの男は妾を醜いと言い。

『どうしてこの身をささげれるというのか』

嘲笑ったのだ！

「あ〝あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　憎い憎い憎い憎い嫌い嫌い嫌い！　どうして妾の思い通りにならないのっ。どうして？　どうして！？　全て妾のものでしょう？　妾に従うものでしょう！？」

頭を振り乱し、叫ぶ。今の羽衣姫の瞳には何も映っていなかった。ただ憎いと嫌いと、自分の唇ではない自分の唇でくり返すのみである。

一人その身をねじるように叫び出した羽衣姫を、熾堕は冷めた目で見つめていた。

「止めなくてよろしいので？」

背後にいきなり現れた部下に驚きもせず、熾堕は肩をすくめる。

「また頭を潰されるのが落ちだろう。何の痛痒(つうよう)も感じんが、気持ちのいいことではないし」

そう言えば、フードを目深に被った部下は「ですが」と口を開いた。

「部下としては、貴方の頭が砕かれる様を見たくありません」

「……ですがの使い方、おかしくないか？」
「私が言いたいのは、先程の攻撃は避けられた方がよかったのではということです」
部下は熾堕の横に立ち、じぃっとこちらを見上げてきた。
熾堕は部下を見返し、ふ、と苦笑した。
「いきなりだったからな。どのみち避けきることはできないだろうさ」
「ですが」
「ここではあれが絶対」
熾堕は視線を羽衣姫に向け、その後背中を向けた。
「ここであれより強いものはいてはいけない。……そういう考えで、俺の力の大半を封印した。身体がついていかないのは当然だろう」
「それに」と、熾堕は静かにその部屋を去りながら言葉を続ける。
「あそこで避けてみろ。更にあれは暴れるだろう。なら、素直に受けるしかないさ」
「……」
部下は後ろを歩きながら無言になった。
納得はしていないようだが、一応譲歩してくれたようである。
熾堕は苦笑しながらも廊下を進んだ。
室内とは違い、随分時代錯誤な造りの建物である。いや、室内も和洋の違いだけで充分時代錯誤か。
確か、寝殿造（しんでんづくり）と呼ばれる建築様式のはずだ。かつての日本で建てられた屋敷の部屋は、それぞれ屋敷に合わない西洋などの造りにされている。
自分にあてがわれた部屋は、白い壁に黒い家具が必要最低限以下しか置かれていない。和とはほど遠い部屋だ。
もっとも、熾堕はその部屋で一度も休息を取ったことは無かったが。
「……ところで、椿　悠達はもうこの空間内に入ったのか？」
「はい」

ふと思い出して尋ねれば、部下は細い顎を引いて頷いた。……若干まだ不機嫌そうだったが。

「そう怒るな。あと数刻の辛抱だ」

「承知しております。ですが、貴方のシナリオが少々……」

部下はそのまま押し黙った。

熾堕に何かを言われたわけではなく、言おうとしたことがこの場ではかなりまずいと気付いたからである。

気付けば、幹部達が集まっている場所にいたのである。

紫宸殿と呼ばれる建物である。右に桜、左に橘の木が置かれており、その奥に紫宸殿がある。

ちなみに桜は現在、いや過去から未来に置いても咲いていない。咲いたことがない。

そしてその手前に、幹部達が集合していた。

中には人柱狩りに参加していなかった、留守を預かっていた者達もいる。

今、妖偽教団の手元にある戦力は彼らしかいなかった。雑魚達は椿家討伐に当てている。

つまり、迎え討つ者は自分達だけなのだが――そこで、熾堕は首を傾げた。

「おい、一人足らないぞ」

異彩を放つ彼らの中でもかなり目立った服装の『彼女』がいないことに、熾堕は片眉を上げる。

「あいつなら、羽衣姫様んとこだろ」

この中ではあまり目立たない方の獏僧（バクソウ）が、やれやれとばかりに首を振った。

「それに、元々俺ら日陰モンの中でも更に表に出ねェ奴だし。いつものことだろ」

「……そうだな」

熾堕はため息をついた。実はそいつが彼にとって一番の不安要素なのだが――この際しかたない。

「全員気付いていると思うが、退魔師共がここに来ている。とはいえ、ごく少数」
「それで、一気に私達が袋叩きにするわけ？」
苦妃徒太夫（クピトダユウ）の問いを、熾堕は「いや」と否定する。
「連携でもされたらマズい。俺達は協力して戦うことが苦手だからな」
「……身も蓋も無いわね」
顔をしかめつつも否定はしない。彼女も解っているのだ。自分達はお互いの力を相殺してしまうことに。
「じゃ、どうするの？　奴らがそう簡単にバラけるとは思えないけど」
「バラけるのを待つんじゃない。バラけさせるんだよ」
熾堕は笑みを作り、視線を幹部の一人に向けた。
黒いコートを着た女だ。ウェーブがかった黒髪に、アジア人離れした西洋風の整った顔立ちで、年齢を感じさせない雰囲気である。
「薔薇司教（バラシキョウ）、頼むぞ」
「……ええ。当然よ」
女――薔薇司教は黒い手袋をはめた手で髪を後ろに払った。
「全ては羽衣姫様の御（おん）ため、ね……」

――――

流星は眉間にしわを寄せていた。
不快や不機嫌の表れではなく、また後悔し出す自分に嫌気が差したのだ。
「流星、どうしたの？」
悠が首を傾げた。すでに刀を抜いており、臨戦態勢である。
「ん……何でもない」
「そう。でもま、別に道案内しろとは言わないから安心してよ」
木の小屋が並ぶ風景を見渡しながらの言葉に、流星は「ん？」と

顔を上げる。
「でも、道解んのか？」
「ここ、平安京を模してるんだよな」
答えたのは風馬だ。彼は銃弾を確かめている。
「だったら、それを考えて進めばいいわけだ。俺、大学は歴史専攻してたから、だいたい道覚えてる」
「ていうか……真っ直ぐ進んだら行き着く気がするんスけど」
猛は目の前の大きな道を眺めた。
「朱雀大路だと思うし、ここ」
「あら。だったら羅城門は、私達が降りてきた後ろの小屋？」
日影は首をひねった。
「……羅城『門』というより、羅城『小屋』だな」
城であるかも怪しい、と紗矢は腕を組む。
「あれ？　羅城門じゃなくて羅生門じゃなかった？」
「それは小説」
雷雲の疑問に、文菜が答える。
「あれ、一緒じゃないの？　言い方が違うだけで」
雄輝の言葉に舜鈴が首を傾げた。
「私は中国で平安京のことは学ばなかったけど、確か唐代の長安の都が平城京のモデルになったとか」

「ちょっとストップ！」

流星は慌てて制止をかけた。更に口を動かそうとした一同は押し黙る。
「な、何か当初の目的、忘れてねぇ？」
「忘れてないよ」
当然というように悠が見返してきた。
その割には話が脇道にそれていた気がする。
もう少しでついていけなくなった、と流星は顔をしかめた。

「……ま、ここに留まってても仕方無いし、進もうか」
悠が一歩踏み出した。
「気を付けろ。何があるか解らない」
紗矢の言葉に、一同は頷く。
無論誰も油断などしていない。最後の戦いだというのに、気が抜けるわけないのだ。
一見無駄な会話も、必要以上の緊張を解きほぐすためである。
……もっとも、流星はそこまで気が回らなかったのだけど。
ただ、目の前で持ち上げられた長い髪をまとめる髪留めに視線が行った。
「悠、それ……」
流星が声をかけると、悠はにこりと笑った。
「最後の戦いで、髪が邪魔で負けたなんてオチは嫌だもの」
悠は髪を綺麗にまとめ上げた。白く細いうなじにどきりとしたのは、流星だけではなかったりする。
「あー……早く行きましょう」
雄輝がごほんとせきで色々とごまかした。
進み出す一同。周りは音を失ったように沈黙していた。
例えばここは実物大のジオラマのような、最初から人が住まない前提で造られたような、そんな不自然さを伴っていた。
その中で歩く生きた自分達は、さぞ異質に見えるだろう。生物ではなく静物の方が、この場にはふさわしい。
そこまで考えていたわけではないけれど、ただ、一度目の時には感じられなかった違和感に、流星は顔をしかめた。
そのことを口にするより早く、感覚が消失する。
違和感の、ではない。それはまだ身体にまとわり付いたままだ。
消えたのは、背後の気配。
「……えっ」
流星は振り返った。悠と、彼女の少し後ろにいた朱巣（シュカ）も、同じく。
いない。

誰もいなかった。

仲間が、一人も。

呆然と、さっきまで仲間がいたはずのところを見つめる。

周りを見渡しても、姿も影も、髪の毛一本すら見当たらない。

「み、みんな……？　どこ行ったんだ！？」

流星は声を張り上げた。

答えは、返ってこない。

「どこかに強制的に飛ばされたみたいだね」

悠は眉間にしわを寄せた。

「でも誰が……近くにいないと転移なんてできないのに」

悠の言葉が途切れる。流星はハッとして振り返った。

「おォー、うまくバラけたな」

顔にタトゥーを彫った青年は笑った。そして、隣の銀へ目を向ける。

「今んとこおまえの作戦通りだなァ、熾堕」

「どうかな」

銀の髪に銀の双眸の美丈夫は唇を歪めた。

「全てが思い通りにはならないさ」

「熾堕……！」

悠が刀を持ち上げた。

「おまえ達が何かしたの？」

「正確には、俺達の仲間だぜ」

タトゥー男――もとい、獏僧はまたもや笑い、目を流星に向けた。

「よォ。俺的にはおまえに仲間になってほしいけど、羽衣姫様が殺せって言うから殺すぜ」

「……望むところだ。俺もおまえを倒す！」

流星は小刀を抜いた。

「今ごろ他の奴らも仲間がもてなしてるはずだ。あの世で再会しな」

猿僧の皮膚の下から、灰色の皮が現れた。めりめりと人間の皮膚が破れ、半身が灰色の妖魔と化す。

「熾堕、俺は鬼童子をやるぜ」

「……ふむ。なら俺は椿　悠か」

「できるもんならやってみろ」

「倒される自覚、少しは持ちなよ」

戦いは――互いの言葉が終わると同時に始まった。

分散<中>

足元が沈んだ。泥のように、ずぷりずぷりと。
「っ……！」
地獄に引きずり込まれた時のことを思い出し、日影は戦慄する。
しかしあの時のように叫べるほど間は無かったし――
いた場所も、あの時と違っていた。
「ここ……まだ平安京の中？」
先程と変わらない木の平屋の大群。変わったのは、明らかに人数が減ったということだけだ。
いるのは日影と――
「ここ、どこですか？」
雄輝だけ。
「解らないわ。何だったの、今の。みんなはどこかしら」
「さぁ……？」
雄輝は首を傾げつつも、怯えた顔で足元を見つめた。また沈むのではないか、と危惧しているのかもしれない。
「ね、それより悠達を探しましょう」
ここでバラバラになるのは得策とは言えない。日影はそう判断して足を踏み出した。

「無理無理、合流なんて」

聞き覚えのある声が降ってきた。日影はハッと顔を上げる。
「ここがどこか解ってる？　あたし達の根城よ。根城に侵入するネズミや害虫は駆除されるのよ」

平屋の上からこちらを見下ろして見下す女に、日影は顔を歪めた。
「いきなりで随分ね、苦妃徒太夫……だったかしら」
「そ。覚えておきなさい。死ぬまでね」
女――苦妃徒太夫は派手なかんざしを揺らしながら笑った。
「……知り合いですか？」
雄輝の発言に、日影は「知り合いたくないわよ」と毒づいた。
「……じゃ、隣の子は？」
雄輝が苦妃徒太夫の横を指差す。今度は眉をひそめた。
「知らないわ。誰あの子」
目線の先にいたのは、一人の少年である。
ショートパンツにTシャツという、腕白な印象を与える服装だ。
長めの茶髪につり上がった大きな目は猫を思わせる。
「にゅふふ♪　楽しめそうだねぇ」
少年は笑い声を上げた。何だかアニメに出てきそうな声音である。
「ねぇ苦妃徒ー。ボクあのおにーさんと戦いたぁい」
「いいけど、確実に殺しなさいよ。猫童（ネコワラシ）」
苦妃徒太夫が言うと、猫童と呼ばれた少年は笑みを深めた。
「来るわよ」
「わ、解ってます」
日影と雄輝はそれぞれの武器を取り出す。
雄輝の持つ『蹴鞠姫（ケマリヒメ）』を見て、猫童の黄色い瞳がぴかぴか輝いた。
「あは！　楽しい遊びになりそうだねっ」
ぴょんっと屋根から飛び降りる少年の爪が鋭く伸びた。
迫ってくる猫童に一瞬呆けた後、雄輝は『蹴鞠姫』を蹴り飛ばした。
真っ直ぐ飛ぶ鞠。しかしそれは、猫童の両手の爪で弾かれてしまう。
「い……！？」
「楽しもうよ、おにーさん！」
猫童の手が雄輝に向かって振り下ろされた。

「うわったた！」
雄輝は慌てて後ろに身を投げる。ぎりぎりで避けられたものの、上衣の前が少し裂けた。
「じ、冗談じゃない！」
雄輝は蹴り上げられた右足をさばき、左へ移動する。
「俺は体術は苦手なんだよー！」
突き出された爪を紙一重でかわし、猫童の背後に回る。拳を振り下ろそうとしたようだが、睨まれた雄輝は冷や汗をかいて下がった。
「……って、充分戦えてるじゃないっ」
日影ははぁ、とため息をつき、苦妃徒太夫に向き直った。
「私が貴女と闘うことになるのかしらね？」
「疑問に思わなくても、おまえはあたしが殺してあげるわ」
にぃ、と笑った苦妃徒太夫の顔にウロコが浮かび上がった。瞳孔が細くなり、髪はその光沢を増す。
しかしその光沢は髪のものではなかった。
かといって、金属のものでもない。
ぬらぬら輝く――爬虫類のものだ。
「はっ」
短い気合いの声と共に、蛇のようにうねっていた髪が日影へと伸びてきた。
「そう同じ手が通じると思わないでちょうだいな！」
日影は扇を開くと横に一閃させる。
ばっさり斬られる髪。妖しく黒光りする黒髪がざんばらに散った。
「甘い！」
だが髪を全て斬ることはできず、一房が日影の右足をかすめる。
日影は顔をしかめた後、後ろへ跳んで髪の囲いから逃れた。
地面に足を着き――
「え……？」
そのまま――

無様に、倒れた。

それこそ、操り人形を上から引っ張り上げていた糸が切れたように、あっさりと。

「え、えっ？」

日影は慌てて立ち上がろうとした。が、上体は動いても、右足は動かない。

傷はどうってことない。戦いに支障も出ない、ほんの小さなかすり傷だ。

なのに――傷口がしびれるように痛い。

そのしびれが、右足を縛り付けている。

「こ、これ……まさか、毒？」

「ご名答」

日影の言葉に答え、苦妃徒太夫は屋根からすたんと跳び下りた。

髪の長さは元に戻っている。

「この姿を見て、大方の予想はついてたんじゃないの？　あたしは毒蛇とかけ合わされた半妖」

苦妃徒太夫の唇の端がつり上がった。ちろちろと動く舌は細く、先が分かれている。

「この髪があたしの牙。毒牙ならぬ毒髪。蛇女ならぬ毒女。この毒から逃れられない。ほら――」

「あ、ぐっ……！？　身体が、動かなく……？」

日影は手を着こうとして、失敗した。手まで崩れるように倒れ、肘を着く結果になる。

「毒は全身を巡っていくわ。ま、遅効性だから、あと十分たたないと死なないんだけど」

あっさりきっぱり、絶望的なことを言われた。そこにためらいなど、当然無い。

「あたしが死ねば毒は消えるけどね。それはありえないから死ぬまでの間、暇よね」

「っ……！」
「お喋りしましょうか」
人外の顔が浮かべたのは、なんとも人なつっこい笑みだった。

――――

爪が迫る、迫る、迫る。それを避ける、避ける、避ける。
同じ攻撃に同じ回避。違うのは動き方のみだ。
「いい加減さぁ、攻撃したら？」
猫童はどんどん表情を薄めていった。
一方雄輝に喋る余裕など無い。すでに息が上がってきている。
（くそっ。『蹴鞠姫』があってもこんなに近いと……）
『蹴鞠姫』を呼び戻すことはできる。だがもし、また弾かれたら？
そもそも中・遠距離用の武器なのだから、接近戦ではかえって邪魔になる。
体術は苦手だが――体術で応じるしかない。
雄輝は右の平手を肘を折り畳んで後ろに引いた。
「……退魔体術」
苦手だが――嫌いではない。
「堕破（ダハ）！」
気合いを入れるように技名を口にし、右の平手を勢いよく前に着き出す。掌底（しょうてい）が猫童の左胸を捉えた。
「っあ　ゞ！？」
猫童の喉から押し潰されたような声が絞り出される。
そのまま、掌底の勢いに吹き飛ぶように家屋に衝突した。
「……当たった」
自分で放ったくせに、雄輝が一番驚いていた。
だがすぐ我に返り、『蹴鞠姫』を呼ぶ。
呼ぶ、と言っても声を上げたわけではない。ただ念じたのだ。
念じれば戻ってくる。それが『蹴鞠姫』の特性の一つだった。

「俺が得意なのは……体術じゃなくてスポーツなんだよ！」
スピードを乗せて蹴っ飛ばした鞠は、寸分違わずうずくまる猫童の腹に吸い込まれていく。

バギャァッ

肉と骨を打つ音がした。
「は、がっ……」
猫童の大きな目が更に大きくなる。そのまま、動かなくなった。
「……っはぁ」
雄輝は戻ってきた鞠を拾い上げ、短く息を吐いた。
半妖を狩ったのは初めてだ。人であって人でない、人道でも畜生道でもない者を狩ったのは初めてだ。
半妖。人をやめた者。妖魔になりきれない者。
そのような存在は狩るしかないと教えられた。
狩らねばその魂は救われない。本人も気付かぬまま、魂はすり減りすり切れやがて――
やがて――どうなるんだっけ？
随分前に教えられたことだからよく覚えていない。
……まぁいいか。
雄輝は軽く流し、周りを見渡した。
攻防を続けている内に、随分移動してしまったらしい。日影の姿が見当たらない。
「どんどん後ろに下がっていったから……前に進めばいいな、うん」
考えずとも解ることを口にし、雄輝は猫童の前を通り過ぎた。
――と。

「あんたさぁ、鍋島騒動って知ってる？」

声をかけられた。すでに狩ったはずの少年の声が。

「知らないよねー。講談自体知らなさそうだし」
猫童の口から血と共に吐き出される言葉は、異常に明るかった。
「二家の御家騒動なんだけどさー、そこに怪猫（かいびょう）が出てくるわけよ。超親近感わくんだよね」
猫童は立ち上がった。素足は、黒い毛で覆われている。
「僕もさ、いいとこ出だったけど御家騒動みたいなので捨てられたのさ。ムカつくから家族全員殺したけど」
手が音を立てて武骨に――否、人間以外の何かに変質していく。
「だからかなぁ。飼い主殺された猫が妖魔になる気持ち、解るんだぁ。どん底に落とされて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて憎くて！」
ぶわっ、と猫童の顔から全体に広がるように、裂けた皮膚の下から黒毛が現れた。
手足だけを覆っていたは剛毛は少年の全身を包み――
一匹の怪猫となった。
「っ……！」
「さぁ、遊ぼうよおにーちゃん♪　ボロクズになるまでさぁ」
怪猫の喉から発せられたのは甘ったるい、文字通り猫なで声。
ざらついた、やすりのような蠱惑（こわく）的な声だった。

――――

蛇の舌はよく動く。ちろちろと、くねくねと。
「私ね、これでも昔は芸者だったの。舞も三味線もうまくって、誰より美人だから凄く人気だったのよ。でもね、ある日髪を切られたの。京にも不良はいるのよ。髪はざんばらになってしまった。仲間がそうするよう、不良達に頼んだの。私に嫉妬したのね。髪だけならともかく、顔や身体も傷モノ。表に立てなくなった私は憎しみに

任せて仲間を殺したわ」
恐ろしい顔をのんきに緩め、恐ろしい声でのんきに喋り、苦妃徒太夫はのんきに笑う。
悲惨な話だというのに、口調は軽い。
日影はそれに対し何も言わない。絶句した――わけではなく、毒の激痛に耐えているのだ。
口を開けば叫んでしまいそうで、話を遮ることもできない。
彼女の言っていた十分まで、あと少し。あと少しで、私は……
（悔しい！　悔しい悔しい悔しい！）
こんなところで死ぬなんて。
こんなところで何もせず。
こんなところで一矢むくいず。
こんなところで、こんなところで……！
日影はぎり、と唇を噛み締めた。
毒を何とかしなければ。だが、身体はほとんど動かない。
解毒剤など当然無いし、毒に対抗する術（すべ）など知らない。ゆるやかに死ぬしかない。
（……でも、待って）
彼の一撃を受けて毒の影響を受けなかった人物がいる。
（流星君は、毒に犯されてない）
彼は生きている。自分より大きな傷を負いながら、しっかりと。
（どうして？　毒の耐性があるとか？　そんな都合よく？）
そんなわけない。もっと別の、明確な理由があるはずだ。
彼と自分には、どんな違いがある？
男女差？
身長差？
いや、これで毒が効く効かないが決まるわけない。
なら何……？
（……あ）
あった。一つだけ、完全に流星と自分を分けるものが。

（鬼、童子……）

人の身でありながら妖魔を宿すもの。

妖気を宿す流星が効かないということは、この毒も妖気なのではないか。

流星の中の妖気が、妖気から造られた毒を打ち消したんだとしたら……！

（だとしたら、方法は一つだわ）

妖気を打ち消すことが毒を打ち消すことなら、うまくいくはず。

（私は、こんなところで死ぬわけにはいかないのよ！）

日影は右手を振り上げた。

苦妃徒太夫はそれに気付いていないのか、カウントを始めている。

「五、四――」

「桐生家破魔術――」

「三、二――」

「聖刀――」

「一、ぜ――」

「刃華（ハバナ）！」

日影の手刀が打ち込まれた。

苦妃徒太夫に、ではない。

彼女との間合いは数メートルあり、どうやっても届く距離ではない。

無論地面でもない。

地面に打ち込んでも何の意味も無い。

手刀が打ち込まれたのは――

日影自身の腹だった。

苦妃徒太夫の細い瞳孔が更に細くなった。

「じ、自分の腹を貫いた！？」

苦妃徒太夫の言葉通り、日影の手刀は日影の腹に喰い込んでいる。

かはっ、と軽くせき込めば、血の混ざったつばが飛んだ。
「何がしたいのよ、あんた！　死ぬ間際にそんな、こ、と……」
苦妃徒太夫の顔色がみるみる内に変わった。蛇顔だから、変化は解りにくかったが。
「ど、どうして死なないの……毒は全身に回ったはずよ……」
「毒、なら」
日影はふらりと立ち上がった。腹に激痛が走ったが、かまわず苦妃徒太夫を睨み付ける。
「打ち消したわよ。というか、毒というより妖気でしょ」
「そ、そんな！」
「はぁ、全く」
日影は腹から手を引き抜いた。
それほど深くはない。致命傷というほどでもない。
ほっとけば失血で倒れるかもしれないが、毒で死ぬよりましだろう。
穴の開いた腹をさすり、日影は扇を構えた。
「桐生家当主が嫡子、桐生日影。舞わせていただきます」
たん、と足が地面から離れた。
舞うように、踊るように。

雄輝は実戦らしい実戦を経験したことが無かった。
実戦は今回の妖偽教団とのが初めてであり、温室育ちの彼にとっては辛過ぎるものだった。
家族を失い、仲間を失い、死と隣り合わせの戦いに放り出されて。
普通なら誰かを、何かを恨むはずだ。憎むはずだ。
理不尽さに、不当さに、不条理さに。
なのにそういう感情に無縁なのは、臆病者だからだ。
強いからではない。むしろ弱いからこそ、彼は誰かを恨むことも何かを憎むことも無かった。
彼は、そういう男だった。

決着が着くのは早かった。
血まみれで、血みどろで、しかしそれは、全て雄輝のものではなかった。
返り血、だった。
「おまえが直線的な戦闘スタイルでよかったよ」
雄輝は顔を泣きそうに顔を歪めながら、虫の息の怪猫を見下ろした。
虫の息、というか呼吸すらままらなくなっている。
喉――ちょうど気管にあたる部分に、穴があいていた。
そこから吸った空気が漏れ、肺まで行き渡らないようだ。
代わりに穴から流れる大量の血が肺へと流れているようで、先程からひっきりなしに血塊を吐き出している。

「正面から向かってくるから、撃ち込みやすかった。飛びかかってくるからよけいに」
喋れない怪猫は、にごった黄色い目をこちらに向けた。その目に一瞬身体を震わせるが、かまわず続ける。
「なぁ、どうしてこっちの道に堕ちちゃったんだよ。もっと他の生き方あったよな」
「――!?」
「憎んで恨んで。そんな生き方、怖いじゃん。だって大切なもの、捨てそうじゃないか」
「――、――!?」
「憎しみって感情、俺は恐い。だって憎んだ方も憎まれた方も色んなもの失うし。だから、俺は妖偽教団を憎まない」
でも、と雄輝は怪猫の手触りの悪い毛に触れた。
「それは許すと同義語じゃないから……ごめんね」
ぐいっ、と上げられる腕。そろえられた指先。
「退魔体術――堕破」
掌底が怪猫の心臓を貫いた。
ぶしゃっ、と吹き出す黒い血。ただでさえ汚れていた雄輝の痩身が、更に赤黒く染まった。
抜き出した手はもっと色濃くて、肉を突き破った感覚が残っている。
「……う゛っ」
雄輝はしゃがみ込むと道端に胃の中のものを吐き出した。
「う、う゛ぇっ……う、うぅっ」
すぐにせり上がってきたものは吐き出せたが、嫌な気分はぬぐえない。
そういえば思い出した。半妖の末路はどういうものか。
半妖となった者の魂は、本人も気付かぬまま、すり減りすり切れやがて――

やがて、消えるのだ。

魂そのものがなくなる。生まれ変わることもなく、天国にも地獄にも行けない。

無に還るのだ。何も残らない、残せないまま。

それがどれほど哀しいことか、物心ついた頃から教えられてきた。

だからそんな哀しい結果を生まないよう、半妖を狩らねばならぬのだ。

例え、殺す結果になったとしても。

頭では解っている。だが身体は拒否反応を起こすのだ。

理由はどうあれ、殺していることに変わりはないのだから。

「……やっぱり俺は、弱い」

どれだけ嘆いても、その事実は変えようがなかった。

――――

日影が自分に放った技は、本来攻撃のためのものである。

敵の妖気を打ち消す技。ゆえに、妖気でできた毒を消すために自身に放った。

が、それは危険な賭けだった。

加減を誤れば死ぬことになるし、そもそも毒が妖気でできているかすら五分五分だったのである。

そこまでして生きようとする執念。

生への執着。誰しもが持つものだが、日影のそれは並外れていた。

だって生きなければならないから。

生きるために生かされ生きているのだから。

私は……生きるために生まれてきたのだ。

一撃が苦妃徒太夫の腹に入った。

『桧扇姫』のではない。日影の蹴りである。
「ぐ、はっ……」
苦妃徒太夫は血の混ざったつばを吐き出した。
が、ぶ厚い帯に助けられたのか、大したダメージは受けてないらしい。すぐ持ち直した。
しかし、それが隙を作ったのは否めない。
「第十五の舞――」
日影はその隙に突け込み、苦妃徒太夫の懐に入った。
「死々舞（シシマイ）」
扇が着物の胸元を斬り裂く。
とたんに。

ザンッ

着物全体が裂けた。
全身が刃物で斬り裂かれたかのように、ばっさりと。
「なっ、なぁっ……！？」
「斬り裂いた対象のほんの僅かなほころびを斬り裂く……それが『死々舞』」
日影は苦妃徒太夫の鱗まみれの首に扇を降り下ろした。
「今度は、その着物だけじゃすまないわよ！」
扇が首筋に喰い込む――
「っらぁ！」
前に、鋼の毛が扇を弾いた。
扇ごと、日影も吹っ飛ぶ。が、唇には笑みが浮かんだ。
「……？　……！　あぁっ」
苦妃徒太夫は頭を押さえた。
黒くうねる髪が、ばらばらと砕け散った。ガラスが割れるかのごとく音を上げて。
「戦いの中で痛みきったその髪も、例外じゃあないわよ」

日影はうそぶくように言うが、実を言うと限界が近かった。
腹の傷から血は出ていない。血そのものは止まっている。
だが傷の痛みまで止められなかった。しかも痛みは、しびれの代わりに全身を巡っている。
日影は痛みで立ち尽くしたまま、ぐらりとよろめいた。
それを逃すほど、苦妃徒太夫は甘くもなければ戦い慣れていないわけではなかった。
厚底な下駄を滑らせ、腕を振り上げる。日影ははっとして後ろに跳ぶも、間に合わない。
「ぐっ」
爪が日影の右肩をえぐった。
吹き出す血と激痛に、日影は思わず扇を取り落とす。
慌てて拾おうと手を伸ばすが、苦妃徒太夫が首に掴みかかってくるのが早かった。
「がっ、は、離せっ……」
「よくもあたしの髪を！　よくもよくもよくもよくもよくもよくもよくもよくもよくもよくもよくもよくも！」
めしめし、と首の骨が悲鳴を上げた。日影自身は吐息すら漏らせない。
このままでは、絞め殺されてしまう。
「っ……」
日影は左手で苦妃徒太夫の腕を掴んだ。
外そうと力を入れるが、人間と化物、馬力が違う。
日影は腕を下ろした。諦めたのではない。別の方法を取ろうとしたのだ。
もはやぼろ布でしかない苦妃徒太夫の着物を掴む。そして右足で、苦妃徒太夫の足を払った。
「っあ……」
もくろみ通り、いきなりのことで対処できなかった苦妃徒太夫は後ろへ倒れていった。

背中が叩き付けられる音と共に、手の力が緩む。その隙にせき込みながら、日影は地面に転がっている『桧扇姫』を拾い上げた。
「これでっ、終わりよ！」
「っ……！」
苦妃徒太夫の目が見開かれた。
逃れようともがくが、日影が帯でくるんだ腹を踏みつけているために思うように動けないようだ。
「第十五の舞、『死々舞』！」
扇の先が苦妃徒太夫の喉元をかき切った。
「あた、あたしっはっ……」
苦妃徒太夫の顔が醜くひきつった。
皮肉か――妖魔としての顔で、それが最初で最後の人間らしい顔だった。
「あたしはこんなとこで死ぬ人間じゃ、な……」
全身から血が吹き出した。

ぶしゃ、ともどしゅ、ともつかない破裂音の後、全身に斬れ目が現れた。
斬り口より血の方が現れるのが早かった――というのは錯覚だろう。傷口が無ければ血は体外に出ない。
そしてその血を全身に浴びて――日影は笑った。
「こんなところで死ぬ人間じゃない？　ぬるい、ぬるいわ。その程度で私を殺そうとしていたの？　甘ったるすぎるわ」
その程度で。
その程度の覚悟で。
その程度の心意気で。
「私はただ生きるために生まれたの。跡を継ぐ者として、血を引く者として」
もう自分以外の桐生家の血を引く者はいない。分家の者達はいる

が、彼らに桐生家を任せる気も無い。
そうでなくとも、自分は生きるために生きていただろう。
昔から死ぬほど辛い思いをして。
それこそ生死の境をさまよって。
だけど生きている。生かされている。
今更死にたいとは思わなかったし、まだまだ生きるべきだと思っていた。
執念とも言うべき想いを、自分は秘めている。それを抑える気も、さらさら無かった。
「さようなら。どうあがいても、あんたに私は殺せないのよ」
そしてそのまま――日影は後ろに倒れ込んだ。
半妖と逆の方向に頭を向けて、ばったりと。
「……傷負い過ぎた」
ぼそっと呟いている内にも、傷の痛みは全身を覆っている。
だが、こんなところで立ち止まるわけにもいかなかった。
「行か、なきゃ……」
無事な腕、扇を持った方の腕で日影は立ち上がろうとする。
「大丈夫ですか？」
そんな彼女の前に、手が差し出された。
顔を上げると、心配そうな表情の雄輝が覗き込んできた。
「雄輝……貴方勝てたの？」
「何ですか、その勝てるとは思ってなかったっていう顔」
酷いなぁ、とぶつくさ言いながらも雄輝は助け起こしてくれた。
「血だらけじゃないですか……大丈夫ですか？」
「大半は返り血よ。ただ……怪我が酷いのは確かね」
日影は肩の傷を押さえた。さっきほどではないが、まだ血は止まっていない。
「止血、しないとですね」
雄輝は上着を脱いだ。
「って、貴方も返り血だらけじゃない。そんな上着で止血するつも

り？」
「あ。そ、そうですね」
雄輝は思い出したように上着を手離した。
「……それにしても、ここまでしなくても」
一瞬何を言われたか解らなかったが、日影ははたと思い至り、「あぁ」と扇を閉じた。
「ここまでやらないと倒せなかった。それだけよ」
「……そうですか」
雄輝はそれ以上何も言わなかった。言わないまま、また手を差し出した。
「行きましょう。ここにこれ以上いても、意味無いし」
「そうね」
血まみれ血みどろのまま――
日影と雄輝は歩き出した。

――――

足元が沈んだと思った。
気が付いたら、また元に戻っていたけど。
ただ――
「みんな、どこぉ？」
いなかった。
自分達以外、誰も。
「どういうことだ……地面に飲み込まれたと思ったら……移動、させられたのか」
風馬が混乱したように呟いた。実際混乱しているだろう。
「何で移動させられたんだよ」
雷雲は気にいらないというように顔を歪めた。
「……俺達をバラけさせるためだろう。多分近くに敵がいるはずだ」
風馬は銃を構えて辺りを見渡した。

「その通り」

頭上から降ってくる声。ひゅるひゅるという落下音。

「上かっ」

風馬は呻くと雷雲を抱えて横へ跳んだ。

ドズウゥゥンッ

その『巨体』が降り立ったとたん、地面が振られたのかと思うほど揺れた。

ぎりぎりで落下地点から逃れたものの、本当に際どかった。

一、二歩ずれていたら、『それ』でぺしゃんこになっていたろう。

いや、それより。

「な、何だよこれ」

雷雲は思わずそう呟いた。

目の前に落ちてきたのは……巨大な肉の塊だった。

ぶよぶよとした、肌色が凝り固まったような物体である。

一体これは人なのか、妖魔なのか。

いやまず生きているのか。

それ以前に……生き物なのか。

どう考えても十メートル越えの集合体にしか見えないか……

「おまえら」

喋った。

どこから声を出しているのか知らないが、喋った。

「退魔師だろ？　ここにいる人間は退魔師ぐらいのもんだわい」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！　に、肉塊が喋ったぁ！」

雷雲は風馬に飛び付いた。

「落ち着け！　肉塊喋るぐらい今までのこと考えればましだろ！」
「そ、そうだけどっ。てっきり攻撃だと思ったから」
まさか妖魔の方とは思ってなかった、と言えば、肉塊は笑う。ぷるぷると震えて気持ち悪い。
「餓鬼よ。目に見えるもんが全てじゃねぇ。ついでに言やぁ、これもある意味本体じゃねぇ」
謎の声がそう言ったとたん、肉塊は空気が抜けていくようにしぼんでいく。
しゅるしゅると小さくなり、やがて人の形を取った。
恰幅（かっぷく）のいい老人だ。白く長い口髭を生やして、質素な薄茶色の服を来ている。長髪は頭のてっぺんから髪の先まで真っ白だ。
まるで仙人のような男に、雷雲と風馬は顔を見合わせた。
何だか……敵らしくない。
倒しずらい、とも言う。
そんな二人の内心を察したのか、男はからから笑った。
「わしの名は修験狸（シュウゲンダヌキ）。名の通り狸じゃ。おぬしらの名は？」
「あ……俺、家鳴雷雲」
反射的に答えた雷雲の脳天に、風馬が拳を落とした。
「あだっ」
「やすやすと敵に名前を明かすな！」
二人を知る者達なら、このようなやり取りは日常茶飯事である。
それを知らない者は、ただただ驚くだろう。
しかし男は――修験狸は驚かなかった。
ただ、笑ったのである。
おかしそうに、声を上げて。
「かっかっ。安心せい。呼ぶのに必要だから訊いたまでよ。別に呪いをかけようとは思っとらん」
「……信用すると思うか？」
風馬は銃口を修験狸に向けた。
「大体俺達は敵としてここに来た。なら出会った敵とは、戦うしか

ないだろう」
「血の気多いのう。何、別にわしは命の取り合いをしに来たのでない」
修験狸はその場にどかりと座り、膝を叩いた。
「わしが望むのは、交渉よ」
「交渉、だと……」
風馬は片眉の上げた。
「そんなもの、できないしする必要も無い」
「そう言うな。簡単なことよ」
修験狸は雷雲に目をやった。
「雷雲、じゃったな」
「？　うん」
「おまえがわしに勝ったらある情報をくれてやる」
にや、と修験狸の唇が歪められる。雷雲はその顔にむっとなるが、あっさり頷いた。
「いいよ」
「おい、雷雲！」
「大丈夫！」
声を荒げる風馬を無視し、雷雲は『卯槌姫（ウヅチヒメ）』を構えた。
「いつでもいいぜ、じっちゃん！」
雷雲は無邪気に笑う。いっそ、不敵と言えるぐらいに。

第二十四話　雷撃、火炎、覚悟<上>

「ここどこッスか」
「解んない」
「平安京の中みたいッスけど……空間まで変わったってことは……」
「それは無いね。気の流れが同じ」
「にしても便利ッスね。その気がどうとかいうの」
「李家、というか道士は、日本の退魔師とは戦い方が少し違うからね」
「例えば？」
「そうだね……術系統とか？　うちは練丹術とか風水とか使ってるし」
「レンタン術はともかく、風水は日本でも使われてますよ」
「元は同じだけど、術法が違うと思うよ。多分」
「ふぅん。やっぱ国柄ッスかねぇ」
無駄話終了。
足元が沈んだかと思えば別の場所に出ていたため、とりあえず猛と舜鈴は会話を交わした。
別に理由は無い。強いて言えば混乱した頭を整理するためである。
いきなり知らない場所に放り出されたら普通は何も言えなくなるのだが、そこは不測の状況に慣れた退魔師。少し話しただけで冷静になれた。
もっとも冷静になれたからといって、この状況がどうなるわけではないが。
「それで……どうやって戻ろっか」
舜鈴はふむ、と唸った。

周りに人影はいない。風景、というか平屋の造りは皆同じなので、おおよその場所の検討もつかない。いわば、迷子状態である。
「いきなり足元が沈んでどこか解らない場所に出て……偶然じゃぁないですよね」
健は槍を持ち直した。鋭くした目を、すぅっと辺りに向ける。
「否、だよねぇ。どうやったかは知らないけど、うまく分離されちゃったみたい」
舜鈴の傍らには、いつの間にか『傀儡姫（クグツヒメ）』がいた。顔には仮面が付けられている。
「いつも思うんスけど、それ一体どっから？」
「秘密。それより」
舜鈴は黒く塗り潰された天井を見つめた。
「上（シャン）」
「え？」
舜鈴が口にしたのは中国語で、その意味は解らなかったが、上を見たので多分上だろうと猛は目線を上に向けた。
目に映ったのは、黒い何かである。小さな黒いそれが、幾つも飛来してきた。
それの光が、同色であるはずの空で刃のように輝いている。
……刃？
「……って、攻撃！？」
言うまでもない。
それは羽根の弾雨だった！
慌てて避けようとするも、間に合うはずが無い。気付くのが遅かったのだ。
ならせめて受ける攻撃を減らそうと身をかがめた時、舜鈴が前についっ、と出た。
「まかせて」
舜鈴はにこやかに微笑み、両手を前に出した。ぼう、と彼女の両手が発光する。

光が舜鈴と猛を取り囲むと同時に、黒い物体が落ちてきた。

ズドドドドドドドドドドドドドドドッ

鈍く響く、突き刺さる音。しかし――二人の身体に、それは届かなかった。

黒い羽根が突き刺さったのは、光る半透明の障壁である。舜鈴が腕を下ろすと同時に、消えてしまったが。

「羽根……鳥？」

舜鈴が片眉を上げると――

「んん……避けられたんか」

上空から眠そうな声が落ちてきた。

興味の無さそうな、もの凄く気だるそうな。

ようするに敵に対しての口調ではない。

「まぁええわ。挨拶みたいなもんやさかい。でもわりと本気で飛ばして……もうええわ、めんどくさい」

だるい声と共に、一人、いや一匹――とにかく半妖が降りてきた。

まだ若い、二十歳そこそこの男だった。両腕に翼のように黒い羽根がびっしり生えている。両頬辺りにも、黒い鱗のような羽根があった。

しかしそんな異様で異容な姿でありながら、その顔はあくまで気の無い顔だった。

気というか生気が無い。ついでに言うと覇気も無い。

一発で倒されそうな顔だった。

「あやー……あぁいう人って、盛り上がりに欠けるね」

「いや、戦いに盛り上がりを求めることは間違いじゃ」

猛は気が抜けた。

が、明確な殺気を感じ、ハッと振り返る。

「それがしに気付くとは、さすがだな」
平屋の影から現れたのは、腕が木のように変形した男。
「亜紅太法師（アクタホウシ）……！」
「今度こそ貴様に流れる橘（タチバナ）の血、絶やす！」
亜紅太法師が眼前にまで迫ってきた。
その目を憎しみで、ぎらぎらと輝かせながら。

――――

第一撃は雷雲（ライウン）からだった。
下段に構えた槌を、走りながら振り上げる。
顎を狙ったそれを、修験狸（シュウゲンダヌキ）は背中をそらして避け、雷雲が振り切ったところで頭突きを喰らわせた。
雷雲は呻き、後ろに後退する。額がずきずきと痛んだ。
「っつー！　な、なんて石頭だよっ」
「馬鹿！　気を抜くんじゃないっ」
風馬（フウマ）の声と一緒に、腹に衝撃が与えられた。
「っが」
「ぬるいのう、餓鬼」
拳をめり込ませた修験狸は、目を剥く雷雲の顔を覗き込んだ。
「戦いで気ぃ抜くとは、未熟にもほどがある」
そのまま雷雲の服のえりを掴み、地面に叩き付けた。
「雷雲！」
その様子を見た風馬は、思わず走り出す。だが、すぐ足を止めた。
止まった、という方が正しいかもしれない。足は、二、三歩踏み出しただけで動かなくなった。
「邪魔をしないでもらおう」
修験狸はにや、と笑った。
「殺しはせんよ。加減はしとる。そもそもわしは、近接戦向きでなくての」

「き、さま……！」
「こうやって法術を使う方が性に合ってる」
苦悶の表情を浮かべる風馬に対し、修験狸の表情はすずしげだ。
口元を更に歪ませ、続ける。
「わしを他の半端者達と一緒にするな。……まぁ熾堕（シダ）と、裏切った月読（ツクヨミ）は別格じゃがな」
ふむ、と唸り、目を細める修験狸に、風馬は眉をひそめた。
なぜその二人を別格にするのか。月読――葵（アオイ）はまだ解るが、しかし熾堕は？　あの圧倒的な力のことを言ってるのか。
しかしそれを問うことはできなかった。修験狸が、起き上がった雷雲に向き直ったからである。
「まだ立ち上がれるか。根性はありおる。が……その武器の力を持て余しておるのが残念だの」
修験狸の言う通りだ。雷雲は己の武器を使いこなせていない。
そもそも槌に、決まった型など無い。剣や銃、槍のように流派があるわけでもない。
それは文菜（フミナ）も同じなのだが、彼女は独自の戦闘スタイルを確立している。一方、雷雲はそれを作り出すには幼過ぎた。
つまり、雷雲は素人同然なのである。それをずば抜けて高い身体能力で補ってるにすぎない。
結論を言えば、雷雲は『卯槌姫（ウヅチヒメ）』を扱えてない。
武器を使う者として、これは致命的な問題である。
「……うるせぇよ」
それを理解できないほど雷雲は幼くなかったし――
「それでも、ぜってー勝つ！」
しかしそれを認めるほどに成長してもいなかった。
「うらぁ！」
雷雲は槌をぶんっと薙いだ。が、あっさり避けられる。
今度は修験狸の裏拳が襲ってきた。雷雲は槌で受け止めるも、ぐらりとよろめく。

そこに顔面を狙った拳が飛んでた。とっさに空いた手で防ぐが、勢いは殺せず後ろの家の壁に叩き付けられた。

背中に激痛が走り、座り込みこそしなかったものの、その場に立ち尽くす。

そんな雷雲を追撃せず、修験狸はじっと見つめていた。

じぃっと、じろじろと。

観察するように。値踏みするように。

ただ、じぃっと。

「くそったれっ……」

一方雷雲は悪態をついた。

それしかできなかった。動いても、簡単にさばかれてしまうことを悟ったからだ。

自分の動きに無駄が多いことぐらい解っている。ただそれを認めたくなかった。

子供っぽい意地だ。子供扱いされたくないがゆえの、浅はかな行動だ。

そんなこと、解っている。

解っているかといって、認めたくない。

意地を張り続ける。そのために、この男に勝たなければならない。

でも……どうすれば勝てる？

（扱いきれてない。んなこと解ってるよ！　だって、部分解除だってできないし）

いや、できないというより、試したことが無いのだ。

試す必要が無かったのだ。桐生（キリュウ）家のみんなに守られていたから。

守られて――それに甘えていた。

なんて情けない。たった四つしか違わない悠（ユウ）や猛、文菜はしっかり戦ってるじゃないか。

四という差がそれなりに大きいということを、雷雲は理解していなかった。

しかしだからこそ、その小さな胸に覚悟が芽生えた。

倒したいんじゃない。倒さなければならないじゃない。
絶対に倒す。
「『卯槌姫』――」
危険なのは解っている。自分の精神など、姫シリーズはあっという間に飲み込むだろう。
それでも、迷わない。
「部分解除！」
敵を倒す。念頭にあったのは、ただそれだけだった。

――

背後の戦闘音に振り返ると、健が木のような腕を持つ男と交戦を始めていた。
「あっちがあぁだと……私は貴方とかな」
舜鈴が声をかけても、男の反応は薄かった。
ぬぼー……と、視線を合わせるだけである。というか、目が死んでる。
「ねぇ、聞いてる？」
「……聞いてるけどなぁ」
男が気だるげに口を開いた。
「正直めんどくさいねん。何でめんどくさいかってーと……それ言うのもめんどくさいわ」
「……」
舜鈴はじっと男を観察した。
その姿以外は、別段怪しいところは無い。自分のように武器を隠している様子も無かった。
とはいえ、不用心に近付くにはまだ相手の手を知らなさ過ぎる。
「……『傀儡姫』、部分解除」
そう舜鈴が言ったとたん、人形の剣を持った両手が袖の中に引っ込み、代わりに一メートルはある合計十本の鋭い刃が現れた。まる

で十指が刃となったかのように。
「おぉ？」
男の眼たげな半眼がちょっとだけ見開かれる。
「剣傀儡（ツルギクグツ）」
人形が走り出した。触れれば当たり前に斬れるその刃の指を、男の顔に突き出す――
ガィィィィィィィィンッ
が、受け止められた。
「考えるのがめんどくさいぐらい直線的やなぁ」
その翼のような腕で、完璧に。
「これで終わりちゃうよなぁ」
「当然」
舜鈴はふっと笑みを返した。それと同時に、人形が男との間合いを取る。
「白傀儡（シラクグツ）」
刃の指が引っ込んだ。
代わりに元の人に近い手と、その手に携えられた二つの巨大な鉄扇が袖から飛び出した。
人形が再び男に迫る。しかし、さっきと動きは明らかに違った。踊るような――否、まさに舞踏そのものの足さばきで予備動作に移ったのである。
当然男は先程の動きに合わせた防御をしたため、その動きについていけない。
それでもぎりぎり腕を持ち上げた。薙いだ鉄扇がその腕に接触する。
しかしそれだけだった。それで攻撃をするわけでもなく、ただ触れただけで鉄扇は止まる。
それとほぼ同時に、人形はその場で回転した。

防御された方とは逆の鉄扇を、男の首へ振っていた。
しかし男の動きは思った以上に速い。腕をはばたかせると空中に逃れた。
ここでようやく一瞬。常人では残像しか見えなかっただろう。
「……驚いた」
半目だった男のめが、ここで初めて完全に開かれた。
「姿、というか武器が変わると動きも変わるのか。どう操ってるんか教えてほしいわ」
「そんな暇、あるわけないでしょ」
舜鈴はくすくす笑った。
「後ろ、がら空き」
背後に回った『傀儡姫』に気付かない男の図が、とてもおかしくて。
「つな……」
「天傀儡（テンクグツ）」
男の脳天に人形の踵落としが炸裂した。
防ぎようの無い不意討ちに、男は速度を上げて落下する。墜落した時には、地面がべこりとへこんだ。
一方、攻撃をしかけた人形はまだ空（くう）にいる。
鉄扇はもう持っていない。代わりに、薄い衣をまとっている。それを使って空中に浮かんでいるのだ。
「ふん、あっけない。……そういえば、名前訊いてなかったなぁ」
母から礼儀はちゃんとするよう言われているのに。自分も名乗っていない。
「……まぁいいか」
それより早く猛のところに行かなくては。
舜鈴はくるりと方向転換した。
「……めんどくさいほど驚いた」

ぴた、と筋肉が自動的に停止した。
ただ首だけが、くるりと元来た道を振り返る。
「お嬢ちゃん……今本当に死にかけたわ、俺。別に責めてるわけやないけど」
土ぼこりが背中から落ちる。あれほど強く叩き付けたのだ。折れてないにしろ、全身にひびは入っているはずである。
なのに、その男は立ち上がった。
「……キョンシーなの？　貴方」
「何や、それ」
男は面倒そうに眉をひそめた。
……とりあえず、祖国にいるゾンビ妖魔ではないらしい。
「いやな、めんどくさいけど名乗ってなかったなと。俺は久遠牧師（クオンボクシ）や」
「牧師、ねぇ」
舜鈴の頬に冷たい汗が伝った。
予想外だ。まさかと思うがこの男、全身があの硬い羽根に覆われてるんではなかろうか。だから立てたのではないか？
だとしたら、生半可な攻撃は効かないだろう。

……面白い。

舜鈴は両手に三本ずつ、クナイを持った。『傀儡姫』は降りてきて、刃の指を構える。
「中国道士総本山、李家第五子にして当主第一候補、李舜鈴」
舜鈴はすぅっと微笑んだ。
気高く、思わず頭を垂れてしまいそうな美しい微笑を魅せたのである。
「お手柔らかに、久遠牧師殿」
「……めんどくせぇ」
黒いクナイと黒い羽根が空中でぶつかりあった。

雷撃、火炎、覚悟</t;中>

風馬は目を見開いた。
こんなぶっつけ本番で部分解除するとは、雷雲は何を考えているんだ！
勝ち方は他にもいくらでもある。例えば武器を捨てるとか。
一番危ない手かもしれないが、最も危険なのは慣れない武器を降り続けることなのだ。
もし刀を慣れてもいないのに扱っていたら、その内刃は斬ってはいけないものを斬ってしまう。最悪、己自身をも斬るだろう。
武器にこだわりすぎて自滅などよく聞くし、珍しくもない。
だからこそ、止めないといけないのに――
何で動かないんだ！
足も腕も、首さえもぴくりとさえしない。まぶただけが、乾きをいとうようにまばたきを繰り返すのみである。
「くそっ……どうやったら動くんだ」
銃は持ったままだ。指さえ動けば、引き金を引くことができる。
これ以上、見てるだけで終わりたくないのに。なのに。
「っ、雷雲ーーー！」
叫びが少年に届いたかは、風馬には解らなかった。

耳に届くのは雷鳴だった。
ばちばちと電気のはぜる音。それだけで、耳の奥がびーんとしびれた。
「……っはあぁ。成功だっ」

雷雲はいつの間にか止めていた息を吐き出した。
自身の精神に異常は無い。ただ、絶え間無く『声』は聞こえてきた。

『私にその身体をちょうだい』
『その幼く血気にあふれた身体を』
『生気のかよわない物体の器は嫌』
『血肉を持ったその器が欲しい！』

耳には依然、はじける音しか聞こえない。声は、脳に直接がんがん響いていた。
正直、胸が悪くなるような声だ。こんな声を聞きながら戦うと思うと、あまりいい気分ではなかった。
だが、これしか自分の勝つ道が見えないのも事実である。
雷雲はスパークをまとった槌を持ち上げた。
「行くぜ！」
唇に笑みを作り、だんっと地面を蹴った。
「意味も無く跳びおって……！？」
修験狸の目が見開かれた。
驚くのも無理は無い。肉体はごく普通のはずの子供が、十メートルも飛び上がったのだから。
「鉄槌（テッツイ）・雷（ライ）」
雷雲は空中に身を置いたまま、槌を降り下ろした。
槌にまとわり付いてるスパークが膨れ上がる――！

バチバチバチバチバチバチバチバチィッ

とたん放たれる雷撃。白い雷槌は真っ直ぐそのまま、修験狸に落ちた。
「お、おぉっ、おぉぉぉぉぉ！？」

「元からさ、衝撃波を放つぐらいならできたんだ」
直立したまま叫ぶ修験狸に対し、地面に降り立った雷雲は、少しだけ胸を張った。
「でも地面とか……そーゆー伝えるものが無かったらできなかったんだよ。でも雷撃なら、それ必要無いんだよなー」
得意になって優越感にひたる雷雲。そのため、風馬が大声を上げたのには驚いた。
「馬鹿！　前見ろ前ー！！」
「へ？」
恍惚として閉じていた目を開けると。

ドガアァッ

腹に何かが叩き付けられた。
「は、ぁっ……！？」
防御など間に合うわけも無く、肺の酸素を全て吐き出してしまった。
スニーカーの底を滑らせ、家屋にぶつかる前に止まるも随分後退させられてしまう。
「はっ、な、なに、何……！？」
酸素が足りないせいでうまく喋れない。脳も状況に付いていけなかった。
「甘いぞ、小僧」
修験狸は全身をくすぶらせながら、それでも立っていた。
無傷ではないようだが、体力はまだ残っているようである。
しかしもっとも目が行ったのは、そんなところではない。
「な、何だよ……その腕……」
彼の、右腕である。
伸びている。確かに元々ひょろりと長い腕だったが、地面にひじ辺りがこするほどではなかったはずだ。

第一、さっきまで左手同様、右手の平は人間のそれの形をしていた。

けして巨大ボールの形などではなかった！

雷雲は腹の痛みも忘れ、その腕に見入った。

手（もはやそれは手と呼べるかは解らないが）は大人が膝を抱えたほどの大きさに膨れている。こいつは手長妖魔と融合したのか？

「誰が手長妖魔じゃ」

雷雲は飛び上がった。

「こ、心読んだ!?」

「いや、雷雲口にしてる。心の声ただ漏れ……」

風馬の指摘に、雷雲は「あれ？」と目を瞬かせた。

「まぁいいや」

「いや、よくない」

「それよりじいちゃん、その腕何？」

「聞けよ」

風馬のツッコミをスルーし、雷雲は首を傾げる。今はそっちの方が気になっていた。

「……大したことはしとらんよ。法術で腕を変形させただけじゃ」

修験狸は一瞬沈黙した後、そう答えた。

「法術ってそんなことできんの？　おもしれー」

「面白がるところかの……」

「だって面白いじゃん」

雷雲はにやっと笑った。強がりでも何でもなく、ただの心の底からわき起こった笑いだった。

「じゃあさ、それ破ったら俺の勝ちにしてもいい？」

「かまわんが……勝ち目が薄くなるぞ」

「んなこと無いって」

雷雲は槌をゆっくり持ち上げた。

腹の痛みはもうおさまっている。代わりにいつもの調子が戻ってきた。
『卯槌姫』の声も、もう気にならない。
「だって俺が勝つし」
槌のスパークが激しくなった。
「雷対法術だ！」
「……やれやれ、なめくさっておるのう。じゃが」
修験狸の、髭に隠れた口元が歪められた。
「それに乗るのも悪くないのう！」
しゅるしゅると腕が元に戻った。が、すぐ筋肉が盛り上がる。しなびた老人の腕が、隆々とした筋肉に包まれる。
「来るがいい、雷雲よ！」
「絶対勝つ！」
お互い戦闘態勢を取った。雷雲は雷をまとった槌を、修験狸は筋骨隆々な腕を持ち上げる。
「直接対決でどうかのう」
「いいじゃん、それ」
戦闘法を決め――
二人の武器はぶつかり合った。

「ぐぁっ」
こっちにまで飛んできた衝撃波に、風馬は思わず目を閉じた。
ぶわりと髪が持ち上げられる。そのまま倒れそうになるのを、何とか踏ん張って耐えた。
そこで、身体の自由が戻っていることに気が付いた。
修験狸の意識が完全に雷雲の方に向いたんだろうか。そう思って、慌てて目を開ける。
そして、目の前の光景に愕然とした。

雷のドームが、そこにあった。

雷雲と修験狸を中心に、雷が二人を覆っている。

雷雲が意識的に出したのか、それとも自然とこうなってしまったのか。どちらにせよ、これでは二人に近寄れない。

中は雷の障壁にはばまれて影しか見えなかった。

雷雲の槌と修験狸の拳がぶつかり合っているように見える。影のみだが、拮抗しているように思えた。

「す、凄い」

両者一歩も引かない。動かない。否、動けないのかもしれない。

少しでも気を抜けば、このバランスは崩れてしまうだろう。気を緩めた者の敗北という形で。

もし雷のドームにはばまれてなくとも、風馬は手出しできなかったろう。

もし無理に手を出して拮抗を崩し、それが雷雲のマイナスに働いたら……

――そんなこと、考えたくもない。

「雷雲、雷雲、雷雲、雷雲」

負けるな、負けるな、負けるな、負けるな。

「雷雲！！」

風馬が叫んだとたん――

バアァァァァァァァァァァンッ

雷のドームは破裂した。

スパークの膜がばらばらと落ちて、地面に触れる前に消える。そんな光景を呆然と眺めた後、風馬は我に返った。

「ら、雷雲」

少年の名を呼び、はっきり見えるようになったその姿を見る。

雷雲は立っていた。

そして。

無傷、だった。

「あー、面白かった」

「……」

「いきなりドームできんだもん。これ凄ぇや」

「……」

「でもこれで俺の勝利！　うん、うん」

「……」

「あ、風馬。見てた？　俺の完全勝へぶっ！」

風馬は雷雲につかつかと近付き、その頭をどついた。

いつものように。

いつもより強く。

「こんの阿呆！　人心配させておいて、何だその気楽さはっ」

「え！？　心配してたの？」

「当たり前だ！」

「じゃぁ何でどつくんだよ！」

「おまえが度し難い阿呆だからだ！」

「さっきからアホアホって風馬でも許さね」

「あっはっはっはっはっはっはっはっ！」

雷雲の怒りは笑い声により遮られた。

風馬と雷雲は笑声の方を見る。笑っていたのは、やはり修験狸だった。

雷雲と違い、修験狸はぼろぼろだ。白い髭は焼け焦げ、服もぼろ衣同然で、肌にもところどころ火傷がある。

あの攻撃を受けてそれだけで済んだのは驚きだが、大ダメージを受けたことには違いない。

しかし大笑いをしている姿は、そんなことつゆにも感じられない。むしろこちらが負けた気分になるぐらいだった。

「いや……はは、すがすがしく負けたわい。こんな気分は何百年ぶりかのう」

「あんた……いくつだよ」

風馬がそう訊かずにはいられないような言い方だった。

「ん？　千数百ぐらいかの」

「な、奈良後期から平安初期にかけてぐらい、か？」

さらりと言われたとんでもない年数に、風馬の頬はひきつった。

「すげー……長生きだな、このじっちゃん」

そういう問題ではないぞ、雷雲。

風馬は内心でツッコんだ。

「はは……人間はいつも想像を越えてくれる。特におぬしらのような種類の者は……」

また収まらない笑いを無理矢理引っ込めたような顔で、修験狸はごほんとせき払いした。

「さて……約束じゃったな。わしに勝ったら、ある情報をくれてやると」

風馬と雷雲の間に緊張が走った。

そうだ。その情報が欲しくて雷雲はこの老人と戦ったのだ。

風馬はそれが履行されることに懐疑的だったのだが、ちゃんと守ってくれるらしい。

「……その情報とは、羽衣姫に関連することか？」

「うむ」

風馬の問いに、修験狸は重々しく頷いた。

「羽衣姫……あれは、あの者は、もともとは降魔武器などという悪しき存在ではなかった」

「え……」

風馬は目を見開いた。

そんなはずがない。どの文献でも羽衣姫は降魔武器と記されてい

る。人の魂を喰らう、凶悪にして強悪な武器だと。
だが、それに続く修験狸の言葉は更なる衝撃を与えた。
「羽衣姫は、その昔――人間じゃった」

雷撃、火炎、覚悟</t>下>

「戦ってる途中で悪いけど、質問してもいい？」
クナイを投げながら舜鈴は首を傾げた。
「……めんどくせぇから手短にな」
久遠牧師はクナイを弾いてあくびをもらした。そんな彼に、舜鈴は言う。
「貴方妖偽教団じゃないでしょ」
確定に近い質問だった。久遠牧師の動きが一瞬止まる。
その隙にクナイを放つと、生身の頬にかすめることができた。
「……何でそう思うんや？」
傷を付けられたことに怒っているのか、久遠牧師の顔が歪んだ。
「だって感じられないんだもの」
一方舜鈴は冷静である。冷静なまま、間合いを広げた。
「半妖特有の、狂熱が」
『傀儡姫』が久遠牧師の頭に刃の五指を振り下ろしたのはその時である。
「っく」
久遠牧師は腕を振り上げた。何とか防ぐものの、無理な大勢だったためにぐらりとよろめく。
舜鈴はそこを狙って手の中に仕込んでいた、毒を塗った針を放った。針は見事、久遠牧師のこめかみに当たる。
「っ……！」
「終わりだよ」
久遠牧師の身体が傾いた。眠たげだった目も今はこれでもかというぐらい見開かれている。

「実のところ、どこの誰かなんてキョーミ無いね。ただ邪魔者がいなくなればいい」
舜鈴は長い髪を後ろに払い、今度こそその場を後にした。
「ザァイジエン（さようなら）、どこかの誰かさん」

誰もいなくなった場所で、男は起き上がった。
「全く……容赦無いなぁ。こんなん羽根で防がな死んでたやん。せやからめんどくさいっつったのに」
どこかで戦っているだろう上司に文句を呟きつつ、男は面倒そうに立ち上がった。
「全く……先に退場すんで。はよ終わらせろよ」
喋るのさえ面倒だというような口調で、男はその場を去ったのである。

――――

猛は槍を片手で持ちながら走り出した。
「うおぉぉぉぉぉ！」
火炎をまとった槍を突き出し、亜紅太法師の腹を狙う。
「甘い、甘いぞ橘猛！」
だが亜紅太法師は、それを手の平で受け止めた。
「なっ……」
「未熟なおぬしに、それがしを狩れるものかぁ！」
亜紅太法師は受け止めた槍を猛ごと投げ飛ばす。猛は五メートルも吹っ飛び、地面に転がるはめになった。
「って……くそっ」
しかし猛も負けてはいられない。すぐ立ち上がり、槍の先を地面に突き刺した。
「地伏鋼槍（チフセコウソウ）」

ビキビキ、と地面の土が槍を覆った。
土は柄の半分ほどまではい上がり、その辺りで猛は槍を構え直した。
「鋼より硬い一撃だ。喰らえ！」
だんっ、と地面を蹴る。身を低くし、抵抗を最小限に抑える。
速く、速く、速く――
スピードと破壊力を持った攻撃が、亜紅太法師を貫く――！
「だから甘いと言っておるのだ」

バリィィィィィィィィィィィィィィン！！

槍を覆った大地の外殻が、亜紅太法師の一撃で砕かれた。
「五行思想というのを知っておるだろう？」
亜紅太法師は、呆然とする猛の顔に己の顔を近付けた。
「そこで言うておるではないか。地は木（もく）に勝てぬのだよ」
次に目の前に迫ったのは、木の五指。猛は反射的に身を縮めた。
「ぐぁっ……」
腕、脚、頬の肉を、何かがえぐっていく。目の前には、幾多にも枝わかれした木の指。
（指が、伸びてわかれたのかっ）
まさに木の枝のようにわかれ、伸びた指に身体をえぐられたのだと気付いた時には、遅かった。
「っあ゛……」
裂かれたのではなかった。えぐられたのでもなかった。
貫いていた。貫かれていた。腕を、脚を、手を、足を。
「脆いのう」
亜紅太法師は笑った。
くっくっと低く、卑しく。
「脆い、脆い。貴様の母も、これほど脆かったんだろうよ」
「……」

お袋。
お袋は、こいつのことをどう思っていたんだろう。
猛はぼんやりとした頭で考える。
怒ってたんだろうなぁ、理解できなかったんだろうなぁ。
俺も、理解できないや……
「さて、そろそろ殺してやろう」
亜紅太法師は笑みを深くした。
亜紅太法師。
この男が、元退魔師だなんて信じられない。
流亜（ルア）の裏切りも、未だに信じられない。
羽衣姫の身体がお袋だってことも信じられない。
この状況だって。
負けそうになってることが、信じられない。
何も……信じられない。
何もかも、信じれない。
――信じたくない。
「まずは、その母親の面影を残す顔を潰そうか」
亜紅太法師の背中からめしぃ、と音を立てて何かが突き破ってきた。
木だ。先が鋭く尖った、幹並に太い木の槍だ。
顔に突き出されれば、顔どころか頭蓋そのものが砕けてしまうだろう。
「貴様の顔を見ていると……それがしの気が収まらん。それに、これで橘の血も絶えることになる」
ぴしぴしと音を立ててながら、木の槍は振りかぶられる。
「死ね、橘猛！」
目前に穂先が迫っても、猛は動けないでいた。
そんな中で思い出すのは、死んだ家族のことだった。
――――

祖父は、生きた伝説だった。

壊れた封印からあふれ出た妖魔数百匹を、たった一人で倒したという。

嘘かもしれない。

でも嘘じゃないかもしれない。

祖父が多くの妖魔を倒したことは事実であり、またその子である母も、その実力を受け継いでいた。

なのに、俺は。

その二人の直系である俺は、十一歳になるまで武器を扱うことすらできなかった。

今だって弱い。

今だって、一生かかっても二人を超えられない自信がある。

それを聞いた父は「弱気で強気な自信だな」とわけの解らないことを言った。

俺はただ事実を見ているだけだ。

真実を言っているだけだ。

絶対だから、自信があるのだ。

なのに、どうしてこの『姫』は。

いっそ傲慢と言っていいほど気高いのに、なぜ俺を選んだ?

祖父でも母でもない。弱くて脆い俺を。

誰か、教えてくれ……

……。

……あぁ、そうだった。

いないんだった。教えてくれる人は、もう。

どこにも、いないんだ。

一人も、いない。

バキィィィィィィィィィィッ

折れた。

自分の動きを封じていたものを、折ってやった。

「！　な、なっ……」

亜紅太法師は目を見開いた。

かなりの硬度を誇っていた自分の木の指がまとめて折られたのだから、当然の反応だろうが。

「き、貴様……どこにそんな力を！」

「へ、へへ」

猛は笑いながら、振るった槍を持ち直した。この槍で、木の指を斬ったのだ。

木の指は両腕両脚に刺さったままだ。少し動くだけで皮膚に血がにじむのが解った。

「刺さったままでは動けんぞ……どちらにせよ、無駄なこと」

「抜くよりましだろ」

猛は顔を歪ませながらも槍を構えた。

正直なところ、痛みは折れた（実際は斬ったのだが）木の指を抜いた方が楽になるだろう。

しかしそうしてしまえば、辛うじて止まっている血が吹き出してしまう。

出血多量で死ぬよりは、傷の痛みで動きが鈍くなる方がいい。

勝機が、無くなるわけじゃない。

むしろ走馬灯のように頭の中で流れていった考えが『鉤槍姫』の使い方を思い出させてくれた。

ただ、まずは確認したいことがある。

「あんたさっき、五行思想の話したろ？」

「ん……？」

「それによりゃ、火は木に勝つはずなんだ。なのに何で、あんた俺の炎が平気なんだよ」

「……そんなことか」
亜紅太法師は馬鹿馬鹿しそうに答えた。
「簡単なこと。貴様の炎よりそれがしの方が強いだけだ。相性うんぬんではなく、ただの実力差だ」
「……そっか。なら安心だ」
猛がそう言うと同時に、ごっ、と炎が槍を包んだ。
「つまりはグーより強いチョキの方が勝つってことだろ？　なら強いグーに、俺がなればいい」
炎が膨れ上がった。猛の腕を飲み込み、肩まで覆う。
「我ながら情けねぇや。『鉤槍姫』に選ばれた理由を、今頃気付くなんてな」
「どういうことだ？」
「つまりさ」
猛は痛みに耐えながら腰を低く落とした。
「関係無ぇんだよ。強弱なんて。ようは『姫』が気に入ったかどうかなんだ。使用者としてじゃない、肉体としてふさわしいか……結局それだけのことだ」
炎がちりちりと、腕に刺さった木の指を焦がした。さっきはその炎も、ものともしなかったのに。
「『姫』の力を扱いきれるかどうかは俺達次第ってことだ。こいつらは協力なんて言葉を知らないからな」
「……わけの解らんことを」
亜紅太法師の身体からみしぃ、という音が響いた。
全身が変色していく。いや、覆われていく。
木の皮に。木そのものに。
「姫シリーズも、しょせんその程度。一度効かなかった技は結局二度と効かないのだ」
目の前にいたのは木の人形、否、木の人間だった。
目はある。人の形もしている。面影だって残っている。
しかしそれは、人間ではなかった。

「それが本性か……」
醜いな、と猛は呟く。
「調子に乗るな、小童が」
口らしき洞から、声が流れた。木の皮が割れるような声である。
「まぐれでそれがしの指と槍を斬っても、それはそれがしの脅威にならん」
「……あんた勘違いしてねぇか？」
今度は猛が馬鹿にしたように言い返す番だった。
槍の炎はもはや猛の首近くまでせり上がっている。
「今までの攻撃力が、『鉤槍姫』の本当の威力だと？　馬鹿馬鹿しいぜ……だって」
槍の先が、亜紅太法師に向けられた。
「姫シリーズは、いや姫シリーズに限らず、退魔武器は精神力を注ぎ込められてこそ真価を発揮する！」
だから受け入れなければ。
死も、現状も、何もかも。
何もかも――！
「今度こそ滅しろ、亜紅太法師！」
「今度こそ死ぬがいい、橘猛！」
互いの武器が振り上げられる。
「例えどれほど強くなろうと無駄！　それがしの身体はもはや鋼鉄などは比べ物にならん！！」
亜紅太法師は勝ち誇ったように叫んだ。
「さっき言ったろ」
猛はしかし、ふと冷静な顔付きになった。
「強いチョキには強いグーだってな――！」
槍はまだ届かない。まだ貫けない。
だが炎は、先んじて亜紅太法師を飲み込んだ。
「槍火炎舞・龍尾！」
槍から放たれた炎は、亜紅太法師の全身を包み込んだ。

「ぐ、あ、あぁぁぁぁぁ！？　こ、これは……」
「びっくりするぐらい火力が上がったろ。これも『姫』を受け入れたからさ」
姫シリーズは精神を乗っ取り、身体を奪う魔性の退魔武器。
己を保つために、使用者は『姫』の意志に逆らわなければならない。
だが同時に――受け入れなければならないのだ。
受け入れなければ、逆らい過ぎなければ、『姫』の力を解放することができる。
無論、身体を乗っ取られる一歩手前なのだが――しかし。
「あんただって解ってるだろ。半妖になることがどれだけ危険で、救われることがないか。俺達姫持ちだってそうだ」
槍からは未だ炎が放出している。
猛の気力を吸い出すように――
「いつ乗っ取られるか解らない。だけど、そうしてでも力が欲しい！　妖魔を狩る力が！！」
「……！」
「今度こそ」
ごぉっ、と炎が更に膨れ上がった。
猛の血のように、赤々と。
猛の復讐心のように、隆々と。
「消えろ！」
炎が火柱となって天を突き上げた。
「い、いや……だ」
火中の半妖は――木に意志を取り込まれた人間は悲鳴をもらす。
涙など無い。あったとしても、すぐに蒸発してしまっているだろう。
なのに――人外のその顔は、泣いているようだった。
「それがしは……おれは……しに、たくな」

ゴオォォォッ

炎が半妖の姿を隠した。微かに見えていた影も、やがて消滅する。
猛は無言で槍の構えをといた。すると、炎はあとかたも無く消える。炎が燃え盛っていた跡すら残らない。
あるのは灰だ。
人のものでも半妖のものでもない。
木の――灰だった。
「う、ぐ……」
猛は槍で自分を支えるように立っていたが、やがて力無く膝を着いた。
手足の傷が酷く痛む。だがそれより、心が痛かった。
今にも折れそうで、しかし折れれば『姫』に身体を乗っ取られる。
これからはこの痛みにも耐えねばなるまい。
退魔師として戦う限り、退魔師として生き続ける限り、ずっと。
でも今は。
からん、と乾いた音を立てて、槍が手から落ちる。顔が歪むのを感じると同時に、視界がぼやけた。
「……親父、お袋、みんな」
退魔師としてではない。一人の少年として、親を亡くした子供として、猛は泣いた。

――――

この状況をどう理解できようか。
紗矢は痛む腹を押さえた。痛みからして、あばらにひびが入ったかもしれない。顔にはさほど出てないだろうが。
「しかし……まいった」
口調はのんびり、声はかすれがちに、紗矢は呟いた。
「まさかこんな展開になるとは。王道なのか邪道なのか、よく解ら

ない」

目の前の少女には何を言っても、無駄かもしれない。こんな意味の無い会話に反応できるとは思えなかった。

「目を覚ませ、と言っても聞こえないだろうなぁ、当然」

そんな声に応えたわけではないだろうが、少女は武器を持ち上げた。

『姫』の名を冠する、その鉄球を。

第二十五話　紅蓮の虚無<上>

誰かといた記憶なんて無い。
身体は常に誰かの傍にいたけれど、心が誰かと接したことは無かった。
恋をしても、心を奪われることは無く。
友ができても、心から信頼することも無く。
初めはこの能力（ちから）のせいだと思った。だが、すぐ違うと悟る。
問題は、自分の心のありようだったのだ。
何かを厭（いと）い、何かを嫌い、何かを憎み。そんな自分が、他人に心など許せるはずがない。
他人が等しく同じに見えた。それは聞こえはいいけれど、ようは誰も彼も特別に見えないということだった。
無論家族も例外ではなく。
大好きな父も、大嫌いな母も。
感情を持った肉の塊にしか見えなかった。
それが彼女のあり方。
西野紗矢（ニシノサヤ）という、一人の人間の心のありようだった。

――――

紗矢はぼろぼろになりながらも、状況をじっと分析していた。
目の前にいるのは文菜（フミナ）である。自分と同じ姫持ちで、自分と同じく気付けば知らない場所に放り出されていた少女だ。
その文菜が、自分に攻撃をしかけた。両手に姫シリーズが一つ――『打球姫（ダキュウヒメ）』を使って。

「催眠術、か。何でもありだな、ここは」
血の混じった咳を吐きながら、紗矢は文菜の後ろに立つ女性を睨み付けた。
黒いコートをまとった、妖艶な美女だ。ウェーブがかった黒髪が、白い肌を映えさせている。
白い肌。日本人とは違う、純粋な白。
「日本人、いや、アジア人じゃあないね」
「ええ、そう。薔薇司教（バラシキョウ）っていうの、よろしくね」
女――薔薇司教は赤くぽってりとした唇を緩めた。
「ふぅん、そう。あたしは西野紗矢だ。まぁ、一応よろしくと言っておこう」
言って紗矢は、先程のことを回想していた。
ここに転移させられたと思ったら、いきなり目の前にこの女が現れた。
そして驚いて動けない文菜の目を覗き込んで、女は言ったのだ。
貴女は私のお人形、と。
そう囁かれたとたん、文菜は鉄球を紗矢の腹に投げつけた。
とっさに杖で防御したものの、家屋がばらばらになるほど強く叩き付けられ、しょっぱなから大打撃を受けてしまった。
しかも味方の手で、である。全く笑えない冗談だった。
しかしこれは冗談ではない。現実だ。
「しかし強力な催眠だ。目を見ただけで操るとは」
紗矢が立ち上がりながらそう評価すると、薔薇司教は笑みを深めた。
「ありがとう。まぁ驚いていたし、その娘がそういうことに関しての防御が全く無かったから、というのもあるけれど」
「謙遜するな。それは日本人の専売特許だ」
「これでも身のほどはわきまえているわ。もっとも」
薔薇司教が身を引くと、操られた文菜はずいっと前に出た。
「貴女達より、ずっと高位にいる人間であることは、自負している

わ」
鉄球が地面から離れた。
ぶんぶんと鎖を使ってそれを振り回す文菜に、さすがに紗矢は顔をひきつらせる。
「どんな怪力人間だ」
ツッコミに応える者などいるわけがなく。
鉄球が顔面めがけて投げられてきた。
「……っ、う、あ！」
それをなんとか避けるも、すぐさま二つ目の鉄球による第二撃が来る。避けられはしたものの、紙一重だった。
「っくそ、あたしは肉弾戦は苦手なんだっ」
紗矢は悪態をついて地面に手を置いた。
ボコッと文菜の足元の土が盛り上がり、彼女の足を固定した。
更に紗矢がイメージを膨らませると、今度は太いつるが地面から飛び出し、文菜の腕に巻き付く。
僅か一秒足らずで、紗矢は文菜の動きを封じてみせた。
「っ……！」
「だからこうやって、トラップを『創造』させてもらった」
紗矢は杖を持ち直した。
「……この程度でその娘の動きを封じたつもり？」
一度は驚いたように目を見開いた薔薇司教だったが、すぐ余裕を取り戻した。
「催眠は、ただ操るだけじゃない。身体のリミッターを外したりすることも可能なの」
「リミッター……？」
紗矢は一瞬眉をひそめたが、すぐに思い至った。
「まさか！」
声を上げるのと同時に、ぶちぶちとちぎれる音が耳に届く。
文菜だ。文菜が引きちぎっていた。
人間の腕ほどもあるつるを、力づくで！

「っ……なるほど」
催眠術というのは、本来眠気をもよおすための術である。
眠いという思いを、脳に直接働きかけて呼び起こすのだ。そして軽い眠りにおちいった者を自由自在に操ることも、まぁ不可能ではない。
例えば、普段人間が無意識にかけているブレーキ――肉体の枷（かせ）を外すことも、できなくはない――！
「……だが、それは外しちゃいけないリミッターだろう。身体が耐えきれない」
「そうかしら。まぁ、確かに身体ができあがっていない子供の骨格や筋肉は無理かもね。けれど」
薔薇司教は微笑を冷たいものに変えた。
「例えば大人の身体なら、場合によっては大丈夫かもよ。貴女ぐらいの年齢ならね」
「……あいにくインドアな引きこもりでね。筋力はともかく、体力は平均以下だ」
トラック一周分でも息があがるぐらい、と紗矢は力強く言う。そこで力強くなるのは、自分でもどうかと思うが。
「じゃ、貴女はどうやって戦うつもり？」
「そうだな。得意分野で戦う」
「得意分野？」
「あたしが得意なのはボードゲームと」
紗矢は上着のポケットから、一枚の呪符を取り出した。
人型の呪符。だが、使うのは式神ではない。
「創り出すことだ」
呪符がぐにゃりと歪んだ。膨らみ、伸び、人の形に、人の大きさになる。
やがてそれは、一人の少年へと姿を変えた。
「んー……あーっ。ひっさびさのシャバだー！」
変なとこだけど、と黒衣の少年は頭をかいた。

「で？　殺しちゃいけないっていう縛りアリであの女倒せと？」
「そうだよ、ツバサ」
紗矢は頷きを返す。
そして、もう一人の自分に命令を下した。
「思いっきりやれ。ただし手加減しろ」
「矛盾含んだ命令、ありがとさん」
そう言って少年はぎぃ、と笑った。
純粋な、しかし邪悪過ぎる笑みを。

――――

炎の刃が、伸びる伸びる。
「お、お、お、おぉぉ！？」
獏僧（バクソウ）はこれでもかというぐらい顔をひきつらせた。
炎の刃を放つ小刀を持つ流星（リュウセイ）は、高さが五メートルほどになったそれを振り下ろした。
獏僧の頭上に容赦無く落ちる炎刃。獏僧は転げるようにそれを避けた。
しかし、地面すれすれで流星は刃の軌道を変える。
巨大になったのは炎のみ。炎を宿す小刀――『煌炎（コウエン）』の質量は変わらない。だからこその芸当だった。
「ぐ、おぉっ……！」
結果、炎から逃れられなかった獏僧は、炎に全身を包まれる。
「……っのやろ！」
しかしそれは一瞬だけだった。
全身をぶ厚い皮で覆った獏僧は、炎から飛び出して流星に突進した。
「！　あぐっ」
腹にそれの直撃を受けた流星は、後ろにごろごろと転がった。
追撃を恐れて立ち上がるも、しかし獏僧は来ない。

突進の姿勢から自然体に戻って、そこから動かなかった。
「……？　おい」
「おまえよォ」
と。先に獏僧が口を開いた。
「やる気あんの？」
「……は？」
「やる気が感じられねェつってんの。俺を殺す気、あんのかよ？」
「殺す気なんて無ぇよ。倒す気はあるけどな」
「戯言（ざれごと）、世迷い言、綺麗ごと、だな」
獏僧はせせら笑った。
「相手が何者か解ってんのか？　妖魔だ、半妖だ、化物だ。見ろよ、この姿」
彼は灰色の厚い皮に覆われた醜い自身の姿を指差した。
「自分で言っちゃァなんだが、正直人間じゃねェ、おぞましい。百人が百人、化物と言うだろうさ。そんな奴を殺すのは、世のため人のためだろうが」
なのに、と獏僧は流星をいぶかしげな顔で睨み付けた。
「何で殺さない。何で狩らない。人の姿をしてたからか？　人の言葉を話すからか？」
「……両方、だと思う」
流星は苦々しげに言った。
「殺さないんじゃない、殺せないんだ。狩らないんじゃない、狩れないんだ。そうすることを、自分が拒否してるから」
「はっ……。甘ったれもここまでくると、馬鹿以外に言葉が無いぜ。教えとくが鬼童子」
獏僧は両手を地面に着けた。
「殺さない奴より、殺す奴の方が強いんだぜ」
「……」
「だってよ、殺す奴は加減する必要を持たねェからな！」
太い腕を振り上げて再び突進してくる獏僧に対し、流星は静かに

息を吸い込んだ。
「ふっ」
そして短く吐き出す。同時に右足を軸にして、左足を振った。
回し蹴り。それは、綺麗に猿僧のこめかみにヒットした。
「ぐ、おっ」
「なら俺も、死なない程度に手加減しねぇよ」
よろめいた猿僧の脳天に、同じ足で今度は踵を炸裂させた。二度も頭に鋭い足技を喰らわされた猿僧は、白目を剥く。
そんな彼に追い討ちをかけるように、流星は腹に更に蹴りを入れた。
猿僧は身体をくの字に曲げて吹っ飛ぶ。平屋の入口の扉とぶつかり、地面に倒れ込んでしまう。扉の方はばらばらに砕けてしまった。
「げほっ……お、おまえ、戦いはほとんど素人じゃ」
「戦闘経験はあんま無ぇけど、技術はあんだよ」
流星はにこりともせずに言い放った。
「構えは『煌炎』があるからできないけどな。これでも俺は、空手黒帯なんだよ」
「っ……！」
「おまえ、殺す奴は強いったっけ？」
流星は笑わないまま、両足を広げた。
「あいにく殺さない奴は……それより強いんだよ」
「……はっ、ほざけ！」
猿僧は立ち上がり、唇を歪めた。
「殺してやるよ。殺してやる殺してやる。俺自身の家族みたいになァ」
「何……？」
「言ってなかったか？　上にある家の家族、いや元持ち主の家族って言った方がいいか？　そいつらは俺の家族だった」
猿僧は親指を黒い空に向けた。
「そしてそいつらを殺したのは、俺自身なんだよ。表向きには、俺

も死んだことなってるけどな」
　獏僧は何てことはない、日常の一部を話すかのように続ける。
「別にこれでおまえの心をどうにかしようって考えてんじゃねェぞ？　ただ俺とおまえは似て非なる者だって言いたいだけさ」
「……」
「妖魔に家族を殺された者と妖魔になって家族を殺した者。共通してるのは家族がいなくて妖魔がそれに関わっているってことだ」
「……何が言いたい」
「無意味な話さ」
　獏僧は肩をすくめた。
「おまえと解り合えることも、こうして話すことも――言ってしまえば、こうやって向かい合っていることも、何もかも無意味だ。無意味で、無意味で、無意味だ。俺にとって、存在するもの全てが無意味だ。俺もおまえも、世界すらな」
「……スケールでかいんだか何だか」
　流星はあきれ声を上げた。
「じゃ、この無意味な話はやめようぜ。どうせ決着着けなきゃならねぇんだ」
「ああ。まァ俺にとっちゃこの戦いも、その先の決着も、全部無意味なんだけどな――！」
　獏僧はだんっと地面を蹴った。
「先に言っとくぜ鬼童子！　俺はおまえより弱い！　戦う能力なんてほとんど無ェ！　だから」
　太い腕をかいくぐり、流星は平手を放った。胸にそれを受け、獏僧は顔を歪める。
　しかし、口は笑みの形を保ったままだ。
「勝つために、殺すために、策略を巡らす！」
　獏僧が後ろに倒れる。あっさり、あっけにとられるほどたやすく。
　倒れて――消えた。

流星は目を見開いた。
獏僧の背中が地面に着いたとたん、その姿が煙のごとく消えたのである。
まるで映し出されていた映像が急に消えたような唐突さだった。
「一体どこに……！？」
「何言ってんだ。俺は目の前にいるぜ」
獏僧の声に、流星は顔を上げた。
だが――誰もいない。
「っ……どこにいるんだ！？」
「だから……目の前だっての！」
「！　がっ……！？」
突然腹に痛みが走った。
腹痛ではない。今、殴られた感覚があった。
腹の中心を打たれ、流星は膝を着いた。
「さっきのお返しだ」
前髪が掴まれた。顔が無理矢理上げられる。しかし、正面には誰もいない。
誰も、見えない。
「ま、まさか……透明に！？」
「ご名答。……と言いてェところだが、違う。認識できなくしたのさ」
獏僧の声だけが、流星の五感にひっかかる。
その他の感覚は獏僧の存在を全く、彼の言葉通り認識できなかった。
「俺は夢魔とかけ合わされた半妖だ。夢魔は夢を操る妖魔だ。その力の応用で、脳に少し働きかけるぐらいわけねェ」
「そ、んな」
「そして」
前髪を掴んでいた力が消えた。流星は両手を地面に着く。

身体を起こし、そして――

そして肩を貫かれた。

焼け付くような痛み。穴が開いた感覚。そして、顔にかかる自分の血。

「な、ぐ、あぁ！」

「今俺は、おまえの右肩を隠し持ってたナイフで刺した。ナイフも勿論、認識できないようにした」

「っ……」

「全てが全て、脳に働きかけられるがゆえだ。そしてその気になれば」

突然だった。

流星の視界が、黒に塗り潰された。

「……！？」

「五感の一つを、奪うこともできる」

猿僧の、笑みを含んだ笑い声が鼓膜を揺さぶる。

しかし視界は――閉ざされたままだ。

「っ……！」

「目が見えず、傷も負い……これでもなお、俺を倒すとほざくのか？」

肩を押さえる流星の傍で、かつ、と足音が鳴った。

「そんなの……正直者に言えや。俺にはそれは、無意味にしか聞こえない」

紅蓮の虚無<中>

刃同士がぶつかり合う。何度も、何度も。
まるで観客を前にした剣舞のごとく、悠と熾堕の剣筋は乱れも崩れもしなかった。
片や日本刀。
片や洋刀。
形状の違う武器はその扱い方さえ違うが、二人に共通するのは一つ。
互いの剣術が、もはや達人という言葉さえ生やさしいほどのレベルに達しているということだ。
どのような武器にも弱点はある。二人はその弱点を利点に変え、変えれぬ部分は己の技術で補う。それはすでに、一つの芸術のようだった。
ゆえに決定打をかき、消耗戦が繰り広げられている。
「全くもって信じがたい。定命の者がこれほどの技術を得られるとは。刀の力だけではあるまい」
熾堕は感嘆の声を上げた。まだ余裕がある証拠だろう。
対し、悠は。
「ふん。まるで自分は永遠の命があるかのような言い種だね」
そう返したのは、強がりである。肉体的にも精神的にもぎりぎりだ。
と。ひときわ大きな剣戟音をあげて、二人の距離が大きく開いた。
刃をぶつけた反動で靴底をすべらせながら下がり、互いに構え直す。
「いや、永遠の命ってわけでもないんだが」

熾堕の言葉が先程の自分の言葉の答えだと気付き、悠は息を整えながら首を傾げた。
「だが――何？」
「……寿命が無いんだよ。外部からの干渉がなければ、俺は死なない」
熾堕は心底それが嫌だというように、ため息を一つついた。
「消えるべき星が、元より俺には無いんだ。この肉体も借り物だしな」
「借り物？」
「身勝手ながら死者の身体をな。そうやって、俺は身体を換えてきた。本来俺には肉体が無い。地上に存在するには、そうするしかないんだ」
「精神体ってこと？　その姿も借り物？」
「いや、容姿に関しては俺自身のものだ。こんな銀色の髪と瞳の人間なんているわけないだろう。二次元じゃあるまいし、馬鹿馬鹿しい」
「……ふ。確かにね」
悠は笑って――だんっ、と踏み出した。
「心ゆくまで戦いを楽しもうって気は無いんだよ。早々にかたを付ける」
「同感だ。いくら会話しようが、どっちかがどっちかの味方になるなど、ありえない」
そこで熾堕はぽつりと、悠に聞こえないような声でぽつりと呟いた。聞こえたとしても、現時点での悠にそれを理解することはできない。
「今は……な」
その後すぐ、熾堕はレイピアを振るった。振るうと言っても刺突に特化した剣だ。それは空気をかきわける――否、裂きわける鋭い突きだった。
悠は突っ込む姿勢から無理矢理立ち止まる姿勢になる。そして喉

を貫きそうなその突きを、刀の腹で受け止めた。
普通なら刀身は折れていたろう――折れなくともひびは入るはずだ――しかしそれを、防ぎきった。
千年という年月を経てなお、妖刀としての力を失わない『剣姫（ツルギヒメ）』だからできた芸当だった。
悠は防いだだけで動作を終わらせない。刀を動かし、熾堕の剣先をずらした。
ギギギギッ、と金属がこすれる音と火花を上げ、熾堕の剣はあらぬ方向に向く。
「っ……！？」
自分の狙った場所から大きく外され、熾堕の目が見開かれた。
後から思うと、これが彼の最初の驚き顔だったかもしれない。
完全に剣筋をそらされ――熾堕は横に振り切った体勢になった。
大きな隙がある体勢。自分が作ったその隙を、悠は逃さない。
熾堕の懐に入り込むように――
熾堕の心臓を刺した。
「……今更何をしている？」
熾堕の声の調子は変わらない。胸を貫かれているというのに、苦悶の表情も浮かべない。
ただただ無表情、ただただ無感動。
悠を見下ろす目は、何の感情も交えられてない。
「これで俺を殺せると？」
「これだけじゃ無理だろうね」
そう言った悠の刀から、ぱちり、と何かがはじける音がした。
「別に、呪術は恭兄の専売特許じゃないんだよ。私も椿家末子として、一定のレベルまで達している」
ぱちぱち、と弾ける音が、ばちばちとはぜる音に変わり。
「外からどれだけ攻撃しようと、貴方は再生する。なら、内側から全身を貫いたら……どうなる？」
「っ……！」

「これは『剣姫』独自の技じゃなく、椿家独自の呪術だ。刃に雷を宿らせる呪術で、名は」
電撃が、内側から熾堕を焼き貫く――！
バチバチバチバチバチバチバチバチィッ
カッ、と刃が光ったかと思うと、耳の奥が痛くなるような爆発音が響き渡った。
それは全て――熾堕の中ではぜていく。
「――電花裂刃（デンカレツジン）」
悠は小さく、雷（いかずち）の音どころか剣が落ちる音にすら負けるぐらい小さく言った。

――――

現れた少年――紗矢のもう一つの人格であるツバサに、しかし薔薇司教は特に驚いた様子は無かった。
「それでその娘を倒すのかしら？」
「倒す？　ツバサに倒せと言ったら殺せという意味になってしまう」
「あら……」
薔薇司教はすぐに、紗矢の言葉の意味を理解したようだった。目を瞬いた後、不思議そうに首を傾げる。
「だったら……それと戦うのは私なのかしら？」
「そーゆーことだ！」
答え、そして踊り込んだのは、紗矢ではなくツバサだ。その手に大剣を持ち、薔薇司教に振り下ろす。
武器らしいものも何も持っていない薔薇司教は、後ろに跳ぶことで回避した。
「私も戦闘そのものは苦手でね。けれど、しかたないかしら」
薔薇司教のコートのそでから、するりと棒が飛び出した。

いや、棒ではない。どうやってコートの内に忍ばせていたかは解らないが、それは二メートル弱ほどの槍だった。

紗矢は思わず「異次元にでも繋がっているのか」と呟いてしまう。

今はそんなこと考えている暇は無いが。

「ところで、貴女はどうするの？　その娘に勝てる自信はあるの？」

「いやぁ、ケンカは強いんだがなぁ」

薔薇司教の問いに、紗矢は頬をかいた。

「実戦はどうかな……命のやり取りなんて、性に合わない」

「ならなぜ退魔師になったのはなぜ？」

「贖罪（しょくざい）のためだよ」

更なる問いに、紗矢はあっさり答える。迷う必要の無い質問だからだ。

「あたしは母を殺した。殺してしまった。一生消えることの無い罪だから、一生かけて罰を受けるつもりだ」

「……人は原罪というものを、産まれながらに背負っている」

急に、薔薇司教の口調がさとすようなものになった。

その変わりように、紗矢は目を瞬く。

「救われるためには、主（しゅ）に祈るほか無いのよ。主に祈り、主に仕えなさい。さすれば修羅の道を歩まずとも済む――」

「くだらない」

紗矢は一言（いちごん）の元に切り捨てた。

「それは信仰心厚い人間――人種に問うべきだ。日本人、少なくともあたしに通じる文句じゃない」

「……」

「だいたいその言い振りといい、心の中で渦巻いている考えといい、一体何者だ？」

「……あぁ、貴女心が読めるのだったわね」

薔薇司教は槍を構えた。

「別に私の心を読んで生かしておけないとかそういう展開は無いけれど……これ以上相対するのは得策ではないわね」

「得策でないと言うなら、あたしに催眠術をかけなかった時点で失策だ」
紗矢は杖を持ち上げた。
「催眠術を解くことはあたしにはできないし、かと言って特別強いわけでもない。けれど、強みがないこともないんだ」
「どういう意味？」
「こういう意味だ」
紗矢は走り出した。
さほど速くない走りだ。同じく突っ込む文菜の方がよほど速い。
しかし先手を取ったのは紗矢だった。
杖で攻撃するのではなく、足を上げたのだ。振り上げられた足は、文菜の側頭部に打ち込まれる。
当然文菜は衝撃に耐えられず、倒れ伏す。気絶には至らなかったようだが、受けたダメージは大きいようだった。
「な……」
「よそ見すんなぁ！」
目を見開く薔薇司教に、ツバサが大剣を振り下ろす。
薔薇司教は槍でそれを受け止め、そのまま槍を振った。
ツバサの身体が横に投げ出される。そこへ薔薇司教は槍を突き出すが、ツバサはぎりぎりで回避した。
正直二人――というかツバサから離れるのは術的にまずいので、紗矢は二人との距離をせばめた。
「操られたと言ってもあの一瞬だ、たかが知れてる。どれほど強力だろうと完全に操られるわけでもない。それは貴女もよく解っているはずだ」
紗矢は、今度は杖を下段に構えた。まるで剣の構えのように。
「それに人間は本能的に殺しを忌避する。支配下に置かれようとな。実際催眠で操った人間に殺しをやらせて失敗したなんて例がある」
「よく知っているわね」
薔薇司教は、今度は驚嘆したようだった。賞賛の言葉を向けてく

る。
「その通りよ。そもそも私は長時間に渡って催眠をかけるタイプなの。一、二秒では完全に支配するのは無理ね」
長期間でなく長時間。
つまり、数時間で人間を支配下に置けるということか。
「同じ人間なのに恐ろしいな」
「確かに人間だけど、同じというのはいただけないわね。――それより」
薔薇司教は少しだけ首を傾げた。
「貴女の攻撃がそこに効いたのはどういうこと？　その娘が無意識に手加減したと言いたいのは解るけど、それにしたって戦闘能力には差があるはずよ」
「簡単だ。あたしが本気を出せばいい」
あっさりと答える紗矢。
「元々手加減なんて器用な真似、あたしもできないんだ。ただまぁ哀しいことに、非力だから殺すことはない」
「けど怪我はまぬがれないわよ。その娘も、貴女も」
「そんなの、どうでもいい」
薔薇司教の言葉は、ばっさり切り捨てた。
「あたし自身の怪我をあたしは気にしたことは無いし、その娘を傷付けることに、あたしはためらいを覚えない」
紗矢は己の声がどこまでも平淡で、冷淡で、淡々としていたのを自覚していた。
だからこそ、本気と解ったらしい。薔薇司教はあ然とした。
「貴女、それ、もしかして」
「……くだらない」
紗矢はため息をついて、先程と同じことを言った。
「優しさだとか、情けだとか、容赦だとか、生きるのに必要なんだろうか。いや、人間としては必要だけど、ただ生きるのには必要無いじゃないか」

人間の美徳を全否定する、投げやりな言葉なのは解っている。
元々、自分はそういう人間だと、紗矢は自己分析していた。
それは彼女の能力に起因しているのかもしれない。
人の生き筋を、人の心を、人の記憶を、読み、感じ、知る。
それらを感じていく内に、紗矢の心の一部は壊れてしまった。
その壊れた一部分で形成されたのが、ツバサである。
そして一部分の心を失った紗矢は、人らしさも失ってしまった。
壊れたのは五歳の時。
形成されたのは十歳の時。
失ったのは十五歳の時。
感情が無いわけじゃない。
常識も道徳も理解している。
ただ、足りないのだ。
人としての何かが、人間としての何かが。
それが何かは解らないけど、これだけは言える。
自分は、人間としとの『欠陥品』なのだと。
「あたしは壊れた人間だ。酷いとか、非情とか、そんなものじゃない。そんなレベルじゃない。だって、仲間を力いっぱい蹴っても、何も感じないんだから――」
紗矢は起き上がった文菜に更なる蹴りをあびせた。
今度は肩。紗矢の腕にも鉄球がかすめたが、大して気にならなかった。
本来足技が得意な自分だ。腕が使えなくなろうがかまわない。杖を掴めれば充分だ。
「……なるほど、ね」
薔薇司教は何かに納得したように呟いた。
彼女もまた、ツバサの猛攻にあっている。その状態でも話す余裕はあるらしい。
「確かにためらわないというのは重要なことよ。でも、催眠はどうするの？　『キーワード』を言わなければ、その催眠は解けないわ

よ」
「……」
紗矢は答えない。代わりにツバサの攻撃は激しくなった。
紗矢もまた、文菜に連続して蹴りをあびせる。しかし体力は元よりそれほど無いため、息が上がってきた。
それに怪我を気にしないとはいえ、攻撃は防御する必要もある。
それもだんだん防ぎきれなくなってきた。
だが、まだもう少し。
もう少し時間がかかる――
ガゴォッ
鉄球が紗矢の肩をかすめ、嫌な音を上げた。
「っ……！」
肩から指先まで至る激痛。どうやら肩をやってしまったらしい。
だがすぐその後、紗矢は『キーワード』を見付けた。
身体を文菜に密着させ、それを耳元に囁きかける。
「『Ｔｈｅ　Ｄａｙ　ｏｆ　Ｊａｄｍｅｎｔ』」
「……！」
文菜の瞳に、みるみる内に光が戻っていく。戦闘体勢は解かれ、鉄球はごとりと地面に落ちた。
「え、あ、あれ……？」
文菜は目をぱちぱちさせた後、紗矢のぼろぼろ具合に気付いたのか絶句した。
「なっ、何が……」
「説明は、悪いけど後。ツバサ、一気に倒せ！」
「了解ぃ！」
待っていたといわんばかりにツバサはスピードを上昇させた。互角だったはずの速度に一気に差を付けられ、薔薇司教は目を見開く。
「く、まさかこれを出したのは私の脳内を探るため……っ」

「そうだ。何かに集中している脳は読みやすいんでな。まさかキーワードが『最後の審判』とは思わなかったが。それに読み取った記憶といい、貴女は一体何者なんだ!?」

紗矢は声を荒げて、少しずつ息を乱れさせていく薔薇司教を問いつめた。

催眠を解くキーワードを薔薇司教の脳から探す際、紗矢は妙な記憶を目にしたのである。

正直言って、それは理解不可能な記憶だ。信仰心の無い紗矢にとっては。

「そう……どこまで読んだかは解らないけど、それなりに深くもぐり込んだようね」

薔薇司教は自ら身を後ろに投げ、ツバサと距離を取った。

「なら長居は無用だわ。元より経過を見るために入り込んだんだもの……これ以上は益無いわ」

そう言った薔薇司教の足元が、どぶりと沈んだ。

まるで彼女の影が底無し沼になったかのように、足からずぶずぶと飲み込まれていく。

「あれは……！」

「私達の時と同じ……」

紗矢と文菜が驚きと共に呟くのを受け、薔薇司教はため息をついた。

「貴女達を殺すという選択もあるけど……そうなると退魔師全員を殺さなくちゃなくなる。それは私の実力じゃ無理ね」

「逃げる気か！」

「そうね。これはまごうことなき逃走ね。でも『私達』は私を失うわけにはいかないから、しょうがないことよ」

そう言っている間にも、薔薇司教の身体はどんどん沈んでいく。

もはや胸から下は見えなくなっていた。

「それじゃあね。さようなら。またいつか」

別れの言葉を口にして――薔薇司教は姿を消した。

何も無かったように。
何もしなかったように。
ためらいも躊躇も無く――消え失せた。

「え、な、何で……？」

猟僧は驚いていた。

彼の姿はこの青年には見えない。

見えないどころか――そもそも彼は、視界を封じられている。

なのに、どうして。

どうしてこいつは、俺のナイフを受け止められた――！？

「お、おまえ、見えて……！」

「見えねーよ。目の前真っ黒だし、つかそもそも、理屈解らねーし。俺文系脳だから理科なんてさっぱりだしよ」

いや、理科関係無いから。

そんなツッコミを加える余裕は、今の猟僧には無い。

武器を捕まれ、動きを封じられたのだ。ナイフを離すという考えもあるが、自ら武器を捨てるという行動に移す気にはなれなかった。

対する青年――流星は、ナイフを素手で掴んだために、その手からだらだら血を流していた。

しかしそもそも肩に大怪我を負っているのだから、それくらい些末なことである。

問題は、なぜ流星は目が全く見えない状態でどうして猟僧の攻撃を受け止められたか、だ。

しかし説明しろと言われても、それは流星にはできないらしかった。

「何でか……解ったんだ。感じたって言うべきか。ナイフがどこから来るか、俺は何となく解ったんだよ」

そんな感覚的なことで、説明も何もあったもんじゃない。

しかし、流星は知るよしも無いが、それはちゃんとした理由があった。

鬼童子。人でありながら鬼の力を宿す人間。流星もその一人である。

その力の片鱗が、表面化しているのだ。

自分に向けられる殺気を、同族の臭いを、彼は本能で感じられるようになっているのだ。

――もっとも。

殺気に敏感なのも妖魔の気配を感じられるのも、以前から持っている能力である。

だが、鬼童子の力が目覚め始めているためにそれが強化されているのだ。

それに流星が気付くのは、まだ先のことであるが。

「それより、この様子だとナイフ、まだ持っているよな」

「っ……！」

「見えなくても、方向が解れば充分だ」

流星に煌炎を握り直した。刃に再び炎が灯る。

今の流星にそれを見ることはできないが、イメージすることはできる。

「や、やめ……」

獏僧はナイフを手離した。しかし、時すでに遅しである。

ゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ

炎が獏僧を包み込んだ。

――――

獏僧は回想する。どうして自分はこんなにも無意味なんだろうと。

初めての殺しは二十歳の誕生日だった。プレゼントは何がいいと

訊く家族を、命と言ってナイフで喉をかき切った。
特に意図があったわけではない。ただ、そうしたかっただけ。無意味な考えだ。
それ以降は説明する必要が無く、また説明する意味も無い。
ただ言うなら、殺し続けた。
ニュースになる殺しからニュースにならない殺しまで、頼まれた殺しから頼まれない殺しまで、ただただ殺し続けた。
そこに意味があるとは言わない。あるはずない。
人間は生きるために生きて、殺すために殺して、死ぬために死ぬのだから。
意味など無い。自分が人間であることにも、全くもって意味が無い。
だから自分は——化物になった。

猟僧はせき込んだ。
焼け焦げた身体は、家屋の残骸の上からぴくりとも動かない。動くのは、目と口ぐらいだ。
「……よォ。目ェ見えるようになったか？」
目前に立った青年に、猟僧は声をかける。
青年——華凰院流星は顔を歪めていた。
哀しそうに、何かに耐えるように。
「何だよその顔。自分で倒しといてよォ」
「……」
流星は黙ったままうつむいた。
「……やっぱ、戦うのは気持ちいいもんじゃないな」
「あ？」
「空手の試合とは違う。どっちかが折れるまで戦わなきゃいけない。そんなの、苦し過ぎる」
先程まで感情を失ったような顔をしていたのに、今は決壊したよ

うに表情を大きく動かしていた。
傷の痛みによるものか、または別の要因なのか解らないが、しかし。
「おまえってさ……普通だな」
素直な感想を、獏僧は素直に述べた。
「異常なぐらい普通だ。世間一般からかけ離れてるぐらい普通だ。他の奴らは、もっと酷いぜ」
獏僧はさとすような口調で喋り始めた。
無意味な話を。
「みんな俺みたいな人殺しは極刑になって当然だって考えてる。死ぬしか罪はつぐなえないと思ってる。実際は、国が俺みたいな奴と同じことしてるだけなのによ。それにだ」
獏僧はいつになく饒舌だった。
感じているのだ。解っているのだ。
自分の命が、あと僅かしかないことに。
「俺みたいな奴に、いちいち感情移入してたら、おまえが耐えられないぜ。おまえは死刑執行されるたびに苦しむのか？　それと同じだぜ、おまえの今の気持ちは……」
「……」
「ぶはっ、何つー顔だよ。そんなに目の前で俺が死ぬのが、嫌か」
流星も気付いているはずだ。自分がいずれ死ぬことを。
視界がかすんでいて見えないが、自分の身体は目に見えて朽ちてきているはずだから。
「あんたに限った話じゃない」
と。流星は顔を歪めてそう言った。本当に今にも泣きそうだ。
「俺は目の前で人が死ぬのが、例えどんな奴だろうと嫌なんだ」
「へェ……化物の俺を人と言うか。言っとくが、人間の姿をしようと、言葉を喋ろうと、結局俺は半妖という化物なんだぜ」
「俺には人間にしか見えないけど」
集中して見ていたはずの流星の顔も、獏僧には見えなくなった。

時間が――寿命がもう、残されていない。
「だってあんた、生まれた時は人間だったんだろ。身体はもう人間じゃないかもしれない。けど心は、本質は変わったわけじゃないだろう」
「……」
「それに俺からすりゃ、無意味だとか、自分は化物だとか、そんなこと言ってる時点であんたは人間だ。本当にあんたが化物なら、そんなこと考えもしないだろうからな」
「……ブハッ」
獏僧は吹き出した。
「詭弁だな。それこそ無意味だ。まァ、それも一つの考え方か。……まさか、こんな間際になって人間扱いされるとはな」
家族以外、そんな風に扱わなかった。まァ、それも一つの考え方か。……
半妖になる以前は風景に、半妖になった以後は化物に扱われた。
それを哀しいとも虚しいとも思わなかった。扱ってくれなかった。
の無価値さを実感しただけてある。ただ無感動に、自分
なのにどうして。
初めて『人間』に扱われて、こんなにも心が震えているだろう――
――くだらない。そんな感情など無意味だ。
けど、だけど。
「ッたくよォ、負けたら呪印に殺されるの解ってたのに、なァんか死ぬの後悔しちまうなァ」
最後に意味の無い呟きをして。
最期の最後に聞いたのは、ぱきん、という、自分の命が割れる音だった。

――――

立ち尽くす流星を見て、戦闘を終えて戻ってきた悠は彼に声をかけるのをためらった。

彼の足元には、ばらばらに砕けた灰色の破片が落ちている。
一瞬敵の武器か家屋の一部分かと思ったが、違う。
あれは敵だ。敵だったものだ。
血も何も出さず、ガラスのように砕けたのだろう。
生物としての死に方が、できなかったのだろう。
「……。……流星」
そっと声をかけると、流星は振り返らずに「難しいな」と口を開いた。
「殺さず倒すってさ。例えそれができても、他の何かで死なれちゃ、同じだし。例え俺が原因じゃなくても、目の前で死なれるの、嫌、だし」
「……」
「凄ぇ悪い奴が死んだんだし、喜ぶべきなんだろうけど、そんな気にもなれねぇや」
「……流星は、それでいいんだよ」
悠は流星に歩み寄り、その広い背中に手を添えた。
「普通に優しくて普通に苦しがって普通に哀しがる。それが流星でしょ。ここで喜んだりしたから、それは流星じゃないよ」
「……そうか」
流星は振り返った。そこで、悠は流星が肩に傷を追っていることに気付く。手も、刃を握ったような傷ができていた。
「流星、それ……」
「あ、これは大丈夫。もう血も止まってるし」
「……そう」
普通に考えてそんな大怪我、数分で止血もせずに血が止まるわけがない。
鬼童子としての力が、表面化しているのか。姿はともかく、力の方は数珠だけでは封じきれなくなっている。
誰より普通な心を持つ彼が異常な異能を持つというのは、皮肉と言えば皮肉だった。

「……大したこと無いなら、急ぐよ」
「熾堕、倒せたのか？」
「倒せてないなら、こっちに来れないよ」
悠は鞘に収まった刀をかかげた。
「全くもって強敵だったけどね。随分な謎を残して去ったけどね。でもまぁ、今となってはどうでもいい」
悠は思い出す。熾堕の最期を。
ああなってしまっては、どんな再生能力も回帰能力も無駄だろう。
あの状態からよみがえるなんて、生物である以上不可能だ。
「今は、羽衣姫のことだけ考えよう」
悠はふ、と息を吐いて踏み出した。

――――

そこにあるのは消し炭だった。
崩れた、かろうじて人の形をしている黒い塊だった。
その他には何も無い。
その他には誰もいない。
あるのは、もの言わぬ焼けたそれのみだった。
「……ふ」
と。
小さな笑い声が上がった。
何も無い。誰もいない。
あるのは、あくまで消し炭だけ。
「ふふ……ふはははははははは！」
やがて笑い声を哄笑に変え、消し炭は起き上がった。
黒焦げている。一瞬人だったことを否定したくなるぐらい黒焦げている。
皮膚だけでなく、それは髪や内蔵にも言えることで――しかし、目玉だけが生身だった。

銀の双眸だ。静かな光を灯す、美しい瞳だった。
「確かに考え方は悪くない」
彼は口をそう動かした。薄く引き締まった、生身の唇だった。
「俺以外であったなら有効だったろうよ。しかし」
頬に艶やかに輝く銀の髪がかかった。その頬は、すべらかで白い。
「俺にとって内側の攻撃なんて外から受ける攻撃と変わらない。どちらも俺にとっては等しく同じだ」
もしこの場に一般人がいたら、悲鳴を上げただろう。
死者が生者に、無生物が生物に変わる——否、戻るその様は、異常であり、異状だった。
消し炭だった彼は、十数秒で元の姿に戻った。
銀の髪と瞳を持つ、美丈夫に。
「なぜならどちらも地上の理（ことわり）による攻撃であり——地上の理は俺に適応されないからだ」
しかし、と彼は自分の身体を見下ろした。
どこもかしこも元通りだ。先程と違うと言えば、黒焦げでぼろぼろのままの服ぐらいか。
いや、彼が見ているのはその服なのだけれど。
「服だけはどうにもな……何とかならないか……ならないか」
自己完結し、彼は視線を右に向ける。
すると、タイミングを計っていたかのように二人の影が現れた。
片方は神父のような格好の男。もう片方は目深にフードをかぶった人物。
「来たか。悪いが何かかけるものをくれないか？」
「……また手酷くやられましたね。いくら負けなくてはいけなかったとはいえ、そこまでしなくても」
神父姿の男は彼に駆け寄り、持っていた布を男の肩にかけてやった。
「いや、まさかあそこで雷撃を使うとは思わなくてな。星見も全てを見通せるわけじゃないし、あの刀にあんな技無いからな」

彼は立ち上がり、肩をすくめる。服だったぼろ炭がぱらぱらと落ちた。
「それで、これからどうしましょう？」
フードは首を傾げた。
「戦いを見届けますか？」
「いや。結果は『視え』ている。これ以上関わるのは得策じゃない。……ようやくあの男に繋がる奴らを見つけたんだし――」
「追いますか」
「いや」
部下の提案を、男は即座に却下した。
「連中もそこまで馬鹿じゃないだろう。感付かれる可能性がある。あの男に俺達の動きを読まれるわけにはいかない」
男の形のいい眉が歪められた。
不快げな――心底忌々しげな表情だった。
彼がそんな表情を浮かべるのは珍しく、しかし部下達は相好を変えない。
「でしたら、今回は静観というわけでしょうか？」
「ああ。……はぁ、ようやくここから離れられる」
彼は疲れたかのようなため息をついた。
「ここの空気は合わん。早々に出るぞ」
「はい――ルシフェル様」
部下達は、ここで初めて主の名を呼んだ。
ここでは呼ぶことを禁じられていた名だ。つまり、彼らはここを――妖偽教団を離れるということである。
ルシフェルと呼ばれた彼は、薄く笑った。
何の感情も無い、唇が弧を描(えが)いただけの笑みだった。

第二十六話　剣姫<上>

「しかし妙だね」
先へ先へと進む悠（ユウ）のそんな呟きに、流星（リュウセイ）は首を傾げた。
「何が？」
「恭兄（キョウニイ）のことだよ」
悠は足を止めず、視線だけを流星に向けた。
「最後……羽衣姫（ハゴロモヒメ）に対する抵抗。殺されるつもりなら、式神を使って戦う必要無いよね」
「あ……」
流星は一瞬足を止めた。しかしすぐ、置いていかれそうになったので歩みを再開する。
「確かにそうだよな……抵抗せず、その場に突っ立ってた方がいいはずよな」
もっとも、あの攻防のおかげで恭弥（キョウヤ）は生き長らえたのだが、流星はそれに思い至らない。
恭弥が生きている。流星にとって、その事実だけで充分である。
それよりも今は、浮かび上がった疑問だ。
「攻撃が効かないって解ってたら、なおさらだし」
「どっちにしろあの精神状態で、そこら辺の妖魔はともかく羽衣姫を狩るのは不可能だよ。恭兄が無意味なことをするとは思えないし……」
そこで悠は、結論に行き着きかけた。思い出しかけたと言っていい。
しかし、思わぬ合流者により、それは霧散する。
「あぁ！　二人共、無事だったねっ」

その声に、悠と流星は振り返った。
こちらへ歩いてくる男女が二人。舜鈴（シュンリン）と猛（タケル）だ。
舜鈴は猛に肩を貸しており、猛は全身血だらけだった。無傷の舜鈴と、随分な差である。
「猛……よくその状態で生きてるね」
悠はどうやら、心配や驚きより先に呆れが出てきたようだ。
止血はされてるようだが、大怪我を負っていることに違いない。
目が開いてなければ、死人と間違えそうだった。
「俺もそう思う……あっ、つっ……」
「全く。朱華（シュカ）」
悠が名を呼ぶと、妖狐の少女はふらりと姿を現した。
「お座りください」
朱華に言われ、舜鈴に手伝ってもらいながら腰を下ろす猛。その間にも酷いぐらい顔を歪めていた。
「手足が穴だらけですね……ここまで歩いてこれたのが、不思議なくらいです」
「うぇ……身体に穴開いてるとか、最悪じゃん」
「肩に穴開いてる奴が言うなよ」
顔をしかめる流星に、悠がツッコんだ。実際人のことを言えない状態である。
「流星様もこちらに。傷を負ったままでは戦いに支障が出るでしょう」
「あ、うん」
流星は猛の隣に腰を下ろした。
朱華の尾が流星と猛の傷に触れ、ぽうっ、と光る。
傷が癒されていくのを感じながら、流星は「そういえば」と舜鈴に話しかけた。
「他の奴らは？　一緒じゃないのか？」
「うぅん、会わなかった。無事だといいんだけど……」
「俺が無事なんだから平気ッスよ。……多分」

「不確定な上に、あいまいなことこの上無いね」
悠は猛の言いようにため息をついた。
「まぁいいか。傷が治り次第進むよ」
「え？　他の奴ら待たなくていいのかよ」
「そんな猶予あると思う？」
驚く流星に対し、悠は冷静に返す。
「羽衣姫が動き出す前にこちらから動くのが一番なんだよ。そりゃ日影達は心配だけど、現状を考えたら待つより動く方がベストなんだ」
悠はそう言った後、思案するように顎に左手をそえた。
「……朱華」
「はい」
「治療が終わり次第、他のメンバーの様子を見てきてくれる？　私達のことを報告してほしいの。怪我人がいた場合はその治療を優先して」
「かしこまりました」
朱華が頷くのと同時に尾の先がひときわ大きな光を放ち、ふっと消えた。
「終わりましたよ」
「おぉ……サンキューな」
流星は肩を回してみた。先程までじくじく痛んでいたのが、嘘のように無くなっている。
「では、行ってまいります」
朱華は深々と頭を下げ、上げたと同時にその姿を消した。
「肩の調子は？」
「いいよ。毎回思うけど、あの能力って便利だよなー」
「……利点ばかりじゃないけどね」
素直にはしゃぐ流星に、悠は否定的なことを言った。
「あくまで傷が完璧に塞がれる術であって、回復の術じゃないからね。流れた血は戻らないし、体力もまたしかりだ。試しにちょっと

立ってみて」
悠にうながされ、流星は立ち上がる。とたん、視界がぐらりと揺れた。
と言っても一瞬のことで、頭を軽く振ると元に戻ったものの、意識が遠のきかけたのは事実だ。
「ね？　血が足りないせいで貧血起こしかけてる。猛だって、しばらくまともに動けないだろうね」
悠の言う通りだった。先程から感じていた気だるさはまだ残っているし、隣の猛だって、傷が塞がったというのに立とうとはしない。
傷の痛みが無いというだけで、それ以外は先程と変わらなかった。
「でもまぁ……さっきの状態よりましだろ」
痛みが無くなっただけでもありがたい、と流星は思うことにした。深く考えても、ろくなことが無い。
「さて……と。私と流星は進むけど、猛と舜鈴はどうする？　体力回復するまで待つ？」
「そうする……どのみちこのままじゃ戦うどころじゃないからな」
猛は座ったまま肩をすくめた。
「そう。まぁその体力でも、雑魚相手ならどうにかなるでしょ。舜鈴もいるしね」
悠は未練無く猛と舜鈴に背を向けた。
「……気を付けろよ」
猛が低い声で、こちらを脅かすように言った。本人にそのつもりは無かったろうが。
「あの時、羽衣姫におまえの攻撃が効いたのは、ラッキーパンチと思った方がいい。二度も同じことがあるとは限らないぜ」
「そんなこと、言われなくても解ってるよ」
悠は振り返りもせずに歩き出した。流星は一瞬迷った後、悠の後に続く。
「みんな……追いつくといいな」
「さてね、どうかな。とりあえずは」

悠は迷いもせず歩く。早足というのもあるが、何より体力が減っているので流星は追いかけるのがやっとだった。
「進むしか無いよね。戻ったところで、向こうが有利になるだけだし」
「……そうか。でも、それにしたって」
流星は顔を少しだけ後ろに向けた。猛と舜鈴の姿は、早くも遠くなっている。
「せかし過ぎだろ。おまえだって、怪我は無くても体力消耗してるはずだろ？」
「問題無い」
確かに顔色は悪くない。歩く姿はいつも通りだし、疲れた様子も無い。
しかし自分の体調を偽れないほど、悠は子供ではない。普段通りに見せることなど造作も無いだろう。
だからこそ、流星は心配だった。
顔や仕種を見ただけで相手の本心を見抜くなどという芸当は流星にはできないし、できたとしても、それでこちらの内心を明かすような悠ではない。
普段はともかく、こういう場で弱味を見せるような少女ではないから、当然と言えば当然である。
だから、自分が気付かぬうちに無理をしてしまったらと不安になってしまう。
無理をして、深手を負ってしまうのではないかと思ってしまう。
「……悠」
「ん？」
流星が呼ぶと、悠は歩みを止めずに顔だけをこちらに向けた。
「……無茶、するなよ」
「……善処するよ」
悠はあいまいな返事をした。
それは安心させるものではなく、不安を増長させるものだったが

――この時流星は、深く考えないことにした。

――

平安時代のことは高校生であるならとうに歴史の授業で習っているはずだが、流星は完全に忘却してしまっている。

せいぜい凄く昔の時代ぐらいの認識だ。そんなもの、小学生でも知っていることである。

彼自身は歴史に興味が無い。ただ、祖父はそういうことに強い関心を持っていた。

当時の絵や物語を流星に見せては楽しんだりもした――流星はちっとも覚えてないが。

だから、内裏やら清涼殿やら言われても、ぴんと来なかった。

そんな彼でも、建造物に対して何かしらの感想を抱くことはある。

「不思議、だな」

それが内裏に入っての、流星の第一声だった。

下は平らな土、その上に建つのは平らな建物。華麗さは無いがしかし美麗さはある。そんな様子だった。

桜でも舞ってたらもっと綺麗だろうなぁ、ぐらいの美的感覚は流星にもある。

しかしてっきり、妖魔達が襲ってくるとばかり思っていたが。

「ありったけの戦力を、うちを潰すのに使ったんだろうよ」

流星の疑問に、悠は淡々と答えた。

「よほど椿家を潰したいと見える。……しかしそれだと、疑問も残るね」

「疑問？」

「なぜ幹部級の実力者がいなかったのか、だよ。本当に潰したいなら高い実力を持つ妖魔か半妖を投入するはず。前々から思ってたけど……妖偽教団は一枚岩じゃないのかもね」

「前々からって……」

流星は思わず足を止めた。同時に悠も立ち止まる。
「どういうことだよ、それ」
「月読（ツクヨミ）――葵姉（アオネエ）のことや、もう考える必要無いだろうけど、熾堕（シダ）。例えばあの二人は、決して羽衣姫の忠実な部下とは言えなかったろう。もしかしたらこの現状も、第三者が作り出したかもしれないってことだよ」
「つまり……妖偽教団以外に敵がいるってことか？」
「まだ敵とは言いがたいけど……まぁ味方とも言えないだろうね。目的が同じというだけか」
「は？」
流星は歩き出そうとして、足を宙に浮かせたままま止まった。
「何……目的が同じ？　誰と誰の、何の目的が？」
「だから、私達と第三者の、妖偽教団を倒すという目的がだよ」
悠はどこかあきれ気味に言った。
「もし何かしらの要因でこの状況が意図的に作られたのだとしたら……理由はどうあれ妖偽教団を潰したいんだろう。この現状は、私達には有利過ぎる……」
悠は「だからこそ油断できないんだけどね」と付け加えた。
「どちらも潰す気だとも考えられる。それを想定して、動いた方がいいだろうね」
「ここまででそれだけ読んだのかよ」
流星は悠の洞察力に舌を巻いた。
前々から聡い少女だとは思っていたが、ここまで来るともはや異常である。
さすがは恭弥の妹と言うべきか。恭弥の偏差値七十越えの衝撃を、流星は忘れていない。
「恭兄だったら、もっと予測立てられるんだろうけど。一のことに千の対策練れるからね。本当に何で本気で勉強しないんだろ。その気になったら偏差値八十はかたいのに」
「……」

言葉どころか、呻き声すら出てこない流星だった。
「まぁ、どうでもいいけど」
「いや、よくない」
「それより確か……この辺りのはずなんだけどな」
ちょっと白くなってる流星を見事にスルーし、悠は建物の一つに入った。

ドゴオォォォォォッ

――刀で扉を破壊して。
「っておぉぉい!?　慎重に行くんじゃなかったのか!?」
「そうは言ってないよ。第一、あれに遠慮が必要だと思う？」
悠の指す、あれ。外とは真逆な黒い空間にいる、黒衣の女。
恐怖を与えるほどの美貌の女は、その口唇にいびつな笑みを浮かべた。
「来たわね、来たわねん♪　ようこそ、妾の都へ♪」
「来たくて来たんじゃないけどね」
悠はふんと鼻を鳴らした。
流星はというと、ためらいながらも、その建物内に遅れて入る。
内部は黒一色で染まっていた。床から天井から壁まで、徹底して黒である。
おかげで正確な広さが掴めない。明かりがあるのが唯一の救いか。
「っ……!?」
その時。
流星の感覚に何かが引っかかった。
それは獏僧の戦いから表れ始めた鬼童子としての感覚であり、その何かは、悠に向かっていることを直感した。
「危ない!」
流星はほとんど反射的に悠を突き飛ばした。悠はいきなりのことで対処できずに倒れ込んでしまう。

後から思うと、本当に考え無しだった。この時流星も一緒に、身をかがめるなり何なりすればよかったのだ。

結果として。

「……！　う、ぐぅっ」

悠に巻き付こうとしていた糸は、流星に巻き付いた。

手に、手足に、肘に。

足に、足首に、膝に。

間接という間接に巻き付いて、流星の身体を封じた。

「こ、これは……糸！？」

流星は指にさえも巻き付いたその細くて視認しにくい糸を見て呟いた。

「ふぅん。気付いてその娘を押したんじゃないの」

上空からの声に、流星は目を上向かせた。もはや動くのは、目玉だけである。

外からでは気付かなかったが、天井に誰かいる。一瞬浮かんでいるのかと思ったが、違う。糸に吊り上げられているのだ。

長いスカートの、メイドのような格好の女だった。

全身に見えるか見えないかぐらい細い糸を巻き、その糸は流星の糸と繋がっている。前髪がやたらに長いため、目が隠れていた。

「だ、誰だおまえは！」

「椿悠を操るつもりだったんだけどねぇ。まぁいいわ」

女は流星の声に答えず、隠れていない唇を歪めた。その唇に色は無く、白い。

「操女中の殺人人形劇（アヤツリジョチュウ）、始まり始まり」

やる気無さげな声と共に、女の指が動いた。

日影と雄輝（ユウキ）は、猛と舜鈴に合流していた。現状を確認するために情報を交換していると、紗矢（サヤ）と文菜（フミナ）も追いついた。

全員怪我は朱嶌によって治されている。体力の方はともかく、傷による痛みは綺麗さっぱり消えていた。

あとは雷雲（ライウン）と風馬（フウマ）だけだが、彼らを待つ時間も今は惜しい。

「朱嶌が回っていってるなら、心配は無いでしょう。悠達を追いかけるわよ」

日影は仲間の顔を見渡す。

全員頷き、座っていた者は立ち上がった。

「ど、どういうこと!?」

日影と舜鈴が同時に叫んだ。

しかし、驚いたのは二人だけではない。全員が全員、その光景を疑った。

流星が悠を殺そうとするという光景を。

流星は炎を宿す小刀を抜き、それを悠に向けて振り回している。

悠は刀を抜いてはいるものの、それを流星に向けていなかった。

ただ刀で流星の攻撃を受け流すだけである。

双方その顔は歪められていて、流星など今にも泣きそうだった。

「ど、どうしたっていうんだよ!」

猛は半壊した扉をくぐろうと一歩踏み出した。

「駄目だ。今は通れない」
が、紗矢に首根っこを掴まれて引き戻される。
「な、何を」
「よく見ろ。このまま通れば全身ばらばらになる」
「え……」
紗矢の言葉に、全員目をこらして扉（と言っても壁に空いた穴にしか見えないが）を見つめた。
じっと見てみると、細い、一瞬見ただけでは解らないぐらい細い糸が何本も張り巡らされていた。
まるで蜘蛛の巣のようである。しかしそこに触れれば、絡み取られるどころか原形をとどめず肉塊となってしまうほど鋭利だった。
「これは……悠！　一体何がどうなっているの！？」
日影は糸に気を付けつつも身を乗り出した。悠は日影達に気付いたようで、目だけをこちらに向ける。
「そこからじゃ見えないかもしれないけどっ、天井にいる変なメイド女が流星を糸で操ってるみたいなんだ！」
振り下ろされた小刀を受け止め、受け流す。普段の悠なら懐に入って蹴りでも入れるだろうが、今回は後ろに下がった。
「流星自身の意思はあるみたいなんだけど、身体は完全に操られているっ」
「糸を斬りたいけどっ……悠がさっきからやってるのに全然斬れねぇんだっ」
流星が叫んだ。意思があるというのは、どうやら本当のようである。
そして糸が斬れないということは、術者（この場合は妖魔か）が死ぬか倒されるかしなければ解けないということだ。
ここからではよく見えないが、流星の身体には糸が巻き付いているらしい。もし入口を塞ぐ糸と同じなら――
「……ちょっとどいて」
日影は扇を取り出して、どくように言った。全員が前方からいな

くなると、扇を開く。
「『桧扇姫(ヒオウギヒメ)』、部分解除」
放つのは、現在自分が使える技の中で、最も鋭い技――
「第三十の舞――疾風裂舞(シップウレッブ)！」
扇を振ると、目に見えない衝撃波が放たれた。
見えない衝撃波は糸を断ち斬らんと入口に迫る。
どんな硬い皮膚の妖魔でも斬り裂いてきた日影の技は――

バシィィィンッ

――弾かれた。弾かれて、散った。
「無駄無駄ぁん♪」
と。部屋の奥から声が聞こえてきた。
手前の悠と流星にばかり気をとられていたが、その奥に、倒すべき相手がいた。
「羽衣姫……」
「操女房ちゃんの糸はぁ、操女房ちゃんが死なない限り斬ることはできないわよん♪」
黒い玉座に座った羽衣姫はにやにや笑っていた。ぞっとするほど凶悪な笑みである。
「だからそこでおとなしく見てなさいん。悠ちゃんが流星ちゃんに殺されるところを♪」
「っ……！」
「ふふふ……ほほほほほほほほほほほほ！」
羽衣姫の哄笑が、日影達の脳を気持ち悪いぐらい揺さぶった。

目の前にある彼の顔は酷く歪んでいて、けれど刃は迷い無く自分の急所を狙う。
そんなちぐはぐさに吹き出せるほどの余裕は、今の悠には無かっ

た。
（くそっ……糸さえ断ち斬ることができたら！）
先程から流星に絡み付いている糸を斬ってみるも、全て失敗している。
日影の攻撃も通じなかった。どうやら羽衣姫の言葉は本当のようである。
いや、実を言うと、悠は言われるまでもなく気付いていた。
一、二度やればすぐに気付く。だから天井にぶらさがっているメイド服の女――操女房とやらに攻撃をしかけようとした。
しかけようとして――失敗した。
向こうもこちらがやることは読めているだろう。やる前から解っていると言っていい。
だから、流星を盾にした。
悠が上空への攻撃をしかけようとすれば、流星をその攻撃範囲に移動させる。もしくは、流星に攻撃をしかけさせる。
二対二であるなら、ことは簡単にすんだろう。
だが今は二対一だ。実際相手にしているのは一人だが、その一人がやっかいだ。
華凰院流星。鬼童子で、武器は炎を宿す小刀、『煌炎（コウエン）』。そして操られている時の動きは、素人ではなく熟練された戦士の動き。
それらは何もかも、悠にとってマイナスにしか働かない。
鬼童子の力は正面からやり合うにはやっかい過ぎるし、炎の小刀は刃が届かなくとも炎が届けばダメージを受ける。
一番やっかいなのは、動きだ。
普段の流星なら追いつけないだろう悠の動きを、操られた状態の彼は付けていける。
おそらくこの動きは操女房の動きだろう。見た目に似合わぬ実力者らしい。それに流星の身体能力も加えられたら、強敵としか言いようがなかった。
……いや、どれも建前だ。どれもこれも戯言だ。

ようは自分は、攻撃したくないのだ。戦いたくないのだ。
相手が流星だから。ただそれだけの理由で。
「くっ……」
悠は振り下ろされた小刀を横に跳ぶことで回避した。
そこから反射的に蹴りを放とうとして、ぎりぎりで踏みとどまる。
この蹴り一発でどうにかなる流星じゃない。そんなこと解っている。
多少斬られたところで、刀傷などすぐ治ってしまうだろう。
だけど、どうしても手が出ない。出せない。
流星を傷付けずに操女房を倒すのは不可能だ。しかし、このまま消耗戦を続けていても無意味なのも事実である。
「悠、何で攻撃してこないんだよ！」
流星が操られながらも叫んだ。本当に今にも泣きそうだ。
当然だ。戦いたくないのに無理矢理身体を動かされているのだから。
「……流星、顔大変なことになってるよ」
「んなこと言ってる場合かよ！」
思わずいつも通り軽口を叩くと、怒鳴られてしまった。
「俺は、ちょっとやそっとじゃ死んだりしねぇし！　そんなやわでもねぇっ。気にせずあいつを倒せばいいだろ！」
「それは……無理、かな」
悠は唇を緩ませた。流星の瞳に映り込んだ自分の顔は、酷く穏やかである。
見付けたのだ。一つだけ、この人質兼対戦相手を傷付けずにすむ方法が。
――いや、別の意味で傷付けるだろうが、別の方法よりいい。ずっといい。
なぜなら流星の身体は無傷でいられるからだ。自分は、無傷とはいかないが。
「無理って……何でだよ！？」

流星の声は、もはや涙声になっていた。その声が更に悲痛になることを思うと、心が痛む。
だけど。
「好きな人に怪我させたくないって思うのが、乙女心でしょ？」
「え……」
悠の言葉に、流星はぽかんとしたようだった。
ぽかんとしつつも――操られた身体は動く。
速く動く。
反射的に動いてしまうほど、速く動く。
しかし悠は、自分の反射を精神力で抑え込む。それは容易ではないのだが、悠はやってのけた。
それだけの精神を――それだけの精神（こころ）を、悠は持ち合わせていた。
しかし流星は。
「悠、何で」
それだけの精神を。
「何で避けない！？」
それだけの精神（こころ）を。
「避けろ……避けろよぉ！？」
持ち合わせては、いない。

ドスッ

貫いた。
貫いた音がした。
「……かはっ」
悠は痛みより先に込み上げてきたそれを吐き出した。
びちゃ、と床に落ちる血塊。それを見るうちに、みぞうちの激痛が脳に伝わってきた。
全身の神経がマヒしたかのような痛みだった。痛みが痛みと感じられぬほどの痛み。

あぁ、恭兄が感じていた痛みはこれか、などと思っていると、流星が「ゆ、悠……」と恐る恐るといった体（てい）の声を上げた。

「ん……？　……あぁそうだった」

我ながらびっくりするぐらい冷静な声が出た。その後、悠は空いた片腕を流星の首に回す。

がっちりと。固定するように、離さないように――離れないように。

「やることはやらならないとね。でないと君にこんなことさせた意味が無い……それに長く続けられる状態でもないし」

悠はどこまでも平淡に、いつもの調子で言った。

炎を宿す小刀。普通の凶器よりよっぽど凶悪な刃に貫かれながら。いつものように、いつも通りに。

貫くどころか焼かれながらも、美貌に不敵な笑みを浮かべて。

「『剣姫（ツルギヒメ）』、部分解除」

刀の力を、発揮させる。

「六の手――『落葉刃花（ラクヨウジンカ）』！」

それは先程日影が放った技に似ていた。衝撃波を放つという意味では同じだろう。

けれど攻撃を――技を炸裂させる場所は違う。

悠は片手で刀を振った。流星を抱き締め、動きを封じた状態でだ。

そうして刃から放たれた衝撃波は、操女房にぶち当たった。

ぶち当たった――だけ。

「……ん……？」

操女房自身、その時は何が起きたのか解らなかったことだろう。

実際ことが起こるまで、悠以外誰も何が起きるのか解らなかったろう。

そもそも全身に巻いているあの細くも強靭な糸が、操女房の最大の防御なのである。

普通の攻撃は通じない。強力な攻撃も通じない。

だが、操女房自身が強固な肉体を持っているわけではないのだ。

だからようは、操女房だけを攻撃すればいいという、至極単純な話である。

ブシャッ

結果、操女房は悠の『技』によって全身を内側から斬り裂かれた。

「がはぁ！　何、何をっ……！」

「鎧通しって技、知ってる？」

降り注ぐ血の雨を受けながら、悠は言った。流星の刃は、まだ貫通したままだ。

「鎧の中の人間を攻撃する技だ。これはそれの応用だよ。衝撃波を使って遠隔的に鎧通しを行う技――片手だとちょっと不安だったけど、うまくいったみたいだね」

「っ……遠隔的にって……そんな、のっ、ふか、不可能よ！　あ、あああありえないありえないありえないありえない！！」

「ありえるよ。こんな刀だからね。それにさ、言うまでもないけど現実にはありえることしか、起こり、えな……い……」

限界だった。立っていられるか解らないから流星に抱き付いていたが、それも無理になってきた。

だが、どうやら糸は断ち切れたようである。流星の身体に絡み付いていた糸は、はらはらと床に落ちていった。

流星を盾に、そして防御に使うのなら、流星の動きを止めればいい。そういう考えでわざと攻撃を受けたが、うまくいった。

ただ――他の方法も無いわけじゃなかった。

流星の言う通り斬ってしまうこともためらわずに操女房を攻撃した方が、被害はもっと少なかったろう。

だができない。例えそれが互いのためとはいえ、悠に流星は斬れない。

好きな人を傷付けたくない。結局そういうことだった。

「ゆ、ゆう……」

「凄い顔だよ、流星」
悠は笑いながら、流星の頬に触れた。足にはもう力が入らない。
全くもって、兄のことを言えたものじゃない。むしろ全く同じだ。
結局は兄妹、か。
「辛い思いさせて……ごめんね」
あと、大好き。
そんな言葉を呟いて、悠の意識は一瞬で沈んだ。

――――

身体が震えた。
本当に急だった。それにこれは震えというより、けいれんに近い。
ほんの一、二秒のできごとではあったが、刀弥（トウヤ）はそれに眉をひそめた。
元よりあまり動かない片腕も含めた全身の一瞬の異変。必要以上に気になった。
「刀弥様！」
「っ、くっ」
刀弥は我に返り、妖魔の攻撃を防いだ。
「っはぁ！」
『如意ノ手』に噛み付いた妖魔を別の妖魔に叩き付ける。潰れた妖魔を視界から外し、戦況を確認した。
現在こちらが有利ではある。妖魔もそれほど強くない。が、油断はできない。
むしろ油断こそ退魔師の敵と言っていい。油断は隙を生み、隙は死を招く。それは退魔師に限らず、戦う者には皆通ずることだ。
だから先程の異変を、刀弥は気にしないことにした。
しかしぬぐいきれなかった。いいようの無い不安が、どうしても。

――――

誰も何も言わない。誰も何も言えない。
ただ無言で、倒れていく少女を見ていた。
やがて腹に小刀を刺したまま彼女の背中が床に着き――

「……っうわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

流星が絶叫した。
その喉が、いや喉以外の何かを引き裂かんばかりに叫ぶ。
その声に遅れて、日影達は建物内に入った。
操女房が倒されたことにより、入口を塞ぐ糸も切れたのだ。
「どいてくれ、治療する！」
紗矢と舜鈴が突き飛ばすように仲間をかき分け、悠の傍にしゃがんだ。
「小刀が抜けてないのが唯一の救いか……炎も消えてる」
「止血しながら抜かないと――」
「させると思うん？」
ここで――こんな時に、羽衣姫が動いた。
動いた、というほどではない。ただ立ち上がっただけだ。
それだけで、全員硬直した。
しかし、この状況でただおびえるつもりはない。
「私達が相手をする！　その間に悠をっ」
日影、猛、雄輝、文菜が流星、紗矢、舜鈴をかばうように武器を構えた。
「四人で大丈夫か？」
紗矢が治療術をかけつつ尋ねると、日影はひきつった笑みを浮かべた。
「やってやりますよ」
「……任せた」
紗矢が言うと、四人は羽衣姫に突っ込んでいった。

「よし、抜いてくれ。ただしゆっくりだ」
「うん」
舜鈴は頷き、小刀を慎重に抜き始めた。その上で、紗矢は更に術をかける。
（それにしても、まだ生きてるなんて）
舜鈴は驚嘆する。
ただ貫かれただけでなく、刃の炎に内側から焼かれたというのに。
「……ふふ」
笑い声が上がった。
それは羽衣姫のではなく、また戦っている日影達のでもない。紗矢でも舜鈴でも、呆然と立ち尽くす流星でもない。

悠、だった。

「ふふふ……あはははは」
悠の唇からもれる笑い声。戦っていた日影達や羽衣姫も、驚いたのか振り返る。
「な、何で」
意識の無い悠の笑い声に驚いた舜鈴は、絶句する。
見たのだ。悠の髪が、漆黒から黄金に変わるのを。
誰もが口を閉ざす中、悠は飛び起きた。
小刀は完全に抜けている。しかし傷は治りきっていない。
なのに彼女は立ち上がり、金色の瞳を開いた。
そういえば、悠は刀を――『剣姫』を持ったままだった。
持ったまま、彼女は意識を失った！
「全くしぶとい小娘だったが……まぁいい」
『彼女』は悠の口でそう言い、悠の唇で笑みを形どった。
「久しいなぁ、羽衣。あいも変わらず気に入らん面（つら）だ」
『彼女』は――『剣姫』は笑みを深め、走り出す。
悠の顔で。悠の身体で。

剣姫<下>

痛い。それしか感じられなかった。
ただ痛くて、ただただ痛くて、痛くて痛くて痛かった。
痛いとしか感じられなくて――気付かなかった。
私が『私』じゃなくなるのを。
私が『誰か』になっていくのを。
感じること無くただ痛いと、思うことしかできなかった。

――

走り出す姿に隙は無い。止める気すら失せるほどに美しい走法だった。
振り下ろされる刀も速い。速過ぎる。

ギィィィィィィンッ

刃と刃がぶつかり合った。
刀を刃と化した腕で受け止めながら、羽衣姫は苦笑のようなものを浮かべた。
「お久しゅうございますぅ、剣のお姉様♪」
「姉だと？　我らは皆、貴様を妹など思っとらん！」
『剣姫』は後ろに身体を引いた。その金色の目に、嫌悪をにじませて。
「貴様と我らが同族など、おこがましいにもほどがある！　その身体も、人と妖魔の肉を喰ろうて得たのだろうに。もっとも」

紅い唇がぎたり、と歪んだ。
「その借物は、そろそろ使い物にならんだろうがな」
「……？　どういうことですのん？」
「解らんのならいい。貴様は無知のまま、終わるのだ」
『剣姫』は再び刀を振り上げた。
唐突に始まった戦い。手が出せないほど高レベルな戦闘に、誰もが唖然とした。
「……悠、が」
ただ一人、流星だけは青ざめて戦いを――正確には金髪の少女を見つめている。
思い出すのは、羽衣姫と二度目の邂逅をした時だ。
あの時、絶望で心が折れてしまったあの姫持ちはどうなった？
己の武器に乗っ取られた時――どうなった？
あんなふうに髪と瞳が金色になって、別人のように――否、別人になっていた。
あんなふう、に。
「お、俺のせい……？」
流星はがくがくと全身を震わせた。
後悔と恐怖が一緒くたになって脳に押し寄せた。何より、後悔が大きい。
「俺、俺の、俺……！」

「あぁ、そういえば」

戦いの最中だというのに、それも息つく間も無い激戦のさなかだというのに、『剣姫』は口を開いた。
その唇は彼女のものではなく、悠のものである。しかしその言葉は、悠のものではなかった。
「貴様がこの小娘を刺してくれたおかげで、私はこの身体を乗っ取ることができたのだったな」

金色の瞳が流星を映した。
色は違えど、やはりあの目は悠の目なのだ。けれど、自分を見るのは、悠じゃない。
「ありがとう」
「っ……！」
流星は言い難い気持ちに教われた。
それは怒りなのか哀しみなのか憎悪なのか解らなかったが、負の感情のどれかであることは違いなかった。
「こんなことって……」
日影がかすれた声を上げた。
「こんな時に、『剣姫』に乗っ取られるなんて、そんなのって……」
「……マジかよ」
猛は恐慌した顔で一歩、後ろに下がった。
「姫シリーズに乗っ取られて、元に戻れた奴なんていないんだぞ……こんな、こんな」
「……戻れない？」
流星はゆらりと、猛の方を見た。
「戻れないって、悠が？」
「あ……」
猛は口を手で覆った。しかし、もう遅い。
「悠は、もう戻れないのか？　あのまま、あのまま……？」
流星の中で、何かが確実に壊れていく。
それが何なのか解らないが、それが大切な何かであることに違いなかった。
「そんな、俺、俺……！」
「流星君、落ち着け！」
紗矢が流星の肩を揺さぶった。しかし、流星は止めない。
自分を責めることを。
自分を壊すことを。
「俺が、俺のせいで！　悠が、おお俺のせいで！！」

「違う。君のせいじゃない！」
「俺が刺した！！　悠を、悠のことをっ。俺が、俺が悠をあんなふうにしたんだ！」
流星の目から、滂沱として涙が流れる。口は「俺が、俺が」とくり返していた。
何かががらがらと崩れていく音がする。壊れていく音がする。
こんな結果は望んでいなかった。望んでいなかったのに。
どこから狂った？　どこからずれた？
どこが、誰が、どうして、どうして。
「う、うぅ、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
叫んだ。声の限り叫んだ。
もう喉はからからで、痛いぐらいだがそれでも、叫んだ。
「俺、俺、俺、俺！」
「落ち着けと言ってるだろう！」
次の瞬間。流星の脳天にきつい衝撃が与えられた。
ごいん、などという音がふさわしい一撃だった。つまり、殴られたのである。
紗矢が『卯杖姫（ウヅエヒメ）』を使って、身長差も関係無く上からの攻撃を流星に与えたのだ。
意外な人物の意外な行動に日影達は虚を突かれるが、実は紗矢は、ケンカッぱやかったりする。沸点自体は高いが。
そして流星は、その高い沸点を越えさせてしまったのだった。
「うじうじうじうじと！　君は自分を責めることしかできないのか！？」
「さ、紗矢さん……？」
「違うだろう！　君にはもっともできることがあるはずだ。無理とか戻らないとか聞いただけで諦めるのか？」
紗矢はへたり込みそうになった流星の胸ぐらを掴んだ。
「もし逆の立場なら、悠ちゃんは君を取り戻そうとするはずだ。取り戻そうと頑張って、その通りにするはずだ！　あの娘がいつも言

っているだろう。どうするか否か、全ては、自分次第だと」
その言葉は、いつも悠が口癖のようにくり返していた言葉だ。
それは口にだけじゃない。心の中でも、何度も何度もくり返していた。
流星はそこまで知らないけれど、でも、それの意味には気付いている。
悠が自身をいましめていることに、気付いている。
と。足先にこつん、と何かが当たった。視線を下ろし、それを見る。
それは、蝶をかたどった髪留めだった。起き上がった時に落ちたらしい。
その髪留めは、流星が悠へ誕生日プレゼントに送った物だ。
そういえば、買ったその場に紗矢もいた。というか、それを選んだのは紗矢だった。
しかし、それを買おうと思ったのは流星である。悠に贈ろうと思ったのも、また。
「っ……！」
流星は再び『彼女』を見た。
金色の長い髪に金色の瞳、美しい顔に浮かぶ表情はどこまでも傲慢で。
――違う。あれは悠じゃない。
悠の髪は、悠の瞳は、悠の表情は、あんなじゃない。
あそこにいるのは、悠じゃない。悠は――
「っ……」
流星は唇を噛み、走り出した。
「！　一体何を……っ」
日影の制止の声を、流星は聞かないことにする。聞いたら、自分はもう動けない気がした。
「やれやれ、世話が焼ける……」
そんな紗矢の、ため息まじりの声が追いかけてきた。

ぶつかり合う。
金属音が鳴った時には、次の動作に移っている。
羽衣姫と『剣姫』の戦いは、そんな速度で行われていた。
「ところで剣お姉様ん♪　その動きだと、身体が付いていかないんじゃなくてぇん？」
「姉と呼ぶな。心配せんでもこの身体、見た目以上に頑丈でな。それにこの家の者の強度は貴様も知っておろう？」
『剣姫』は己の本体を振り下ろした。羽衣姫は後ろへ跳びのくも、浅く胸元を斬り裂かれる。
「っ……く」
「この身体は、あの女以来の素晴らしい身体だ！　傷があっても、貴様を斬るには充分！！」
姫シリーズ。
強力な力を持つ退魔武器であり、それぞれ個々の意思を持つ物体である。
誇り高い――と言えば聞こえはいいが、高慢で傲慢な『彼女達』は、無機質な己の身体を嫌っている。
だから彼女達は選ぶ。所有者ではなく、自分にふさわしい身体を。
日影も、猛も、雷雲も、紗矢も、雄輝も、文菜も、舜鈴も――そして悠も。
『彼女達』からすればただの『器』であり、身体を奪おうと虎視眈々としている。
己を己で扱うために、己の身体にふさわしい『器』を選ぶ。それが彼女達だった。
そして『剣姫』は、欲していたものを得ることができた。
欲しかった身体。
どうやっても手に入れられなかった身体を。
千年振りに、ようやく――！

「あはははははははは！　いい、やはりいい！　あの女の時は失敗したがしかし！　ようやくあの血を引く身体を手に入れた！！」

『剣姫』は刀を薙ぎ、羽衣姫の刃を半ばからへし折った。

「う、あう……」

肉体には損傷を受けていない。しかし羽衣姫の本体は、肉体ではなく着物の方なのだ。

着る物の肉体を奪い、それを行使する退魔武器とは対極の存在――降魔武器である羽衣姫。

例え存在意義は真逆でも、その性質は同じである。

使う者の身体を乗っ取る――その点は一緒だ。

しかし、明らかな違いが二つ。

一つは姿が変わるという点。

誰の身体を乗っ取ろうと、羽衣姫の容姿は同一である。恐ろしいほど美しく、美しいほど恐ろしい女になることに変わりは無い。

もう一つは、髪と瞳。

姫シリーズに乗っ取られた人間は、皆が皆金色の髪と瞳を持つことになる。例外は無い。

その中で唯一の例外が羽衣姫だ。

長い髪は黒々として、輝く瞳は漆黒で。金色など全く混じっていなかった。

それはある理由があり、それが羽衣姫がただ一つの降魔武器である理由だった。

そして、『剣姫』達が羽衣姫を妹と見ない理由でもある。

拒絶され、拒絶され、拒絶され、彼女は羽衣姫となったのだ。

己の内の憎悪はもはや止められない。誰も止められないのだ。

自分に逆らうことは、自分を拒絶すること。自分を拒絶することは、自分を怒らせること。

特に自分を傷付ける行為は、何より重い――！

「妾の身体を傷付けた！　妾の身体を斬った！！　殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！」

腕から飛ばした二本の布帯が、『剣姫』の両腕を巻き付いた。
「その腕を折って、腕の次は脚。脚の次は背骨。あばら、胸骨、首……折って折ってばらばらにしてやる！！」
「はっ……貴様にできるものか！」
『剣姫』は凄絶（せいぜつ）な笑みを浮かべ、手首を動かして布帯の一本を断ち斬った。
更にもう一本斬ろうとして、しかし遅かった。

ミシィッ

空いた左手が嫌な音を立てた。
「むっ……！」
その後すぐ布帯は斬り裂かれたものの、左腕は力無く垂れ下がる。
「あらあらぁん？　折れたかしらん？」
「残念だったな。ひびが入っただけだ」
それだけでも充分不安要素だというのに、『剣姫』は何でもないという様子だった。
「で……これで終わりか？」
腕を下ろしたまま、『剣姫』は羽衣姫との間合いを詰めた。
「愚かしい。貴様ごときが私に勝てるものか」
下段に構えた刀を、『剣姫』は振り上げた。
右腰から左肩にかけてななめに斬り裂かれる羽衣姫。直前で後ろに回避したものの、本体を損傷すれば深手を負ったも同然だ。
「ぐ、あ〝ぁ！」
羽衣姫は思わず膝を着く。
まさかこれほどは思わなかった。これほどの実力とは思わなかった。
……いや、自分は知っていたはずである。
なぜなら『剣姫』とは、千年前にもあいまみえたのだから――
「千年前はあの女に邪魔をされてできなかったが、今度こそ、貴様

を斬る！」
『剣姫』はぐぁっと刀を再び振り上げた。
「やめろ」
刃が突然止まった。止められた。
「り、流星ちゃん……？」
止めたのは鬼童子――華鳳院流星だった。
羽衣姫は膝を着いたまま目を見開いたが、誰より驚いたのは『剣姫』だった。
手首を掴まれ、流星の顔を振り返る。
「こ、小童！　貴様何を……」
「斬るなっつってんだよ」
「愚か者が！　これをかばうとは、貴様何を考えているっ」
「別に羽衣姫をかばったわけじゃねーよ」
流星はぎっ、と『剣姫』を睨んだ。
「俺が言いてぇのは、斬るのはおまえじゃねぇってことだ」
「は！？」
「羽衣姫を斬るのは、悠の役目だ！」
顔をしかめる『剣姫』に、流星は顔を近付けた。ずい、と自分から目をそらせないように。
「その身体は悠のもんだ。爪先から髪一本に至るまで、全部あいつのもんだ。おまえのしようとしてる行動も対象も全部あいつのもんだ！」
「く、戯言を……離せ！」
「刀が人になりかわれると思うな。刀が人を乗っ取れると思うな。刀が人の身体を得られると思うな！」
流星は『剣姫』の金色の瞳を睨み下ろした。
「おまえはただの刀だ。刀は刀らしく、刀の中にいろ！」
流星は大声でそう言い切った。

それは誰もが静まり返ってしまうような声だった。退魔師も、退魔武器も、降魔武器も。

たった一人――たった一つの意志を除いて。

『気に入ったぞ、小僧』

第三者――いや、まずこの声は人なのだろうか。

音ではない。脳に直接響くような声でもない。まるで文字の羅列だけが認識されて、脳が声と勘違いしているような声だった。

『千年という時を経て、かような者が育っておるとは思わんかったぞ』

「これ、は……！」

羽衣姫は愕然とした。

この声に聞き覚えがあった。いや、聞き覚えがあるなどという、甘いものではない。

二度聞きたくないと思っていた――忘れたいと思っていたが、結局忘れられなかった声だ。

「な、何で」

羽衣姫は立ち上がりながら呻いた。

解っていた。その声がどこから出ているなど、気付いていた。

なぜなら、あの女はあれで自分を貫いたのだから。

でも、それでも羽衣姫は信じられなかった。

「な、何で……何で刀に宿っているの！？」

『おぬしが言える立場か？　全くこの世にまで残りおって……私の予想は外れたわけか』

声が答えた。現代にそぐわない、古くさい口調だった。

「だ、誰だ？」

一方流星は、『剣姫』の手首を掴んだまま辺りを見渡していた。

『剣姫』の方は、声の主に気付いて刀を――己自身を見上げた。

「き、貴様！　いつの間に私の身体に宿っていた！？」

『千年前だ。もしもの時の保険だったが、まさか本当にでしゃばることになろうとは思わなかった』

そう言った声の主の姿が、少しずつはっきりしてきた。刀からその姿が放射されるように。

頭から衣をすっぽりかぶった女だった。顔はほとんど見えないが、唇が血のように紅く、逆に僅かに見える頬や細い顎は陶磁器のように白い。こぼれる黒髪は絹糸のようで、光沢さえ持っていた。

服装の方は随分時代錯誤である。白い、シミ一つ無い狩衣に、水色のはかまをはいていた。白くたおやかな足ははだしで、わらじも何もはいていない。

ただ、その格好より奇異なのは、彼女の姿がすけていて、しかも炎のようにゆらめいている点だろう。

「ゆ、幽霊……？」

呟く流星に、女はふふ、と笑う。その仕種には、いいようの無い色香があった。

『幽霊か。まぁそのような認識でもかまわぬが、少し違うな』

「違う……？　いや、ていうか、あんた誰だ……？」

誰もが言葉を失い立ち尽くす。その中で流星は、なぜか自然なぐらい話していた。

戸惑ってはいるものの、驚愕には至っていないようだ。

羽衣姫や『剣姫』すら、先程のセリフ以降は何も言えなくなっているのに、だ。

『あぁ、この者達には不必要だが、おぬし達には名乗りが必要であったな。ふむ……。我が名は、月凪（ツキナギ）」

その名に、流星は「ん？」と首を傾げた。

羽衣姫から見て、それは奇妙な反応である。

まさか彼が、その名に聞き覚えがあるなどと全く思ってなかった。

『椿家開祖にして、かつての「剣姫」の持ち主だ』

月凪。

それは羽衣姫にとって、忌まわしい名以外の何ものでもなかった。

第二十七話　幕開けの終焉＆lt;上＆gt;

椿家開祖、椿月凪（ツバキ　ツキナギ）。彼女は、月に愛された女だと称された。
なぜなら彼女は、美し過ぎて、強過ぎたから。
人も妖魔も関係無く、彼女は何者をも惹き付け、魅了した。さながら月のごとく。
そして強過ぎる力ゆえに、彼女は孤高で、孤独だった。
月のように美しく、孤独に輝いて。
だからかもしれない。
彼女は最凶にして最悪の『羽衣姫（ハゴロモヒメ）』を前にして、一度として恐怖しなかった。
ただ、憐れんだのだ。
「おぬしは、長い時をかけて眠る必要があるかもしれぬ」
そう『彼女』に言いもした。
だから、斬りはしてもとどめはささなかった。
慈悲深い女ではなかった。けれど、彼女は知ってしまったのだ。
『羽衣姫』が、『羽衣姫』でなかった頃を。

――――

流星（リュウセイ）は驚きのあまり、『剣姫（ツルギヒメ）』を離した。
しかし自由になったというのに、『剣姫』は動かない。
彼女も驚いているのだろう。当然だ。過去の人間が、死んだ人間が、己自身である刀から現れたのだから。
『ふむ……しかし出てきたはいいが、我ができることはさほど無さそうだ』

衣をすっぽりかぶって狩衣を来た女――月凪は、顎に手をやった。
『まずは、我が子孫の身体からおぬしを引き剥がすことにしよう。
「剣姫」よ』
「っ……！」
『剣姫』の表情がさっと変わった。
「私を引き剥がすだと？　そんなの……不可能だ！」
『可能さ。その身体は元よりおぬしのものではない。異物を抜くことに、さほど時間はかからんよ。とはいえ』
月凪はどうやら、羽衣姫に視線を向けたようだった。羽衣姫の顔が少しひきつる。
『おぬしはその僅かな時間を、与えてくれるのかな』
「……与えるわけ無いでしょぉん」
羽衣姫は両手を刃に変えて走り出した。
「最初は驚いたけどぉ、よくよく考えれば妾は幸運だわん♪　憎ったらしい月凪ちゃんまで殺せるんだからん！」
『……あいも変わらす短絡的な』
迫りくる二つの刃を恐れもせず、月凪はため息をついた。そもそも生きてすらいない彼女に、刃を恐れる理由など無いのだろう。
『第一羽衣姫よ、おぬしは失念しておる。敵は我らだけではないぞ』
月凪のその言葉通り――
羽衣姫は別の者の邪魔を受けた。
「なっ……！」
それは、仮面を付けた『傀儡姫（クグツヒメ）』だった。刃の指で羽衣姫の刃を止めている。
「よく解んないけど……ようは羽衣姫をとめればいいのね！」
舜鈴（シュンリン）が言うと同時に、『傀儡姫』の蹴りが羽衣姫の腹に入った。
が、受け止められる。腹の服の部分が、鋼鉄に変化したのだ。
「甘いわよん！」
お返しとばかりに羽衣姫の蹴りが『傀儡姫』の胸に炸裂した。
しかしその隙を突いて、背後に回る者がいる。

「悠の祖先とかいうそこの人の言う通りだわ。敵は彼女達だけじゃないのよ！」

日影（ヒカゲ）は扇を振り下ろした。狙いは――首。

が、羽衣姫が腕を後ろに振ったことで、慌てて扇を防御に転じなければならなった。

「この程度で、その数で！　妾を狩れると思わないでちょうだいん！」

「なら、二人追加だ」

と。突然銃声が響き渡った。

放たれた弾丸は、羽衣姫のむき出しの肩を貫く。

「銃撃……ってことは、風馬（フウマ）！」

日影は羽衣姫から距離を取り、入口の方を見た。

硝煙を上げる銃を握る青年――風馬は、少しだけ唇を緩めた。

「遅くなってすまない」

「あ、あれ……雷雲は？」

猛が首を傾げると、誰かの雄叫びが上がった。

何ごとか、と振り返ると、なんと雷雲が羽衣姫に突っ込んでいくではないか。

「何て無茶を……！」

そう呻いた文菜（フミナ）は、目を見開いた。

雷雲の持つ『卯槌姫（ウヅチヒメ）』が雷を帯びていたからだ。

「へぇ……あの子部分解除できるようになったのか」

紗矢（サヤ）が感心したように呟いた。

「ふむ……あたしも負けてはいられないな」

そう言って、杖で床を叩く。

とたん、羽衣姫の足に鎖が巻き付いた。鎖は床から飛び出しており、羽衣姫の動きをがっちり止める。

「喰らいやがれぇ！」

雷雲は槌を振り下ろした。

羽衣姫は、それを正面から受け止める。いや、正面から受けるし

かなかったのだが。
「妾をその程度で……倒せると思うなぁ！」
「え、うわ！」
雷雲は槌ごと投げ飛ばされた。いつぞやの熾堕戦（シダ）のように叩き付けられる前に、雄輝（ユウキ）がなんとか受け止める。
「なぁんか、完全魔王戦だよな。ＲＰＧの」
猛はそうぼやきながら、槍を連続で突き出した。
「連貫・百裂突（レンカン　ヒャクレツトツ）！」
猛の最高速度でくり出される突きを、羽衣姫は次々と避けた。
しかし動きが制限されているため、それはことごとく羽衣姫をかすめる。
しかし避けきった。百の突き全てを、彼女は回避することができた。
そして大技を出して隙ができた猛に、刃となった手を突き出す。
猛はそれを『鉤槍姫（カギヤリヒメ）』の柄で受け止め、後ろに下がった。
それを悔しげに見送った後、羽衣姫は足を封じる鎖を見下ろす。
「妾を縛るものは、何もかも許さない！」
そして刃を振り下ろそうと――
『やめろ、雪宮（ユキノミヤ）』
しかし。
その手が、月凪の一言で止まった。
『その大刃では、おぬしの足――正確にはおぬしの足ではないが――使いものどころか、斬り落とすことになるぞ』
「その、その名っ……」
羽衣姫の表情が変わった。
怒りから、恐慌へ。
「その名はっ、呼ぶなあぁぁぁ

羽衣姫の腕から、布帯が飛び出してきた。
それはさながら矢のようで、月凪を『剣姫』を貫かんと迫る。

ガギィンッ

が、その攻撃は、半ばではじかれた。
「ってめぇ、いきなり何なんだよ！」
流星だった。『煌炎（コウエン）』から炎のかまいたちを放ち、布帯を無理矢理方向転換させたのである。
「月凪！　……さん！　『剣姫』をひっぺがすなら、早くしてくれっ」
『言われなくてもする』
月凪は紅い唇を緩め、『剣姫』の額に触れた。
「無駄だ！　この身体は完全に私のものだ！！」
『剣姫』は言い放った。しかし声が震えている。自分の言ったことを、心底から信じていないのかもしれない。
だとしたら次の月凪の言葉は、まさに追い討ちをかけるものだった。
『この世に完全も絶対もあるものか。あるのは、現実だけだ』
月凪の手が、ぼうっと光った。とたん、『剣姫』は絶叫する。
身体の一部を引きちぎられているような、そんな激痛にたえているかのような悲鳴だった。
『我はこのためだけにおぬしに宿っていた。かようなことが起こらぬよう、ずっとだ。一度きりだからな、時機をはかっておった』
「この……この私が、貴様のような女にいいい

『剣姫』の髪が、金から黒へと変わっていってるではないか。
見開かれた目も金から黒へと変色していき、灯った光も次第に失せていく。
『我がかつて自身に使った術だ。いや、術というほど高尚なものでもないか。眠った精神を起こすという、ただそれだけの術なのだから』
「ぐぉ、この程度、でぇ……！」
『元よりおぬしは、我が子孫に負けておるのだ。それをおぬしは、意思の無い状態で乗っ取った。人形を斬り裂くのと同じで、抵抗など無かったであろうな』
月凪の声は限り無く冷たかった。口元の笑みなど、とっくに消え失せている。
『そんな小さき器の存在に、人の身体など不相応だ。前にも言ったはずだが、忘れていたようだな』
「ぐ、ぐおぉっ……」
『失せろ』
短く、冷淡な言葉と共に。

バチイィィィッ

はじける音が響いた。
部屋全体を震わせる音に、全員がびくりと身体を固める。
「あ……」
流星は小さく声を上げた。。
彼女の髪が――黒い。金色じゃない。艶やかな黒だ。
彼女はぐらりとバランスを崩し、膝を着いた。
「っおい、大丈夫か!?」
流星は彼女に駆け寄り、肩へ手を伸ばした。だが、そうするべきか迷い、手を引っ込める。
彼女が悠なのか『剣姫』なのか……まだ判断がつかないのだ。

流星が戸惑っていると、彼女は刀を使って立ち上がった。
刃を杖のように着く様はどこか弱々しかったが、切れ長の瞳に収まる漆黒の瞳は、強い意志を秘めていた。
「……！　……ゆ、悠？」
「……何でそこで疑問形になるかな」
彼女は――悠は、流星の顔を見てくすりと笑った。
「心配、かけたね。流星」
「あ、あ……」
流星は出かけた言葉を忘れてしまった。喜びか安堵か解らないが、それらの感情がごちゃまぜになって、何が何だか解らなくなる。
ただ理解できたことは一つ。

目の前にいるのは、まぎれも無い悠だ！

流星は自然と、顔が緩んでいくのを感じた。先程までの緊張が解けたようである。
「……ぷっ、だらしない顔」
それが悠のつぼにはまったらしい。吹き出されてしまった。
流星が慌てて表情を調整しているうちに、悠はすでに真剣な顔を取り戻している。目線の先には、羽衣姫がいた。
「……少し現状が解らないから混乱してるけど、確実なのは」
目線の向きを変え、自分の横にいる月凪に目を向けた悠は、ほんの少しだけ唇をゆるめた。
「私は貴女に助けられたんだね」
『そうだ。この時のためにな』
月凪も衣の下で微笑み、そして羽衣姫に向き直った。
『さて、千年かかったおぬしの憎愛が生んだ悲劇を、今ここで終わらせよう。なぁ、雪宮よ』
「っ……！」
羽衣姫の顔が更に歪んだ。

いや、それより、雪宮とは何だ。
「……まさかとは思うけど、それ、羽衣姫の真名――なの？」
『そうだ』
悠の問いに、月凪はあっさり頷いた。
『あやつは、宇多天皇の御世、かの帝の娘として生まれた女だ』
しん、と辺りが静まり返った。
驚愕の、その場どころか歴史さえも揺るがしかねない事実に、誰もが口を閉ざし、黙り込む。
二人――雷雲と風馬を除けばの話だが。
「あのじいちゃんの言ってたのと同じだ……」
「ああ……」
全員、羽衣姫でさえその発言に振り返り、二人を凝視した。
「誰が言ってたのと同じって……？」
「えっと、修験狸っていう、ここの幹部」
雷雲の言葉に退魔師達は首を傾げるが、月凪だけはくつくつと、喉の奥から笑い声を上げた。
『あの狸じじい、まだ生きておったのか。まぁ、そうであろうとも思っておったがな』
どうやら知り合いらしい。誰か訊こうとした流星だったが、羽衣姫がそれをさえぎった。
「あの、男……！　妾を裏切ったというの？　あの男ぉぉ！！」
咆哮にも似た声を上げ、羽衣姫は力まかせに一歩踏み出そうとした。
鎖が引っ張られ、ぴんと張る。ぶちぶちという音が響くが、それは羽衣姫の足がちぎれる音だった。
『哀れだな』
月凪が穏やかな、哀しくなるぐらい穏やかな声を出した。
『自分を裏切ったことに対する憤り……初めは愛する者に受け入れられなかっただけだったろうに。憎愛もここまで来ると滑稽だな』
「黙れ！　おまえに何が解るっ。求められなかった者の気持ちが、

おまえに！」

と。羽衣姫の顔が、歪んだ。

それは怒りの形相を浮かべたから、ではない。そもそもそれは表情に対する表現ではない。

文字通り、その美しい顔が、ぐずりと崩れたのた。

「……！　な、え……！？」

自分の異変に気付いたのか、羽衣姫は崩れた一部分――額の中心から右目にかけてを片手で覆った。

「な、何だ……？」

流星は一瞬見た羽衣姫の顔に、恐怖以前に呆然としていた。

崩れた部分。ただれたように赤くはれ上がり、血が吹き出していた。皮は剥けたように顔から垂れ下がり、それはまるで――

――まるで身体の内側から、衝撃を受けたような崩れようだった。

「……あっ」

急に悠が小さく声を上げた。

「そうか、あの行動は、恭兄の行動はこういうことか」

「？　ど、どういうことだよ」

「つまり、恭兄のあの不可解な行動は」

悠は全て解った、というように目を細めた。

「あの時の行動は、羽衣姫に術をかけるためだったんだよ」

「え、えっ……」

「恭兄が最後に放ったあの呪符……小規模な爆発を起こしただけだった。でも見るべきはそこじゃなかった。恭兄がかけた術に目を向けるべきだった」

悠は羽衣姫を見つめた。

「なぜ大人しく殺されなかったか。それは羽衣姫に接近するため。いや、接触と言った方が正しいかな？」

「……つまり？」

「恭兄がかけたのはただの爆発術じゃない。内側から羽衣姫を破壊する術だ」

「え……そ、そんな術があるのか！？」
「硬い外殻なんかを持つ妖魔用にね。ただ、時間差だし、いつ発動するか解らないっていう欠点があるけど」
今回はいいように作用したようだね、と、悠はゆったりとした口調で言った。
「今なら、奴を斬れる」
ほんの少し、震えていたけれど。
「小細工も何も必要無い。一刀で斬る。術が作用しているのは借り物の身体だけのようだけど……いずれ本体にも作用し出すだろう」
そしてゆっくりと、羽衣姫に歩み寄る。普段の動作からはほど遠い、のろまと言ってもいいほど遅い歩みだった。
「ひっ」
羽衣姫が短い悲鳴を上げた。後ずさろうとしたのか上体をのけぞらせ、そのせいでかろうじて繋がっていた足がちぎれてしまう。
両足を失い、不様に倒れる羽衣姫。更に崩れていた顔の部分が、ぱぁんと音を立てて吹っ飛んだ。
内側からはぜるように右目と額を失った羽衣姫は、ひいひいとあえいでいた。
あっけない。流星はそう思ってしまった。
あれに、俺達は苦しめられてきたというのに――
「さよなら」
悠は『剣姫』の刃を振り下ろした。その刃は、羽衣姫を脳天から真っ二つにする。
真っ二つ。
本体である黒衣ごと――斬った。
「……わらわ、を」
と。羽衣姫の唇が動いた。
その唇は羽衣姫のものではないけれど、その言葉はおそらく、彼女自身のものだろう。
彼女は最後に、最期の最後に、こう言った。

妾を愛して、と。

幕開けの終焉<中>

何ともあっけない最期。
それこそ、馬鹿馬鹿しいような終わり方だった。
小説だったなら、読者がすっきりしない最終回だろう。
でも、これで。
「羽衣姫を……倒した」
倒れた女を見て、誰かが呟く。
それは流星自身だったかもしれないし、悠だったかもしれない。
もしくは、日影達か。
声の主が誰か判然としないまま、全員倒れた女を見つめる。
その姿は、羽衣姫ではなかった。
長く豊かな黒髪は、薄茶に。恐怖を呼び起こす美貌は、親しみを感じる顔立ちに。身長は百七十センチ以上はあろう長身に変わる。
おそらく羽衣姫に身体を奪われたという猛の母、橘桜（タチバナサクラ）だろう。身体の前面を縦一文字に斬り裂かれ、顔の半分を失っているが、表情は穏やかだった。
そして羽衣姫の本体である黒衣は。
いや、もうそれは衣とは言えない。まるで長い間放っておかれたようにほつれ、ところどころ切れているそれは、ただのボロ布だった。
「……やったのか？」
流星は誰に訊くでなく尋ねた。
誰も答えない。けれど、一拍の間を置き――
『うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

声が、全員の声が上がった。
聞き慣れてしまった悲鳴ではない。
それは、歓声だった。
「やっと……やっと終わった。お、終わったのね……！」
日影は感極まったのか、わっと泣き出した。
「日影、何で泣くんだよー」
「泣きたくもなるわよ！」
戸惑う雷雲にそう返す。その傍では風馬が苦笑していた。
「俺達、勝ったんだ……」
雄輝がぼそりと呟いた。呆然とした表情だが、口元には笑みが浮かんでいる。
「やれやれ。数時間ぐらいしかここにいなかったのに、何年ももぐってた気分だ」
紗矢は肩をすくめた。疲れたのか、長々とため息をついている。
「うっ……」
と。文菜が急にしゃくり上げた。
「ダイジョブ？　文菜ちゃん」
慌てて舜鈴がなだめにかかる。そうしてる間にも、文菜の目からはぽろぽろと涙がこぼれ落ちていた。
「……猛？」
悠の声に流星が顔を上げると、猛が羽衣姫――否、母の亡骸の傍に立っていた。その顔に、表情は無い。
「……ごめん。おば様、助けられたらよかったんだけど」
悠は申しわけ無さそうにうつむいた。猛はそれに対し首を振り、膝を着く。
「いいよ。こうするしか無かった。どっちみちお袋は死んでたと思う。だから」
母の手を取り、その甲を自身の額に当てる。そうして閉じられた猛の目には、涙がにじんでいた。

「死体でも、こうして戻ってきてくれただけで……」
後に続く言葉は、嗚咽に飲まれてしまう。小刻みに震える身体は、年相応に見えた。
「……さて」
悠はそれを見て微笑した後、すぐさまそれを消した顔を上げた。
視線の先には、ゆらめきながらも未だ存在する月凪がいる。
「余韻にひたりたいところだけど、その前に訊きたいことがある」
『……羽衣姫のことだな』
月凪は顎を引いた。
『無論話すつもりだ。皆知りたいことだろうからな』
空気がまたぴん、と張りつめた。先程までゆるんでいたのに、もう空気が変わっている。
流星はそれに付いていけずに焦るが、月凪の話が始まったためにわたわたと耳を傾けた。
『先程言った通り、羽衣姫は帝の娘だった。名を雪宮。いや、思念の持ち主――と言った方が妥当かな。雪宮という個人は、とうに死んでおる』
「残留思念――否、怨念というわけ？」
悠の言葉に、また頷く月凪。
『我が生きていた時代以前の者だ。ゆえにこれから話すのは人づてに聞いたこと。が、真実なのは確かだ』
「……」
『彼女はあの通り美しい女だった。無論求婚者は多くいたが、誰の求婚も受け付けなかったと聞く。誰も自分にはふさわしくないとな。しかしそんなあやつも、ある日恋をした。よりにもよって、とんでもない奴にな』
「とんでもない奴……？」
『かの武器職人、姫の名を冠す武器共を造り上げた男――綺羅（キラ）だ』
月凪の言葉に流星は眉をひそめかけたが、悠達の驚愕の面持ちを見て何も言えなくなってしまった。

「……流星」
黙りこくってる流星に、悠は冷めた視線を向けた。
「前に教えたからね？」
「……」
覚えとらんわ、そんなもん。
そう思ったが、やっぱり黙っておいた。話が脱線する恐れがある。
『雪宮が生きていた時代、綺羅はすでに百八の「姫」と造り終えていた。そんなおり、綺羅は雪宮に美しい衣を送ったそうだ』
「また、何で」
『さぁな。そこは我の知らぬところだ。ただ、雪宮は思ったであろうな。彼も自分を愛していると』
「……」
『身分差の恋だ。綺羅は優れた武器職人だったが、しょせん地下人。退魔武器を造り出したという実績が無ければ、たとえ御簾越しでも会うことすら叶わなかったろう』
「……けど二人は、出会った？」
『出会ってしまった、と言うべきかもしれぬ』
日影の言葉に、月凪は首を軽く振る。
『雪宮は、綺羅から送られた衣をまとって彼に会いに行った——らしい。そこから我も、話をしてくれた知人も知らぬのだが、おそらく拒絶されたのであろう。でなければ、あんなことはしない』
「あんなこと？」
羽衣姫。かつて雪宮と呼ばれた女。
彼女は、何をしたのだろうか。
予想はつくが、しかし想像したくない考えだ。聞きたくもない。
流星はそう思うが、月凪に心の声が聞こえるはずもなく、彼女は淡々と言葉をつむく。
淡々と。いっそ冷淡に。
『雪宮は綺羅を殺し、何を思ったかその後民衆も殺した。貴族も、中にはいたらしい。最期は当時姫の名を持つ武器共の使用者達に、

殺されたそうだ。綺羅から送られた衣は、返り血と彼女自身の血で真っ赤に染まっておったらしい』

「そんな話……聞いたこと無い」

『であろうな。雪宮は仮にも皇族だ。そのことは表も裏も、徹底的に隠された。隠され、潰された。雪宮の存在自体、歴史から抹消された』

表からも裏からも姿を消した女。否、消された女。

彼女は一体何を思って、どんな思いでそんな凶行に及んだのだろうか。

「……あぁ、なるほど」

と。悠がそう声を上げた。その表情は、酷く寂しそうである。

「拒絶されたことによる絶望、落胆、そして憎悪。そういう感情が、ごちゃまぜになって何もかも壊したくなったわけだ」

『だろうな。彼女はその立場上、欲しいと思うものは全て手に入っていたろう。遅い、初めての拒絶は、彼女の心をかき乱したはずだ』

妾を愛して。

つまりは――そういうことか。

「けど」

流星はしかし、言わずにはいれなかった。訊かずにはいられなかった。

「そんなことで……たったそれだけのことで、人を殺すなんて。そんなこと、あるのか？」

『人は理性を持つ生物だがな、少年。しかしけして理性的な生物ではないのだ。理性など、感情によってたやすく崩れるものだよ』

無論我もな――そう月凪は答えた。

『そういう最期を迎えた雪宮だが、しかしその思念は、怨念は、そのまま衣に残ったのだ。綺羅が造った衣にな』

「それが……『羽衣姫』の誕生」

『姫』達が羽衣姫を嫌っていたのは、そういうわけか。

『綺羅は、このことを予測していたのかもしれぬ。否、それが奴の

狙いだったのかもな。かの男は、美しい容姿とは裏腹に狂気にまみれた精神の持ち主だったと聞く』

「姫シリーズのありようも、それゆえか……」

姫持ち達は、自身の武器を見下ろした。流星も、悠の持つ『剣姫』に目をやる。

姫シリーズを造った男、綺羅。

まともな人間でなかったのは『姫』達を見れば解ることだが、もしそれが本当なら、彼はどういう意図でそんなことをしたのだろう。

自分の命まで失って。

『雪宮と呼ばれていた女は衣に憑き、その衣をまとった女の身体を乗っ取るようになった。それを封印したのは、我が師の祖先と聞く。それもまた人づてに聞いた話だが……』

月凪は、透けた身体を雷雲と風馬に向けた。

『どうやらおぬしらも、あの狸じじい――もとい、修験狸（シュウゲンダヌキ）から色々聞いたらしいな』

「と、いうことは、貴女も？」

『あぁ』

風馬に対し、『とぼけたじいさんだった』と笑う月凪。紅い唇が弧を描（えが）く様に、流星は見覚えがある。

改めて彼女が悠の祖先だと確信した。楽しそうに笑う紅唇がそっくりである。

『我が今話したことは全て、あやつが教えてくれたことだ。……その後、我は羽衣姫と相討ちした』

軽くなりかけた場の空気が、月凪の言葉で一気に沈み込んだ。

『帝に見向きされなくなった更衣が、羽衣姫と同調してしまったのだ。あやつは宇治に設けられた祠に封印されておったのだがな……それだけでは足りんかったのだ』

「だから、人柱か」

『そう。我の発案ではないし、皆反対したが……帝のご命令でな』

「理不尽だね」

『無理も無い。当時は天災が多かった上に反乱が起きてな、そういうことに神経質になっておられたのだろう。……そのせいでいらぬ苦しみを背負わせたことは、申しわけ無く思っている』

月凪はぐっと拳を握り締めた。

『本当はあの時、我らがあやつを狩っておればよかったのだ。だが、我はあやつを哀れだと思ってしまった』

「……」

『全て我の咎だ。すまぬ……』

「……今更謝られてもね」

悠はため息をついた。

「千年も前のことでしょ？　とっくに時効だよ。確かに始まりは貴女達だったかもしれないけど、それを責める気は、少なくとも私には無いよ」

悠はそう言って、仲間にちら、と視線を向けた。

皆複雑な顔をしている。当然だ。悠のようにさっぱりとした考えがそうそうできるわけない。

中には、祖先を恨んだ者もいるだろう。そういう思いから無縁なのは、紗矢と舜鈴ぐらいだ。

『我は――我らは、許されることを望んでいるわけではない。誰かに責任を押し付ける気もない。ただ、先ほど出た我の謝罪は本物だと、それだけは理解してほしい』

「……」

皆何も喋らない。何も言えないのかもしれない。

流星は急に居心地悪く感じた。正直なところ、自分には直接関係が無い。もともと人柱の話は、どこか遠い話に感じていた。

自分に何かを言う権利は無いのかもしれない。そんな風にも思っていた。

だが。

『鬼を宿す少年よ』

「え？」

『おぬしには礼を言わねばなるまい。我が子孫達と共にいてくれること、感謝している』
「え、いやあの……」
流星はいきなりそう言われ、驚く。
ごにょごにょと意味も無く口を動かしたあげく、「俺は別に……」としか返せなかった。
『そう思い悩むな。共にいてくれているだけでよいのだ』
「え……」
『傍にいる。それがどれほど人の支えになるかは、まだ解らぬだろう。しかしそれが大切なことぐらい、理解しているはずだ』
「……」
『これからも、我が子孫達と共にいてくれ』
こんな頼みごとを悠の祖先にされると思わなかった。流星は呆然とする。
しかし、そんなことは頼まれるまでもない。
「言わなくても、一緒にいる。そうするつもりだ」
『……そうか』
月凪はふっと笑った。その幻のような身体が、やがてかき消えていく。
『そろそろ時間だ。亡霊である我は姿を消す。我が子孫よ、我がおぬしを救えるのは今回のみだ。二度があるとは思うなよ』
「そんなこと思ってないよ。それくらい理解してる」
悠は微笑を――得意の不敵な笑みを浮かべて言い放った。
「自分を救えるか否か、全ては、私次第だよ」
『……ふはは』
月凪は笑った。笑いながら、消えていく。
『そうか、なら安心だ。それならこれから起こることも、何もかも心配いらぬか……』
声が、少しずつ遠くなっていく――
『――、――――……』

月凪の口が動いた。何か言ったようだが、流星には聞き取れなかった。
口の動きから読み取ろうにも、読唇術を使えなければ意味の無いことだ。
そのまま月凪の姿は――かき消えた。
幻であったように、幻影であったように。
月光の影のように消えた。

しばらく誰も、何も言わなかった。
現実と夢がごっちゃになったような、そんな地に足が着かない感覚があったからかもしれない。
少なくとも流星はそうだった。
羽衣姫を倒したことも、月凪が現れたことも、そもそもここにいること自体夢ではないかとさえ思えた。
試しに、夢かどうか確かめるための行動に出た。
つまり、自分の頬をつねった。
「……」
痛い。
強くつねったからめちゃくちゃ痛い。
「……何やってんの？」
しかも悠に冷たい目で見られた。
「夢じゃないかと思って……」
「そんなわけないでしょ。現実」
「そっか……」
そこで流星は首をひねる。現実ということは、あの時悠が言ったセリフも――
『大好き』
「……っ！？」
かあっ、と顔どころか全身が熱くなった。まるで内側から火を吹

いているみたいだ。
そんな流星に気付いていないのか、悠は仲間に対し、静かに言った。
「さぁ、帰ろう」

幕開けの終焉<下>

身体も頭も、重くて痛い。鉛でできているみたいだ。
そうぼんやり思った恭弥（キョウヤ）は、次の瞬間はっとした。
かすみがかっていた脳内が一瞬で切りかわり、現状の異常さに気付いてまぶたを開ける。
目に映ったのは、見慣れた自室の天井だった。もう見ることは無いと思った、自分の部屋だ。
「……恭弥」
と。そんな風に声をかけられ、恭弥は呆然としたまま首を巡らせた。
右手側に、兄の姿があった。怪我でもしたのか、左頬に薄いガーゼを貼っている。
「兄さ……何で……」
出した声が予想以上にかすれているのに気付き、恭弥は唇をしめらせた。
「……僕は、死んだんじゃなかった、のか？」
「いや」
兄――刀弥（トウヤ）は首を振った。
「おまえは魂を失って仮死状態だったんだ」
「……羽衣姫は？」
「おまえが目を覚ましたってことは、倒されたんだろう」
刀弥の言葉が最初解らなかったが、恭弥はすぐ得心がいった。
「そうか、降魔武器の特性か。それに人柱は魂と身体、両方あって初めて人柱となる。だから封印は、解けたのか」
恭弥はぐっ、と腕に力を込めて起き上がろうとした。

「お、おい恭弥」
「大丈夫。身体は重いが、前より楽になった気分なんだ。つっかえがとれたと言うべきか……」
おそらくは封印のための呪が解けたからだろう。
しかし恭弥は、それを嬉しいとは思えなかった。
自分だけ生き残るつもりは無かった。他の人柱と同じように、死ぬつもりだった。それがつぐないになるなど思っていないが、そうするべきだと考えていた。
まさに死にぞこないだ。自分は何度、死にぞこなえば気がすむんだろう。
恭弥がうつむいていると、からり、とふすまが開く。そちらに顔を向けると、見慣れた顔ぶれがそこにあった。
「あ……」
恭弥は小さく声を上げ、どうするべきか迷った。
まぁ誰だってぼろぼろで血まみれで、おまけに疲れきった知り合いが現れたら、当然言葉を失うだろうが。
「恭弥！！」
と。その中から一人、比較的小綺麗で、返り血などはあびていない者が抱き付いてきた。
「し、舜鈴……」
恭弥が名前を呼ぶと、恋人は涙にぬれた顔をこちらに向けた。
「う、うぅ……恭弥ぁ」
自分の名を呼びながら泣きじゃくる舜鈴を、恭弥はただ見下ろすことしかできなかった。
どうして泣かれているのか、よく解らない。
「……恭兄」
またも名を呼ばれる。顔を上げると、妹と目が合った。
「悠……」
「私達、勝ってきたよ。勝ったんだ、羽衣姫に」
その瞳に涙が浮かんでいるのを見て、恭弥はまたも驚いた。

その顔は哀しみの顔ではない。喜んでいるかのような笑顔だ。
なのに、どうして泣いているのだろう。
「もう苦しまなくていいんだよ。もう、苦しい思いをしなくていいんだ」
悠は足音も立てずに恭弥に近付き、畳の上に座った。刀弥の隣だ。
妹の泣き笑いの顔を見つめながら、恭弥は続く言葉を待つ。
悠は涙をぬぐい、最上級の笑顔をその美しい顔に浮かべた。
「だから約束、ちゃんと守ってね」
「……」
「どうせ忘れてたんでしょ、あの時の約束。恭兄にしては珍しいよね」
そう言う悠の傍に、流星が立った。恭弥が視線を向けると、にかっと笑う。
目を瞬く恭弥に、流星も声を投げかけた。
「おまえって無茶するよなぁ。悠もさ、ついさっき無茶してきたところなんだぜ」
「え……」
恭弥は悠に視線を戻した。
服の腹部分に穴が空いている。よく見れば、血もにじんでいた。
完治はしているようだが、へたをすれば致命傷だ。
「まぁ半分俺のせいなんだけど……それはともかく、とにかくまぁ」
流星は言葉を選んでいるようだった。
もともと、口べたではないが達者でもない流星だ。言うべき言葉が出ず、困っているのかもしれない。
その横で、悠もまた彼の言葉を待っている様子だった。
瞳には少々の期待を、本当に僅かばかりの期待を込めている。……つまりは大方失敗するだろうと思っているということだった。
流星は言葉を絞り出すのに、まだ難儀していた。
この状況でどう言うべきか、いつまで悩んでいるつもりなんだろう。

しびれを切らした恭弥は口を開こうとして――

「ただいま！　んでもっておかえり！」

流星に先を越された。

一瞬何を言われたか解らなくて、次の瞬間どうしてそれだけを言うのに時間がかかったのだろうと思い、そして――

「っ……！」

そして、急に胸が熱くなった。

どうしてかは解らない。そもそも言葉の意味自体、よく解らなかった。

しかし起き抜けとはいえ、頭の回転が早い恭弥はすぐ理解する。

ただいま、とは、羽衣姫との戦いから帰ってきた彼ら自身のことをさしているのだろう。それはすぐ解った。

なら、おかえりとは。

それは自分に向けてだろう。最初からそこは確実だ。では、なぜおかえりなのか。

多分生き返ったことに――魂が帰ったことに対してだ。

実際、恭弥は長い間ここを離れていた気分なのだ。時間はそれほどたっていないだろうし、身体はずっとここにあったのだが。

けれど、感覚的にはそうだった。ずっとずっと離れていて、ようやく戻ってこれたような気分だった――

「……え？」

戻ってこれた？

戻ってきた、ではなく？

この家に未練も何も無い。家族のことは心配だったが、きっと大丈夫だと信じていた。だからこの家に戻りたいなど思ってなかった――はずだ。

なのにどうして、自分はここにいることを安堵しているのだろう。

恭弥は戸惑い、わけが解らないまま視線を漂わせる。

と。紗矢と視線がかち合った。
彼女は最初無表情だったが、恭弥と目が合うと微笑して頷いた。
それが何を意味するかは解らなかったが、何となく、恭弥は目を落とす。
舜鈴はまだ泣きじゃくり、自分にすがりついていた。声を押し殺して泣き崩れるその姿を、恭弥は見たことが無い。
恭弥は視線を上げる。目の前にいるのは、兄と妹だ。傍に直立するのは大切な友人である。
その奥にいるのは、自分のせいで大切な人達を失うことになった仲間達だった。だというのに、こちらに向ける視線はとても優しい。
「僕、は」
何と言えばいいのだろう。何と対応すればいいのだろう。
謝罪の言葉か。しかしそれが何になろう。
泣けばいいのか。しかし泣くことができない。
ならどうするか。どうするべきか。どうしたいか。
「……みんな」
全く。流星のことを言えないな。
そう思うと、自然と頬がゆるんだ。
深く、そして難しく考えなくてもよかった。
ただシンプルに、まっすぐ言えばいいだけの話だ。
「おかえり。そして……ただいま」
恭弥はただそう言って、皆に笑顔を向けた。
それが彼らに向けるべきものだと、そう確信して。

――――

崩れていく。崩れていく。崩れていく
建物が。道が。空間が。
崩れて、崩れて、崩れていく。
直ることなく、ただ崩れていく。

戻ることなく、ただただ崩れていく。
その様を眺める男は、無表情だった。
その眼差しに暖かさも冷たさも含まないまま、じっと見つめる。
「……つわもの共が夢の跡、とはよく言ったものだ。人間も、言い得て妙なことを言う」
男はふむ、と唸った。
銀の双眸は、未だ崩壊し続ける『空間』を見続けている。
彼がいる場所は何も無い。何もかも、全て黒で塗り潰されたかのようなその場所は、地面や天井も判然とせず、酷く不安定に思えた。
普通なら立っているだけで不安になりそうなのに、男は自分の周りなど意に介さない。まるで自室にいるかのように、表情はいつも通りだった。
「存在すべきでないものは無に還った。千年の怨念も消えた。全て星の瞬き通り――」
と。そこで男の目に熱がこもった。
それは視線の先にあるものを燃やし尽くしそうなほど熱く、しかしあいにく目前にはもう何も無い。
「残った星は、俺の望んだ輝きと俺の望まなかった輝きのみ」
薄い唇からこぼれる言葉も、炎のように熱い。否、まさにその言葉は炎だった。
怒気を含んだ、業火だった。
「あと少し……あと少しで終わる。星の瞬きは……消える」
男は呟く。それを、心底望んでいるかのように。

――――

「終わりは近いわ」
女はコートのすそをひるがえしながら言った。隣の男も女と同じコートを着て、彼女の話に耳を傾けている。
普段は面倒くさがりなのに、と女は内心苦笑しながら自分の胸元

を押さえた。
「我々の悲願よ。退魔師達を『同志』に引き入れられなかったのは残念だけど、これも運命よ。彼らは選ばれなかった。ただそれだけよ」
「……よう言うわ。手駒が欲しいだけのくせして」
男の言葉に、女は肩をすくめた。
「馬鹿を言わないでちょうだい。手駒と同志は違うわ。手駒は傭兵を雇えば充分よ。同志は、替えが効かない」
「代わりがあるか無いかの違いやんか」
男はあふ、とあくびをもらした。
「なら、貴方は自分のことを手駒だと言うの？」
「さぁなぁ。俺は指揮する側じゃない。面倒くさがりな、ただの一兵卒やからなぁ」
「どの口が言うの」
女はくすくす笑った。
「どのみち、これからようやく我々は日の光をあびれるのよ。ここでのことは半分失敗してしまったけれど、まぁいいでしょう」
二人の男女は歩く。まだ夜も明けきらぬ町を。
「近いわ。新世界の夜明けが。我ら『使徒』の時代が！」
女は高らかに言い放った。その頬を紅潮させながら。

一つが終わり、一つが始まる。
そのことに気付いている人間は、少ない。

第二十八話　背徳<上>

「全く期待外れだな」
金髪の青年は呟いた。
「もう少し手応えがあると思ったが」
「しかたがありませんよ」
隣に立つ黒髪の青年は、苦笑を浮かべた。
「彼らは一応一般人です。僕達とは違いますよ」
二人の会話は軽い。ファーストフード店か、またはそういうたぐいの店でだべっているかのようだ。
しかし場所は、そんな明るい場所ではなかった。
寺の境内である。しかも深夜だ。おおよそ、十代がいるべき場所ではない。
しかし二人はそこにいて、その場に不釣り合いな会話を交わしていた。
足元に、僧達の死体がいる状態で。
死に様はそれぞれ、焼死か溺死である。本来同時に出現するはずの無い二種類の死体が、そこに存在していた。
「う、ぐぅ……」
その中で、かろうじて息のあった若い僧が、焼けただれた腕を伸ばした。それを見て、金髪の青年は「ほう」と歓声を上げる。
「まだ生きていたか。火加減が弱かったのか？」
「お、おまえら……一体……」
僧は涙がにじむ目で二人を見上げた。それを受け、二人は答える。
ただ一言だけ、短く自分達の身分を明かした。
「『使徒』」

それを理解する間も無く、僧の命は尽きた。

――――

妖偽教団との戦いから、一ヶ月と少したった。
流星の周りは、おおむね平和である。
世間では何やら物騒な事件が起きたりしているようだが、流星には関係無い。
梅雨の名残でじめっとした夏の空気に辟易しつつ、校門をくぐった。
半そでになったシャツが汗でくっつく。それが嫌だと思いつつ、それ以上の感想は抱かない。
日陰側にある教室に入ると、外より幾分かすずしくなり、ほっとした。
「流星、おーす」
「おぉ……今日も暑ぃなぁ」
流星は友人の声に答え、席に着く。枕につっぷすと、友人達が近付いてきた。
それぞれ口勝手に暑さがありえないとか温暖化とか冷房入れろとか言っている。それを聞きながら、流星は「平和だなぁ」と口の中で呟いた。
これこそ自分が求めていたものだ。平和で穏やかな日常。それが自分のいるべき場所である。
流星はしみじみとそう思いながら、ふと、昨日の担任の話を思い出した。
「そういやさぁ、今日転校生くるんだっけ？　季節外れの」
問えば、「あぁ」と卓人（タクト）が頷いた。
「イタリアからだっけ？　女の子だといいなぁ」
「うわ、発言キモッ」
「うっせ。でも、男だとしても面白くね？」

卓人の言う通り、この時期の、外国からの転校生とは珍しい。話のネタにはなりそうだ。

流星がそう思っていると、チャイムが響き渡った。

「おーい、朝礼始めるぞー」

「うわ、やっべ。俺戻るわ！」

担任と入れ替わりに友人が二人、教室を出ていく。それを見届けつつ、流星は座り直した。

担任の方を見れば、隣に青年が一人、突っ立っていた。

金色の髪だ。小柄で細身、身長は百七十センチも無いのではなかろうか。ここの制服ではなく、私服を着ている。

燕尾の白いシャツにモノクロチェックのネクタイ、黒いズボンに白いベルト。ネクタイピンとバックルは銀色で、十字架をかたどっていた。

悠が着てそうな服装だ。もっとも彼女なら、下はズボンではなくミニスカートだろうが。

「えー。彼が転校生のクラウディオ・ロッシーニだ。イタリアから来た。文化や言語の違いが壁になるかもしれないが、仲よくするように」

担任のそういう紹介と同時に青年――クラウディオ・ロッシーニは正面から向いた。

額を完全に覆うほど長い前髪から覗く大きな瞳は光加減によっては金色にも見えるオレンジ色で、顔立ちは整っている。しかしどちらかと言えば、可愛らしいという印象を受けた。女性的な印象とも言う。

「……よろしく」

クラウディオは軽く頭を下げただけで黙り込んだ。緊張しているのか、それともともと口数が少ないのか、どちらにせよ随分無愛想だ。

「席は……華鳳院の隣だな」

「へ？」

流星は驚いて自分の隣を見た。なるほど確かに空席だ。
クラウディオは先程の反応で解ったのか、迷い無くその席に近付いた。
「あ、よろしく」
座ったクラウディオにあいさつをすると、彼は流星に視線を向けた。
それだけである。何も言わず、むしろ不快げな顔をされてしまった。
憮然とする流星だったが、いきなりポケットの中の携帯が鳴り出したために意識をそちらに向けた。
「くぅおら華鳳院！　電源切っとけっ。携帯没収すんぞ！！」
「うっわ、それだけはカンベン！」
流星は慌てて通話ボタンを押す。
『あ、流星』
悠だった。相変わらず非常識な時に電話してくる。
「何だよ、また依頼か！？」
『そう。すぐ事務所まで来て。それじゃ』
一方的に切られてしまった。
静まり返る教室。皆の、特に担任の視線が痛い。
「……華鳳院」
「……」
「さぼるなよ？」
「……先生、マジカンベン！」
流星は鞄をひっ掴んで教室を出ていった。
後ろから怒声が聞こえた気がしたが、耳を塞ぐ。
学業より仕事を選ぶ。それが華鳳院流星という男だった。
――もっと正確に言うなら、学業より恋を選ぶ男である。

――

「それは災難だったね」
ソファーに座った悠は流星の文句に対し、そう言った。
「災難だったね、じゃねぇよ！　俺もうほとんど学生じゃなくなってんよ！？　せっかく妖偽教団との戦いが終わったのに……」
「大丈夫。恭兄も行ってない」
「あいつは療養中じゃねぇか！」
というかと、流星は前々から気になっていたことを、とうとう訊くことにした。
「その……おまえは、中学、行ってないのか？」
「……行けるわけないでしょ」
悠は苦笑をもらした。
「一人でこんな仕事してるからね。学校行っててもまともに学業ができるわけない」
「今の俺みたくか」
「まぁね。それに行く必要も無いんだよ。私は小学生の時点で、高校レベルの勉強をパスしてるんだから」
なかなかむかつくセリフだ。だが、おそらく事実だろう。なんせあの恭弥の妹である。
「それで……今回の依頼は？」
「あぁ、うん。ちょっとこれ、見てくれる？」
そう言って渡されたのは、一枚の写真だった。建物が一つ写されている。
「これ……教会か？」
屋根のてっぺんに付いた巨大な十字架を見てそう言うと、悠は細い顎を引いた。
「そう。街の外れにある、割と昔からある古い教会なんだけど、どうも最近、そこに通ってる信者がいなくなるらしいんだよ」
「いなくなる？　どういう意味だ？」
「文字通りの意味」
悠は肩をすくめた。

「依頼人はある男性。恋人がいなくったために警察を頼ったんだけど、三日後、彼女は死体になって発見された。異様な姿となってね」
「異様な姿？」
「頭皮を、丸ごと剥がされていたんだよ。髪の毛一本残ってなかった。それから」
ここで悠は顔をしかめた。普段はグロテスクな話を平気で話すのに、珍しい。
「……話したくなかったら、話さなくていいぞ」
流星がそう言うと、悠は「大丈夫」と首を振った。
「……理由は解んないけど、彼女は子宮を丸ごと盗られてた」
「子宮？　何で？」
「解らない。問題は、頭以外で外部に傷跡が無いというところだよ」
「え、傷跡が無いって……」
そんなはず無い。内蔵を抜き取るなら、身体を斬らなければならないはずだ。
（あ、気持ち悪……）
自分の想像に気分を害する流星だった。
悠はどうやら、子宮うんぬんのところが言いにくかったようである。同性として、思うところがあるのだろう。
流星は「それで」と話を進めることにした。
「うちを頼ってきたのか？」
「うん。調べてみると、その人だけじゃないんだよね。行方不明になった人」
悠は長机に置かれた資料を手に取った。
「二人は死体となって発見されてるけど、五人ほど、まだ見付かってない。死体の方は、内蔵と身体の一部が無い」
「もしかして、全員女？」
「勘がいいね。そう。被害者は十代後半から二十代前半。中には、流星と同い年の娘もいるみたい」
悠の話に、流星は自分の表情が険しくなっていくのを感じた。

とにかく気分が悪い。これで妖魔が関わっておらず、ただの人間の所業だったら、気分は最悪だ。

もっとも妖魔は人間の心から生まれるのだから、つきつめれば全て人間のせいなのだけれど。

「……ちなみに、犯人の目星は」

「ついてるよ」

おそるおそるの質問に、悠はあっさり答えた。

「その教会の神父だよ。まだ確定ではないけど、十中八九彼だろう」

「神職者が殺しか……世も末だな」

流星がため息をつくと、悠はソファーにもたれかかった。

「結局のところ神も仏もいないわけだよ。いるなら、この哀れな殺人鬼に天罰が下ってるだろう。けど彼はぴんぴんしてる」

理不尽な世の中だ、と呟く悠は、皮肉げな微笑を浮かべていた。

「それすら見惚れるほど美しいのだから、全く詐欺だと流星は思った。

「……で、今日はこの教会に行くのかよ」

どぎまぎしてしまったことをごまかすように問うと、悠は「まぁね」と答えた。

「下見だよ。制服じゃ目立つから、着替えてね」

「つうか、それだったら俺、いらなくね？　そもそも着替えなんて持ってねーし」

「あるよ」

悠はそう言い、ソファーの脇に置かれていた紙袋を渡してきた。中身を見ると、黒地に赤いラインが入ったTシャツと、デニムのズボンが入っている。

「……用意いいな」

「まぁね」

ふふん、と鼻を鳴らす悠。色々ツッコみたいところだが、今はとりあえず黙っておくことにした。

「……あぁ、そういや犯人らしき男の顔どんなだ？」

ふと思い、訪ねてみると、悠はまた写真を一枚寄こしてきた。
受け取り、見てみると、思ったより若い外国人男性が写っていた。
隠し撮りされた写真なのだろう。顔はレンズを向いておらず、あらぬ方向を見ている。
「……外国人？　いや、ハーフか？」
「うぅん、生粋のイギリス人。名前はジョン・ディグル。その教会の神父だ」
「へぇ。シスターとかは」
「そのシスターが、いなくなった女性の一部だよ」
悠の返答に、流星は訊かなければよかったと後悔した。
「まぁ、何はともあれ」
悠は立ち上がり、髪を後ろに払った。
「そろそろ行こうか」
「え、俺まだ着替え……」
「下で待っとくから、早くね」
「お、おう」
流星は慌てて紙袋から服を取り出す。悠は背を向け、そのまま部屋を出ていった。

流星は勿論、悠もキリスト教信者ではない。
ゆえに、教会に入るのは二人して今回が初めてだった。
「俺は、いわゆる無宗教だけど」
流星は教会内を見渡した。
「悠は仏教なのか？」
教会内はテレビに出てくる、よくある造りだった。
幾つも並んだ横長の椅子、教会の最奥には十字架がかかげられている。その下には、大きなオルガンがあった。
先の質問は何気無いものだったが、悠はちゃんと答えてくれた。
「私――というか、私達かな。無宗教者だよ。仏教の考えは退魔師の仕事を否定してるからね」
「否定？」
「仏教では、霊は存在しないとされる。人は死んだ後、六つの世界のいずれかに生まれ変わるって考えがあるからね」
悠の声が教会内に反響する。どうやら、音が響きやすい構造になっているようだ。
「いわゆる輪廻転生ってやつだけど、まぁだから現世に魂が――つまり霊がとどまることは無いってこと。思想上ね」
「でも霊は確かにいるし、俺達の仕事にそれを狩ることも含まれてて」
そこで流星は引っかかりを覚えた。
「あれ？　でも霊を祓う時とか、経読んだりしてね？」
「まぁね。そこから解るように、仏教は様々な思想が混ざりに混ざって現代に至ってるんだよ。宗派が分かれたりしてるからね」

悠は肩をすくめた。
「仏教だけじゃない。キリスト教にもそれは言えることだよ。例えば」
悠は口を閉ざした。どうしたのかと思い、前方を見た流星は声を上げそうになる。
「どうかしましたか？」
そう声をかけてきたのは、例の神父――ジョン・ディグルだった。殺人鬼かもしれない男だ。流星は喉にへばり付いた言葉を飲み込もうとして、息をつまらせる。
その間に、悠がすっと前に出た。
「いえ。こんなところに教会があるのって珍しいから、ちょっと入ってみたんです。いけませんでしたか？」
愛想笑いを浮かべた悠に、ジョンは驚いたように目を見開いた。当たり前だ。悠の美少女っぷりは完全に枠を越えている。常識のと言うべきか人のと言うべきか、流星には解らないが。
「い、いえ。こんな可愛らしいお嬢さん、いつでも大歓迎ですよ」
そう切り返したのは、さすが紳士の国イギリス出身だ。それにしても流暢な日本語である。
「日本語、上手ッスね。ずっとこっちにいるんですが？」
流星が尋ねると、ジョンはにこやかに頷いた。
「はい。今年でもう十年になります。まぁ、ちょくちょく本国に帰ったりしてますがね」
「どこの国から来られたんですか？」
今度は悠が訊く。知ってるくせに、実に白々しい。
「イギリスです」
「そうですか。どうりで紳士的だと」
「はは、まぁイギリス人全員が紳士だというわけではありませんがね」
ジョンは笑った。その様子を見る限り、とても殺人犯だとは思えない。

しかし、見ただけでは腹にどういうものを抱えているかなど解らないのだ。流星は、それを何度も目の当たりにしている。
それに、流星自身も『化物』を抱えているのだ。彼は違うと、どうして言い切れよう。
流星が疑いの目で見ていることに気付いていないだろうジョンは、背後の十字架を振り返る。
「日本はいいところですし、日本人もいい方が多いのですが……神の教えを信じる方が少ないのは、哀しいことです」
「日本人は、信仰心が薄いですからね」
「ええ。おまけにその数少ない信者であるシスター達が、最近行方不明だったり殺されたりして……」
悩ましげにため息をつくジョン。実に絵になる。さぞかし多くの女性をとりこにしてきただろう。
流星のジョンに対する疑惑がだんだん嫉妬じみてきたところで、悠が身体をひるがえした。
「そろそろおいとまさせていただきます。時間を取ってしまってすみません」
「いえいえ。なんなら、紅茶を一緒に？」
「いいえ、おかまいなく」
悠は笑顔でジョンの申し出を断り、教会の出口へ向かっていく。
流星は置いていかれてはたまらないと、ジョンに軽く頭を下げて悠を追いかけた。

足早に教会を出ていった悠に追いついた流星は、悠の肩に手を置いた。
「どうしたんだよ、そんなに慌てて」
はたから見れば、ただ歩くのが速いとしか判断されない悠の行動。
しかし流星は、彼女がせかしていると感じ取った。多分理由は、あの神父だろう。

「やっぱりあいつ、妖魔か半妖なのか？」
「だったら君も気付いてるでしょ。違うよ、あの男……私に催眠術をかけようとした。
「は！？」
流星は目を丸くして悠を凝視した。
「俺、気付かなかったけど……」
「私に限定されてたみたいだからね、気付かなかったのも無理無い。今でもちょっと気持ち悪いよ」
悠は額を押さえた。よほど不快な思いをしたのか、眉間にしわが寄っている。
「かなり強力だね。私じゃなきゃ、すぐかかってた。多分、女性を引き込む時にあれを使ったんだろう」
「……え、それってつまり、次の標的に悠が選ばれたってこと？」
流星は固まった。悠が狙われたことではなく、ジョンの無謀さにあきれてである。
知らないとはいえ悠を狙うなんて、命知らずもいいところだ。いや、命いらずか。
「何ていうか、ご愁傷様って感じだな……って！？」
流星はのけぞった。
不可視の攻撃を受けたとかではなく、また髪を引っ張られたとかでもなく。
悠に、いきなり抱き付かれたからである。
「ちょ、ゆゆゆゆゆ悠！？」
「うるさい、黙って」
「いや、何で急にっ」
「……嫌？」
「うぐっ」
狙ってなのかどうか解らないが、上目遣い（しかもうる目）プラス小首を傾げられては、流星も何も言えなくなる。
どころか、幾らでもどうぞと言いそうになった。

……付き合ってもないのに何やってんだと思ったが。
一ヶ月前の戦いのさなかに悠から告白まがいのことをされた流星だが、実を言うとその返事をしていない。
聞き間違いや嘘だったらと思うと、怖くて言えないのだ。
悠のことを前から好きだった流星だが、気が付けば引き戻せないほどになっていた。
引き戻せないほど、好きになっていた。
誰かをここまで想うことなど、初めてかもしれない。もしかしたら恋自体初めてかもしれない。
そう考えてしまうほど、自分は悠を好きになってしまった。
「……はぁ」
流星はため息をついて悠の髪をすいた。すると、悠は目を細めてすり寄ってくる。まるで猫みたいだ。
付き合ってる以前に外で何やってんだと自分にツッコんだ流星だが、幸運なことに周りには誰もいなかった。
「……で、これからどうする？」
気持ちをまぎらわせるためにそう問うと、真意を察してくれたのか「今夜動く」と答えてくれた。
「私を標的にしたなら、早めに動くべきだろう。さっき確認したけど、あそこ地下があるよ」
「……さっきの数分で？」
「足音と空気の流れでだいたいね。さて」
悠はなぜか更にくっついて微笑した。その妖しげな笑みに、流星の背筋がざわめき立つ。
悠が今浮かべている笑みは、妖艶と言ってもいいような表情だった。
「私を狙ったこと、後悔させなきゃね」
――――

どのような場所であろうと、深夜の暗い場所は怖いものだ。
どうでもいいことを再確認し、流星は窓から教会内を覗き込んだ。
「誰もいねぇな」
「シスター達は通いだったらしいし、そもそも全員死んじゃったり行方不明だったりだからね」
悠は肩をすくめ、教会の裏手に回った。
「今思ったけど、朱崋（シュカ）の転移術使った方が早くねぇ？」
同じく裏手に回った流星は首を傾げた。
「転移術は便利だけど、力の流れとかで相手に気付かれる可能性がある。リスクはできるだけ無くしておきたい」
悠は裏口のドアノブに手をかけた。
「ん……開いてる。不用心だね」
「まぁこっちには都合いいけど」
流星は後ろを確認しながら言った。
「……偶然かな」
「は？」
「いや、何でもない」
悠は首を振り、ドアを開けた。
ここは教会内にある生活スペースのようで、長い廊下の途中には同じ造りのドアが幾つも並んでいた。
「それで、地下の入口はどこにあるんだ？」
流星は声をひそめた。どこにあの神父がいるか解らないのだ。
「多分、あのパイプオルガンの近くだと思う。行くよ」
悠はさっさと進み出した。土足だが、どうやらここはそれでも大丈夫のようである。
それ以前に、何でハイヒールなのに悠は足音を立てずに歩けるんだろうか。
流星はそんなことを考えながら後に続く。スニーカーのため、足音は気にしなくてもいい。
進んでいくと、質素なドアに突き当たった。おそらくこれが教会

に続くドアだろう。
悠はドアへ手を伸ばした。
「っ、悠っ」
流星は振り返りながら悠を呼んだ。さっきまで声をひそめていたが、今は鋭くなったのを自覚する。
ひそめる必要が無くなったのだ。
神父が、背後に現れたのだから。
「何をなさっているんですか？」
ジョンは口元に笑みを浮かべたまま尋ねてきた。
だが、目は笑っていない。空色の瞳はほの暗く、美貌は張り付けた面のようになっている。
流星は戦慄した。まさかこんな早く見付かるなんて思わなかった。
「こんばんは、神父さん」
しかし、こんな時でも悠は冷静だった。微笑さえ浮かべていた。
「夜分にすみません。探し物がありまして」
「こんな夜中にですか」
「ええ。夜中だからこそです」
悠は笑いながら教会に続くドアを蹴り飛ばした。
大きな音を立ててドアが開く。その先にあるのは、誰もいない教会。
誰もいない教会、のはずだった。
「な……！？」
流星は絶句した。そこに、本来いるべきでない者達がいたからだ。
そこには、数人の女性が倒れていた。眠っているようだが、身体には太い鎖が巻き付いている。よく見れば、修道女姿の女性もいた。
「まさか行方不明になった……！？」
「のようだね」
悠は彼女らを一瞥した後、ジョンに向き直った。
「ご説明願いますか？　神父さん」
「……君は」

ジョンの顔が厳しくなった。
「一体何者だ。どうして彼女達に気が付いた？」
「確かに外からみえませんでしたね、彼女達は」
悠は小首を傾げた。
「けど結界を張れば、視認させなくすることはできる。おそらく貴方は、地下に彼女達を閉じ込めていた。その後、夜になってから彼女達を引きずり出して殺す。違いますか？」
「最初の質問に答えろ」
「何者か、ですか」
悠は笑みを深め、ジョンを見据えた。
「妖魔を狩る存在、退魔師です。貴方の国では、エクソシストなんて呼ばれてましたっけ？」
「っ……」
「貴方の罪状、狩らせてもらう」
悠の不敵な笑みを見て、ジョンの顔がひきつった。が、急に低く笑い出し、やがてそれを哄笑に変える。
「なるほど。私に憑いた悪魔を祓うというわけですね。しかし」
と。彼が左手を振ると同時に、足元から紫色の何かが幾つも突き破ってきた。
紫色の何か――植物のツルのようで、表面がでこぼこしている。それが流星と悠に迫ってきた。
「私に憑いているのは、悪魔ではなく天使ですよ」
「こんな化物植物みたいなのが天使？　笑わせないでよ」
悠は鼻で笑い、流星と共に後ろに跳びのいた。先程まで二人がいた場所を、ツルがうがつ。
「それで内蔵を奪ったの？　どうやったから解らないけど……」
「君は自分の心配をした方がいい」
ジョンは不気味に笑ったまま、左手を振るった。
とたん、着地した悠の足元が崩れ、そこからツルが飛び出してきた。ツルは倒れそうになった悠をとらえ、絡み付く。

流星はそれを見て、腰のホルダーから小刀を抜こうとした。
一ヶ月前ならともかく、今なら悠を傷付けずにツルを焼き斬る自信があった。
だが流星の足元からもツルが無数に現れ、たまらず後ろに下がる。
悠がいる教会から離れ、神父の近くへ。
「流星！」
悠の悲鳴に似た声に、流星は一瞬ほうけた。その後、嫌な気配を感じて振り返る。
迫ってくるのは、化物ツルだけではなかった。
失念していた。諸悪の根源を。
やばい、と思った時にはもう遅い。
ジョンの持った金属の棒は、流星の脳天を打ち据えた。

悠は舌打ちしたい気分だった。
まさか流星を人質に取られるとは思ってなかった。
「やはり……何度見ても綺麗だ……」
ツルでがんじがらめにされ、動けない悠を見つめるジョンは、ほう、とため息をもらした。
悠はそのため息に思わず顔をしかめる。
妖魔であるこのツルから逃れるのは造作も無いが、ジョンの足元に転がっている流星のせいでそれもできない。
もう少し離れていれば助け出すこともできるが、ジョンとの距離がほとんど無いのが痛い。
「……ふむ。ただ」
「……？　何」
ジョンの視線が顔から下に向いたことに、悠は首を傾げた。
「身体が残念だな」
「っ……！？」
めったなことでは動揺しない悠は、彼の一言で大きく傷付いた。
「ひ、人の気にしてることを！　どうせ胸無いよ！　ていうか、子供にそんなの求めないでよ！！」
悠の唯一のコンプレックス。それは胸が小さいことである。ちなみに現在Aカップ。
悠はひとしきり叫んだ後、息を整えて「それで」とジョンに問うた。
「貴方の目的は何？　ただの殺人なら、わざわざこんなものに頼る必要無いはず」

「勿論。私には崇高な目的がある」
ジョンは胸を張った。
「私はね、完璧が欲しいんだよ」
「完璧？」
「正確に言うと、完璧な伴侶だね」
ジョンは教会で倒れたまま動かない女性達を見渡した。
「皆誰もがその容姿に何かしらの欠点を持ってる。完璧な容姿の女性など、女優でもいない」
ジョンの言葉を聞きながら、悠は頭の中で一つの仮説を立て始めていた。
おそらく正確の仮説。ほぼそれだけという仮説だ。
前にも似たようなことがあった。あの時は顔だけだったが。
「そこで、私は女性のいい部分を切り取り、それを繋ぎ合わせて理想の女性を作ろうと考えた」
「内蔵を取り出したのは中身を手に入れるためか……でもどうやって？」
「簡単だよ」
ジョンの言葉と同時に一本のツルが悠の口元まで移動してきた。
「このツルで中を取り出せばいい。口から入ってね」
「ふぅん」
悠はうねうねと動くツルを冷たく見つめた。
なるほど。ツルで中をいじり、もっともいい部分を取り出していたわけか。
「参考までに訊くけど、中と外、どっちを先に盗るの？」
「中からだ。……それにしても」
ジョンはいぶかしげな顔をした。
「さっきから、いやに冷静だね。怖くないのか？」
「怖い？　何が？」
悠はせせら笑った。
「なぜ貴方を恐れなくちゃならない？　私は貴方を嘲りこそすれ、

畏怖の念など抱かない」
「強気だな。それとも何かの時間かせぎか？」
「さぁね。どうかな」
悠はとぼけてみせた。ジョンの顔が苦々しくなる。
悠はそんなことは意に介さず、続けた。
「私相手にかけ引きは無謀というものだよ。こう見えて、それなりの修羅場はくぐり抜けてる」
「……どちらにせよ、天使を味方としている私が負けることが無い」
「天使、ね」
悠は自分に絡み付く太いツルを見下ろした。
「やっぱりどう見ても妖魔――貴方の国で言うところの悪魔にしか見えないけど」
「天使の姿は千差万別だ。統一性は無い」
「そう。知らないみたいだから教えとくけど」
悠は右手首をひねった。
「妖魔の姿も、千差万別なんだよ」

バチィィィィィィィィィィンッ

悠の動きを封じていたツルが、全てはじけ飛んだ。
こなごなに。ばらばらに。
あとかたも無く――砕け散った。
「な、なっ……」
「やっぱり退魔の術が効いたね。そもそも妖魔だから妖気を放つんだ。妖気を放つ天使なんて、聞いたこと無い」
悠は髪を後ろに払い、微笑した。
「さて、根元があるはずだ。それを断ち切らせてもらうよ」
「……っ、待て！　こっちには人質、が……」
ジョンは目を下に向けて、固まった。
当たり前だ。先程まで足元にいたはずの女達がどこにも、少なく

とも教会内のどこにもいないのだから。
「私の腹心――と言うべきかな？　そういう存在のものが外に連れ出してくれたよ」
「馬鹿な！　私に気付かれず、あの人数の女を！？」
「あいにく……それは人ならざるモノでね」
「ぐっ……だ、だがこの男だけでもいれば」
「っつー。あー、いってぇ」
突然。
気絶していたはずの流星が起き上がった。
頭から血が流れ、頭の骨は割ればせずともひびぐらいは入っているはずなのに、全く平気そうである。
鬼童子の治癒能力。そして頑丈さ。
悠はそれを見越して、流星が起きるまで時間かせぎをしていたのだ。
時間かせぎ。
まさに、ジョンの言う通りだったのである。
「殺す気かよ……あー、なんかくらくらする」
「流星、起きるの遅い」
「頭殴られた奴にかける言葉それ！？」
よかった、元気そうだ。悠は内心でほっとする。
しかしそれをおくびに出さず、注意をうながす。
「流星、頭またやられるよ」
「へ？」
流星の顔が上を向く。その顔に、ジョンの鉄棒が迫った。
「っと、うぉ」
しかし流星は、前転の要領でそれを回避した。その後すぐ、小刀を抜く。
「二度も頭殴られてたまるか」
「これ以上馬鹿になるわけにはいかないからね」
「怒るぞ！？」

叫んだせいで頭に響いたのか、頭を押さえる流星。しかし血は早くも止まってきているようで、頬を伝っている血はぬぐってもまたたれることは無かった。

「で、これからどうする？」

「そうだね……」

流星にそう問われ、悠は自身の唇に中指を押し当て思案した。

ジョンは明らかに追い詰められ、焦っているようである。今なら交渉ができるかもしれない。

「選んでもらおうか」

「え、選ぶ？」

ジョンの声が上ずる。整った顔は、完全におびえていた。

「おとなしく妖魔を引っ込めて警察に出頭するか、このまま抵抗して痛い目を見るか。前者を選んだ方が、よっぽどいいと思うけどね」

ただ、これまでの罪状を考えると極刑はまぬがれないかもしれないが――それは言わないでおく。無駄に興奮させるだけだろう。

「後者を選んだ場合は、精神的によろしくないと思うけどね」

「っ、く……」

「救いを求めるか否か、全ては、貴方次第だよ」

「っ、の……」

ジョンは左手を振った。それに呼応し、無数のツルが床を半壊させて現れる。

足場が不安定になったところで、全てのツルは悠と流星に向かってきた。

「流星」

「おう」

しかし二人は慌てない。まず流星が前に出る。小刀の炎は、すでに大きくなっていた。

「せーのっと！」

流星はふざけたかけ声と共に小刀を振るった。

刃から炎のかまいたちが放たれ、ツルにぶち当たる。動きが止ま

ったところで、流星は視線を落とした。
床下から出現した大きな穴。おそらく地下に続いているのだろう。
ツルは、そこから伸びているようだ。
「下か？」
「下だね」
「そうか」
流星は一つ頷き、小刀を振り上げた。
「っ、やめ――ぐあ！？」
止めようとしたのか、ジョンは右手を動かそうとした。が、悠は一息で間合いを詰め、彼の腹に蹴りを入れて動きを止める。
「この左手があの植物妖魔と連動してることぐらい、すでに見抜いているよ」
悠は更に足払いをかけ、ジョンを床に叩き付けた。そして彼の左腕を掴み、背中の後ろで固定する。
「うおぉぉぉぉぉ！」
流星の雄叫びと共に、小刀の炎が大きくなった。そのまま振り下ろすと、巨大な炎の塊が放たれる。
炎の塊は穴に落ちていき、その中を照らす。一瞬全体がツルに覆われた目玉が見えた気がしたが、すぐに吹き出した火柱で見えなくなった。
火柱は教会の最上部まで届き、天井をなめ上げる。
それを見た悠は、まずいと思った。
「流星、今すぐここを出るよ」
「ん？　何で？」
「多分あと一分もしないうちに、ここ焼けるから」
「……マジで？」
原因を作った流星は、顔をひきつらせて熱さ以外が理由であろう汗をかいていた。

焼けて崩れていく教会をバックに、流星は頭を抱えていた。
「やばいやばいやばいやばいマジやばい」
「大丈夫。いざとなったら黙らせるから」
「誰を!?」
どんな精神状態でもツッコむことを忘れない流星である。というか、今のは無視できない。
女性達はすぐ傍で眠っている。じき救急車が来ると朱嶌が言っていたし、問題無いだろう。
そこで流星は、ある人物がいないことに気付いた。
「あれ？　あの神父は？」
あの目立つ金髪が見当たらないことに少し慌てると、悠は肩をすくめた。
「知らない」
「……あの中とか言わないよな？」
「いや、外に引きずり出しはしたけどね。でも逃げた」
悠は音を立てて崩れる教会を眺めながら携帯を取り出した。
「ま、逃がさないけどね。高野（タカノ）刑事に連絡して、指名手配してもらう」
「……その前に消防車じゃね？」
「呼んであるから問題無い。それより移動した方がいいよ」
悠がそでを引っ張ってきた。
遠くからサイレンが聞こえてくる。近くの民家に電気がついたところを見るに、民間人も起きたようだ。
「え。何で？」
流星が首を傾げると、悠は眉間にしわを寄せた。
「自分が放火したこと、忘れたの？」
「あ……」
そうだった。教会が燃えているのは、元はと言えば自分が力を入れ過ぎたからだった。
「逃げます」

「言われなくても気付いてよ……」
悠があきれたようなため息をもらしながら携帯を耳に押し当てた。
そのまま早足で歩き出す。
「もしもし、高野刑事？　実は……」
悠が電話の向こうにいるであろう高野次郎（ジロウ）と話し出す。流星は彼女の後に続きながら、後ろの女性達を振り返った。
女性達はまだ倒れたまだ。ぴくりとも動かない。
彼女達はあの男に何をされたのだろう。酷いことには違い無いが、どんな酷いことかは想像できない。
いや、したくないのか。
他人の狂気など知りたくないし、興味も無い。いや、そう自分に言い聞かせている。
悠にも言われたではないか、いちいち感情移入するなと。苦しむのは流星だと。
「……ねぇ」
と。通話は終わったのか、悠が声をかけてきた。
「何だ？」
「流星ってさ……やっぱり胸の大きい人の方が好き？」
「はぁ？」
何だ、その脈絡の無い質問は。
けれど、問われたのだから答えねばなるまい。
「そうだなぁ……そりゃ、無いよりあった方がいいのかもしれないけど、俺気にしたこと無いな」
興味が無いと言ったら、嘘になるが。
それは言わないでおく。言ってはいけない気がしたのだ。そしてそれは、実際正しい。
ともあれ。
「そっか……流星は気にしないんだ……そっか！」
何やら嬉しそうな悠が見れたので、流星はとりあえずよしとした。

――

ジョンは逃げていた。

何からと問われれば、様々なものから、と彼は答えるだろう。

それは先程の二人からだったり警察からだったり――

だが彼が最も恐れているのは、それらではない。それらなどではない。

彼らに隠れてやっていたこと――今回のことがばれれば、自分は殺されてしまう。

警察に保護を求めようか。いくら彼らでも、犯人を守るぐらいやってくれよう。

――いや駄目だ。彼らでは無理だ。

『あいつら』は、その気になれば一個師団を潰すこともできる。平和に慣れ切った日本警察は、たちまち全滅するだろう。

なら、先程のあの二人は。素人目から見てもかなりの実力だ。おそらく、幹部とも渡り合えるだろう。

――いや、無理だ。無理だった。

あっちには『あいつら』だけでなく『あの方々』までいるのだった。

『あの方々』の前では、人の子などひれ伏すしかない。刃向かう術（すべ）が無いのだ。

ジョンは絶望の底に落とされた気分だった。いや、実際そうなっている。

もう道など無いのだ。後ろの道は崩壊しているし、目の前の道は途絶えている。こうして無茶苦茶に逃走すること自体、もはや何の意味も無い。

ジョンは顔を歪め、どうしてこうなったと自問自答していた。

そんなことをしていたからだろう。前を全く見ること無く、結果誰かにぶつかってしまった。

「うわ！？」

しかも相手の方があきらかに小柄だというのに、ジョンの方が無様に倒れてしまう。
勢いよく走っていたのはジョンであり、相手はぼうっと立っていただけなのに。
「やっと来たか。待ちくたびれた」
否、彼は立っていたのではない。待っていたのだ。ジョンのことを、待ち構えていたのだ。
「その顔を見る限り、手酷くやられたらしいな」
「は……？」
ジョンはしりもちを着きながら彼を見上げた。
自分と同じ金色の髪に、明るいオレンジの瞳、小柄な体躯は少年のようで、整った愛らしい顔立ちにはしかし表情は無い。
ジョンは一瞬呆けた。こんな青年、会ったこと無い。
「何だ、頭の回転が遅い奴だな」
青年はつまらなそうに鼻を鳴らした。
「俺が『使徒』だと、見抜けもしないとは」
「……っ！」
ジョンは目を見開いた。
「ま、まさか……」
座り込んだまま、後ずさる。立って逃げたいが、腰が抜けたらしい。足に力が入らない。
「ん？　まだ信じられないか？　ならこれで満足か？」
青年は長い前髪をかき上げた。あらわになった白い額。そこに刻まれていたのは、十字型の傷だった。
「う、うあぁ……せ、聖痕（せいこん）！？」
「やっと理解したか。愚鈍な奴だ」
青年はため息をついて、左手をジョンの頭の上に置いた。
とたん、ジョンの頭が燃え上がる。マッチもライターも無く、発火した。
「ぎゃあああぁぁぁ

「おまえのその残念な頭、消し炭にしてくれる」
燃え上がる頭に手を置き続ける青年。否、彼が手を置いているからこそジョンの頭は燃えているのだ。
十数秒ほどして、青年はジョンの頭から手を離した。
火の消えた頭は、まるで燃えた後のマッチ棒のようだった。
黒こげた頭と焼けていない身体。支えを失ったそれは、地面に何の抵抗も無く倒れ込んだ。その時の衝撃で、頭は砕けてしまう。
脳髄まで焼けてしまったらしく、血など一滴も出なかった。
それを無感動に見つめ、青年は呟く。
「神の教えに背かなければ、もう少し長生きできたろうに、愚かな奴」
青年は未練無くその場を後にした。季節外れなコートをひるがえし、音も無く歩く。
「神よ、愚かな罪人に裁きを与えました。全ては貴方の御(おん)ために……」
そう言う彼の口調は、先程と打って変わって熱を帯びていた。いっそ、狂熱と言っていいぐらいに。

第二十九話　かくれんぼ<上>

もういいかい、と言うと、もういいよ、と返ってくる。
その声はどこから聞こえてくるのだろう。辺りを見渡してみても、誰もいない。
ふざけ半分で来てみたのに、ふざけ半分で言ってみたのに、まさか本当に返事が返ってくるとは思わなかった。
あの噂が本当だとは思わなかった。
気味が悪くなって、彼は踵を返した。
一歩踏み出すごとに床がきしむ――なんてことは無い。当たり前だ、この建物は木でできているわけじゃない。
なのにこの建物は、旧校舎と呼ばれた。
旧校舎のイメージと言えば、木でできた、今にも崩れそうな古い建物だ。更に現在使われていないという付加要素も付いてくる。
しかしここは違う。築数十年の比較的新しい校舎で、現在も使われている。
しかし学校の古い建物には、えてして怪談というものが存在するものである。彼が試したのも、その一つだった。
七不思議――というほどではないが。
謎の噂話――ではある。
しかしまさか、それが本当だなんて誰も思わないだろう。彼がそうだったように。
いつしか彼は走り出していた。
背後から誰かが追いかけてくる感覚。そんな存在いるわけないのに、誰かが自分を捕まえようとしているように感じた。
誰もいない。夕方に学校に残っているのは、部活のある生徒か、

教師ぐらいだろう。当然動物もここまで入り込めるわけない。
生物ではない。なら、後ろにいるこの気配は、一体何だ。
彼は走りながらそぉ、と振り返った。
振り返ってはいけない。本能に、そう警鐘を鳴らされていたのに。
「見ぃ付けた」
彼の目と、何も無い虚(うろ)がかち合った。

――――

「死亡？　しかも焼死？」
椿邸(ツバキ)にて、恭弥(キョウヤ)は妹の話に眉をひそめた。
久々に制服に腕を通しつつ、携帯を右肩と右耳ではさんで通話している。
「何で、また」
『解らない。どうして炭化するほど燃えたのか。ガソリンでも使わない限り、人があれほど燃えるわけ無いんだけど。しかも頭だけ』
悠(ユウ)は苦々しげに言った。きっと表情もよいとは言えないだろう。
『すぐ捕まるとは思ってたけど、死体でとは思わなかったよ』
「哀れと言えば哀れだな、その神父」
制服を着終わり、恭弥は携帯を持ち直した。
「一体誰だろうな。そんなことをするのは」
『さぁね。ただ、似たようなことが近くの寺で起こったらしいから、そっちを見るつもり。ごめん、恭兄。朝からこんな話して』
「いや、電話したのはこっちだからな。朝早くから近況報告なんてした、僕の方が非常識だった」
恭弥は机に立てかけておいた鞄を手に取った。
『今日からだっけ。学校行くの』
「あぁ」

恭弥は自然と、唇が緩むのを感じた。
「やっとだ」

――――

教室に入ると、クラスメイトの視線が自分に集まった。
それに少したじろぎながら、「おはよう」と笑顔で言うと、まっさきに友人達が駆け寄ってくる。
短距離ランナーかと思うようなスピードだった。
「恭弥！　やっと復活かよ！？」
「病気だって聞いたけど、もう大丈夫なのか！？」
「あぁ。心配かけた」
恭弥が微笑を深めると、友人達はばしばしと背中やら肩やらを叩いてきた。
「痛、痛いって」
「マジで心配したんだからな！　もっと申しわけ無さそうにしろよ」
「悪い。悪かったよ」
恭弥は友人の攻撃を逃れるために教室の奥に進んだ。そこでふと、一人の生徒と目が合う。
それは、なぜか熱っぽく自分を見る女子達でも、なぜかぼうっとした顔をしている男子生徒でもない。
知らない生徒だった。いや、そもそも彼は生徒なのだろうか。
背の高い青年だった。長い艶やかな黒髪を首の後ろで束ねており、瞳は深い群青色だ。顔立ちは東洋人離れしており、落ち着いた雰囲気のせいで大人っぽく見える。
着ているものも制服ではない。半袖の白いシャツに袖無しの黒いベスト、それに黒いズボンだ。それプラス容姿もあいまって、教室ではかなり浮いている。
「あぁ、あいつ？」
恭弥の視線に気付いたのか、友人が青年のことを説明してくれた。

「転校生だよ。イギリスからの留学生。一昨日来たんだ」
「へぇ……」
あと三週間ほどで一学期が終わるというのに、なんとも中途半端な時期に来たものだ。
……人のことは言えないが。
「初めまして」
と。青年は恭弥の前まで歩み寄り、左手を差し出した。
「エドワード・ブラウンです。よろしくお願いします」
思ったより流暢な日本語だった。よほど勉強したのだろう。この学校に入れたことといい、相当頭がいいに違いない。
「椿恭弥だ。こちらこそよろしく」
恭弥も左手を差し出し、彼の手を握る。そこで青年――エドワードが右手に手袋をはめていることに気付いた。
「あぁ、これですか？」
エドワードは右手を持ち上げて苦笑した。
「子供の頃、火傷を負いまして。その跡が残ってるのでこうして隠してるんです」
「そうか……」
恭弥は手袋から視線をそらした。口を開こうとしたが、大きな足音に驚いて振り返る。
「恭弥！！」
ほとんど咆哮に近い声と共に入ってきた親友に、恭弥は頭を抱えた。
「もう少し声のトーンを下げろ」
そう言った直後、恭弥は親友――透（トオル）のタックルもどきを回避するはめになった。
「恭弥、メシ喰おうぜー」
「ん？　……あぁ」

昼休みを告げるチャイムが鳴った十数秒後、透が教室に入ってきた。
自分のクラスと透のクラスはそれなりに離れているはずなのに、随分早い。恭弥はあきれを通り越して感心した。
がやがやと自分の周りに友人が集まる。立ち上がりかけた恭弥は、結局また腰を下ろした。
「おーい転校生。一緒に昼飯喰わねぇか？」
透が後方に座っているエドワードに声をかけた。エドワードは微笑んで頷く。
「ご一緒させていただきます、あと、僕のことはエドワードと呼んでくれてかまいませんよ」
「んじゃ、エドワード」
相変わらず透は他人と打ち解けるのが早いようだった。
しばらく昼食を取って談笑していると、友人の一人がさも名案というように「そうだ」と口を開いた。
「なぁ、肝試しやんねぇ？　恭弥の復帰祝いと転校生歓迎かねて」
「は……」
恭弥はびきりと固まってしまった。
「季節もちょうどいいし、いいんじゃないか？」
「いや、待て――」
「キモダメシとは何ですか？」
恭弥の言葉を、エドワードがばっさり切ってしまった。恭弥は口を開閉させてまた固まる。
「いわゆる度胸試しだよ。心霊スポット回ったり、怖い話したりさ」
「あぁ、Ｔｅｓｔ　ｃａｕｒａｇｅですね」
エドワードは母国語を口にして納得した。
「いいですね。面白そうです」
「だろ？　ちょうどいい怪談話もあるし……」
「あぁ、それってあの――」
目の前でくり広げられる会話に、恭弥は頭を押さえた。

「何か……やばい方向に行きそうだな」
透がそっと耳打ちしてきた。
彼は恭弥が退魔師だと知っている唯一の友人だ。ゆえに、彼もこういうたぐいの話の危険性を知っている。
しかしここから話をそらせるほどの話術を彼は持ち合わせてないし、恭弥も楽しそうに話す友人達に割って入れない。
いざという時は式神を使おうなどと、諦め気味の思考になってしまった恭弥だった。
「……それで、その噂というのは何だ？」
「お？　恭弥も乗り気になったか？」
嬉しそうにする友人。……まずったかもしれない。
「ずっと休んでたおまえや、転校してきたエドワードは知らないだろうけど、旧校舎で今、変な噂が立ってるんだ」
「この学校、旧校舎なんてありましたか……？」
エドワードが首を傾げている。恭弥は説明を加えた。
「第一校舎のことを、生徒が旧校舎と呼んでいるんだ。こっちの第二校舎は、三年前にできた建物で、向こうは数十年前のものだからな」
「へぇ……だから旧校舎ですか」
「あぁ。ところで、その噂というのは？」
話を戻すと、友人は「実はさ」と肩をすくめた。
「前から、あったのはあったらしいんだよ。七不思議――というわけじゃないが、怪談の一つとして」
「つまり……最近までほこりをかぶっていたというわけか」
「そう。内容は……えっと、夕方に多目的室の前でもういいかいって言うんだ。そしたら、もういいよって答えが返ってくる。その声の主に捕まえられると、殺されるって話だ」
「……ちょっと待て。少しおかしくないか」
恭弥はひっかかりを覚えて口をはさんだ。
「もういいかいと言うのはこちらだろう。こちらが捕まえる側、つ

まり鬼だ。なのになぜ、こちらが捕まる？」
「さぁ……それは俺達も気になっているところなんだが、誰も解らないんだ」
友人は困ったような顔をした。もっとも彼らは、怪談話の矛盾など特に気にしていないだろうが。
いや、それよりも。
「何で、そんな話が急に広がり始めたんだ？」
恭弥は一番気になっていたことを尋ねた。
「えっと……二週間くらい前から広がったんだけど、きっかけは生徒が一人、行方不明になったことかな」
「行方不明？」
「あぁ。今も見付かってない。それが、さっき話した話のせいだって噂が広がったんだ」
「噂の元は？」
「これだけ広がってんだ。解らねぇよ」
「それもそうか……」
恭弥は考え込んだ。
一体誰が、何のために噂を立てているのだろうか。ただのいたずらか、それとも――
「……蠱針（コハリ）」
恭弥がそっと呟くと、ポケットにしのばせていた人型の呪符が消えた。
式神を旧校舎の方に飛ばしたのだ。何か掴めるといいが――
「……早々面倒ごとに巻き込まれるなんて、全く運が無い」
恭弥は疲れのため息をついた。

――――

悠は高野（タカノ）次郎に依頼を受け、ある街外れの寺にいた。
もっとも、もはやここは寺として機能してはいないだろう。ここ

の住職も含め、一人の例外も無く殺されたのだから。
「焼死体と溺死体が一緒に発見されたんだっけ？」
悠が尋ねると、次郎は頷いた。
「あぁ。……正直見れたものじゃなかったぞ。黒焦げの死体と水で膨れた死体が幾つも並んでるんだからな」
「だろうね。死体が無いからそこは想像するほか無いけど、しかし……」
悠は視線を寺の奥に向けた。
本来仏像がある場所には、今は金属の塊が鎮座している。おそらく、仏像が溶けたのだろう。
「完全な冒涜行為だね。一体何が目的なんだか……」
「妖魔じゃないのか？」
「いや、それが……」
悠は顔をしかめ、髪をかき上げた。
「妖気が、全く感じられないんだよ」
「え……」
「これは人の手によるものだ。おそらく、何らかの目的があったんだろう。そうじゃなかったら、わざわざ仏像をここまで溶かす必要は無い。方法は別としてね」
悠は元仏像元金属の塊に触れた。
「……やっぱり、妖気は感じない。人の手によるもの――人の手だけによるもの。だけど……どういうこと？」
自分の顔が苦々しげに歪むのを感じながら、悠は辺りを見渡した。
「特異能力者の犯行？　西野紗矢（ニシノサヤ）のような力の……いや、もっと攻撃的な……けれど、何で」
「……椿」
次郎に呼びかけられ、悠は意識を現実に戻した。
「何？」
「見せたいものがある」
次郎は部下から何かを受け取った。おそらく証拠品だろう、袋に

入った、金色の棒のようだ。いや、棒じゃない。
「……十字架？」
装飾の無い、ただ金色に輝くだけのそれに、悠は眉をひそめた。
「落ちていた。いや、置いていた、と言うべきか。指紋も何も無かった」
「置いていったなら、もしかしたら宗教関係の事件かもね。……やり過ぎな気がしないでもないけど」
悠は袋ごと十字架を受け取った。
「下部分を見てみろ。文字が彫られている」
次郎の指摘に、悠は十字架の下部を見た。
なるほど、確かに文字が刻まれている。しかも英語だ。
「Ａｐｏｓｔｌｅ――使徒、か」
「やはりキリスト教と関係があるんじゃないのか？　この間の事件といい……」
「さてね。どうかな」
そう次郎に返しつつも、悠は不安をぬぐえなかった。
妖魔でも半妖でもない、ただの人間が起こした、この所業に。
宗教テロなのか。しかし、だったらこの悪意は何なのか――
結論を出すには、まだ情報は足りないようだった。

かくれんぼ<中>

肝試しというのは雰囲気が大切なのだが、なかなかどうして夕方の校舎は怖いようである。

友人達の顔色を見て、恭弥はそう判断した。

退魔師という仕事柄、怖いという感情はマヒしがちなのだ。恐怖には慣れっこなのである。

「それにしても……誰もいないな」

透が辺りを見渡して呟いた。当たり前だ、もうそろそろ六時を回ろうかという時間である。さすがに日も傾いてきた。

「ドキドキしてきました……何が起こるんでしょうね」

エドワードだけはやたらに楽しそうだ。見た目に反して、かなり心臓が強いらしい。

「と、とにかく中に入ろうぜ」

「声、裏返ってるぞ」

企画立案者が情けない……恭弥は嘆息する。

と。黒い蜂が恭弥に羽音も立てず近寄ってきた。

「蟲針」

恭弥が誰にも聞こえないよう口の中で呟くと、蜂は呪符に戻った。

「収穫無しか」

「何だ、式神放ってたのか」

透がそれに気付き、声をひそめて話しかけてきた。

「何か解ったか？」

「何も。妖力が弱過ぎてな、式神を通してだと何も解らなかった」

恭弥は肩をすくめ、先を行く友人達に続いた。

校舎内の教室には、一つも電灯がついていなかった。無論、廊下も例外ではない。

「外はまだ明るかったけど、中はやっぱ暗いな」

透は携帯のライトをつけた。

一寸先は闇――というほどではないが、離れたものだと影でしか認識できない。構造的に、校舎というのは光が入りにくいものである。

恭弥は右側にある階段を見やった。確か多目的室は三階のはずだ。その階段を友人達と登りながら、恭弥は考える。

どうしてもういいかいと答えたこちら側が捕まるのだろうか。こういうたぐいのは、必ずその言葉にそった行動を起こすのに。捕まった後に、何かさせるのか。

いや、そもそもどうしてそんな噂を、噂を流した本人は知り得たのだろうか。やはり教師、もしくは卒業生にでも聞いたのか。

――どれほど考えても解らない。情報が少な過ぎるのだ。せめて噂の元となった事実さえ知ることができれば――

「恭弥？」

透の声に、恭弥は我に返った。

「あぁ……何だ？」

「いや、着いたって」

透が携帯で指した方向を見ると、確かに多目的室の前だった。

「どうした？　やっぱまだ本調子じゃねぇのか？」

「いや、考えごとをしていただけだ。問題無い」

「あ、そう。ならいいけど。頼むぜ、もしもの時はおまえが頼りだからな」

「で、おまえは逃げるんだろう？」

「もち！」

「……阿呆」

恭弥はやれやれと首を振った。

友人達は何やら相談している。大方、誰が例の言葉を言うか決めているのだろう。エドワードはその様子を面白そうに眺めていた。

案の定、彼らはじゃんけんしだした。一回で決まったらしく、一人ががっくりとうなだれる。

ちなみに、企画立案者だった。

「……恭弥」

「却下」

「まだ何も言ってないよ！？」

断られたのがそれほどショックなのか、友人は青ざめた顔を更に青くした。

「くそ……。……じゃあ言うぞ」

諦めの顔で、友人は深呼吸した。そして震える声で例の言葉を口にする。

「も、もももももういいかーい」

……どもり過ぎだった。

これでは出てこないんじゃないかと、全員がため息をつきかけた時――

もういいよぉ。

か細い、耳をすまさなければ聞こえないぐらい弱々しい声が響き渡った。

反響しているのか、こだまのように何度も聞こえる。しばらくして聞こえなくなった後も、固まっていた恭弥達の耳に残っていた。

「嘘、だろ……」

声を上げたのは、例の言葉を言った友人だった。

「あ、あれは噂じゃなかったの、か……！」

友人は声にならない悲鳴を上げた。

当たり前だ。この状況でいきなり肩を捕まれたら、誰だってそうなる。

そのことを予想していた恭弥でさえ、言葉を失った。
掴んだのは、白い手だった。肌の白さではない。骨の白さだ。それが飛び出しているのは、この高校の旧服である学ラン――しかもぼろぼろだった。
やがてぬう、と頭が現れた。
手が白骨化しているのに、その顔は青白いことを除けば普通だった。
黒い短髪の、恭弥達とあまり変わらないであろう歳の青年だった。細い目に収まる茶色の目は虚ろで、どこを見ているか解らない。
「捕まえたぁ」
『彼』は薄い唇を歪ませ、友人に身体を寄せた。
友人は小さく悲鳴を上げ、振り返ろうとした。怖いもの見たさだったのかもしれない。
しかし恭弥は、その行為の危険性を知っている。
「振り向くな！」
恭弥が大喝すると、友人はその動きを止めた。恭弥はその間に、懐から呪符を取り出す。
「走嵐（ソウラン）」
手に持った呪符が瞬時に大狼へ変わる。大狼は学ランの青年の首に喰らい付き、友人から引き剥がした。
「は、え？」
「逃げるぞ！」
呆然と立ちすくむ友人の手首を掴み、恭弥は走り出した。他の者は透が誘導している。
「き、恭弥……さっきのってなまえ……」
「早々に出るぞ。ここは危険だ」
友人の質問には答えず、恭弥は一階を目指した。言っても、後で忘れさせるのだから意味が無い。
階段を駆け下り、出入口まで行く一同。が、そこで問題が起きた。
「あ、開かない……！？」

先程まで開け放たれていた鉄の扉が固く閉ざされていた。だけでなく、びくりとも動かなかった。

おそらく、鍵がかかっているのではあるまい。どうやらここは、完全にあの青年のテリトリーらしかった。

否、ここまでくると、あの青年は妖魔と言うべきだろう。友人達が話していた、あの噂の。

しかし解らない。なぜ、あの青年の手は白骨化していたのだろうか。もしかしたら彼には本体があって、それが白骨化しているのだろうか。

――そういえば、この校舎の多目的室前で呼び出さなければならないと友人は言っていた。逆に言えば、そこ以外で呼び出せないということだ。

多目的室に何かあるのか。そういえば、旧校舎は二十年ほど前に――

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

友人達が悲鳴を上げた。

思考から現実に戻ると、階段から学ランの青年――もとい妖魔が降りてきた。

ゆっくりと。獲物を追いつめたことを確信したように。

式神は例外を除いて術者が離れ過ぎると呪符に戻ってしまう。だから妖魔が倒されていないことには驚きはしない。

ただ、無傷とはいかなかったようだ。首の半分が喰いちぎられている。血は出ていないが。

妖魔は恭弥と目が合うと、ぎい、と笑った。それは冷水のような笑みだったが、恭弥は表情を変えない。

それよりもっと恐ろしい笑みを、恭弥は知っている。

「ど、どうしよう……逃げ、逃げないと……」

「で、でもどこに？」

友人達が騒ぎ始めた。長引かせるのは、ありよくない。

「黒鋼丸（クロガネマル）」

恭弥は再び式神を出した。今度は鎧武者だ。
鎧武者が太刀を振るうと、妖魔は簡単に吹っ飛ばされた。
「え、何あの鎧武者!?」
「恭弥、おまえ一体……」
呆然とするギャラリーを無視して、恭弥は命令した。
「斬れ」

ザンッ

鎧武者の大太刀が妖魔を脳天から縦割りにした。
血は、やはり出ない。どころか、妖魔の姿が揺らめき、やがてかき消えた。
狩った――わけではなさそうだ。
しかし、とりあえず危機は脱したらしい。きい、ときしんだ音を立てて、出入口が開いた。
安堵のため息をつく一同。しかし恭弥は、顔をしかめて妖魔が消えた場所を睨み付けていた。
腑に落ちない。いや、最初からそんなものは感じている。
一体、今回のこの件は、どうなっている。

――――

「確かにそりゃ……変だな」
刀弥（トウヤ）の眉間にしわが寄った。
夜。夕食をすませ、兄の部屋に行った恭弥は、そこで刀弥に高校でのできごとを話した。
刀弥も恭弥と同じ気分に陥ったようで、精悍な顔をしかめている。
「奇妙な違和感がある。妖魔に常識を求めるのは今更だが、こういうたぐいのは矛盾が無いはずだ」
「それに、尋ねるのが襲われる側だ。これも普通――ではないが―

―違う。尋ねるのは襲う側、つまり妖魔の方だ」
恭弥は出された茶をすすった。
「どこかで噂が変わっちまったのかもしれねぇな。怪談や都市伝説で形成された妖魔は、特に人の影響を受けるから、それに合わせて妖魔の性質が変わってもおかしくねぇ」
兄の言う通りかもしれない。噂話ほど不安定な話は無い。伝わる過程で変質してしまうことは、多々あるのだから。
ただ、問題は――
「あの時……狩れなかったってことは、どこかに本体があるということだろう。そしてそれは、おそらく多目的室にある」
「確信持った言い方だな、恭弥。何か確証が得られたのか？」
「帰ってすぐ、インターネットで調べたことがる。氷華（ヒョウカ）に調べさせてもよかったが、いかんせん情報収集向きではなくてな」
恭弥は肩をすくめ、説明を始めた。
「二十年前、うちの生徒が一人、行方不明になっている。宮部隆一（ミヤベ リュウイチ）、当時二年。不良で有名だったらしい。まぁうちの高校だから、たかが知れているが」
「それで」
「その時、うちの旧校舎――当時はそこ以外に校舎は無かったが――建て直しされている。内外の壁を塗り替えたり、な」
「……ふぅん」
兄の反応は、それだけだった。
聡い彼のことだ。こちらの言葉の意味には気付いているだろうが、反応は薄い。
わざとそうしているのだろう。感情をあらわにするような真似を、彼はしない。
「なるほど、不明だった原因がこれで解ったってことか」
「まだ可能性の段階だが……それに、経過と結果にも、不明瞭なところがある」
恭弥は茶を飲み干すと、ため息をついた。

「これ以上噂を広められたら困る。とりあえず元を断ち切るつもりだ」
「今夜か？」
「今夜だ」
「気ぃ付けろよ」
刀弥は苦微笑のようなものを浮かべた。止める気は無いらしい。
ただし、と条件を付けられはしたが。
「一応病み上がりだからな。氷華だけでなくもう一人退魔師を連れていけ」
「もう一人……」
そう言われて、恭弥は思い出す。
そういえば、彼女はまだ帰っていなかった。こんな夜中に呼び出すのは非常識だと思ったが、彼女なら喜んで来るだろう。
刀弥とは違う種類の苦笑を浮かべつつ、恭弥は頷いた。
「解った」
「おう。日が明けるまでには帰れよ」
「うん」
恭弥は刀弥に笑みを向け、その部屋を後にした。
廊下に出た恭弥は、そっと息をついた。
そういえば、退魔師らしいことをするのは久しぶりだ。
ずっと自分は『人柱』だったから。
「……でも、今は違う」
恭弥は言い聞かせるように呟き、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

「僕の予想が正しければ、多目的室の壁の中に本体があるはずだ。問題は例の噂。どうしてかくれんぼや鬼ごっこのような噂が流れたのか。噂自体は五十年近く前にできたようだが……って、聞いているのか、舜鈴（シュンリン）」

恭弥は自身の腕に引っ付いている舜鈴を見下ろした。

「ふふ……恭弥と二人っきり～♪」

「……言っておくが、一応これは仕事だ。デートじゃない」

「恭弥と二人ならどこでもデートだよ。今までの恭弥の看病もデート！」

「凄い理屈だな。……まぁいい。中に入るぞ」

「でも恭弥、鍵は？」

首を傾げる舜鈴の目の前に、恭弥は旧校舎の鍵をちらつかせた。

「事務所から、式神を使って拝借してきた」

「……恭弥って真面目だけど、生真面目じゃないね。今更だけど」

「確かに今更だ。なんせ悪友がいるんでな」

恭弥は肩をすくめた。

「夜の学校に来ている時点で、もう校則違反だ。まぁ例の悪友いわく、校則は破るためにあるもの――らしいぞ」

「あの人らしいね。何でこのガッコ入れたんだろ」

舜鈴はため息をついた。

「まぁそこは気にするな。行くぞ」

「あいあーい」

深夜の校舎を前にして、随分気楽な二人だった。

多目的室の前まで来た二人は、顔を見合わせた。
「妖気、感じないね……」
「変だな……この時間なら、少しぐらい感じてもいいはずなんだが……」
恭弥は多目的室を開けた。
別段変わったところは何も無い。普段通りの教室だ。
「この壁の中に例の妖魔の本体が……？」
「おそらくは。可能性だけの話だがな。気の流れはどうだ」
「う……ん。何か、嫌な感じ。うん、これは……死臭ね」
「……そうか」
恭弥は眉間にしわが寄るのを感じた。
「当たってほしくない予想が、見事に当たったわけか。ふむ、どうするか」
「壁壊す？」
「手当たり次第にか？　そんな暴力的なこと。さすがにできない……」
恭弥は天井を見上げた。舜鈴も同時に顔を上げている。
「現れたか！」
天井に、まるで蜘蛛のように妖魔が貼り付いていた。
夕方と姿は変わらない。白骨化した手に生身の頭部、ぼろぼろの学ラン。あの青年だ。
妖魔は恭弥の声に応えるようにぎい、と笑った。
「舜鈴。あれの相手を頼めるか？」
「え？」
舜鈴は目を丸くしてこちらを見た。視界の端にそれを収めながら、恭弥は続ける。
「僕の術で、本体の場所を探れるかやってみる。その間、あいつを部屋から追い出してくれないか」
「それくらい、簡単（ジェンダン）ね！」

舜鈴はクナイを取り出し、妖魔に向かって投擲した。
当然のように避ける妖魔。更に舜鈴は棒手裏剣を投げた。妖魔を多目的室から出すよう誘導して。
狙い通り、妖魔は天井に貼り付いたまま部屋を出るはめになった。
舜鈴はそれを追いかけていく。
「……何で手裏剣まで持ってるんだ？」
暗器使いなのは知っているが、それじゃまるで忍者じゃないか。
恭弥は珍しくツッコミを入れたくなったが、今はそれどころじゃないと自分に言い聞かせた。
目を閉じ、壁に触れる。
もし壁の中に本体がいるなら、これでどこにいるか解るはず。
僅かな妖気と霊気をたどって――
「なっ……！」
恭弥は手首の感覚に驚いて目を開けた。
壁に着いていた手を掴まれていたのだ。
自身の手首を掴んでいるのは、灰色の手だった。肉が腐り落ち、骨が見えている。しかも壁から突き出していた。いや、それはもうはえていると言っていいだろう。
これは――妖魔の手ではない。
あの妖魔の手は、完全に白骨化していた。なら、この手はまさか――！
恭弥は驚き、しかしなお冷静だった。これが妖魔に連なるものだとすぐ見抜き、術で祓おうとしたのだ。
の、だが。
「……っ……？」
突然視界が揺らめいた。暗い部屋が白黒に映り、やがて何もかも黒に塗り潰される。
思考さえも黒に染まっていき、やがて恭弥の意識は、ぶつりと途絶えた。

―――

妖魔の額にクナイが突き刺さった。
かなり深く刺さったはずだが、妖魔の額から血は出ない。もしかして、彼は文字通り皮と骨だけでできてるのかもしれない。
血などとうに渇れ果てて。
人の皮を被ってる。
かつて人であったのに。
「……ていうか、何で倒れないの」
舜鈴は額に刺さったクナイを抜く妖魔を見て、顔をしかめた。
かなりタフらしい。出し惜しみをしていれば足元をすくわられるだろう。
舜鈴はため息をついて指を鳴らした。
妖魔はそれを見ていぶかしげな顔をするが、その目が驚きで見開かれる。
当たり前だ。いきなり後ろから攻撃されたら誰だって、妖魔だって驚くだろう。
「『傀儡姫（クグツヒメ）』、やっちゃって」
舜鈴が命令を下すと、妖魔に蹴りを喰らわせた人形――『傀儡姫』は、手に持った剣を振り下ろした。
振り返ろうとしていた妖魔だったが、その前に背中をけさがけに斬られ、ばったり倒れる。そのまま、地面に溶けるように消えてしまった。
「……最後はあっけないね」
舜鈴は拍子抜けして目を瞬いた。
「まぁ、いいや。早く恭弥のとこに戻んなきゃ」
舜鈴は踵を返し、多目的室に向かった。
扉を開け、中に入った舜鈴は、急に吹いてきた冷気に身をすくめる。
一体何だと室内を見渡して、絶句した。

どうしてこうなったのか、室内全体が凍り付いていた。天井も壁も床も教材も、何もかもだ。

自然にこんなこと――まして七月にこんな風になるわけない。つまりこの凍った部屋は、誰かの手によるものということだ。

「あら……貴女でしたか」

その誰かとは、どうやら恭弥の部下である雪女（ゆきめ）、氷華のようだった。

彼女は常に恭弥に付き従っている。ここにいることは別におかしくない。

問題は――

「どうしてこんなことになってるの？」

ばきばきに凍っている室内を指し、尋ねると、氷華はその場にしゃがみ、倒れた何かを太ももの上に乗せた。

「き、恭弥！？」

その何かとは恭弥であり、気を失っているのか目を閉じてぐったりしている。

「妖気にあてられたようですわ。何ぶん病み上がりですので」

「そう……」

舜鈴は何気無く傍の壁を見て目を丸くした。

凍った壁。それをよく見ると、何と手がはえていた。

腐りかけた手、白骨化した手――二十はありそうな手が、壁から突き出して、そのまま凍っていた。

「恭弥様を壁に引きずり込もうとしたようですわ。まったく……穢らわしい手で恭弥様に触れるとは……」

「まぁ、それは同感だけど……でも、これもあの妖魔なの？」

「いや」

と。恭弥が目を覚ました。凍った床に手を着き、身体を起こす。

「だ、大丈夫？」

「あぁ。それより、あの手だが」

恭弥は立ち上がって謎の手に目をやった。

「多分、妖魔に壁に引きずり込まれた者の霊だ。妖魔の影響で、悪霊化している」
「じゃぁこの壁に……」
「本体がある」
恭弥は呪符を取り出した。
「式神形変術――『鬼切（オニギリ）』」
呪符は三メートルはありそうな巨大な槍に変化した。太さは恭弥の腕より一回り大きい。それを軽々と構え、穂先を凍った壁に向ける。
「二人共、下がっていろ。破片が飛ぶぞ」
恭弥にそう言われ、舜鈴と氷華は二、三歩下がった。
恭弥は槍を振りかぶり、壁に叩き付けた。
一度だけ。たった一回だった。

ドガアァァァァァッ

だがそれだけで、壁は氷ごと粉砕され、こなごなになってしまった。
一瞬壁全てを破壊してしまったような錯覚を覚えたが、そんなことは無かった。
壊れたのは一部だけ――手がはえていた部分のみだけだ。
そしてその中から、恭弥に向かって何かが倒れ込んできた。
ほこりですっかり白くなり、ぼろぼろになった学ラン。白骨化した身体。
普通なら悲鳴を上げて避けるのに、恭弥はそれらのことをしなかった。
ただその白骨死体を受け止めたのである。
倒れた友人を支えるかのように、そっと。
驚く舜鈴の前で、恭弥は静かに微笑んで呟いた。
「見付けた」

「最初は、ただ見付けてほしかっただけなんだろう」
警察署を出た後、恭弥は舜鈴にそう言った。
あの後警察を呼び、恭弥と舜鈴はそのまま警察に付いていった。
いや、この場合は連れていかれたという方が正しいか。
退魔師であることを話し、更に悠の知り合いである高野刑事の弁護もあって、三十分ほどで解放されたが。
「見付けてほしかったって、誰が？」
舜鈴が首を傾げると、恭弥は「妖魔がだよ」と説明を始めた。
「おそらくは殺されて、あそこにコンクリートで埋められたんだ。殺したのは誰か、今となっては推理しようが無いが」
「でも、何であんな噂に……」
「結び付いてしまったんだろう」
恭弥はため息をついた。
「噂自体は前からあったんだ。ただその時は、校舎で聞こえてくるもういいかいという声に答えたら、鬼に喰い殺されるというものだった」
「それが……いつの間にか噂がすり変わって今の形に？」
「そしてその影響を、彼は受けてしまった。いや、逆か。彼自身が噂になって、そのせいで噂が変わってしまったのかもしれない。かくれんぼから派生した怪談のようだからな、ぴったりはまってしまったんだろう」
「呼び出すための問答は、そのためか」
見付けてほしい。あれには、そういう意味が込められていたのか。
「しかし……悪霊化していたみたいだからな。地縛霊にもなっていたようだ。見付けてほしくて壁に引き込んで、結局殺してしまった」
恭弥は軽く目を伏せた。
壁の中には妖魔の本体である白骨死体の他にも十一人の死体が見

付かった。おそらく全て、壁に引き込まれてしまった被害者だろう。
その中には、まだ腐敗が始まったばかりの死体もあった。最近行方不明になった生徒だと思う。
「今回のことで、恭弥の学校大騒ぎになるんじゃない？」
「だろうな。だが、休校にはならないだろう。授業ができなくなる」
「進学校だもんねぇ」
舜鈴は笑い声を上げた。時間も時間のためか、音量は小さい。
「……ただ、解決はしたが気になることがある」
恭弥はそれに笑い返した後、表情を引き締めた。
「何？」
「どうして今頃になって、こんな古い事件の噂が流れたのかだ」
「卒業生が教師になって、その人が生徒に話したからとかじゃないの？」
「うちに新任の教師――ましてや、うちの卒業生なんて来ていない。だからこそ、おかしいんだ。そういうことを調べる部活や同好会も無かったはずだし」
「え、じゃあ」
舜鈴は驚いたのか、足を止めた。
「どうして、そんな噂が広まったの？」
「さぁな。今回のことで噂はいずれ消えるだろうが……しかし」
恭弥は腕を組んだ。眉間にしわが寄るのを感じる。今自分は、きっと厳しい表情になっているだろう。
「一段落はしたが、終わりではなさそうだな、今回のことは」
自然、ため息が出た。何だか、酷く疲れた気分だ。
「悠の方も大変のようだし、一体どうなっている……」
「悠の方も？」
舜鈴は首を傾げた。
「何かあったの？」
「あぁ。実はある寺が何者かに潰されてな。僧も全員殺されたらしい。ニュースになっていたろう」

「あぁ、そういえば昨日。詳しくは言ってなかったけど……。……」
舜鈴はなぜか急に黙り込んだ。
何か思案してるような――悩んでいるような顔だ。
「舜鈴？」
「あのね、恭弥。私、諸事情でまだ日本にいることになったの。母様の命令で……重要なことだから、刀弥さんにも話して」
舜鈴の言葉に、恭弥は眉をひそめた。
「どういうことだ？」
「実は……」
舜鈴は真剣な表情と眼差しで恭弥を見上げた。
「最近、宗教テロのようなものが起きてるの。世界レベルでね。悠が関わってるっていうその事件も、多分関係ある」

――――

「ど、どうしてだ！？」
男の叫び声に、青年は不愉快そうに眉根を寄せた。かまわず、男は続ける。
「お、おまえらに協力すれば、私の罪を隠してくれるんじゃなかったのか！？　ど、どうして」
ここは屋上。後ろは逃げ場の無い空中。その状況下で何をされるかなど、誰もが想像できることだ。
「……だから」
青年はため息をついて、男の胸を押した。
足場の無い空中へ、押しやるように。
「貴方が死ねば、隠す必要も無いでしょう」
男は悲鳴を上げなかった。急なことで驚いたのか、それとも恐怖が行き過ぎたのか――どちらにせよ、無言のまま落下した。
それを一瞬だけ見つめた後、青年は踵を返して建物の中に入ろうとした。

「似非紳士」

と。急に降ってきた声に、青年は顔を上げる。

見上げた先――給水塔の上に、闇夜でも目立つ金髪の青年がいた。

「君ですか」

「暇だった」

金髪の青年はそう言い、隣に音も無く降り立った。

自分より十センチ以上下にある顔を見下ろし、青年は苦笑をもらす。

「いきなり似非とは、随分な言いようですね」

「今更だ。それに、椿恭弥を殺せなかったじゃないか」

「それ、似非関係無いですよ。弱っているようでしたから、楽だと思ったんですけどねぇ」

肩をすくめてみせると、金髪の青年の瞳が冷たくなった。

「……そんな風に見ないでくださいよ。しかし、それにしても」

青年はため息をついた。

「問題は彼が今回のことを疑問に思っているようなんですよ。それは計算外でした」

「問題無い。いずれにせよ奴らとは潰し合う。むしろ向こうからこちらの懐に入ってくる方が好都合だ」

「それもそうですね」

青年は微笑を浮かべた。

「狂った計算は正せばいい。訂正箇所は訂正すればいい」

「そういうことだ。『我々』は最終的に、勝ちさえすればいい」

金髪の青年はにこりともせずそう言った。それに対し、頷きを返す。

「というか、勝ち以外に選択肢はありませんよ。勝つのが当然なんですから」

「そうだな。俺達には神のご加護がある」

そして二人は、口癖のようにくり返される、『彼ら』の合言葉とも言うべき言葉を口にした。

『全ては神の御(おん)ために』

第三十話　まねごと<上>

彼女は憧れだった。

誰よりも綺麗な顔、誰よりも綺麗な声、誰よりも綺麗な瞳。

漆黒の髪と瞳は人の目を惹くし、その声はどんな歌より耳に心地よかった。

そんな彼女の傍にいることが、自分の唯一の自慢だった。

彼女と似ても似つかない自分が彼女の友達であることが、何より嬉しかった。

自分にとってはただ一人の友達。しかし、彼女にとっては自分は『ただ一人』ではなかった。

でもそれはしかたがないと思っていた。彼女のような存在には、多くの人が集まるのが当然なのだ。

自分はその多くの人の一人でいい――そう思っていた。

けれど。

「来ないって……？」

彼女の言葉に、思わず足を止めた。

「諸事情でね……もう学校には来れない。いづらいって言うべきかな。いや、いるべきでないのか。とにかく、もう来ない」

「でも……だって……」

「悪いけどね。多分、もう会えないかもしれない。同窓会とかあるんだったら、そりゃ行くよ。けど、学業に打ち込める状況じゃなくてね」

「でも、義務教育……」

「一応カリキュラムは全て終えてるんだ。個人的にね。ただ事務的に行ってただけ――」

それ以上は聞こえなかった。聞きたくなかった。

彼女がいなくなったら、私は何を自慢に生きていけばいいのだろうか。

彼女以外の傍にいる気など無いのに。

彼女が私にとっての一番なのに。

彼女の傍が、私のいるべき場所なのに。

どうして、どうして、どうして。

私は、彼女が好きなのに。

――――

事務所の下にあるアンティークショップは、悠（ユウ）が片手間にやっている店である。

ようは趣味だ。副職であるが、十割がた趣味と悠は答えることにしている。

そしてその趣味の店に、燐（リン）が来ていた。

客としてではなく、友人として。

「同窓会？」

悠は首を傾げ、燐を見返した。

「あぁ、そういえば来てたね……そんなのが」

「行く気無いんですか？」

燐の質問に、悠は首を横に振った。

「行くつもりだけど、忘れてた。最近いそがしくてね」

にしても、と悠は燐を軽く睨んだ。

「どうしてわざわざ店に来るの？」

「悠に会いたかったんです」

「……」

「そんな冷たい目で見ないでください。傷付きます……」
オーバーリアクションで心情を表す燐に、悠はため息をついた。
「まぁ今に始まったことじゃないけどね。同窓会明日だっけ？」
「はい、小学校で。懐かしいです……猛（タケル）が行けないのが残念だなぁ」
「あぁ、そっか。猛は橘家（タチバナ）復興のために頑張ってるんだよね」
妖偽教団との戦いで潰された家を復興するため、日影（ヒカゲ）達は現在全国を駆け巡っていた。
資金繰りや新たな退魔師、戦いの中で失われた書物の復元など、やることは多い。椿（ツバキ）家は、もっぱらそのサポートに回っている。
確か現在は、京都を拠点に置いて行動していたはずである。
「猛、無事に中学卒業できるかな」
「義務教育ですから、卒業はできるでしょうけど……高校は諦めるほか無いですね」
「小卒もしてない私が言うことじゃないけど、大丈夫なの、勉強」
「学歴はともかく頭脳は大卒レベルの君が言いますか」
燐は微妙な表情を浮かべた。
「まぁいいですけど……とりあえず、同窓会は来るんですね」
「うん」
「そうですか。じゃ、また明日」
燐はそう言って、店の外に足を向けた。
「……ねぇ」
悠はふと、燐を引き止めた。振り返る燐に、何となく尋ねる。
「君、キリスト教徒だっけ」
「そうですけど……それが何か？」
「……いや、何でも無い」
悠が首を振ると、燐はきょとんとした表情をしつつも店を出ていった。
「……まさかね」
悠は自嘲めいた笑みを浮かべた。
いくら燐がキリスト教徒だから——あれだからといって、疑うな

んて。
なんて、馬鹿らしい。
悠がため息をついていると、店に誰かが入ってきた。
「……流星（リュウセイ）」
「悠、何で店の方に出てるんだ？」
珍しく私服の流星に、悠はぎゅっと抱き付いた。
「え、なななななな何だよ！？」
「落ち着きたい気分なの」
「俺が落ち着かねぇ！」
流星は顔を真っ赤にしてわめく割に、いっこうに剥がしにはかからなかった。
拒否してこないのは彼の優しさであり、想いのあらわれである。
悠はまたため息をつきたくなった。
両想いなのに、どうしてこいつは気付かないのだろうか。あの戦いのどさくさにまぎれて告白もしたのに。
流星のことだから、気のせいなどと思っているのかもかもしれない。
充分ありえる。もう一度言うべきだろうか。いや、一度じゃ駄目だ。この男にはもったいぶったりしても意味無いだろう。
いっそ、ストレートに言い続けた方がいい。
「流星」
「あ？」
「好き」
「は！？」
どうやら全身――というか全体が固まってしまったらしい。流星は悠を見下ろしたまま動かなくなってしまった。
「返事もらえるまで言い続けるから、覚悟してね」
悠は笑みを見せ、二階の事務所に上がっていった。
これからの流星の反応が楽しみだ、などと、小悪魔的なことを考える悠だった。

――――

小学校の思い出など、悠にはほとんど無い。
ただ流れていくだけだったように思う。時間の流れに沿ったまま、何も考えず何も感じず。
思い出そうとしてもクラスメイトの顔はおぼろげで、覚えている人間は片手で数えられるぐらいしかいない。
その数少ない人間の中の一人に、悠が気になっている者がいた。
自分と知り合うまでいじめられていたという彼女は、元気だろうか。
連絡しようにも電話番号も何も知らず、家の場所も解らない。
名簿を調べても、引っ越したのか電話番号も住所も、今は使われていなかった。
だからこそ、今回の小学校同窓会に来たのだが――
「……よくよく考えたら、あの娘が来るわけ無いか」
小学校の門を前にして、悠はため息をついた。
三年前と変わらない、紺色に塗られた鉄の門。花が植えられた花壇、少し古びた白い壁――
変わらない――気がする。
よく覚えてないけれど。
ここまで何も覚えてないと、懐かしさも何も感じない。
悠が腕組をして校舎を見上げていると、人の気配が近付いてきた。しかも複数。
振り返ると、集団で歩いていた男女がこちらを見て足を止めた。
まだ自分と変わらないぐらいの年頃の少年少女だ。だが、中には妙に大人びた服装や化粧をしている少女達もいる。
服装はともかくそのけばけばしい化粧はどうにかならないのかと、悠は顔をしかめた。
服装に関しては何も言えない。自分も多少派手な服を好んで着る

からだ。
ちなみに今日悠が着ているのは、白いキャミソールにレースの付いた黒いミニスカート、ノースリーブで燕尾の上着である。
アクセサリーはいつもの十字架付きチョーカー、バラをかたどった銀のバックルと黒いベルト、それに流星からもらった蝶の髪留だ。
地味とか大人しめとかからは程遠い格好なのは自覚している。しかしこれが好きなのだからしかたが無い。
そんな悠の目から見ても、彼女達の化粧の濃さは引いてしまうものがあった。
惹く、ではなく、引く。しかも後ろに。
「つ、椿さん」
少女の一人がおののいたように呟いた。
「ん？　……あぁ、元クラスメイトか」
悠は今更ながら気が付いた。よくよく考えたら、日曜日にわざわざ小学校に来るのは同窓会に参加する者ぐらいだ。
いや、それ以前に顔を見たら思い出す。
けれど悠の記憶は、彼らを見ても反応を示さなかった。
哀しいぐらいに、思い出が無かった。
「えっと……その、久し振り……だね」
少年の一人が、なぜか顔を赤らめて言った。
格好のせいだろうか。確かに脚はいつも通り剥き出しだし、キャミソールの丈が短いからウエストが見えているけれど――
「あの、元気だった……？　えっと」
「元気だったよ、一応ね」
悠は肩をすくめた。
一ヶ月前は確かに死にかけたが、今はおおむね好調だ。元より、体力はある方なのである。
「そ、そっか。よ、よかった」
「ねぇ、ところで訊きたいんだけど」
悠は駄目もとで訊いてみることにした。

「吉村詩織（ヨシムラ シオリ）のこと、今どうしているか知らない？」
多分誰も知らないだろうと思いつつの質問に、誰もが予想通りの答えをした。
「い、いや……知らない」
「あ、あたしも……」
「私も……し、知らない」
しかし、反応の方は予想外だった。
全員何かを隠しているような――むしろ何におびえているような感じだ。
首を傾げかけた悠だったが、後ろから声をかけられ、半身だけを振り返らせた。
「悠、もう来てたんですか」
「燐。ちょっといい？」
悠はやって来た幼馴染みを引っ張り、元クラスメイト達から離れた。
「私がいなくなった後、詩織に何かあった？」
声を低めて尋ねると、燐は一瞬だけ目を瞬かせた。
「詩織？　あ、吉村さんのことですか。悠と仲よかった。いえ、別に何もありませんでしたよ」
「中学上がってからは」
「さぁ。中学違いますからね。ていうか、吉村さんが今どうしてるか、悠知らないんですか？」
燐が意外そうに言った。
確かに当時のことを考えると、連絡を取り合っていないのは意外かもしれない。
「……連絡先知らないんだよ。同窓会来るかと思ったんだけど、無駄足だった――」
「悠ちゃん」

と。そう声をかけられた。
聞き覚えのある声に今度は身体ごと振り返ると、見覚えの無い少女が、一メートル先にいた。
長い黒髪に細い身体付き、高い背はハイヒールのせいで更に高くなっている。
元クラスメイトと同じように化粧をしているが、けばけばしくない。実に自然だ。服装は多少派手だが――
……というか、あの服、自分が持っているものと似ているではないか。
全体的に、自分の普段のコーディネートとよく似ている。同じ趣味のクラスメイトはいただろうか。
――いや待て。この子、もしかして。
「……詩織？」
悠がかつての級友の名を呼ぶと、少女は満面の笑みを浮かべた。
「悠ちゃんなら気付いてくれると思ったよ」
「あ、うん……」
悠は戸惑いながら少女――吉村詩織を見返した。
記憶の彼女と、完全に食い違っている。昔の彼女はもっとおとなしくて、どこか気弱な少女だった。
勿論面影があったからこそ気付いたし、他にも理由がある。
昔からそういう傾向はあった。彼女はよく悠の真似をしたがって、しかしそれが空回りしがちだった。
今彼女はまさに、自分の真似をしているんだと悠は確信する。
化粧をほどこした顔は見覚えが無いと思ったが、違う。覚えがあり過ぎて逆に気付かなかっただけだ。
だってそれは毎朝見ている顔だから――！
――もっとも。
全体的に見て彼女の顔は悠に似ているだけでそっくりではなく、似せているだけでそのものではない。
それこそ月光と火種ほどの差があり、そもそも悠と同じになろう

など不可能に近いのだが――
それでも悠を驚かせるには充分だった。
言葉を失う悠を尻目に、詩織は喋り続ける。
悠とそっくりの口調で。
「実は今日の同窓会の幹事、私なんだ。アルバムを見付けてね……懐かしくなって。思ったが吉日――じゃないけどね。ここを選んだのもそのためだよ。もっとも、中学生が店を予約するなんて無理なんだけどね。内容？　時期も時期だし、百物語をやろうと思って」
「……何」
悠はようやく、自失から立ち直った。否、職業柄、聞き逃せなかった。
「百物語？」
「うん。来てない人引いて、確か三十三人のはずでしょ。三回ずつ階段話をすればいい」
詩織は微笑した。それは悠の記憶とは違う、別人の笑みだった。
――そしてその別人は、他ならぬ私だ。
愕然とする悠に、詩織は追い討ちのように言った。
「百番目の話は、私がするから」

まねごと<中>

カーテンが閉め切られた部屋。ただでさえ教室というのは光が入りにくいものなのに、これでは夜と変わらない。

そして中心。机と椅子を後ろに追いやった教室の真ん中には、椅子が大きな円を描(えが)くようにして置かれていた。数は、おそらくちょうど三十三脚なのだろう。

そしての傍には、ロウソクが三本ずつ置かれている。特徴の無い、普通のロウソクだ。

「燐」

「解ってますよ」

燐は元クラスメイトにバレないよう呪符を飛ばした。

呪符は四枚。それぞれ、教室の四隅に貼り付く。

「これで結界は張ったけど……何が起こるか解らないから、『剣姫(ツルギヒメ)』持っとくよ」

悠は紫の布にくるまれた刀を持って肩をすくめた。燐は目を丸くする。

「……いつの間に」

「今の間に」

悠は簡潔に答え、椅子に座った。

詩織はすでに椅子に座っている。その姿は、見れば見るほど自分と似ていた。

これはもう――真似というより、なり切っているような――

何のために？　自分のようになりたいから？

「こんな私になっても、苦しむだけなのに」

悠は自嘲ぎみに呟いた。

それよりも、だ。そんなことは今はどうでもいい。
問題は彼女の変わりよう、同窓会の真意、そして百物語――
それに、元クラスメイト達の反応も気になった。
詩織の名を出した時の彼らの反応。絶対何かある。
他にも、気にかかるものはあった。しかし今は静観するつもりだ。
次々椅子に座っていく元クラスメイト達。全員が全員、詩織を盗み見ている。その目は、まるで詩織自身が幽霊であるようだ。
彼女をここまで恐れる理由が、一体どこにあるというのだろう。
「じゃ、まずはロウソクに火をつけて。ライター回していくから」
詩織はそう言い、自分のロウソクに火をつけた。
彼女の元には四本のロウソクがある。本当に一人で四つの怪談話をするつもりらしい。
そこで悠は、あることに気付く。四本のロウソクの内の一本。それはなぜか赤かった。
血のような紅色のロウソクで作られたロウソク。形こそ他と同じだが、色が違うだけに異様に目立っていた。
ロウソク自体に特別な力は無いようだ。最後に消すつもりなのか、それとも――
「椿さん、ライター……」
「え？　あぁ、うん」
悠は我に返り、隣の少女からライターを受け取った。気が付くと、教室内はかなり明るくなっている。
ライターにも、特別な術はほどこされていない。普通のライターだ。
足元の三本のロウソクを手に取ってみる。こっちも異常は無い。
となると、やはり百物語自体に何かあるのか。
怪談を百話す百物語。始まったら最後、誰も終わるまでやめることはできない。
百話まですると妖怪が出るとは有名な話だが、実はそうではない。
だが、百話目の話が終われば何かが起こるのは確かである。

悠はライターを次に回しながら、詩織に目をやった。
すると視線がかち合う。詩織も詩織で、こちらを見ていたらしい。目が合うと、すぐそらされたが。
そのすぐ目をそらす癖は変わらないらしい。それに安堵しつつも、ますます解らなくなる。
どうして。
どうして彼女は、私の真似をしたがるんだろう。
「……全員つけ終わったね。じゃ、私から話すよ」
詩織は切り換えるように口を開いた。
「そうだな……。……昔、別荘として使われてた屋敷があったの。その元別荘はペンションになったんだけど、それを借りた大学生四人が変な音を聞いたの。ぱたぱたって走る音。二階には誰もいないのに。でも、実はまだ見てない部屋があって、そこは使えないよう目張りがされてたの。四人は好奇心でそのドアを壊して部屋の中に入ったの。そしたら――」
その時だった。
詩織は、よほど目をこらさなければ解らないぐらい微かな笑みを浮かべた。
それに気付いたのは、おそらく悠ぐらいだろう。
ましてやそれが悪意を含んでいるなど、悠以外に気付けるものか――
「っ……そんな」
悠は誰にも聞こえないような声で呟いた。それに重なるように詩織が話をしめくくる。
「そんなに広くない部屋の壁や天井、床にまでびっしり赤黒くて小さな足跡が付いていたんだって」
詩織はふ、と息を吹きかけ、ロウソクの火を消した。
一つ火が消えたぐらいで、元より薄暗いこの部屋の明るさが変わるわけじゃない。
しかし悠は、視界が闇に閉ざされた気分だった。

そういうことか。
あぁ全く。自分と似てるとか真似してるとか、そんな問題じゃないじゃないか。
悠はぎり、と奥歯を噛みしめた。
変わってほしいと思っていた。変わって、もっと自分に自信を持ってほしかった。
けれど、変わり果ててはほしくなかった。
はあ、と息をつくと共に、悠は頭を切り換えた。
そういうことならば、こちらも容赦はしない。
悠は完全に退魔師モードになっていた。
とはいえ、まだ静観しなければならいだろう。もう少し――九十九話目が終わるまで、こちらは動けない。
ここは結界の中だ。百話を語るまでは少なくとも安全だろうが、今動いたら結界が壊れる可能性がある。
つまり、百物語が終わる九十九番目で動くのがベストなのだ。
悠は視線を『剣姫』に下ろした。
羽衣姫（ハゴロモヒメ）との戦いから、なぜか前より『彼女』を扱えるようになった。
一度乗っ取られたからか、月凪（ツキナギ）のおかげなのか、あるいはどちらもか。
それは解らないが、少なくとも、これを扱う自分に、敵はいない。
（いや、それは言い過ぎか）
悠は考え直す。
自信は持っても慢心は持ってもいけない。それが、退魔師の基本だ。
そんな風に思ってはいけない。悠は傲慢なつもりも高慢なつもりも無いのだ。
――流星あたりが聞いたら嘘つけっ、と絶叫しそうだが、あいにく彼はここにおらず、いたとしても悠の心を読むことはできなかった。

悠はなおも思考を巡らせる。
百物語で何をしようかなど大体予想はつく。もし百までやってしまえば、取り返しのつかないことになるだろう。
術的にも、人道的にも。
級友だろうと旧友だろうと関係無い。退魔師は、ただ闇を斬るだけだ。
たとえそれが、必要悪だとしても。
隣のロウソクが消えた。内容は全く聞いていなかったが、話し終えたらしい。思ったより長く考え込んでいたようだ。
「次は私かな」
確認を取ると、全員沈黙する。肯定と受け取り、悠は一つ頷いた。
そして笑う。
得意の不敵な笑みを見せる。魅せ付ける。
「そうだね、ある男の話をしようか。その男は結婚詐欺師でね――」

――――

流星は暑い太陽の元、ぼんやりと歩いていた。
昨日は精神的に危なかった……他人から見ればうらやましい光景だったのかもしれないが。
好きな娘（おまけに超絶美少女）に好きと連呼され、抱き付かれたりしなだれかかられたりしたら、落ちない男はいないだろう。
実際流星も穴に足を半ば飲み込まれていたようなものだ。いや、もしくは天に引っ張られていたのか。主に魂が。
しかしぎりぎりで踏みとどまったのは、疑問が二つあったからだ。
一つは、悠はなぜ自分のような男を好きになったのかということ。
こんな平凡――ではないけどまぁおおむね平凡――な一学生を、悠が好きになるなんて正直信じられない。
二つ目は疑問というより不安だが――自分は悠にふさわしいのか、ということ。

これが一番切実だった。悠が本当に自分のことが好きなら、それは喜ばしいことだ。両想いだ。

しかし自分は、彼女の傍に立つべき人間なのかと考えてしまうのである。

ふさわしくない。つり合わない。そんなことを思ってしまう。

悠はそんなこと考えないだろうし、気にしないだろうが——流星は考えるし、気にする。

普通に思い、普通に考え、普通に気にし、普通に悩む。だから流星は普通なのだ。

誰かを好きになるのも、誰かに好かれたいと願うのも、ごく普通の、ごくごく平凡の反応。

たとえ辛い戦いを経験しても、流星の根っこは変わらなかった。

「……はぁ」

流星はため息をついた。

どちらにせよ、悠の言葉に応えなければ状況は進展も後退もしない。なら、どうするか。

簡単だ、返答すればいい。とてつもなく勇気がいるだろうが、言ってしまえばこっちのものだ。

自分が悠を好きなのは変えられない事実だ。誰よりも好きだし、一番想っている。

好き？　いや、足りない。大好き？　いやそれも違う。

なら、これは——

「流星様」

流星は驚きのあまりつんのめりそうになった。

ぼうとしていたのもあるが、何より呼ばれたことにびっくりした。

こんな呼び方をするのは、流星の知る限り一人しかいない。

「朱華（シュカ）！　驚かせんなよっ」

流星は振り返り、背後に突然現れた赤い瞳の少女に怒鳴った。

「それは失礼しました」
一方少女――朱華は、いつも通りの無感動ぶりで頭を下げた。彼女は感情というものが無いのだろうか。
いや――妖狐である彼女に、感情の有無を問うのは野暮というものだろう。
「で……何の用だよ」
流星は頭をかいて朱華に尋ねた。
「流星様に訊きたいことがございます」
「訊きたいこと？」
「はい」
朱華は頷いた。表情だけでは彼女が何を考えているのか解らない。そもそも表情が無いのだから読めるはずが無かった。
「選んでください」
「？　選ぶって……何を？」
「悠様とずっと共にいるか、一生姿を消すかです」
朱華の提示した選択肢は、あまりにもあんまりな両極端だった。
「それくらいの覚悟が無ければ、悠様のお傍にいることは叶いません」
「ちょ、待てよ！　何で急にそんな話を……」
「悠様が」
朱華の薄赤い瞳に圧され、流星は口を閉ざした。
「ご自分の気持ちをお伝えしたから、私はあの方の従者としてお訊きしているのです」
「悠が、自分の気持ちを……」
やはりあれは、冗談ではなかったのだ。悠は本気で自分のことを好きになってくれたのだ。
「悠様は人を嫌っております。ゆえにご友人とご家族以外、心から信じられる方がいらっしゃらない。貴方だけなのです。人として、異性として、誰かを好きになったのは」
「……俺も」

そうだった。流星も今気付いたが、悠が初めて異性として意識した女の子だった。

初恋、なのかは解らないけれど、本当に、本気で好きになったのは彼女が初めてだ。

――いや、好きという感情ではない。それはさっき考えた。

なら、この気持ちは何だろう。

「悠様の性格上、あの方は誰かを好きになったりされないだろうと思っておりました。ですから貴方のような方を好きになるとは思いませんでした」

「あれ？　何気に俺、馬鹿にされてる？」

流星の呟きは黙殺された。

「しかし悠様が選んだ以上、私は口を出す権利を持ちません。しかし流星様にも一応、選ぶ権利はありましょう」

「それで、さっきの選択肢か……」

言い方に引っかかりを覚えたが、朱雀の言いたいことは解った。

つまり、流星を信じていないのだ。

ずっと一緒に戦ってきたのに哀しい限りだが、彼女が信じているのは主である悠だけなのだろう。三ヶ月かそこらで仲間になった流星を信用しろという方が無理なのかもしれない。

しかし、今はそんなことはどうでもいい。流星の答えは、もう決まっている。

「さっきの質問の答えだけど……当然、俺は悠と一緒にいるぜ。ずっとな」

「軽々しく言わないでいただきたいですね」

「まぁ言うのは簡単だな。だけど、本気だぜ。俺は悠と一緒にいたいんだ」

「化物と戦う少女とですか」

「おまえが言っちゃおしまいだろ……俺だって妖魔と戦ってるし。つうかある意味、俺自身が妖魔みてえなもんだし」

「……母親殺しでもですか」

「母親殺したら、悠は悠じゃなくなんのかよ。そもそも俺があいつと会ったのは母親殺しの後だろ。変わる以前の問題だ」
流星は何を今更と思った。
「たとえ悠が何をしても、あいつがあいつであることに変わり無ぇ。なのにどうしてそんなことを気にしないといけないんだよ」
やってることなんてどうでもいい。
過去なんて関係無い。
ただ悠の傍にいたい。
流星は、それだけを思った。
それに対し朱嵜は、なぜかため息をついた。
深々と、あきれるように。
「……流星様、前に私が言ったことを覚えてらっしゃいますか？」
「え？　俺、朱嵜に何か言われたっけ……？」
「……覚えてらっしゃらないのですね」
またため息。
「そうですか。なら、流星様ご自身の意思なのですね……」
「朱嵜？」
流星は首を傾げた。
一体どうしたのだろう。自分はそんな変なことを言っただろうか。
「……流星様」
と。朱嵜が真剣な表情で名を呼んだ。流星は彼女の表情に少し面喰らう。
「流星様は悠様がご学友を斬り捨てても、許せますか？」
「え……」
「流星様……私めの願いを聞き届けてくださいませ」
「ちょ、待ってくれ！　悠に何かあったのか！？」
流星が詰め寄ると、朱嵜は顔をほんの少しだけ曇らせた。
「流星様、お願いがございます」
――――

九十九番目の話が終わった。
これで、私の願いか叶う――
詩織はすっかり暗くなった教室を見渡し、にんまり笑った。
あとは自分が百番目の怪談を言うだけだ。そうすれば、代われる。
私は悠ちゃんに成り代われる――！
詩織は赤いロウソクを手に取った。教室の中で唯一の光である灯火は、まだ燃えている。
ロウソクの方は半分以上溶けていた。思ったより時間を喰ったらしい。
だが、自分が最後の語りを終えるには充分な時間だ。
「あのね――」
詩織が語り出そうとした瞬間――

ヒュンッ

突然の風切り音と共に、視界からロウソクの火が消えた。
「……え？」
ロウソクは、半ばから切り落とされていた。切り口はなめらかで、すっぱり勢いよく切られたのは解る。
しかし誰が、どうして、いやそれ以前にいつの間に――
「君のやろうとしていることは、人道に外れている」
と。詩織はそこで初めて、目の前に誰かが立っていることに気付いた。
そのすらりとした立ち姿は、見覚えがある。
「あ、あ、あ……」
「退魔師として、君の行動は止めさせてもらうよ」
彼女――椿悠は不敵に笑った。

悠は詩織が赤いロウソクを持った瞬間、刀を手に取った。
その後すぐ立ち上がり、抜刀ざまにロウソクを斬ると、火を吹き消す。
これで百物語は、九十九話で終幕――のはずだ。詩織が隠し玉を持っていなければの話だが。
悠は「さて」と、刀の切っ先を詩織に向けた。
「君は言ったね。同窓会を聞いたのは君自身だと。百物語をするために、同窓会を開いたんじゃないの？」
「……」
「百物語をすると妖怪が現れるとは有名な話だ。この話を知らなくても、何かが起こるということを知っているでしょ」
悠は元クラスメイト達を見渡した。彼らは顔を見合わせる。
「まぁいい」
悠は肩をすくめ、顔を詩織に戻した。
詩織はうつむいている。夜目は効くが、前髪に顔が隠れていては見ようにも表情は見えなかった。
「まぁ妖怪が現れるなんて眉唾物だろうけどね。でも実際百まで怪談話をしたら何かが起こるのは確かだよ。実はそれは、百番目の怪談が鍵になるのさ」
悠は火の消えたロウソクを流し見た。
「場合によっては、確かに妖怪が出るだろうね。だって……百物語を最後までやると、百番目の怪談が現実になるんだから」
悠が言ったとたん、全員黙り込んだ。元クラスメイト達は戸惑ったように悠と詩織を見比べている。

「君はそれを知っていたんだね。知ってて百物語をしようとした。猛が欠席するのも、解ってたんじゃない？　でなきゃ、三十三人なんてキリのいい人数にならない。確か三十四人構成のはずだったからね」

元クラスメイトの顔や名前は全く覚えてないのに、それだけは記憶している悠だった。

「調べようと思えば調べられることだ。……さて、ここまで推理できたわけだけど、君が何をしようとしたかは解らなかった。せっかくだから教えてくれる？」

「……」

詩織は答えない。うつむいたまま、だんまりしている。

「……まぁいいか。そんなとこには興味無いし、おおよその見当は付いてる」

悠は燐の方を見た。

「燐、結界を解いて――」

「あるところに二人の女の子がいた」

突然の声に、悠は驚いて振り返った。

「詩織……？」

「片方はとても綺麗でみんなの憧れの的、片方は地味で暗いいじめられっ子」

「問わず語りを許した覚えは無い。それに、今更怪談を話しても……！」

悠は目を見開いた。

突然足元が明るくなり、一瞬が目がくらむ。目を瞬かせて視線を落とせば、なんと赤いロウソクにまた火が灯っていた。

「ど、して……」

確かに消したはずだ。消しきれなかったのか？　いや、そんなはずは無い。ちゃんと確認した。

なら、まさか――

悠は再度詩織を見た。彼女の語りはまだ続いている。

「いじめられっ子は綺麗なその子の真似をしていた。でも、どうしても同じになれない。どうしたらいいか。いじめられっ子は悩んだ。そして思いついた。その娘と入れ換わればいい。そしたらその娘自身になれると」

「……！　やっぱり目的はそれか」

悠は顔をしかめた。

詩織はいつも悠の真似をしていた。今だって、服装や顔立ちや髪型を真似ている。

しかし彼女は悠の真似をしたかったのではない。悠になりたかったのだ。

しかし外見を似せたところで悠自身になれるわけがない。そもそも、悠と詩織は元より似ていないのだ。

外見もそうだが、特に内側――性格や考え方、人格そのものまで、何もかも真逆だった。

けれど彼女は悠になりたかった。どうしてもなりたかった。

そして行き着いた先が、百物語を利用した成り代わり――！

「馬鹿馬鹿しいよ。私なんかになりたいなんてね」

悠は刀を振るった。今度こそ火を消そうと、ロウソクを斬ろうとした――のだが。

「いじめられっ子は憧れの女の子と無事に入れ換わった。おしまい」

「っ、く……！？」

火が消えた。一瞬で暗闇に閉ざされた教室の中で、悠は膝を着く。

「しま、た……」

「これで百物語は完成。私と貴女は入れ換わる」

詩織が耳元で囁きかけてきた。

「貴女は私の憧れ。大好き。だからずっといたいの。例えば鏡を見るたび、会いたい」

「ふ、くぅ……」

「私が貴女になれば、貴女はずっと私と一緒でしょ？」
強い執着。そして妄執。彼女の中でこんなものが育っていたなんて。
「もう少し……もう少しで私は貴女に、貴女は私になる。もう少しで、もう少しで！」
「――残念」
悠は顔を上げ、にっこり笑った。
「悪いけど、君と私は入れ換わらない。退魔師の身体を簡単に得られると思うなよ」
「えっ……」
詩織はばっと悠から離れた。
「何で……どうして……」
「教えてあげる。退魔師はね、いつもお守りを付けてるんだよ」
悠はチョーカーに付いた十字架をいじった。
「色んな効果があるんだけどね、百物語の力を無効にするぐらい可能だ」
「そんな！」
「それに、こっちには優れた結界師兼優れた呪術師がいる」
悠が視線を向けると、燐は立ち上がった。
元クラスメイト達はこれまでのことに驚いて頭がついていかないのか、ぽかんとしている。が、そちらまで気を配る気は無い。
どうせ後で記憶を消すのだ。何を見られてもかまわない。
「さて、どうしてこんなことを……」
悠が詩織に問いかけようとした時、急に元クラスメイトの一人から弱々しく声をかけられた。
「つ、椿さん……」
「……何」
「あ、あの……その娘、もしかして幽霊なのか？」
「……は？」
悠は最初、その元クラスメイトの方を見ていなかったが、その言

葉を聞いて身体ごと彼の方を向いた。
「どういう……こと？」
「だってあいつ今入院してて……意識不明だって……」
「それは……どういうこと！？」
悠はその元クラスメイトに詰め寄った。
「一体詩織に何があった？」
「あ、ああの……俺達ふざけてて、本気じゃなかったんだ！　冗談だったんだ！　まさか本当に窓から落ちるなんて……」
「お、おい！」
隣の男子が止めに入った。だが、もう遅い。
悠は元クラスメイト達を見渡した。皆、おびえた顔でうつむいている。
いじめられっ子――詩織の言葉がよみがえる。
「……いじめていたんだね」
悠は元クラスメイト達を睨み付けた。
「詩織を……私の友達を！」
怒鳴りかけた悠はその先を飲み込んだ。
詩織を、見たから。
詩織はもはや悠の知る詩織ではなかった。
黒い目はつり上がり、血走っている。口からこぼれる声は獣の呻き声のようで、身体を低くして構えるその姿は、まさに獣だった。
姿はまだ人間だ。が、このままだと――
「詩織！」
悠が大声を上げると、詩織はこちらを向いた。
「ゆ、ちゃ……」
かすれて聞こえずらいが、詩織は自分の名を呼んだ。
けれどそれは、友好のかけらも、人らしさのかけらも感じられない。獣のような、機械のような反応だった。
「君は今、精神体なんだね」
それを哀しく思いながらも、悠は静かに呼びかけた。

「肉体はおそらくまだ、病院にあるはずだ。精神が一人歩きしている状態――それはとても危険なんだ」
「ぐ、ぁ……」
「このままだと、精神が肉体に帰れなくなる。精神が――魂が人のものでなくなる。そうなったら」
「がっ……」
突然。
詩織の半身が黒い毛に覆われた。
いや、毛ではない。黒い羽根だ。まるでテレビの映像を早送りしているかのように、ものの数秒で詩織の肌を隠した。
「しまった……！」
遅かった。
もう妖魔化が始まってしまった！
「ぐ、ぐ……ぐぎゃあぁぁアアアアアアアア！」
詩織は奇声を上げた。それはもはや人の声ではない。まるで鳥の声だ。
鳥――
「……詩織、君は鳥が好きだったね」
悠は息をついた。深く。
「私も鳥は好きだよ。でも、妖鳥は」
手に持った刀をだらりと下ろしたまま、悠は詩織に――否、妖魔に近付く。
「傷付けるしかできないから、嫌いだよ」
妖魔は動かない。完全に妖魔化したわけではないから、思うように動けないのだろう。
今なら――楽に狩れる。
「じゃあね」
悠は刀を右下から左上へ、ななめに振り上げた。
妖魔の、左腰から右肩にかけてにななめの傷口がぱっくり開く。
半瞬遅れて黒い血が吹き出した。

タールのような血と一緒に悲鳴が上がる。返り血をあびないように後ろに下がった悠は、そちらを見た。

視界に入ってきたのは、おびえた様子の元クラスメイト達だった。こちらを見る目は人喰い獣でも見ているかのようだ。

彼らにとっては、人喰い獣も自分も変わらないのだろう。変わらないように映るのだろう。

「……斬らないよ」

鞘を拾い上げた悠は、そう言いながら妖魔がいた場所に目を向けた。

妖魔の姿はもう無い。床を汚していた黒い血も消えている。その場所は、何も無かったとでも言いたげにすましていた。

「私が斬るのは妖魔だけだ。人間は斬らない。例え君達がどれほどくだらない人間でもね」

刀を鞘に収め、悠は元クラスメイトを睨んだ。

「ただし、君達のやったことを見逃したわけでも、ましてや許したわけでもない。しかるべきところでしかるべき裁きを受けてもらう」

悠が目配せすると、燐は慌てたように携帯を取り出した。それを確認し、悠は元クラスメイト達に対して静かな声を作った。

「それが、君達のつぐないだ」

――――

喪服を着た人々の群れは、妙に少なかった。

彼女のクラスメイト達がいないからかもしれない、と黒いワンピースを着た悠はぼんやり思った。

吉村詩織のクラスメイト――悠にとっての元クラスメイト達は今警察にいる。病院にいた詩織が息をひきとったことにより、彼らの罪状には殺人がくっつくことになった。

詩織が生きていたら『未遂』で終わっていただろうが――しかしそれでも罪は重い。どちらにせよ、イジメをしていた時点で随分な

騒ぎだ。
死人が出なければ余計な罰も受けずにすんだのに――どちらにしたところで学校にはいられなくなるかもしれないが。それも、クラス丸ごと。
「……って、何他人ごとみたいに考えてるんだろう」
原因ではないにしろ、一因ではあるというのに。
悠はため息をもらした。
元クラスメイト達はまだ未成年。罰はそれほど重くはならないだろう。
しかし罪は変わらない。若かろうと老いていようと、未成年だろうと成人だろうと重さは平等だ。
「帰ろう」
悠は喪服の集団に背を向けた。
詩織の精神を――魂を斬ったのは自分だ。それが詩織が死ぬことになるきっかけだった。なのにどの顔で行けと言うのだ。
もっとも、詩織はすでに脳死だったらしく、ただ肉体が脳と同じ状態になっただけと言えるのかもしれないが。
むしろ、その方がよかったのかもしれない。
脳死はあくまで脳の死。肉体は生きている。二度と目を覚まさなくても、家族は『死』を認められなかったろう。
血のかよった物体の世話をし続けるより、死を認める方がましだ。酷いかもしれないが、れっきとした、哀しい事実だ。
悠はもう一度ため息をつくと歩き出した。ここは息苦しい。早く離れたかった。
空を見上げると、黒い空は曇っていて星どころか月も見えない。今にも雨つぶが落ちてきそうだ。
悠は少し早足になってその場を離れた。
しばらく歩いて、目の前に見慣れた姿を見付けた悠は、思わず朝を止める。
「流星……」

「よお」
流星は背を預けていた塀から離れ、軽く右手を上げた。
「何で……」
「朱華から聞いた。今回のこと、色々」
流星は真剣な顔付きで悠に近付いた。悠は思わず一歩下がる。
「悪ぃ。本当はもっと早く――昨日か一昨日にでも会いに行こうかと思ったんだけど、会いづらくてさ」
「……そう」
悠は目線を地面に落とした。
「酷い奴でしょ。昔の友達斬り捨てるなんて。言いわけじゃないけど、ああするしかなくてね。ほっといたら、被害が出ていたかもしれないし」
「そうだな」
流星の声と一緒に、頭の上に何かが乗った。顔を上げると、流星の手が自分の頭に乗っているのだと気付く。
自分より大きくて男らしい手。空手をしているからだろうか、ごつごつとしているように思える。
「おまえは正しいよ、悠」
「りゅ……」
「俺はおまえが正しい判断をしたこと知ってる。だから」
流星は微笑を浮かべた。
「そんな、泣くのをこらえてみるみたいな顔すんなよ」
「え……」
悠は驚いて自分の顔に触れた。
「私、そんな顔してる……？」
「してる。自覚無いか？」
「無い……」
悠は再びうつむいた。
「泣きたいのかな、私は」
「そうなんじゃね？　泣けばいいじゃん。その方がすっきりするだ

ろうし」
「そうかな。だったら」
悠は手を流星の背中に回し、顔を彼の胸にうずめた。
「胸貸して」
「え、えぇぇ!?」
流星は戸惑いの声を上げた。おそらく、顔は赤く染まってるに違いない。
「悠、おい……」
「黙って」
悠は流星に抱き付く力をいっそう強めた。
「お願いだから……今は黙っててて……」
我ながら弱々しい声が出るものだ。悠は内心で自嘲し、ゆっくり目を閉じた。
しばらくして、悠の背中に触れるものがあった。それは流星の腕であり、悠を抱き寄せるように力が入る。
それを感じながら、悠は流星にすがり付いた。

第三十一話　憑き人<上>

自分の荒い息づかいが聞こえる。目の前が赤く染まっているように思えて、何だか気持ち悪かった。

赤く染まっているのは視界だけではない。目の前に転がっているそれらも、赤く染まっていた。

それらは黒や青などの暗い色調の布をかぶっており、そこに赤がにじんでいる。先程まで動いていたのに、それらはぴくりともしなくなっていた。

そう、さっきまで動いていた。

なのにどうして動かなくなっているのだ？

どうして赤く染まっているのだ？

さっきまでその穴から汚物のような言葉を発していた。

その濁ったガラス玉は、さっきまで自分を見下ろしていたはずだ。

さっきまで——さっきまで——

「……何をした？」

自分はそれらに何をしたのだろう。それらのせいでぼろぼろにされて、その後の記憶が無い。

辺りを見渡すと、場所は変わらず路地裏だと解る。空を見上げると、暗かった夜空が白んじていた。

相当な時間が経過しているらしい。早く帰らなければ。

待ってくれる人はもういないが、あの家は自分の帰るべき場所なのだから。

立ち上がってふと、視線を落とす。何んとなく、考え無しの行動だった。

そうしなければよかった、とのちに思うことになる。後悔とは、

まさに字の如しだ。
まず目に入ったのは銀色だった。続いて、それにくっついた黒。
銀色は赤にぬれていて、薄暗い中でもてらてら輝いている。
ここでようやく、自分が何をしたのか思い出した。
自分が、彼らに何をしたのかを。
「う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
絶叫が、夜も明けきらない空にこだました。

――――

流星（リュウセイ）は困っていた。
それは別に悪い意味での困りごとではないが、しかしやはり流星は困っていた。
「アノ……悠（ユウ）サン」
「ん？」
「ソロソロ離レテイタダキタク……」
「やだ」
「即答！？」
つまり、悠にくっつかれて動けないのである。
ソファーに座ったとたん、急に悠が膝の上に乗ってきたのだ。非常に嬉しい体勢ではあるが、しかし同時に非常に危ない体勢である。
主に、流星の理性が。
この四日間、悠はずっとこんな調子だ。甘いものを食べた時並のキャラ崩れである。
原因は解っている。というか明らかだ。
悠と流星の関係の変化。
つまり――恋人同士になったのだ。
四日前、悠が泣き終わった後、流星は彼女に告白した。その後、まだ涙腺がゆるんでいた悠にまた泣かれ、流星は大慌てすることになる。

嬉し涙だっただけまだましだろうが。
その後、悠は流星にやたらくっつくようになった。
「ずっと気付いてくれなかったんだから、これぐらい我慢してよ」
悠曰く、そういうことらしい。
流星としては大歓迎なのだが、いかんせん女慣れしていないだけに対処に困る。
彼女持ちとしては先輩である恭弥（キョウヤ）に相談したいことが色々あるが、何やらいそがしいらしく、相談は受けられないらしい。
ただ、悠と付き合うと携帯越しに話した時、こんなコメントをよこしてきた。
「何だ、やっとくっついたのか。思ったより遅かったな。うん？あぁ、最初から気付いていたぞ。というか、みんな気付いていただろうな、悠の気持ちに。気付いてなかったのは、おそらくおまえだけだ」
自分目当ての女子連中にも気付かない究極の鈍感男に、まさか鈍さを指摘される日が来るとは思わなかった。
しかしそれは正しく、反論はできなかった。
第一頭の回転速度まで平均的な流星が、常識外れな思考能力を持つ恭弥を言い負かせるわけがない。彼の話に付いていけるかどうかも、怪しいところだ。
そして現在。おそらく三十分以上はくっついていただろう。ようやく少しだけ——あくまで少しだけ身体を離してくれた。
「そういえば流星。夏休みは初日から十日間、合宿だっけ」
「あ、あぁうん」
流星は我に返り、悠の問いに頷いた。
「部活もサボりがちだったからなぁ。秋には大会あるし、行かなきゃな。まぁ、一応朝練はほとんど参加してるけど」
「ほとんど、ね」
悠は意地悪そうな笑みを浮かべた。その顔を見て、流星は顔をしかめる。

「あのな……俺がサボりがちになったの、おまえのせいだからな」
「それは悪かったね」
悠は悪びれもせずにそう言った。
「明日の始業式終わったらすぐ合宿か。月曜日から大変だね」
「そういうおまえは、仕事は？」
尋ねると、悠はあっさり「あるよ」と答ええた。
「大した仕事じゃないし、一人でも大丈夫だよ」
「ていうか、俺が必要になった仕事ってあったか？」
自分で言ってて哀しくなるが、悠はほとんどの仕事を一人でこなしている。
自分はほぼお飾りのようなものだ。いや、もしかしたら無駄荷かもしれない。
勿論手助けは何度もしたが――それだって片手で数えられる程度だった。
「まぁ一割の――一割ぐらいはあったかもね」
「ほとんどゼロじゃねぇか！」
流星は心に大打撃を受ける。自分の存在の薄さを思い知った瞬間だった。
「……俺、もう帰る」
「え……何で？」
悠が酷くがっかりしたような顔をした。それに良心が痛むが、時間も時間だ。
「明日の用意とかしなきゃなんねーんだよ。俺、おっそろしいほど準備とか苦手だし」
「手伝おうか？」
じぃっと見上げてくる悠に思わず頷きかけた流星だったが、はたと思い出す。
今彼女が来るのは、非常にまずいことを。
「無理！　部屋、やべぇぐらい散らかってるしっ」
「私は気にしないけど」

「俺が気にするのっ」
流星が必死に止めると、悠はにやにやと笑った。
「何？　エロ本でも置いてるの？」
「違うけど……あぁもう、とにかく来ないでくれー！！」
流星は半ば絶叫していた。
実際部屋は散らかり放題だ。最近いそがしさにかまけて放置していたのである。いや、その前からかなり大変なことになっていたけれど。
それに――エロ本ではないが、見られたくない本があるのは確かである。
見られたくないというか、勘付かれたくない。ひやかされるのが目に見えている。
「ふぅん。あっそ」
悠は残念そうな顔をしつつも身体を引いた。流星はほっとする。しかし油断ならない。もしかしたら突然訪問なんてやらかすかもしれない。
「とにかく、もう降りてくれ」
「えー」
「えーじゃないっての！　ほら」
「しょうがないな」
悠は名残惜しそうに流星の膝から降りた。流星はため息をついて立ち上がる。
「何で俺にそんなにくっつきたがるんだよ……」
「だって」
流星のあきれの呟きに、悠は少しだけ頬をふくらませた。
「流星のこと、好きだから。何か問題ある？」
「いえ全く」
即答した。おそらく一秒にも満たなかったと流星は自覚する。
「うん、問題無い。問題無いんだけどな……」
「……？」

「頼むから、俺の理性のことも考えてくれよ……」
流星は頭をぐしゃぐしゃとかきまぜた。
「とにかく、じゃあな」
流星は頬の熱を感じながら事務所を後にした。

流星がいなくなった後、悠は彼の言葉を頭の中でくり返してみた。
「……別にいいのに」
至った結論を呟くも、しかし首を振る。
「私が困らなくても、流星が困るのか。普通逆なんだけどね……まったく、優しいんだから」
初恋の人兼恋人の言動と心理に、悠はため息をついた。
奥手もここに極めりだ。女子と接することがほとんど無かったようだから、無理も無いか。
――まぁいい。今は現状に満足しておくとしよう。
「さて、朱華（シュカ）」
「はい」
呼びかけると、朱華が姿を現した。
別にずっと部屋にひそんでいたわけではない。呼ばれたらすぐ現れるよう命令しているだけだ。
「仕事は確か明日だよね」
「はい」
朱華は頭を下げ、肯定した。
「明日の午後六時に、と。高野（タカノ）次郎様からのご指定です」
「そう。しかしあれだね」
悠は肩をすくめた。
「高野刑事から色々仕事もらってるけど、今回は一段と異色を放ってるよね。この間といいさ」
「……流星様には、おっしゃらないのですか？」
朱華の言葉に、悠は眉をひそめた。

「何を？」
「例の、舜鈴（シュンリン）様のお話です」
「あぁ、あれか」
悠はふ、と息をついてソファーに座った。
「言うよ。ただ時期をはかってるだけ。期末テストやら合宿やらで、いそがしそうだったからね」
「……そうですか」
朱華はずっと下げていた頭を上げた。
「でしたら私めが口出しをする必要はありませんね。――話を戻しましょう」
「そうして。で、今回は除霊？」
「はい。ただ、今回燐（リン）様は不在のため、別の術師が結界を張ることになっております」
「あぁ、あいつアメリカ行くんだっけ。いや、一時的に帰るか。しかし別の術師って椿（ツバキ）の？」
「はい。刀弥（トウヤ）様にはすでに許可は取ってあります」
「そう。あ、そういえば、一番肝心なこと訊いてなかったね」
悠は頬杖をつき、朱華を見た。
「警察上層部の許可は？」
「取っております」
機械的な朱華の答えに、悠は「そう」と簡潔に返した。
「あーあ、まったく面倒ごとになったね。高野刑事からどれだけふんだくってやろうかな」
悠はごろりとソファーに寝転がった。
「先程までご機嫌うるわしゅうございましたのに、随分な落差ですね」
「まぁね。流星のおかげで幾分かましになったけど、それでも気分が悪いよ」
悠は顔をしかめて嘆息した。
「誰だって気分が悪くなるだろうけどね。仕事とはいえ、刑務所に

行かなきゃならないなんてさ」
「正確には拘置所ですが」
「同じでしょ」
悠は再び嘆息した。
「このことは、流星様には」
「話せるわけないでしょ。聞いてる側も気分が悪くなるよ」
悠は自分の眉間にしわが寄るのを感じた。
「殺人犯の除霊なんて」

――――

「川本康彦（カワモト ヤスヒコ）、三十七歳。会社員で、家族は妻と娘がいたが離婚。現在一人暮らし。周囲の人間によると、気弱な男だったそうだ。
「普通なら」
拘置所の、ある一室。高野次郎からの情報に、悠は首をひねった。
「暴行を受けた際にぶち切れたと思うけど。でも、違うんだね」
「あぁ。ここの知り合いに、霊感が強い奴がいてな、そいつが視た限り、そうらしい」
「……ふぅん」
悠は少しだけ首を傾げた。
「いるところにはいるものだね、そういう人。しかし、どこで憑けてきたんだが」
殺しをさせるほど強力な悪霊など、そうそういるわけが無いのだが。
しかも一人二人だけでなく、六人も殺させている。その後、警察官三人にも重軽傷を負わせたとか。
東京にいる霊だろうか。しかしこの周辺でそんな強力な悪霊はいなかったはずだ。
となると、旅行か何かの時に、くっつけてきたのか――直接会ってみないことには何も解らない。

「今、その人はどこにいるの？」
尋ねると、次郎は難しい顔をした。
「拘置所の一室にいる――拘束具を付けてな」
「？　自傷行為でもしてるの」
「いや……自分じゃなく、他人を傷付けてな」
「……はたから見たら、立派な凶悪殺人鬼だね、まさに」
悠は顔をしかめた。
「さすがに会うのが嫌になったか」
「そうじゃないけど……未成年にやらせる仕事じゃないよね」
「それはすまなかったな」
次郎はくたびれた笑みを浮かべた。
「……高野刑事、もしかして休んでない？」
「いそがしくてな……この間の、寺の襲撃事件も片付いていないし」
ため息をつき、次郎は視線を鋭くした。
「その件、犯人の目星は付いたのか？」
「まだだよ」
悠は首を横に振った。
「仲間が有益な情報を提供してくれてね、けど断定できるものじゃない」
寺の襲撃、僧殺害、十字架、宗教テロ、焼死体と水死体――
パーツはあるが、形がまとまらない。足りないのか、それとも――
「結論が出たら話すよ。ただし、勝手に動かない方がいい」
「あぁ。それは解ってる」
「それと、上にあまりくわしいことは言わない方がいい」
そう言うと、次郎はいぶかしげな顔をした。
「なぜ、そんなことを言う？」
「念のため、だよ」
悠は肩をすくめた。
正直、政府にしろ警察にしろ、上――特にトップにいる人間が一番信用ならない。シロにせよクロにせよ、淡かれ濃かれ腹黒いもの

だ。

そういう意味では、死んだ父や、そして現在椿家をまとめている兄も同じことが言える――悠はそう思う。むしろ、そうでなければトップに立てはしないだろう。

しかしもし、その腹黒さがこちらに不利になるよう傾くなら――渡しておく情報は、少なければ少ないほどいい。

「さて。長話は後にして、そろそろ例の取り憑かれ殺人犯のところに連れてってよ」

「何だ、そのあだ名は……」

次郎はやれやれとばかりに首を振り、立ち上がった。

鉄製のドアを開けると、一人の男がいた。
人が三人も入ればぎゅうぎゅう詰めになりそうなせまい部屋だ。固そうな一人用ベッドと鉄格子付きの小さな窓しか目につくものが無い。
だから、ベッドに座ったその男がいるだけで、その部屋のスペースはほとんど無くなってしまっていた。
おちくぼんだ目の男だった。ほとんど寝ていないのが、目の下にはクマがある。この部屋においては目立つものの存在感は無く、幸薄そうだった。
とりあえず、顔の上半分での印象はそうだった。
男の顔の下半分は見えなかった。マスクによって隠れているのだ。犬が口に付けられる拘束具のようだ。しかし、人間に付けているのは初めて見た。
上体は腕をクロスさせて動かないようにする拘束用の服を着せられ、更にその上から三本の革ベルトが巻き付いていた。人の力では動くこともできないだろう。
悠はその状態を見て、入りかけた足を止めた。
どうやら想像以上に酷い状態らしい。腕だけでなく口までとは。
このままだと足まで拘束具を付けられかねない。
(流星を連れてこなかったのは、やはり正解だったか)
悠は一瞬瞬巡した後、部屋に足を踏み入れた。
男はドアの音にも気付かなかったのが微動だにしなかったが、悠が「ねぇ」と声をかけると、暗い目をこちらに向けた。
「あ、あぁ……」

どうやらマスク付きでも一応喋れるようで、くぐもった声を上げた。
「た、助けてくれ……助けてくれ助けてくれ助けてくれ……！」
男――川本康彦はベッドから立ち上がり、悲鳴のような声を上げた。
「俺は殺したくなかった！　せ、正当防衛なんだ！　あ、あいつらがいきなり襲ってきて、それで……それで……」
川本の声が弱まった。どうやら今頃悠が子供であることに気付いたようで、呆然とこちらを見下ろしてきた。
「何で……子供が」
「ここになぜいるかは後々（のちのち）解る。それより川本さん、貴方に幾つか質問がある」
悠は有無を言わせず質問を始めた。
「貴方、最近どこかにでかけなかった？　旅行とか、遠出とか」
「旅行……？」
川本の眉間にしわが寄った。
「い、1ヶ月前、滋賀に……」
「滋賀……」
てっきり、恐山とかそういう場所に行ったかと思ったのだが、どうやら違うらしかった。
「どうして行ったの？」
次の質問に、川本はうつむいた。
「どうして……子供にそんなこと……」
「答えなきゃ、いつまでも殺人衝動から逃れられないよ」
悠がそう言ったとたん、川本の表情が変わった。
「……どういうことだ？」
「私には貴方の罪を軽くはできないし、貴方を裁く権限も無い。けれど、その精神をむしばむものを狩ることができる」
「俺の精神をむしばむもの……？」
川本は目を見開いた。

「何だそれは……それが無くなったら、もう人を殺したい気持ちが無くなるのか？」
「さぁね。それは貴方の話次第。信じないなら話さないのもよし、一分（いちぶ）の希望にすがるのもよしだ。選択権は貴方にある」
悠が微笑を浮かべると、川本の顔から一瞬疑いの色が消える。そこに畳みかけるように、悠は言葉を重ねた。
「私と契約して。全て話してくれるなら殺人衝動を狩り取ってあげる。強要はしないよ、あくまで選ぶのは貴方だ」
「……」
川本は無言で悠を見返した。迷っているのが、見てるだけで解った。
「契約するか否か、全ては、貴方次第だよ」
悠が得意のセリフを言うと、川本は無言で頷いた。

――――

「――というわけで、旅行は家族と別れたことによる傷心旅行だったみたいだよ」
悠が話をしめくくると、刀弥は電話ごしで『そうか』と返した。
『で、道中墓みたいなのに触れて帰ったと。それが原因か』
「多分ね。ずっと悪霊かと思ってたけど、もしかしたら鬼のたぐいかも。もしそうなら、今からでも間に合う」
悠はそう言った後、前方に立つ兄に目をやった。
「で……刀兄」
『ん？』
「何で恭兄がここにいるかな」
悠の言葉に、ここにいるもう一人の兄――恭弥（キョウヤ）は困ったような顔をした。
『恭弥は式神やその他それ関係の術は使い慣れてるけど、結界術は慣れてないからな。経験値つませようと思って』

「その言い分は正しいけど……椿家当主としてどうなの？」
『まだ代行だ』
こまかいところを気にする兄だった。というか、いつまで代行が肩書きなんだろう。
『あ、そうだ』
別に話を変えるつもりでは無いのだろうが、刀弥は全く関係無いことを言い出した。
『おまえ、やっと流星とくっついたんだってな。まったく、いつまであの状態なのかと思ったぜ。二年後は結婚か？』
「気が早いよ」
悠はため息をついた。おそらく、最後のは冗談だ。
……冗談、だと思う。
『とりあえず、今回の件は二人で頑張れよ。兄兼当主代行は自分の仕事があるんでな』
「はいはい、頑張りますよ」
悠がそう返すと、刀弥は軽く笑ったようで、その後通話を切った。
「……妖偽教団のことが片付いてから、刀兄いつもの調子取り戻してきたよね」
「一番の心労が無くなったからな」
恭弥は微笑を浮かべた。
「恭兄はいいの？　明日から夏期講習じゃない。もしかしたら真夜中になるかもよ」
「多少夜更かししても平気だ。問題は、結界の強度か。略式なら何度かやったことがあるが、本格的なのは知識のみだからな……」
恭弥は悩ましげにため息をついた。それに対し、悠は肩をすくめる。
「ぶっつけ本番になるかな、やっぱり。しかたがないことだけどね。最大の問題は川本か」
「悠の予想が当たれば、その人は後天性の鬼童子ということになるな」

後天性の鬼童子。兄の言葉は、悠も思うところが無いでもなかった。流星が――好きな人が、先天性の鬼童子だからか。

もっとも彼の場合、『鬼』を取り除いてあげることはできないけれど。

「あぁ、そうだ」

と。恭弥がこちらを向いて微笑んだ。

「よかったな。流星と付き合えて」

「……うん。やっと両想い。とりあえずちょっとした仕返しに、毎日くっついてやってる」

「あはは」

恭弥はさわやかに笑い、歩き出した。

「さて……そろそろ行くか」

「うん」

悠は表情を引き締め、壁に立てかけておいた刀を手に取った。

恭弥が張った結界は、形は燐のものと似ている。

しかし、その力は比較にならないほど強い。本業の燐より、少なく見積もっても数倍の強度はあるだろう。

「恭兄、結界張るの初めてだったよね」

一応確認を取ると、兄は頷き、その後首を傾げた。

「なぜそんなことを訊くんだ？」

……天然無自覚天才なだけか。

悠は一人納得し（そんなことで納得できるのは悠ぐらいだろうが）、「何でも無い」とだけ答えた。

結界内には、すでに川本がいた。拘束具を付けられたまま立ち尽くしており、うつむいて微動だにしない。

「あれじゃまるで……」

恭弥は言葉を途切れさせた。

先に続く言葉は解る。それを途切らせた理由も。

それは言う必要の無い言葉であり、また言うべきでない言葉だ。
悠は無言のまま、結界内に足を踏み入れた。川本の傍まで寄ると、彼は顔を上げてすがり付くような目で見つめてくる。
「大丈夫。少し怖い目を見るかもしれないけど、それも僅かな時間だよ」
そう言うと、川本の小さな瞳が揺れた。不安と安堵がせめぎ合っているのかもしれない。
改めて彼と向かい合うと、やはり普通の悪霊の気配は感じない。悪霊に普通も何も無いだろうが。
特異な気配――妖魔に近い気配だ。それも、狐憑きとは違う、もっと邪悪な気配。
やはり――鬼か。
悠はため息をついて経を唱え始めた。
一分ほどで、変化が現れ始める。川本はマスクで隠れた口から苦悶の声を上げ、身体を前に折りまげたのだ。
うまく鬼を引き出せれば、川本は無事でいられるはずだ。その後、結界内で具現化した鬼を斬れるはず――

『こざかしい真似をするな、女童』

地鳴りのような声が鼓膜を震わせた。
悠は思わず声を上げかけたが、こらえて経を唱え続ける。
しかし今の声は、もしかして鬼だろうか。川本の声ではない。彼はまだ呻き続けている――
「う、っえ……」
――違う。これは呻き声じゃない。
まるで何かを吐き出すのをこらえているような声だ。
……まさか。
悠は経を唱えたまま、川本のマスクを取った。
はたして――思った通りだった。

川本の口から、何かが飛び出していた。五本の、先のとがった赤い触手――いや違う、これは指だ。黒く鋭い爪を持った、人外の指だ。

読みが甘かった、と悠は悟る。

取り憑かれた、なんてものじゃない。

彼は鬼に寄生されていた――！

やがて手が現れる――手から、太い腕まで川本の口から現れた。

川本はえずきながら涙を流している。生理的なものか恐怖からなのかは解らないが、その涙は口から伝うだ液と混じって床に落ちていた。

『俺を狩ろうとは、愚か愚か。今度はおまえの身体を乗っ取ろうか？』

とうとう肩まで現れて、次に頭が姿を見せた。

岩石を寄せ集めて作ったような顔面に、人のそれより一回り大きい頭。額には、黒いねじれた角がある。

川本の口は、もはや顎が外れているのではないかと思われた。しかしなお、その異形は彼の口からはい上がってくる。

胸、胴、腰、脚――どれも、人間の何倍もある大きさだった。

「かっ、はっ」

それを全部吐き出したのち、川本は膝を着いてせき込んだ。顎は外れてないようだが、しかしせきは悲鳴まじりで、膝をひきずりながらあとずさった。

「……まだ随分グロい登場方法だね」

悠は経を唱えるのをやめた。唱えても、もう意味が無いだろう。

「私に寄生する？　無理なことを。私は別に何様でもないけど、おまえは一体何様のつもり？」

『生意気な餓鬼め……人の身のくせして偉そうなことを言う』

それは――否、鬼は、にいぃ、と唇を歪めた。

『まぁいい。力は五割回復した。あとは人を喰ろうて取り戻す』

「彼に寄生していたのは、心の闇を吸い取るためか」

悠は二メートルはありそうな鬼を見上げ、少し距離を取った。あまり近くにいると刀を抜けない。

『あぁ。ちょうど濃い闇を抱えていたようなのでな、人を殺させて更に高めたのよ』

鬼は舌なめずりした。

『上質な闇ほど回復力は増す。もう少ししてから腹を喰い破ってやろうかと思っていたが――しかし』

黄色い目がこちらを映す。悠ははっとして『剣姫（ツルギヒメ）』の柄に手をやった。

が、それより早く。それより速く。

『我が名は酒呑童子！　女童、おまえの肉で俺は更に力を取り戻す！』

鬼は、悠に飛びかかった。

――――

「流星、おまえ何読んでんだ？」

部活仲間の声に、流星は顔を上げた。

夜。空手部員達は合宿一日目の練習を終え、宿泊先の民宿にいた。お世辞にも綺麗とは言えない宿だが、二年三年はいつも合宿で来ているので慣れてしまっている。

……一年は文句たらたらしいが。

そして二年の部屋として割り当てられた一室で、自分用にしいたふとんの上に座った流星は、一人読書にいそしんでいる。

周りは馬鹿話で盛り上がっているのに、だ。

「何って……これ」

流星が彼に差し出したのは、歴史の教科書だった。

「げえぇ！？　勉強してるし！　気持ち悪っ」

「シャーペン投げんぞ」

流星は膝近くに置いたペンケースに手を伸ばした。部活仲間は後

ずさる。
「……冗談だよ」
流星は彼を睨み上げた。
「別にいいだろ。俺が勉強しても。どっちにしろ部活無かったら補習組だったろうし、いつしてても同じだ」
実は流星、ぎりぎりの成績なのである。悠に呼び出されまくったせいで授業を受けていないのもあるが、もとより勉強は得意ではない。
今まではその点はあきらめ気味で、やる気も何もかき立てられたことは無かった。
無かった、のだが。
「どういう心境の変化だよ……気味悪い」
「おまえ俺にどういう印象を……まぁいいか」
流星はため息をついた。
ついこの間までのことを考えれば、そう思われてもしょうがないかもしれない。
「ちょっと頑張らなきゃいけなくなってさ、とりあえず勉強からってことで」
「何だよ。他にやることあんのか？」
「まぁ、一応な。家でちょいちょい」
それが、悠に見られたくないものだったりする。
「で、何でまた」
「それは……」
流星はうつむいた。
正直言いたくない。恋人とつり合いたいからなんて、死んでも言いたくない。むしろ言ったら、恥ずかしさで死ねる。
「まぁいいや。そういや最近、おまえ雰囲気変わったなー」
その言葉に、流星は首を傾げた。
「そうか？」
「そうそう。あと部活中無敵状態だったけど、どうした？」

「企業秘密だ」
化物相手に戦ってきたから――とは言えない。
「教えろよー」
「うっせぇな。教えねぇっての……」
流星は再度部活仲間を睨み付けようとして――やめた。
音が、聞こえたから。
まるで爆発するような音。それが遠くから聞こえてくる。
「今、変な音しなかったか？」
「え？　いや」
他は誰も聞こえなかったらしい。周りの面々の表情に変化は無い。
気のせいだろうか。いや、違う。確かに聞こえた。
流星は立ち上がり、窓に近付いた。二階にある部屋のため、見晴らしはそれなりにいい。
顔を窓から出し、辺りを見渡す。少しして、思った通りのものを見付けた。
すなわち――黒煙。
黒煙は、それほど遠くない森から上がっていた。かと言って、音が流れてくるには距離がある。
ましてや、窓を閉めて騒いでいた部活仲間達に、先程の爆発音が聞こえるはずもない。耳のいい流星だからこそ聞こえたのだ。
しかし、あの煙は一体何だ？
嫌な予感がする。あの辺りは無人だったろうか。
流星は窓から離れ、自分のスポーツバッグをあさった。一番底から小刀――『煌炎（コウエン）』を取り出し、部屋を飛び出す。
「り、流星、どこに……」
「おまえら部屋……いや、部屋じゃなくていい、とにかく民宿から出るな！」
流星は部屋の中にいる面々にそう怒鳴ると、廊下を走り出した。

『馬鹿、な……』

鬼――酒呑童子は目を見開いた。

腕は悠を引き裂かんと振り上げられている。振り上げられたまま、止まっていた。

『貴様、何をした……!?』

「別に何も」

悠は冷笑を浮かべた。

「ただ言っただけ。『動くな、酒呑童子』って」

『ほざけ！　こざかしい術なのだろうっ』

「まぁ、否定はしないけど」

悠は肩をすくめた。

「呪いの一種でね、名を呼んだ者の動きを封じるんだ。もっとも、普通の妖魔には効かないし、半妖や退魔師にも効かない。そういう呪いが効かないよう、お守りを持っているか、術をほどこしているからね」

悠はチョーカーに付いた十字架をいじった。

「馬鹿だね、名乗らなければこんなことにはならずにすんだのに。しかもそれは人間から与えられた名でしょ」

『っ、くそっ……』

「それを自分の名と認めなければ、『名』にはならなかったのに」

悠は刀を抜いた。

「名を必要とするのは、人間だけなのにね」

白銀の刀身が酒呑童子の首に喰い込んだ。そのまま振り切ると、醜い頭が宙を飛ぶ。

すぐ体勢を戻すと、傍で悲鳴が上がった。
「何だ、まだいたの？」
横でへたり込んだ川本を見て、悠は目を瞬いた。
「まぁ、もう解決したからいいけど……！」
悠は目を見開いた。酒呑童子の頭が、こちらに向かって飛びかかってきたからだ。
牙を剥き出しにして噛み付かんとする酒呑童子と、恐怖ゆえか微動だにしない川本。その間に、悠は左腕を差し込んだ。
「う、ぐぅ……！」
結果、酒呑童子の牙から川本を守ることはできた。が、その牙は悠の差し込んだ腕に喰らい付く。
『憑いてやったわ、憑いてやったわ』
酒呑童子は笑った。今更ながら、その声は口以外のところで発しているらしいことに気が付く。
『貴様のせいでまた肉体を失った。今度はおまえに憑き、闇を喰ろうてやる』
「……口からおまえが出てくるのはお断りしたいし、私の闇を喰いきれるかな？　第一」
悠は腕の激痛に耐えながら不敵に笑った。
「私一人を相手にしてていいの？」
その言葉に酒呑童子が気付く前に、悠は兄の名を呼んだ。
「恭兄！」
「解ってる」
恭弥はすでに、式神を放っていた。
「黒鋼丸（クロガネマル）」
恭弥が放った呪符は鎧武者へと姿を変え、酒呑童子の頭を掴んだ。
「動くなよ」
「解ってる」
兄の返事と同じ言葉を返すと、鎧武者の刀が動いた。
刀は酒呑童子の頭を半ばから断ち斬った。頭は離れたものの、顎

はまだくっついている。
「しつ、こいね」
悠は唯一残ったその顎をぎろりと睨み付けた。
「きょ、に……」
痛みのせいか、それとも生気でも吸われているのか、舌がうまく回らない。悠はそのまま座り込んでしまった。
「し、朱嵒」
「はい」
悠が呼ぶと、恭弥の隣に朱嵒が姿を現した。しかし結界内には入ってこない。
入ってこれないのだ。結界は基本的に妖魔を拒絶する。妖狐として強大な力を持つ朱嵒といえど、例外ではない。
だから。
「恭兄に結界を解いてもらうから、その後すぐに、この顎を焼き取れ……」
酒呑童子の牙が更に喰い込んだ。このままだと、本当に寄生されかねない。
「き、恭兄！」
「あぁ！」
恭弥は頷き、印を切った。
とたん、部屋の中を覆っていたものの消失を皮膚が感じ取る。それとほぼ同時に、酒呑童子の顎が燃え上がった。
『ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！　こ、これは、狐火ぃぃ！？』
青い炎に包まれながら、顎は悠の腕から離れた。傷口から血を吹き出しながらも、悠は何とか立ち上がる。
「油断してたよ、まったく……」
片手で刀を持ち上げ、酒呑童子の顎を見下ろした。炎はまだ消えていない。頭の無い身体や顎から上の部分は、すでに消失している。あとはこの顎だけだ。
「過去の幻影は幻影らしく消えろ！」

悠は刀を酒呑童子の顎に向けて振り下ろした。
斬る、というより叩く、という感覚だった。事実、酒呑童子の顎は粉々に砕けてしまう。
火がついた破片が辺りに散らばった。しかしその破片は、床と同化するように消えてしまった。
「……服、汚れた」
今なお血を流す服に気も留めず、悠は服の方を気にする。
「さすがに血は取れないか……このブラウス、白だし」
あまりのことに気絶してしまった川本のことも無視して、悠は服を汚してしまったことに嘆息した。

――

川本の拘束は外された。あれは酒呑童子が寄生したために起こった殺人衝動の対策だったため、もう必要無い。
「軽くうつ状態になっていたようだし、本人も後悔している。情状酌量の余地はあると思うよ」
悠は朱嶌に治してもらった腕の調子を確認しながら言った。
椿家の邸宅。悠は恭弥と一緒に実家に帰っていた。
血の付いた服はすでに着替え、今は黒のキャミソールを着ている。
「刀兄の方から、いい弁護士付けてあげてよ。不可抗力とはいえ、複数人殺したから、それなりに思い罪になるだろうし」
「あぁ。……しかし珍しいな」
刀弥は煙管をふかしながら首を傾げた。
「事後処理なんて。いや、事後処理すること自体は珍しくないが、依頼人を主体にするとはな」
「別に……」
「流星と付き合ったおかげで優しさが芽生えたか？」
兄の質問に、悠は首を横に振った。
「違う。そんな生ぬるい理由じゃない。今回のことは、私としては

思うところがあったんだよ」
悠はため息をついた。
「自分の意思に関係無く、殺したくなかったのに殺してしまったってところがね」
「あ……」
刀弥の表情が変わった。
悠は自分の母親を殺したことがある。きっかけは、母が恭弥を殺そうとしたことだ。
そしてそれをそそのかしたのは、今自分の横にある『剣姫』だった。
今思えば、悠はあの時、『剣姫』に半分乗っ取られていたのだろう。無事だったのは、刀をすぐ手離したからだ。
同じ――ではないけれど、似ては――いた。
「同情してるのか？」
刀弥の言葉に、悠は笑みを浮かべた。
それは自嘲の笑みか。
それとも自虐の笑みか。
「まさか」
「……」
「同情なんてするわけないでしょ。そんな暇――あるわけない」
悠は立ち上がり、刀弥に背を向けた。
「第一、自分の意思じゃないって点を除けば、彼と私は――私達は、とんでもない差異がある」
それは決定的なことだ。
倫理も道徳も外れに外れて、最後には悪徳しか残らない、そんな違い。
「私達は妖魔を倒すという大義名分が無ければ、ただの人殺しと変わらないんだからね」
悠はそのまま、刀弥の部屋を後にした。

妖魔の中には、人から妖魔となった半妖がいる。
それはもう斬っていい存在、狩るべき対象だ。
けれど、彼らには人として生きてきた道筋がある。人生というものを持っている。
退魔師は、それらを度外視しなければならない。
過去ではなく、ただ現在を。
記憶ではなく、ただ現状を。
思惑も志も全て無視して狩る。それが退魔師だ。迷いは許されない。
あるいは、だからか。
葛藤する流星に、葛藤しない自分が惹かれたのは。
興味が好意に変わったのは、そのためか。
「……くだらない」
悠は笑いながら呟いた。
好きになる理由を考えるなんて、馬鹿らしい。
原因なんてどうでもいい。経過なんて気にしない。
私が流星を好きであればいい――そう思った。
「早く帰ってきなよ、流星」
何となく寂しくなって、悠は誰に言うでもなく、離れた場所にいる青年に、そう囁いた。

――――

その場に着いた時、流星は遅かったと悟った。
そこは小さな寺だった。いかにも古そうで、石畳も土で汚れに汚れている。
そこに、死体が四つ転がっていた。
どれもこれも黒焦げで、まだ火がついている。もう助からないのは明白だった。

本尊があるであろう建物は燃え盛り、崩れている。爆音と黒煙の元はこれだろう。他の建物は無事だ。

明らかに人為的なもの。おそらくは、本尊とここにいる人間が狙いだったのだろう。

「くそっ！」

流星は地面を蹴った。

もっと早く自分が来ていれば、助けられたかもしれなかったのに。何もかも遅かった。

流星は顔を歪めながら辺りを見渡した。

犯人はまだ近くにひそんでいるのか。それとも逃げたのか。

人なのか、あるいは妖魔なのか。――いや、妖気は感じられない。なら人か。

こんなことをする人間がいるなんて――

「……違う」

流星は首を横に振った。

自分はよく知っているはずだ。人間の中には、とてつもなく残虐な者がいることを。

しかし、それにしても、一体何が目的でこんなことをしたんだろうか。

……考えてもしかたがない。自分ができることは、もう無いのだ。

流星はぎり、と奥歯を噛み締めると、その場を足早に立ち去った。

「ふむ……この場面を見てああいう顔をするのか」

金髪の青年は木の上から、去っていく日本人の青年を見下ろしていた。

その目には侮蔑の色が浮かんでおり、彼を見下ろし、見下しているようだった。

その後、青年は目を細める。いいことを思いついたとばかりにオレンジ色の瞳を光らせた。

「何か面白いいたずらを考えついたみたいね」
と。急に背後から青年を抱き締める者が現れた。
ウェーブがかった長い黒髪の美女だ。アジア人離れした顔立ちで、肌は抜けるように白い。
それは、青年の方にも言えることだが。
外国人であることを除けば、共通点の無さそうな二人。唯一の共通点は、二人の服装だった。夜とはいえ暑いこの季節に、二人はなんと黒いコートを着ているのである。
ケープが付いた、ボタンには十字架が刻まれているコートだ。そでやすそには金色のラインが入っている。
そんな服装で、同じ太い木の枝に座って身体を密着させている二人は、暑苦しいとしか形容できなかった。
しかしそれを指摘する者はここにはいないので、そのまま、暑さなど感じていないように二人の会話は続く。
「悪魔――この国では妖魔か。それを、あいつとあいつの友人にけしかける」
「うまくいくかしら」
「いく。さっき使えそうなのを見付けた」
青年は言った。笑わないまま、目だけ細めて。
「あいつの甘ったるい心をめちゃくちゃにしてやるよ」
「本来の仕事も忘れないでね」
「勿論だ」
青年は女性の言葉に頷き、更に目を細めた。
「全ては神の、御(おん)ために」

第三十二話　狂<上>

幼い頃は、特別であることに何の疑問も持たなかった。
やがて自ら考える頭を持つようになると、違和感を感じるようになる。
どうして特別でいなければならないのか。
どうして普通でいてはいけないのか。
買い与えられるものに価値は見出だせず、教えられることに必要を感じられない。
それを、最も信頼する祖父に話すと、彼は優しく笑うのだった。
自分が特別であることを望んでいるのは、他ならぬ祖父なのに。
なのに彼は、自分に言うのだ。
「おまえは普通なんだよ。そしてそれが、当たり前なんだ」
それ以来、買い与えられることは少なくなった。教えられることも減った。
代わりに家族と話したり、外で遊ぶことが多くなった。
そしてそれが――とても楽しかった。
その中で認識する。
自分は平凡で、普通で、月並みで、凡庸な存在なのだと。
特別という言葉より、それらの言葉の方がずっと魅力的に聞こえた。
家族と平和に暮らすことが、自分の何ものにも代えがたい幸せなのだと。
――だからこそ。
家を嫌った。
名を嫌った。

周囲を嫌った。
立場を嫌った。
賛辞を嫌った。
媚を嫌った。
能力を嫌った。
特別を嫌った。
そして何より――消失を嫌った。
なのに。
どうして、思う通りにならないんだろう。
思う。それが無駄だと知りつつ、考える。
その答えは、『理不尽』と言うほか無いのに。

――――

流星（リュウセイ）の放った拳が、相手の眼前で止まった。
「っ……こ、こここわ、怖、い」
「……大丈夫か？」
相手のびびりように、流星は拳を下ろしてあきれ返った。
合宿二日目。期間中に借りている道場で、流星ほか空手部の面々は練習を行っていた。
流星は大会出場予定者なので、特に練習には力を入れている。
ただ、今日はいまいち集中できないでいた。昨夜のことが、まだ頭から離れないのだ。
寺の襲撃。あの後匿名で警察に通報したものの、おそらく警察の手には負えないだろう。
その思ってすぐ悠（ユウ）に連絡したところ、動くなというお達しだった。
『君一人で動くべきじゃないと思う。戦闘能力はともかく、他の点では退魔師としてまだ未熟だろう。私が行くまで、危ない真似はしないで』
明日、遅くても明後日には行くから――そう言って、通話は切ら

れてしまった。
しかし悠の言っていることは正しいので、そのまま待機するつもりだ。今日、遅くても明日に来るらしいし、少しなら大丈夫だろう。
それに、少しは心配してくれているようだし――それは勘違いかもしれないが。
流星はため息をついてタオルを取りに行った。

「彼女ができたぁ！？」
その叫びを聞いて、流星は危うくスポーツドリンクで窒息しかけた。おかげでその言葉が自分に向けられたではないと気付くのに十秒以上かかってしまう。
一体何だとそちらの方を向けば、同じく休憩中の三年が一人を囲って騒いでいた。どうやら一人が彼女ができたということで、仲間から冷やかされているようだ。
それを見て、流星は悠のことは口にしないでおこうと心に決めた。彼女のことを知られたら、ひやかし程度ではすまない。
からまれてはたまらないので、流星はその場を離れようとした。が、世の中そんなにうまくいかないものだ。
「おーい華凰院。ちょっと来いよ」
先輩はこちらを見て手招きした。名を呼ばれてはどうしようもない。
というか、姓で呼ばないでほしいって言ったのに――流星は顔をしかめる。
正直なところ、華凰院姓を名乗ること自体不本意なのだ。
「あー……何すか？」
離れかけていた距離を詰め、流星は尋ねた。まぁ返答は解ってるが。
「こいつがさぁ、彼女できたらしいんだよ」
「はぁ……」

「しかも超美人！　写メ見てみ？」
練習中に携帯いじるなよ。
部活においては真面目な流星は内心でツッコミを入れつつ、先輩の差し出した携帯を受け取った。
画面を見ると、なるほど確かに可愛いらしい顔立ちの少女が映っている。どうやら少女自身が撮ったようだ。
「……確かに美人ッスね」
「何だよ、今の間は」
彼女ができたという先輩は、不服そうに顔をしかめた。
「うらやましがれよ、少しは」
「は、はぁ」
うらやましがるも何も、自分も恋人は最近できたし、その恋人の方が万倍も美人なのだからそんな気は起きない。
別に感覚がマヒしているわけでもないので、美人だと思うことはできたが。
「ノリ悪ぃなぁ、おい」
「あー……すんません」
流星は一応謝った。早くこの話を切り上げたい。
「まぁいいや。おまえも彼女作れよー、楽しいから」
「はぁ……」
結局あいまいな返事しかできない流星だった。が、次の話題によって内心を引き締めることになる。
「そういや昨日、寺が放火されたらしいな。しかもここの近く」
「あぁ、あそこ？　一年が毎年行く……」
「え？」
流星は先輩の一人が言ったことに首を傾げた。
「あの寺、あの時の寺なんスか？」
あの時、というのは、流星が一年の時のことを指す。初めての合

宿で古い寺に行き、初めて座禅を組んだことは覚えていたが、場所までは記憶していなかった。

そういえば迷い無く行けた気がする。それが理由か。

「あぁ。まぁ昨日の昼の内に行って、帰ってきたみたいだから全員無事だったけどな」

「けどさ、俺らの代だったらと思うとぞっとするよな」

一人が身体を震わせた。おそらくふりだろうが。

「俺らの時まであの寺で泊まりだったじゃん。もし今年もそうだったら今頃一年丸焼けだぜ」

「げぇ！　一年ごっそりいなくなるじゃねぇか」

先輩達は他人ごとのように――実際他人ごとだか――勝手なことを口にする。

それはあの惨状を見てないからで――だからではないが、流星は少しいらついた。

だから、脅かすようなことを言った。

「まだ近くに、放火魔がいるかもしれないッスね。気ぃ付けないと。焼死したくないし」

「……」

先輩達は青い顔を見合わせた。

流星はそれを見た後、背を向ける。生意気だったかな、と思わなくもなかったが、あえて気にしないことにした。

それより気になるのは、やはり寺のことだ。

あの時、妖気も何も感じなかった。気が動転していたからかとも思ったが、今考えても違う。

今なら確信して言える。妖魔は関わっていない。なら警察が解決してくれるだろう。

なのになぜ、悠に連絡したのか。警察の手に負えないと感じたのか。

言うなれば――予感だった。

ただの放火殺人ではないと、直感でそう思ったのだ。

ほとんど当てずっぽうだ。違う可能性だってある。
けれど経験上、こういうたぐいの予感は絶対当たるのだ。
今まで悪い予感は外れたことがない。いつも的中してしまう。
そのたびに外れてほしいと思うのに、いつも当たってしまうのだ。
今回も――そうなるのだろうか。
「……はーあ」
流星は嘆息をもらした。
ぐだぐだ考えてもしょうがない。今まで悪い予感を感じて、止められたことが無いのだから。
なら悪い予感が的中した時、丸く収めればいい。悠だっている。
大丈夫だ。
流星は前向きに考えていた。否、楽観視していた。後から思えば、それは事態を軽んじた思考だったと言わざるをえない。
現実はいつだって後ろ向きで、そしていつだって悲観的なのを、流星は知っていたのに。

――――

流星の友人の一人、高井（タカイ）信人は見覚えのある人物を見付けた。
休みの時間を使ってアイスを買いにコンビニに向かう途中、道端においてその金髪は場違いなほどよく目立つ。
ついこの間転校してきた、クラウディオ・ロッシーニだった。
「あれ。転校生、何でここにいんの？」
そう声をかけると、クラウディオは顔をこちらに向けた。
「……。……。……。……。……誰」
「間ぁ長っ！？」
信人が大げさに反応すると、クラウディオは眉をひそめた。
顔を合わせるのはまだ数回だが、無表情かしかめっ面しか見たことが無い気がする。とことん無愛想で、どこまでも無感動で、そして何より無反応だ。

だから、こうして正面から向き合うのは初めてだった。
「……つか、ほんと何でこんなとこにいんの？」
信人は首を傾げて先程と同じ質問をした。
クラウディオは答えない。こちらの顔を思い出そうとしているのかじっと見つめてくる。
「あー、えっと。俺おまえと同じクラスなんだけど、覚えてるか？」
「知らん」
簡潔かつ手酷い言葉だった。信人は少し傷付く。
「じゃ、何回も訊くけどさ……何でここにいんだよ」
「貴様は知らなくていい」
冷たい返答だった。しかし、見た目に反した乱雑な口調だ。どこでどう日本語を覚えたのだろう。
「おい」
と。クラウディオが口を開いた。
「貴様、華凰院流星の知り合いか？」
「？　知り合いっつーか……友達だけど」
流星は人付き合いが悪いわけではないが、友人と呼べる存在は案外少ない。
それは彼の出自や特殊な能力に起因しているのだが、そういう背景もあって、信人はその数少ない友人の一人だった。
「そうか。ちょうどよかった」
クラウディオは一つ頷き、信人との距離を詰めた。
ちょうどよかった、ということは、流星に何か用だろうか。席が隣り合っていること以外、二人に接点は無いはずだが――
「貴様、俺に利用されろ」
「……は？」
信人は一瞬何を言われたのか解らなかった。
もしかして、彼は日本語が不自由なのだろうか。乱雑な口調も、それなら説明がつく。
しかし、だったらどういうことを言いたいのだろう。

と。

「クラウディオ」

目の前の青年の名を、背後から呼ぶ者がいた。

静かに、文字通り音も無く、黒髪の青年が現れる。

うなじの辺りで長い黒髪を束ね、額の真ん中でわけた長い前髪の下には西洋風の整った顔がある。群青色の瞳は、どこか優しげな光をたたえていた。

「エドワード」

クラウディオは驚いた様子も無く、青年の名らしき単語を口にして振り返った。

「来てたのか」

「ええ。シスターの要請で。こちらの仕事は終わりましたから」

「ふん。だが、これに関しては貴様の手を借りるまでもない」

クラウディオはそう言って、ズボンのポケットから環のわようなものを取り出した。

環のようなもの——黒い数珠だ。全ての数珠玉が黒く、あまり綺麗とは言えない代物だった。

「……何だそれ？」

見覚えの無い人物の登場、更に謎の道具の出現に、信人は戸惑った。

「貴様が知る必要は無い」

クラウディオは信人との距離をゆっくり詰めた。反射的に、信人は後ろに下がる。

「おとなしく俺達に『利用』されろ」

「せめて『協力』と言いましょうよ」

あきれたようなため息をつくエドワードに思わず視線を向ける信人。

それが間違いだった。

エドワードに気を取られている内に、クラウディオの手が自分の手を掴んだ。
「貴様は何も考えなくていい」
クラウディオが低く囁いた。離そうともがいても、あまりに強い力で剥がせない。
自分より小柄で華奢な相手なのに――なぜ。
「あの鬼童子を殺せばいいだけだからな」
信人が最後に見たのは、色に反して冷たい光を灯す、オレンジの瞳だった。

狂<中>

流星は友人を――正確には信人を探していた。

休憩中、外に出たきり帰ってこないため、二年生数人で探しているが見付からない。

さんざ探して影すら無く――結局流星達は合宿先へ戻ることにした。

「どこ行ったんだよ、信人の奴」

友人の一人の呟きに、流星は答えない。代わりに別の二年生が答えた。

「どっかでナンパやって、その娘の家に転がりこんでんじゃねぇの？」

「無理あるって、あいつの顔思い出せよ」

それぞれの批判批評を聞きながら、流星はうつむいて歩いていた。

どうも先程から嫌な予感がしてならない。それは探し出る時から感じていることで、今は倍増していた。

一応出る時に『煌炎（コウエン）』を持ち出してきたが、使う時が――来るのだろうか。

流星はため息をつき、そして顔を上げた。

奇妙な気配を感じたからである。

それは流星にもなじみのある気配であり、しかしどこか違う気配にも感じた。

なじみのある気配――妖気。しかし変に中途半端な妖気だ。

なりかけ、という印象を受ける。半妖でもこんな気配は持たない。

だが何より気になるのは、その気配が宿泊先の民宿がある方ということ――

「まさか」
流星は体温が一度下がった気がした。まとわり付く熱気を振り払うかのように走り出し、民宿へと急ぐ。
後ろから友人達が制止の声をかけてきたが、止まる気は無かった。よりによって悠が来る前にことが起きるとは、最悪だ。
時間はまだ昼過ぎ。悠が来るまで数時間、かかれば半日だろう。
こうなってしまえば、自分で何とかするしかない。
できるだろうか。自分に。
だがやるしか――

バン！
バンバン！

と。小さな爆発音が響いた。
流星はそれに聞き覚えがある。確か――そう、桐生家の風馬が――
「って、銃声！？」
流星は目を見開き、走る速度を速めた。
民宿が近付くにつれ、すれ違う人の数が多くなってきた。皆、まるで何かに逃げているようだ。中には見覚えのある者もいる。
ようやく民宿にたどり着いた時には、銃声は止まっていた。
銃弾を使いきったのか。それとも標的がいなくなったのか。
できればどちらも当てはまってほしい。最悪でも後者だ。人質を取られなくてすむ。
流星は民宿の中に駆け込み、構えた状態で固まった。
民宿の中には、銃の持ち主以外誰もいなくなっていた。どうやら全員、避難はできたらしい。
だが、流星はそのことに気を回せるほどの余裕は無かった。
「の、信人……？」
銃を持っていたのは、ついさっきまで探していた信人だった。
しかし、明らかに様子がおかしい。目は正気を失い、まともに話

ができる状態には思えない。
流星は愕然としてその場に立ちすくんだ。
どうして彼があんな状態になっている。
どうして妖気なんかを放っている。
どうして、どうして――!?
「う……がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
信人は咆哮を上げた。ごつい銃を両手で構え、銃口を流星に向ける。
我に返った流星は、右へ移動し、銃弾から逃れようとした。
が、少し遅かったらしい。

バン!!

鼓膜が破れそうな銃声と同時に、左肩に痛みが走った。
肩を押さえ、見ると、かすめたらしい。服に血がにじんでいた。
大した怪我ではない。それに、右手が無事なら武器を振るえる。
だが――その武器は誰に向けるのか。
信人に――か?
斬らねばならないのか。
友達を?
だが流星は迷っていても、相手は迷わないらしい。
信人はいかにも重そうな銃をこちらに投げつけてきた。流星はそれを素手で弾くも、すぐそれがおとりだと悟る。
視界を邪魔していた銃の代わりに、信人が突っ込んできた。銃を投げると同時に、距離を縮めていたらしい。
流星は反射的に足で迎撃した。向かってきた信人の胸を、思いっきり蹴り飛ばす。
後ろに吹っ飛ぶ信人。壁に叩き付けられたのを見て、流星は駆け寄るどうか迷った。
そこで、ふと気付く。信人の腕に巻き付いた、それの存在を。

黒い珠を連ねた、それは数珠だった。
禍々しい気配を放っており、その気配は信人にまとわり付いている。
「……そういう、ことか……」
流星はぎり、と奥歯を噛み締めた。
経緯は解らないが、信人はあれに操られているようだ。
あれを何とか外すことができれば――
「何だよ、これ……」
その声に、流星は驚いて振り返った。
一体いつからそこにいたのだろう。一緒に信人を探しに出ていた友人達が、そこにいた。
「信人が銃ぶっ放してるって聞いて、それで……」
「この……馬鹿！　何で来てんだよ！？」
流星は思わず怒鳴った。友人達はぎくりと身体を震わせる。
「……っておまえ、肩から血が！」
「かすり傷だ。それより早く……！」
流星は足音に身体を正面に戻した。信人が走り出し、再び距離を詰めてきたのだ。
流星はその突進を受け止め、押し飛ばす。信人は転がるように床に倒れ込み、そして流星との間合いを取った。その際床に落ちていた銃を回収する。
また投げるつもりなのだろうかと、流星は身構えた。しかしその予想は、とんでもない形で外れることになる。
信人は銃を――構えた。
もう残弾は無いはずなのに。
まさか、と思う。
まだ残っていたのか。投げたのは、銃弾が無いと思わせるためか。
あきらかに考えてやっている。

彼はただ操られたのではないのか――！
引金に指がかかった。銃口は流星を向いていない。
銃口は、友人達を向いていた。
流星ではなく――友人達を。
「っ……！？」
流星はろくに考えずにろくに考えずに動いた。
信人との距離を詰めている内に、銃弾は放たれるだろう。それでは友人の一人が確実に被弾する。
そうなれば、その友人は死ぬ。そうでなくとも、大怪我を負うことになるだろう。なら、自分が彼らをかばえばいい。
この行動をのちに聞いた悠は、絶句することになる。怒るのも忘れ、ただ言葉を失うことになる。
しかしそんなことは、今の流星には解らない。解るはずもない。
頭にあるのは、ただ友人を救うだけだった。
流星は友人達を弾道から外すように押しのけた。その速さは常人にはかすむほどであり、友人達にとってもそれは同じことだったろう。
そこから自分も伏せるという選択もあった。が、それをするには少し遅過ぎた。
「……がっ」
流星は呻く。腹に、焼け付くような痛みを感じたからだ。
直前に銃声を聞いている。一発だ。
つまり、この痛みは――
「はっ、はぁ、はぁ、はぁ……マジかよ」
かばうつもりではあったが、せいぜいかすめる程度だと思っていた。それくらいはできるつもりでいた。
考えが甘かった。思った以上に行動が速かった。
まさか、腹を撃たれるとは思ってもみなかった。
――――

「狂戦士（バーサーカー）は知ってるだろう」
路地裏――ことの状況がよく見える場所に、クラウディオとエドワードは身をひそめていた。
クラウディオの問いに、エドワードは頷く。
「ええ。ですが、それがどうしました？」
「あれが、まさにそれだ」
にこりともせず、クラウディオは自分の作り出した現状を眺める。
彼が笑うところを、エドワードは見たことが無い。自分だけでなく、他の誰も無いだろう。
この少年のような風貌の青年は、笑ったことが無い。それは当たり前で――彼は笑い方を知らないのだ。
それどころか――彼は表情の動かし方すら知らない。
さながら鉄仮面のごとく、彼の表情は変わらない。せいぜい、感情に合わせてほんの僅かに反応するぐらいだ。たいがいそれはしかめっ面になっているが。
そういえば確か、鉄仮面を付けて幽閉された男の話があった気がする。高貴な身分でありながら、さる事情でどん底に落とされた男。
クラウディオに、少し似ている。
「まさに――とは？」
エドワードは考えを振り払って、尋ねた。クラウディオはエドワードに向き直る。
「あいつに付けた数珠は、僧兵と呼ばれる者の一人が付けていたそうだ」
「僧兵……日本が武家社会だった頃にいた、文字通りの戦士――ですよね？」
「あぁ。宗派は違うが、今の俺達のようなものだ。その数珠の持ち主は、人を殺す感覚と武器を扱う感覚に酔った」
「快楽殺人鬼になり下がった――というわけですか」
「解りやすい堕落だろう。あの寺の連中からその話を聞いた時、あ

きれたものだ」
クラウディオは肩をすくめた。
それは襲撃する前か後か――エドワードはどうでもいいことを疑問に思った。
そんな考えは意味が無い。寺はすでに、クラウディオによって潰されているのだから。
「あるいは――戦闘狂と呼ぶべきかもな。だから俺はあれを狂戦士と読んだ」
「僧兵の霊が取り憑いたわけですか。あ、でも、彼はどうして銃の扱い方が解るんです？　確かにさっき、クラウディオが一回使って見せましたが……」
「言ったろ、武器を扱う感覚に酔ったと」
クラウディオはオレンジの瞳を細めた。
「一回見れば武器と解る。武器と解れば――使わずには、いられない」
「使わずには――」
「だから、戦闘狂だ」
クラウディオは再びその様子を見つめた。
一人の青年が、銃片手に民宿へはいっていくところを。
しばらくすれば、多くの人間が民宿から出てくることだろう。
何人死ぬのだろう。一人か、二人か。もしかしたら、誰も死なないかもしれない。
別にそれはかまわない。今回の目的は、人が死ぬことではない。
「……それにしても、それにしたって、デザートイーグル渡すのはどうかと思いますよ。反動、どれだけあると思ってるんですか」
「あいつ空手をやっているんだろう。多少の反動、どうってことない」
「多少って……」
エドワードはため息をついた。
「ともあれ、後で回収しなければいけませんね、銃」

「まぁそこからアシが付くことは無いがな」
クラウディオはそう言い、ふと、目を瞬いた。
「思ったより早いな」
「はい？」
エドワードが視線を追うと、見覚えのある青年が民宿の中に駆け込んだのが見えた。
「おや、本当ですねぇ。足、速いんですね」
「それだけではないだろうがな」
クラウディオはそれを見送った後、背を向けた。
「そろそろ行くか」
「いいですけど……人消し役を僕に一任しないでくださいよ」
「？　火消し役はおまえだろう。任せる任せない以前の問題だ」
「いや、火消しは得意ですが専門ではありません。クラウディオ、僕が君と組んでる理由解ってます？」
「火消し役」
「お目付け役です」
エドワードは額を押さえた。
「君、自分の危うさが解ってますか？　今のところ君を肉体的にも精神的にも抑えられるのは、僕とシスターだけなんですよ」
「……冗談だ」
ふい、と顔をそむけるクラウディオに、エドワードは少しだけ笑った。
「冗談を言える程度には、情緒は成長しましたか」
「……怒るぞ、エド」
「ほめたんですよ。あ、すみません。君はほめられるのが死ぬほど嫌いでしたね――」
エドワードは言葉を切り、振り返った。
銃声がしたのだ。そして予想通り、よろめく青年の姿が見える。
「さすがに死にますかねぇ」
「いや、どうだろう。話によると、腹を貫かれてもすぐ完治したよ

うだし――」
「中に銃弾が残ってない限り死にませんか……ふむ。しかしまぁ、見届けられるのもここまでですね」
エドワードはズボンのポケットから懐中時計を取り出し、開いた。古い時計だ。しかしていねいに扱っているため、金色のメッキが取れることは無い。
「そろそろ向こうに行かなければいけないでしょう」
「ん。……あいつ、死ねるといいがな」
それは、もし生きていたら目の当たりにするだろうことを言っているのだろうか。
確かに、この結末に救いはない。どちらにしても苦しむだけだ。救済など求めてはいけない。求められない。
それでも苦しみたくないなら、死を選ぶほか無い。
死は逃避だ。けれど同時に、安らぎでもある。
クラウディオは珍しく、他人を思いやっているらしい。
それに対して、エドワードは思うところが無いでもなかったが――そしてそれがあまりいい感情ではないことを自覚していたが――ともかく。
ため息をついた。
深い深い、ため息を。
「死ねるとか、物騒な言葉を使わないでください。僕達らしく、こう言いましょう」
首を傾げるクラウディオに、エドワードはたしなめるように言う。勿論それはクラウディオが幼いとか、そういう理由があるからではない。
だだエドワードは、クラウディオの足りないものを補っているのだ。
それは、自分にも言えることだけれど。
エドワードは心の隅でそう思いつつ、続く言葉を言った。
まるで言い聞かせるように。

しかもクラウディオではなく、自分に。

「神の元にいけるといいですね――そう言いましょう。僕達は『使徒』なんですから」

狂<下>

熱い、と思った。

腹の中に高温で熱した鉛でもあるかのようだ。

弾は貫通したのだろうか。それともまだ身体の中に残っているのだろうか。

そんなこと、考えている余裕は無いが。

状況的にも、精神的にも。

「が、がはっ……」

流星は血を吐き出した。内蔵をやられたのか。だとしたら早く決着を着けないと。

でも――どうやって決着を着ける？　この状態でどう戦う？

どうやって……どうやって……

「……あは」

と。信人が突然笑い出した。

最初は小さかった声量が、やがて大きくなる。最後には高笑いになった。

「あはははは、あはははははははははははははははははははははははははは！」

「な、んだ……」

流星は思わず後ずさろうとした。だが足に力が入らず、その場にしゃかみ込む。

「流星！」

友人の一人が叫んだ。流星はそちらの方を向き、怒鳴る。

「早く逃げろ！　殺されるぞ！！」

「け、けど……流星のきず、傷の方が……」

友人達は完全におびえていた。彼らがいては、小刀も抜けない。
いや、どちらにせよ抜けない。
自分は信人を傷付ける気は無いのだ。何とかして、あの数珠を外さなければ。
流星は足に力を入れ、半ば無理矢理立ち上がった。
一か八か、のるかそるか――だ。
相手が笑っている間に、数珠を引きちぎるべく、手を伸ばす。
だが、その途中で相手も気付いたらしい。蹴りを放ってきた。
蹴りは、よりによって腹の傷にヒットする。想像を絶する激痛に、流星は息をつまらせて倒れ込んだ。
「は、はっ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ！」
呼吸は戻ったものの、身体中が痛みでしびれている。動けないわけではないが――確実に鈍るだろう。
そこへ更に追い討ちをかけるように、背中に衝撃が加えられた。
どうやら踏みつけられたらしい。
「う、くぉ……の、信人……」
流星は首を回して信人を見た。
彼はまだ笑っている。壊れたからくりのように笑い続けている。
「どけ、よ……てめ、ぇ……正気に、戻れ、よぉ……！」
流星は無理矢理身体をひねって信人のふくらはぎに裏拳を放った。
ぐらりとよろめいた信人の下から逃れ、流星は立ち上がる。その際に数珠を引きちぎった。
ばらばらと散る数珠。それを見た瞬間、流星の全身からふ、と力が抜けた。
これで信人は正気に戻るはずだ。これで――
「……がっ」
だが。
流星の期待は無惨にも砕かれることになる。
流星はろくに受け身も取れないまま、殴り飛ばされた。

信人によって。

何が起こったのか、流星は最初解らなかった。
正気に戻ったはずの信人に、どうして殴られているんだろう。確かに数珠は外したはずだ。
流星はろくに理解できないまま、壁に叩き付けられた。
口の中に鉄の味が広がる。流星は反射的に閉じていた目を開いた。
ゆらりと立ち尽くす信人の姿が視界に映る。その雰囲気は、先程と何ら変わらなかった。
妖気も、未だ放ち続けていた。
「な、何で……」
あの数珠が原因ではなかったのか。もしかして、遅かったのか。
なら、どうすればいい？　どうすれば、どうすれば――
「っ、おい何を！」
流星は身体を起こした。
信人は倒れ込む流星ではなく、立ちすくんだまま動かない友人達に向かって走り出したのだ。
相変わらず笑ったまま。
狂ったように笑ったまま。
壊れたように笑ったまま。
おそらく自分と同じように、殺すために――！
「や、やめろ！」
流星は悲鳴に近い声を上げ、小刀を抜いた。
それこそ、その時は何も考えていなかった。
ただ友人達を助けたくて、小刀を振った。
刃に炎を宿す小刀、『煌炎』。振れば炎のかまいたちが放たれる。
そうして放たれた炎のかまいたちは――信人の背中にぶつかった。
容赦無く。
意思の無い炎は、信人の背中をためらい無く焼いた。
信人の胸が歩くなりそうな絶叫に、流星は我に返った。

やってしまった。やるつもりはなかったのに、やってしまった。
頭の中が後悔と驚愕でぐちゃぐちゃになっている。目の前が真っ暗になり、何も考えられなくなった。
流星は、失血のせいで意識を失うまで、ただ目の前の光景を見ることしかできなかった。

――

身体中が重い。頭ももうろうとしている。目覚めた時の気分は最悪だった。
「流星？」
呼びかけられ、流星は焦点の合わない目を右手側に向けた。
最初、声をかけたその人物が誰か解らなかったが、徐々に目が薄暗さになれていくにつれ、それが誰か理解する。
悠だ。丸椅子に座り、じっとこちらを見つめている。眉間に寄ったしわは、流星と目が合うと消えた。
「やっと起きたね。一晩中寝てたんだよ、君」
「は……？」
流星は何を言われたのか解らず、辺りを見渡した。
白い天井に白い壁。机やカーテンさえ白い。
ここは……もしかして病院だろうか。
「まったく。腹部に被弾した状態で動き回るなんて……その時まだ弾が残ってたんだよ？　しかも内蔵傷付いてたし。鬼童子でよかったね」
若干の怒りをにじませる悠の小言を聞きながら、流星は首を傾げる。
一体自分はどうしたんだろう。何で腹に弾なんかが――
「っ……！」
流星はがばりと起き上がった。いきなり動いたせいか、腹部に痛みが走る。そこで初めて、自分が輸血されていることに気が付いた。

「ぐ、い、てぇ……」
「馬鹿、手術して間も無いのに！」
珍しく声を荒げる悠の肩を、流星は掴んだ。目を丸くする彼女に、尋ねる。
友人の、安否を。
「信人は、信人はどうなった！？」
「……」
「生きてるか？　生きてるよな！？」
「……生きては、いる」
悠の答えは、肯定だった。それに一瞬安堵するも、流星はひっかかりを覚える。
今の言い方は、どういうことだ？
「何か……あったのか……？」
「……」
「悠！」
「……酷い火傷を負ったものの、肉体は無事だ」
だけど、と、悠は視線を落とした。
「精神は……完全に悪霊に取り込まれてて、同化してしまっている。引き剥がすことは不可能だ」
「そん、な……」
「妖魔化してないだけ、まだましだけどね――それが幸か不幸かを判断することは、私にはできないけど」
「元には」
ほとんどうわ言のように、流星は悠に尋ねた。
答えは、何となく解っていたけれど。
「元には……戻らないのか？」
「……無理だよ」
少し間を置いて、悠はやけにはっきり言った。
「言ったでしょ、完全に同化したって。無理に悪霊を狩ろうとすれば、本当に精神を壊しかねない」

「……そんなのって」
流星は視線をシーツの上に落とした。
「何だよ、この展開……俺は結局、友達一人すら助けられないってことかよ……」
なんて理不尽だ。信人は何もやってないのに。
いい奴だったのに。悪い奴じゃなかったのに。
何だこれは。何なんだこれは。
悲劇的過ぎて、逆に笑えてくる。
こんな状況で笑いなど、ほんの少しも出ないけれど。
結局自分は、何もできないのか。これではあの時と同じじゃないか。
妖魔に家族を殺された時と。妖偽教団に友達を殺された時と。
全くの――同じ。
全くの――無力。
自分はあの時から、何も変わっちゃいない。あの時から、何も学んじゃいない。
自分はいつになったら変われて、いつになったら学ぶのか。
本当に――馬鹿の極みだ。
自分は一体今まで何をしてきた。ただのうのうと生きてきたわけじゃないのに。
どうしてこんな理不尽を横行させてしまうんだ。
一体自分は、何がしたい？
自分はただ――『普通』に生きるために、強くなりたいだけなのに。
「……馬鹿だよなぁ、俺。結局何もできてねーじゃん」
流星はため息をついた。自分を落ち着かせるために、嘆息した。
「何やってんだろ、マジで。こんなんじゃ全然、退魔師らしくないよ」
「……退魔師らしいって、何？」
と。悠が不機嫌そうな声を上げた。彼女を見ると、声以上に苦々

しい表情をしている。
「非情になりきること？　それとも力が強いこと？　そもそもらしいって言葉自体、間違いだ」
「……」
「その人はその人でしかないのに、職業でその人の人間性を問うようなまねは、大間違いだよ、いや、間違いと言うなら、そもそも君が君自身を責めていること自体間違いだ」
「え……」
「君があの数珠を破壊しなければ、もっと酷いことになってたろうし、君が小刀を使わなければ友人の一人は死んでいたかもしれない。他に方法は無かった――とは言わないけれど、それでも君はできうる最善の策を取った」
でも、と、悠は顔をぐっ、と近付けてきた。綺麗過ぎる顔が近くにあることで、流星はその黒曜石の瞳を覗き込む形になる。
「ゆ、悠……」
「君が銃弾を受けるのは、やっぱりおかしい。私は、そこだけは責める」
そして悠は――何を思ったか腹に手を置いて体重を乗せてきた。しかも、傷の上に。
「い〝だだだだだだだだ！　ちょ、何す――」
「人を心配させておいて、ごめんの一言も無いの？」
悠は微笑を浮かべた。
何だか――とても怖い。修羅を背負っているように見えるのは、けして気のせいではないだろう。
とりあえず謝らなければ、今死ぬかもしれない。
「えっと……そ、そのっ……ごめん！　いや、マジでごめんごめんごめんごめんだからどいてくれいやどいてくださいお願いします」
「……ふん」
悠はようやく傷から手を離し、うつむいた。
「心配した」

「あぁ」
「凄く心配した」
「あぁ」
「凄く凄く心配した」
「あぁ」
「でも身体以上に、心が心配だった」
悠はまた顔を上げ、流星を見つめた。
「友達を斬ったこと、助けられなかったこと――流星、きっと傷付いてる」
「……あぁ」
傷付く、なんてものじゃない。ずたずただ。
この数分で、こんな短時間でこんなに多くの感情が頭の中でごちゃまぜになるのは久しぶりな気がする。
懐かしさなんて、これっぽっちも感じないけど。
「流星。流星は今どうしたい？」
「え……」
「私は、私にできることなら応えたい。流星がしたいことを手伝いたい。だって、私――」
皆まで言わせなかった。
流星は衝動に任せて、悠を抱き締めていた。ただ彼女のぬくもりを感じたかった。
「流星……？」
「すぐすむから。頼むから、このままで」
流星は自身の声が震えていることを自覚していた。視界だって、ぼやけて見える。
「流星……泣いてる？」
「っ……」
「私は君が泣いたって気にしないよ。むしろ今は泣いた方がいい」
「気持ち悪いとか、男らしくないとか思わないのかよ」
「……思わなくは、ないけど。でも、全部受け止める」

悠の手が背中に回った。
「私は、好きな人の涙を受け入れられないほど、包容力の無い人間じゃないよ」
「……そうか」
そうとしか返せなかった。
流星は声を押し殺しながら、悠にすがり付いた。
頬を流れる涙を止めようという気は、無かった。

――――

「あらあら……あの子のもくろみは失敗ね」
野次馬の集まった民宿の前で、女は呟いた。
黒いロングドレスに黒いハイヒール、手袋まで黒という黒づくめの女を、しかしなぜか誰も気にしていなかった。
風景にうまく溶け込んでいるから――ではない。服装一つ取っても、東洋人と西洋人の違いは大きなものがある。
「ふぅん……死者は二名、ね。思ったより少ないわ。まぁ大量虐殺が目的でないのだからいいけれど……」
女はぶつぶつと独り言を続けた。それを聞いている者は誰もいない。
まるで耳が機能しなくなったかのように、野次馬達の聴覚は女の言葉を認識していなかった。
「あの坊やを殺せなかったことは痛いわね……クラウディオとエドワードは別件で明日まで動かせないし……ふむ」
女は後ろを見やった。
「悪いけど、彼を焚き付けてきてくれないかしら。あそこ同じようにね」
「……めんどくせぇなぁ」
そう答えたのは――誰なのか。
男の声だった。しかし彼女の近くに、それらしい男はいない。

声はすれど姿無し。
まさに、そんな状況だった。
「少し焚き付けるだけでいいの。私が行きたいけど、指揮官自ら行動を起こすわけにもいかなくてね」
「クイーンは動き過ぎると、簡単に取られるからなぁ」
「私はクイーンではないわ。さしずめルークと言ったところよ。クイーンは、あのお方でしょう」
「で、俺らがポーンであの方々はナイト……いや、ビジョップか」
「そして我らが神がキング」
女はすぅ、と微笑した。
「そろそろ行きなさい。確実に――『邪教徒』を粛正するために」
「了解、シスター。全ては神の、御(おん)ために」
男の声がそう言うと同時に、一羽のカラスが女の傍を横切った。
先程までカラスが喋っていたかのようなタイミングのよさだった。
「……さて」
女は、ウェーブがかった黒髪を後ろに払った。
「そろそろ帰ろうかしらね」
言って、野次馬をよけながらその場を後にする女。彼女の風貌に、しかし誰も振り返らない。
奇妙なことである。女はずっとそこにいたのに、周りの人間は誰一人として彼女に気付かなかった。否、認識していなかった。
まるで催眠術にでもかかっているかのような、それはおかしな光景だった。

第三十三話　死神の花園

広い部屋に、不気味な声が響く。その声に、彼女は押し潰されそうな思いだった。

両手足は縛られ、動くこともままならない。まともに動くのは、せいぜい目玉ぐらいだ。恐怖のあまり悲鳴すら上げられない。身じろぎもできない。

あるいは布か縄なら、何とか抜けられたかもしれない。けれど自分を縛っているのは太い鎖であり、血がにじむぐらい強く縛られていてはどうにもならない。

視線を上げると、自分を取り囲む『同級生』達が目に映る。聖書を開き、ロウソクの明かりを便りに読み上げる姿は異様としか言いようが無かった。

助けを求めても、きっとどうにもならない。彼女達は自分の信じる『神』のために、こんなことをしているのだから。

神。

どうしてそんな不確かな存在を信じていられるんだろう。

「……わけ解んないよ」

最後のあがきとして――助からないことが解っているからこそ、彼女は反抗した。

抵抗した。攻撃した。

糾弾した。

「どうしてこんなことするわけ！？　今までも、こんなことしてきたの！？　これからもするつもり！？　わっけ解んない！」

助かる可能性があったなら、こんなことは言えなかった。

助からないと解ってるからこそ、救いが望めないからこそ、こう

して逆らっているのだ。
非難して、批判して――その先にたどり着くものは変わらない。
「貴女には関係の無いことよ」
同級生の一人がそうそう言った。
同い年とは思えないほど、凍れるほどに冷たい声だった。
昔はもっと優しい娘だったのに――どうして――
「貴女がいけないのよ。貴女が邪教徒だから」
彼女が取り出した銀色のナイフを見て、背筋が縮むような感覚におちいる。
あぁ本当に、どうしてこうなった。
「全ては神の、御(おん)ために」
銀色の刃が、視界を覆った。

――――

「……じゃぁ、そいつらが寺の襲撃を」
流星(リュウセイ)は、自分の声が沈みきっていることを自覚した。
流星の病室。事件の翌日の昼過ぎに、悠(ユウ)の話を聞いていた。
輸血はとうに終え、すでに抜糸もすんでいる。一晩という短い時間で傷口が完全に塞がってたことに、病院側は驚いていた。
それはともかく。
流星が悠から聞いたのは、とんでもない事実だった。
寺の襲撃と昨日の事件。これは、同一犯の可能性が高いらしい。
しかも組織的なものだ。
情報元は舜鈴(シュンリン)で、彼女の話では、同じような襲撃事件が世界中で起きているそうだ。
主に寺院や宗教関係の建築物――そこにいる僧や神官のたぐいは例外無く皆殺しにされている。
現場に十字架が残されていることからキリスト教徒の仕業かとも思われたが、キリスト教の教会もかなりの数が襲われているようだ。

犯人は今のところ不明。悠はキリスト教の一派、しかもかなりの過激派だと見ている。無論、先程挙げた通り、キリスト教は一切関係無い可能性も大きい。

そしてそいつらが、昨日の信人の状態に関わっているかもしれないのだ。

あの黒い数珠は一昨日襲われた寺の所有物だったらしい。否、所有していたというより封印していたという方が正しいようだ。

あれにはかなり強力な悪霊が憑いていたようで、それを連中が知ったなら、利用しようと考えるだろう。

しかし問題は、なぜ信人だったかということだ。

今までのことを考えると、奴らの目的はただの大量虐殺ではない。なのになぜ、一般人にその数珠を渡し、銃まで与えたのか。

それは解らない。正体や目的が解らない分、妖偽教団より恐ろしかった。

それ以上に恐ろしいのが、それら全て、人間がやったということだ。

妖魔も半妖も関与していない、ただの人間のみの襲撃。

それなのに、どの事件も人智を越えた力が使われている。不気味なことこの上無い。

今のところ退魔師は関係無いが――いつ飛び火してくるか解らない。早急に手を打たねばならないだろう。

そんな風に話を終えた後、悠は流星を見据えた。

「仇討ちとか馬鹿なこと、考えてないよね」

「考えてねぇよ！　そりゃ、許せないけど……」

流星は慌てて首を横に振った。

「本当に？　敵を前にした時、一人で突っ走ったりしない？」

悠は流星のベッドに乗り上げ、詰め寄ってきた。

「君は少し感情的なきらいがある。そこは不安要素だね」

「大丈夫だって！　少しぐらい俺を信用しろよ」

「心配なんだよ。昨日のこともあるしね」

悠はじろ、と睨んできた。
「信用してほしかったら、一人で暴走しないでよ」
「解ったって！」
「……ならいいけど」
最終的に膝の上まで乗り上げた悠は、身体を引こうとした。
した、のだが。
「流星ー、見舞いに来たぞー」
よりにもよってそんなタイミングに、部活仲間がやってきた。
入口で、当然彼らは固まる。その顔には信じられないという表情が張り付いていた。
ただでさえ悠という超絶美少女と二人っきりなのに、その彼女が膝に乗り上げている。つまりそれなりに密着している。
少し――いやかなり誤解を招く状態だ。ある意味誤解ではないが。
そのまま一分ほど、気まずい沈黙が流れた。

友人達は沈んでいた。
「流星に彼女……しかも超美人」
「負けた……流星に……色んな意味で……」
「いい加減戻ってこい！」
床に座り込んでいじける友人達に、流星は怒鳴る。ベッドの端に腰を下ろした悠は眉をひそめた。
「何だい、君の友達は。人の病室にしゃがみ込んで……雰囲気がじめじめしてるよ。梅雨はとっくに過ぎてるのにさ」
「そう言うなよ。追い討ちかけてどうする」
「だって邪魔じゃない。お引き取り願いたいものだね」
「……あれ？　あいつらの目に涙が」
「気のせいでしょ。全く、うっとうしいね。早くいなくなってくれないかな」
「おまえ、さっきから酷いぞ。何か怒ってんのか？」

「怒ってない」
「ならいいけど……でもあんま、そういうこと言わないでくれ。こいつら俺の友達なんだからさ」
「流星がそう言うんなら……」

『イチャイチャすんなやこらあぁぁぁぁぁ！！』

突然の絶叫に、流星と悠はびくりと身体を震わせた。
「何だよ、いきなり叫んで……ここ病室だぞ」
「うるせぇよ！」
友人達は立ち上がり、怒りの形相を浮かべた。……半泣きの顔でもあった。
同年代の男の泣き顔は、こうも気持ち悪いものなのか。
「うらやましいんだよおめぇ！　完璧美人な娘ゲットしやがってっ。いつから付き合ってる！？」
「ついこの間……」
「先に告白したの、私になるのかな」
悠は自分を指差し、首を傾げた。
「流星、私の気持ち気付いてくれないから、好きって連呼したし」
友人達が崩れるように倒れた。
「うわぁ！　どうしたー！？」
「精神的に潰えたんじゃない？　だって魂が……」
「見えないから！　やめろそれ死亡フラグじゃね！？」
「大丈夫。彼らが死んでも誰も困らないから」
「俺が困るわ！！」
流星はとりあえず悠に黙ってもらい、身を乗り出して友人達を見た。
「大丈夫か？」
「別れろ別れろ別れろ別れろ別れろ別れろ別れろ」
「呪いの言葉か！　つか別れねぇしっ」

傷は塞がっているものの、こうもツッコミを入れまくってはいい加減疲れてくる。流星は深々とため息をついた。
「とにかく……さっさと復活しろよ」
「そして病室から出ていって」
「おいこら。だからそういうこと言うなって」
流星は額を押さえた。悠は不機嫌そうな顔をして流星に寄りかかる。……とうとう友人達は男泣きしてしまった。
「何なんだよ、おまえら……」
流星は顔をしかめた後、悠を見下ろした。
「やっぱ何かあったろ。どうした？」
「……流星にはどうしてもバレちゃうよね」
悠は唇を緩めた。
「依頼が来たんだよ。ある女子校に潜入しなくちゃいけなくてね」
「……が、どうした？　あ、制服がダサいとか？」
「女子心が解ってきたじゃないか。でも外れ」
「？　じゃあ、何だよ」
「さっさ話した連中が関わってるかもしれないんだよ」
悠は声をひそめ、身体を離した。
「妖魔が関わっているかどうか、微妙なところでね。行ってみないと解らないけど……」
「悪ぃな、俺手伝えなくて」
流星が申しわけ無くなってうつむくと、悠はくすくす笑った。
「今回は女子校だよ。入院してなくても一緒に入り込めないって」
「それは、確かに……」
どう頑張ったって、自分は女子には見えない。
「今日中にすませられると思うし、大丈夫だよ。朱華（シュカ）も連れていくしね」
「え？　朱華も潜入？」
「まさか。これから行くの高校だよ」
どうやら女子高生に変装するつもりらしい。まぁ悠は背が高いし、

大人っぽいからそれぐらいの年齢詐称は平気だろう。
朱華は――どう見ても無理だが。
「制服は可愛いんだよ。改造して普段着にしようと思う」
「仮にも制服だろ、おい」
いくら学生ではないとはいえ、そんなことをしていいのだろうか。
「っと、そろそろ行かなきゃね」
悠はひょいとベッドから降りた。
「あぁ、そうだ。流星ちょっと」
「ん？　何だよ」
悠に手招きされ、流星は上身を乗り出す。
悠は流星の首に両腕を回すと、唇を寄せた。
流星の、首筋に。
「っ……！？」
「じゃあね、流星。また明日」
悠はすぐに身体を離し、軽やかな足取りで病室を出ていった。
流星はしばらく呆然としていたが、しばらくして我に返った。
「……っとにあいつは」
首筋と顔を押さえ、呻く。おそらく、自分は顔どころか全身真っ赤だろう。
「俺を殺す気か……今計ったら熱と血圧やばいかも……」
流星はそこまで口に出して、ふと気付く。
友人達は昨日のことをどう思っているのだろう。あれを見て、自分のことをどう思ったのだろう。
「……なぁ」
流星は顔を上げ、絶句した。
急に静かになったと思ったら、友人達は死人の目で倒れていた。
「も、もしもーし？　皆さーん？」
「もう駄目だ。流星に勝てる気がしねぇ」
「……おい、腐臭漂ってるぞ」
流星はベッドの上で身を引いた。

どうやら悠と付き合うということは、死体の山を築き上げることになるらしかった。……多分。

――

悠は朱崋から渡された紙袋を手に、病院のトイレに込もっていた。紙袋の中身――依頼先の高校の制服に着替えるためである。

「こういう時、身長高くてよかったって思うよ」

トイレの個室から出た悠は、鏡で自身の姿を確認した。黒を基調としたワンピース型の制服だ。そでやスカートに入ったラインは白で、胸元やウエスト周りのリボンも白である。

少し地味なのとスカートが膝丈なのが気に入らないが――他は自分好みだった。

「よくお似合いです、悠様」

朱崋がそっと言った言葉に、悠は首を傾げた。

「そう？　そういうの自分じゃ解らないけど。おっと、忘れるところだった」

悠はゴムで自分の髪をまとめ上げた。朱崋から受け取ったかつらと伊達眼鏡を付け、再び確認する。

焦げ茶色のショートカットのかつらに銀縁眼鏡。これだけで、随分印象が変わった。

「別に知り合いがいるわけじゃないし、変装としては上出来でしょ」

目立つものといえばお守りである十字架付きチョーカーだが、あの学校はアクセサリーを許可されているはずだ。大した問題にならないだろう。

「あとは」

悠はスカートをめくり上げ、両太ももにホルダーを装着した。

「これを使うのも久しぶりだね」

悠は朱崋から受け取った退魔武器を眺め、微笑した。

二本の小刀だ。刃渡り十五センチで、刃から鍔から柄から全て銀

色だ。両刀として使うには少々不向きな重量だった。
言うほどに、両刀は扱いが簡単ではない。日本刀は元より両手で使う武器だ。片手で使うとなると、相当の腕力がいる。腕力があり、なおかつ剣術の才能と実力が無ければ無理だ。
悠の持った小刀も、少女が使うには重過ぎる。しかし悠は感触を確かめるために軽々と振り回した。
この程度の重量、悠にとっては何てことは無い。
「……うん、大丈夫だね」
ひとしきり振った後、悠はホルダーに小刀を収めた。スカートが長かったのがよかったらしく、すっぽり隠れている。
「『剣姫（ツルギヒメ）』を持ち歩けたらよかったんだけど、それはさすがにまずいしね。それじゃ、流星を頼んだよ」
「かしこまりました。お気を付けて」
深々と頭を下げる朱嶺に頷きを返し、悠をトイレを後にした。
流星には朱嶺を連れていくと言ったが、しかし彼女には護衛に付いてもらう。
狙われているのは、おそらく流星なのだから。

この女子高では、生徒が数人行方不明になっているのだという。妖魔が関わっているなら狩る。事件性があるなら高野次郎（タカノジロウ）に情報を提供するつもりだ。

ちなみに、有料である。

いざという時のための変装だったが、目立たないとは存外楽なものだ。

かつらが少しむれるが、我慢できなくもない。何にしろ、注目されない方が気も楽だ。緩めるとはまた別の話だが。

悠は一つ頷き、辺りを見渡した。

全寮制で現在夏期講習中。全員参加であるためか、人の姿は多い。何のための夏休みなんだろうと思ったりしたが、自分には関係無いことだ。

さて、どう探そうか――悠は廊下を歩きながら思案する。

妖気があればたどりやすいが、隠されてでもされたら――

「きゃあ！」

と。突然短い悲鳴とどたどたという騒がしい音が後ろから聞こえてきた。

振り返ると、ここの女子生徒であろう少女が散らばった紙の中でうずくまっていた。

薄茶色の髪をセロミングにした、少しつり目気味の少女だ。足を滑らせたらしく、腰をさすって顔をしかめている。

悠は音の正体を確認した後、再び前へ歩き出した。

「って無視すんなやあぁぁぁ！」

後方からの大声に、悠は眉をひそめまた振り返った。辺りを見回

した後、自分を指す。
「私のこと？」
「当たり前でしょ！　何その古典的な反応！」
「古典的なこけ方をした君に言われたくないな」
悠はふんと鼻で笑った。
「う、うるさいわね！　ていうか、集めんの手伝いなさいよっ」
「……」
できればここの生徒との接触はさけたいのだか。しかし、情報が欲しいのも事実である。
結局悠は、その少女を手伝うことにした。
「えっと……初めましてよね？」
「そうだよ」
「何年？　名前は？」
「……一年。椿悠」
前半嘘で後半本当である。そもそも悠は、高校に入れる年齢ではない。
椿悠。現在十四歳。
「ふぅん。私三年。名前は」
ずっと怒ったような表情だった少女は、笑いながら名乗った。
「華鳳院早音（カホウインハヤネ）」

悠は紙を拾い上げる手を止めた。
「華鳳院……！？」
「そう。天下の華鳳院財閥の令嬢なの、あたし。っても分家の子供だけどね」
ふふん、と得意げになる少女――早音。しかし悠は、胸中に苦々しいものを感じずにはいられなかった。
「だから、私のことわうやまいなさい！　歳上だしねっ」
「却下」

「早っ！？」
「黙ってくれる？」
悠は集めた紙を早音に押し付け、立ち上がった。
「な、何？」
「私、金持ちも高慢な人間も嫌いなの。ましてや華鳳院なんて……」
悠は感情を押し殺した声で言い放った。
「あいつを嫌ってる奴が当主の家なんて、誰が好くか」
「あ、あいつって……」
「答える義理は無い。じゃあね」
悠はさっさとその場を離れた。
気分が悪い。まさかこんなところで流星の親戚に出くわすとは。
全く、何で厄日だ。
しかも家柄がいいから、歳上だから、うやまえだと？
だから金持ちは嫌いだ。金で自分の格が決まると思っている、そんな奴らは大嫌いだ。職業が政治家なら、最悪である。
「……やっぱり流星みたいなのはそうそういないよね」
だからこそ、好きになったのだが。
悠はため息をついて、ふと足を止めた。
先程から妙な気配を感じる。こちらをうかがうような、観察するような――
「……ふぅん」
悠は一つ唸った後、再び歩き出した。
歩調は変わらない。身体にも、変に力を入れたりしない。相手に自分が気付いたことを悟られぬよう、細心の注意を払う。
気付かれるのが少し早かった。やはりあの少女と接触したのはまずかったか。しかしこの尾行法は――
なるほど、事件性はあった。どうやら妖魔の仕業ではないらしい。
そして、おそらく複数犯。
「……さっきから古典的で嫌になるけど」
悠は足を止め、振り返った。

後方の廊下には、誰もいないように見える。教室の扉が並んでいるだけだ。

「いい加減出てきたら？　こっちは逃げも隠れもしないから、そっちも逃げも隠れもしないでもらおう」

返答無し。悠はかつらの上から頭をかいた。

「私が外の人間だって解ってるでしょ。なら私が何のために来たのかも解ってるはずだ」

やはり返答無し。どうやらいないふりを決めたらしい。

なめられたものだ。

「面倒なこと、させないでほしいな」

悠はすたすたと歩き出した。

今来た道を、早足で。

「別に教室に隠れてるとは思っちゃいないさ。ただ」

壁にくっついた柱の一つの前で立ち止まると、拳が飛んできた。

「妙に出っ張ってるこの柱は男じゃ無理だが……小柄な女なら隠れることができる」

悠はその拳を受け止め、相手の胸ぐらを掴んだ。

「ただ単に追いかけてきたって設定にすればよかったのに」

投げ飛ばされ、床に叩き付けられた彼女は、顔を歪めて睨み付けてきた。

悠は薄い笑みを唇に浮かべ、彼女を見下ろす。冷たい目をしているのは、自覚していた。

「やぁ、さっきぶりだね。華鳳院早音――だっけ？」

「……」

相手――華鳳院早音は、ぎり、と歯を食い縛った。

「君は、ここの生徒がいなくなっていることと何か関係あるのかな？」

「そんなこと……言うわけないでしょ！？」

「そう」

悠は早音を抑えつつ、肩をすくめた。

彼女は、自分が関係あるとバラしたも同然の言葉を言ったことに気付いているだろうか。戦い方はそれなりに経験があるようだが、こういうことは習っていないらしい。

「一体何が目的なの？」

「……」

「質問を変えようか。一体誰に命令されてるの？」

「……」

「ふん、黙るだけの能力はあるか」

悠は早音の腕をひねり上げた。

「いた、痛いっ」

「私は同性だろうと手加減しない主義だ。さすがに折る気は無いが、脱臼ぐらいはご愛嬌だよ」

「それ絶対使い方間違ってるわよ！」

「へぇ、ツッコむだけの余裕はまだあるんだ。じゃ、もう少し強くしても平気だね」

ぎりぎりと、本当に脱臼しかねない力で腕をひねると、下から悲鳴が上がった。

「やめ、やめてぇ！」

「なら教えてくれる？　まず、君に私をつけるよう命令したのは誰？」

「言う、言うから！　命令したのは、し、『使徒』の……」

早音の口から驚きの言葉を聞くと同時に、悠はスカートの下に隠した小刀を一本抜いた。

「えっ……」

「動かないで――ね！」

悠は小刀を振り、飛んできたそれを弾いた。それは高い金属音を立てて床に転がる。

目だけをそちらに向けると、それは投擲用のナイフだった。

「私を殺す――だけでなく、口封じまでしにかかったか」

「え……」

「頭上げないで」
身体を上げかけた早音の頭を抑え、悠は投げられたそのナイフを拾い上げた。
同時に風を斬るひゅん、という音を耳にし、その方向にそのナイフを投げた。その後、すぐに立ち上がる。
ついでに早音も起き上がらせ、彼女を引っ張って走った。
「い、いきなり何!?」
「黙って走る!」
戸惑う早音を怒鳴り付け、悠は廊下の角まで疾走した。後ろで金属のぶつかり合う音が聞こえたので、第二撃も防げたらしい。
角をまがり、そこで急停止すると、早音はいきなり叫び出した。
「どうして私が貴女と一緒に逃げなきゃいけないの? 狙われてるのは貴女! そして私は敵!!」
「君は自分の発言を忘れたの?」
悠は冷ややかに早音を睨んだ。眼鏡越しでもそれは解ったらしく、早音は言葉を途切れさせる。
「君は自分の上司の正体を明かそうとした。そんな人間を放っておくほど彼らは甘くなったという、ただそれだけのことだよ」
「そ、そんな……」
早音は青い顔で座り込んだ。こんなところで座り込まれると困るのだが。
ここは敵地のまっただ中だ。こんなところでぐずぐずしているのは、非常にまずい。
どうする? 放っておくか? こんな荷物を抱えていたら、やるべきこともできない――
――そんなわけにはいかないか。
悠はため息をつく。ここで彼女を放っておくわけにはいかない。
様々な意味で、ここで彼女を確保しておく必要がある。
「……選んで」
「……選ぶ? 選ぶって、何を?」

早音は顔を上げ、震える声を出した。
「私と一緒に来るか、むざむざ殺されるか」
「何それ……」
「それ以外に道は無いよ。仏の顔は三度どころか一度も無い可能性が高いんだから。だとしたら、逃げる以外に道は無い」
悠はもう一方の小刀をホルダーから抜いた。両の小刀を逆手に持ち、すぐにでも動けるよう自然体になる。
「どうする？　強制はしないし、もしかしたら運よくまた利用してもらえるかもね」
「……」
「逃げるか否か、全ては、君次第だよ」
我ながら消極的なセリフだったが、それ以外に取るべき道は今のところ無い。
数秒の沈黙。焦っているせいか体感的には数十分もたった気がするが、それは気のせいだろう。
即断即決――とはいかなかったが。
「……い、一緒に、行く」
早音は頷き返した。悠はふん、と鼻を鳴らす。
「さっさと言えばいいんだよ。早く立って。すぐ移動する。――と」
悠は歩き出そうとして、はたと気付いた。
「もうこれはいらないか。全く。何のために変装したのか解らないよ……」
悠はぶつぶつ言いながら、かつらと眼鏡を取った。早音がなぜか息を飲んだが、そんなことを気にしている場合ではない。
悠は小刀を構え、唇を歪ませた。
「守られたいなら、私から離れるなよ」
「……え？」
立ち上がった早音は、何を言っているのか解らないというような顔をした。
「ど、どういう――」

「解らない？　敵が来たって言ってるんだよ。もう囲まれてるだろうね――」

悠は視線を廊下の先に向けた。姿は見えないが、おそらくもうそろそろ見えてくるはずだ。

「話は移動中にでも聞くよ。じゃ、行こうか」

「行くって……どこに？」

顔をひきつらせる早音を、悠は見つめた。

「敵の中心に行くんだよ。私の仕事外になってるけど、気が変わった。私自身の手で潰す」

最初は情報を引き出してさっさと引き上げるつもりだったが、『使徒』とやらが関わっているなら話は別だ。

奴らがもし妖魔と関わりを持っているなら――容赦をする必要は無いだろう。

退魔師は妖魔を狩る存在だ。そしてそれにくみする人間も、狩り対象だ。

妖偽教団と同じように。

「さて……案内してもらえる？　まずどっちに行けばいい？」

「えっと……まず下に降りなきゃ。地下にアジトみたいなのがあるから」

「じゃ、階段のところまで行かなきゃね」

悠はすたすたと歩き出した。

「ちょ、ちょっと！　囲まれてるんでしょ？　不用心に歩き回って大丈夫なの！？」

「君は何を言ってるの？」

悠は唇を歪めた。本当に、馬鹿馬鹿しい質問だ。

「人間を相手取るぐらい、退魔師にとっては造作もないことだよ」

狂い出したのは一年前だった。
教師達に隠れ、この学園の生徒の数人がある宗教にのめり込み始めた。
あくまで数人。そのことを知る生徒達も特に何も言わなかったし、何も思わなかった。
しかし、ある日状況は一変する。
その宗教を信仰する者達が、学園を支配し始めたのだ。
閉鎖的な学園だけに、すぐ支配は広まった。今や、上級生から下級生まで彼女達の言いなりだった。
当然反抗する生徒もいたが、全員彼女達に黙らされてしまった。
その上、自分達の支配下にいる生徒達を武装させ始めたのである。
銃やナイフ、格闘技まで教え込ませた生徒達を兵とし、とうとう教師達まで無力化させてしまった。その支配は恐怖でなり立っており、逆らう者はいなくなってしまったのだった。
この学園の実質的支配者である彼女達は、こう名乗った。
『使徒』、と。

「ふぅん。そういうことか」
早音からことの経緯を聞き、悠は一つ頷いた。
地下へと降りる階段を進む真っ最中であり、声はひそめられている。声が響きやすい構造のようで、小さな声でも反響した。
「なるほど。君が戦闘技術を身に付けている理由も、これで解ったよ。しかし使徒、ね。その宗教のことも気になるし」

悠が視線を向けると、早音は口を開いた。
「その宗教について、詳しいことは私も知らない。教えてくれないの。信者は別だろうけど。でも、確か……一神教だと思う」
「一神教か。ただの宗教じゃないだろうね。何だがマシンガン引っ張り出してきそうな雰囲気だけど」
「マシンガンじゃなくて、ライフルやボーガンなら使ってるわよ」
「……どうでもいい情報ありがとう」
投擲ナイフを使っている時点でかなり怪しかったが、まるで傭兵部隊じゃないか。大型銃や手榴弾が出てきても、さすがにもう驚けない。
「……ところで、逆らった人間はどうなったの？」
「……」
早音は黙り込んだ。うつむき、口を閉ざしている。
「じゃ、別の質問。どうして私が侵入者だって解ったの？」
「私自身は……知らなかった」
早音は途切れがちにそう言った。
「使徒の一人に、貴女を捕まえるよう言われて……まさかあんなに強いなんて……」
「実力と経験の差が出たね」
悠は肩をすくめた。
「対人戦闘で私は引けを取るつもりは無いよ。私の戦法は、対化物用だから」
「……貴女、何と戦ってんのよ」
早音はあきれ顔になった。
「……ん、あれ？　地下に続く扉」
「え？」
早音の顔が、悠の指差す方向に向く。
階段の奥にあったのは、黒い扉だった。何の装飾もされていない、シンプルな扉。
「うーんと……多分」

「頼りないな」
「しょうがないじゃない。私、ここまで来たこと無いし」
信者じゃないもの、と、若干震える声を出す早音。顔を上げ、懇願してきた。
「ね、もう引き上げようよ。奴らは、使徒は、ただの人間じゃない」
「あ、そう。自分で言うのもなんだけど、私も普通の人間じゃないよ」
悠はまた肩をすくめ、すたすたと扉に近付いた。
扉の材質は、どうやら鉄のようだ。鍵は――無い。
ただの不用心か、あるいは――
「……ふん」
悠は鼻を鳴らし、扉を開けた。小刀はだらりと下げられたままである。
そして部屋に入った瞬間――

銃口と銃声が、悠の視覚と聴覚を覆った。

――――

流星は病院内で出歩いていた。
喉が渇いたので自動販売機のところまで行っていたのである。早くも歩けるまでに回復していた。おそらく、多少走っても平気だろう。
そしてコーラの缶を手にしながら、流星は病室に戻ろうとした。
戻ろうとした――のだが。
「駄目じゃないですか。病室抜け出して」
思わぬところで足止めを喰らった。担当の看護師に見付かったのである。
「いくら抜糸も、もうすんだとはいえ、昨日死にかけたんですからね」

「う……」

流星は言葉に詰まった。

確かにもう大丈夫とはいえ、その言葉は事実だ。傷自体は、明日になれば跡も残らないだろうが。

「お願いですから勝手な行動は――」

看護師の言葉が、不自然に途切れた。表情が固まり、怒った顔のまま動かなくなる。

流星は首を傾げたが、急に倒れてきた彼女を慌てて支えることになった。

一体どうしたのかと目を見開いていると――

「君が華鳳院君かい？」

と。そう声をかけられ、流星は顔を上げた。

「……誰」

目の前――看護師の背後に当たる場所。そこに、白衣を着た男が立っていた。

前髪を後ろになで付けた、狐目の男だ。

見知らぬ男に流星は目を瞬かせたが、彼の手を見、絶句する。

彼の手。全体が血で真っ赤に染まっていた。血は手首までいたり、そでを濡らしている。

それが、看護師の背中から流れている血と同じだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

「っ……！　てめっ」

「君、邪魔らしいよ」

男は血にまみれた右手を上げた。

手の先――爪先が鋭く伸びている。

まるで獣のように――否。

これは獣の爪というより――刃だ。人間をたやすく斬る刃。

あんなのに貫手でもされたら――！

「だから、死ね」
男は笑顔でそう言って、流星の顔めがけて刃の爪を振り下ろした。

――――

前方を覆う銃口。それが複数のライフルだと気付いたのは、反射的に跳躍した後だった。
銃弾が誰もいない床をうがったのと同時に、ライフルを構える少女達の群れの中に降り立つ。少女達に動揺が走った。
「物騒な物持ってるね」
悠は両手の小刀を振るった。小刀はライフルの銃身を真っ二つに斬り、使い物にならなくする。
「けど、こうしたら何もできなくなるよね」
「なっ……！」
武器を失った少女は呆然とする。他の者達も、驚きからか固まってしまった。
その隙を逃さず、悠は小刀で次々とライフルを次々と斬っていく。
一分もしない内に、少女達の足元には半ばで絶ち斬られた銃身が転がった。
「私はここの主に会いに来た」
悠は小刀を下げ、少女達を睨み付けた。
「邪魔だよ」
「ひっ……」
少女の一人が小さな悲鳴を上げたのと同時に、群れがざっと退いた。そこでようやく、部屋の全貌をしることになる。
壁も床も天井も、何もかもが黒い部屋。明かりと言えば、一番奥にある数十本あるロウソクぐらいだ。
そしてロウソクの手前には。
「君が、元凶か」
「……元凶とは酷い言い方ね」

少女が五人、並んで立っていた。
容姿はばらばらだが、雰囲気は同じだ。
同じように――不気味な雰囲気だ。
「本業じゃないんだけど――とりあえず、君達の愚行を止めに来た」
「愚行とは失礼な。我々は神に仕える使徒よ」
「あいにく無神論なものでね」
悠は笑みを浮かべて肩をすくめた。
「それに、イケニエを求める邪神なんて、信じられないよ」
「何……！？」
「この部屋、血の臭いがする。職業柄、そういう臭いに敏感なものでね」
「……さすがと言うべきかしら。椿悠」
「へぇ、私の名前を知ってるんだ。光栄だね」
そう言いつつも、悠は内心で驚いていた。
どうして自分の名前を知ってるんだろう。この口振りは、先程知ったというていではないが――
「どうやら、侵入者だと気付いたんではなく、私だと見抜て攻撃してきたんだね」
「その通り」
真ん中にいる少女がにっこり微笑んだ。
「私はここのリーダー。名は加利亜（カリア）と言います」
「あ、そう。ところで殺人者さん」
悠は笑みを深めた。
「君達には特別な力があると聞いたんだけど、その力って何？」
加利亜は一瞬ひるむような動作をしたが、すぐ微笑を取り戻し、両手を前に出した。
「私の力は光を操る力。光はね、その一つ一つは弱いけれど、集束すると高い殺傷力を持つ。いわば私は人間レーザー砲よ。ほらこんな風に！」
けれど。

それが放たれることは無かった。
「口上が長い」
悠は一言の下、小刀の柄で加利亜の頭をぶっ叩いた。
加利亜は床にふらりと倒れ込み、そのまま動かなくなる。ちゃんと気絶したようだ。
「喋り過ぎて自滅する奴は今までいっぱいいたよ。今のだって喋り過ぎて、接近する私に気付かなかったし」
悠はやれやれとばかりに首を振った。
「能力だけに頼ってる奴はとても弱い。君達もそれを理解した方がいいよ」
悠は降伏しろという意味でそれを言ったのだが――どうやら理解してくれなかったらしい。
残った『使徒』は悠を取り囲み、加利亜と同じことをしたのだ。
何の能力かは知らないが、しかし。
「遅い」
悠はため息をついて足を旋回させた。
まとめて前の二人を蹴り飛ばし、間を置かず後ろの一人の腹に肘鉄を喰らわせる。残った一人は膝蹴りで気絶させた。
彼女達は、結局能力を出すことが無いまま倒されてしまった。
「うん、こんなものか。下っ端は鍛えても、自分達は鍛えなかったわけか。まぁいい」
悠は動かなくなった五人の少女達を一瞥した後、動けなくなった集団の少女達に目をやった。
「警察、呼んでくれる？」

――――

そこら中で光る赤いサイレンに顔をしかめつつ、悠は高野次郎の元に移動した。
「高野刑事」

「椿か」
次郎は校門の前に停めたパトカーから背中を離した。
「今回の首謀者、例の使徒って奴らかもしれないんだってな」
「うん。けど、多分彼女達は末端だ」
悠は門から次々と出てくる少女達を見た。
「世界中の寺院や教会を潰し、なおかつ世界中の追跡を逃れられる連中なんだ。今回の件、それまでのことを鑑(かんが)みるに、どうも生ぬるいんだよ」
少女であることを考えても、彼女達のやり方は無駄が多過ぎた。いちいちあげつらうことはしないが、しかし素人にもほどがある。それにあの五人の能力――結局見ることは無かったが（興味も無いし）、どこでそんな特殊能力を得たというのだろう。
先天的なものか、後天的なものか。
後天的なものだとすれば、誰から与えられたものなのか。
末端とはいえ、彼女達から訊くべきことは多そうだ。他にも釈然としないこともあるし――
だが。
彼女達はすぐに口をきけなくなってしまう――
「っ……！？」
悠と次郎は、突然上がった悲鳴に身体を硬直させた。
「今の声は……」
悠は眉をひそめたが、すぐに何が起きたから理解した。
少女が、校門の倒れ伏している。その数、五人。
「まさか！」
悠は呻いて彼女達に駆け寄った。がすでに手遅れであることを悟る。
彼女達は、頭を貫かれていた。すでに脈は止まっているだろう。
これは――狙撃によるものか！
悠は辺りを見渡した。ここを狙撃可能な場所は――
――見付けた。

悠はだっと走り出した。目指すのは――

――

使われていないビルの屋上に、二人の男女がいた。
どちらも黒いコートを着ている。夕暮れ時とはいえ、夏の暑さは当然残っているのに、だ。
しかも男の姿は異様だった。
顔の一部に黒い鱗のような羽根が生えているのだ。手の甲にまで至っている。その奇妙な手には、狙撃銃が構えられていた。
「当たった？」
女の質問に、男は顎を引いた。
「ばっちり。距離とかあったから不安やったんやけど……この銃の精度がよくて助かったわ」
「貴方の腕もあると思うけどね」
女はおかしそうに笑んだ。
「さて、すぐに引き上げましょう。でないと、あのお嬢ちゃんが来ちゃうわ」
「……あの娘が来んの、想定外やったなぁ」
銃を下ろし、ため息をついた。
「まさかあの学園の上層部が動くの、あんなに早いなんてな」
「あら、元はと言えばあの娘達がドジを踏んだからいけないのよ。使徒の候補生として不的確だったわ」
女は肩をすくめ、ウェーブがかった黒髪を後ろに払った。
「やっぱり駄目ね、この国の子供は。ゆる過ぎる」
「……俺も日本人だけど」
「貴方は例外よ。でも……そうか、あぁ……そうだわ、あの娘も……」
女はすぅ、と微笑した。何か、いいことを思いついたと言わんばかりに。

「……シスター？」
男はいぶかしげな顔をした。こちらは嫌な予感がする、という表情だ。
「何か……面倒なこと考えてません？」
「面倒なこと？　何を言うの、すばらしい考えだわ」
女はふふ、と含み笑いをもらした。
「一度は諦めたけど、彼女なら――彼女の心の闇なら、私は付け込める」
「……やっぱめんどくせぇ」
男は顔を歪めた。
やがて足音が聞こえてくる。おそらくは、かの少女の足音だ。
さっきまで逃げる算段をしていた二人の男女は、彼女が来るのを静かに待つ――

――

いきなり後ろに引っ張られる感覚に、流星は目を見開いた。
……同時に首が締まり、息が止まった。
「ぐぇっ。息、しまっ……」
「失礼しました」
すぐ後ろから聞こえた、聞き覚えのある声。首を巡らせると、薄赤い瞳とかち合った。
「し、げほっ、朱嶌……」
「緊急でしたので、えりを掴ませていただきました」
言われて今気付いた。朱嶌は首根っこを引っ掴んでいる。
「た、助かったからいいけど……でも」
流星は血まみれの手をかかげる男を見やった。
「誰だよ、あいつ……」
「それは私のセリフです。どちら様ですか？」
朱嶌も知らないらしい。しかし、男の方は自分を知っているよう

だ。
——いや、それよりも男に貫かれたあの看護師を助けないと……！
「ん、んー、避けられたか」
だが、男はその間を与えない。間を置かず、つらつらと言葉を重ねる。
「まぁいい。今殺さなければならないんだ。避けられたら——追撃するだけだ」
男の爪が更に伸びた。いや違う。伸びただけではない。
右手そのものが、硬質な何かで覆われた——！
「華鳳院流星……僕はおまえを殺すよ。全ては神の御(おん)ために」
ぎらつく目で、男は動く。

第三十四話　望まれぬ人

橘猛（タチバナタケル）は、突然目の前で倒れた西野紗矢（ニシノサヤ）に驚いて足を止めた。

京都にいる退魔師の、ある一派の屋敷。妖偽教団との戦いによって一族を滅ぼされた面々は、そこに身を寄せていた。

京都は平安時代から都があった地ゆえに、退魔師が全国でもっとも多い。古来より妖魔が出やすい土地なので、自然そうなったのだ。

そもそも関西はそういう土地だ。人柱がいた家――椿家も含め、皆始まりは関西からである。関東に移住したのは、ただ単純に首都が変わったからだ。

首都には人が多い。人が多い場所には、妖魔も多い。そういうものだ。

しかし退魔師の数全国一位の座は、未だ動いていない。それにそういうたぐいの資料も多いので、家の復興にはおおいに役立っている。

そして身を寄せている屋敷の廊下で、紗矢は倒れたのである。

正確に言うと倒れたというより膝から崩れたという体（てい）で、手ではなくひじをついている。四つん這いと言うにはいささか前めのりだった。

「さ、紗矢さん！　大丈夫っスか？」

猛は数秒して我に返り、紗矢に駆け寄った。

起き上がらせた紗矢の顔は真っ青で、目は見開かれている。何か、見てはいけないものを見てしまったような顔だ。

「紗矢さん……？」

「……え」

紗矢はぎこちなく首を巡らせ、猛の方に顔を向けた。

「……あぁ、猛君か」
「はい――じゃなくて！　どうしたんスか、急に倒れ込んで」
「……いや」
紗矢はうつむいた後、自力で立ち上がった。
「悪い。何でも無い。ちょっと立ちくらみ……」
「なわけ無いだろ」
と。紗矢が身体を向けていた方向から、梅見雨彦（ウメミアメヒコ）が歩いてきた。
彼は退魔師としての力はほとんど持ち合わせていないが、梅見家の一人として復興に力添えしている。そちらに集中するために、流星（リュウセイ）の校医を臨時休業しているらしい。紗矢は彼のサポート役だ。
「その顔色はたちくらみや貧血じゃねぇ。保険医なめんな。第一、おまえ薄幸そうな顔して、めちゃくちゃ丈夫じゃねぇか」
雨彦は紗矢の顔を覗き込んだ。
「何を視た？」
「え？」
猛は雨彦の言葉に驚いた。
見た――ではなく、視た。それはつまり、彼女が未来を視たということ――
未来を視ると言ってもいつも断片的なことらしく、それがいつ起こるかは紗矢にも予測がつかないらしい。
しかし、だからこそ自身の視る未来に対して普段は落ち着いている彼女が――一体何を視たのか。
何を視て、ここまで動揺しているのか。
紗矢はしばらく唇を引き締めていたが、やがてゆっくり、震えながらも言葉を発した。
「悠（ユウ）ちゃんが……流星君を刺していた」
――――
まずい、と流星は思った。

ここは病院。医者や看護師を含め、一般人が大勢いる。このままここにいたら、犠牲者が出るだろう。

――いや、犠牲者ならもう出てしまった。床に倒れている看護師だ。

何とかあの、血みどろの手の男から引き離さないと。朱華（シュカ）なら、彼女の傷を治してくれるはずだ――

「う、あ……」

と。看護師の腕が流星へ伸びた。

「た、助け……い、逃げ……」

助かりたいという思いと助けたいという気持ちがごっちゃになっているようだ。目には痛みからか涙が浮かんでいる。

「……うるさいな」

男は不愉快そうに眉をひそめた。

「仕事の邪魔だ。もう死ねよ」

血に濡れたままの手を振り上げ、男は看護師を貫こうとする――

「てめぇ！」

流星は朱華の手を振り払い、男との距離を詰めた。

男の手を蹴り上げ、顔面に拳を叩き付ける。男はたやすく吹っ飛んだ。

「朱華、その人を頼む！」

「はい」

流星が言うと、朱華は看護師に歩み寄った。

流星はそれを確認した後、床に伏した男に向き直る。

「てめぇは何だ。関係無ぇ人間傷付けて……何なんだよ！」

「……僕は」

男が起き上がった。殴られた際に折れたのか、鼻が妙な方向にまがっている。しかし気にせず、唇を動かした。

「君を殺しに来たんだよ。さっき言ったろう、死ねって」

「だったら俺を狙えよ！　この人を刺す必要無いだろうっ。第一」

流星は看護師の一瞬視線を送った後、男の手を指した。

血で解りにくいが、あきらかに男の手は変質している。爪が鉤爪のようになった――だけでなく、指そのものが鉄の爪になったような印象だ。

「その手……一体何だ？　妖魔――じゃねぇよな」

妖気は感じない。ゆえに妖魔ではない。半妖でもないようだ。

けれど――だったら彼は何なんだ。

彼は何で――自分を狙う。

「……知らないのかい？」

男は笑った。鼻が折れた状態であるため、その笑みはあまりにも凄惨だった。

「知らないのか、僕達の存在を――『使徒』の存在を！」

「えっ……！？」

『使徒』――聞き覚えがある。いや、それどころではない。

それは、今日悠から聞いたばかりではないか――！

「まさか……寺の襲撃もおまえが！」

「寺？　あぁ、邪教徒狩りのことか」

男はにやにやしながら立ち上がった。

「いいや。あれは別の奴だよ。僕の任務は邪魔者狩り。同じ『邪』でも、全く違う」

「邪教……？」

「さて、まず自己紹介だ」

男はまがった鼻を戻し、両手を広げた。

「僕は竈内幸哉（カマウチユキヤ）。仲間内での通り名は『マンティス』」

「ま、まんてぃす？」

「カマキリ――ですね」

朱華の言葉に、流星は顔だけをそちらに向けた。

「フランス語が何か？」

「いえ、英語です」

英語にとことん弱い流星だった。

「しかし、なるほど。その爪がカマキリの鎌というわけですか」

「僕はそう呼ばれるのは不本意だけどな」
男は腰を低く落とした。
「別に変化できるのは――手だけじゃない」
踏み込み、一息で距離を詰められる。意外な俊敏さに、流星は目を見開いた。
しかしそれでも、ほとんど反射で、流星はその動きに反応した。
突き出された貫手を左手ではじき、それとほぼ同時に膝を振り上げる。
今度は相手も無反応ではなかった。腹を狙った膝蹴りを腹筋で受け止め、流星の動きが止まると同時に頭突きを喰らわせてくる。
額に一撃を受け、流星は後ろによろめいた。しかしそれでも、相手の第二撃を何とか避けることに成功する。
再びの貫手。今度ははじかず紙一重でかわし、相手の右わき腹に回し蹴りを放った。相手は呻き声を上げて後ろに下がる。
追撃しようとして、流星は自身の息が上がっていることに気が付いた。
何ぶんこちらは病み上がりだ。傷はもう塞がっているとはいえ、身体にかかった負担はまだ残っているだろう。
それに、この男が予想以上に強いことも原因の一つだ。
何か格闘技でもやっているのか、それとも我流なのか。どちらにしてもかなりきつい。
「……ふむ」
竈内は唸った。
「傷がありながら、そこまで動くとは。少しなめていたかな」
「……傷はもう塞がってるよ」
「それは……さすが」
竈内は目を丸くした。
「しかし、なら、本気でやらねばならないかな。ギャラリーも来たことだし」
「なっ……」

流星は後ろを振り返った。
いつの間にか、廊下の向こうに人だかりができている。皆竈内の手を見てざわついているようだ。
非常にまずい。もしこちらに近付いてこられでもしたら――！
「君達、何をしてるんだ！」
人ごみをかきわけ、医師らしき男と看護師数人が前に出てきた。
彼らは朱華の近くで気絶している看護師を見、手を血で深めた竈内を見て足を止める。
「こ、これは一体……」
震える声でそう言った後、医師はずかずかと前に出てきた。
「何をしているんだ！　こんなことをして……」
「駄目だ、来るな！」
流星は大喝して医師を止めようとした。だが、医師の足は止まらない。状況の危険性をまるで解っていなかった。
「特に君、その手は何――」
医師の足と言葉が止まった。否、止められた。
流星はその瞬間を見て、頭が真っ白になった。
竈内がその医師に走り寄り、勢いよくその首を斬ったのを、見て。
ただ斬ったのではない。首を刈り取り、胴体と離れさせてしまったのだ。
身体を失った頭は、ごろりと床に転がった。首の断面が流星に向く。
遅れて、身体が前に倒れた。
首から吹き出した血が廊下や壁を汚す。一気にその場に血の臭いが立ち込めた。
臭いが広がると共に、辺りは静まり返る。音が消えたと錯覚させるような数秒が過ぎ――
『う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

膜を破るかのような複数の絶叫が、廊下にこだました。医師、看護師、患者――何の例外も無く、押し流されるようにその場から逃げ去っていく。

耳に響くその悲鳴を聞きながら、流星は愕然としたまま竈内を見つめた。

竈内の片腕は、手と同様変質していた。

ひじから下は骨のような外殻に覆われ、そこから虫の羽根のような刃が飛び出している。ぬらぬらと光っているのは、おそらく血のせいだけではないだろう。

そして何より――この感じは。

「君、退魔師とやらになりたいんだって？」

竈内はくるりと振り返った。先程は陰になって見えなかったが、もう片方の腕も逆の腕も同じように変質している。

「その夢はここで途絶えることになるが、しかし、俺が相手というのは皮肉だと思わないかい？」

竈内は両腕を持ち上げた。

「同類である俺に、おまえが殺されるというのは」

今まで感じなかった気配。

人の気配にあらず、人の気配に近い。

妖魔ではあらず、妖魔に近い。

この姿と気配は、まさか――

「その姿――虫の妖怪とでも合体したか？」

流星は腹に力を込め、文字通り声を絞り出した。

「なるほど、妖気をかくしていたのか。どうりで気付けなかったわけだ。ここはそういう場所だからってのもあるが――なぁ、朱嵐」

流星に声をかけられ、看護師を移動させようとしていた朱嵐は顔を上げた。

「何でしょうか？」

「周りに人はいないか？」

「おりません」

朱華は首を横に振った。彼女の矮躯ではうまく抱えられないらしく、看護師の足が動くたびに引きずられていた。
「皆、先程逃げられました」
「そうか、よかった」
流星はふ、と息をついた後、身体の重心を低くした。
「なら俺が本気出しても、誰も迷惑しねぇってことだよなぁ！」
「……重病患者もおられるでしょう。どうかここではほどほどに」
朱華の言葉を背に受け、流星は竈内に飛びかかった。

望まれぬ人<中>

悠は屋上まで一息で駆け上がり、鉄製の扉を勢いよく開けた。
そして男女の二人組を確認し、眉をひそめる。
女は西洋人、男は東洋人――いや、日本人のようだ。どちらもそろいの黒いコートを着ている。
「てっきり、逃げたかと思ったけど」
悠は小刀を構えながら首を傾げた。
「待ち構えてるとはね。鉢合わせになるかもしれないとは考えていたけど」
「逃げる必要を、私達は持たないわ」
女の方が口を開いた。
「貴女を待っていたのよ」
「……やっぱり私のことを知っているか。それに――巧妙に隠しているけど、妖気を感じるね」
「……」
女は笑みを深めた。同時に妖気も強まる。
「妖偽教団（ヨウギキョウダン）の残党か」
「違うわ。所属していたことは確かだけれどね」
女は目を細め、悠を見つめた。
「我々は使徒。崇高なる目的のため動く者達よ」
「……さっきの狙撃もその一環？」
悠は女の後ろにいる、銃を抱えた男に目をやった。
黒いコートは使徒とやらの服装なのか。今は夏にも関わらず、随分暑苦しい。
黒いコート――まるで死神の装束のようだ。

悠はそう重いながら、女の方に視線を戻した。
「どうなの」
「――彼女達は候補生だったのよ。でも、使えなかったわ。力があったからいけると思ったんだけど……駄目ね、日本の子供は」
女はやれやれとばかりに首を振った。
「なまぬるいわ。知らないのよ、覚悟と――絶望というものを。平和に侵されて腐蝕した箱庭に生きている人間は、我々の邪魔になるだけだわ」
「……まぁ、前半は賛同するよ」
悠は小刀の柄頭で頭をかいた。
「日本は同じ平和な国の中でも危機管理能力が極端に低い。楽観主義かつ理想主義。自分に災厄は降りかからないと思っている。同じ日本人として、吐き気がするよ」
「あらあら……」
「もっと吐き気がするのは」
悠は小刀の切っ先を男女に向けた。
「おまえ達のような、腐るぐらいの平和に波風を立てる奴らだよ」
「……」
「人を殺した人間に崇高も何もあるものか。犠牲が必要だから――とか言うなら、私は怒るよ」
「犠牲が出るのは哀しいかしら」
「まさか。ただ、大量虐殺の上でなり立つ目的なんて、虚しいと思ってるだけだ」
悠は不快さを隠さずに吐き捨てた。
「私が怒りたいのは、経過と手段だよ。妖魔の力を得て目的を達成したって、その先が見えてるじゃないか。話にならないね」
「……ふ」
女の笑みが深まった。
なぜこんな場面で笑みを浮かべるのか、全く解らない。
「やっぱり思った通りだわ。それが世界と人間にも向けば最高なん

だけど――それは高望みというものね」
「……？　何を言っている」
「今は解らなくていいわ。そう、そうね。三ヶ月はどうかしら」
「何が」
「貴女の返事よ」
女は目を細めた。
「しばらく私は日本（ここ）から離れるの。その間、じっくり考えておいてちょうだい」
「……まさか仲間になれって？」
「そう」
「断る」
悠はきっぱり言い放った。
「敵とみなした奴の味方なんて、誰がするか」
「どちらでもかまわないわ。ただ、考えてちょうだい。私達の目的を」
女は綺麗に微笑み。

とぷん

屋上の床に沈んだ。
正確には、自身の影に。
「なっ！」
「またね（ツバキ）（・・・）」、椿悠」
驚いている間に、女の姿は影に飲まれ、消えた。屋上に残ったのは、悠と男のみ。
「……やっぱり面倒なことになったわ」
男がけだるそうにため息をついた。
悠はその男の方を見、そこで気付く。男の肌には、鱗のように硬そうな黒い羽根が生えていることに。
なるほど――妖鳥の半妖か。

「気ぃ付けや、おまえ。シスターは選ぶ権利あるみたいなこと言ってたけど、実際はどんな手使ってもおまえを仲間にしたいはずやから」

「……関西弁？　それに、シスターって」

「俺は大阪出身や。それと、シスターってのはあの人の呼び名。……あぁ、話すのもめんどくせぇなぁ」

男は再びため息をつくと、両手を広げた。

「飛ぶのもめんどくせぇ」

はばたくような動きと共に、男の身体が浮き上がった。

「……まんま鳥人間だね」

悠の呟きに反応したわけではないだろうが男は「そうだ」と、何かを思い出したように見下ろした。

「俺の親父に伝えといてくれ。迷惑かけてすまんって」

「……は？」

親父って……誰だ。

自分の知り合いだろうか――いや、待て。この関西弁は、もしかして。

「じゃぁな」

男はそのまま、腕をはばたかせて飛び去ってしまった。しかし――なかなかシュールな図だ。

追いかけようか迷ったが、どうせ攻撃は避けられるだろうし、第一飛び道具など持っていない。

『剣姫（ツルギヒメ）』を持っていたら話は別だろうが――

と。

「椿！」

どたどたという足音が聞こえてきたと思うと、扉が開いて次郎が現れた。

「やぁ、高野（タカノ）刑事。一人？」

「まぁな。……狙撃犯はどうした？」
「逃げたよ。妖魔だった」
悠は太もものホルダーに小刀を収めた。
「妖鳥と……多分、影法師。二人組の男女だよ。片方は西洋人だった」
「解った。後でモンタージュを作るから警察に来てくれ」
「勿論だよ」
「それから――非常に言いにくいんだが……」
次郎は言葉を濁し、表情を苦々しいものに変えた。
「華凰院早音（カホウインハヤネ）が、遺体で発見された。死亡時刻は――一昨日から昨日にかけてだ」

――――

『華凰院早音』がその路地裏に来た時には、女――シスターはすでにその場所にたたずんでいた。
「あら、遅かったわね」
「すぐ来れるわけないじゃん。警察わんさかいたんだからさぁ」
「そのかっこで動こうとするからやろ」
と。半妖鳥のような男が彼女の隣に降り立った。
「その仮面は色んな姿に変えられんねんから、近く通った通行人にでも化ければいいやろが」
「あ、そっか」
ぽんと手を打つ彼女に、男は「面倒な奴」と呟いた。
「今回はいいけど、他のことでうっかりはやめてちょうだいね」
シスターは微笑をたたえながら言った。
「しばらく私はここを離れるんだし、フォローできないのよ」
「確か――『あの方々』に呼ばれたんでしたっけ？」
男の言葉に、シスターは頷く。
「そう。報告のためにね。あと、他の指揮も少し」

「大変やなぁ。いやほんと、俺下っ端でよかったわ」
「下っ端ね……まぁいいわ。ところで」
シスターは彼女に向き直った。
「椿悠の様子はどうだった？」
「……それがぁ」
彼女は頭をかいて苦笑いした。
「あの娘、僕の正体に気付いちゃったんだよねぇ。さすがに僕が偽物だってことは気付かなかったみたいだけどぉ」
「……へぇ」
シスターは笑みを深めた。
「さすがね――いえ当然と言うべきかしら。フレッドの正体に感付くなんて……死体もそろそろ見付かる頃合いでしょうし、貴方の正体にも気付くんじゃないかしら」
「いやいやいや」
彼女は笑いながら己の顔に触れた。
その顔が――外れる。
まるで仮面を外すように。
否――実際その『顔』は、仮面だった。
肌の質感は消え、その代わりに黒い、大理石のような仮面が姿を現す。
人の形をした、しかし目も口も開いていない、不気味な仮面だった。
「まさか僕達がこれを所有してるなんて、だぁれも思わないさ」
その下から現れたのは、男にも女にも見える、金髪の子供だった。
十歳ほどの背丈で、口調は少年のようだ。少しぶかぶかになったワンピースのような制服が、よく似合っている。
性別を超越したような愛らしさ――と言うより、性別を失ったかのような気味悪さを感じる容貌だった。
「本来僕達のような存在を狩るためのものなんだもん。退魔武器だっけ」

「そうよ。銘は……何だったかしら」
シスターに視線を向けられ、男はしぶしぶという体(てい)で口を開いた。
「……『面模姫(メンモヒメ)』や。平安初期に創られた退魔武器」
「時期なんてどうでもいーよ」
子供は長めの髪を指に巻き付けた。
「よーはここにあることが重要なんでしょ。そして僕が使えることでしょ」
「……」
男は黙り込んだ。その面の危険性を知っているだけに、それを素直に肯定できないのだ。
しかし、シスターの方はそうでもないらしい。
「その通りよ。私がいない間、諜報面は任せられそうね」
シスターはそっと子供の頭を撫で、背を向けた。
「それじゃ、後のことは任せたわよ」
シスターの足が、建物の影に沈んだ。そのままずぶずぶ飲まれていき、その姿は消えてしまう。
「……任せた、ねぇ」
男は一人ごちながらそでをまくり上げ、自身の両腕にはまった腕環を見つめた。
黒い金属でできた、いかにも重そうな腕環で、禍々しい色をした赤い宝玉が一つはめ込まれている。
こんなものに頼っている俺達は――
そうすることで力を得られるとはいえ――
これを外した時、俺は――
「……」
男は考えるのが面倒になって、思考を停止した。
最近着け始めたものにあれこれ考えてもしょうがないだろう。
「……めんどくせぇ」
男は口癖を呟き、目を閉じた。
全ての考えを、頭から追い出すように。

放った拳は、正確に竈内の腹に叩き込まれた。
吹っ飛び、遠く離れた壁にぶつかる彼を見ながら、流星は深呼吸した。
見なくても解る。すでに自分は、半分鬼になりかけている。
感情の高ぶりを抑えながら、鬼童子としての能力（ちから）を意識して使う。
悠に教えられたことだ。
数珠無しでも戦えるようになるため――何より、自分の能力に向き合うために。
悠によれば、鬼童子の能力を使って戦った退魔師も少なからずいるらしい。彼らは自分の力を、うまく扱えたようだ。
先人にできたのだから、流星だってできる――悠はそう言っていた。
ここ一ヶ月で、かなり扱えるようになった――しかし、十全ではない。
流星は額に――正確には額から突き出ているツノに触れた。
この大きさからすると、まだ十分の二ぐらいか。まだいけるだろうか……
「なる、ほどな……」
と。竈内が起き上がった。しかし立てないのか、その場に座り込んだままだ。
「鬼童子の力、これほどまでとは……同類だから油断はしてなかったつもりだったのに、やはり格が違うのか」
「……同類？」
流星は眉をひそめた。

そういえば先程も同じことを言っていた。
同類の俺におまえが殺されるのは――と。
「どういう意味だ。俺はこんななりだが、人間だぞ。半妖じゃない」
「半妖？　……それは自分の意思で悪魔の力を取り込んだ馬鹿共だろう。俺は、俺達は……そうじゃない。それどころじゃない」
寵内は皮肉げな笑みを浮かべた。皮肉と言うよりは――自虐の笑みか。
「俺達使徒の大半は、おまえと同じように生まれつき悪魔の――おまえ達の言う妖魔の力を持っている『人間』だ」
「……え？」
「俺達の親は、悪魔の落とし子なんて呼んだけどな」
寵内はよろけながらも立ち上がった。
「使徒は神が与えたもうた試練のため、こんな能力を得、一般人達から忌み子として扱われてきた。おまえと同い歳で、親に悪魔と呼ばれ続けた同志もいる」
「そ、そんな……で、でも」
流星はうろたえていた。
目の前に自分と同類がいる。周りには誰一人としていなかった同類が、よりによって敵として。
しかも、彼の話を信じるなら、同じような人間が大勢いることになる――しかも組織的にだ。
「とはいえ、全員が俺やおまえのような異形の人間というわけではない。特殊な能力を持つだけにとどまっている奴もいる」
「……」
「ただの人間もいるが……それでもやはり、普通と違う。だから俺達は、迫害を受けてきた。他人からも、家族からも」
「そんな……」
家族までもなんて。
そんなことがあるのだろうか。
だって自分の家族は、自分を『人間』として育ててくれた。

『人間』として見てくれた――
「おまえのような奴はまれなんだよ」
流星の考えを見透かしたように、竈内は睨み付けてきた。とても苦々しげな顔で。
「おまえみたいに、家族に恵まれた奴は」
「っ……」
「普通の人間は普通じゃない人間を忌み嫌う。忌み嫌うまではいかなくとも、畏怖はするだろう。特に俺達のような異形は」
竈内は両腕の刃を構えた。
「悪しきものとみなされ、殺される。生きていても、化物扱いだ。死んで地獄、生きても地獄。俺達は、好きでこんな姿になったわけじゃないのに」
それは。
それは、俺も同じだ。
流星は思う。
俺は好きでこうなったわけじゃない。
好きで鬼の力を得たわけじゃない。
好きで異形になったわけじゃない。
こんな。
こんな力。
俺はいらなかったのに。
俺は。
俺は――
「甘ったれた奴とはいえ、同類。仲間になる話も持ち上がったが、しかし、おまえは俺達の敵になりうる奴の仲間になった。ゆえにおまえは」
流星が気付いた時には。
「敵だ」
竈内は、目の前にいた。

ドンッ

貫く音が聞こえた。顔に血が飛び、流星は我に返る。

「う、あ゛っ」

竈内の振り上げられた右腕は、何かに貫かれていた。

黒い棒のようなものだ。硬質だが金属のようには見えない。

これは一体――

「何をしてるんだ？　そこのおまえ」

と。聞き覚えのある声が聞こえた。

声の方を見ると、一人の黒髪の青年が、黒い鎧のような手袋をはめた片腕をこちらに向けていた。よく見れば中指が異常に伸びており、それが竈内の腕を貫いているようだった。

「そいつ、妹の大切な奴なんだ。殺させはしねぇよ」

黒髪の青年――椿刀弥（トウヤ）は、魅力的な笑みを浮かべた。

「と、刀弥さん……何で……」

「や、単におまえの見舞いに来たんだが……いいタイミングで来ちまったみたいだな」

刀弥は腕を引いた。鎧の指が竈内の腕から引き抜かれる。

いためた腕を下ろし、竈内は焦りの見える目で刀弥を睨んだ。

「椿家当主――椿刀弥か」

「まだ代理だっての」

「どちらにせよ、椿家を統括しているのはおまえだろう」

竈内は赤黒い血を流す腕を見下ろし、苦々しげに吐き捨てた。

「邪教徒が……なぜ俺の邪魔をする」

「言ったろう。流星は妹の大切な奴なんだ」

刀弥は鎧の指の長さを戻し、前に進み出た。

「手前勝手な理由で病院騒がせたんだ。手前勝手な理由で邪魔されても文句は言わせねぇよ」

流星の傍まで来た刀弥は、竈内に向かって鎧の腕を振り上げた。竈内はそれに応戦するように無事な方の手を上げ、それを受け止める。

ぶつかり合う二本の腕。しかし、腕の刃にヒビが入ったのを見て、竈内は目を剥いて後ろに跳びのいた。刀弥はそれを追撃する。

右足を蹴り上げ、竈内の顎に打撃を与えた刀弥は、更に鎧の腕で竈内のわき腹を殴り飛ばした。

骨の折れる音と共に吹っ飛ぶ竈内。刀弥の容赦無い攻撃に、味方である流星の方が唖然としてしまう。

「キレてしまわれたようですね」

朱華の呟きに振り返る。彼女は、こんな時でもやはり無表情だった。

「流星様。椿家最強はどなたか、お解りになりますか？」

「え？　えーと……悠かな。あ、いや、恭弥の式神もけっこーなもんだし」

「刀弥様です」

きっぱり言われた言葉に、流星は言葉を失ってしまった。

「普段は飄々となさっていて、そのような所作を見せることはありませんが、刀弥様の力量は三兄妹――いえ、四姉弟の中で最たる実力者。もっとも恐ろしいのは、今なお成長途中という点でしょう」

「……」

これまで、目鼻立ちが整い過ぎた弟と妹がいるからなのか、不幸な過去が特に無いからなのか、流星の刀弥に対する印象は、悠や恭弥に比べて薄いものだった。

しかし、その印象は間違いだったことを悟る。能あるタカは爪を隠す――ではないが、刀弥はその実力を流星に全く感じさせなかった。

しかも、姫シリーズを扱う悠や葵よりも強いと言うのだから更に驚きである。

「普段は性格ゆえに抑えていますが、怒ればそれも取れてしまいま

すか」
朱華がそう言ってため息をついたのは、刀弥の鎧の腕が竈内の右腕をこなごなに砕いたところだった。
「人間というのは、本当にわけが解りませんね」
右腕を押さえ、呻く竈内。刀弥は追い討ちをかけず、鋭さを増した切れ長の瞳で彼を見据えた。
「貴様は一体何者だ？　なぜ流星を狙った」
「……」
「……答えないならそれでもいい」
刀弥の鎧の腕が巨大な刃へと姿を変えた。
「どちらにせよ、おまえをこのまま放っておくわけにはいかねぇな」
刃が竈内の脳天に振り下ろされる――
「……」
しかし。
「……何のつもりだ――流星」
流星は、刀弥のその腕を掴み、動きを止めた。
流星にもなぜそうしたのかよく解らない。
ただ反射的に、思わず身体が動いてしまっただけだ。
それは、竈内の言葉に心動かされたからなのか。
同類。
忌み嫌われた存在。
それは、一つ間違えば流星もたどっていたであろう末路だった。
同情しているのだろうか。
彼らに？
こんな、たくさんの人を殺そうとする奴らに？
本来抱くべき感情は、哀れみではなく怒りだろう。
あるいは――憎悪か。
なのに、どうしてだろう。
先程まで自分を殺そうとしていた竈内をどうしても憎みきれなかった。

許すまではいかないけれど。
なぜか、そのままにしておけなかった。
そして何より、流星にとって何より驚いたことは――
驚きというより、むしろ恐ろしさだが――
竈内より刀弥の方が――
誰よりも、敵に見えた。

どうしてだ。
刀弥さんは味方で、竈内は敵なのに。
どうして俺は――
「流星、手を離せ」
刀弥の声に、流星は首を横に振る。どうしてそうしたかは、やはり解らなかった。
「大丈夫だ。もう攻撃しない。それにこれは、『如意ノ手（ニョイ）』は退魔武器だ。おまえの身体には毒だろう」
言われ、気付く。自分の手の平にじりじりと痛みが広がっていることに。流星は黙ってその手を離した。
刀弥は自由になった腕を下ろし、竈内を睨んだ。
「流星に感謝するんだな。止めてもらわなければ今ごろ、おまえは確実に竹割りだぜ」
「……感謝？」
竈内の眉間にしわが寄った。いかにも不愉快そうに。むしろ不快そうに。
「邪教徒に助けられるなんて、むしろ誇りを傷付けられたようなもの。なぜ感謝する必要がある」
「何だと」
「我々をなめるな。使徒をなめるな。神に仕える我々をなめるな」
がち、という音が、竈内の口から聞こえてきた。
「任務は失敗した……貴様を倒すことは不可能だし、逃げることも

てきないだろう……なら、この命は、不必要……」
ごぼり、と、竈内は血を吐いた。黒い、汚泥のような血塊だった。
「我々の機密をまも、守るため……全て、は神の――御(おん)ため……」
竈内は膝を着いた。目はすでに何も見ていない。
「神よ……僕に、救いを……」
竈内の身体が前めのりに倒れた時だった。

ゴオォッ

彼の身体が突然燃え上がった。
いきなりのできごとに、流星も刀弥も、朱華でさえ動けなくなる。
竈内の身体は燃え上がり、燃え盛り、その勢いは思わず後ずさるほどだったが、消えるのも突然だった。
倒れた身体は一回り小さくなって、元の色がわからないほどに炭化していた。白衣も肌も何もかも焼けてしまって、もうそれは炭と形容するしかなかった。
生きていないことは確かだ。
もう、動かない。
「う……」
自分を同類と呼んだ男。
忌み嫌われたと言った男。
同じ境遇の男が――死んだ。
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
流星は絶叫した。
なぜ絶叫しているかも、解らずに。

――――

人だかりのできた病院の前にパトカーが停まった。それを視界に収めつつ、クラウディオは自分が燃やした男を思い出す。

毒ですでに死んでいたようだが、証拠を残さないために焼いた。
同志を燃やすことにためらいはない。まして、死体を焼くことにいちいち思うことなど無い。
『使徒』は神の御ためにあるもの。死など恐れないし、いくら屍を踏みにじってもかまわない。
ただ、かけるべき言葉を思い付かないほど、同志に対してクラウディオも冷淡ではない。
「Ｂｕｏｎａｎｏｔｔｅ（おやすみ）――我が同志」
それは穏やかな口調とは裏腹に、酷く底冷えた声だった。

第三十五話　母校<上>

助けて。
助けて。
助けて。
助けて。
いくら呼んでも助けは来ない。校舎には、もう誰も残っていないのだろうか。
残っていたら、助けてもらえるのに。
こんな怖い思いをしなくてすむのに。
助けて。
助けて。
助けて。
助けて。
助けて。
「もういや、嫌ぁ……！」
一緒に来た友達はどこに行ってしまったのだろう。
もう捕まってしまったのか。捕まって、でもどこに連れていかれたんだろう。
……
あの噂が本当なら、確か――

『ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

絶叫が、教室のスピーカーから大音量で流れてきた。
同時に聞こえる、肉と骨が引きちぎられる音に、更に身体が震える。悲鳴を出す余裕など、もはや無かった。
絶叫はやがて唐突に途絶え、再び静寂が訪れた時には正常な判断

は失われている。
当たり前だ。友人の断末魔の叫びを聞いて、まともな精神を保てる人間はいない。ましてや自分も追われる身とくればなおさらだ。
身体中をがくがくと震わせ、じっと息をひそめる。隠れていれば、きっと見付からないと思ったのだ。
しかし、そんな希望的結末が来るはずがなかった。
少ししてから、何かを引きずるような音が耳に届く。
ゆっくりと、少しずつ進むようにして――
やがて、教室の扉が開いた。ゆっくり、時間をかけて。
やがて来る死を、もはや待つほか無かった。

――――

華凰院早音（カホウインハヤネ）が死んでいたことに、悠（ユウ）は驚きはしたものの、それ以上の感情は無かった。
あぁあれは変装だったのか、それなら納得がいく――そう思った程度だ。
「どういうことだ？」
そのことを話すと、高野次郎（タカノジロウ）は首を傾げた。
警察署内の一室。悠と次郎は今回のことについて話していた。
今回のこと――例の女子校での事件のことだ。
悠はその時、違和感を覚えたのである。
「まず、華凰院早音の行動。面倒だから何があったかの説明ははぶくけど、あまりにも早過ぎた」
「行動を起こすことが、か？」
「そう」
悠は頷き、パイプ椅子に腰を下ろした。
「指示を受けてって本人は言ってたけど、それならもっとタイムラグがあるはずなんだ。そもそもバレたこと自体早過ぎた」
「だが……射殺されたあの、使徒と名乗っていた少女達は、自分達

が指示したと言っていたんだろう？」
「まぁ、そういうニュアンスのことは。けれど」
悠は足を組み、突っ立ったままの次郎を見上げた。
「彼女達が、偽の華鳳院早音と口裏を合わせていたとしたら？」
「……」
「どういう理由で華鳳院早音の姿を使ったかは知らないけど、おそらくは彼女達に殺されたんだろう。その後偽物と入れ替わった。多分私が来ることは知っていたんだと思う。でなきゃあんな口裏合わせなんてできない」
「そして失敗した場合は射殺か――随分酷いことをする」
「組織の秘密を守るためとはいえ、やり過ぎなきらいがあるね……」
合理的ではある。しかし倫理的には大きく外れているだろう。
それに対する感情は、特に無いけれど。
「それにしても、この二人は一体何なのか……」
次郎は先程作成した二枚の似顔絵を眺めた。
「妖魔がらみなら、俺達警察にできることは無いんじゃないか？」
「協力ぐらいはできるでしょ」
「それはそうだが……」
「それに」
悠はチョーカーに付いた十字架をいじった。
「何となく、ただの半妖共の集団による事件じゃない気がするんだよ。もっと根が深いような――」
悠は言葉を切った。意図的ではなく、机の上の携帯が鳴り出したからである。
悠は次郎に断りを入れ、通話ボタンを押した。
「もしもし」
『悠、俺だ』
「刀兄（トウ）？」
悠は目を瞬いた。
「どうかした？」

『……今、流星（リュウセイ）の入院している病院の前にいるんだが』
兄――刀弥（トウヤ）の言葉は、なぜか歯切れが悪かった。
朱雀を置いていったのだから、大事無いはずなのに――
『ちょっと……いやかなりやっかいなことになった』

――――

悠は病院前の人だかりをかきわけ、三人の姿を探した。
人で壁ができるぐらいの大人数だったが、目立つ容姿である兄のおかげですぐ見付かった。
「刀兄！」
悠は橋の方にいた三人に駆け寄った。
「悠か。思ったより早かったな」
刀弥は振り返り、口元を緩ませた。しかし、流星の方は何の反応も示さない。
ただその場に立っているだけだ。立ったまま気絶しているかのように微動だにしない。目も、開いてるのに何も見ていないようだ。
「り、流星……？」
ゆうは思わず近付くのをためらう。それほどまでに、今の流星には生気が無い。
「……本当のようだね」
悠は兄の方を見た。
使徒と名乗る彼らは、流星と同類だった。
そんな兄の電話に、最初は信じられなかった。
しかし、よくよく考えれば可能性は充分にあり、推測の段階で気付いてもよかったようなものだ。
絶望した人間が最終的に神にすがる――そんな話、ざらに聞く。
そしてもし、彼らが徒党を組みでもしたら――
しかも退魔師を邪教徒扱いだ。これから先、かなり大きな戦いが起きるだろう。しかも、妖偽教団の時より大きな戦いだ。

自分達はいい。そういう連中と戦うことに迷いは無い。
しかし流星はどうだろう。同類と呼ばれた彼は？　迷い無く彼らを狩れるだろうか。
しかも中には、最初の推測通り、特殊な力を持つただの人間がいるようだ。
敵の言葉を鵜呑みにするつもりは無いが――しかし、流星には一番辛い展開だろう。
「悠、流星と一緒にいてやれ」
刀弥は悠の肩に手を置き、すぐ離して横を通り過ぎた。
「俺は仕事があるからな……いっしょにいれねぇ。だからおまえが一緒にいてやれ。恋人って、そういうもんだろ？」
「……解ったような言い方をするね。恋人、いないくせに」
悠がそういうと、刀弥は軽く笑った。
「今は、な。じゃぁな」
刀弥は人ごみをかきわけつつ、その場を離れていった。
後に残ったのは、悠と流星、朱嶌のみである。
「……流星」
悠は流星の腕に触れた。流星は今気付いたように、悠を見下ろす。
悠は両手を流星の顔に伸ばし、そして。
「いでででででででで！？」
両頬を引っ張った。
「な、何しやがる！？」
「お、戻った」
手を離した悠は、正気に戻った流星の胸を小突いた。
「何ごちゃごちゃ考えてるのさ」
「……」
「……まぁ、気持ちは解らなくもないけどね」
悠はふ、とため息をついた。
「ねぇ、流星。君のような人間がどうして生まれるのか、解る？」
「え？」

流星は目を丸くした。どうしてそんな質問をするのか解らない、という顔だ。悠はおかまい無しに話を進める。

「理由は三つ。一つは両親のどちらかが妖魔であること。これは古今東西よく聞くことだね。二つ目は祖先の誰かが妖魔であること。隔世遺伝と言うやつだ。そして三つ目は、血そのものの闇」

「血、そのもの」

「君の場合はね」

悠は流星の目をまっすぐに見つめた。

「その内二つも当てはまっている。血のことは言うまでも無いね」

「……華鳳院家の、血」

流星は忌々しげに吐き捨てた。

家族を大切に想っていた流星だが、家そのものには強い嫌悪の念を抱いている。

おそらくそれは、本能的なものだ。

「日本経済をになう、冗談みたいな大金持ち。それなりに伝統も格式もある。だからこそ、裏の歴史もあるだろう」

「それが、血の闇」

「けっこう血生臭くて、まぁまぁ面白い小説になるぐらいどろどろだろうね」

調べたわけではないけれど、と言いつつ、悠はすでに調べ終わっている。

華鳳院家のおぞましい歴史を知っている。

「……一つと言ったな」

流星の表情が変わった。

何か吹っ切れたような、そんな表情だ。

「もう一つは？」

「……隔世遺伝」

悠はため息と共に言った。

「戦後の、少し前かな。君の母方の祖先が、妖魔の血を受けていた」

「……そうか」

流星はうつむき、乾いた笑みを浮かべた。
「何だよ、俺……完っ全化物じゃねぇかよ……いや、自覚はしてたけどさ、こう突き付けられるとな」
「……ごめん」
「何で謝るんだよ」
流星は苦笑した。
「逆にすっきりした。何で俺がって、今までずっと思ってたけど、そっか、そういう理由があったのか」
「思っていることはそれだけ？」
悠は流星の笑顔を見上げた。
「本当に、そうとしか思ってない？」
「……正直、ショックだった」
流星の顔から笑みが消えた。
「知りたくなかった。勿論疑問がとけてすっきりしたってのも本音だけど……こんなことなら、知らなきゃよかった」
でも、と、流星は顔を上げた。
「どうしてそんなこと、急に言い出したんだ？」
「同類って聞いて、ぐらついた君の目を覚まさせようと思ってね」
悠は胸の前で腕を組んだ。
「たかが人外に生まれた程度で人殺しをするようになる人間が、君と同類なわけ無いでしょうが。君はそんな下種な人間じゃないでしょ」
「……」
「君は自分が鬼童子だと解っても折れ曲がったりしなかった。そんな君が、奴らに同類扱いされるいわれは無いよ」
それに、と言いかけ、悠はその先を言うか言うまいか迷った。しかし結局、言うことにする。
流星には知ってほしかったし、特に隠すことでもないだろうから。
「私も、というか私達も、ある意味君と同じだしね」
「は？」

「椿家開祖である椿月凪。彼女の母親は、妖狐だよ」
「……えぇぇぇぇぇぇごぼぉっ！？」
叫んだ流星の腹を、悠は黙って殴った。周りが何ごとだと見てくるが、あえて気にしないでおく。
「叫ぶな馬鹿流星。何のために隅にいるの」
「お、おまっ……今、手加減無しにっ……」
腹を押さえて悶絶する流星を見、悠はため息をついた。
「まぁ、そういうわけだから、私の家も隔世遺伝が起こる可能性がある。ていうか実際あったし。……だからかもね、君のことを受け入れられたの。勿論それだけじゃないけど」
「……」
「だからって、同情したから君と付き合ってるわけじゃないよ」
悠は少し照れくさくなりながら、微笑した。
「流星のことが本当に好きだから、一緒にいたいと思うんだよ」
「……っ！」
悠がそう言ったとたん、流星が固まった。
それこそ、表情から身体から何もかもが停止していた。
「……流星？」
悠は首を傾げる。なぜここで固まるのか、全く解らない。
流星が内心で悠の笑顔に身もだえていることに気付いたのは、傍観者となっていた朱嶺だけだった。

母校<中>

刀弥は椿家当主代理についてから、退魔師としての仕事を全くと言っていいほどしていなかった。

当然と言えば当然だが、経験不足なままで当主の座にい続けるのは性格上、不満がある。

自分が未熟なのは自覚していたし、まだまだ実力向上が望める気もしていた。だから時に、一退魔師としての仕事をこなしたいと思っていた。

しかし、それは一種の焦りかもしれない——刀弥はそう自己分析する。

遅れを取り戻そうとしているのだ。なぜなら自分は、高校までは普通の人間だったのだから。

「もう四年生か。まさか母校に教育実習とはなぁ」

刀弥がそう言うと、旧友である堀内一（ホリウチハジメ）は日に焼けた顔で笑い返した。

「まぁな。おかげでやりやすかったよ」

「英語担当だっけ？　英語得意だったからな、おまえ」

刀弥は目の前の校舎を見上げた。

二人がいるのは、学生時代を過ごした高校だった。

夏休みであるため、誰もいない。いるのは刀弥と一だけだ。一は一学期の時に教育実習生としてここにいたらしく、その目は特に感慨などは映っていない。

「おまえは何でも得意だたよな」

一はどこか皮肉めいた笑みを浮かべた。
「勉強も運動もできて顔もいいし、人当たりもよかったからモテるモテる。彼女もしょっちゅう変わってたしな」
「昔の話だ」
刀弥は苦笑した。
「今は特に付き合ってる奴はいねぇし……相変わらず、右腕は動かねぇしな」
「……そうか」
一の表情が少しだけ動いた。
刀弥の右腕は、生まれつき動かない。微動だにしないわけではないが、ひじから上は力を入れることさえできないのだ。
だからこそ、刀弥は腕全体を覆う『如意（ニョイ）ノ手』を使う。そうすれば、腕を自由に動かすことができるのだから。
勿論、普段の日常に支障が無い程度には動かせる。でなければ介護人――とまではいかなくとも、手助けが必要になるだろう。
一はそのことを知っている。一番の親友だった彼には、大抵のことは話していた。
家のこと以外は。
「あれ。刀弥、おまえ煙管だっけ？　大学の時はタバコだったけど……」
「あぁ……」
刀弥は懐から取り出した煙管を見下ろした。
「……親父の形見だよ。少しでも親父に近付けるようにってな」
「え……でもおまえ」
一は今度は、目を見開いた。それほどに意外だったのかもしれない。
「親父さんのこと……嫌いだっつってなかったか？」
「……それこそ、昔の話だ」
刀弥は微笑して、煙管に火をつけた。

学校の生徒である二人の男女が消えた。家にも帰らず、目下行方不明なのだ。
そこまではまだいい。家出なり駆け落ちなり、どうとでも理由は付けられるだろう。
問題は、学校で見付かったものだ。
「大量の、二人の血か……」
刀弥は煙管をふかしながら眉をひそめた。教室の一点に今なお残る赤黒いシミを見つめ、一に向き直る。
「いなくなた二人のに間違い無いのか？」
「警察が調べた。間違い無い。……どっちも失血死してておかしくない量だって」
一は気分でも悪いのか、青い顔で答えた。
「……おい。無理に付いて来なくても」
「いや、俺も知りたいんだ。何が起きたのか」
刀弥は気遣うも、一は首を横に振った。
「実習の時、あの二人を受け持っていたんだ。だから……」
「……そうか」
刀弥は煙管から口を離した。
「しかし……一体何があったっていうんだ。何か、そういうたぐいの怪談あったか？」
「俺達の時には無かった。けど……最近生徒達の噂になってる話がある」
「へぇ。どんなだ？」
「放送室でさ、昔あったろ」
一は声をひそめた。そんなことをしなくとも、別に聞いている人間はいないのだが。
「その……殺人事件」
「……あったな」
刀弥は軽く目を伏せた。

今でも覚えている。むしろ忘れられるはずが無い。
彼女を発見したのは、自分なのだから――
「それがどういう風に伝わったのか、怪談話になっていてさ。下半身の無い幽霊で、夜居残った生徒を放送室に引きずり込んで、その身体を引きちぎるっていうんだ」
「……ちょっと待て」
刀弥は引っかかりを覚えて、話を遮った。
「あの時の彼女には、ちゃんと下半身があったぞ。俺は見たんだから」
「あぁ、知ってる。だから、そこがおかしいんだ。どこでどうねじまがったかは知らないが、俺が来てからそういう話が広まってな」
「そうか……」
刀弥は教室の扉を振り返った。
「……ここには、俺とおまえ以外いないんだよな」
「え……そのはずだけど」
「いや……違うな」
刀弥は肩を見つめた。
耳を澄ますと、足音が聞こえてくる。おそらく、ハイヒールの音だろう。
「ま、まさかさっきの話の……」
「馬鹿。それは下半身が無いんだろうが」
震える一にため息をつきつつも、刀弥は扉に近付いた。そのまま迷うことなく、煙管を持ったまま扉に手をかける。
からり、と引っかかることなく開いた扉の前には、一人の女性が立っていた。
ウェーブがかった長い茶髪に、けばけばしくない程度の化粧をほどこした愛らしい顔立ち。幼く見えるが、おそらく生徒ではないだろう。白いシャツに紺のタイトスカート、さりげなく付けられたネックレスやブレスレットを見るに――
「あれ？　宮（ミヤ）先生」

一が首を傾げた。どうやら、やはりこの女性は教師らしい。
「どうしたんですか？　今日は教員も入れないって」
「明日までに完成させなければいけないものがあって……ていうか、貴方……」
女性は刀弥と一を見比べた。
「宮先生、こいつは例の……」
「あ……友人の霊媒師とかいう」
「……退魔師です」
ちょっとおしかった。
「椿刀弥です。初めまして。えっと……」
「宮姫（ヒメ）です。初め、まし……て……」
女性――姫の声が消えていった。刀弥を見上げ、顔を赤くしている。
しばらくその状態で固まっていたが、後ろに移動してきた一の腕を引っ張り、彼に耳打ちした。声をひそめているつもりらしいが、ばっちり刀弥に聞こえている。
「ちょっと。聞いてないわよ、こんな格好いいなんて！」
「会わないのに言う必要あるんですか？」
「紹介ぐらいしてくれたっていいじゃないっ」
「あれ？　宮先生彼氏いるって……」
「別れたわよ」
何だか最後のセリフがやたらにトーン落ちしている気がするのは、気のせいだろうか。
「ていうか……俺仕事で来たんだけどな」
刀弥は取り残された気分になって、煙管を吸った。

なし崩しに姫まで同行することになり、三人は放送室に行くことにした。
浮かれていてもそこは教師、姫に校内は全域禁煙だと指摘された

ので、煙管はしまっている。
ちょっと口寂しいが……まぁいいか。
刀弥は口元に触れた後、ため息をついた。
ヘビースモーカーではないが、禁止されると無性に吸いたくなってしまう。愛煙家の哀しい性(さが)だった。
「しかしおまえも、罪作りなところは変わらねぇよな」
一の言葉に、刀弥は眉をひそめた。
「どういう意味だ」
「……宮先生だよ」
一はこっそり姫を指差す。
「あー……弟ほどじゃねぇよ」
刀弥は軽く流すことにした。
それに、実際弟は、そちらの方面には男女問わず惹き付けてしまう。しかも自覚が無いのだから余計たちが悪い。
舜鈴(シュンリン)と付き合っていなければ、もっと酷いことになっていたかもしれない。まぁ、それは妹にも言えることだが。
全く――二人に比べたら、自分なんて普通そのものだ。
才能があるわけでも。
選ばれているわけでもない。
ただ、俺は――少しずれているだけなのだ。

「……刀弥？」

我に返った。
振り返ると、一と姫が放送室の前に立っている。どうやら自分は行き過ぎてしまったらしい。
「悪ぃ。ぼーっとしてた」
「それはいいけど……大丈夫か？　まさか煙管吸えないからとか言うんじゃねぇだろうな」
「阿呆。んなわけねぇだろ」

一を小突き、刀弥は放送室の中に入った。
とたん、ほこりの臭いにまじって流れてきた血の臭いに眉をひそめる。次いで目の前に飛び込んできた光景に目を見開いた。
「ひっ……」
一が後ろで悲鳴を上げ、姫は声も出せずに後ずさる。
無理も無い、と刀弥は思う。こんなものを見て、普通の人間が冷静でいられるはずがないのだ。
刀弥は目の前のそれに、一歩だけ近付いた。しかし、それ以上は血だまりにはばまれて進めない。
「マジかよ……」
刀弥は呻き、それを見つめる。
そこにあったのは、下半身の無い、男の死体だった。

――

警察が来たのは、通報して三十分のことだった。
「……つまり、二人の生徒がいなくなったのは霊の仕業で、あの死体もその霊の仕業だって言うのか？」
見付けるまでの経緯を話すと、岡田（オカダ）と名乗った刑事は疑わしそうな顔をした。
警察が来たとたん校舎を追い出された刀弥達は、とりあえず警察の質問に答えたのだが、全く信じてもらえなかった。
まぁ理由があまりにも非現実的なのでしかたがないのだが、しかし事実は事実である。
刀弥がどうしようか考えあぐねいていると、岡田の表情がけげんそうなものに変わったのに気が付いた。
「あの」
「おまえ……どこかで会わなかったか？」
「え？」
刀弥は目を瞬いた。

「いえ……初対面だと思いますけど」
「いや、どこかで会った。しかし、どこで……」
岡田は考え込んだ。刀弥も記憶を引っ張り出すが、やはり覚えが無い。
警察にこんな初老の知り合いがいただろうか――
「……あ」
岡田が目を見開いた。
「おまえ、あの時の……」
「？　何ですか」
「あの時の第一発見者だろ？　五年前に起きた殺人の……」
岡田の言葉に、刀弥は身体中の筋肉が硬直した気がした。
ちょうど、あの事件を思い出していたところだった。こんな偶然、あるものなのか。
「俺は遠目でおまえのことを見ただけだからな……おまえが俺を覚えてないのも無理無い」
「あ、あの」
と。姫がそろり、と声を上げた。
「五年前って、あの事件のことですか？　その、ここで起きた、生徒殺害事件の」
「あぁ。彼は第一発見者だ。被害者は彼の」
「そんなことより」
刀弥は岡田の声を遮った。これ以上あの話はしたくない。
「今回亡くなったのは、誰なんですか？」
「あぁ。井川要（イガワカナメ）。免許証が落ちていたよ」
「免許証……」
刀弥はそこで眉をひそめた。
刀弥は記憶力に自信がある。しかしはたして、その場に免許証はあっただろうか。自分の記憶では、免許証は無かったと思うのだが。
「井川先生、だったんですか？」
姫が青い顔で呟いた。今にも倒れそうな表情だ。

「そんな……」
「もしかして、ここの教員なんですか？」
刀弥が訪ねると、姫はこくりと頷いた。
「数学を担当していて、そういえば、昨日学校に行くと、話して……」
「それはいつの話ですか？」
「昨日の……夕方だったと思います。近くの横断歩道で会って、それで……」
姫の言葉がつまった。目の端から涙のつぶが膨れ上がり、彼女はそれを隠すようにうつむく。
「大丈夫ですか？」
刀弥がハンカチを差し出すと、姫は無言でそれを受け取った。
「昨日の夕方には生きていた、か……」
となると、昨日の夕方から今朝にかけて殺されたことになる。死体を見た限り、昼間ということはあるまい。
問題は、誰に、どうして殺されたかだ。しかし、おおかたの見当は付く。
「一。俺が今日来ることは、教員全員知ってるんだよな」
「あ？　あぁ」
「……ということは、その井川って人も知っていたことになるな」
刀弥はふむ、と頷いた。
「あぁ……あー、うん。なるほどなるほど。いや、そりゃそうだよな。普通はそうだよな」
「……刀弥？」
「解ったぜ。大体な」
刀弥は軽く目を伏せた。
本当に……今日は厄日だ。
「狩り対象は、定まった」

姫は疑問に思った。
それは大半は刀弥のことであり、その中で最たるものは――

「五年前、彼に何があったの？」

姫の質問に、一は目を瞬いていた。
夜の校舎。何を言ったかは知らないが、刀弥が警察を説き伏せ、校舎内の出入りを可能にしたのだ。とはいえ、事件発生から1日たってはいるのだが。
しかしだからといって夜に来なくてもという話だが、刀弥が夜でなければ意味が無いということで二人を呼び出したのだ。
一体どうして自分達が呼び出されたのか。今のところそれは解らない。
とりあえず刀弥が来るまで暇なので、一を質問責めにすることにした。刀弥のことをもっと知りたい、という強い思いもあるが。

「五年前ってーと、あー……」

一は言いよどんだ。やはり、何かあるのだ。あの刑事の言葉通り、五年前の事件と椿刀弥は関係がある。

「……宮先生は五年前の事件のこと、どこまで知ってます？」

「え……と。確か夜遅くまで残ってた女子生徒が、何者かに殺されたのよね。犯人はまだ捕まってないって」

「その殺された娘」

一の顔が歪んだ。

「刀弥の彼女だったんです」

最初、一が言ったことがよく解らなかった。じわじわと理解する内に、それがどういうことか気付いて愕然とする。

「ちょっと待って……第一発見者って、彼よね？　椿さん……だって、刑事さんが」

「ええ。だから、あいつは彼女の死体を発見したことになる」

「……」

姫はあまりのことに絶句した。

付き合っている少女を死体として発見する。その時の刀弥の心境は、想像を絶する。それこそ、何も言えない状況だろう。

「刀弥、あの顔だから凄ぇモテたんです。すぐ彼女できるんですけどすぐ別れるんです。そういう付き合いはドライなんス。だから、彼女の方がだんだん嫌になっていくんでしょうね」

「……来る者拒まず去る者追わず、てことかしら」

「まぁ、そんなとこ。でも、その娘とはけっこー長く続いてたんです。けど、あんなことに……」

「……警察は、彼を疑ったのかしら？」

恐る恐る尋ねると、一は最初は、と肩をすくめた。

「けど、すぐ晴れましたよ。校門で彼女を待つ刀弥を目撃した人、割といたから」

でも、と一はため息をついた。

「それ以来、あいつは彼女を作らなくなったんです。その時、弟が病弱で一緒に住めなかったらしいし、妹とも何か問題あったらしいし、精神的に限界が来たのか、しばらく学校も来なかったし」

「弟さんと妹さんがいるの……」

姫はぼそりと呟いた。

思った以上に問題を抱えていたらしい。ここまでとは、さすがに思っていなかった。

見た目に惹かれて、彼をよく知りたくて質問して、とんでもない

ことを知ってしまった。
けれど、何だろう。同情よりむしろ――
「あいつのこと、好きになった？」
姫は我に返った。
一を見上げ、驚きで口をぱくぱくと動かす。
「い、いきなり何……」
「一目惚れって、よくある話ですから。あいつは特に、それされるの多かったし」
一はぶつぶつと、低い声で囁いてきた。その冷気を帯びた声に、姫は凍り付く。
身体も頭も。呼吸さえも。
全て、固まった。
「あ……！？」
「本当にあいつは凄いですよね。何であんなに凄いんだろ。おまけに影があって、そのせいで女に同情される。どんだけ女にモテりゃ気が済むんだが」
静かに、けれど憎々しげに、一は言葉をつむぐ。
「昔からそうだ。何でもできて、何でも持ってて。傍にいる俺の身にもなれよなあの馬鹿。ふざけるなよな。ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな」
「え……あ〝……？」
姫は動けなかった。ぴくりともできなかた。
延々と憎悪を込めた言葉を吐き続ける一。
彼は気付いているのだろうか。自分の口から、煙のようなものが吹き出ていることに。それが姫を縛り付けていることに――！
まるで紐のように姫の身体を縛り付け、呼吸すら不可能にしていた。叫びたいが、息が吸えなければ大声も出せない。

更に。

ずっ、ずっ、ずっ、ずっ……

何かを引きずるような音が聞こえてきた。

「っ……」

姫は目を見開く。

廊下の奥から、何かがやってくるのが見えたのだ。

床を這うようにして、黒い影が姫と一に近付いてきた。二つの小さな光だけが闇の中で輝いていて、不気味さを通り越して恐怖を覚える。

姫は視線を動かせないまま、その影を見つめることしかできなかった。そして、それが人影であることに気付く。

その人影の全貌をようやく確認し、姫は文字通り声にならない悲鳴を上げた。

その人影は、なんと下半身が無いのだ！

長い髪を振り乱し、細い腕で身体を引きずる。腹ばいになっているが――下腹から下が無い！　制服の下から伸びているはずの下肢が見当たらない――

まさか、あれが霊？　刀弥さんの彼女だった――

ゴォッ

突然だった。

突風が姫と一との間に割って入った。

突風は一の口から放たれた煙を断ち切り、姫を解放する。姫は座り込み、せき込んだ。

何なんだ、今のは。そもそも校舎の中でなぜ風が――

「やっぱりな」

と。聞き覚えのある声に、姫は顔を上げた。
すらりとした背中に、くせのある黒髪。後ろ姿だが、間違い無い。
「刀弥、さん……？」
姫がかすれた声を上げると、彼は顔だけをこちらに向け、切れ長の瞳を細めた。
「怪我無いですか？」
「は、はい。あの、でも……」
「話は後に」
刀弥は顔を一に戻した。右斜めを向いていた身体を正面に向け、一と全身で向かい合うようにする。
そこで姫は気付いた。彼の右腕が、何かに覆われていることに。鎧のような、硬質なものだ。黒光りするそれは、刀弥の片腕を一回り大きく見せている。
「よう、一」
刀弥は気さくな調子で左手を上げた。
「おまえがやったんだな、全て」
「……」
「だんまりかよ」
刀弥はため息をついた。後ろからでは、彼がどんな表情をしているかは解らない。
「まぁいい。俺は勝手に推理を話させてもらう。その前に」
刀弥はとうとう足元まで来た霊を、右腕で抑え込んだ。
「おまえの産んだ幻像、狩らせてもらうぞ」
言下と共に、右の手の平が突然巨大化した。大人一人隠れてしまいそうなほど巨大な手は、霊をたやすく握り潰す。
ぐちゃり、と、肉の潰れる嫌な音に、姫は思わず口元を覆った。
だが、なぜかその手から血はしたたったりはしなかった。どころか、開いた手には霊の身体そのものが無かった。
「ど、どういうこと？」

「幻ですよ」
刀弥は鎧の腕を引いた。
「今のは霊でも何でもありません。ただの幻です」
こいつの創り出したね――刀弥はそう言って肩をすくめた。
「下半身の無い霊の噂を流したの、おまえだろ――一」
「……」
「噂が広まったのはおまえの実習期間中。いなくなった二人は実習の時受け持った生徒。そもそもな、五年前の事件を元にした怪談が今頃はやること自体おかしな話だ。俺達の時から噂されてたんならともかくな」
刀弥に睨まれでもしたのか、一はたじろいだ。
刀弥の『推理』は、なおも続く。
「調べたら、噂の発信源はおまえだったよ。自分の在学中にはやった噂だと言ってな。物珍しかったんだろうな。そして、その噂を使って幻を創り出した」
「……」
「動機や、これを使った理由は解らないが、いなくなった二人を殺したのはおまえだな」
「……はぁ」
一はため息をついた。疲れたような、あきらめたような表情だ。
「本当は……おまえを殺すつもりだったんだよ」
「……」
「動機？　ただの予行練習だ。理由？　おまえを追い詰めるためだよ」
一は少しだけ後ろに下がった。
「下半身を無しにしたのはただショックを与えるためだったんだがな……おまえ、全く動じないな。いや、それよりも、いつから気付いた？」
「疑問に思ったのは、おまえから噂を聞かされた時だ」
刀弥は肩をすくめた。どうってことない、とでも言うように。

「俺が当時のことを話した時、おまえ知ってるっつったよな。あの時俺は一人でいたし、おまえは帰ってたはずだ。警察も死体の状態を公開してないし、俺はおまえにそのことを話していない」
「……あー」
しまった、という顔をする一。姫は何が何だか解らなかったが、刀弥の次の言葉に全身の血の気が引いた気がした。
「五年前、あいつを殺したのはおまえだな」
五年前。
五年前に死んだ人間と言えば、一人しかいない。
刀弥さんの、彼女だった人――
「……相変わらずの洞察力、恐れ入る」
一は憎々しげな笑みを浮かべた。
「っとに、うらやましい」
「……嫉妬か？」
「あぁ、嫉妬だよ」
隠す気は無いのだろう、低い声には、どす黒い感情が込められているように思えた。
「俺はおまえがうらやましかった。ねたましかった。おまえは誰もが欲しがるものを全部持ってる！　最初はこんな奴が親友だったらと思って近付いたが、すぐ後悔したよ」
「だったら、離れればよかったろう」
刀弥はあっさりと言い放った。
来る者拒まず、去る者追わず。
その精神は、どうやら友人関係にも表れているようだった。
「おまえといると、色々都合よかったんだよ」
「打算的な友情だな」
刀弥は再びため息をついた。あきれたのだろうか。
「けど、その内耐えられなくなってな……おまえがあいつと付き合い出してからだ。すぐ別れると思ったら、長く続いたし……」
「何それ……」

姫は思わず声を上げた。
「そんなの、ただの逆恨みじゃない。椿さんは何も関係無いじゃない！」
「黙れ！　あんたに何が解んだ！？　俺の気持ちが、あんたに一部も解るわけないだろう！！」
「理解されようともしねぇ奴の気持ちなんざ、誰も解らねぇよ」
刀弥が低い声で唸った。
「おまえの性根を見抜けなかったのは、俺の目が曇っていたからだろうが――おまえが理解されることを放棄したのも要因だろうぜ」
「何……」
「どうせ解らない、おまえに何が解る。んな言葉吐くのは、理解される努力してからにしろ」
刀弥は空いた間を詰めるようにして一に向かって疾走した。
そのまま一に殴りかかるのかと思いきや、刀弥は彼の横を通り過ぎる。
刀弥の目的は、どうやら違うもののようだ。
一の背後に回り込んだ刀弥は、その場の床に鎧腕の拳を叩き込んだ。
離れた場所にいるはずの姫にまでその拳の衝撃が伝わり、近くにいた一など倒れてしまう。
倒れた一の後ろを確認しようと立ち上がった姫は、短い悲鳴を上げた。
刀弥が殴ったもの――それは、下半身の無い少女だった。
「妖魔は人の闇から生まれる。噂話も、また人の闇」
刀弥は、背中の潰れた少女から拳を離した。
「昨日の教師は、多分こいつに殺されたんだろうな。俺のことをうさんくさく思ってたんだろう。だから学校に来て――こいつに襲われた」
刀弥は一歩後ろに下がった。伸ばされた少女の手をつれなくかわし、再び鎧の腕を振り上げる。

「おまえは幻を創り出したかっただけなんだろうが、普通はそれだけじゃとどまんねぇんだよ。だから不用意に噂話を流すんじゃねぇよ」

ザンッ

鎧の腕の爪が、霊の身体を引き裂いた。

「一つ間違えば、こんなものを生み出しちまうからな」

――――

「結局……あれはなんだったんですか？」

校舎を出てすぐ、姫はそう尋ねてきた。

「噂が具現化したものですよ」

煙管に火をつけた刀弥は微笑を浮かべた。

「恐ろしい噂を聞く時の人間の反応は人それぞれですが――大概は興味と好奇を抱く。そして、そんな感情を抱く人間は、大抵本当にあったら面白いのにと思います」

「そんな感情が、あんなものを生み出したっていうんですか？」

姫は信じられない、というように呟いた。

「そんなことが……」

「一の奴は、幻を造り出そうとしたみたいですけど……それでとどまるなら、退魔師なんて必要ありませんから」

「……よかったんですか？」

姫の言葉に、刀弥は煙管を吸いながら首を傾げる。質問の意図がよく解らない。

「逃がしてしまって」

「あ。あー……かまいませんよ、別に」

刀弥は一のことだと得心がいき、頷きながら苦笑した。

一は逃げた。刀弥が妖魔を狩るのを見、自分もそうなると思った

のか、制止する間も無く走り去ってしまったのである。
「俺の仕事は妖魔を狩ること。犯罪者を裁くことは専門外だ」
「でも、彼は貴方の彼女を――」
「仇討ちに走ったら、弟と妹にどやされますよ」
刀弥は煙管を加えたまま頬をかいた。
「思うところが無いでもありませんが、その辺りは警察に任せますよ」
「……そう、ですか」
姫はうつむいた。
刀弥は少しだけ悩む。
彼女には、今日のできごとはショッキング過ぎたかもしれない。
彼女をおとりに使っていたところもあるし、ここは記憶を操作して――
「あのっ」
と。姫ががばっ、と顔を上げた。刀弥は思わず後ずさる。
「今度、また会えますか!?」
「え？」
「仕事とか、そういうの関係無くて――ていうか」
姫は、刀弥のほとんど動かない右腕を掴んだ。
「私と！　付き合ってください!!」
来る者拒まず、の刀弥だが、この時ばかりは――彼でなくともそうだろうが――二つ返事ができなかった。
ただ、鈍い反応をしただけである。
「……は？」

――――

逃げていた男を、エドワードは追いつめていた。
「せっかく協力したのに、椿刀弥は殺せずじまいですか」
情けない――そう呟くと、男は一気にまくしたてた。

「しかたがないだろ！？　あ、あんな力を持っているなんて聞いてないぞ！」
「それに対抗するために、言霊、でしたっけ？　それを使った呪いを教えたんでしょう。次点として、銃も貸し出しました。死体もこちらで処理しましたね」
「む、無理だ、俺には……それに、あんな化物出てくるなんて聞いてない……！」
「……何てことでしょうか」
エドワードはため息をついて手袋を脱いだ。
「全くもう……情けない。こちらがこれだけ協力したのに、なんて情けない」

ビキッ

空気が凍り付く音が響いた。
「どちらにせよ消さねばならない存在ではありましたが、こんな報告を受けて消したくはありませんでしたね」
エドワードの手は、氷に覆われていた。
手刀に構えた手に合わせた形の、鋭い先端を持った氷だ。厚さもあるため、硬度はかなりのものだろう。
凶器となった手を、エドワードはためらい無く男の腹に突き刺した。
ぐっ、と詰まる男の呼吸。深く刺さったのを確認すると、エドワードは手を引き抜いた。
崩れ倒れる男を見、エドワードはため息をつく。
深く深く――ため息をつく。
「……終わりましたよ、クラウディオ。行きましょう」
エドワードがそう声をかけると、クラウディオは閉じていた目を半眼にし、胸の前で組んでいた腕を解いた。
「……その殺し方は好かん」

「そう言われましてもねぇ。溺死させるわけにはいかないでしょう。彼と僕らは無関係なんですから」

彼らに気付かれるわけにはいきませんからね――そう言うエドワードの手は、凍っていない。濡れてすらいない。先程まで氷で覆われていたのが嘘のようだ。

代わりのように、手の甲に十字型の傷跡が刻まれていた。

それを隠すように手袋をはめ、エドワードはクラウディオを見つめた。

「仲間が一人、死んだそうですね」

「……先に神の元に行っただけだ。哀しむことは無いだろう」

「それは……そうなんでしょうけど」

エドワードは、胸中に複雑な思いを抱かずにいられない。

何か大きなことを成すためには、犠牲は付きものだということは解っている。

しかし――最後の時となるまでに、一体どれだけの犠牲を出すことになるのだろう。

そう思うのは、この状況にうんざりしているからなのか。

それとも――非情になりきれないからなのか。

……いや。ただの気の迷いだ。気にすることは無い。

「……帰りましょうか」

そう言うと同時に、エドワードは歩き出した。クラウディオも、その後についていく。

「しかし……どうやら椿刀弥を潰すには、直接的では無理のようですね。となると――」

これからのことを考えようとするのは、現状整理のためか現実逃避のためか。

それは、エドワード自身には、解らなかった。

第三十六話　呼び声<上>

ひんやりした空気が頬をなでる。いつもの湿気を含んだ潮風でないことに、少し驚いた。

何だろう、この冷気は。暑くなり始めたこの時期に、夜とはいえ不自然ではないだろうか。

散歩に来たのは間違いだったかもしれない。半分の月を見上げ、思う。どうもこの冷気は心地よさからはほど遠い気がしてならないのだ。

砂浜を歩く足を方向転換させ、今来た道（と言っても砂浜に道と呼べるものは無いのだけれど）を戻ろうとした。

戻ろうとして――足を止めた。

誰かが、浅瀬に足をつけて立っている。長い黒髪で、薄紫のワンピースを着ており、顔は遠くにいるせいか判然としない。

特に遅いという時間帯ではない。けれど、夜に女性一人でいることは気になった。

「どうかしたんですか？」

近付き、声をかけるも、女性は反応を示さなかった。ただうつむいて、じっと海を見つめている。

何か落としたのだろうか。けれど、何かを探している風でもない。ただ見ているだけに見える。

「あの」

もう一度声をかける。女性はやはり反応を示さない。

返答も無いし、振り向きもしないので、結局その場を離れることにした。気になりはするが、ここにいてもしょうがない。

と――

「一人は……嫌」

女性か手首を掴んできた。
とても弱々しいのに――なぜか振りほどけない。
いや、それより――何だ、この手は。
とても冷たい――体温が無いかのようだ。
「私を……一人にしないで」
女性は顔を上げた。ずっと下を見ていた目をこちらに向ける。
いや、違う。目は向けられていない。
そもそも――彼女には目が無かった。
本来眼球がある場所には、何も無かった。ただ、穴があるだけ。
目玉がはめ込められているはずの場所にあるのは、ただの虚(うろ)だった。
否――否否、違う。何も無いわけではない。
何かが突き出ている。穴からはえるように、白い何かが飛び出ている。
「目が、目が痛いの」
女性は、空いた手も掴んで顔を近付けてきた。
「助けて、助けて」
掴む手は、依然弱々しいままだ。手首をひねれば、すぐに外れてしまうぐらいに。
なのに、どいして身体が動かないんだ！
声も出ない――助けを呼びたいぐらいなのに！
「お願いだから」
女性は紅い唇を耳元に寄せ、囁いた。
背筋がざわめくほど、甘い声で。
「私を――助けて」

――――

「海い？」
流星（リュウセイ）は携帯に向かってすっとんきょうな声を上げた。
事務所を軽く掃除するから手伝ってほしい、という悠（ユウ）の要請を受け、先程までふき掃除を行っていた流星は、携帯が鳴ったことで手を止めた。
電話相手は友人の一人の卓人（タクト）であり（合宿をさぼっていたので久しぶりに思えた）、何かと思えば遊びの誘いだった。
「何でまた海に？」
『他校の娘達と一緒に行くことになってさ、数足らねぇんだわ』
「数会わせで人を呼ぶな」
違った、合コンの誘いだった。
「それに、俺今付き合ってる奴いるっつったじゃん。何普通に誘ってんだよ」
『マジ頼む！　おまえのこと、もう向こうには教えてんだよ』
「知るか！」
流星は一喝した後、一方的に通話を切った。
全く……何なのだ、あいつは。
「どうしたの？」
悠が奥の自室から出てきた。掃除機を運びながら流星の傍に寄る。
「友達から合コンに誘われた」
「……断ったよね」
「当たり前だろ」
何だ、その疑わしげな目は。
流星は少し傷付いた。自分は思ったより信用が無いのかもしれない。
「しかし……何で海なんだ？　そういうのって、普通飲食店でやるもんじゃねぇのか？」
「私に聞かないでよ」
悠は唇をとがらせながら、結い上げていた髪をといた。

「掃除はもういいよ。朱華（シュカ）にコーヒー淹れてもらうから、その間にぞうきん洗ってほしといて」
「おう」
流星は部屋の更に奥にある洗面台に足を向けた。
いいな、こういうの――洗面台の扉を開けながら、流星は目を細めた。
こういう普通の生活が、流星の求めてるものである。
バイト先の店長？　兼恋人という関係はいささか普通から離れている気がするが、それでもこうして掃除を手伝ったりすると、日常を一時でも忘却できる。
しかし、完全に忘れてはならない。まだまだ未熟とはいえ、自分が退魔師であることを。
そして――一週間前のことも。
「……」
蛇口をひねり、水を出す。手に当たる水が冷たくて心地いい。
あの時、竈内（カマウチ）の身体が燃え上がった時、彼はすでに絶命していたのだろうか。
もしそうなら、火の熱さを感じなかっただけまだましな死に際だっただろう――そう思うのは傲慢だろうか。
どうして、自分はあんなに取り乱したんだろう。今更そう思う。
死体は見慣れた――ことは無いけれど、ある程度冷静に接することはできるようにはなったのに。
生者が死者に、生体が死体に変わる様を、まざまざと見せられたからか。
それとも――同類と言われたことが尾を引いているのか。
どちらにせよ、自分は竈内の死に思うところがあるということだけは確かだ。
――けど、大丈夫。
悠がいる限り、自分は大丈夫。
何が大丈夫かは、よく解らないけれど。

「流星、まだ終わらないの？」
悠が洗面所に顔を覗かせた。
「あ、悪い。ちょい待って」
流星は慌てて水を止め、ぞうきんを洗面台のふちのかどにかけた。
「コーヒー、冷たいのでよかった？」
「あぁ。……そういえばさ」
事務所の方にあるソファーに向かい合って座り、長机に置かれたコーヒーにミルクを入れながら、流星は悠のコーヒーを見た。
ホットコーヒーだ。色合いから見て、ミルクも何も入ってないようである。
「おまえさ、いつもブラックじゃね？」
「私は甘いものが好きだけどね、コーヒーは苦い方が好きなんだよ」
「……へぇ」
とても十四歳とは思えない好みだ。自分が十四の時は、コーヒーどころか紅茶もストレートで飲めなかったのに。
「ところで、さっきの話だけど」
悠は音を立てずにコーヒーをすすりながら上目遣いでこちらを見てきた。
「海がどうのこうの言ってたよね」
「あ、あぁ」
「実は海にまつわることで、ちょっと依頼があってね」
「海にまつわること？」
流星は首を傾げた。
「海に妖魔が出たってことか？」
「違う。霊だよ。まぁ悪霊化していることは確かだけど」
悠はカップをソーサーに戻した。
「ある浜辺で、五十年も前から霊が目撃されているらしいんだ。最初はただ視えるだけで無害な存在だったんだけど、その内通りすがりの人間の手を掴んだりするようになってね。この間は、旅行者がどこかに引っ張っていかれそうになったらしい」

「最初はただの霊だったけど、放っておかれてる内に悪霊になってきたってことか？」
「そう」
悠は足を組んだ。
「それでね、君に一人でその依頼をこなしてほしいの」
「……えっ」
流星は目を丸くした。
「一人でって……俺一人で？」
「そう言ってる」
悠は目を細めた。
「その霊は男の前にしか姿を現さない。私が行ったら、かえって邪魔でしょ」
「じゃなくて！　どうして俺一人でやらせようとするんだよっ」
流星は思わず声を張り上げた。
「今まで基本的に自分でこなしてきたのに、何で急に……俺、まだまだ未熟なのに」
「未熟だからこそ――って言ったら、どうする？」
悠の微笑に、流星ははっとした。
「確かに、君は退魔師としては未熟だ。けれどそれは経験不足だからだろう。実力は、そこいらにいる退魔師よりずっと上だ」
「そ、そうか。まぁ鬼童子の力を使えばある程度は……」
「それを差し引いてもだよ」
悠は肩をすくめて見せた。
「後は経験を重ねること。そのために、私に頼りっぱなしはまずいと思う。前回みたいに、一人で戦うこともこれから増えるだろうしね」
「……」
「そんな顔しないでよ」
悠は微笑を苦笑に変えた。
「信用してるから、一人でも大丈夫だって思ったんだよ。別に突き

放したんじゃないから」
「そ、そうか」
流星は頬をかいた。
しかし不安を感じないわけではない。はたして自分は、その依頼をこなすことができるだろうか。
「……悠は付いていってくれるのか？」
「行かない」
即答だった。
「何助け求めてるのさ。私が行ったら意味無いでしょ」
「ですよねー……」
予想していた言葉だったが、少し哀しくなった流星だった。
「勿論、依頼を受けるかどうかは流星が決めればいい」
悠は不敵な笑みを浮かべた。
「行くか否か、全ては、君次第だよ」
――だから。
流星はため息をつきたくなった。
何で自覚が無いんだろう。その言葉を使われたら、断れないじゃないか――
「……解った。行く」
流星は諦念を抱きながら頭をかいた。
やはり……悠には一生かないそうにない。
「んで？　ここから近いのか？　その浜辺」
「いや。けっこう遠いかな。泊まりがけになるだろうから用意しといた方がいいよ」
「最初の一人行動が、泊まりかよ……」
なかなか厳しい。
「じゃぁ俺、もう帰る。後でメールしてくれ」
流星はアイスコーヒーを一気飲みした。
「宿の予約とかはこっちでやっとくよ。だから、その点は心配しないで」

悠の少し的外れな言葉に流星は、おー、と返事をしながら立ち上がる。
「それから」
「ん？」
「掃除、手伝ってくれてありがと」
にっこり笑う悠に、流星はかぁっ、と顔が熱くなるのを感じた。
「え、あ、おう、じ、じゃぁな」
自分でもびっくりするぐらい動揺しながら、流星は事務所を後にする。
……途中、扉で額を思いっきり打ち付けた。

流星がいなくなった後、悠はふ、と吹き出した。
「流星ったら、本当に面白い反応するんだから」
小さな声でひとしきり笑った後、朱華の名を呼ぶ。薄赤い目をした少女は、すぐ現れた。
「今回は監視の必要は無い。その変わり、こっちを手伝ってもらうよ」
「はい。……しかし、よいのですか？」
朱華は空になったコップを回収した。
「流星様をお一人にして」
「いい。一人になってはいけないのは、むしろ私だろう」
悠は再びコーヒーに口を付けた。
「ここ一週間、こちらを監視する目があった。まぁ、当たり前の対応だろう。問題は、監視の目が流星ではなく私に向いているという点だ」
「悠様を……」
「三ヶ月、と言ったかな、あの女（ひと）」
悠はふん、と鼻を鳴らした。
「私を『同志』にしたいというのは、まんざら嘘でもなさそうだね。

どちらにせよ戯言(ざれごと)だけど」
「狙いを悠様にしぼったと？」
「さぁね。命を狙ってるのかもしれないけど。けど同じ椿の人間なら、刀(トウ)兄辺りが妥当だと思うし」
悠はコーヒーカップを戻し、考え込んだ。
「私を狙う理由は何か？　椿家末子であることと『剣姫(ツルギヒメ)』を使うこと以外は狙うだけの理由は無い。それなら刀兄を狙う方が退魔師に打撃を与えられるのに」
「……悠様。これは私めの勝手な想像なのですが」
朱華が空のコップを持ったまま口を開いた。
「狙いは、もしや『剣姫』そのものではないでしょうか」
「……何？」
「四日前に私がご報告したことをお忘れですか？」
四日前――という言葉に、悠は眉をひそめたが……やがてはっとした。
「まさか、あの？」
「はい。そう考えれば、狙いは『剣姫』――いえ、姫シリーズ全てとなります」
「百八の武器、全て……」
悠は前髪をかき上げた。
それなら、なるほど、色々辻褄が合う。となると、あの女が自分に求めているのは、使い手としてか。
「……気に入らないな」
悠は苦々しげに吐き捨てた。
本当に、気に入らない。
「私をそう簡単に手に入れられると思うなよ。それに、日本にいる姫持ちもなめては困る」
自然と、唇の端がつり上がった。今、自分はどんな顔をしてるのだろう。
「おまえ達の思い通りにさせるものか」

悠は静かに、低く呟いた。

しかし、悠はこの時思い至らなかった。

シスターと呼ばれたかの女が欲しいのは自分自身だと、気付くはずもなかった。

呼び声<中>

翌日スポーツバックを肩にかけた流星がたどり着いたのは、都心から少し離れた海辺だった。
平日とはいえ季節柄、人はそれなりに多い。とても霊がいるとは思えない様子だ。
――表面上は。
「……えっと、確かこの辺りに海の家があるんだよな」
そこの女主人が依頼人であり、今日泊まる宿の主人でもあるらしい。
悠の言う通り、宿の心配は無くなった――が。
「はぁ……どうやって除霊しよう」
流星は辺りを見渡しながら嘆息した。
妖魔狩りならともかく、除霊の仕方など解らない。経の読み方すら知らないのだ。
……そういえば、悠は素人が経を読むのは逆に危険なのだと言っていた。
理由は確か、逆に霊を引き寄せることになるからだっけ――

「あれ？　流星じゃん」

覚えのある声に、流星は振り返った。そして目を丸くする。
なんと、昨日電話をよこしてきた卓人がいるではないか。見覚えのある男子が数人、見覚えの無い女子が数人、後ろにいる。
「なんだよー、結局おまえも来てんじゃん。でも残念。別の奴に数会わせ頼んだわ」

「いや俺、仕事っつーかバイトっつーか……とにかく別の用事で来たんだけど」

そもそも卓人達がここに来ること自体、流星は知らなかったのだ。なので、こうして会ったのは偶然である。

彼らは水着を着用しており、完全に遊びに来たことがうかがえた。

「けど、ちょうどいいや。海の家って、どこにある？」

「海の家？　それならあそこだけど」

卓人の指差す先には、少し古い感じの小屋があった。人の出入りを見るに、それなりに繁盛しているらしい。

一軒しか無いのだから、当たり前と言えば当たり前だが。

流星は卓人に礼を言った後、海の家に向かった。

入口を覗くと、席のほとんどが埋まっている。少し空腹だった流星は空いた席に座った。

店内を見渡してみるが、依頼人らしき女性は見当たらない。宿の方にいるのだろうか。

「あの、すみません」

近くの給仕の青年に声をかけると、青年は営業用らしい笑顔で近付いてきた。

「お決まりになりましたか？」

「えっと……焼きそばとコーラで」

「はい」

「それから、ちょっと訊きたいことが」

流星は若干声を低めた。

「ここの店主、どこにいますか？　俺、その人に会いに来たんです」

少しストレート過ぎたかな、と、後悔した。当然男性はいぶかしげな顔をしている。

「店長なら、辺り散歩してると思いますよ」

「そうですか……」

流星がありがとうございます、と言うと、男性は不思議そうな顔付きをしたまま店の奥に行ってしまった。

流星は机にひじを置き、店主が戻ってくるまで待とうかと思った。
どちらにせよ、依頼人である店主が戻ってくるまで動けないのだから。

『助けて』
焼きそばを食べながらうとうととしていた流星は、助けを呼ぶ声に見開いた。
妙な声だ。まるでノイズがかったような、壊れたラジオから流れてくるような声。
流星は近くに誰か――もしくは何かがいるのかと辺りを見渡した。
と――
「おい、誰かおぼれてるぞ！」
誰かが、海の家の外で叫んだ。
ざわり、と空気が揺れる。流星もまた、立ち上がり、外を覗いた。
確かに、沖の方で水しぶきが上がっている。人の姿は見えないが、おそらく水で隠れているのだろう。
ライフセイバーらしき男がその水しぶきに向かっているので、多分大丈夫だ――

『一人は嫌……』

流星はぎくり、と身体を震わせた。
またこの声……いや、それより、今の声が聞こえた時、水しぶきが黒くなったような――
「っ、まさか！？」
流星は海の家を飛び出し、海辺まで駆け寄る。案の定、ライフセイバーも海の中に沈んだ。
周りから悲鳴まがいの声が上がるのを聞きながら、流星は海に飛び込んだ。

水の吸った服が重くなるが、泳げないほどではない。
学校の着衣水泳、真剣にやっててよかった――などと思いつつ、まずは水しぶきの方へ向かう。
近くで見ると、確かに若い男が今にも沈みそうになっていた。
「大丈夫ですか！？」
流星が声をかけるて腕を掴むと、男は涙目ですがりついてきた。
それはいいのだが、暴れるせいでこちらがうまく浮けなくなってしまう。
流星はどうしようか思案した末、男に気絶してもらうことにした。
「すみま――せん！」
みぞうちに拳を打ち付けると、男の身体から力が抜ける。それと同時に、その身体が沈んだ。
もの凄い力で引っ張られるような水没に、流星も巻き込まれてしまう。
流星が海水の中で目を開けると、海中でも際立つほど白い手が男の足を掴んでいるのを見た。
しかし、見えるのは手だけだ。他の身体の部位は見えない。
ただ、もう片方の手が何を掴んでいるかは解った。
さっきのライフセイバーだ。同じように足を掴まれている。
こちらはまだ冷静だ。手を外そうともがいている。
しかし、息もそう長くは続かないだろう。それは流星にも言えることだ。
『煌炎（コウエン）』を持ってくればよかった、と、内心で呻きつつ、流星は気絶した男の足を掴む手に近付いた。
どうにかして手を外そうとして、その細い手首を掴んだ時だった。

『ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

脳内に、頭が割れるほどの大絶叫が響いた。流星は思わず手を離し、頭を押さえる。

同時に、男と一緒に身体が浮上した。
「ぶはっ」
海面から顔がでたところで空気を吸い込む。一緒に海水まで喉に入ってしまい、げほげほとせき込んだ。
「き、君、げほっ……大丈夫か！？」
振り返ると、先程のライフセイバーが同じくせき込みながらも近寄ってきた。
「そっちの人は……」
「気絶してるだけですよ。息もしてるし」
実際には、気絶させたのだが。
「そ、そうか……それより早く砂浜へ」
ライフセイバーが男を抱え、泳ぎ出した。流星もそれに続く。
「それにしても……君は一体何をしたんだ？」
「え？」
「君が触れたとたん、あの手は消えたじゃないか」
「……えーと」
流星は口ごもった。
どうしても何も、流星自身なぜあの手が退いたかなど解らないのだから、説明しようが無い。
鬼童子だから？　しかし、流星はあの時その能力（ちから）を使わなかった。
あとは――理由として考えらるのなら――
「……あ」
流星は自分の右手首を見た。正確には、手首にはまった数珠を。
悠からもらった、この赤い数珠。のちに、鬼童子の力を抑えるためのものだと聞かされた。
これをはめた手で触れたおかげであの手が消えたのだとしたら――
「……まさかなぁ」
流星は呟きながら砂浜に立った。
ざわざわと騒がしくなる浜辺。流星はそれより、ぬれてしまったことが気になった。

「うっわ……全部びしょぬれだし。最悪」
八割九割がた自分のせいとはいえ、気分が落ち込む。
と。
「……あの」
そう、声をかけられた。
振り返ると、六十は過ぎているだろう女性が、少し離れたところで立っていた。
立ち姿がすっきりした、若い頃は相当の美人だったろうと思わせる老婆だ。
「……？　何スか？」
流星はシャツをしぼりながら首を傾げた。夏だからよかったものの、そうでなかったら風邪をひいていたかもしれない。
「貴方は……もしかして退魔師ですか？」
老婆の質問に、流星は目を瞬いた。

――――

『確かに、それは数珠の力だよ』
電話越しに、悠は頷いたようだった。
夜。流星は悠の予約してくれていた民宿にいた。
ぬれた服は着替え、今はTシャツとジャージを着用している。
携帯を持ち直しながら、流星は畳の上に腰を下ろした。
通された部屋は、質素な和室だった。
少し古くさいが別に文句は無い。長期に渡って滞在するわけではないのだから。
現在は、悠に現状報告中だ。
『流星の数珠、瑪瑙（めのう）っていう石で作られててね、その石自体が退魔の力を持ってるんだ。特にそれは、ちょっと特殊でね』
「特殊？」
『瑪瑙は本来、赤褐色や白のしま模様なんだけど、それは純粋な赤

でしょ？　模様も、目をこらさないと見えないし』
言われ、流星は携帯を左手に持ち替えて数珠を見た。
確かに、悠の言う通りだ。
『真意はさだかじゃないけど、父さんが鬼童子として生まれてしまった者のために使いなさいって、生前私に託したんだよ』
「この数珠をか？」
『正確には、元となる石をね』
悠はくすり、と笑った。耳元で悠の笑い声を聞き、流星は背筋がぞくりとする。
『これは私の予想なんだけど、多分流星の力を封じたの、父さんだと思う』
「……は？」
『鬼童子の力は、力の強い術師でなければ封じられない。私が思うに、流星のことを知っていたからこそ、その赤い瑪瑙を私に託したんじゃないかな』
「ちょ、ちょっと待ってくれ！」
流星は携帯を持ち直した。
「何で悠の親父と俺が関わってくるんだよ！　意味解んねぇよっ」
『そうすると、色々辻褄が合うんだ』
気のせいか、悠の声は少しはずんでいるように思えた。
『瑪瑙を託されたことも、父さんが流星のことを知っている風だったのも』
「え？」
『流星のことを話した時、父さんの反応がおかしかったんだ。瑪瑙を託したのも、その後だしね』
「……本当か？」
『真偽のほどは……父さんが死んだ今では確かめようが無いよ。でも、私はそう信じたいな』
どういう心の内で、悠はそう言ったんだろうか。
確かめようとしたが、なぜか通話を切られてしまった。

「……何で？」
もう少し話してもいいのではないか。
頬をかきつつも、数珠を見つめる。
もし悠の言う通りなら――本当に悠の父親が救ってくれたのなら
――
「感謝、しなきゃな」
流星は唇をゆるめ、立ち上がった。

――――

「最初にあの幽霊が目撃されたのは、五十年前でした」
海の家と民宿の主である佐田清（サダキヨ）は話し始めた。
民宿にある、彼女の部屋。生活スペースと言うにはいささか狭いその部屋を、流星は話を聞くために訪ねていた。
彼女はよく似合う着物に着替えており、その姿は洋服姿より若々しく見えた。
「遠目から、女性らしき人影を見たというだけだったんです。それが、十年たってはっきり姿を見る人が出てきたんです。更に十年たって、声を聞く人が現れました。いずれも男性です」
「目撃者も声を聞いた人も、全員男……」
そういえば、悠も男の前にしか姿を現さないと言っていた。しかし、一体どうして……
「その霊に触れられたという人が出てきたのは十年前です。今回、とうとう引っ張られる人が出てきてしまった……」
清はうなだれた。
「このままでは死人が出かねません。どうか、その前に……」
「は、はぁ。ところで、その幽霊に心当たりはありませんか？　例えばこの辺りで死――亡くなった人。特に女性で」
「いるのは……いますが」
清は口ごもった。どうしたのかと見守っていると、意を決したよ

うに顔を上げる。
「五十年前に失踪した――私の姉です」
「あね、姉って……お姉さん、いたんですか？」
「ええ……五十年前から行方知れずで、どこにいるかも解らなくて……でも、死んでしまったと考えたら……」
清の言葉が切れた。唇がわなわなと震え、目線は揺れている。
「姉は……奔放な人、でしたから。だから、てっきり男の人と出ていったと思ったんですけど……」
「清さん」
「お願いです」
清が手を掴んできた。
「こんなこと、お願いするべきではないのかもしれませんが……もし姉なら、遺体を見付けて、私の元に連れてきてくれませんか？」
「……」
その時、流星は気付いた。
亡くなったかもしれない、遺体を見付けてほしいと言いながら、彼女は信じていないのだ。
姉の死を、信じたくないのだ。
「お願いします、どうか……」
清の手に力がこもった。細い肩は、小刻みに震えている。
そんな彼女の願いを拒否するすべを、流星は持っていなかった。

――――

「あーあ」
流星は部屋に戻る途中で、四度目のため息をついた。
どうして引き受けてしまったんだろう。死体探しなど、あきらかに退魔師の仕事ではないではないか。
退魔師の仕事は妖魔を狩ること。それ以上でもそれ以下でもない――悠に言われたことだ。

「でも、警察に頼むわけにはいかないしなー」　霊がいたのでこの辺りに死体が無いか確かめてください、などと言ったって、絶対に信じないだろう。

　上層部の方はどうか知らないが――

「……ん？」

と。流星は廊下の先が騒がしいことに気が付いた。

騒いでいるのは――卓人達か？

「おい、どうしたんだ？」

声をかけると、卓人が振り返った。あせった顔は青ざめている。

「流星、さ、さっき海岸で幽霊が……」

「え……！」

「そ、それで、それで、二人……連れてかれて……」

卓人は混乱しているのか、早口でまくし立てる。それでも何とか聞き取った情報と人数を照らし合わせてみた。

……男子が二人、足りない。

「その二人、どこに連れていかれた！？」

「え……海岸の先にある、岩場に。お、女の幽霊で……」

みなまで聞いていなかった。流星は途中から走り出していた。

今すぐ『煌炎』を取ってこなければ。手遅れにならないうちに――！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2955j/

ＨＵＮＴＥＲ

2011年11月28日08時47分発行